日本古典全集刊行會板

日本古典全集

與謝野寛
正宗敦夫　編纂
與謝野晶子　校訂

本朝度量權衡攷　上卷
（狩谷棭齋全集ノ內）

狩谷棭齋全集第四解題

一、「狩谷棭齋全集」の第四、第五、第六の三卷に亘り、「本朝度量權衡攷」、「錢幣考遺」の兩著を覆刻する事にしたが、紙數の都合上、前者は此卷より第五卷の前半に、後者は本文を第五卷の後半に、圖譜を第六卷に收める。

一、「本朝度量權衡攷」は、棭齋の考證學の中に、最も多くの精力を傾倒し、併せて著者の博大なる學殖と明徹せる見識とを最も縱横に披瀝したるものである。此書は久しく未刻の儘、稀少なる寫本に由つて傳はり、廣く學者の目に觸れざるものであつたが、大正の初め、法學博士福田德三先生が多大の精苦を費して校本を作られ、之を法學博士瀧本誠一先生編纂の「日本經濟叢書」卷三十に收めて、大正五年（一九一二）十一月に刊行せられたるが爲め、漸く專門學徒の間に知らるるに至つたのである。茲に福田瀧本兩博士の芳諾を得て「日本古典全集」第二期の刊行書目に此書を加ふるに當り、福田先生は愛藏の横山由淸舊藏本、其他一本の寫本を貸與せられたるに由り、我我は更に其等を對照しつつ校正の事に當つた。

一、「本朝度量權衡攷」の解說、及び底本となり參照本となつた各種の寫本に就いては、「日本經濟叢書本」に瀧本博士の添へられた「解說」に悉されてゐるから、博士に乞うて、特に其の解說を轉載する事を得た。

一、「本朝度量權衡攷」は全く原文の形を嚴守し、假名も片假名の儘を用ひ、送り假名の省略、假名遣の誤

謬も悉く改むる事を敢てしなかつた。是れは「日本古典全集」中の異例であるが、幕末の學者の用字例を知る標本ともなるであらう。

一、「本朝度量權衡攷」の覆刻に就いて、福田瀧本兩先生の寄せられたる多大の御厚意を、茲に併せて拜謝する。

一、「錢幣考遺」に關する解題は、第五卷の初めに書く。

本朝度量權衡攷解説　瀧本精一

本書は本篇を『本朝度攷』、『本朝量攷』、及び『本朝權衡攷』の三篇に分ち、其の『度攷』に於ては、先づ初めに「ツカ」（束）、「ヒロ」（尋）、及び「アタ」（咫）等の字義及び由來を辨じて、それより「ツヱ」（丈）、「サカ」（尺）「キ」（寸）、「キタ」（分）等の辨に及び、續きて日本の尺度は元來支那の尺度を用ゐたるものなれども、大寶令前には高麗尺を用ゐたるものなりしが、令後唐制に改まりたる事を說き、又小尺、大尺の考證に及び、日本の古に於ては延喜の時より總べて大尺を常用となしたる事を論じ、尙又吳服尺・曲尺・鯨尺等の事を述べ、吳服尺・鯨尺は民間の私尺にて、官家は總て「曲尺」（卽ち大尺）を用ゐたるものなる事を辨明し、終りに錢譜を引きて自說の誤らざるを論證し、『量攷』に於ては古（イニシヘ）幾坂と稱へたる「サカ」と云ふは、「斛」のことにて、「斛」は石の字を充てて、その音讀「セキ」より、「サカ」（坂）に轉訛したること、又古書に百坂四十坂、又は百坂五十坂などとあるは、百四十斛、又は百五十斛のことにて、百坂餘り四十坂、或は百坂餘り五十坂など云ふべきを、古は餘りの字を省略して、例へば十八日を「トヲカ、ヤウカ」と稱へ、二十七日を「ハツカ、ナヌカ」と稱へたると同格なることを辨じ、次ぎは龠・合・升・斗の解を明にし、古令にある斛・斗・升・合は今日の何量に當ると云ふことを示し、且つ撰定交替式を引き、天平六年に東海道外六道の斛法を定められ、其の量數に多少の差異を付せられたるは、行程の遠近、山川の險易に從ひ、租稅の均輸を計らん

とする主意に出でたるものなれば、全く租税の斛法にあらざるも、此の斛法に依り古へ米穀を量るに三十龠の大量を用ゐられたる事疑ひ無しと斷定したるが如きは、古書を閲讀する者の、最も注意すべき所なり。又古の官量絶えてより、國國の莊園其他所所に依りて、勝手の私量を用ゐ、總べて一定の公量無かりし事を說き、最後に德川時代となりて、常用し來りたる江戸升は不同ありて、不便尠なからざりしかば、寛文九年に京升に改められたる事を述べ、『權衡攷』は日本の權衡は度量と同じく唐制に據りしものなることを說き、「度量」に於て大尺、小尺、又は大量、小量あるが如く、「兩」にも亦大兩、小兩ありて、藥を合する時の外は、皆大兩を用ゐたるを辨じ、古の銖・兩・斤は今の何匁何分に相當することを示し、それより延喜式の木工式及び主税式などを引證して、此等の式文に、斤兩の大小を云はざる時は、悉く大稱を用ゐたるものなることを論じ、終りに馱法を詳かに考證して本篇を完了し、更に其の本篇の所論を立證し、且つ遺漏を補はんが爲めに、最も重要なる『附錄三卷五篇』を加へ、其の「上卷之上下二篇」は和漢の諸書に徵して、支那歷代の尺制を詳にし、「中卷」は同じく諸書を參考して、支那の量制を說き、且つ西淸古鑑・博古圖・考古圖等に據り精確なる器物圖を示して之を論證し、「下卷之上下二篇」は是れ亦和漢のあらゆる古書を援き古器物の圖を揭げて、支那の權衡に關する古制を精細に考證したるものなり。

著者は『附錄上卷』の初めに「予弱冠ノ頃ヨリ皇國ノ制度ヲ知ラント思ヒテ、國史律令格式ナドクリ返シ讀ムニ、知リ難キ事ノ多カル中ニ、度量權衡ハ今モ日日用フル物ナガラ、今ト古ト同ジカリシヤ、異ナリシ

ヤ、タシカニ知ラレネバ、先達ノ人人ニ問質セシニ、委ク致フル人モ無カリシカバ、其筋ノ事書ルモノドモ、彼是取集メテ讀見ルニ、能ク考ヘ明ラメタリト見ユルモ、ヲサヲサ無カリケレバ、何クレト尋求メテ考ヘシニ、皆李唐ノ制ヲ寫シ給ヒシナリケリ。爰ニ思ヒ起シテ『其考三卷』ヲ作リタリ。又ヨク思ヘバ、其據リ給ヒシ唐ノ度量權衡ノ本ナル周ノ時ノ事、其後唐マデノ有リシサマ、又唐ノ後、今ノ淸ニ至ルマデノ沿革ハタ知ラデ有ルベキナラネバ、彼國ノ書ドモヲ考ルニ、尚書・左傳等ニ度量權衡ノ事見エタレドモ、其詳ナルコトハ知ルベカラズ」云云と述べ、以て本書著作の由來を記るしたるが、所謂『其考三卷』と云ふは、本篇の『度攷』『量攷』、及び『權衡攷』の三卷にして、著者は此の三卷を著作したる後、尚進んで十分に精細の事を研究したる結果、更に「附錄三卷五篇」を書き加へたるものにして、其の前後に於ける著者の苦心努力が如何に周到なりしかは、本書を一讀すれば自ら瞭然たり。殊に豐富なる引用書中には、往往容易に見ることを得ざる珍書あり。要するに棭齋其人にあらざれば到底斯の大著作を完成すること能はざりしや疑無きなり。

著者狩谷棭齋、名は望之、字は雲卿（一に卿雲に作る）棭齋は其の號、三右衞門と稱す。其の先三州刈谷の人なり。數世の祖、江戸に遷り、狩谷を氏とす、刈狩國訓通ずるが故なり。棭齋は少くして律令の學に志し、心竊かに謂へらく、唐代の古書に涉らざれば、其の根據を窮むること能はずと。乃ち唐六典・唐律・通典及び太平御覽等の諸書を精硏して、遂に漢代に溯り、又進んで六經を修めて、大に發明する所ありと云

ふ。梭齋又曾て思へらく、源順の和名類聚鈔は、我國の古書中、最も實益有用の書にして、上は天地より、下は草木に至り、源を窮め委を討ねて、網羅遺す所無し。然るに坊間の寫本は傳寫眞を失し、紕繆實を得ざるもの鮮なからずとし、百方多くの古寫本を集め、對校疏釋して、「箋注和名類聚鈔」二十卷を著し、其他聖德法王帝說註・日本靈異記考證・扶桑略記校譌・古京遺文等若干卷を著し、皆其の家に藏せり。天保六年年六十一にして江戶に歿せり。梭齋は少より古錢・古鏡等を愛玩するの癖あり、自ら六漢老人と稱す。六漢とは漢鏡・漢錢・王莽の威斗・中平の双魚洗・三耳壺の五物を愛藏するが爲めなり。或人之を訝りて曰く、是れ五漢なり、其の一は何くに在ると。梭齋笑つて曰く、身は漢學を嗜む、乃ち亦た漢時の物にあらずやと。彼が和漢の學に該通して、近世考證學の大家たるは、世人の周く知る所の如し。本書は蓋し彼が畢生の心血を濺ぎて、著作したるもの、豈に大に珍重せざるべけんや。

本書は從來固より梓行したること無く、其の寫本にて傳はるものも亦甚だ稀少にして、現在の傳寫本數種中誤寫脫漏最も少しと思はるるは、大藏省藏本是なり。本書の底本は此の大藏省本を借寫し、兼ねて祕閣本・帝國圖書館本、幷に福田博士收藏の橫山由淸翁舊藏本を以て校讎したるものにして、其の校合は福田博士自ら之を擔任せられ、本叢書の校者小西武治氏を助手となし、一一引用書と對照して、升譌を正されたるは、編者の深く感銘する所なり。玆に一言して博士の厚意を謝す。（大正五年十一月）

本朝度量權衡攷

狩谷棭齋著

本朝度攷

皇國ニテ尺度ヲ以テ諸物ヲ度ルコトハ西土ノ制ヲ學ビシニテ、上古ハサルコト無カリキ、タダ長キ物ヲバ手ニテツカミテ、四指ノ廣サノ程ヲ度リ、是ヲツカト云ヒ、【十握劍八拳ノ須八掬脛ナドノ類ナリ、後世モ矢ノ長ヲ度ルハ手ニテツカミテ何束ト云ヘリ、是ヲモ古ハ何ツカトゾ云ヒタリケン、然ルニ束ノ字ヲツカヌト訓ムニヨリ、此字ヲ借リテ何束ト書シガ、遂ニハ字音ニノミ呼シナリ、（ツカヌトハ、積タル稻ナドヲ手ニテツカミ聚メテ縛ルコトナリ、故ニ束ノ字ヲ訓メリ、說文ニ「束ハ縛也」漢書ノ注ニ、李奇ヲ引テ「聚也」ナドアリ、ツカト云フ言ノ原ハ同ジケレドモ、其事ハ同ジカラズ）ツカニ握ノ字ヲ用フルハ、儀禮ニ「箭籌八十、長尺有握」、又禮記ニ「宗廟之牛角握」ト云フ字ヲ當テタルナリ、拳ハ玉篇ニ「屈手也」ト注セリ、漢ノ鉤戈夫人手拳ナリ」ト云ヒシモ是ナレバ、手ヲニギリタルニテ握ト云フニ同ジ、掬ハ韓詩ニ「四指曰匊」ト慧琳ガ一切經音義ニ引リ、玉篇ニ「匊ハ四指也」トアルモ、韓詩ノ訓ヲ取リシナラン、（掬ハ匊ノ俗字ナリ）四指ノ廣サハ握拳ニ同ジケレバ、匊ヲモツカニ當シナリ、毛詩ニ「蕃衍盈匊」、マタ「不盈一匊」春秋傳ニ「舟中之指可掬」禮記ニ「受珠玉者以掬」ナドアルハ詩ノ毛傳ニ、「兩手曰匊」、公羊傳ノ注鄭玄ガ禮記ノ注モ同ジケレバ、兩手ヲ以テ物ヲ受ルコトナリ、唐ノ于良史ガ詩ニ「掬スレバ水ヲ月在リ手ニ」ト云ヒシモ、兩手ニテ水ヲムスブコトナレバ、是等ノ掬ハツカニハ當リ難シ、或人ノ云ヒケルハ、毛詩傳ニ「兩

手曰レ匊」ト云ヘルヲ、釋文ニ「本或作二一手曰一レ掬ト」トアリ、ツカニ掬ノ字ヲ用ヒタルハ此「一手曰レ掬」トアル本ノ毛傳ニヨリテ當テタルニヤト云ヘリ、然レドモ一手トアルモ猶ツカニハ當ラザレバ掬ノ字ヲ用ヒシハ、韓詩ノ訓ニ依リシモノトスベシ、新井白石君美ノ東雅ニ、ツカハ指掌ヲ合セテハカリシナリト云ヒタレドモ、指掌ヲ合セタルヲツカト云フベキ理ナケレバ、其說ノ非ナルコト明ナリ」大ナル物ハ兩臂ヲヒロゲテ度リ、是ヲヒロト云ヒ【八尋殿(ヤヒロドノ)千尋繩(チヒロナハ)ノ類ナリ、今モ繩ナドヲバ、古ノママニ臂ヲ拓キテ度リ幾ヒロト云フ、尋ノ字ヲ用フルハ、大戴禮ニ、「舒レ肘ヲ知レ尋ヲ」、說文ニ「度ルニ人之兩臂ヲ一爲レ尋ト」ト云フ字ヲ當テタルナリ】サシモ大ナラヌ物ヲバ大指ト中指トヲヒロゲテ度リ、是ヲアタト云ヒシナリ【指ヲヒロゲテ度ルコト今人モスルコトニテ、八咫鏡(ヤアタノカガミ)、八咫烏(ヤアタガラス)ノアタ是ナリ、(是ヲヤタカガミ、ヤタガラスト云フハヤト云フ言ニアノ餘韻アル故ニ約リタルナリ) 古事記ニハヤアタカガミヲ、八尺鏡ト書レタリ、アタニ尺ノ字ヲ用ヒタルハアタハ手ヲヒロゲテ度レバ、大戴禮ニ「布レテ手ヲ知ルレ尺ヲ」ト云フ字ヲ當テタルナラン、(此尺ハ周尺ナリ、周尺ハ曲尺ノ七寸六分ナルコト附錄ニ詳ニス) 後ニ日本紀ヲ作ラレシ時ハ、大指中指ヲヒラキタル長サハ、當時用フル尺ヨリモヤヤ短キ上ニ、アタハ手ニテ度ルモノナレバ、尺度ノ字ヲ當ンハ物遠シト思ヒテ、說文ニ「中婦人ノ手八寸謂二之咫一」トアルニ依リ、改メテ手ヲ以テ度ル咫ノ字ヲ當テタルナルベシ、然レドモアタハ大指ト中指トヲ拓キテ地ニ布キタルナレバ、大戴禮ニ手ヲ布キテ知ルト云ヒシ尺ノ字コソアタニハ當ルベケレ、咫ハ婦人ノ手腕ノ約文ヨリ、中指ノ末マデ度リタルニテ、手ヲ布キテ定メシ尺ノ八寸ナレバ、アタ

ニハ當リ難シ、然ラバ咫ノ字ニ改メタルハ中中ニワロカリシナリ、ヤアタガラスヲバ、古事記ニモ八咫烏トアレドモ、是モ本ハ八尺烏トアリツランヲ、後人書寫ストテ日本紀ニ馴レタル心ヨリ、偶書改メタルナラン、(八尺鏡ハ下ニ訓注モアレバサスガニ誤ラザリシナリ)本居ノ宣長ハ古事記ノ八尺鏡ヲ八咫鏡ノ誤リトシタリ、一ワタリ穩ナルヤウニ聞ユレドモ、實ハ是モ日本紀ニ馴レテ、咫ハアタト訓ムベク、又尺ハサカト訓ムベクシテ、アタトハ訓ムベカラズト思ヒシニテ、深ク古ヲ考ヘザリシナリ(尺ヲサカト訓ムハ、古ナラヌコト下ニ云ヘリ)又古事記ニヤアタヲ八尺ト書キシハ、周制「八寸爲レ尺」ト云フニヨリテ、八寸ノ咫ヲ卽尺ト書シナリト云フ說アレドモ、是モ日本紀ニ八咫トアルニ本ヅキテ牽强シタル說ナレバ、八尺ヲ誤トハセザレドモ、八寸ノ尺ナラバ、アタニ當ラザルコト上ニ云ヘルガ如シ、サテアタノアハ、開タル物ノ開ク意ノ言ニテ、アカ、アキ、アク、アケト活用ケリ、開ノ字明ノ字ナドヲ訓タル是ナリ、(赤字ヲアカシト訓ミ、緋ヲアケト訓ムモ、明ノ轉ジタルナリ)アタハ開手ノ義ニテ、手ヲ開キテ度ルヲ云ヘリ、但手ヲタト云フハ下ニ言アリテ、手何トアル時ノ事ニテ、(手折、手挾ノ類ナリ。)上ニ言アリテ何手トアルヲバテト云ヒテ、タトハ云ハザレバ(衣手、逆手ノ類ナリ)古ハアテトゾ云ヒケン、然ルニ古事記八尺鏡ノ訓注ニ「訓二八尺一云二八阿多一」トアルハ、(按ニ下ノ八ノ字ハ夜ノ誤ナルベシ、本居氏ハ正文ヲ八咫ニ改メ、訓注ヲ「訓レ咫云二阿多一」ニ作ルベシト云ヘリ)下ニカガミト云フコトノアル傳ヘニ、アテトハ云ハズシテアタトハ注セシナリ、同書ノ高天原ノ注ニ、「訓二高下天一云二阿麻一」トアルモ、下ニ原ト云フコトノアルニヨリテ、アメ

トハ注セズシテ、アマト注セシト同ジ、(日本紀ニ猨田彦神ヲ「其鼻長七咫」トアル咫ノ字ヲアタト訓ミタレドモ、疑フラクハ古事記ノ訓注ニヨリテ誤リタルモノナルベシ)東雅ニ咫讀デタト云ヒシハ手ナリ、手ヲ以テ度ルナリト云ヒタレドモ、ヤタカガミ、ヤタガラスト云フハ、ヤアタカガミ、ヤアタガラスノ音便ニテ約リタルコト、古事記ノ訓注ニテ明ナレバ(彼高天原ヲ訓注ニ阿麻トアレドモ、常ニタカマノハラト云フニ同ジ)讀デタト云フト云ヒシハ誤ナリ、手ニテ度ルト云ヒシモ其度法詳ナラズ、又或人ノ說ニハ、アタハアヒタト同ジ言ニテ、食指ト中指トヲ開キテ、其間ヲ以テ度リシナリト云ヒタレドモ、サル度法、西土ニモ、皇國ニモ、古モ今モ、絕テ有ルコト無シ、又食指ト中指トヲヒラキタル廣サ、古事記ニ尺ノ字ヲ當テタルニモ、日本紀ニ咫ノ字ヲ當テタルニモ合ハザレバ、其誤ナルコト著シ)此ツカ、ヒロ、アタノ外ニ、日本紀ニ丈ヲツヱ、尺ヲサカト訓メリ【萬葉集ノ歌ニ、「杖不足八尺之嘆」ト詠ミ、又百積船ト詠ミシモ是ナリ、積ハ音ノ同ジケレバ、借リテ尺トシタルナリ】然レドモツヱハ杖ノ訓ヲ借リ、サカハ卽尺ノ字ノ音ニテ、物ヲ度ル古語ニアラズ、「八尺勾璁」ノ八尺ハ、彌眞明ノ約リタルニテ、(彌玲瓏明ニテモアルベシ)八尺ト書ルハ字ヲ借リタルノミナリ、玉ヲ貫ク緖ノ八尺ナリト云フ說ハワロシト、本居氏云ヘリ、ゲニ神代ニ尺度ヲ用フベカラザル上ニ、尺ヲサカト云フハ字音ナレバ、長サ八尺ナリト云フ說ノ非ナルコト、疑無シ】又寸ヲキ、分ヲキタトモ訓メリ、是ハ共ニ古言ニテキハ物ヲ限ル言【切ヲキルト訓ミ、刻ヲキザムト訓ミ、痕ヲキズト訓ミ、際ヲキヘト訓ミ、極ヲキハマルト訓ム、皆同語ナリ、萬葉集ニ刻字ヲキノ假字ニモ用

ヒタリ」キダハ物ヲ切リ分ツ言ナルヲ、【神代紀ニ「斬二軻遇突智一爲二三段一」ト云ヒ、「索二取十握劍一打折爲二三段一」ト云ヒシ段ノ字皆キダト訓メリ、又景行天皇ノ紀ニ「到二碩田ノ國一其地廣大ニシテ亦麗、因テ名二碩田一也」ト云ヒ、本注ニ「碩田此云二於保岐陀一」トアル地、後ニハ豐後國ノ郡名トナリテ、大分ト書リ、分ヲキダト訓ム故ニ其字ヲ借リシナリ、天武天皇ノ紀ニ大分君惠尺ト云フ人アリ 此地ニヨリシ姓ナルベシ、倭名類聚抄ニ豐後ノ郡名ノ讀ヲ於保伊多トアルハ、後ニ音便ニ壞レタルナリ、(古本ノ倭名類聚抄ニハ、國郡ノ部無シ) 又出雲ノ風土記ニ、八束水臣津野命ノ國ノ餘有リシヲ析テ、足ラヌ處ニ補ヒシコトヲ云ヘル條ニ「國之餘有ト詔ヒテ、而童女胸鉏所取而大魚之支太衝別而波多須須支穗振別而」トアルハ、國ノ餘リタル所アルヲ童女ノ乳房ノ大ナラデ、廣ラカナル胸ノ如キ、廣キ鉏ヲ取リテ、大魚ヲ捕リタル者ノ切リ分チテ持チ運ブ如ク、突キ分ケ屠リ分ケテ、足ラヌ國ニ補ヒ給ヒシト云ヘルナリ、此「支太衝分」ト云ヘル支太モ段ノ字、分ノ字ヲキダト訓ミシト同語ナリ、本居氏ハ此支太ヲ鰓ノ轉ナリト云ヒ、内山眞龍ガ出雲風土記傳モ其說ニ依リシカド非ナリ】尺度ノ渡リ來リシ後ニ、分寸ノ訓ニ用ヒシニテ、物ヲ度ル古名ニハアラズ

或人難ジテ曰、本居氏ノ古事記傳ニ、八咫鏡ハ八頭鏡ノ借字ニシテ、八稜鏡ナリ、八咫烏モ八頭烏ニテ、頭八ツ有ル烏ヲ云フ、八股蛇ノ八頭八尾アリシ類ナリト云ヘリ、此說出テ後、諸家異論無キニ、今咫ヲ字ノ如ク尺度ノ事トセシハ古義ニ非ルニ似タリ、如何、答、本居氏ハ倭姫命ノ世記御鎭座傳記•寶基

本紀等ニ據リテ、八咫鏡ヲ八稜鏡トシ、天德ノ御記ニ「頭雖レ有二小瑕一專無レ損」トアルヲ引キテ【是ハ天德四年ノ內裏ノ炎上ニ、內侍所ノ御鏡ノ燒ケタルコトヲ村上天皇ノ御記ニ記シ給ヒシナリ、其書今傳ハラズ、釋日本紀ニ引キタルニ據リシナリ、內侍所ノ御鏡ハ、崇神天皇ノ御時天照大神ノ瓊瓊杵尊ニ賜ヒタル八咫鏡ヲ鑄寫シ奉リ給ヒシ物ナル故、爰ニハ引證シタルナリ】頭トアルハ、彼八稜ノ頭ナルベシト云ヒタレドモ、倭姬ノ命ノ世記以下ノ三書皆僞書ナレバ、證トナシ難シ【倭姬ノ命ノ世記ハ、大同本紀ヲ本トシテ後人ノ僞說ヲ書加ヘタルモノナルベケレバ、古說ト見ユルコトモアレドモ、此アタリハ後人ノ竄入ナルコト疑ナシ】又御記ノ頭字ハ、釋日本紀ニハタト訓ムベシト云ヘリ、卽鏡邊ノコトニテ、稜ヲ云ヒシニハアラズ、然レバ八稜鏡トスベキ據ハ有ルコト無シ、且神代ニサル巧ナル形ノ鏡アルベシトモ思ハレズ【宣和博古圖。西淸古鑑ニ、古鏡ヲ多ク載セタルニ、稜邊ノ鏡ハ皆唐鏡ニテ、漢鏡ハイヅレモ圓鏡ナリ、漢鏡ダニカクノ如クナレバ、神代ノ鏡思ヒヤルベシ】況ヤ御記ニ「圓規幷帶等甚分明」ト云ヒ、小右記ニ寬弘二年ノ內裏ノ炎上ニ神鏡ノ燒損ハレシコトヲ云ヘルニハ「鏡僅有レ帶、自餘ハ燒損シテ無二圓規一」トアルヲヤ、【圓規トハ鏡ノ形ヲ云ヒ、帶トハ鏡ノ鼻ヲ云フ、本居氏ハ御鎭座傳記寶基本紀等ニ、「八頭花崎、八葉形也、中臺圓形座也」ト、トアル處ヲ卽此ニ云ヘル圓規トシタレドモ、、其書僞撰ナレバ、證トスルニ足ラザル上ニ、モシ八稜ナランニハ、災ニ罹リテ形ノ損ハレタルヲ云ハンニ、必先稜ノ毀レシヲ云フベキニ稜ノコトヲバ云ハズシテ圓規トノミ云ヘルニテ、八稜ナラザリシヲ知ルベシ】本居氏又、ヤア

タヲヤアタマ、又ヤハタノ意ナリ【ヤアタマハ八頭、ヤハタハ八邊ニテ、彼八花崎ノ處ヲ云ヘリ】トセシカドモ、八稜ナラヌコトハ上ニ云ヘリ、モシ八稜ナランニモ、ヤサキ、又ヤカドナドハ云フベシ、八ハタト云ヒテハ其義聞エ難ク、八アタマト云フベキニモアラズ、【アタマハ顋會ノコトニテ、今俗ニヒヨメキト云フ處ナリ、頭ヲスベテアタマト云フハ、近俗ノ誤ナリ、俗ニモ戴勝鳥ヲ、ヤツガラシト云ヒ、閩栄紫芋ノ一種ニ、ヤツガシラト云フ者アレドモ、ヤアタマトハ云ハズ】按ズルニ、ヤタハ本指ヲ拓キシ一アタノミナラデ、アタヲ重ネ度リタルナリ【ヤトハ、數ノ重リタル古語ニテ、彌ノ字ヲ訓ミシ即是ナリ、八ヲヤト訓ムモ、彼古語ノヤヲ後ニ數名ノ八ニ當テタルニテ、數名ノ八ヲ古ヨリヤト云ヒシニハアラズ、八岐蛇ニ八ノ字ヲ書キタレドモ、是モ古語ノヤニテ、岐ノ多キヲ云ヘルナリ、此蛇ヲ古事記ニ「有二八頭八尾一」ト云ヒシモ、ヤカシラ、ヤヲトハ頭モ尾モ多キコトニテ、實ニ其數各八ツアリシニハアラズ、古事記ノ其條ニ云ヒシ「其長度二谿八谷峽八尾一、又釀二八鹽折酒一、作二八門一、結二八佐受岐一」モ皆是ナリ、本居氏ハ八頭八尾ノ字ニ依リテ、頭モ尾モ各八ツ有リシト説キタレドモ、モシ頭ノ八アリトシタランニハ、門佐受岐ナドハ、其數八ツ作リシトモ云フベケレドモ、谿峽酒ナドノ八ナランハ由モ無キヲヤ、然ラバ八岐八頭八尾モ、八門八佐受岐モ、谿八谷峽八尾八鹽折ナドト同ク、數多キコトトスベシ、此ノ外山城風土記ニ、「建角身命造二八尋屋一、堅二八戸扉一、釀二八腹酒一」（釋日本紀ニ引リ下ニ引ルモ同ジ）又神代紀ノ八衢、八重雲、八重席、八月鳴鏑、古事記ノ經二八年一、萬葉集ノ一梓

弖八ッ多婆佐彌、比米加夫良、八ッ多婆左彌、又虎云神乎生取爾、八頭取持來、鸕八頭可頭氣氐、又八岑越、八峯乃海石榴、八峰乃鴇、八船多氣又八年兒之片生乃時從、年之八歲乎吾鷄舞師、歲乃八歲叫鑽髮、年之八歲乎待ニ騰來不座、又八重山、八隔浪、八重六倉、八穗蓼、夜保許毛知」ナド皆數ノ多キヲ云ヘルニテ、實ニ數ノ八ツ有ルニハアラズ、又數ノ彌重リテ多キヲ八十八百八千ト云フ八モ同ジ、正シク八十八百八千ト數ヘタルニハアラズ、又古ナナト云ヒシモ、ヤト同ジク數多キコトニテ、實ニ數七ツナルニハアラズ、神功皇后紀ノ「七枝刀、七子鏡」雄略天皇紀ノ圓大臣ノ歌ニ「多倍能婆伽摩鳴那那陛鳴絁」萬葉集ニ、戀草呼、力車ニ七車、吾戀者千引乃石乎七許、又久有ッバ今七日許、等保久安良婆、奈奴可乃宇知波、我行者七日不過、及七日家爾毛不來而、妹カ所云七日越來、又河ノ瀨乎七湍渡而、麻都良我波奈奈勢能與騰、明日香川七瀨之不行、又我ガ王波七世申爾、奈奈弁加流去呂毛爾麻世流、珠乃七ッ條、取替毛左佐羅能小野之七相菅、ト云ヒ、古事記ニ橘姫ノ命ノコトヲ云ヒテ、「七日ノ之後其后御櫛依于海邊」ト云ヒ、播磨風土記ニ「仍伐其楠造舟、其迅如飛、一檝去越七浪、仍號速鳥」(釋日本紀ニ引リ) ト云ヘルモ皆是ナリ、故ニナナトモヤトモ通ハシ云ヘルアリ、數日ヲ七日ト云ヒシハ、上ニ引ル如クナルニ、神代紀ニ「八日、已後方ニ致天孫於海宮」ト云ヒシ八日モ、數日ノコトト聞ユレバ、七日ト云フニ同ジ、又數日數夜ヲ鎭火祭ノ祝詞ニ、「夜七夜晝七日」ト云ヒ、靈異記

ニ小子部栖輕ガ卒セシニ、「勅シテ留ルコト七日七夜、詠シム彼ガ忠信ヲ」又大部ノ屋栖野古連公ガ卒セシニモ、「勅シテ之七日使留、詠ス於彼忠ヲ」又栖輕ガ墓ニ落タル雷ヲ放チシニ、「慌テ七日七夜留在」ト云ヒ、舊事紀ニ饒速日尊ノ神去マシシヲ云ヒシニ「處テ其神ノ屍骸ヲ日七夜七以爲遊樂ニ」ト云ヒ、山城ノ風土記ニ「神集集而七日七夜樂遊」ト云ヒシモ、古事記ニ天若日子ガ死シ時ニ喪屋ヲ作リテ、「日八日夜八夜以遊」トアルモ、同ジク數日數夜ト云フコトナリ、又同書ニ足名椎ガ子ヲ「在リキ八稚女」ト云ヒ、神武天皇ノ條ニ、「七媛女遊行於高佐士野ニ」ト云ヒ、御歌ニモ「那那由久袁登賣」ト詠ミ給ヒシモ同ジコトニテ、少女ノ多キヲ云ヘリ、萬葉集ニ「吾身一ツ綱七重花作久八重花生跡」ト詠ルハ、後世ニ七重八重花ハサケドモナド言フニ同ジ、東遊ノ歌ニ「奈奈川乎乃也川乎乃古止」トアルモ、絃ノ數多キヲ云ヘルナリ、又倭建命ノ御從ニ仕奉リシ膳夫ヲ、七拳脛ト云ヒ、孝徳天皇ノ紀ニモ越後ノ風土記（是モ釋日本紀ニ引リ）ニモ八掬脛ト云フ人アリ、姓氏錄ニモ八束脛ノ命ト云ヘルアリ、此人人ハ脛ノ長クテ名ヲ負シナレバ、七ツカト云ヒシモ、八ツカト云ヒシモ同ジコトト聞エタリ、古事記ニ「都夫良於美八度拜」ト云ヒ、空物語ニ俊蔭七度伏拜ム、又起居七度拜ミ給フト云ヘルモ數度拜ムヲ云（古事記ニ又四度拜トアルモ八度拜ト同ジ、ヤトヨトハ同音ニテ彌ヲイヤトモ、イヨトモ云ヘリ、然ルニ太神宮儀式帳ニ、四段拜又八度拜ト云ヒ、延暦十八年ニ「減ニ兩拜ニ爲ニ一拜ニ」トアルヲ見レバ、此頃ハ既ニ古義ヲ失ヒシナルベシ）如是ヤト云ヒ、ナナト云フ、共ニ數ノ重リタルヲ云フ古語ニテ、

西土ノ數ノ字（上聲）ノ意ナルヲ、後ニ數名ノ七八ノ字ヲ訓ショリ、諸書ニ古ヘ數多キコトヲ云ヘルヤト云フ言ナナト云フ言ニモ、七八ノ字ヲ書シ故、紛ラハシクハナリタルナリ】轉リテハ尋ニテ度ルベキホドニモアラヌ大ナル物ヲバ、總テヤタト云ヒシナリ【ヤツカハ一ツカナラデツカヲ重ネ度リタルヲ云ヘルガ轉リテ長キヲ云フ稱語トナリ、ヤヒロハ一ヒロナラデヒロヲ重ネ度リタルヲ云ヘルガ、轉リテ大ナルヲ云フ稱語トナリシト一例ナリ、神代紀ニ猿田彥大神ヲ其ノ鼻ノ長ト七咫トアルモハタト同ジク大ナルヲ云フ古語ナリ、八拳脛ヲ七拳脛トモ云フニ同ジ】然ラバヤタカガミハ【本居氏曰、古來ヤタノカガミト訓メレドモ、カカル稱ノ古ノ例凡テ之ヲ添ヘネバ、ヤタカガミト訓ムベシ、彼八咫烏ノ例ヲモ思フベシト云ヘリ、此言實ニ然リ、從フベシ、但八雲御抄ニモ、ヤタカガミトアレバ、彼御抄ヲ書セ給ヒシ頃マデモ、ヤタノカガミトハ云ハザリシト見エタリ】卽大ナル鏡ト云フコトナリ【神代紀ニ、「八咫鏡一云ニ眞經津鏡」】トアリ、經津ハ太ナレバ是モ大鏡ト云フコトナリ、（今モ筑紫人ハ物ノ大ナルヲフトシト云ヘリ）按ズルニ古事記神代紀ノヤタ鏡ハ、天照大神ノ石屋戸ヲ閉テ隱リ給ヒシ時、石凝姥命ニ作ラセタリシ御鏡ナリ、瓊瓊杵尊ノ此葦原中國ニ天降リ給フ時、天照大神我ガ御魂トシテ賜ヒタリシヲ、崇神天皇ノ御時豐鍬入姬命ニ託テ、大倭國笠縫邑ニ祭リ給ヒ、後ニ伊勢國五十鈴ノ川上ニ鎭マリ坐ス、卽伊勢ノ大神宮ノ御體是ナリ、コノ御體ノ御鏡ヲ大神宮雜例集ニ方一尺ト云ヘリ、方一尺トハ徑一尺ト云フベキヲ誤リシナラン、此御體ヲ納レ奉ル器ヲ御樋代ト云フ、其御樋代ヲ延曆ノ大神宮儀式帳ニ

モ、延喜ノ大神宮式ニモ、内徑一尺六寸三分トアリ、文永ノ遷宮記ニハ口徑一尺トアレドモ、皇大神宮ノ大物忌ノ父禰宜村正ガ祝詞主ノ云ケルハ、今御鏡作内人ノ作リ奉ル御鏡代其大サ儀式帳大神宮式ニ載セシト同ジケレバ、文永遷宮記ノ今ノ本ハ、徑一尺ノ下ニ脱字アルナラント云ヘリ、又此ヤタ鏡ヲ寫シ奉リ給ヒシ内侍所ノ御鏡ヲ、天德ノ御記ニ徑八寸許ト書セ給ヘリ、然ラバ伊勢ノ御體モ八寸許ナルモ知リ難シ、ヤタハ本ト一アタナラデ、アタヲ重ネテ度リシコトナレドモ、轉リテ大ト云フ古語ニナリタレバ、一尺ニテモ八寸ニテモヤタ鏡ト云フベキナリ、神代ニハソレホドノ鏡ハイト稀ナル大鏡ニコソハ有リツラメ、又出雲國造神壽詞ニ、「大穴持命乃己命云云、和魂乎八咫鏡爾取託天云云大御和乃神奈備爾坐（マセ）」、トアレバ、ヤタ鏡ハ汎ク鏡ヲ褒メ稱ル常語ト聞エタリ、然ラバヨク照ラス鏡ヲ稱ヘ云フニハマスミ鏡ト云ヒ、（マス鏡ト云フモ此省ナリ）大ナルヲ褒メ云フニハ、ヤタカガミ、マフツ鏡ト云ヒシナルベシ、譬ヘバ劍ノ利キヲ稱ヘ云フニハ、ツルギノタチト云ヒ、長キヲ褒メ云フニハ十握劍、八握劍ト云フガ如シ」此ヤタト云フ言大ナリト云フ古語トナリシ故ニ、大ナル烏ヲモヤタ烏ト云ヘリ、ヤタ烏ノコトヲ古事記ノ序ニ、「神倭天皇經歷于秋津島」云云、生尾遮徑大烏導於吉野」ト云ヒ、姓氏錄【山城神別鴨縣主ノ條】ニ、「神日本磐余彦天皇【謚曰神武】欲向中州之時山中嶮絶、跋渉失路、於是神魂命孫鴨建津之身命化如大烏、翔飛奉導遂達中州、天皇嘉其有功特厚褒賞、天八咫烏之號從此始也【印本誤字多シ、今ハ古寫本ト釋日本紀ニ引

キタルトニ據レリ」トアリ、古事記・日本紀ト姓氏錄トハ、其說同ジカラザレドモ、ヤタ烏ノ大烏ナリシコトハ異ナラズ、日本紀ニ頭八咫烏ト書レシハ、ヤタハ大ノ套語ナルコトヲシラデ、神代紀ノ八咫鏡ハ即伊勢神宮ノ御體ナリ、伊勢ノ御體ノ鏡ホドノ大サナラン烏ハ大烏ニアラザルニヨリ、頭ノ大サノヤタナリシト强ヒタルモノナリ、頭ノ字ヲ加ヘタルハ非ナレドモ、ヤタガラスノ大烏ナルコトハ是モ一ツノ證トスベシ、サレバ八稜鏡・八頭烏ノ說ハ非ナリト知ルベシ

西土ノ古モ、「布レ指知レ寸、布レ手知レ尺、舒レ肘知レ尋」【大戴禮王言篇ニ載セタル孔子ノ語】「握謂ニ長不レ出レ膚一」【禮記王制篇ニ「宗廟之牛ノ角ハ握」トアル鄭玄ガ注、按ズルニ儀禮鄉射記ニ箭籌ヲ長サ尺有握ト云ヒシ握モ是ト同ジ】鋪ニ四指一曰レ扶、【禮記投壺篇ニ矢ノ長サヲ「室中五扶、堂上七扶、庭中九扶」ト云ヒシ鄭玄ガ注】側レ手ヲ爲レ膚ト、按レ指ヲ爲レ寸【僖卅一年ノ公羊傳ニ泰山ノ雲ヲ起スコトヲ「觸レ石ニ而出膚寸ニシテ而合」ト云ヘル何休ガ注、今本ニハ按ヲ案トアリ、今ハ經典釋文ニ從フ、按ズルニ膚ハ禮記ノ扶ト同ジ、扶ハ助ト訓ミ、膚ハ肌ト訓ミテ別字ナルヲ音ノ同ジキニヨリテ、共ニ假リテ度ノ名トシタリ、六書ニ所謂假借ナリ、又按ズルニ是モ皇國ノツカニ當レリ】「寸ハ十分也、人ノ手卻一寸、動脈謂ニ之寸口一、从ニ又一一」【說文寸ノ部　按ズルニ寸ノ字篆ニハ㕟ニ作ル、从ニ又一一トハ是ヲ云ヘルナリ、マタ說文ニ「又ハ手也象レ形」ト云ヘリ、然レバ寸ノ又ニ從ヒタルハ、即手ニ從ヒタルニテ、一ハ動脈ノ處ヲ指シ知ラセタルナリ　六書ニ所謂指事ニシテ　一二ノ一ニハアラズ】「十寸爲レ尺、从レ尸从レ乙、乙所レ識也」【同上尺部　按ズルニ尸ノ字篆ニハ

尸ニ作ル、說文ニ象ニ臥之形ニトアリ、人ハ字ヲ篆ニ几ニ作レバ尸ハ人ノ臥タルニ象ドリタル字ナリ、人體ニ象リタル字ナル故ニ、尻尾居尻ナドノ字是ニ從フ、尺モ人體ニテ度ル故ニ尸ニ從フナリ、乙ハ所レ識也トハ、史記ノ東方朔ノ傳ニ朔ガ上書ヲ、「人主從ニ上方ニ讀レ之止、輒乙ニ其處ニ」トアル乙ト同ジ、然レバ乙ハ尺ノ當ル處ヲ知ラセタルニテ、寸字ノ一ニテ動脈ノ處ヲ知ラセタルト同意ナリ】「咫ハ中婦人ノ手八寸謂ニ之咫ニ」【同上】尋ハ度ニ人之兩臂ニ爲レ尋八尺也【同上寸部】仞ハ伸レ臂ヲ一尋八尺【同上人部　按ズルニ仞ヲ四尺トモ五尺六寸トモ、七尺トモ八尺トモ云ヒテ其說區ナリ、淸ノ程瑤田七尺ヲ以テヨシトス、其說通藝錄ノ數度小記ニ見エタリ】周ノ制寸尺咫尋常仞ノ諸度量、皆以ニ人之體ニ爲レ法」【同上尺部　按ズルニ常ハ釋名考工記ノ注ナドニ「倍レ尋曰常」ト云ヘリ、尋ハ兩臂ヲ度リシ長サナレバ、ソレヲ倍シタル常モ、人體ヨリ定メシ度ナリ】ナド云ヘバ西土ニテモ上古ハ人體ニテ度リ、其後尺度ヲ造リシモ、人體ヨリ定メシコト明ラケシ、【史記秦始皇本紀ノ注ニ、「譙周曰、步以ニ人足ニ爲レ數、」ト云ヘリ、說文ニ「步ハ行也、从ニ止𡳿相背ニ」トアリ、止ハ足ナレバ（說文ニ「止ハ下基也、象ニ艸木出有ニ阯、故以レ止爲レ足」ト云ヘリ）人ノ左右ノ足ヲ進ムルヲ步ト云フ、是ヲ六尺ト定メテ、六尺ヲ一步トセシナレバ、田畝ノ數モ人體ヲ以テ定メシヨリ起レルナリ、又俱舍論ニ「七麥ヲ爲ニ指節ト、三指節爲ニ一指ト、二十四指橫布爲ニ一肘ニ」ト云ヒ、唐ノ僧道宣ガ四分律行事抄ニ、「搩展ニ大拇指與ニ中指ニ相去也」ト云ヘバ、（搩モ皇國ノアタト全ク同ジ）天竺ニテモ物ヲ度ルハ人體ニテ定メシナリ、阿蘭陀ニテモ度ハ足ニテ起シ、踵ヨリ指頭ニ至ルヲフウトト云フ、（フウト足ト

譯ス）此十二分ノ一ヲドイムト云フ、（ドイム大指ト譯ス）此四分ノ三ヲヒンゲルト云フ、（ヒンゲル指ト譯ス）ドイムノ十二分ノ一ヲリニイト云フ、（リニイ絲縷ト譯ス）此外ニ肩隅ヨリ腕ニ至ルヲエルト云フ、（エル臂肱ト譯ス）二フウトニ當ル一歩ヲハアデルト云フ、五フウトニ當ルト云ヘリ、カクノ如ク度ハ何國ニテモ人體ヨリ定メシコト疑無キヲ、漢書ノ律暦志ニ度量衡皆律ノ黃鐘管ヨリ起ルト云ヒシハ（律暦志ノ文下ニ引リ）後人ノ牽強ナリ、荻生茂卿ノ量考ニモ、「大抵陰陽五行ハ漢儒ノ虚談、劉歆因レ造ニ三統暦ニ文ルニ之以レ律ヨ、而度量衡一ニ本ニ諸黃鐘ニ、以輝ニ其學ヲ、孟堅臨ニ其文辭ニ收ニ載志中ニ、遂爲ニ萬古定説ニ耳」、ト云ヒ、マタ「蓋律度量衡ハ其用各殊、律揆レ聲、度揆ニ長短ヲ、量揆ニ多少ヲ、衡揆ニ輕重ヲ、古聖人作レ此各取ニ其適レ用耳、孔子曰、布レ指知レ寸、布レ手知レ尺、舒レ肘知レ尋、故何休亦曰、側レ手爲レ膚、案レ指爲レ寸、則度由ニ人體ニ生焉、舜典曰、歌永レ言、聲依レ永、律和レ聲、則律亦由ニ人聲ニ生焉、聖人以ニ人聲ヲ定レ律、既定之後假レ度以傳ニ其聲ヲ、度豈生ニ於律ニ哉」ト云ヘリ、此論固ニ然リ、按ズルニ明ノ朱載堉ガ律學新説ニ、「近代凡爲ニ律呂之學ヲ者、蓋皆取ニ法於班志ニ、然班志所レ述乃劉歆ガ僞辭ノ、删レ之未レ盡者也、沈約宋志ニ云、班氏所レ志未レ能レ通ニ律呂ノ本源ニ、宗煩ニ其文ヲ、而爲ニ辭ノ費ヲ、欲レ符ニ劉歆三統之數ニ、假託非類ニ、以飾ニ其説ヲ、皆孟堅之妄矣、唐太宗晉志ニ云、劉歆三統以説ニ左傳ヲ、辯而非レ實、班固惑レ之采以爲レ志、觀ニ此二家之論ヲ、蓋皆不レ取ニ班志ニトアリ、荻生氏ハ是ニ本ヅキタルモノナルベシ、又按ズルニ尺度ノ黃鐘管ヨリ起ルト云ヒタルヲ牽強ナリトセシハ然ルコトナレドモ、國語（周語）ニ單穆公ガ「先王之制レ鐘也、大不レ出レ均ニ、重不レ過レ石ニ、律度量

衡於レ孝生一、ト云ヒタルヲ見レバ、周ノ時ヨリカカル俗傳モ有リシナリ、其後王莽ガ元始中ニ、鍾律ニ通ジタル者ヲ徴シタリシニ、其者ドモ彼俗傳ヲ修飾シテ奏シケルヲ、劉歆ガ採リ用ヒタリケレバ、（元始中ノコト漢書律暦志ニ出ヅ）班固モコレニ惑ヒテ志ニ載セタルナリ、然レバ律ヨリ度量衡ヲ起スト云フ說ハ周ノ時既ニ有リシコトニテ、漢人ノ始テ牽強セシニハ非ズ」其尺度ヲ作リ始メシハ何レノ時ナリケン、左傳（昭十七年）ニ「郯子曰、我高祖少皡摯之立也、鳳鳥適至、故紀二於鳥一爲二鳥師一、而鳥名五雉爲二五工正一、利二器用一正二度量一、夷レ民者也」ト云ヒ、尚書【堯典　舜典ハ古文ニハ舜典トス】ニ「五歳一巡守同二律度量衡一」ト云ヒタレバ、古ヨリ有リシナレドモ何ノ時ニ作リシト云フコトハ詳ニ知リ難シ、又皇國ニテ西土ノ尺度ヲ用ヒ始メ給ヒシハ何レノ御時ナリケン、是モ定カニ記セシモノ無シ、應神天皇・雄略天皇ノ御代ニ、呉織・漢織・衣縫ナド渡リ來リ、仁賢天皇ノ御代ニ高麗ヨリ工匠ヲ獻リ、敏達天皇・崇峻天皇ノ御代ニ、百濟ヨリ佛工・造寺工ヲ獻リシコト、古事記・日本紀ニ見エタリ、此時必尺度ヲモ齎來リツラン、サレドモ裁縫營造ニノミ用ヒテ、諸物ヲ度ルコトハイマダ無カリシナルベシ、然ルニ古事記ニ「景行天皇ノ御身長一丈二尺、御脛四尺一寸、反正天皇ノ御身長九尺二寸半、御齒長一寸、廣二分」ト云ヒ、日本紀ニ「猿田彦大神背長七尺、」日本武尊身長一丈、仲哀天皇身長十尺、」景行天皇十二年紀ノ筑紫ニ幸シ給フ條ニ、「柏峽大野ノ石ヲ長六尺・廣三尺・厚一尺五寸」、同十八年紀ニ「御木ノ歷木ヲ長九百七十丈、」仁德天皇六十二年紀ノ氷室ノコトヲ云ヘル條ニ「掘レ地丈餘、」雄略天皇三年紀ノ栲幡皇女ノ縊死シ給ヒシコトヲ云ヘル條ニ、「虹見如レ蛇四

五丈」ト、同十八年紀ニ伊勢朝日郎ガ、聞物部大斧手ヲ射タルコトヲ「穿楯二重甲、并入身内一寸、」ト云ヒ、欽明天皇七年紀ニ、川原氏直宮ガ良駒ヲ見タリシコトヲ載テ、「超渡大内丘之壑十八丈」ト云ヒ、推古天皇十八年紀ニ、「天有赤氣長一丈餘、」同三十五年紀ニ、蠅ノ集リシコトヲ凝累十丈ト載セタルハ、何レモ史ヲ修リシ人ノ言ニテ、其御々世々ニ尺度ヲ用ヒシ證トハナシ難シ、日本紀ニ又皇極天皇二年紀ニ、雹ノ大サヲ徑一寸、又茨田池ニ死蟲水ヲ覆ヒ、溝瀆モ凝結テ厚三四寸、三年紀ニ俀ノ菟田ノ押坂直ガ得タル紫菌ヲ高六寸、又大伴馬飼連ガ獻リシ百合華ノ莖ヲ長八尺ト云ヒシハ、實ニ尺度ニテ度リシカ、又ハ是モ史筆ニノミ云ヒシモ知ルベカラズ、孝德天皇ノ大化二年ニ、絹・絁・布等ノ長サ廣サ、又王臣ノ墓ノ濶サ高サヲ定メラレシヲ載セタルナドヲゾ【日本紀ニ、「孝德天皇大化二年春正月、甲子朔賀正禮畢即宣改新之詔云云、其四曰、罷舊ノ賦役、而行田ノ之調、田一町絹一丈、四町為匹長四丈廣二尺半、絁ハ二丈二町為匹、長サ廣サ同絹、布ハ四丈廣同絹絁、一町成端別收戸別之調、一戸貲布一丈二尺、凡官馬者云云、其買馬直ハ者一戸ニ布一丈二尺、凡仕丁者云云、一戸ニ庸布一丈二尺、三月甲申詔曰、蔀者藏也、欲人之不得見也、廼者我民貧絶ナルコト專由營墓、爰ニ陳其制尊卑使別、夫王以上之墓者、其内長九尺濶五尺、(下ノ上臣・下臣ノ墓ノ制ニヨルニ、爰ニ高何尺ト云フコトノ有リシガ脱タルナラン) 其外域ハ方九尋高サ五尋、上臣之墓者、其内長サ濶サ及高皆准於上、其外域方七尋高サ三尋、下臣之墓者、其内長濶及高皆准於上、其外域方五尋、高サ二尋半トアリ】尺度ノ史ニタシカニ見エタル始トハ云フベキ【量衡ハ

舒明天皇ノ御時ヨリ用ヒラレシト云ヘバ、（量攷ニ詳ニス）度モ其頃ヨリゾ用ヒラレツラン、サレド記セル者無ケレバ考ヘ難シ、舒明天皇ノ元年ハ唐ノ太宗ノ貞觀三年ニ當リ、皇極天皇ノ二年ハ貞觀十七年ニ當リ、大化二年ハ貞觀二十年ニ當レバ、唐尺ヲ用ヒラレシナラン、大寶雜令ニ「度ニハ地用レ大、其外ハ官私悉用ニ小ナル者ニ」トアレバ、賦役令ニ載セタル絹絁布ノ長サ廣サハ小尺ナルニ大化ノ制ト略同ジケレバ、大化ノ時、絹絁布ヲ度リシハ小尺ナルベシ、然ラバ地ヲ度リシハ大尺ナルベキニ、大尺一尺二寸ノ尺ヲ用ヒタルカト思ハルルコトアリ、下ニ詳ニス】天武天皇ノ十一年ニ法令ヲ作ラセ給ヒシカバ【日本紀ニ「天武天皇ノ十年二月、庚子朔甲子、天皇皇后共居ニ于大極殿ニ、以喚ニ親王諸王及諸臣ニ、詔之曰、朕今更欲ニ定ニ律令ヲ改メ法式ヲ、故俱修ニ是事ヲ、三月辛丑立ニ禁式九十二條ヲ、十一年八月壬戌朔、令ニ親王以下及諸臣ヲ各俾レ申ニ法式應レ用之事ヲ、丙寅造ニ法令ニ」トアリ】必尺度ノ制ヲモ載セラレツランヲ其書傳ハラザレバ考ヘ難シ【思フニ大化ノ時ト同ジカリシナルベシ】正シク尺度ノ制ノ見エタルハ、文武天皇ノ大寶元年ニ、唐令ニ因循シテ新令ヲ撰バセラレシニ【續日本紀ニ「大寶元年八月癸卯、遣ニ三品刑部親王（下略）等撰ニ定律令ヲ、於ニ是始成、二年三月乙亥、始頒ニ度量於天下ニ」ト云ヘリ、按ズルニ唐六典ノ刑部ノ注ニ、唐令ノ篇目ヲ載セタルニ、其名モ次序モ本朝令ト略同ジク、且諸書ニ引キシ唐令ノ文、又六典通典唐書ニ載セタル制度、多ク本朝令ト同ジケレバ、大寶令ノ唐令ニ依ラレシコト知ルベシ】其雜令ニ「凡度十分爲レ寸、十寸爲ニ尺ニ【本注ニ一尺二寸爲ニ大尺一尺ニ】十尺爲レ丈ト云ヘリ【義解ニ「分ハ者以ニ北方秬黍中ナル者一之

廣一ヲ爲レ分、柜ハ者黒黍也」、トアリ】唐ノ雜令ニ、「度ハ以二柜黍ノ中ナル者一黍之廣ヲ一爲レ分ト、十分爲レ寸ト、十寸爲レ尺、一尺二寸爲二大尺一尺一、十尺爲レ丈ト」、トアルニ因リ給ヒシナリ、唐令今傳ハラズ、今ココニ引キタルハ、唐律疏議ニ引キシニ依レリ、唐律疏議ハ永徽四年ニ上リタレバ、引キタル令ハ貞觀令ノ文ナルベシ、但量權度ト次第シテ、量ヲバ以二北方柜黍中者ナル容二一千二百一爲レ龠」、ト云ヒ、稱ト度トニハ北方ノ字無シ、量ニ云ヒタル故ニ、ソレヲ蒙ラセテ省キタルナリ、宋ノ錢易ガ南部新書ニ、開元令ヲ引キタルモ、其文同ジケレドモ、是ハ度量稱ト次第シタレバ、北方ノ字、度ノ下ニアルコト、令ノ義解ト同ジ、開元令モ本朝令ト同ジキヲ見レバ、貞觀令ニモ度量稱ト次第シタリシニ、雜律ニ、「諸校二斛斗秤度一、不レ平杖七十」、トアルヲ釋セントテ、疏議ニ令ノ文ヲ引キタル故、律ノ文ニ從ヒテ、令ノ文ノ次第ヲ改メ引キタルナルベシ、度量稱ト次第セザレバ理ニモ合ハザルナリ、按ズルニ六典通典舊唐書職官志（食貨志ノ文ハ少シク異ナリ、附錄唐山東尺ノ條ニ引ケリ）等ニ載セタル度ノ制皆同ジ趣ナルハ、唐令ニヨリテ記セシナラン、柜黍ヨリ度ヲ起スコトハ、漢書律曆志ニ「度ハ者分寸尺丈引也、所三以度二長短一也、本ト起二黃鍾之長一、以三子穀柜黍中者一黍之廣ヲ度レ之、九十分黃鍾之長、一爲二一分一、十分爲レ寸ト、十寸爲レ尺ト、十尺爲レ丈ト、十丈爲レ引ト、而五度審矣」、ト云ヒシニ本ヅキタルナリ、唐小尺ハ隋ヨリ受傳ヘシ鐵尺ニテ、漢尺ニ比ブレバ少ク爲長ハシタレドモ、歷代傳ヘ來リシ尺ナルニヨリ、即漢書ノママニ令ニ著ハシタルナリ、柜黍ノ事ハ牽強ノ説ナレドモ、漢書ニ是ヲ載セシヨリ、後ノ尺度ノ起リヲ云フ者、皆コノ説ニ從ヒタリ、

又按ズルニ漢書ノ孟康ノ注ニ、「子北方、北方黒、謂黒黍也」、トアリ、子ハ十二支ノ方位ニ於テ北方ナリ、北方ハ五色ニ於テ黒色ナレバ、子穀トハ黒黍ヲ云フト釋シタルナリ、然ルニ唐令ニ、「北方秬黍中者」トアルハ、孟康ガ注ノ北方黒ヲ北方ニ産スル黍ハ黒シト誤リシモノナルベシ、後魏ノ孝文帝ノ時、黍ヲ累ネテ尺ヲ作リシニハ、何處ノ黍ト云フコトハ云ハザリシニ、後周ノ宣帝ノ時、達奚震牛弘等ガ議ニ、上黨ノ羊頭山ノ黍ヲ以テ度ヲ起スコトヲ云ヘリ、(何レモ隋書律曆志ニ出ヅ、明義ニ引ケリ)漢書地理志ヲ按ズルニ、羊頭山ハ上黨郡穀遠縣ニアリ、地理志ニ「又上黨郡ハ秦置、屬并州」ト云ヘリ、周禮職方氏ノ職ニ「正北曰并州」トアレバ、此ハ等始メ漢書ノ子穀ヲ北方ノ黍ト誤リシナラン、唐令ニ北方秬黍ト云ヒシハ、此誤ヲ襲タルナリ、此後宋ノ鄧保信・阮逸・胡瑗・逮明ノ朱載堉ガ輩、皆上黨羊頭山ノ黍ニヨリシハ、達奚震牛弘等ガ誤ナルヲ覺ラザリシナリ、此事今ノ清ニ至リテモ辨ゼシ人無キハイカニゾヤ」然レバ本朝令ノ大小尺ハ、即唐ノ大小尺ニテ、今ノ曲尺ハ其大尺ナリ、「羽倉在滿ノ度制略考ニ、本朝令ノ小尺ハ唐ノ大尺ニシテ、今ノ曲尺ナリ、本朝令ノ大尺ハ高麗ノ度地尺ニテ、今ノ吳服尺ナリト云ヘリ、此說ニ依レバ大寶令ヲ定メラレシニハ、唐小尺ヲバ用ヒザリシトシタレドモ、モシ唐大尺ヲ小尺トシタランニハ、義解ニ、「以北方秬黍中者一之廣爲分」、トハ云フベカラズ、(一黍ノ廣サヲ一分トスルハ唐小尺ナリ)且和銅五年ニ寫シタル佛經ノ紙、唐小尺ノ度ニ合ヒタレバ、(此事下ニ詳ニス)本朝ノ小尺ハ即唐小尺ナルコト明ラケシ、又高麗尺ハ田令集解ニ引キタル古記ニ出シ說ニ

據リタルナレドモ、本朝令ノ尺度ノ制ハ全ク唐令ニ因ラレタルニ、唐尺ヲ用ヒズシテ高麗尺ヲ用フベキ理有ランヤ、羽倉氏ノ説誤ナリ、按ズルニ政事要略ニ、弘仁十三年十一月五日ノ明法博士額田國造今足ガ勘文ヲ載セテ、「檢舊説令前租法熟田五十代以大方六尺為歩、二百五十歩為五十代、慶雲三年格曰、准令ニ、(田令ナリ)以大方五尺為歩、三百六十歩為段者、今案スルニ五十代與令段歩積同、」トアリ、古ノ歩ハ大ニシテ、大寳ノ大尺ニテ度レバ、方六尺ニテ、其積三十六尺ナリ、三十六尺ニ二百五十歩ヲ乘ズレバ、九千尺ヲ得、令ノ歩ハ大尺ノ五尺ナレバ、其積二十五尺ナリ、二十五尺ニ三百六十歩ヲ乘ズレバ是モ九千尺ヲ得ル故ニ、古ノ二百五十歩ナル五十代モ、令ノ三百六十歩ナル段モ、同ジ積ナリト云ヘルナリ、皇國ニテ古ヨリ唐ノ制ニ倣ヒ、五尺ヲ歩トシタレドモ、其時高麗ヨリ唐大尺ノ一尺二寸ナル尺ヲ得テ、其尺ニテ五尺ト定メシニ、大寳ヨリ改テ唐大尺ニテ五尺ヲ歩トセシカバ、古ノ歩ヲ大尺ニテ度レバ六尺ナル故ニ、令前ノ歩ヲ「以大方六尺為歩」ト云ヒタルナラン、然ラバ令前ニハ高麗尺ヲ以テ地ヲ度リシニ、令ヲ定メラレシ時ヨリ、改テ唐大尺ニテ度リシナリ、(大寳二年三月紀ニ、「始頒度量天下」トアルハ、高麗尺ヲ廢シテ唐尺ヲ頒タレシナルベシ)令集解ニ引キタル古記ニハ、令前ニ高麗尺ニテ地ヲ度リシコトヲ載セタリシヲ、集解ノ作者誤リテ令ノ時ノコトトシテ、令ノ大尺ヲ高麗尺ナリトハセシナルベシ、羽倉氏ハ是ニ惑ハサレタルナリ、又按ズルニ、唐大尺ノ一尺二寸ナル高麗尺ハ疑フラクハ東魏尺ニテ、唐大尺ノ一尺一寸七分五釐四豪四絲八忽餘ナリシヲ、(東魏尺ノコトハ附錄ニ詳ニス)大凡ニ

一尺二寸ト云ヒタルカ、又ハ高麗ヲ經テ來リシ間ニ（東魏ノ地ハ高麗ニ近シ）稍長シテ皇國ニ入リシニヤ有リケン、此尺ノ長サ今ノ吳服尺ト略同ジケレドモ、吳服尺ハ明ノ裁衣尺ノ稍長セシモノト思ハルレバ、（此事下ニ詳ニス）此尺トハ其原同ジカラズ、又藤貞幹ノ好古小錄ニハ、本朝令ノ小尺ハ即唐ノ小尺ニテ、今ノ曲尺ナリ、大尺ハ即唐大尺ニテ、今ノ吳服尺ナリト云ヘリ、本朝令ノ大小尺ヲ即唐ノ大小尺トシタルハ當リタレドモ、小尺ヲ曲尺トシ、大尺ヲ吳服尺トシタルハ誤ナリ、累黍ノ說ハ非ナレドモ、其長サハ大ヨリ違フベカラズ、試ニ黍ヲ累ネテ曲尺ノ小尺ニ非ザルヲ覺ルベシ」サレドモ年久シク傳ヘタレバ、今ノ曲尺ハ稍稍長セシモノナリ、【凡尺度歲月ヲ經レバ必稍長スルコト、隋書律曆志ニ歷代ノ尺ヲ載セタルヲ見テ知ルベシ、此事附錄ニ詳ニス】故ニ古尺ノ今世ニ殘リ傳ハル者ヲ求ルニ、大和國法隆寺ニ象牙尺アリ、聖德太子ノ遺物ナリト云ヒ傳フ、吾友松崎慊堂（復）、コレヲ唐ノ鏤牙尺ナラントテ云ヘリ【鏤牙尺ハ六典ノ中尙令ノ注ニ、「毎年二月二日、進鏤牙尺及木畫紫檀尺」新唐書百官志ニ、「中尙令歲二月獻牙尺」李泌傳ニ、「泌請以正月晦、以二月朔為中和節、因賜大臣戚里尺、謂之裁度」（是ニヨレバ六典ニ二日トアルハ傳寫ノ誤ナリ、德宗ノ貞元五年ノ紀ニモ、二月一日トアリ）宋ノ王應麟ガ玉海ニ、「貞元八年宏詞以此命題、李觀裴度有詩、白居易爲賜尺表、紅牙爲尺、白銀爲寸、美ニシテ而有度、換テ以相宜、咫尺之顏不違、分寸之功未効、呂溫謝金鏤牙尺」ナド云ヒシモノナリ、先輩コノ尺ヲ鏤尺ナラント云ヒシハ、鏤牙尺ナルコトヲ知ラザリシナリ】コノ說據リ信ズベシ、然

ラバ聖德太子ノ遺物ニハアラデ、遣唐使、歸化人ナドノ將來セシモノノ寺家ニ入リシガ傳ハレルナラン、【長サ今ノ曲尺ノ九寸八分弱ナリ、又陸奧國耶麻郡大寺村ノ慧日寺ニ、瑠璃尺ト云フ尺ヲ藏ス、平將門ガ女如藏尼ノ遺物ナリト云ヘリ、其摹造シタルヲ見シニ、大體法隆寺ノ尺ト同ジ、タダ法隆寺ノ尺ハ、紅ニ綵リタルヲ、是ハ青ク綵リタルガ異ナルノミ、其質ハ牙尺ナレドモ、青キニヨリテ、瑠璃尺トハ云ナリ、其長サ法隆寺ノ尺ニ比ブレバ、四釐許長シ、是モ唐ノ鏤牙尺ナルベシ】卽唐ノ大尺ナルベケレドモ、儀物ニシテ用尺ニハアラザレバ、據トナシ難シ、【今俗ノ破魔弓、又婚儀ニ用フル描金ノ硯箱ナドノ類ニテ、用ニ充ン料ニ造リタル物ニアラザレバ、尺ノ長サ證トスベカラズ、法隆寺ノ尺モ慧日寺ノ尺モ、共ニ鏤牙尺ナルニ、四釐許ノ異アルニテモ、據リ難キヲ知ルベシ】又古キ寺寺ニ律尺トテ藏スルアリ、【律トハ釋家ノ戒律ノ律ニテ音律ノ律ニハアラズ】予其摹ヲ得シハ、叡山尺【曲尺七寸六分強、背ニ「山門ノ僧惠宅於寶乘院寫」トアリ】、高野尺【曲尺七寸九分強、背ニ、「寶永九年於高野山圓通菴ノ僧久笠寫」トアリ】東寺金蓮院尺【曲尺八寸一分強、背ニ大師所用ノトアリ】槇尾尺【曲尺八寸二分弱、背ニ東寺一體トアリ】泉涌寺尺【曲尺八寸二分、俊芿國師將來ノ物ト云傳フ、按ズルニ泉涌寺長典筆記ニハ、圓尺ノ事當世流布ニ有三不同、佛所ノ用ハ金尺ノ八寸ナリ、建仁寺ノ相傳ハ八寸二分ニ餘ル、當寺ノ相承ハ八寸一分半ナリトアリ、此筆記ハ文龜永正ノ間ノモノナリ、今彼寺ノ尺ヲ摹シタルヲ計レバ、八寸二分ナルニ、長典ハ八寸一分半ト云ヘリ、其校セシ長サ半分ノ異アルハ、其頃既ニ誇長ノ曲尺アリテ度リシニ

ヤ、（今ノ曲尺ノ竹尺ハ工匠鐵尺ヨリハ七差許長シ） 中根璋ノ律原發揮ニハ八寸二分有奇ト云ヘバ、予ガ得シ異尺ノ稍長シタリシニハアラザルベシ】大安寺尺【曲尺八寸二分半、背ニ「康永二年九月十四日、以二大安寺寶藏ノ本一寫レ之、於二西大寺二聖院一尊照法師寫レ之、大師將來御什物之内也一、トアリ】法壽菴尺【曲尺八寸三分、背ニ「南都瓦釜町法壽菴律尺」トアリ】生駒長福寺尺【曲尺八寸四分、背ニ「延寶七年己未於二和州金龍山長福寺一作」トアリ】コレ等ナリ、小倉ノ實起卿ノ摹シ傳ヘラレシ御府尺モ、即此物ニテ【此尺ノ事詳ニ附錄ニ見ユ、其長サ中村欽ノ三器考略ニハ、曲尺七寸九分五釐弱ト云ヒ、同人ノ律尺考驗ニ云フ所ニヨリテ計レバ、八寸〇〇五毫有奇ナリ、何レ正シキニカ詳ナラズ、背ニ周尺ノ二字アリト云ヘリ、唐小尺ヲ周尺ト云ヒシコト、四分律行事抄。宋僧元照ガ行事抄。資持記等ニ見エタリ、然レバ此尺モ律衣尺ナルヲ、僧徒ヨリ召サレテ御府ニ傳ハリシモノナルベシ】皆唐小尺ヲ摹シタルモノナリ、カク寺寺ニモ備ヘ置クコトハ、四分律行事抄ニ、唐小尺ニテ律衣ヲ制スルコトヲ云ヘルニヨリテナリ【サレドモ僧衣ヲ製スルコト皆工人ノ手ニ出デタレバ、律尺ハタダ其物ヲ備ヘタルノミニテ、用ニハ充ザリシユヱ、強テ其長サヲ正スコト無カリシカバ、各寺ノ傳フル所一定ナラヌコト右ノ如シ】是モ儀物ニシテ用尺ニアラザレバ證トナシ難シ、然ラバ如何ニシテ古ノ尺ヲ見ルベキト云フニ法隆寺ニ洞簫ト云ヒ傳フル笛一管アリ、洞簫ト云フハ誤ニテ、【洞簫ハ漢書元帝ノ紀ニ見ユ、注ニ「如淳ガ曰、洞者通也、簫之無レ底者、一」ト云ヘリ、文選ニ漢ノ王褒ガ洞簫賦アリ、沈約ガ宋書ノ樂志ニ、「前世有二洞簫一、其器今亡、蔡邕曰、簫編レ竹

有レ底、然則豈時無二洞簫一」ト云ヘリ、通典ニモ同ジ趣ニ載セタルハ、宋書ヨリ采リシナルベシ、然レバ洞簫ハ早ク後漢ノ時絶シモノナリ、宋ノ蘇軾ガ「客有下吹二洞簫一者上」ト赤壁賦ニ書キタレド、他書ニ洞簫ノ事見エザレバ、宋ノ時ハ傳ハラザリシナリ、淸ノ方成培ガ香研居詞塵ニ、「今之簫非レ簫、唐ノ尺八也、實ニ源二於古之編洞簫一、故亦謚二尺八一爲レ簫也」ト云ヘリ、然ラバ赤壁賦ニ云ヒシモ實ハ尺八ナルヲ、强テ洞簫ト書シナルベシ】尺八ナリ【コノ笛ヲ法隆寺古今目錄抄太子傳玉林抄等ニハ、即尺八ト云ヘリ、中世マデハカク云傳ヘシト見エタリ】尺八ハ唐ノ呂才ガ作リシ笛ニシテ、其事唐書ニ見ユ【唐書ノ呂才ガ傳ニ、「貞觀ノ時、上詔擧二善レ音者一、侍中王珪魏徵盛稱、才製二尺八一、凡十二枚、長短不レ同、與レ律諧契」、トアリ、律ノ黄鍾管ハ長サ九寸ナレバ、其音高クシテ人聲ニ親シカラヌニヨリ、ソレヲ倍シテ一尺八寸トシ、是ヨリ上生下生シテ、十二管ヲ作リ、人聲ニ近カラシメシ巧ナルベシ、寶龜十一年ノ西大寺資財帳ニ「斑竹尺八一口」ト載セタルモ、東大寺三倉寶物圖ニ載セタルモ、此法隆寺ニ傳ヘタルモ共ニ尺八ノ黄鍾管ナルベシ、又倭名類聚抄ニモ、尺八ヲ載セタレドモ、此笛絶エテ久シク用フルコト無カリシニヤ、空(ウツボ)竹取以下ノ物語ドモニ見ユルコト無シ、タダ源氏物語ニ、紅葉ノ御賀アリシ時、大篳篥尺八ナド取リ出サレタルコトヲ云ヒシハ、是等ハ當時用ヒラレザル樂器ナレドモ、格別ノ御賀ナレバサル物ヲサヘ取出サレタリト云フコトナレバ、源氏ノ時既ニ常ニハ用ヒザリシ趣ナリ、サレバ物語作者ノ頃ハ絶エタリシコト明ラケシ、保元三年ノ内宴ニ、此笛再興アリシコト續世繼ニ載セタレドモ、

其後物ニ見ユル事無ケレバ、再絶エタルナルベシ、後世好事ノ者、曲尺一尺八分ノ笛ヲ製シ、是ヲ尺八ト云ヒ、又一節截トモ名ヅケテ玩ビシハ、此笛ノ傳ハルコトヲ知ラザリシナラン、尺八ト云ハンカラハ、一尺八寸ナルベキニ、一尺八分ニ作リシモ誤ナリ、又今間信ト云フモノノ吹ク尺八ハ、曲尺一尺八寸ナリ、一尺八寸ニ造リタルハ當リタレドモ、呂才尺八ヲ作ルニ鍾律ヲ調フベキ小尺ニ依ラズシテ、俗用ノ大尺ニ依ルベキ謂無ケレバ、曲尺一尺八寸ニ作リシモ猶誤ナリ（鍾律ヲ調フルニハ、小尺ヲ用フルコト、隋志六典等ニ出ヅ、下文及附錄ニ引ケリ）疑ラクハ此笛一節截ヨリハ後ニ製リシモノナルベシ、今世ノ人是等ノ尺八ニ目馴レテ法隆寺ノ笛ハ尺八ニ非ズト思ヒテ、サカシラニ洞簫ト名ヅケシモノナルベシ、又按ズルニ安藤爲章ガ年山紀聞ニ、尺八ヲ唐山ニテハ洞簫ト云フト心越禪師語ラレキトアリ、安藤氏ノ云ヘル尺八ハ、彼間信ノ尺八ナルベシ、然ラバ此法隆寺ノ古尺八ヲ洞簫ト名ヅケシモ、心越歸化ノ後ノコトニゾアリツラン」此笛ノ長サヲ度ルニ、曲尺一尺四寸五分五釐、「東大寺三倉寳物圖ニ載セタル尺八ハ、長一尺四寸五分ト記セリ、大凡ニ度リタルカ、又ハ度リシ尺ノ稍長尺ナリシモ知ルベカラズ、香研居詞麈ニ、「如皐林九禪、嘗以二鐵簫一示レ培、乾隆初浚レ河得レ之者、其第一孔去二吹口一五寸半、第二第三孔、皆相去一寸、第四五孔、中間相去九分許、後一孔、比二前ノ一孔一高九分、後ノ兩孔（兩孔以背吹者）去二前第五孔一一寸半、兩孔下寸半、又多二一孔一、與二今簫一異、（兩孔以上分寸皆今尺）用二周尺一度レ之、恰長一尺八寸、圍徑四分、宋人樂器字二周尺一、此眞唐ノ物ノ實、」トアリ、然レドモ「此笛第一孔去口五寸半、

後兩孔又多一孔」ナド法隆寺・東大寺ノ尺八ト同ジカラズ、法隆寺東大寺ニ藏スル者ハ唐ヨリ傳來セシモノナルベシ、若然ラズトテモ、當時唐ノ尺八ヲ摹造セシモノナルコトハ疑無シ、然ラバ乾隆ノ時得タリシハ恐ラクハ唐物ニハアラジ、今尺ニテ度リタル樣明ナラズ、又用ニ周尺ニ度レ之恰長一尺八寸ト云ヒタレドモ、其度リシ周尺ノ長サヲ云ハザレバ、鐵簫ノ長サモ詳ナラズ」是ヲ一尺八寸トシテ度ヲ起セバ、其一尺ハ曲尺八寸〇八釐三毫三絲三忽不盡、是唐ノ小尺ニテ、大尺ハ此一尺二寸ナレバ、曲尺九寸七分ナリ、又公式令ニ、「天子神璽内印【宋謂方三寸】外印【宋謂方二寸半】諸司印【宋謂方二寸二分】諸國印【宋謂方二寸】トアルニヨリテ【内印ハ天皇御璽、外印ハ太政官印ナリ】今世ニ遺レル古ノ勅符牒條等ニ捺シタル璽印ヲ度レバ、度ヲ起スベキニヨリ、今コレヲ度リ試ムルニ、大凡大尺ノ度ニ合ヘドモ、皆少シヅツノ異アレバ【遠江國城東郡相良平田寺ニ、天平感寶元年ノ勅書ヲ藏ス、其勅書ニ捺シタル御璽ハ、方二寸八分五釐(是ヲ三寸トシテ度ヲ起セバ、一尺ハ曲尺九寸五分)集古十種ニ載セタル延長保延ノ御璽ハ方二寸九分三釐許(是ニテ一尺ハ曲尺九寸七分六釐餘)又延暦ノ太政官印ハ長二寸四分(是ヲ二寸五分トスレバ一尺ハ曲尺九寸六分)廣二寸三分三釐許(是ニテハ曲尺九寸三分二釐許)貞觀ヨリ永久マデノハ方二寸三分五釐(是ニテハ九寸四分)嘉祿ヨリ正嘉マデノハ方二寸四分五釐(是ニテハ九寸八分)其外諸司ノ印ハ二寸二分以下(是ニテハ曲尺ト同ジ)一寸九分以上(是ニテハ八寸六分強)諸國ノ印モ二寸以下(是ニテハ曲尺ト同ジ)一寸九分以上(是ニテハ九寸五分)ニテ一樣ナラズ、藤貞幹ノ金石遺文ニ載セタル璽印ノ大サ少シク出入ア

レドモ、一様ナラヌコトハ同ジ】董印ニヨリテハ度ヲ起シ難シ、音律ハ毫釐ヲ爭フモノナレバ、今ハ尺八ニヨリテ小尺ヲ起シ、小尺ヨリ大尺ヲ定メシナリ【呂才ハ唐初ノ人ナレバ尺八ヲ造リシニハ隋ノ鐵尺ニゾ據リツラン、鐵尺ハ「比晉前尺一尺六分四釐」ト、隋書律曆志ニ見エタリ、唐ノ張文收ガ作リシ尺モ是ニヨリシナリ（是即唐小尺ナリ、張文收ガ尺ノコトハ下ニ詳ニス）玉海ニ宋景祐三年丁度ガ上言ヲ載セテ「今司天監景表尺、和峴所謂西京銅望臬者、蓋洛都舊制也、五代ニハ不聞改易、此周尺ナリ、今以貨布・錯刀・貨泉・大泉等校之、則景表尺ハ長六分有奇」ト云ヒ、又「司天監景表尺、比晉前尺長六分三釐」トモ云ヒシ者、即張文收ガ尺ナルベシ、今漢錢ヲ以テ晉前尺ヲ起セバ、曲尺七寸六分ナリ（即周尺ナリ、此等ノ事附錄ニ詳ニス）此尺ニテ尺八ヨリ起シタル尺ヲ計レバ、一尺〇六分三釐五毫九絲六忽餘ニテ、隋ノ鐵尺ヨリハ四毫三絲六忽強短ク、宋ノ景表尺ヨリハ五毫九絲六忽餘長シ、但四五毫ノ異ハ目力ノ及ブベキナラネバ、今尺八ヨリ起シタル唐尺ノ誤ラザルヲ證スベシ、按ズルニ和峴ガ云フ所ノ西京銅望臬ハ唐ノ物ナリ、晉ノ荀勗ガ云ヒシ西京銅望臬ハ、前漢ノ物ニシテ是トハ同ジカラズ、荀勗ガ銅望臬ノコトハ附錄ニ出セリ】是ニ依レバ今ノ曲尺ハ唐大尺ノ三分強謁長セシモノト知ルベシ【藤貞幹ガ集古圖ニ伯耆守安近家所傳尺ト阿波守狛近光所傳尺トヲ載ス、近家ノ尺ヲ度ルニ、曲尺九寸八分七釐、近光ノ尺ハ曲尺九寸九分強、是等ノ尺唐尺ニ比スレバ謁長シタレドモ、サスガニ樂家ノ古傳ニテ、イマダ今ノ曲尺ノ謁長セル如クニハアラザリシナリ、按ズルニ今ノ曲尺ニ、工匠ノ用フル鐵尺ト竹尺トノ二ツア

リ、竹尺ハ京ノ六條ニテ作ル念佛尺ト云フ者最精好ナリ、佗國ニテモ是ヲ摹シ造レドモ、工匠ノ鐵尺ニ比スレバ七釐長シ、按ズルニ法隆寺古今目錄抄ニ、彼象牙尺ヲ「此尺者比二番匠等鈎金一短二分」ト云ヘリ、今按スルニ、鐵尺ニテハ二分少強短カケレドモ、竹尺ニテ度レバ二分七釐許短シ、又東大寺ノ凝然上人ノ物ト云フ小硯匣ノ側面ニ畫キシ尺モ鐵尺ト同ジケレバ、竹尺ハ又譎長セシモノナルコト疑無シ、故ニ今此書ニ曲尺ト云フモノハ、皆工匠鐵尺ニ依リシナリ】

或人難ジテ云、雜令ニ「凡度レ地量二銀銅穀一者ハ皆用レ大、此ノ外ハ官私悉用二小者一」トアレバ、公式令ニ載セタル驛印ノ度モ、小尺ナルベキニ略大尺ニ合フモノハ如何、答、雜令ニハ地ヲ度ルニノミ大尺ヲ用ヒ、其外ハ悉小尺ヲ用フベキ制ナリシニ、延喜ノ雜式ニ「度量權衡者官私悉用レ大、但測レ景合レ藥、則用二小者一」トアルヲ見レバ、後ニ制ヲ改メテ大尺ヲ常用トセラレシナリ、按ズルニ六典【金部ノ職掌】ニ「凡積二秬黍一爲二度量權衡一者、【小度・小量・小稱ナリ】調二鍾律一、測二晷景一、合二湯藥一、及冠冕之制則用レ之、內外官司悉用二大者一」ト云ヘリ、【南部新書ニ開元令ヲ引キタルモ是ニ同ジ、通典・舊唐書ニモ同ジ趣ニ載セタリ】唐ニテ小尺ヲ正シキ尺トシテ、鍾律・晷景・冠冕ナドヲ度ルニ、是ヲ用ヒシヲ見レバ、常用ニモ是ヲ用ヒマホシカリツラン、然ルニ周隋以來小尺ヲ作リシカドモ、民間ニテ用ヒザリシニヨリ、俗ニ隨ヒテ大尺ヲ常用トシタリシナリ【西土ニハ古ヨリ所謂周尺ヲ用フ、晉ノ後南北ニ別レ、南方ニハ宋・齊・梁・陳共ニ譎長ナガラモ、皆此尺ヲ用ヒシニ、北方ニテハ魏ニハ周尺ノ一尺二寸餘、東魏・北齊ニハ周尺ノ一尺

五十餘ノ長尺ヲ用ヒタリ、後周ニテモ始ハ魏尺ヲ用ヒシニ、古尺ニ非ルニヨリテ玉尺ヲ作リシカドモ、是モ稱古ニアラザレバ、後又宋尺ニ依リテ鐵尺ヲ頒チタリ、然レドモ市中ニハ魏尺ヲ用ヒ慣レテ、玉尺ヲモ鐵尺ヲモ用ヒズ、是ヲ後周市尺ト云フ、隋ノ初玉尺ヲ用ヒ、開皇ノ時ヨリ改メテ魏尺ヲ用ヒ、律管ナドヲバ是等ノ尺ニテ定メシカドモ、市中ニハ魏尺ヲ用フルコト、後周ノ時ト同ジカリシカバ、魏尺ヲモ官尺トシテ、常用ニハ官私共ニ此尺ヲ用ヒシテリ、唐ニテモ是ヲ承ケテ、魏尺ト開皇官尺トヲ大小尺トシ、法物ヲバ小尺ニテ度リタリシカドモ、民ノ便トスルニヨリテ大尺ヲ常用トセシナリ、此等ノコト附錄ニ詳ニス」皇國ニテモ土地銀銅米穀ナド數多ク計ルモノハ、小度。小稱。小量ニテハ不便ナレバ、令ヲ定メ給ヒシ時、唐ニ倣ヒテ、大度。大稱。大量ヲ用ヒ、其他ハ小度。小稱。小量ヲ常用トセラレシニ、「本朝令ハ唐令ニ沿リ給ヒシカドモ、其中ニ制ヲ改メラレシモ、彼是見エタリ」西土ニハ專大尺ヲノミ用ヒシカバ「六典ニ「內外官司悉用大者」」トイヒシコト上ニ引ケリ、又通典ニ「大唐貞觀中、張文收鑄銅斛、秤尺升合、咸得其數、詔以其副藏於樂署、至武延秀爲太常卿、以爲奇玩、以律與古玉斗升合獻焉、開元十七年將考宗廟樂、有司請出之、勅惟以銅律付太常、而亡其九管、今正聲有銅律三百五十六銅斛二銅秤二銅甌十四、斛左右耳與臀皆正方積十、而登以至於斛、銘云、大唐貞觀十年、歲次玄枵、月旅應鐘、依新令累黍尺、定律校龠、成茲嘉量、與古玉斗相符、同律度量衡、協律郎張文收奉勅修定、秤以錘、銘云、大唐貞觀秤同律度量衡、匣上有朱漆題秤尺二字、

尺ハ亡ブ其跡猶存、以今常用度量校之、尺當六之五、量衡ハ皆三之一」、ト云ヘリ、張文收ガ作リシハ小尺ナリ、大尺ハ其一尺二寸ニテ、是ヲ常用トセリ、張文收ガ尺ヲ開元ノ時常用尺ニテ度リシ故ニ、當六之五トハ云ヒシナリ、是常用ニハ大尺ヲノミ用ヒテ、開元ノ頃小尺ハ廢シタルガ如クナリシヲ知ルベシ、宋ノ程大昌ガ演繁露ニ「開元九年勅スラク度ハ以十寸爲尺、尺二寸爲大尺」ト載セタルハ、此時始テ大尺ヲ作リシ如ク聞ユレドモ「十寸ヲ爲尺、一尺二寸爲大尺」トハ、貞觀令ノ文ニテ、四分律行事抄ニモ「隋煬帝立尺度秤ハ、準古立樣、余親見之、唐朝御シテ宇任世兩用、不違古典」トアルハ隋ノ大業ノ時ニ開皇ノ官尺ヲモ鐵尺ヲモ止メテ、梁表尺ヲ用ヒシニ、（是ヲ準古立樣ト云ヘルナリ、此事附錄ニ詳ニス）唐ニテハ、又開皇ノ制ニヨリテ、大小兩尺ヲ用ヒシヲ云ヒタルナレバ、（不違古典トハ開皇ノ制ニ依リシヲ云フナリ、）大尺ハ唐初ヨリ用ヒテ、開元ノ時始リシニ非ルコト明ラケシ、程大昌ハ開元九年ニ令ノ趣ヲ述ベタル格文ヲ見テ、其源ニ泝ラズシテ其ママニ引キシモノナルベシ、譬ヘバ、玉海ニ六典ヲ引キテ、「大府卿ハ凡官私ノ斗斛尺每年八月詣寺平校」、トアル注ニ、「開元九年勅格」ト云ヒタレドモ、唐律疏議ニ、「依關市令每年八月詣太府寺平校」、トアレバ、是モ貞觀令ノ文ナルヲ、開元勅格ト引キシニ同ジ】後ニ彼ニ倣ヒテ大尺ヲ常用トスル制ニ改メラレシモノナラン、ソレハ何レノ御時改メラレツラント云フニ、寶龜元年ニ造ラセラレシ無垢淨光經ノ小塔ヲ度ルニ、【續日本紀ニ、「寶龜元年四月戊午、初天皇八年ノ亂平、乃發弘願、令造三重ノ小塔一百萬基、高各四寸五分、基ノ徑

三寸五分、【續紀、令下各置二根本自心相輪六度等陀羅尼一、至レ是功畢、分二置諸寺一】ト云ヘル是ナリ、八年ノ亂トハ、天平寶字八年藤原惠美押勝ガ亂ヲ云フ、諸本自心ヲ慈心ニ作ル、予此塔三基ヲ藏ス、一基ニハ根本陀羅尼ヲ納メ、一基ニハ相輪陀羅尼ヲ納メ、一基ニハ自心印陀羅尼ヲ納ム、藏中ノ無垢淨光經ニモ、自心印トアリ、是ニヨレバ慈心トアルハ、音ノ近キニヨリテ、寫シ誤リシコト著ケレバ、改メ訂ス、印字ハ寫シ脱シタルカ、又ハ史家ノ省文ナルカ詳ナラザレバ、今姑ク舊ニ依レリ】皆大尺ニ合ヒタレバ、寶龜ノ時ハ大尺ヲ常用トシタリシコト明ナリ、又雜令ニ、「紙長二尺闊一尺」ト云ヘルニヨリテ、予ガ架中ノ古寫經紙ニテ考ルニ、和銅五年ニ寫シタルハ、其紙長サ小尺ノ二尺闊サ小尺ノ九寸四分半【其ハ闊サ一尺ナリシヲ、裝裱ノ時紙ノ上ヲ截リ揃ヘシニヨリテ、少シク短クナリタルナラン】令ニ云フ所ノ度ニ合ヘリ【此外和銅以上ノ文書、今世ニ遺レルヲ聞カズ、博覽ノ人ニ尋ヌベシ】天平十二年ヨリ寶龜ノ頃マデニ寫シタルハ、長サ大尺ノ一尺九寸七分以下、一尺八寸三分以上、闊サ大尺ノ九寸六分以下、九寸二三分以上ナリ【是ヲ小尺ニテ度レバ、長サ二尺三寸六分以下、二尺二寸以上、闊サ一尺一寸六分以下、一尺一寸一分以上ナレバ、令ノ制ニ合ハズ、然レバ是ハ小尺ニテ度リシニハアラデ、大尺ニテ長サ二尺、闊サ一尺ナリシヲ、裝潢ノ時截リ縮メシナラン】和銅五年ノ經ハ、小尺ヲ常用トセラレシ時造リシ紙ニテ、天平十二年以後ノ經ハ大尺ヲ常用トスル制ニ改メラレシ後ニ造リタル紙ナルベシ、【此外西土ノ紙ヲ以テ寫シタル經アリ、是ハ令ノ制ニ預ラザレバ論ゼズ】是ニ據レバ和銅五年ニハイマダ小尺ヲ常用トセシ

ニ、天平十二年ニハ既ニ大尺ヲ常用トシタリト見ユ、【天平十二年ハ寶龜ノ前三十年ナリ】又續日本紀ニ「養老三年五月制、諸國貢調短絹狹絁麁狹絹美濃狹絁之法、各長サ六丈濶サ一尺九寸」、トアルニ、延喜ノ主計式ニモ「諸國輸調絹絁各長六丈、廣一尺九寸、長幡部絁長サ六丈、廣サ一尺九寸」、トアリテ、其長サ廣サ全ク同ジケレバ、主計式ニ載セタルハ、即養老ノ制ナリ、式ノ時ハ大尺ヲ用ヒタルニ、養老ノ制ト尺寸ノ同ジキヲ見レバ、養老ノ時早ク大尺ヲ用ヒシコト知ルベシ、【天平十二年ノ前二十年ナリ】然レバ大尺ヲ常用トセシハ和銅五年ノ後、養老三年ノ前ナリシコト明ラケシ、按ズルニ續日本紀ニ、又「和銅六年二月始制度量、四月頒下新格及度量權衡於天下諸國」トタリ、【養老三年ノ前六年ナリ】然ラバ是時始テ唐制ニ傚ヒテ、大尺ヲ常用トセラレシナルベシ、【故ニ養老ノ絹絁ノ長廣モ、天平ノ經ノ紙モ、寶龜ノ塔モ、皆大尺ニテ度リシナリ、(但天平二年ニ寫シタル經ニ、長サ小尺ノ一尺、廣サ小尺一尺〇四分ノ者アリ、小尺ニテ造リシ紙ノ少シク廣カリシナラン、是ハ改制以前ノ紙アリテ、ソレニ寫シタリシモノナルベシ) 按ズルニ、釋思託ガ延曆僧錄ノ光明皇后ノ傳ニ、「皇后在シトキ室ニ、諸テ父ニ入リ市ニ教テ諸賈人ニ用フ於稱尺ヲ、于時日本未行稱尺、新從大唐得稱尺、所以皇后入テ市ニ教フ人ニ用フ稱尺ヲ、父曰、汝當レ助國宣風ヲ、權衡稱尺非久、各流天下ニ、後帝納レ之」、トアリ、皇后ハ天平寶字四年春秋六十ニテ崩ジ給フ、聖武皇帝儲貳タリシ時納レテ妃トシ給ヒシハ、御年十六ノ時ナリト續日本紀ニ見ユ、然レバ皇后ハ大寶元年ニ生レ給ヒ、妃トナリ給ヒシハ、靈龜二年ニテ、和銅六年ニハ

御年十三ナリ、然ラバ皇后ノ家ニ坐シ時教ヘ給ヒシハ、和銅六年改制ノ稱尺ナルベシ、尺ハ皇極天皇ト孝德天皇ノ紀ニ見エ、稱ハ齊明天皇ト天智天皇ノ紀ニ見エ、度量ヲ天下ニ頒タレシコト、文武天皇ノ紀ニ載セ、大寶ノ令ニモ正シク度量權衡ノ制ヲ擧ラレタルヲ思託ハ唐人ナレバ（鑑眞ニ從ヒテ歸化セシ僧ナリ）皇國ノ典故ヲ知ラデ和銅ノ時マデ皇國ニ稱尺無カリシヲ、皇后ノ始テ教ヘ給ヒシト誤リタルナリ、其實ハ皇后ノ教ヘ給ヒシハ、和銅改制ノ稱尺ニテ、此時稱尺ヲ始テ用ヒシニハアラズ、和銅六年ハ唐ノ開元元年ニ當レリ、又續日本紀ニ「養老四年五月癸酉頒二尺様ヲ於諸國一、」トアルハ和銅六年ニ大尺ヲ常用トサセラレシカドモ、各國ノ尺正シカラザリシカバ、此時又尺様ヲ頒タレシナルベシ、和銅六年ノ後七年ナリ」然ラバ此時ヨリ璽印モ改メテ、大尺ニテ製セラレシナラン、故ニ其度大尺ニ合ヒシナリ、「按ズルニ、正シキ尺ハ小尺ニテ大尺ヲ用フルハ簡便ニヨリタルナレバ、大尺ヲ常用トシタレドモ、小尺ヲ廢セシニハアラズ、故ニ式ニモ測景ニハ用二小者一ト云ヘリ、唐ニテハ初ヨリ大尺ヲ常用トシタレドモ、晷景ヲ測リ冠冕ヲ造ル等ニハ、小尺ヲ用フト云ヒ、其景表尺ハ小尺ニテ、宋ノ時マデモ殘リタリ、然ラバ常ニハ大尺ヲ用フルトモ、法物ハ小尺ニテ定ムベキニ、御璽官印ヲシモ大ニテ度リ改メ造ラレシハ甚シキ誤ナリケリ、如レ此何事ニモ押並ベテ大尺ヲ用フルコトトナリシカバ、小尺ハ影ヲ測ルニノミ用ヒテ、他ノ事ニハ用ヒザリシナルベシ」若和銅以前ノ璽印傳ハリタランニハ、其尺必小尺ニゾ合フベキ、「金石遺文ニ、大寶三年ノ勅書ニ捺シタリト云フ御璽ト大學寮印トヲ載セテ、大寶ノ時ハ晉前尺（曲尺七寸六分同人ノ

集古圖ニハ曲尺七寸四分弱ト云ヘリ）ヲ用ヒ、養老四年ヨリ唐ノ大小尺ニ改メラレタリト云ヘリ、然レドモ晉前尺ハ晉ノ荀勗ガ考ヘ定メタル周漢ノ古尺ニシテ、當時スラ鍾律ヲ調フルニノミ用ヒテ常用トセズ、（晉前尺ノコト附錄ニ詳ニス）況ヤ大寶令ハ唐令ニ倣ヒ給ヒシニ、唐尺ニ依ラズシテ荀勗ガ調律ノ尺ヲ用ヒラルベキ故アランヤ、彼勅書寫本ノミ傳ハリテ、原本ハ所在詳ナラズト云ヘリ、思フニ必贋造ノ物ナルベシ、又春田永年ノ延喜式工事通解ニ、和銅以後曲尺ヲ常用トシ、其一尺二寸ヲ大尺トシテ、布帛ヲ度ルト云ヒシモ誤ナリ、和銅以前モ和銅以後モ小尺ハ同ジ小尺、大尺ハ同ジ大尺ニテ、タダ小尺ヲ常用トセシト、大尺ヲ常用トセシトノ變リタルノミナリ、今ノ大尺ヲ和銅ニ小尺トシ、其一尺二寸ヲ大尺トシタルニハアラズ、又大尺ヲ布帛ヲ度ルニノミ用フト云ヒタルモ、雜式ニ官私悉用㆓大者㆒トアルニモ合ハヌヲヤ】

或人難ジテ曰、古今目錄抄ト凝然ノ小硯匣トニ據リテ竹尺ヲ譌長セシモノト定メタレドモ、近江國栗太郡木內某ガ家ニ藏スル鐵ノ尺範ハ、後冷泉院ノ御時ノ物ナルニ、其長サ竹尺ト同ジ、然ラバ古今目錄抄ニ云ヒシモ、凝然ノ小硯匣モ今工匠ノ用フル鐵尺モ、皆後ニ縮リタルモノニシテ、竹尺ゾ古ヲ失ハヌ尺ナルベキニ、是ヲ譌長尺ト定メシハ如何、答、予嘗テコノ尺範ノ摹造ヲ得タリ、曲尺（竹尺ト同シ）呉服尺（竹尺ノ一尺二寸ナリ）鯨尺（竹尺ノ一尺二寸五分五釐、今ノ鯨尺ヨリハ五釐長シ）三種ノ尺範ナリ、【面ニ陽ノ字ヲ題シ、背ニ陰ノ字ヲ題ス、又人王七十代永承二、正月日ト鐫リタリ】凡度ハ手ヲ經ル

ニ隨ヒテ寸長スルコト上ニ云ヘリ、然ルニ此尺範ヲ以テ今ノ工匠鐵尺ヨリ長ケレバ、古ニアラザルコト著シ、又曲尺又ハ鯨尺ハ後世ノ私尺ニシテ、古此等ノ尺アルコト無ク、且年號ノ書法モ古ヲ知ラヌ者ノ所爲ニシテ、イト拙シ、尺様ハ銅ヲ以テ造ルベキニ【南部新書】ニ、開元令ヲ引テ「在レ京諸司及諸州ハ、各給ニ秤尺度斗升合等ノ様ヲ、皆以レ銅爲レ之」ト云ヘリ、本朝令ニ、「凡ソ用ニ度量權ヲ官司ハ皆給ニ様ヲ、其様皆銅モテ鑄レ之ヲ」トアルモ、唐制ニ依ラレシナリ、カク銅ヲ用フルコトハ、漢書律歷志ニ「凡律度量衡用ヰル者ハ云云、銅ハ爲ニ物ノ之至精ニ、不レ爲ニ燥濕寒暑ニ變ニ其節ヲ、不レ爲ニ風雨暴露ニ改ニ其形ヲ、介然トシテ有レ常、有レ似タリ於士君子之行ニ、是ヲ以テ用レ銅ヲ也」ト云ヘルニ本ヅキシナルベシ】鐵ニテ造リタルモ違ヘリ、鐵ハ古色ヲ帶ビ易キモノ故ニ、鐵ニテ造リシナラン】其長サ竹尺ト符合スルヲ見レバ、世ニ念佛尺ヲ賞スル故【念佛尺ノコト上ニ詳ニス】ソレニ依リテ作リシモノナルベシ、決シテ近世好事人ノ僞造ニシテ、古物ニアラザレバ、取リ論スルニ足ラズ、

或人又曰、三種尺範ノ僞造ナルコトハサモ有リナン、但倭名類聚抄木工具ニ、曲尺ヲ載セテマガリカネト訓ミ、裁縫具ニ尺ヲ出シ、雜色立成ヲ引キテ竹量也、タカハカリト載セタレバ、古ヨリ工匠尺ト裁縫尺ト同ジカラザリシナリ、高倉家ニテ裁縫ニ用ヒラルルハ鯨尺ナレバ、タカハカリハ後世ノ鯨尺ナルベシ、然ルヲ古服尺鯨尺等ハ無カリシト云フハ如何、答、タカハカリハ竹ニテ作リテ、其狀匀ラザルコト工匠尺ト異ナルノミ、其長サハ工匠尺ト同ジク大尺ナリ、其長サ同ジカランニハ並ベ載スベカラザルニ似タ

レドモ、營造ト裁縫ト用フル所同ジカラズ、其形モ異ナル故ニ兩部共ニ載セタルナリ、【同書ニ幡ヲ佛臨具ニモ征戰具ニモ載セ、頭巾裳ヲ僧坊具ニモ裝束部ニモ載セ、箜篌ヲ佛塔具ニモ音樂具ニモ載セ、鹿杖ヲ僧坊具ニモ旅行具ニモ載セ、鉸刀ヲ容飾具ニモ鍛冶具ニモ載セ、鐵槌ヲ工匠具ニモ鍛冶具ニモ載セタル、皆是ト同ジ】タカハカリノ長サ卽大尺ナル證ハ、弘安元年、靈山ノ定圓ト云フ僧、法隆寺ノ寶物共ヲ皆歌ニ詠タリシニ、彼象牙尺ヲタカハカリト云ヒシニテ【此歌太子傳、玉林抄ニ載セタリ、裁縫尺ハモト竹ニテ造リシニヨリテ竹ハカリト云フ、コノ定圓ガ歌ニ、象牙尺ヲタカハカリト云ヒシヲ見レバ、木又ハ象牙ナドニテ作リタルヲモ勾無クテ、布帛衣裳ナド度ルベキハ皆タカハカリト云ヒシナルベシ、譬ヘバ鯨尺ハ鯨ノ鬚ニテ作リシヲ本ニテ、木ニテモ竹ニテモ其長サナルヲバ、皆クヂラサシト云フガ如シ、又奈良ニテ甲冑ノ用ナリトテ、鷹ハカリト云フ尺ヲ製ス、曲尺ノ一尺一寸五分ナリ、是モ古ニ無キ私尺ナリ】タカハカリノ長サ大尺ト同ジキヲ知ルベシ【下ニ引キシ荒木田氏經日記ニ、曲尺ヨリ長キ尺ヲ大タカハカリト云ヒシモ、タカハカリノ卽曲尺ナルコトヲ證スベシ】和銅六年以後、小尺ハ影ヲ測ルニノミ用ヒテ【雜式ノ文上ニ引ケリ、又續日本紀ニ「天平七年四月辛亥、入唐留學生、從八位下下道ノ朝臣眞備、獻ズ唐禮一百三十卷。大衍曆經一卷。大衍曆立成十二卷。測ル影鐵尺一枚。銅律管一部。鐵モテ如ク方響ノ寫ニ律管ノ聲ヲ十二條。樂書要錄十卷」トアル影形鐵尺、卽小尺ニテ、西土ニテモ此頃ハ影ヲ測ルニノミ用ヒシナリ】諸物ハ皆大尺ニテ度ルベキ定メナリシニヨリ、營造ニモ裁縫ニモ、何事ニモ大尺ノ一種ヲ用ヒシナリ、【好古小錄曰、

續日本紀ニ天平六年五月、「諸國調布長二丈八尺、濶二一尺九寸」ト見エタリ、法隆寺ニ古調布アリ、布ノ端ニ「常陸國信太郡中家郷戸主大伴□□調布壹端、天平勝寶六年十月」ノ廿七字アリ、其濶サ今ノ大尺（貞幹ハ曲尺一尺二寸ヲ大尺トス、即今ノ吳服尺ナリ）一尺九寸アリ、布帛ニ大尺ヲ用フルノ明證トスベシ、大尺ニ吳服尺ノ名アルモ、穩キコトト見ユト云ヘリ、按ズルニ此布ノ端ニ書キタルハ、賦役令ニ「凡調絹絁布兩頭、及絲綿囊、具注國郡里戸主姓名年月日」トアル式ニ依レルナリ、賦役令ニ、「布廣二尺四寸」ト云ヘリ（小尺ニテ度リシナリ）小尺ノ二尺四寸ハ大尺ノ二尺ナレバ、天平六年ニ一尺九寸ト定メラレシハ大尺ナルベキニ、法隆寺ノ調布ノ幅ヲ度レバ大尺、（曲尺九寸七分）ニテハ、二尺五寸六分五毫餘、曲尺ニテハ二尺四寸八分、又吳服尺ニテ度レバ二尺〇七分、鯨尺ニテハ一尺九寸八分四釐ナレバ、貞幹ガ云ヒシ如ク、天平ノ頃ハ吳服尺カ鯨尺カヲ以テ度リシニ、法隆寺ノ調布ハ年ヲ經テ少シク伸ビタルニモアルベク思ハルレドモ、主計式ニ「調布長四丈二尺、廣二尺四寸」トアリ、（大尺ニテ度リシナリ）令ノ時ハ小尺ノ二尺四寸ナリシニ、和銅ヨリ世ニ普ク大尺ヲ用フルコトニナリタレバ、大尺ノ二尺ナリシヲ天平六年ニ改テ大尺ノ一尺九寸トシ、後ニ再大尺ノ二尺四寸ニ改メラレ、延喜ノ時マデモ其制ニ從ハレシナルベシ、然ラバ法隆寺ノ調布ハ大尺二尺四寸ノ制ニ改メラレシ後ニ、織リタル布ノ年ヲ經テ伸ビタルカ、又ハ制ヨリ少シ廣ク織リ成シシモノナルベシ、式ニ載セタル二尺四寸ノ制、天平勝寶六年ヨリ後ニ定メラレシト云フ明證請ナクバ、法隆寺ノ調布ヲ據リドコロトシテ、古吳服尺ヲ

用ヒシ證トハナシ難シ、又按ズルニ法隆寺ノ調布ノ端ニ書キタル、大伴ノ下ノ二闕字ハ、部羊ノ二字ナリ、大伴部ハ姓ニテ羊ハ名ナルベシ、又調布ニハ天平寳勝八年トアリ、ｒ寳勝トアルハ當時偶書錯リタルナレドモ、六年ト云ヒシハ貞幹ガ誤ナリ】其後明ノ裁衣尺渡リ來リシヨリ、俗間ノ裁縫ニハ其尺ヲ用ヒ、是ヲ呉服尺ト云ヒタレドモ【曲尺ノ一尺二寸ナリ、明ノ裁衣尺ハ曲尺ノ一尺一寸二分ナレドモ、譌長セシモノノ皇國ニ入リシカ、又ハ皇國ニ入リシ時ハ譌ラザリシヲ、後ニ譌リシニモアルベシ、清ノ裁衣尺モ明ノ裁衣尺ヲ承ケタルニ、譌長シテ其中ナル者ハ曲尺ノ一尺一寸七分七釐餘、小ナル者ハ一尺一寸五分ノ者アリ（附錄ニ詳ニス）然ラバ大ナル者ハ一尺二寸ニモ及ベルナラン、此尺イヅレノ時渡リ來リシカ考ヘ得ズ、泉涌寺長典ガ筆記ニ、曲尺ヲ金尺ト云ヘリ、呉服尺ニ分タン爲ニ、金尺ト云ヒシニ似タレバ、文龜永正ノ頃ハ此尺アリシカ、又ハ周尺ヲ云ヘル條ナレバ、ソレニ分タントテ金尺ト云ヒシニモアルベシ、荒木田氏經寛正四年日次記ニ、大タカハカリト云ヒシモノモ（全文下ニ引ケリ）是ナルニヤ、寛正四年ハ明ノ天順七年ニ當レリ、明ノ開國ヨリハ八十七年ナリ、又按ズルニ安東郡專當沙汰文ニ】寛永三年ニ布帛ノ長サ廣サヲ定メラレシニ、曲尺ヲ用ヒラレ、【東武實錄ニ、寛永三年丙寅年十二月七日仰出サル趣、一ツ絹紬之事壹反ニ付而、長サ大工ガネニテ三丈四尺、幅一尺四寸、一ツ布木綿之事、壹反ニ付而長サ大工ガネニテ三丈四尺、幅一尺三寸、右織物之寸尺卸レ此御定之上ハ、長幅不足之絹紬布木綿賣候ニ於而ハ、來年四月朔日ヨリ見合候者可レ取レ之者也トアリ】寛文四年、再命セラレシニモ、曲尺ニテ定メラ

レタレバ【寛文四年ノ八月三日ニモ、絹紬一端ニ付キ大工之カネニテ、長三丈四尺、ハバ一尺四寸タルベキ事、布木綿之義者端ニ付、大工之カネニテ、長三丈四尺、ハバ一尺三寸タルベキ事ト命ゼラレタリ】關東ニモ官ニハ呉服尺ハ用ヒラレザリシナリ、然レドモ民間ニテ呉服尺ヲ便トセシカバ【寛永四年八月ニ作リシ吉田光好ガ塵劫記ニ、キヌモンメンノ丈尺ト云コトハ、大工ノカネニ一尺二寸ヲ加フクニテ一尺ト云フモンメン一タンニ付、ナガサハ二丈五尺ナリ、キヌ一タント云フハ、長サ二丈八尺有リト云ヘリ、（呉服尺ノ二丈五尺ハ曲尺ノ三丈、呉服尺ノ二丈八尺ハ曲尺ノ三丈三尺六寸ナリ）如レ是呉服尺ニテ度リシヲ見レバ、此頃民間ニテ布帛ヲ度ルニハ專此尺ヲ用ヒシ事知ルベシ】寛文五年ヨリ呉服尺ニテ幅丈ヲ度ル事ニ改定メラレシナラン、【玉露叢話ニ、寛文五年秋、絹布綿布丈ヲ二丈六尺ニ定メ給フト云ヘリ、呉服尺ノ二丈六尺ハ曲尺ノ三丈一尺二寸ナリ、日本和漢合運ニモ、此事ヲ載セタリ】然ラバ曲尺ニテ布帛ヲ度ルコトハ、此時ヨリ廢セシナルベシ【然レドモ京都近畿ナドノ邊鄙ニハ、今モ曲尺ヲノミ用ヒテ、呉服尺ヲモ鯨尺ヲモ用ヒザル處モアリ、高野山ニテ衣類ヲ製スルニモ曲尺ヲ用フト云ヘリ】其後呉服尺ノ五分ヲ長シタルヲ鯨尺ト云ヒシナラン【曲尺ノ一尺二寸五分ナリ、裁衣尺ハ官制ニアラザル故ニ、西土ニテモ其長短ナリシト見エタリ、或人ノ云ヒケルハ、古ハ民間ニテ布帛ヲ度ルニ都ベテ呉服尺ヲ用ヒシニ、一人ノ商賈アリテ、五分長キ尺ヲ造リ、是ニテ度リ賣リシカバ、其家布帛ヲ買人多カリシトゾ、是ニヨリテ他ノ布帛ヲ賣ル者モ此尺ヲ學ビシカ、後ニハ裁縫ニモ是ヲ用フルコトニ成リシト云傳フト云ヘ

リ、按ズルニ乳母冊子ニ、クデラ、クワノモノサシトアルハ、鯨魚鰓、又ハ桑木ニテ作リタル尺ト云フコトニテ、曲尺一尺二寸五分ノ鯨尺ニハアラズ】裁衣尺ハ西土ニテモ明ヨリ始マリテ、ソレヨリ前ニハ別チ用フル事ナシ、況吾國ノ古此等ノ尺無カリシコト明ラケシ、【好古小錄ニ鯨尺ハ唐ノ御府尺ナリト云ヒシハ、何ニ據リタルニカ、御府尺ノ名物ニ見エタルコト無ケレバ信ジ難シ、按ズルニ呉服尺ハモシ明令集解ニ載セタル高麗尺ナルカ、（高麗尺ハ東魏尺ナルベキコト上ニ云ヘリ）又ハ演繁露ニ載セタル南宋ノ京尺ニテ（附錄ニ詳ニス）鯨尺ハソレラノ譌長セシモノニヤトモ思ヘドモ、呉服尺ト鯨尺共ニ近世ニ出タル上ニ、布帛裁縫ニノミ用ヒテ、其佗ノ事ニハ用ヒザレバ、必サニハアラデ、裁衣尺ノ傳ハリシモノナルベシ】サレバ呉服尺・鯨尺等ハ、皆後世民間ノ私尺ニシテ、官家ノ用ニ充ツベキ尺ニ非ズ、今高倉家ノ裁衣尺ハ鯨尺ヲ用ヒラルルト云ヘドモ、文化十二年高倉永雅卿、江戸ニ下リ給ヒシ時、從ヒ來リシ山田錦所（以文）ニ依リテ問ヒ申シシニ、彼家ニモ古ハ曲尺ヲ用ヒラレシト答ヘ給ヒキ、【或人曰、小忌ノ赤紐、高倉家ニテ長一丈、廣三分半ト傳ヘラル、是ヲ曲尺ニテ度レバ、長一丈二尺五寸、廣四分四釐弱ナルヲ、綾小路俊量卿ノ記ニ、長一丈二尺、弘四分トアレバ、古曲尺ニテ度リシト云フ說ノ妄ナラザルヲ信ズベシト云ヘリ、然レドモ其長サ五寸ノタガヒ有ルニヨリテ考レバ、古ハ曲尺ニテ長サ一丈二尺廣四分ナリシヲ後ニ呉服尺ニテ度リ、長一丈廣三分半ト定メタルニ、（曲尺ノ一丈二尺ハ呉服尺ノ一丈、曲尺ノ四分ハ呉服尺ノ三分三釐不盡ナリ）再變シテ今ハ鯨尺ニテ長一丈、廣三分半トセラレシナラン、又荒

本田氏經ノ日次記ニ、寛正四年荒木田神主等ガ解狀ニ、御裝束ノ調進相違無シトイヘドモ、大略尺寸不足ト云ヒシニ、行事官ノ陳狀ニ御裝束ノ事皆ニ先例ニ大タカハカリヲモツテ御裝束ヲ禰宜等ノ中ヘ取リ、如ニ所存ニサシトルナリ、先例爲ニシテ官方ニ古來ノ手尺ヲモテ、相共ニサシ渡、是ヲ請取處今度非ニ先規ニトイヘドモ、其用意ニ心得餘分イタス間、如レ申無ニ相違ニ相渡者也ト云ヘリ、然ルニ禰宜等又上言シケルハ、御裝束尺寸ノ事禰宜ガ中ニ取リ、大タカハカリヲモテ如ニ所存ニサシトル由以外ノソラ言ナリ、以往ヨリ定マレル鯨尺ヲモテ辨代ト一禰宜ガ前ニオイテ大闕鑑ヲ數、ソノ上ニ御唐櫃ノフタヲオキ、其上ニテ神宮ノ奉行并物忌等サシマキラセ、 行事官等相共ニ拜見仕リ如ニ先規ニサタヲ致ス所、 如レ此申條以外ノ不當ナリト云ヘリ、是ハ此年大神宮遷宮ニヨリテ奉ラルル御裝束ヲ行事官伊勢ニ持行テ神宮ニ渡シシニ、禰宜等制法ノ尺寸ヨリ小サキ旨ヲ朝廷ニ申シシカバ、行事官陳ジテ、禰宜ノ度リタルハ例ノ尺ニハアラデ、大ナル尺ヲ以テ度リシ故ニ、御裝束ノ尺寸短キナリト云ヒシヲ、禰宜等ナニアラズ、常用ノ鐵尺ニテ度リシト申シシナリ、今モ大神宮遷宮ノ時奉ラルル御裝束、又毎年ノ幣帛何レモ曲尺ニテ度レリ、古ヨリノ例ナルベシ、又伊勢大神宮司公文抄 (此書永享嘉吉等ノ年號アリ) ニ載セタル御氣殿、御裝束ノ物サシノ圖ヲ度ルニ、長サ曲尺ノ一尺〇三分半許アリ、 轉寫ヲ經テ謬長セシ物ナルベシ、 謬長ハシタレドモ是モ御裝束ヲ度ルニ、呉服尺ヲ用ヒザル一ノ證トスベシ、按ズルニ氏經ノ日次記ニ云ヘル大タカハカリハ、後世ノ呉服尺ナルニヤ】然ラバ今鯨尺ヲ用ヒラルルハ、衰頽ノ御代ニ古ヲ失ハレシヨリノ事ナルベシ、今ハ文運盛ニシテ

萬事廢レタルヲ興シ、謬レルヲ糾シ、古ニ復サルル時ニシアレバ、イカデ是モ大尺ヲ用ヒラレマホシキワザニナン

或人難ジテ曰、唐書ニ開元錢ノ徑八分ト云ヘリ【大尺ナリ】試ニ大樣ノ者ヲ撰ビ、十錢ヲ積テ曲尺ニテ度レバ、略八寸ナリ、今定メタル大尺【曲尺九寸七分】ニテ度レバ、八寸三分ニ餘レリ、凡錢年久シク續キテ鑄レバ、後ニ鑄タルハ初ニ鑄シヨリハ、薄小ニナルコト古今同ジ、【朱載堉ガ律呂精義ニモ「凡錢初鑄、與レ制合、再入レ模卽縮小」ト云ヘリ】サレバ八分ヨリ小キハアルベシ、八分ヨリ大ナルハ無キ理ナリ、然ルニ今開元錢ノ度ニ略合ヒタル曲尺ヲ謬長セシモノトシ、開元錢十枚ヨリ度レバ、三分餘短キ尺ヲ唐ノ大尺ト定メシハ如何、答、今開元錢ヲ度ルニ、實ニ云フ所ノ如シ、但開元錢ノ徑八分ト云フコト、六典通典等ノ唐人ノ書ニ見ユルコト無シ、因テ開元錢ノ徑何ヲ以テカク定メシニカト考ルニ、唐ノ時ノ度量權衡ノ制ハ、其實ハ隋ノ舊ニ沿リタレドモ、漢書律曆志ニヨリテ、黍ヨリ起シシ趣ヲ云ヘバ、錢ヲ鑄ルモ隋ノ制ヲ承ケタルベケレドモ【隋ノ五銖錢ニ、徑重開元錢ト全ク同ジキ者アリ、隋錢ノ事ハ權衡附錄ニ詳ニス】必古法ニ據リテ定メタリトハ云シナラン、古書ニ錢ノ徑ヲ載セシハ、漢書食貨志ニ「大泉五十徑一寸二分貨泉徑一寸」ト見エタルノミナリ、想フニ大泉ハ當五十ノ錢ナレバ、開元錢ハ當一ノ貨泉ニ依リテ、小尺一寸ト定メシナルベシ、【然レドモ貨泉ハ漢ノ一寸ニテ、開元錢ハ唐小尺ノ一寸ナレバ、其大サハ同ジカラズ、譬ヘバ曆代五銖錢ヲ鑄タリシハ、漢ノ制ニヨリタルナレドモ、其重サハ其代代ノ

五銖ニテ、漢ノ五銖錢ノ重サトハ同ジカラヌガ如シ、(權衡攷附錄ニ詳ニス) 按ズルニ後ニ乾元當十錢ヲ小尺一寸二分ニ作リシハ、大泉五十ノ徑ニ據リタルニヤ】然ルニ石晉ノ劉昫等唐書ヲ作リシ時ハ【所謂舊唐書ナリ】小尺ハ廢シテ、年久シケレバ此錢ノ徑ヲ載セントテ、當時用フル大尺ニテ度リシニ、八分餘ナリシカドモ【小尺ノ一寸ヲ大尺ニテ度レバ、八分三氂三豪三絲三忽不盡ナリ】史ニ其奇零ヲ記スベキナラネバ、大凡ニ八分トハ記シケルナリ、【宋ノ歐陽修等ガ新唐書ニモ、八分トアルハ、舊書ノ文ヲ用ヒタルナリ、按ズルニ宋ノ陳言ガ三因方ニ「唐武德年鑄二開元錢一、八分當二十一錢半一ナレバ、得二一尺一、排レテ錢比ブルニレ之ヲ十二箇ニシテ已及二一尺一」、ト云ヘルモ、開元錢ノ徑八分ナラバ、十二枚半ニテ一尺ナルベキニ、八分三氂三豪三絲三忽不盡ナル故ニ、十二枚ニテ一尺ナルヲ疑ヒシナリ、然レドモ宋ノ時ノ尺ハ、唐大尺ヨリハ少シク謟長シタレバ、(曲尺ノ一尺〇二分一氂五豪二絲ナリ、附錄ニ詳ニス)「已及二一尺一」トハ云ヒシナリ、(「已及」トハ少シク足ラヌヲ云ヘリ) 今本ノ三因方ニ十二箇ヲ十一箇ニ誤レリ、宋尺ニ十一箇ヲ排スレバ、徑九分二氂八豪六絲五忽餘ナリ、サル開元錢アルコト無ケレバ、轉寫ノ誤ナルコト疑無シ】譬ヘバ唐ノ封演ガ錢譜ニ【此書今傳ハラズ、宋ノ洪遵ガ泉志ニ、舊譜ト引キシニ依レリ、下ニ引キタルモ皆同ジ、泉志ニ舊譜ト引キタル條條ヲ、事林廣記ニハ「封演曰、」ト云ヒ、泉志ニ「封演曰」トアルヲバ、却テ舊譜ト載セタルニテ、舊譜トアルハ封演ガ錢譜ナルコトヲ知レリ、封演ハ唐書藝文志ニ、封演古今年號錄ヲ載セテ天寶ノ末ノ進士ト云ヘリ、又今世封氏聞見記アリ、朝散大夫吏部郎中兼御史中丞封

演ト題ス、湍ノ四庫全書提要ニ、聞見記中ノ語ニヨリテ、天寶ノ時大學生ニテ、德宗ノ朝ニ是官ニ終リシ人ナリト云ヘリ】乾元重輪錢ヲ徑一寸四分トアリ、【小尺ニテ度リシナリ、今本ノ泉志ニ二寸四分トアルハ、轉寫ノ誤ナリ】小尺ノ一寸四分ナラバ、大尺ニテハ一寸一分六釐六豪六絲六忽不盡ナルニ、唐書ニ此錢ノ徑ヲ一寸二分【大尺ナリ】ト云ヘルモ、大凡ニ記シタルコト是ト同ジ、又唐書ニ乾元當十錢ヲ徑寸【大尺ナリ】トアルニ、封演ハ徑一寸二分【小尺ナリ】ト云ヘリ、封氏ガ度ル所皆小尺ナルヲ以テ見レバ【封氏ガ前代ノ古錢ヲ度リシモ、皆小尺ナリ、タダ永安五銖徑九分常平五銖徑八分ト云ヒシモノ、小尺ニアラズ、疑ラクハ誤アルベシ、按ズルニ唐ニテハ大尺ヲ常用トシタレドモ、錢ノ徑ヲ定ムルハ、鍾律冠冕ヲ度ル類ニテ、俗尺ヲ用フベキニ非ザル故ニ、小尺ニテ定メタルモノナレバ、封氏モ小尺ニテ度リシナリ、又按ズルニ藤貞幹前ニ大寶勅書ノ璽印ヲ考ヘシ時ハ、晉前尺ヲ七寸四分弱（集古圖）或ハ七寸六分（金石遺文）トシタリシガ、後ニ其說ヲ改メテ封演ガ云フ所ノ度ヲ晉前尺ナリト云ヒシハ（好古日錄）誤ナリ、是ハ封氏ガ譜ヲ泉志ニ舊譜ト引キタレバ、深クモ考ヘズシテイト古キ書ナラント思ヒ、又貞幹ハ曲尺ヲ唐小尺トシタレバ、舊譜ノ尺度ハ曲尺ノ八寸〇八釐三三不盡（唐小尺ナリ）ナレバ、曲尺ヨリ短キ故ニ晉前尺ナリト思ヒ誤リシモノナリ、貞幹ガ晉前尺ハ詳ニ附錄ニ辨ジタリ】封氏ガ錢譜ニハ、開元錢ノ徑モ必一寸トゾ有リツラン【洪遵コレヲ引カズシテ唐書ヲ引キショリ、此事遂ニ逸シタリ、凡同ジコトヲ古書ニ云ヒシト、後ノモノニ記シタルトハ、後ノ方必委シキモノ故ニ、ソレニ從フ人多シ、史記ト漢書ト同ジ

コトヲ載セタルハ、史記ヲ引カズシテ漢書ヲ引キ、唐書ハ舊書ヲ捨テ新書ヲ取リ、皇國ノ書ニテモ古事記ヲ置テ、日本紀ニ從フ類ナリ、洪遵ガ封演錢譜ニヨラズシテ、唐書ヲ引キシモ是ニ同ジ、然レドモ後ノモノハ其實ヲ失ヘルコト多シ、心シテ引クベキナリ】今尺八ヨリ起シタル度ヲ以テ、開元錢ヲ度レバ正ニ一寸ナリ、又乾元錢ノ大ナル者ヲ撰ビテ度レバ、當十錢ハ一寸二分、重輪錢ハ一寸四分ニテ皆封氏ガ云フ所ニ合ヘリ、【曲尺ヲ大尺トシテ小尺ヲ起シ、ソレニテ開元錢ヲ度レバ、九分七氂有奇、乾元當十錢ハ一寸一分七氂四豪重輪錢ハ一寸三分七釐九豪六絲四忽ナレバ、今ノ曲尺ノ稍長ナルコトヲ知ルベシ】然ラバ唐書ニ開元錢ノ徑八分トアルヲ以テ、尺八ニテ起シシ大尺ヲ疑フベカラズ

或人又難ジテ曰、唐ノ諸錢ハ小尺ニテ造リシニ、唐書ヲ作リシ時ハ大尺ヲノミ用ヒシ代ナレバ、大尺ニテ度リ史ニハ奇零ヲ捨テ記シシコトサモアルベシ、然ルニ唐書ニ乾封泉寶錢徑一寸トアリ、【乾字平聲ニ讀ムベシ「古寒反、音干燥也」ト訓ズ、字ノ如ク音虔ト讀ムハ誤ナリ】コノ錢今世傳ハレルヲ度リ試ムルニ、最大樣ナル者曲尺八分七氂ニ過ギズ、今起シシ大尺ニテ度リテモ九分弱ナリ、開元錢・乾元錢等ノ三氂餘ノ强弱ハ、大凡ニモ記スベシ、是ハ一分餘ノ違アレバ、大凡ニ一寸ト記シタリトハ云ヒ難シ、如何、答、此錢ノ事、封演ガ錢譜ノ文傳ハラザレバ、其定メシ徑知ルベカラザレドモ、開元錢ノ十ニ當テタレバ、唐書ニ徑一寸【大尺】ト云フサモアルベキニ似タリ、【乾元當十錢モ徑大尺ノ一寸ナリ】然ルニ今傳ハルモノ、曲尺八分七釐ニ過ギザルコト云ハレタル如シ、按ズルニ乾元ノ當十錢・重輪錢、共ニ世ニ多ク傳

ハレドモ、皆徑八分有奇ニシテ、唐書ニ所謂徑一寸許ノ當十錢ハ、纔ニ五品、徑一寸二分弱ノ重輪錢ハ三品ヲ見シノミ、況乾封錢ハ僅ニ一年ガ間通行セシカバ、鑄タリシ錢多カラズ、今見ル所薄小ナル者ヲ數ヘテモ、二三十品ニ過ギザレバ、初鑄錢ノ今傳ハラヌニヤトモ思ハルレド、一寸ト定メタル錢ノ兩歲ノ程ニ九分弱ニ減ズルマデニハ至ルベカラズ、又唐書ヲ考ルニ、開元錢ハ重二銖四絫【新唐書ニ四參トアルハ字ノ形似タルヨリ誤リシナリ】乾封錢ハ重二銖六絫トアリ【新舊書共ニ六分トアルモ誤ナリ、抑開元錢ノ條ニハ、參ニ作リ、ココニハ分ニ作リシハ、絫字常ニ多ク用ヒザル字ナレバ、轉寫スル時ニ誤リシモノナルベシ、按ズルニ禮記儒行篇ノ正義ニ、十黍爲レ參、十參爲レ銖トアルモ、絫字ヲ譌シナリ、又宋ノ沈括ガ夢溪筆談ニ「今蜀部ニモ亦以二十參一爲二一銖一、參乃古之絫字」ト云ヘリ、是モ「以二十絫一爲二一銖一、絫乃古累字」トアリシヲ寫シ誤リタルナラン、說文「絫ニハ增也」トモ、十黍重也トモ注シ、纍ハ「綴ヲ得レ理也」トモ「大索也」ニ「(卽縲紲ノ字ナリ)トモ注シテ別字ナルヲ、後世ハ纍ヲ借リテ、增絫ノ字トシ(省テ累ニ作ル)十黍ノ重サヲノミ絫ト云ヒシ故ニ絫乃古之累字ト云ヘルナルベシ】今稱ルニ開元錢ハ重一匁、乾封錢ハ重一匁餘、最重キハ一匁一分ニ餘ル者アリ、【匁ハ泉字ノ草書ナリ、錢泉字通用スル故ニ、權衡ノ名ノ錢ヲ俗多ク匁ニ作ル、今是ニ從ヒタルハ錢貨ノ字ニ分タン爲ナリ】二銖四絫ヲ一匁トスレバ、二銖六絫ハ一匁〇八氂三豪二絲五忽ナリ、然ラバ今傳ハル乾封錢ハ後鑄薄小ニナリシモノニ非ズ、【舊唐書ニ、「乾封元年封レスル岳ヲ之後、改テ造ル新錢ヲ、文ヲ曰二乾-封泉-寶一、仍與二舊錢一並-行、新-錢ノ一文當二舊-錢

之十三、初開元錢俗ニ謂ニ之開通元寶ニ及レ鑄ニ新錢ニ乃同ニ流俗ニ、乾ノ字在レ上、封ノ字在レ左ニ、尋ニ以ニ錢文之誤ヲ、又以ニ改鑄ニ商賈不レ通米帛增レシテハ價乃議シテ却用ニ舊錢ヲ」ト云ヘリ、舊錢トハ開元錢ヲ云フ、按ズルニ錢文ノ誤ノミナラバ、封字ヲ下ニ置キ、泉字ヲ左ニ置テ、鑄改メテアルベキニ、商賈通ゼズ、米帛價ヲ增シタリシハ、二銖六絫ノ錢ヲ二銖四絫ノ錢ノ十ニ當テテ通用セシニヨリ、民ノ肯ハザリシナレバ、此錢ヲバ止メテモトノ開元錢ヲノミ用ヒシナリ、是ニテモ乾封錢ノ大ナラザリシヲ知ルベシ」モシ一匁一分許ノ錢ヲ徑一寸ニ作ラバ、至テ薄ケレバ決シテ然ルニハアラズ、【乾元當十錢ハ、徑一寸（大尺）重五銖ナリ】疑フラクハ劉昫等乾元當十錢ノ徑一寸ナルヲ以テ【乾元當十錢ハ乾封錢ノ通用セザリシニヨリテ民ノ肯フベク重大ニハ作リシナルベシ】乾封錢モ當十ナレバ同ジ大サナラント思ヒテ、推アテニ一寸トハ書シナルベシ、【史ヲ修ルハ其事洪纂ナレバ、月日ノ間ノ事ヲ忘レタルモ多キモノナリ】サレバ此乾封錢ノ徑ヲ一寸ト云ヒシハ、尺度ノ證トハナシ難シ

本朝度攷　終

皇國ニテ量ヲ用ヒシコト、古ニ見ユルコト無シ、日本紀ノ顯宗天皇ノ二年ノ末ニ「是時天下安平、民無徭
役、歲比登稔、百姓殷富、稻斛銀錢一文、牛馬被野、」トアレドモ、【紀ノ傍訓ニ斛ヲヒトサカト訓メ
リ、拾遺和歌集ニ、行基僧正ノ歌トテ、「百サカニ八十サカソヘテ賜ヘリシ乳房ノ報今日ゾ我ガスル」トア
ル百サカ八十サカモ、百八十斛ニテ、心地觀經ニ、「幼稚之前所飲母乳百八十石、」トアルヲ云ヘルナ
リ、（今本ニ百クサニ八十クサ添ヘテトアルハ誤ナリ、寶物集ニ此歌ヲ載セテ百サカニ八十サカトアルニ從
フベシ） 朝野群載ニ載セタル百度文外記廳中文等ニ、米三坂四坂、マタ百坂四十坂、百坂五十坂
トアルモ、坂字ノ訓ヲ借リテ斛トシタルニテ、百坂四十坂ハ百四十斛、百坂五十坂ハ百五十斛ナリ、後世ノ
語勢ニテハ、百サカ餘リ四十坂ナドイフベキヲ、古ハ百サカ四十サカトヤウニ云ヘリ、譬ヘバ十幾日廿幾日
ヲ、今ハ十日餘リ幾日、廿日餘リ幾日ト云ヘドモ、榮花物語駒競ノ卷ニ、善滋ノ爲政ノ行幸高陽院ニ應製和
歌序ヲ載セタルニ、長月ノトヲカヤウカト云ヒ、源ノ順ノ集ノ庚申ノ夜奉和歌小序ニ、ハツカナヌカノ夜
庚申ニ當レリト云ヒシ、皆是ト同ジ格ナリ、本居氏ノ玉勝間ニ爲政ノ序ニ、トヲカアマリヤウカト云フベキ
ヲ省キテ云ヘルハ、イカガナリト云ヒシハ、此頃ノ書ザマヲ考ヘザリシナリ、按ズルニ斛ヲサカト云ヒシ
ハ、斛ヲ石トモ云フニヨリテ、石字ノ音ヲモテサカト云ヒシニテ、度ノ尺ヲサカト云ヒシト同ジケレバ、

古訓ニアラズ】此頃イマダ西土ノ制度ヲ用ヒザリシ時ナレバ【顯宗天皇ノ二年ハ、南齊ノ武帝ノ永明四年、北魏ノ孝文帝ノ大和十年ニ當レリ】史ヲ修リシ人其御代ノ豐穰ナリシヲ云ハントテ、漢文モテ潤色セシナルベケレバ、證トナシ難シ、【按ズルニ後漢書ノ明帝ノ紀十二年ノ末ニ、是歳天下安平、人無二徭役一、歳比登稔、百姓殷富、粟斛三十、牛羊被レ野、」トアリ、日本紀ノ文ハ是ヲ採リテ、少シ變ヘタルモノナリ、】又按ズルニ此頃銀錢ヲ用ヒシコト佗ニ見エズ、天武天皇十二年四月紀ニ、「壬申詔シテ曰、自レ今以後必用二銅錢一、莫レ用二銀錢一、乙亥詔曰、用二銀錢一莫レ止、」トアレドモ、是ハ同ジ三年ノ紀ニ、「對馬ノ國ノ司守忍海ノ造大國言、銀始出二于當國一、卽貢上、」ト云ヒ、「凡銀ノ有二倭國一、初出二于此時一」ト云ヒタレバ、天武紀ノ銀錢ハ對馬ヨリ銀ノ出シ後ノ事ナリ、然ラバ天武紀ニモ銀錢アリ、又和銅元年ニモ銀錢ヲ鑄タリシ故（續日本紀ニ見ユ）古モ有リシモノト思ヒテ記シシナラン、其實ハ顯宗天皇ノ御代ニ、銀錢ヲ用ヒシ事ハ無カリシナリ、是ニテ此紀ニ斛トアルモ證トナシ難キヲ知ルベシ】又欽明天皇ノ十二年ニ、麥種千斛ヲ百濟王ニ賜ヒシコト見エタレバ【梁ノ簡文帝ノ大寶二年、西魏ノ文帝ノ大統十七年、北齊ノ文宣帝ノ天保二年ニ當レリ】此頃既ニ量ヲ用ヒラレシカトモ思ヘドモイカガアラン疑ハシ、扶桑略記ト一代要記トニハ、「舒明天皇十二年、定二斗升斤兩一」ト云ヘリ、其據リドコロオボツカナケレドモ、推古天皇ノ御時始テ御使ヲ隋ニ遣ハサレシヨリ、相繼ギテ此御代ニモ唐ノ往來有リシカバ【日本紀ニ「推古天皇十五年七月庚戌、大禮小野ノ臣妹子遣二於大唐一、十六年四月、小野ノ臣妹子至レ自二大唐一、卽大唐使人裴世淸下客十二人、從二妹子臣一至二於筑紫一、

八月癸卯、唐客入京、壬子召唐客於朝廷、令奏使旨、九月辛巳、唐客裴世清罷歸、則復以小野妹子
臣爲大使、副于唐客而遣之、是時遣於唐國學生倭漢直福因、奈良譯語惠明、高向漢人玄理、新
漢人大圀、學問僧新漢人日文、南淵漢人請安、志賀漢人慧隱、新漢人廣濟等并八人也、十七年九月小野臣妹
子至自大唐、二十二年六月己卯遣犬上君御田鍬、矢田部造（闕名）於大唐、二十三年七月、犬
上君御田鍬、矢田部造至自大唐、三十一年七月新羅遣大使奈末智洗爾來朝、是時、大唐學問者
僧惠齊、惠光、及醫惠日、福因等、並從智洗爾等來之、於是、惠日等共奏聞曰、留于唐國學
者、皆學以成業、應喚、且其大唐國者法式備定之珍國也、常須達、舒明天皇二年八月丁酉、以大
仁犬上君三田耜、大仁藥師惠日、遣於大唐、四年八月、大唐遣高表仁送三田耜、是時、學問僧靈
雲僧旻、及勝鳥養新羅送使等從之、十二年十月乙亥大唐學問僧清安、學生高向漢人玄理傳新羅而
至之」ト云ヘリ】西土ノ量法ヲ傳ヘラレシハ誠ニ此御時ニゾ有リツラン、然ラバ孝德天皇ノ大化二年ニ、
一戸ヨリ備米五斗ヲ出スコトヲ定メラレタルヲゾ【是モ日本紀ニ出ヅ、斗字ハコト傍訓セリ】量ノ史ニ見エ
タル始トハスベキ、【其後天智天皇ノ元年ニ、百濟ノ鬼室福信ニ稻種三千斛ヲ賜ヒシコトモ、日本紀ニ見エ
タリ】推古天皇ノ御時ハ隋ヨリ唐初ニ當リ【推古天皇ノ十五年ハ隋ノ煬帝ノ大業三年ニ當リ、十六年ハ大
業四年ニ當リ、廿二年ハ大業十年ニ當リ、廿三年ハ大業十一年ニ當リ、卅一年ニハ隋既ニ亡ビテ唐ノ高祖ノ
武德六年ニ當レリ】舒明天皇・孝德天皇ノ御時モ、唐ノ世ニ當レバ【舒明天皇ノ二年ハ唐ノ太宗ノ貞觀四年

ニ當リ、四年ハ貞觀六年ニ當リ、十二年ハ貞觀十四年ニ當リ、孝德天皇ノ大化二年ハ貞觀二十年ニ當レリ】

唐ノ量ニ依ラレシナラン【サレドモ全ク同ジカラザリシコト下ニ辨ズ】

唐ノ量ヲ考ルニ、六典ノ金部ノ職掌ニ、「凡量、以秬黍中者容一千二百一爲龠、二龠爲合、十合爲升、十升爲斗、三斗爲大斗一斗、十斗爲斛、」トアリ、【通典賦稅部舊唐書同ジ、タ秬舊唐書ニ龠ヲ籥ニ作ル、說文ニ龠ハ樂之竹管ト注シ、籥ハ書僮竹笘也ト注シテ、二字同ジカラズ、然ルヲ唐書ニ籥ニ作リシハ、龠ハ竹ニテ作リタルモノ故ニ、俗ニ竹冠ヲ加ヘショリ、書僮竹笘ノ字ト混ジタルナリ、諸ノ俗字、偏傍ヲ增シ、或ハ偏傍ヲ變ジテ佗字ト混ズル者多シ、經典管龠ノ字、皆籥ニ作リタレドモ、其實ハ非ナリ、按ズルニ漢書律曆志ニ、量者龠合升斗斛也、所以量多少也、本起黃鐘之龠、用度數審其容、以子穀秬黍中者千二百實其籥、以井水準其槩、合龠爲合、十合爲升、十升爲斗、十斗爲斛、而五量嘉矣」トアリ、唐令ハ是ニ本ヅキシモノナリ、唐ノ小量ハ隋量ヲ承ケタルナレバ、漢書ニ比ブレバ少シク同ジカラザレドモ、漢以來受來リシ量ナレバ、漢書ノ文ヲ引キタルナリ】「容一千二百爲龠」ト云フハ、龠ハ本黃鐘管ヲ云フ、【說文ニ龠樂之竹管トアル、是ナリ】其管ニ秬黍千二百粒ヲ容ルヲ以テ、秬黍千二百粒ヲ容ル量ヲ卽龠ト名ヅケシナリ【龠ノ事附錄ニ詳ニス】龠ノ積八百一十分ナリ、【上下四旁均ク、一分ノモノ八百一十箇ヲ容ルヲ云フ】二龠ヲ合トス、其積一千六百二十分、十合ヲ升トス、其積一萬六千二百分、十升ヲ斗トス、其積一百六十二寸、【十六萬二千分ヲ容ルナリ、積ハ一千分ヲ一寸トス、上下四旁均ク一分ノモノ一千ヲ累ヌレバ、上下四旁均ク一

寸ナレバナリ、故ニ是ヲ一百六十二寸ト云フ】十斗ヲ斛トス、其積一千六百二十寸ナリ、【龠合升斗斛ノ積
數、王莽ガ嘉量ノ銘ニ出ヅ（圖モ銘名モ附錄ニ載ス）是漢ノ斛法ニテ、唐ニテモ此法ニ據リシナリ】此一千
六百二十寸ヲ容ル斛ヲ作ルニハ、方一尺、深一尺六寸二分ナリ、是ヲ唐ノ小尺ニテ作リ、曲尺ニテ度レバ
方八寸〇八釐三豪三絲三忽不盡、深一尺三寸〇九釐五豪ナリ、此容受ヲ算スルニ、面冪曲尺六十五寸三十
四分〇二釐七十七豪七十七絲七十七忽不盡【方面八寸〇八釐三豪三絲三忽不盡ヲ自乘シテ是ヲ得、九章算術
方田ノ術ニ「廣從步數相乘得積步」注ニ「此積謂田冪、凡廣從相乘謂之冪」ト云ヘリ、廣ノ數ト從
ノ數ト同ジカラザレバ、何レニテモ一ヲ實トシ一ヲ法トシテ乘ズレバ冪ノ數ヲ得、又廣從トモニ同ジ數ナ
レバ自乘シテ冪ノ數ヲ得ルナリ、孫子算經ノ某局五曹算經夏侯陽算經方田ノ術モ皆是ト同ジ、面冪ハ百分
ヲ一寸トス、面冪トハ上下四旁均ク一分ノ物ヲ其計ルベキ器ノ面ニ一通並ベタルヲ云フ、又平積トモ名ヅ
ク、冪ノ字本ト冖ニ作ル、說文ニ覆也ト注ス、方一分ノ物ヲ器ノ面ニ一通リ並ベタルハ物ニテ器ヲ覆ヒタルガ
如クナレバ、面冖ト云フ、然ルニ其字畫少クシテ書難キヲ以テ、冪ノ字ヲ借用フ、古音同ジケレバナリ、
王莽ガ嘉量ノ銘ニ、冪何寸何分トアルハ是ナルヲ、西淸古鑑ニ寬ト釋シタルハ誤ナリ、後ニ巾ニ從ヒテ幎ニ
作ル、說文ニ「幎幔也、周禮有幎人」ト云ヘル是ナリ、今本ノ周禮ニハ、冪人ニ作ル、注ニ「以巾覆物
曰冪」トアリ、算家ニモ此字ヲ用フ、然レバ冖ハ正字、冪ハ假借字、幎ハ今字ニテ冪ハ幎ノ異文ナリ、
或ハ羃冪ナド作ルハ譌ナリ】積八百五十五寸六百三十〇分九百三十七釐七豪五百豪面冪ヲ置キ深サヲ乘ジテ

是ヲ得、九章算術商功ノ方堡壔ヲ計ル術ニ、「方自乘以レ高乘レ之卽積尺」ト云ヒシ是ナリ、孫子五曹夏侯陽ノ方窖ノ術是ト同ジ、積又體積トモ云フ、體積ハ千寸ヲ一寸トシテ、平積ノ百分ヲ寸トスルトハ同ジカラザルコト、既ニ上文ニ云ヘリ】此積ヲ今斛法六千四百五十五寸【徑四寸九分、深二寸七分ヲ升トス、所謂京升ナリ、此積ノ事下文ニ詳ニス】ニテ除スレバ、一三二五五三二有奇ヲ得、是ニテ量ヲ起セバ

斛　今一斗三升二合五勺五撮餘

斗　今一升三合二勺五撮餘

升　今一合三勺二撮餘

合　今一勺三撮餘

龠　今六撮餘【舊唐書食貨志ニ「量ノ制、公私不レ用レ龠、合内之分、則有二抄撮之細一」ト云ヘリ、然ラバ漢書ニヨリテ龠ヲ云ヒタレドモ、其實ハ龠ヲバ用ヒズシテ、合ヨリ内ヲバ勺撮抄ナドト量リシナリ、孫子算經・夏侯陽算經ニ、「十圭爲レ撮、十撮爲レ抄、十抄爲レ勺、十勺爲レ合」トアルモノ是ナリ、隋書律曆志ニ、孫子算術ヲ引キタルニハ、「十圭爲レ抄、十抄爲レ撮、十撮爲レ勺、十勺爲レ合」トアリ、梁ノ陶弘景モ「十撮爲二一勺一、十勺爲二一合一」ト云ヒシコト、證類本草序例ニ見ユ、皇國ニテモ、一勺ヲ十分シタルヲ一撮ト云フ、延喜式ニ何合何勺何撮ト量リ、拾芥抄ニモ、「十撮爲レ勺、十勺爲レ合」ト云ヘリ、然ラバ孫子算經・夏侯陽算經等ノ今本ハ、誤リタルニヤ、又今本

千金方ニ、陶弘景ガ言ヲ載セテ「兩勻爲ㇾ合一」トアルハ、漢書ニ「兩龠爲ㇾ合一」ト云ヒシヲ誤リ混ジタルナリ、古本ニハ「十勻爲二一合一」トアルコト、本草序例ニ載セタルト同ジ、按ズルニ今俗、撮ヲ才ニ作リテ、音款ト云フ、是ハ古人撮ヲ省キテ才ト書キシヲ、撮ト才ト音ノ近ケレバ、才字ヲ假借シタル者ト思ヒ誤リシナラン、撮ヲ省キテ才ニ作リシハ、有職家ニ襆頭ノ襆字ヲ省キテ才ニ作リ、（唐俗書襆字從ㇾ手作ㇾ撲）算術家ニ寡字ヲ省キ巾ニ作ルガ如シ、常用ノ字ナル故省テ簡易ニ從ヒシモノナリ、埃嚢抄ニモ十撮ヲ一勺トシテ、撮ト云フヲ作（ツクリ）ヲ略シテ、籌計ヲ用フル與、抄物ニ或ハ作ヲ書キ、或ハ籌ヲ用ルコト常ノ習也トアリ【作トハ字ノ右旁ヲ云ヒ、籌トハ字ノ左旁ヲ云フ俗語ナリ】

コレ小量ニテ、唐ノ貞觀中、張文收ガ作リシ斛銘ニ、「依ニ新令累黍尺一定ㇾ律、校ㇾ龠、成ニ茲嘉量一」ト云ヒ、【全文度攷ニ引リ】「四分律行事抄ニ「唐朝文軌無ㇾ二、至ㇾ論ㇾ用ㇾ尺、五種不ㇾ同、必以ニ御用古尺一以定ニ宮私衡量一、無ニ事不ㇾ平、」ト云ヒシハ、此量ニテ【五種尺ノ事、度攷附錄ニ詳ニス、此ニ云フ御用古尺トハ、唐小尺ヲ云ヘルナリ】湯藥ヲ合スルニハ是ヲ用ヒタリ、【湯藥ヲ合スルニハ、小量ヲ用フルコト、六典ニ見ユ、】度攷ニ引リヌ宋ノ林億ガ校ニ正千金方一凡例ニ、「今之此書當ㇾ用ニ三兩爲ニ一兩一、三升爲ニ一升一、之則、世之妄者乃謂古今之人大小有ㇾ異、所ㇾ以古人服ニ藥劑一多、無稽之言莫ㇾ此爲ㇾ甚、今之用ㇾ藥定以ニ三兩爲ニ今一兩一、三升爲ニ今一升一、」ト云ヒシヘ、千金方ノ量ハ小量ニテ宋ノ常用量ハ大量ナレバ千金方ニ三升ト

アルハ、宋ノ一升ナルヲ云ヘルナリ】大量ハ是ヲ三倍シタレバ【三斗ヲ大一斗トスルコト、唐令ノ文上ニ引リ】

斛【積　唐小尺四千八百六十寸】　今三斗九升七合六勺六撮弱

斗【積　唐小尺四百八十六寸】　今三升九合七勺六撮餘

升【積　唐小尺四十八寸六百分】　今三合九勺七撮餘

合【積　唐小尺四寸八百六十分】　今四勺弱

房玄齢ガ管子注【國蓄篇】ニ「古之石、準二今之三斗三升三合一」ト云ヒ、四分律行事抄ニ、「唐朝雜令用二姫周三斗一、爲二一斗一、今此俗中例用二唐斗一」ト云ヒシモ、是ニテ【古ト云ヒ姫周斗ト云ヒシハ小量ニテ、今ト云ヒ唐斗ト云ヒシハ大量ナリ】湯藥ヲ合スル外ハ、悉ク此大量ヲ用ヒシナリ

或人難ジテ曰、唐ノ王孝通ガ緝古算經ニ、斛法二尺五寸ト云ヒ、【二尺五寸ハ一升ノ積ニテ、一斛ノ積ハ二千五百寸ナリ】元ノ朱世傑ガ算學啓蒙ニ、元ノ斛法ノ二尺五寸ナルヲ「依二唐時ノ斛法一」ト云ヒ、又明ノ斛法モ二尺五寸ナルヲ律學新說ニ與二唐制一大同小異ト云ヘリ、【元明ノ斛法ノ事ハ附錄ニ詳ニス】然ラバ一千六百二十寸ハ漢ノ代ノ法ニテ、唐ノ時ハ二尺五寸ノ法ヲ用ヒシナラン、然ルニ今一千六百二十寸ヲ以テ唐量ヲ起シタルハ如何、答、二尺五寸ノ斛法唐ノ時ニ用ヒシヲ聞カズ、王孝通ハ舊唐書【律曆志】ニ「武德九年五月二日、按曆ハ算學博士臣王孝通」トアル人ナラン、武德ハ唐ノ初ナレバ、是人始ハ佗

國ノ人ニテ、後ニ唐ニ入リシ人ナルベシ、按ズルニ隋書【律曆志】ニ「齊以古斗一斗五升爲一斗」ト云ヘリ、【齊ハ北齊ナリ、隋書ノ今本ニ、「以古升五升爲一斗」トアルハ、誤ナルコト附錄ニ辨ズ】一千六百二十寸ノ古量ヲ以テ、二尺五寸ノ量ノ一斗ヲ量レバ、一斗五升四合三勺一撮有奇ナレバ、二尺五寸ト云ヒシハ北齊ノ斛法ニテ、「以古斗一斗五升爲一斗」ト云ヒシハ、大凡ニ計リタルモノナラン、然ラバ王孝通ハモト北齊ノ人ニテ、緝古算經ハイマダ北齊ニアリシ時作リシ書ナルベシ、朱世傑ガ元ノ斛法二尺五寸ナルヲ「依唐時斛法」ト云ヒシハ、北齊ノ二尺五寸ノ量、唐ノ時モ、北邊ニハ遺リニ蒙古ニ傳ハリ、元ノ時ニ至リテ世ニ普ク用ヒシヲ、唐ノ法ト云ヒ傳ヘタルカ、又ハ緝古算經ニ斛法二尺五寸トアルヲ見テ、王孝通ハ唐人ナレバ、元ノ斛法ハ唐ノ斛法ニ依リタルモノト思ヒシニモアルベシ、又明量ハ元量ヲ承ケタル故ニ、斛法二尺五寸ト云ヘリ、然ルニ其實ハ明ノ量地尺ノ二千九百四十寸ナレバ、【コノ事附錄ニ詳ニス】曲尺ニテハ三千七百五十五寸二百三十分有奇ナルヲ【明ノ量地尺ノ長サ、曲尺ノ一尺〇六分五釐ヲ、再自乘シ、又斛法二千九百四十寸ヲ乘ズレバ此數ヲ得】律呂新說ニ、「今按鐵斛與唐制大同小異」ト云ヒタレドモ、唐ノ大量ノ一斛ノ積ハ唐小尺ノ四千八百六十寸ナレバ、曲尺ニテハ二千五百六十六寸八百九十三分弱ナリ、【唐ノ小尺ノ長サ曲尺ノ八寸〇八釐三三不盡ヲ再自乘シ、又大量ノ斛法四千八百六十寸ヲ乘ズレバ此數ヲ得】然レバ明ノ一石ハ唐ノ一斛四斗六升二合九勺四撮餘ナルヲ、大同小異ト云ヒシモ、朱載堉ガ妄說ナリ【唐ノ時ノ食料ハ日ニ二升ナルニ、(此事下ニ詳ニス)明會

典ニ食料ノ少キモノヲ云ヒタルニハ「監牛醫生無二家力一者月給三斗」トアレバ、日ニ一升ナリ、是ニテモ唐ト明ト量ノ容受同ジカラザリシヲ知ルベシ】唐ノ量ハ秬黍ヨリ起ルト云ヒシコト、又其本漢書ニ據リタルコト皆上ニ云ヘリ、【唐ノ量ハ隋ノ量ヲ受ケタルニテ、其法鐵尺ト漢ノ斛法トニ依リタルモノナレドモ、唐人ハ鐵尺ヲ卽漢尺トセシニヨリ、尺ト斛法ト漢ニ同ジカランニハ、卽漢書ノ黍量ナリトシテ、秬黍ヨリ起シシ趣ニハ記シタルナルベシ】秬黍ヨリ起シシ說ニ從ヒタランニハ、必漢ノ一千六百二十寸ノ法ヲ用ヒシ事疑無シ、又唐ノ時算法ヲ學ブニ用ヒタル九章・孫子・五曹・夏侯陽・張丘建等ノ算經、皆一千六百二十寸ヲ斛法トシタリ、【唐ノ時、是等ノ算經ヲ學ビシコト六典算學博士禮部尙書侍郎考功員外郎ノ職、新唐書選擧志等ニ見ユ】モシ唐ノ時二尺五寸ノ法ヲ用ヒタランニハ、李淳風、劉孝孫等此書トモヲ注釋スル時、【九章算術・孫子算經・五曹算經ノ首ニハ「李淳風等奉レ勅注釋」ト題シ、張丘建算經ノ首ニハ「李淳風等奉レ勅注釋、劉孝孫撰細草」ト題セリ、又唐會要ニ、「永隆元年十二月、太史李淳風進二注釋五曹孫子等十部算經分爲二十卷一」トモ云ヘリ】イカデカ今ノ斛法ハ二尺五寸ト云フコトヲ云ハザルベキ、又宋量ハ唐量ニ沿リタルニ、【此事附錄ニ詳ニス】宋史【律曆志】ニ景祐四年ニ、范鎭ガ上言セシヲ載セタルニモ、今斛方尺、深一尺六寸二分トアレバ、宋ニテモ一千六百二十寸ノ法ヲ用ヒタルニテ【一千六百二十寸ハ小量ノ斛法ナリ、宋ニテハ大量ヲ用ヒタレバ、斛法ハ四千八百六十寸（小尺）ナレドモ、大量ハ小量ヲ三倍シタルモノニテ、其原ハ一千六百二十寸ヨリ定メタレバ、范鎭モカクハ云ヘリシナリ、

今試ニ宋量ヲ一千六百二十寸ヲ三倍シテ、四千八百六十寸トシテ、宋人ノ漢量ヲ按ベシヲ考ルニ、皆今ノ一升一合前後ヲ斗トスルコト（附錄ニ詳ニス）略王莽ガ銅斛ト同ジク、淸人ノ考ヘシ漢量トモ合ヘバ、宋人モ一千六百二十寸三倍ノ量法用ヒシコト明ケシ】唐ノ時二尺五寸ノ斛法ヲ用ヒザリシコト證スベシ、【按ズルニ二尺五寸ハ、モシ唐大尺ヲ以テ唐大量ヲ計リシカトモ思ハルルニヨリ、唐小尺一千六百二十寸、三倍ノ量ヲ大尺ニテ度レバ、小尺（大尺ノ八寸三分三釐三豪三絲三忽不盡）ヲ再自乘シテ大尺ノ六百九十四寸四百四十四分不盡ヲ得、又大量ノ斛法ヲ乘ズレバ、大尺ノ積三千三百七十五寸ニテ、大量ノ一升ハ大尺ノ三十三寸七百五十分ナレバ、二尺五寸ハ大尺ニテ大量ヲ計リシニモアラズ】

本朝ノ雜令ニハ「量十合爲レ升【宋志三升ヲ爲二大升一升一】十升爲レ斗、十斗爲レ斛」トアリ、義解ニ「謂以二秬黍中者容二一千二百一爲レ龠、十龠爲レ合也」、ト云ヘリ、唐雜令ニ、「量ハ以二北方秬黍中者容一二千二百一爲レ龠」、【按ズルニ龠モ侖ノ俗字ナリ、銅侖ナドノ有リシ故、金ニハ從ヒシナルベシ、又斛ノ字ヲモ俗ニ龠ニ作ル、斛ハ門下牡ニテ、金ニテ作ルモノナレバ、金ニ從ヒシナリ、遂ニ二字混ジテ別ツコト無シ】「十龠爲レ合、十合爲レ升、十升爲レ斗、三斗爲二大斗一、十斗爲レ斛」、トアルニ因リ給ヒシナリ、【唐令ノ文唐律疏義ニ引リ、南部新書ニ、開元令ヲ引キタルモ、其文同ジ、タダ龠ヲ龠ニ作リ、斗ヲ㪷ニ作リタリ、龠字ノコトハ上ニ云ヘリ、斗ヲ㪷ニ作リシハ、斗升ノ字形似テ紛レ易キ故ニ、斗ニ其音ノ豆字ヲ加ヘテ升字ニ別チシナリ、升ヲ佗書ニ或ハ𠦃ト書キタルモ、斗字ニ混ゼザラシメントテナリ、員數ノ字ヲ大字ニ書クト同ジ意ナ

リ、大字トハ壹貳參肆伍陸漆捌玖拾等ノ字ヲ云フ】唐令ニ「十龠爲レ合」ト云ヒシハ誤ニテ、六典通典「賦税部」舊唐書等ニ、「二龠爲レ合」トアルヲ正シトスベシ、【漢書ニ「合レ龠爲レ合」トアリテ、龠ヲ二ツ合セタル故ニ、其量ヲ合ト名ヅケシナリ、又王莽ガ嘉量ノ龠モ合モ徑ハ同ジクテ、龠ハ「深五分、積八百一十分、容コト秬如ニ黃鍾ニ」ト云ヒ、合ハ深サ一寸積千六百廿分容ニ二龠ニト云ヒシニテ、合ハ二龠ナルコト疑無シ、故ニ算經トモニモ、斛法ヲ一千六百二十寸トモ、一尺六寸二分トモ云ヘリ、モシ十龠ヲ合トスレバ、斛ハ八千一百寸ナルニ、唐人然量リシコトアルコト無シ、但夏侯陽算經・尙書（舜典）正義・通典（權量條）ナドニ、漢書ヲ引キタルニモ、「十龠爲レ合」トアレバ、唐宋ノ人ノ見タル漢書ニ、十龠ニ作リシ本モアリシナリ、唐令ハ偶ソレニ依リテ十龠トハ書シナルベシ、予ガ藏スル宋ノ元慶二年ニ刻セシ漢書ニモ、呂祖謙ガ十七史詳節ニ引シ漢書ニモ、十龠トアリ、是等ノ本ノ孫胴ナラン、宋ノ阮逸胡瑗ガ皇祐新樂圖記ニ、天聖令ノ文ヲ載セテ、其下ニ「今令文誤作ニ十龠爲一合」ト云ヒタレバ、宋令モ唐令ノ誤ヲ承シト見エタリ、又宋ノ宋祁ガ漢書ノ校書ニ、「合レ龠當レ作ニ十龠ニ」ト云ヒ、宋會要ニ景祐二年李照ガ權量律度式ヲ上リシコトヲ載セテ、「漢志合レ龠爲レ合、照誤云ニ十龠ニ、識者譏レ之」、ト玉海ニ見エタレバ、宋ニテ誤リシ人モ有リシナリ、升斗斛皆十ヲ積テ數ヲ爲セバ、思ヒ誤リテ十龠ヲ合トシタルナルベシ、淸ノ王鳴盛ガ尙書後案ニモ、正義ニ十龠ト引キタル誤ヲ辨ジテ、「漢書合レ龠爲レ合、疏作ニ十龠爲一合ニ誤矣」ト云ヒ、マタ「合レ龠當レ即兩龠ハ、若十龠爲レ合、則一合乃有ニ黍一萬二千ハ、一升有ニ一百二十萬ニ（一升ハ一斗ノ譌ナリ）毋ニャ乃太多ハ、且

一龠容二千二百黍、重十二銖、兩龠爲一兩、則二十四銖也、十六兩爲一斤、若十龠爲合、則一合乃有五兩、一升有五十兩、重三斤零二兩、亦覺太重、即以今市中所用量校之、米一升僅得二斤零三兩、稻米與黍其性輕重未詳、然今之量且當大于古二三倍、若古黍一升重三斤零二兩、則古之量反大于今、甚謬、必無此事」ト云ヘリ、清ノ量ヲ漢ノ量ノ二三倍ト云ヒシコト、又清ノ稱ト漢ノ稱ト同ジカラザルヲ考ヘザリシハ、共ニ誤リタレドモ、十龠ヲ誤トセシハ是ナリ、又按ズルニ説苑、玉海寶典ニモ、「十龠爲合」トアレバ、此誤モ古キコトト見エタリ】然ルニ本朝ニテハ唐令ニ十龠トアルヲ受テ、實ニ十龠ヲ合ト定メ給ヒシナリ、【舒明天皇ノ御時ニ定メ給ヒシ量モ十龠ノ合ニゾアリツラン、モシ二龠ノ合ヲ用ヒラレタランニハ、大寶ノ時御テ誤ナル十龠ノ合ニ定メラルベキニアラズ】是ニヨリテ本朝ノ量ヲ擬セバ

斛【積小尺八千一百寸】今六斗六升二合七勺六撮餘

斗【積小尺八百一十寸】今六升六合二勺七撮餘

升【積小尺八十一寸】今六合六勺三撮弱

合【積小尺八寸一百分】今六勺六撮強

龠【積小尺八百一十分】今六撮餘【倭名類聚抄稱量具ニ龠ヲ載セタレドモ、本朝令ニ合升斗斛ヲ擧ゲテ龠ヲバ載セズ、義解ニ龠ノ事ヲ云ヒタルハ、唐令ニヨリテ、合ノ容受ヲ示シタルニテ、此量アリシニハアラズ、延喜式ニモ何合何勺何撮トアリテ、龠ヲ以テ量リシモノ無シ、龠ハ唐ニテスラ用ヒ

ザリシカバ、マシテ本朝ニテハ用ヒザリシナリ」

是小量ニテ大量ハ是ヲ三倍シタルモノナリ

斛【積小尺二萬四千三百寸】今一石九斗八升八合三勺弱

斗【積小尺二千四百三十寸】今一斗九升八合八勺三撮弱

升【積小尺二百四十三寸】今一升九合八勺八撮強

合【積小尺二十四寸三百分】今一合九勺九撮弱

是大量ナリ、雑令ニ、「凡度レ地量二銀銅穀一者皆用レ大、此外官私悉用二小者一」ト云ヒシハ、此大小量ヲ云ヘルナリ、【銀銅ハ大稱ニテ稱リ、穀ハ大量ニテ量ルヲ云フ、「稱二銀銅一量レ穀」ト云フベキヲ、「量二銀銅穀一」ト書シハ文ヲ省キシナリ】

或人難ジテ曰、唐ニテ令ニハ十龠ヲ云ヒタレドモ、其實ハ二龠ヲ用ヒタルヲ見レバ、本朝ニテモ義解ニハ十龠トアレドモ、實ハ二龠ヲ用ヒタルモ知ルベカラズ、モシ令ノ正文ニ、十龠ト云ハザレバ、十龠ヲ用ヒシトハ定メ難キニ似タリ、然ルヲ本朝ノ小量ヲ十龠大量ヲ三十龠ト定メシハ如何、答、雑令ニ穀ヲバ大量ニテ量ルト云ヘリ【全文上ニ引リ】二龠ヲ合トスレバ、大量ハ六龠ナリ、六龠ノ斛法ハ四百八十六寸、【唐大量ノ條ニ詳ニス】又十龠ヲ合トスレバ、大量ハ三十龠ナリ、三十龠ノ斛法ハ二千四百三十寸ナリ、モシ二龠ヲ小量トシタランニ、穀ヲ量ルニハ六龠大量ノ斛法四百八十六寸ヲ用フベシ、然ルニ撰定

交替式ニ、「天平六年、七道撿稅算計法、東海道以二二千七百寸一爲二斛法一、東山道以二二千八百寸一爲二斛法一、北陸道以二二千八百寸一爲二斛法一、山陰道以二三千二百寸一爲二斛法一、山陽道以二二千七百寸一爲二斛法一、西海道以二三千二百寸一爲二斛法一、南海道以二二千八百寸一爲二斛法一」ト云ヘリ、皇國ノ小量ハ十龠、大量ハ三十龠ナレバ、斛法二千四百三十寸ナルニヨリ、七道行程ノ遠近山川ノ險易ニ從ヒ、各道租稅ノ斛法ヲ增シ、或ハ二千七八百寸トシ【二千四百三十寸ノ斛法ニテ、二千七百寸ハ一斗一升一合一勺一撮一一不盡、二千八百寸ハ一斗一升五合二勺二撮餘ナリ】或ハ三千二百寸トシテ、【三千二百寸ハ一斗三升一合六勺八撮餘ナリ】收メシメシモノナルベシ、今世ノ租稅モ假令バ一俵ヲ四斗ノ定メトスレバ、民ノ收ル所ハ四斗三五升ヲ以テ俵トスルガ如シ、其增ス數ハ國國ニヨリテ同ジカラザレドモ、必四斗ヨリハ多キナリ、然ラバ天平七道ノ斛法ハ租稅ノ斛法ニテ、常用量ノ斛法ニハアラザレドモ、古昔穀ヲ量ルニハ、二千四百三十寸ヲ斛法トスル三十龠ノ大量ヲ用ヒシヲ證スベシ、交替式ニ、「又寶龜七年畿內幷七道撿稅使算計法、委穀、經二十年以上一者、以二二千七百寸一爲二斛法一、糯幷新委不レ經レ年者、以二二千八百寸一爲二斛法一」ト云ヘリ、是ハ新穀古穀糯粟等、其物ノ精麤ニ依ラズ、斛ノ價ヲバ齊シクシテ量ル器ノ積寸ニ差等アラシメシモノナリ、九章算術【商功ノ條】ニ程粟一斛、積二尺七寸、其米一斛、積一尺六寸五分寸之一、其菽荅麻麥一斛皆二尺四寸十分寸之三」、トアリテ、注ニ「此爲下以二精麤一爲レ率而不上レ等二其槩一也」、ト云ヘル類ナリ、ソノ」ニ委穀經二十年以上一者、以二二千七百寸一爲二斛法一、新委不レ經レ年者以二二千八百寸一爲二斛

法二」ト云ヘルニテ是モ三十龠ノ大量二千四百三十寸ヨリ計リシニテ六龠大量ノ四百八十六寸ヨリ計リシニアラザルヲ知ルベシ、【九章ノ率ニ準ズレバ、米ノ斛法二千四百三十寸ナラバ、粟ハ四千〇五十寸ナリ、是ニテハ一斛ノ粟ニテ米六升ヲ得、粟二千九百寸ナラバ、米七斗一升九合七勺餘ヲ得ベシ、今試ムルニ一斛ノ粟ノ皮ヲ去レバ、多キハ米五斗ヲ得、少キハ四斗餘ヲ得ルナリ、然ラバ粟斛四千八百寸許ニ非レバ、二千四百三十寸ノ一斛ノ米ヲ得ベカラズ、若ニ百九十寸ノ粟ニテハ、米ヲ得ルコト六斗許ナレバ、寶龜ノ制ニ、粟穀二千九百寸ト云ヒシハ疑ハシ】是ニ據レバ、大寶ノ時ハ十龠ヲ小量トシ三十龠ヲ大量トセラレシコト明ナリ

或人又難ジテ曰、令ノ制三十龠ヲ用ヒシコトハ命ヲ聞リ、然ルニ延喜ノ雜式ニ、「凡公私運レ米五斗爲レ俵、仍用二三俵一爲レ駄一」ト云ヘリ、雜式ニマタ「度量權衡者官私悉用レ大、但測二景合一レ藥則用二小者一」ト云ヘバ、コノ五斗モ大量ニテ量リシコト知ルベシ、三十龠ヲ大量トスレバ五斗ハ今ノ九斗九升四合強ナレバ、俵トスルモ人力擧ルコト能ハズ、三俵ニテハ今ノ二石九斗八升二合餘、今ノ一升ヲ四百匁トシテ計レバ、其重サ百十九貫三百匁許ナレバ、駄トセンニ馬力堪フベカラズ、然ラバ運米ノ五斗ハ三十龠ノ量ニハアラデ六龠ノ大量ヲ用ヒシニハアラザルニヤ、答、和銅六年ニ度量權衡皆大ヲ用フベキ制ニ改ラレテヨリ、【此事詳ニ度攷ニ辨ゼリ】度衡ハ大ヲ用ヒタレドモ、本朝ノ大量ハ三十龠ナレバ、大ニ過ギテ不便ナリシニヨリ、市中ニ穀ヲ量ルニモ十龠ノ小量ヲノミ用ヒシナルベシ、【モシ大寶ノ小量二龠大量六龠

ナランニハ大量ヲ用ヒテアルベキニ、大量ハ三十龠ナリシ故、大ニ過ギテ不便トハセシナリ】江談抄ニ、嵯峨天皇ノ御時ノ落書ニ冂口月八三トアルハ上ヨリ下マデ竪書ヲ通セバ、市中用二小斗一ト讀ムベキコトヲ載セタルナリ、是時官ニテハ大量ヲ用ヒ、民間ニテハ小量ヲ用ヒシカバ頗ハシキニヨリテ、上下通ジテ小量ヲ用ヒマホシキヲ諷シタルナラン、【按ズルニ事文類聚ニ李用晦ガ芝田錄ヲ引テ、「長興中有レ人、雷震而死、背上粉書云、市中用二小斗一」ト云ヘリ、然ラバ此市中用小斗ノ落書アリシト云フハ、唐ノ故事ニ依リテ作リシ話ナルモ知ルベカラザレドモ、大斗ヲ便トセザリシコトノ有リシヨリ、カカル事ヲ思ヒ寄リテ附會セシナルベシ】カク大量ヲ不便トセシカバ、後遂ニ官ニテモ十龠ノ小量ヲノミ用ヒラレ、【按ズルニ延曆二十三年ニ上リシ太神宮儀式帳ニ載セタル食料米、既ニ十龠ノ量ニテ計リタリ、(下ニ詳ニス)然ラバ江談抄ニ嵯峨天皇ノ御時ト云ヒシハ傳聞ノ誤ニテ、十龠ノ量ヲ官ニテモ用ヒラレシハ、桓武天皇ノ御時カ、又ハソレヨリ前ノ事ナルベシ】延喜ノ時モソレニ從ラレシナルベシ、十龠ノ量ニテ計レバ、五斗ハ今ノ三斗三升一合餘ニテ、今ノ俵ト略近ク、三俵ハ今ノ九斗九升四合餘、其重サ二十九貫七百匁餘ナレバ、佗ノ駄率トモ甚遠カラズ、【駄率ノコトハ權衡攷ニ詳ニス】モシ唐量ト同ジク三龠ヲ小量トシ、六龠ヲ大量トシテ大量ノ五斗ヲ計レバ、今ノ一斗九升八合八勺餘ナリ、俵トセンニ甚少キニアラズヤ、其三俵ハ今ノ五斗九升六合餘ナリ、其重サ二十三貫八百匁餘ナリ、駄トセンニ甚輕キニアラズヤ、然ラバ式ニ運米ヲ計リシハ、十龠ヲ用ヒシニテ三十龠ニモアラズ、六龠ニモアラズ、又賦役令ニ載セタル謂

物ハ、小量小稱ニテ計リシヲ、式ニテハ度量衡皆大ヲ用フル定ナレバ、主計式ニ載セタル調物ノ斤兩ニテ稱リシ數ハ、概令ニ載セシ三ノ一ナルニ、【令ニ三十斤トアルヲ、式ニハ十斤ト云ヘリ、令ノ斤ハ五十三匁三分三毫不盡ニテ、式ノ斤ハ百六十匁ナレバ、令ニ三十斤ト云フモ、式ニ十斤ト云フモ、其實ハ同ジク一貫六百匁ナリ】斗升ニテ計リシ物ハ、皆令ノ數ト同ジ、然ラバ主計式ニ載セタルモ、十倫ノ量ナルコト知ルベシ、又古ノ食料、日ニ八合ヲ以テ定トス、延暦ノ豐受大神宮儀式帳九月ノ例ニ、「賜禰宜幷物忌ニ料ノ稻、大物忌一人、御炊物忌一人、御鹽燒物忌一人、幷三人、起正月一日、盡十二月卅日、食料百七十四束七把」【細注人別日一把六分】ト云ヒ、【百七十四束七把ヲ三人ニ分レバ、五十八束二把餘、コレヲ三百六十日ニ分レバ、一日ノ得ル所一把六分有奇ナリ、田令義解ニ「束稻舂得五升」トアルニヨリテ計レバ、一把六分ハ舂テ八合ヲ得ルナリ】貞觀儀式大嘗祭儀ノ食法ニ、「火長仕丁黑米八合、其從者行事五位已上三人、判官主典代二人、所々五位已上二人、人別白米八合、所所判官主典代一人、人別米八合」、ト云ヒ、三代實錄元慶五年三月、出羽國司ノ上言ニ「兵士一千人每人充日粮八合」ト云ヒ、延喜式ニモ四時祭式ニ「白米三斗六升釀酒、女一人、監使一人、十五日食料【三斗六升ヲ三人ニ分レバ、一斗二升ナリ、是ヲ十五日ニ分レバ毎日八合ナリ】大神宮式ニ物忌給年中食料、日各八合【儀式帳ニ云ヒシハ此事ナリ】內匠式ニ、「孛刺雇女單卅人ノ食料、白米二斗四升、【細注人別八合】玄蕃式ニ、「授戒使者傔官人ノ食料、從六人、日各八合」、主稅式ニ「大原野ノ社春日ノ社、神殿守ノ預ノ從粮

米、日八合、大炊式ニ、「鎭魂祭ニ供奉スル諸司ノ人別ニ米八合、中宮ノ鎭魂ノ官人以下雜色以上ノ料人別八合、宴會ノ雜給四位五位幷内命婦大歌別ニ八合、毎日ノ料大舍人四人日各米八合、御火炬童四人ノ料米日ニ三升六合【一本誤ニ一人一升二合、三人各八合】御厨子所膳部六人、日ニ米四升八合【人別ニ八合ナリ】女孺四人日米三升二合、【人別ニ八合ナリ】候スル同所ニ宮主日米八合、藥生日ニ米八合、校書殿ノ大舍人二十人、料一升六合、【是モ人別ニ八合ナリ】ナドアル是ナリ、【人ニヨリテ多ク給フヲバ計ヘズ、大炊式ニ内竪二百人、月料人別日米六合」、トアルハ、内竪ハ兒童ナレバ、大人ノ食料トハ同ジカラズ、六典ニ「丁口日給二升ニ中口一升五合、小口六合」、トアル類ナリ、又主水式ニ、「凡運レ氷駄者以ニ徭丁ニ充レ之、山城國葛野郡德岡氷室一丁輸ニ一駄ヲ、愛宕郡小野栗栖野土坂賢木原並二丁輸ニ一駄ヲ、同郡石前一丁半輸ニ一駄ヲ、大和國山邊郡都介六丁輸ニ一駄ヲ、河内國讃良郡讃良四丁輸ニ一駄ヲ、近江國志賀郡龍花【今本誤テ部花ニ作ル今考正ス】三丁輸ニ一駄ヲ、丹波國桑田郡池邊五丁輸ニ一駄ヲ、率レ駄丁給レ食一人、日米四合、鹽五撮」、ト見エタルハ葛野郡德岡ハ京近キ處ナレドモ、一丁一駄ヲ輸スト定メ、路程ニ準ジテ遠處ヲバ丁數ヲ增シタル故ニ、給ハル米ヲ一丁ニ四合トハ定メラレシナラン、譬ヘバ德岡ハ日ニ二駄ヲ運ブベケレバ、二丁ノ食米八合ヲ得、小野・栗栖野等ハ路稍遠クシテ、日ニ一駄ナラデハ運ビ難ケレバ、二丁ト定メテ是モ八合ヲ得ル類ナリ、主計式ニ、大和國ハ行程一日ナルニ六丁ト云ヒ、河内ノ國モ一日ナルニ、四丁ト云ヒ、近江國ハ上一日下半日ナルニ、三丁ト云ヒ、丹波國モ上一日下半日ナルニ、五丁ト云ヘリ、主計式ニ云ヒシハ、國

府ヨリノ行程ニテ、主水式ニ載セタルハ、各國ノ氷室ヨリ計リシナルベケレバ、里數少シク異ナルコトモアルベシ、サレドモ同國ノコトナレバ、大ナル違ハアルベカラザレバ、此食料ハ常ノ食料トハ同ジカラザルナリ、又臨時祭式ニ「史生官掌神部ノ粮米月別各白米一斗五升」、トアリ、是ニテハ日ニ五合充ナリ、五合ハ今ノ三合三勺一撮餘ナレバ、疑フラクハ一斗五升トアルハ、二斗五升ノ誤ナラン、二斗五升ヲ三十日ニ分レバ、日ニ八合三勺三撮不盡ナリ、又大神宮式ニ、「服部等造二時ノ神衣一」機殿祭ノ條ニ「神部二人料日ニ米一升二合、」トアリ、是ニテハ日ニ六合充ナリ、是モ誤テ各字ヲ脫セシカ、又ハ二升二合トアリシヲ誤リタルニモアルベシ】三十龠量ノ八合ハ今ノ一升五合九勺有奇ナレバ頗多ニ過ギ、六龠量ノ八合ハ今ノ三合一勺八撮強ニテ、一日ノ食ニ充ルニ足ラズ、十龠ノ八合ハ今ノ五合三勺有奇ニテ、今人ノ食料ト略同ジケレバ、是モ十龠ノ合ナルコト疑ヒ無シ、【按ズルニ唐宋ニハ六龠ヲ合トスル故ニ、日食二升ナリ、夏侯陽算經ニ「今有二兵若干人一給レ米二升」、ト云ヒ、六典膳部ノ「職掌凡親王以下常食料各有レ差」トアル注ニ、「毎レ日細白米二升」ト云ヒ、四品五品ノ注ト六品以下ノ注トニモ「毎レ日細米二升」ト云ヒ、都官ノ職掌ニハ「丁口日ニ給二二升一」ト云ヒ、大倉ノ「職掌給二公糧一」トアル注ニモ「丁男給レ米二升」ト云ヒ、唐書食貨志ニ「少壯相均人食レ米二升」ト云ヒ、宋ノ沈括ガ夢溪筆談ニ軍糧ヲ運ブコトヲ云ヒシニ「米六斗人食日二升、二人食レ之十八日ニ盡」ト云ヒ（十八日ハ十五日ノ誤ナルベシ）周密ガ癸辛雜識續集ノ杭城ノ食米ノコトヲ云ヘル條ニモ、「人以二二升一計レ之」、ト云ヘルナド是ナリ、唐ノ

二升ハ今ノ七合九勺五撮餘、宋ノ二升ハ七合六勺六撮餘ナリ、又唐ノ陸龜蒙ガ送二小雞山樵人一歌ノ序ニ「余家大小之口二十、月ニ費二米十斛一」ト云ヘリ、是ニテ一日ノ食ヲ計レバ、一升六合六勺六撮不盡ニシテ、今ノ六合六勺三撮弱ナリ、是ハ陸氏ガ家ノ食糧ヲ云ヒタルナレバ、官ヨリ給ハル糧料トハ同ジカラザルナラン、又宋ノ朱熹ガ職官納南康作講合奏禀事ノ状ニ、「大人一斗五升、小兒七升五合、是一月之糧一」トアリ、今計ルニ一日ノ食大人ハ一升、小兒ハ五合ニテ、一升ハ今ノ三合八勺三撮強、五合ハ今ノ一合九勺一撮餘ナリ、是ハ飢ヲ採フコトヲ云ヒタルナレバ、常ノ食糧トハ同ジカラザルナラン、本朝ニテハ十龠ヲ合トセシ故、唐ノ二升ノ法ニハ從ハズシテ八合ト定メシナルベシ】是等ニ依レバ延喜ノ時ニハ和銅ノ改制ニ從ヒテ、度ハ大尺ヲ常用トシ、稱モ大稱ヲ用ヒシカドモ、量ハ民ノ便トスルニ從ヒテ、穀ヲ量ルニモ十龠ノ小量ヲ用ヒシコト知ラレタリ、【穀ヲ量ルニスラ小量ヲ用ヒタレバ、其他物ヲ量ルニ大量ヲ用ヒザリシコト知ルベシ】然ルニ延喜ノ頃ハ、既ニ久シク大度大稱ヲ常用トシタル代ナレバ、量ヲモ當時用フルハ、大量ゾト思ヒ誤リテ、和銅ノ制ノママニ「度量權衡官私悉用二大者一」トハ書レシナルベシ、【但民部式ノ貢蘇ノ條ニ、小升大升ヲ並ベ載セ、典藥式ニ蜜甘葛煎ヲバ小升ニテ量リ、朴消半夏附子麥門冬葵子山茱萸支子榧子大黄白粟黒大豆練胡麻熟地黄煎乳等ノ藥物ヲバ大升ニテ量リタリ、小升ハ十龠ヲ合トセシ量ニテ、大升ハ三十龠ヲ合トスル量ナルヤ、又ハ常用量ヲ大升ト思ヒ違ヘテ、其三分ノ一ヲ小升ト云ヒシニヤ、詳ナラザレドモ、藥物ヲ常用量ヲ三倍シテ量ルベキ

ナラネバ、大升ト云ヒシモノハ常用量ニテ、小升ト云ヒシハ其三ガ一ナルベシ、又按ズルニ雜式ニ「合レ藥則用二小者一」ト云ヒタレバ、藥物ハ小升ニテ量ルベキニ、皆大升ニテ量リシハ、典藥式ニ載セシハ合藥ノ分量ニアラザレバ、大升ヲ用ヒタルニヤ」

政事要略ニ、弘仁十三年ノ額田國造今足ガ勘文ヲ載セタルニ、舊記ニ、「令前ノ租法以二大方六尺一爲レ歩、歩ノ内得二米一升一」トアルヲ引キテ、此大升也ト注シ、又慶雲三年ノ格ニ、「准レ令以二大方五尺一爲レ歩、歩内得二米一升一」トアルヲ引キテ、此升稱減大升ト注シタリ、又此勘文ヲ釋シタル文ノ内ニハ、十合升。十二合升ト云ヘリ、十合升ハ減大升ニテ、十二合升ハ大升ナルベシ、大升ヲ令ノ大升トスレバ、減大升ハ令ノ大升ノ八合三勺三撮不盡ナリ、然レドモ減大升十二合升ノ事、佗書ニ見エザレバ詳ナラズ、扶桑略記ニ、「後三條院ノ延久四年九月廿九日、斗升法司レ據二用長保例一之由下知」トアリ、【長保ハ一條院ノ年號ナリ、此御時ニモ斗升ノコト制セラレシト聞ユレドモ、其詳ナルコトハ知リ難シ】愚管抄ニ、「後三條院ノ御時、延久ノ宣旨バーカーリ（稱）ト云フ物サダアリテ、今マデソレヲ本ニテ用ヒラルル斗マデ御サダアリテ、斗召シテ参リタレバ、清涼殿ノ庭ニテスーナーゴ（砂）ヲ入レテタメサレ（梭）ケルナンドヲバ、コハ（是）イミジキ（甚）コトカナトテメデ（感）仰グ人モ有リケリ」ト云ヒ、古事談ニ「延久ノ善政ニハ、先器物被レ作ケリ、資仲卿藏人頭ニテ、奉レ行之二云云、升ヲ召寄テ取廻々々、御覽ジテ簾折寸一法ナドササセ給ヒケリ、米ヲバ穀倉院ヨリ召寄テ、於二殿上ノ小庭一貫主以下藏人出納ナド見沙汰シテ、小舍人玉ダスキシテハカリケリ」ト云ヒシハ、卽此時ノ事ナ

リ、此常政ヲ御心ニ入レサセ給ヒケレバ、從前用ヒ來リシ量ノ錯リシヲ、按正シ給ヒシナルベシ

或人難ジテ曰、東鑑ノ建長四年二月宗尊親王鎌倉ニ下向シ給フ條ニ、「白米二石宣旨斗、定大豆三石同斗」マタ「上白米三斗宣旨斗」トアリ、愚管抄ノ宣旨稱ノ名ニ據レバ、宣旨斗モ延久改正ノ量ナルベシ、東鑑ニ殊更ニ宣旨斗ニテ量ルコトヲ云ヒタルヲ見レバ、常用量トハ同ジカラザリシナランヲ、今從來常用ノ量ヲ按正セシモノトシタルハ如何、答、愚管抄古事談ニ云ヒタルヲ合セ考フルニ、延久ニハ用ヒ來リシ量ノ錯リシヲ正シ給ヒシニテ、量法ヲ改メ制シ給ヒシニハアラズ、【愚管抄ニ斗ヲ召シテ、砂ヲ量リテ按サレシトアルニテ、舊量ノ錯否ヲ考ヘラレシコト知ルベシ、古事談ニ先器物被レ作ケリト云ヘルハ、新量ヲ作ラレシ如クニモ聞ユレドモ、升ヲ取廻々々御覽ジテ簾折寸法ナドササセ給ヒケリトアルニヨレバ、是モ舊量ノ内ニテ錯無キヲ撰ビ、ソレニ依リテ新量ヲ定メ造ラレシニテ、量法ヲ改メ給ヒシニハアラズ】從來ノ錯濫ヲ正サレンニハ、令式ノ法ニ依リ給フベケレバ、宣旨斗ハ令式ノ量ト同ジカルベシ、東鑑ニ殊更ニ宣旨斗ト云ヒタルハ、建長ノ頃ハ國國ニ莊園多クシテ、各私量ヲ用ヒ、【文永四年、東寺政所下二丹波國大山庄一トアル文書ニ、「灌頂院能米參斛陸斗庄斗定、西院能米參斛陸斗同斗定」、トアル庄斗、即莊園ノ私量ヲ云フナリ】延久改正ノ量ハ京都ニテノミ用ヒシニ、親王ノ下リ給フ用途ナレバ、此度バカリ京ニテ用フル官量ニテ量リシ故ニ、殊更ニ宣旨斗トハ云ヒシナラン、又厨事類記裏書ニ、「朝餉ノ供御菜何斗宣旨斗」、ト云ヒ、參河僧正行遍ノ參語集ニ、「昔御供米管米ヲ被二下行一宣旨斗定也」、

トアルヲ見レバ、京ニテモ市中宣ニハ旨斗ナラヌ私量ヲ用ヒタリシニヤ

或人問、好古小錄ニ宣旨升ヲ載セテ、「古量有㆘印㆓宣字烙印㆒者㆖、疑是矣」ト云ヘリ、此量宣旨量ナラバ、十龠合ノ十合ノ升ナルヤ、答、宣字烙印量ノ圖、藤貞幹ガ集古圖ニ見ユ、【高橋圖南（宗直）ノ摹本ナリトゾ】外方五寸二分、內方四寸六分、深外二寸五分ト云ヘリ、【內ノ分寸ヲ載セズ】又大竹氏某藏セラルルハ、內方三寸六分有奇、深一寸九分弱、共ニ宣字ノ烙印アリ、【松崎氏コノ量ヲ見タリトテ、其尺寸ヲ慊堂日錄ニ記セリ】按ズルニ甲斐國ニテ今量ノ三升ヲ一升トスル量ヲ用フ、【方七寸五分、深三寸五分】又其四分ノ一ノ量アリ、【今量ノ七合五勺ヲ受ク、方四寸四分八氂、深二寸四分五氂】コノ量ヲ俗ニセンジトモ、或ハ一杯入ハタゴ升トモ云フ、又コレヲ半ニシタル量ヲ【今量ノ三合七勺五撮ヲ受ク、方三寸六分、深一寸九分】ナカラセンジト云ヒ、又コレヲ半ニシタル量ヲ、【今量ノ一合八勺七撮半ヲ受ク、方二寸六分五氂、深一寸七分五氂】小ナカラセンジト云フ、集古圖ニ載セタル量ノ容受ハ、甲斐量ノセンジト略同ク、大竹氏ノ量ハナカラセンジト略同ジケレバ、並ニ甲斐ノ古量ナルベシ、【今ノ甲斐量ニハ、帝字ト玨字トヲ烙印ス】コノ量共ニ宣ノ字アリテ甲斐量ノセンジ、ナカラセンジト容受ノ同キヲ見レバ、甲斐量ノセンジノ名ハ宣ノ字ヲ印シタル量ト云フ義ナルベシ、是モ此量ノ甲斐量ニテ、延久ノ宣旨量ナラヌ一證トスベク、容受モ十龠合ノ升ト同ジカラズ、【十龠合ノ量ヲ以テ集古圖ノ量ヲ計レバ、一升一合一勺六撮餘、大竹氏ノ量ヲ計レバ、五合五勺八撮餘ナリ】又宣旨ニヨリテ量ヲ改正セラレタリトテモ宣字ヲ印ス

ベキニ非レバ、此量決シテ延久ノ宣旨量ニハアラズ、【甲斐量ノ一升ハ、今量ヲ三倍シテ造リシニ似タリ、然レバ古量トテモ元龜天正ヨリ以前ノ制ニハアラジ、又量ニ烙印スルハ近世ノ事ナルニ、宣字量ハ烙印ナレバ、延久ノ量ニ非ルヲ證スベシ】

北條・足利等世ノ權ヲ執リシ際、諸國互ニ凌奪シ、戰爭相續ギシカバ、王綱弛ミ衰ヘ、官量ハ遂ニ絕テ、各莊園ノ私量ヲノミ用ヒ、一定ノ公量ハ無カリシナリ、【今モ國ニヨリテ異ナル量ヲ用フル處アリ、莊園ノ私量ノタマサカ殘レルモノナルベシ、又安東郡專當沙汰文ニ、籾納ノ升ノ寸法ヲ載セ、今モ伊勢ノ神宮ニ種種ノ量ヲ用ヒラルレドモ、神宮ニ限リタル量ニテ、世間公用ノ量ニアラズ、又法隆寺・藥師寺・東大寺等ノ古刹ニ古量ヲ藏スルアリ、是モ其寺寺ニ限リテ用フル私量ニテ、公用ノ量ニハアラズ、文永四年東寺政所下二大山庄一文書ニ「油壹斗二升寺家銅器定」トアルモ、是類ノ量ナルベシ】但今世、今ノ八合許ヲ容ル古量ノ多ク傳ハレルヲ見レバ、其後諸國共ニ今ノ八合許ヲ一升ト爲シナルベシ、【是ハ何レノ時ニ定リシト云フコトハ無クテ、漸漸ニ諸國共ニ如レ此ハナリシナラン、又好古小錄ニ、「民部省斛斗、二月堂十合升・山科升・近江升・東大寺常十合升、其名同ジカラザレドモ、受ル所ハ十合ノ八合升ニテ、雜令ニ所謂十合ヲ升トスト云フ一升ノマスナリ、コノ三升ヲ大升ノ一升トス、民部省斛斗ハ摹本ノミ存スト云ヘリ、按ズルニ十合ノ八合升トハ、今量ノ八合ヲ受ル升ト云フコトナルベシ、民部省斛斗ハ今其圖ヲ見ルニ、烙印アレバ古製ニアラズ、假令古量ニ烙印スルコトアリトテモ、天下通行ノ量ナラバ印スルコトモアルベシ、民部省ノ斛ニ

テノミ用フル量ニ、烙印スル理アランヤ、其圖疑ラクハ大寶勅書ノ類ニテ、好事者ノ贋作ナラン、山科升・近江升ハ莊園ノ量ニテ、二月堂升・東大寺升ハ彼寺寺ノ私量ナルベシ、何レモ公量ニアラザレバ、古量ヲ證スベカラズ、假令私量ナラズトモ、後世ノ量ナルベキニ、貞幹即雜令ノ量ナリト云ヒシハ、據無キ妄言ナリ】又多聞院日記ニ、天正十四年十月九日、奈良中賣買ノ升、中坊ヨリ京番トテ、【番ハ判ノ借字ナルベシ、判トハ判書ノコトナルヲ、後ニハ轉ジテ押字、又ハ印章ノ俗稱トナリ、押字ヲ書判トモ、印章ヲ印判トモ云ヘリ、此頃ヨリ量ニ押字烙印ヲシタリシカバ、再轉シテ量ヲ判ト云フ名ハ起リシナリ、通貨ノ金ニモ、後藤氏ノ花押アルニヨリ、大判小判ト云フト同ジ、然レバ京判トハ、京量ト云ハンガ如シ、今モ武佐判、八合判ナドノ名殘レリ】悉ク鄕中へ被レ出、家每ニ如レ此用意シテ、判ヲ可レ取、代二斗ヅツト云云、【量樣ヲ鄕鄕へ出シ示シテ家每ニ其大サニ傚ヒ造リ、押字焙印ヲ請テ用ヒヨト令シ、其量每ニ米二斗充ヲ出サセシナリ】今迄ノ十合ノ二升入也、【今迄ノ十合トハ二月堂十合升・東大寺常十合升ノ類ヲ云ヘルナラン、然ラバコノ十合トアルハ、今ノ八合量ナリ、十合ノ二升入也トハ、今ノ八合ナル十合升ノ一斗ニ二升增タリト云ヘルナリ、十合升ノ今ノ八合ナルコトハ、好古小錄ニ見エテ上ニ引リ】今出タル一石ト申ハ【今頒行セシ量ノ一石ハト云フコトナリ】前ノ十合ニハ一石二斗在レ之云云、珍敷難義計被二申付一候也トアリ、是ニ據レバ豐臣氏ノ令ニテ、京判トテ、從前ノ常用量ノ一升二合ヲ一升トスル量ヲ用ヒシナリ、【從前ノ常用量ヲ今ノ八合トスレバ、其一升二合ハ今ノ九合六勺ナリ、然ルニ播磨國姬路野里村ノ人、芥田五郎右衛門ガ藏セル

古升アリ、底ニ立五寸壹分、橫五寸壹分分半、フカサ二寸四分分半、但內ノリ也、此寫圖中へ可二相渡一御諚ニ候也、天正十八年正月日トアリ、多聞院日記ニ云ヒシ京番ハ是ナルベシ、此量積六十四寸三百四十九分二百五十釐、今ノ九合九勺七撮弱ヲ容ル、此量ヲ一升二合トシタル量ヲ計レバ、今ノ八合三勺有奇ナリ、然ラバ多聞院日記ノ十合量ハ、其實ハ今ノ八合三勺有奇ヲ受シナルベシ】酒井家ニ參河以來用ヒ來リシト云フ量ヲ傳ヘラル、縱五寸、橫四寸九分、深二寸六分、【積六十三寸七百分、今ノ九合八勺七撮弱ヲ受ク】又昔升アリ、慶長ノ時伏見ニテ作ラレシト云傳フ、方五寸、深二寸五分ナリ、【積六十二寸五百分、今ノ九合六勺八撮強ヲ受ク、昔升ノ名及ビ尺寸積實、輿地記ニ見エタリ、正木政幹ガ三器逢源考ニ、「此量絲ニ竹ヲ伏セテ、弦ハ無カリシ」ト云ヘリ、按ズルニ、集古圖ニ載セタル內侍所量ノ底ニ、元祿元年八月吉日、內橫五寸、內貳立寸五分、御內侍所ト記シタリ、昔升ハ是ニ依ラレシニヤ、然ルニ今曲尺ニテ內侍所量ノ圖ヲ度レバ、縱外五寸四分弱、內四寸七分強、橫外五寸二分、內四寸六分半、高二寸五分強、內ノ圖ヲ載セザレバ深サ知ルベカラザレドモ、板ヲ五分許トスレバ深サ二寸強ナルベシ、皆記ス所ノ尺度ト合ハザルハ余ガ見シ圖、轉寫ノ誤アルニヤ、尚能尋ヌベシ】方四寸九分、深サ二寸七分ノ升ハ、寬永ノ初ニ改メラレシト見エタリ、【中村欽ガ三器攷略ニ、「本朝升昔者有二大小二樣一、其大者制二方尺一容二千六一、而用二其一一、本度內方五寸、而深二寸半、至二近世一官改二其制一、謂升口寬斂、則弊槩之間、易レ容二奸巧一、於レ是約二其旁各一分一、以加二其深二一分一、故新升方四寸九分、而深二寸七分矣」ト云ヘリ、昔トハ天正慶長ノ頃ヲ云フナル

ベシ、大ナル者ヲ内方五寸、深二寸五分トアレバ、大ハ昔升ニテ、小トハ八合ノ量ヲ云フナラン、「至二近世一官改二其制一」トハ、昔升ヲ改メテ方四寸九分、深二寸七分ノ升トセラレシヲ云フナリ、是ヲ改メラレシハ、何レノ年ノコトナルカ詳ナラザレドモ、元和八年ニ刻セシ攝津國武庫郡瓦林ノ人重能ガ算書ニ、京升ハ口五寸四方、深二寸五分トアリ、コレニ據レバ、是時ハイマダ所謂昔升ヲ用ヒシナリ、寛永四年ニ作リシ塵劫記ニハ、京升ノ圖アリテ、ヒロサ四寸九分、フカサ二寸七分トモ、新升ノ法六四八二七トモ云ヒ、今判トモ云ヘリ、又方五寸、深二寸五分ノ升ヲバ、昔升トモ古升トモアリ、是ニ依レバ寛永四年ニハ既ニ其制ヲ改メラレシコト知ルベシ、然ルニ塵劫記ニ、又京判ニテ何ホド、古升ニテ何程ト並ベ計リタリ、古升ヲ停メテ年經タランニハ、サハ云フベカラザレバ、塵劫記ヲ作リシ時新升行ハレテ程無キニ似タリ、故ニ今寛永ノ初年ニ改メラレシトハ定メシナリ、此升ノ積六十四寸八百二十七分ナリ、塵劫記以下ノ算書トモニ、京升ノ法六四八二七トアルハ是ナリ、（新升法トモアリ）然ルニ中根璋ガ律原發揮ニハ、弦ノ積ヲ減ジテ、積六十四寸五百五十分トス、三器逢源考モ其説ニ從フ、今計リ試ルニ、實ニ中根氏ノ云フ所ノ如シ、故ニ今古量ドモノ容受ヲ計ルニモ、皆是ニ依シナリ」其後江戸ノ量不同アリシカバ、寛文九年ニ改正セラレテ、今量ヲ世ニ普ク用フルコトニハナリシナリ、「寛文九年十一月二十九日ニ、江戸升不同有レ之ニ付而京升分量ニ今度改レ之、樽屋藤左衛門所ニ新升有レ之相求向後可レ被レ用候ト命ゼラレタリ」

本朝量攷　終

本朝權衡攷

皇國ニテ權衡ノコトノ見エタルハ、新撰姓氏錄ニ、「商長ノ首ハ上毛野同氏多奇波世之後也」ト、【多奇波世君ハ、崇神天皇ノ皇子豐城入彥命ノ五世ノ孫ト同書ニ見ユ、仁德天皇紀ニ、「上毛野君祖竹葉瀨」トアル、卽此人ノコトナリ】三世ノ孫久比、泊瀨部天皇【本注諡崇峻】御世ニ被遣呉國ニ、雜寳物等獻於天皇ニ、其中有呉ノ權ハ、天皇勅此物也】（此句讀難シ、物字ノ上ニ何字ナドヲ脫シタルニヤアラン）久比奏シテ曰、呉國因リテ縣ニ定萬物ハ、令爲交易、其名云波賀理ハ、【按、呉國ニテ倭語ヲモテ、波賀理ト云フベキニアラズ、此物渡リ來リシ後、皇國ニテ名ヅケシヲカク誤リ傳ヘタルモノナルベシ】天皇勅之、劣ニ令佗人ニ同ハ、久比男宗麿舒明天皇御代ニ負商長ノ首ヲ也」トアル始ナリ、【印本錯亂アリ、今ハ古寫本ニ依レリ、按ズルニ崇峻天皇ノ元年ハ、隋ノ文帝ノ開皇八年ニテ、五年ニ蘇我馬子ガ天皇ヲ弑奉リシハ、開皇十二年ナリ、然ラバ久比ガ獻リシハ隋稱ナルベシ】サレドモ此御代ニ權衡ヲ用ヒラレシコト史ニ見エザレバ、世ニ普クハ用ヒザリシナルベシ、日本紀ニ推古天皇ノ十三年ニ高麗ノ大興王黃金三百兩ヲ上リシコトアレドモ、是ハ彼ヨリ云ヒオコセタルママニ、史ニ載セタルモ知ルベカラザレバ、皇國ニテ此頃權衡ヲ用ヒラレシ證トモナシ難シ、孝德天皇ノ御世ニ、種種ノ制ヲ立ラレシニ、權衡ノ事ハ見エザレドモ、齊明天皇ノ五年ニ、高麗ノ使人羆皮ヲ携來リテ、價綿六十斤ヲ求メシコト、又天智天皇ノ元年ニ、百濟ノ鬼室福信ニ絲五百斤綿一千斤ヲ賜ヒ、

七年ニハ、新羅王ニ綿五百斤、十年ニハ一千斤ヲ賜ヒシコト日本紀ニ見エタリ、扶桑略記一代要記ニ據レバ、是モ舒明天皇ノ御時ヨリゾ用ヒラレタルベキ、【扶桑略記一代要記ノ文量攷ニ引リ、按ズルニ始テ呉權ヲ獻リシ久比ガ男宗麿、此御代ニ姓ヲ商長首ト賜ハリシハ、權衡ヲ世ニ普ク用ヒラルルニヨリテ賜ヒシニモヤアリケン】其後天武天皇ノ十四年ニハ、鐵一萬斤、持統天皇ノ五年ニハ、白銀三斤八兩、又銀二十兩ナドトモ見エタリ、【紀ノ傍訓ニ斤ヲハカリ、兩ヲコロト訓メリ、コロノ義未考ヘ得ズ】度量ヲ唐制ニ從ハレタランニハ、權衡モ必唐制ニ依ラレシナルベシ

本朝令ニ、「權衡廿四銖爲兩【本注三兩爲大一兩】十六兩爲斤、」義解ニ「謂以秬黍中者百黍之重爲銖廿四銖爲兩」トアリ、是モ唐令ニ「秤權衡ハ以秬黍中者百黍之重爲銖、二十四銖爲兩、三兩爲大兩一兩、十六兩爲斤」ト云ヒシニ因リ給ヒシナリ、【唐令ノ文、唐律疏議ニ引リ、南部新書ニ開元令ヲ引キタルモ同ジ、六典通典舊唐書ニモ皆同ジ趣ニ載セタリ、唐令ハ漢書律暦志ニ、「權者銖兩斤鈞石也、所以稱物平施知輕重也、本起於黃鐘之重、一龠容千二百黍、重十二銖、兩之爲兩、二十四銖爲兩、十六兩爲斤、三十斤爲鈞、四鈞爲石」トアルニ本ヅキシナリ、唐ノ小稱ハ譌ナガラモ漢稱ノ傳ハリタルニテ、北魏北齊後周ナドノ稱ニアラザレバ、卽漢稱トシテ漢書ノ文ヲ載セタルナリ、按ズルニ唐令ノ秤字ハ草書ノ稱字ノ正書ニナリタルナリ、（称ニ作ルモ稱ノ草書ナリ）枲字ヲ叐ニ作リ、萬字ヲ万ニ作リ、莊字ヲ庄ニ作リ、葩字ヲ花ニ作ルナド皆是ト同ジク、草書ヲ正書ニナシタルモノニテ此類尙多シ、淸

人ハ秤字ヲ平字ニ、禾傍ヲ加ヘタルモノトシタレドモ、未精シク考ヘザリシナリ】權衡ノ證トスベキ古器今存セズトイヘドモ【好古小錄ニ、天平以來ノ器ニ斤兩ヲ題シタルハ皆今ト同ジト云ヘリ、サモ有ベシ、然レドモ如何ナル器ヲ見タリシニカ、明ニ云ハザレバオボツカナシ、】通典ニ「武德四年廢五銖錢」【隋ノ五銖錢ナリ】鑄開元通寶、每十錢重一兩、計一千重六斤四兩、每兩二十四銖、則一錢重二銖半以下」ト云ヒ、舊唐書ニ「開元通寶錢重二銖四絫、積十文重一兩、一千文重六斤四兩、」ト云ヘバ【イヅレモ大稱ニテ計リシナリ】開元錢ニヨリテ唐稱ヲ起スベシ、今開元錢ノ初鑄ト見ユル者ノ大樣ニシテ刓剝セザル錢ヲ稱レバ概重サ一匁ニシテ重キハ一匁二分ニ至リ、輕キハ八九分ノ者アリ、【律原發揮ニモ「開元錢以本邦等子秤之、輕重不均、其至輕者八分許、其至重者一錢一分許」ト云ヘリ、先輩或ハ八分ト云、或ハ八分五氂ト云ヒシハ、大樣ノ者ヲ得ザリシナルベシ、按ズルニ六典鑄錢監ノ注ニ「唐朝武德中悉除五銖、更鑄開通元寳、開元中以錢濫惡江淮間尤甚、有勅禁斷舊法、每二千重六斤四兩、近所鑄者多重七斤」ト云ヘリ、然ラバ今有ル一匁ニ餘ル者ハ、重七斤ト云ヒシ錢ニテ、八九分ノ者ハ江淮ノ濫錢ナルカ、又ハ久シク世ニ通行シテ刓剝セシ錢ナルベシ】【然ラバ今ノ一匁ハ唐ノ大稱ノ二銖四絫ニシテ【又唐書ニ乾封泉寳錢ヲ重二銖六絫ト云ヘリ、一匁ヲ二銖四絫トスレハ、二銖六絫ハ一匁〇八氂三毫三絲三忽不盡ナリ、今此錢ヲ稱ルニ重一匁一分以下ナレバ、開元錢ノ稱法ト同ジ、又封演錢譜ニ「乾元當十錢重五銖」ト云ヘリ、一匁ヲ二銖四絫トスレバ五銖ハ二匁〇八氂三毫三絲三忽不盡ナリ、今此錢ヲ稱ルニ重キハ

二匁二分、輕キハ一匁九分ナレバ（徑小尺一寸二分ニ及バザル者ヲバ數ヘズ）是モ開元錢ノ稱法ニ合ヘリ、封氏又乾元重輪錢ヲ重十二銖ト云ヘリ、十二銖ハ五匁ナルニ、此錢ヲ稱レバ重キハ四匁、輕キハ三匁三分ナリ、（徑小尺ノ一寸四分ノ者）凡歷代ノ錢今傳ハル者ヲ稱リ試ムルニ、小平錢ハ大凡制ノ如クナレドモ、大錢ハ必制ヨリ輕ケレバ、是モ十二銖ノ錢ノ輕クナリタル者ナルベケレドモ、是ホドニ輕クナリタルハ、佗ニ有ルコト無ケレバ疑ハシ、又通典ニハ乾元當十錢ヲ每レ貫十斤ト云ヒ、重輪錢ヲ每レ貫二十斤ト云ヘリ、（新唐書ニ十二斤トアルハ誤ナリ、舊唐書ニモ二十斤トアリ）是ニテ一箇ノ重サヲ計レバ、當十錢ハ三銖八絫四黍ニテ、今ノ一匁六分、重輪錢ハ七銖六絫八黍ニテ、今ノ三匁二分ナリ、此制封氏ガ當十錢ヲ五銖、重輪錢ヲ十二銖ト云ヒシニモ合ハズ、又二錢共ニ今存スル徑ノ合ヘル者ハ、皆通典ニ云ヒシヨリ重キモ疑ハシ】卽宋以後ノ一錢ナリ、【宋ノ時二銖四絫ヲ一錢トシ、二絫四黍ヲ一分トセシヨリ銖絫ノ名遂ニ廢シタリ、附錄ニ詳ニス、】今一匁ヲ二銖四絫トシテ權衡ヲ起セバ

銖【三百黍】今四分一氂六豪六絲六忽不盡【氂正字ニハ犛ニ作ル、說文ニ「犛彊曲毛可以箸起衣从犛省來聲」トアル字ナリ、彊曲毛ノ字ナルニヨリ、後人來ヲ變ジテ毛ニ從ヒ、犛牛尾ト訓ズル犛字ト混ゼシナリ、犛牛尾ト訓ズル犛字ハ、徐鉉ガ音莫交切音茅ナリ、廣韻ニモ、十豪ト訓ズル氂ハ犛ト同ク、里之切音釐、マタ犛牛尾ト訓ズル氂ハ、莫袍切音毛ニテ犛トハ其音同ジカラズ、國語ノ晏萊ヲ左傳ニ晏氂ニ作リ、孟子ノ禽滑釐ヲ史記儒林傳ニ禽滑氂ニ作リ、後漢書岑彭ガ傳ニ彭ガ玄孫熙魏郡太守

タリシ時、輿人ノ歌ニ「狗吠不レ驚、足下生レ氂、」一トアリテ、災時茲ト韻ヲ押ンハ、皆斄字ノ俗字ニテ、氂牛尾ノ氂字ニハアラズ、漢書王莽傳ニ、「以氂裝衣」一トアルヲ、顏師古ガ、注ニ「毛之彊曲者曰レ氂、以裝二褚衣一令二其張起一也」一ト云ヘリ、師古ガ注、說文斄字ノ義ト同ジケレバ、王莽傳ノ氂字モ斄ノ俗字ナルコト明ケシ、漢ノ劉屈氂ト云フ人ノ名モ斄字ナルベシ、屈斄ト云フハ彊曲毛ト云ヘルト同ジケレバナリ、慧琳ガ一切經音義ニ、大般若經ノ初ニアル三藏聖教序、又六波羅蜜多經掌中論、皆豪氂ヲ豪斄ニ作リシト云ヘリ、六朝唐初ニハ正字ニ書タル本ノ傳ハリシナリ、然ルヲ慧琳ガ斄ハ本字ニアラズ、假借シタルナリト云ヘルハ、本義ヲ知ラザリシナリ、淸ノ王鳴盛ガ十七史商榷ニ、豪氂ハ豪釐ノ傳寫ノ誤トシ、趙翼ガ陔餘叢考ニハ、犛牛尾ト訓ズル氂字ト釐ト通ズト云ヘルハ、共ニ豪氂ノ氂ハ斄ノ俗字ニシテ、犛牛尾ト訓ズル氂字トハ形ハ同ジケレドモ別字ナルコトヲ知ラザリシナリ、或ハ釐字ヲ借用フ、俗又省テ厘ニ作ル、集韻ニ見ユ、又廛字ヲモ省テ厘ニ作ル、干祿字書ニ「厘廛上通下正」一トアル是ナリ、故ニ二字混ジテ分ツコト無シ、本草ノ陟厘ヲ楊玄操ガ音義ニ音纏、又音氂ト二音ヲ出シシハ（本草和名ニ引リ）此厘字ヲ定メカネタルナリ、（本草和名ノ今本ニ陟釐トアルハ、後人ノ改メタルナリ、モシ釐トアラバ音纏ト云フベキ理無シ）今俗豪ヲ毛ト云フ、豪字ヲ俗ニ毫ニ作ル、故ニソレヲ省キシ者ナルベシ、□□一絲又一秒トモ云フ、隋志ニ見ユ、今俗ハ一拂ト云フ、拂ノ名、何ヨリ出タルニカ詳ナラズ、或人ノ云ヒケルハ、拂ハ忽ノ謬音ニテ、ソレヲ誤リテ豪

ヲ十分シタル數ノ名トセシナリト云ヘリ、（忽ハ豪ヲ百分シタル者ナリ）錢ノ內ヲ分釐豪絲忽ト稱ルコトハ、度ノ小數ノ名ナルヲ、稱ノ小數ノ名ニ借リタルナレバ、上件ノ事ドモ度攷ニ云フベキヲ今俗事ヲ稱ノ名ニ用フル故ニ、ココニ如レ此ハ云ヘルナリ】

兩【七千二百黍】今十匁【通典ニ「每二十錢重一兩」ト云ヒシハ是ナリ、按ズルニ說文ニ「兩ハ二十四銖爲二一兩一」ト云ヒ、「㒳ハ再也」トアリテ、二字同ジカラズ、後世ハ皆兩字ヲ用ヒテハ㒳字ハ廢シタリ】

斤【一十一萬五千二百黍】今百六十匁【後世ハ銖絫ヲ廢シ、錢分ヲ以テ諸物ヲ稱レドモ、斤ト兩トハ唐ノ稱法ヲ變ズルコト無シ】

是雜令ニ「三兩爲二大兩ノ一兩一」ト云ヒ、「量二銀銅穀一者皆用レ大」ト云ヒシ大稱ニテ、六典・延喜式等ニ藥ヲ合スル外ハ悉大ナル者ヲ用フト云ヒシモ此稱ナリ、小稱ハコノ三分ノ一ナレバ

銖【百黍】今一分三氂八豪八絲八忽不盡

兩【二千四百黍】今三匁三分三氂三豪三絲三忽不盡

斤【三萬八千四百黍】今五十三匁三分三氂三豪三絲三忽不盡

銖ヲ十分シタルヲ絫ト云ヒ、絫ヲ十分シタルヲ黍ト云フ、【漢書ノ注ニ應劭ガ音義ヲ引テ、「十黍爲レ絫、十絫爲レ銖」ト云ヒ、說文ニハ「絫ハ十黍之重也」ト云ヘリ、說文銖字ノ注ニ、「權十分黍之重也」ト

アルハ疑ハシ、黍ヲ十絫ネタルヲ絫ト云フハ、絫黍ト云フ意ナルベシ、コノ絫ヲ十絫ネタルヲ銖ト云ヘバ、今本ノ說文ニ十分黍トアルハ、十絫黍トアリシヲ誤リタルカ、又說文稱字ノ注ニ、「十二粟爲一分、十二分爲一銖」トアルニ據レバ「權十二分粟之重也」トアリシヲ誤リタルニモアルベシ】サレドモ漢書律曆志ニ、權衡ノ起ヲ云ヒシニモ、此名無ク、唐令本朝令ニモ、此二名ヲ載セズ、延喜式ニモ黍絫ヲ以テ稱ラザレバ、西土ニテモ皇國ニテモ絫黍ヲバ用ヒザリシト見エタリ、【通典又封演錢譜等ニ希ニ、此名見エタレドモ、算ニヨリテ微數ヲ云フ處ニシテ、常用ノ數ニハアラズ】又分ト云フ目アリ、【十分ヲ錢ト云フ、分ニアラズ、「十二粟而當一分、十二分而當一銖」ト云ヒシ分ニモアラズ】拾芥抄ニ「六銖爲一分、四分爲一兩、十六兩爲一斤」、【本ノ注小一斤也】トアレバ、分ハ六百黍ニテ今ノ八分三氂三毫三絲三忽不盡ナリ、【梁ノ陶弘景モ「六銖爲一分、四分爲一兩」ト云ヘリ、陶氏ガ云ヒシハ、藥稱ニテ、常用ノ稱法トハ同ジカラザレドモ、六銖ヲ分トシ、四分ヲ兩トスルコトハ異ナルコト無シ、陶氏ガ稱法ノ常用稱ト同ジカラザルコトハ附錄ニ詳ニス】後ニ大稱ヲ用フル世トナリテハ、分モ三倍シタレバ千八百黍ニテ、今ノ二匁五分ヲ分トス、【宋ノ聖惠方ニ、「方中凡言分者、卽二錢半爲一分也、」ト云ヒシ者是ナリ】齋宮式・縫殿式等ニ云フ所ノ分、是ナリ【左馬式ニ、「結額髮料緋ノ絲大二分四銖、緋縫絲大二分、」トアルハ大稱ナルコト論ナシ、大何斤何兩何分又ハ大何兩何分ト、上ニ大斤大兩ヲ蒙リタル分ハ大稱ナラン、類聚三代格ニ載セタル

承和八年閏九月ノ官符ニ「鉛八千一百六十六斤十兩二分四銖トアルモ、大稱ナルベシ】式ニ又六百黍ノ小分アリ、【縫殿式ニ紅花小二兩二分、內匠式腰車ノ條ニ、水銀小三兩三分、屛風ノ條ニ、減金小二兩二分、水銀小一兩一分、廚子ノ條ニ、水銀小二兩三分、伊勢初-齋-院裝-束計帳ノ條ニ、水銀小二兩二分、捧壺ノ條ニ、減金小一兩三分、野宮裝束腰輿ノ條ニ、水銀小三兩二分ナド、小兩ノ下ニアル分ハ、皆小稱ナルベシ】又大斤大兩ヲ用ヒナガラ小分ヲ用ヒタルアリ、【大神宮式ニ、木綿六斤五兩六分、減金九斤七兩八分四銖、縫殿式ニ生絲十三兩五分五銖、大膳式ニ木綿麻各八兩四分ナド云ヘル是ナリ、四分ニテ一兩ナルニ、是等ハ斤兩ハ大稱ニテ、分ハ小稱ナル故ニ、四分ヲモ兩ト云ハズ、又五分六分ナドモ云ヘリ、小稱ノ十二分ヲ大稱ノ一兩トスレバ、八分モ猶一兩ニ足ラザルナリ】カク樣樣ニ紛ラハシク稱リシハ、如何ナル故ナリケン疑ハシ、【內膳式ニ、海藻十兩四分八銖トアルモ疑ハシ、六銖ヲ一分トスル定ナルニ、八銖トアレバ分ハ大稱ニテ、銖ハ小稱カトモ思ヘドモ、四分ヲ兩トスル定ナレバ、大稱ノ四分ナラバ十一兩八銖ト云フベシ、又コノ分ヲ小稱トスレバ八銖ト云フベキニアラズ、此條誤字アルニヤ、尙考フベシ】

唐ノ貞觀ノ時、張文收ガ作リシ稱ヲ開元ノ時、常用ノ稱ニ比ブレバ三ノ一ト云ヒ、【通典ニ見ユ、度攷ニ引リ】本朝令ニ廿四銖爲レ兩ト云ヒシ權衡【令ニ、「又量二銀銅穀一者皆用レ大、此外官私悉用二小者一」トモ云ヘリ】即是ナリ、然ルニ和銅ノ時ニ、制ヲ改メテ藥ヲ合スル外ハ大稱ヲ常用トセラレタリ、【詳ニ度攷ニ見

ユ、雜式ニ「官私悉用レ大、但合レ藥則用二小者一」トアルハ、此時ヨリノ制ナルベシ、其ハ唐ニテ「凡積二秬黍一爲二權衡一者、（所謂小稱ナリ）合二湯藥一則用レ之、内外官司悉用二大者一」ト云ヒシニ依ラレタルナリ、按ズルニ宋ノ林億ガ校正千金方凡例ニ、「今之此書、當レ用下三十兩爲二一兩一之制上」ト云ヘルハ、千金方ノ稱ハ小稱ナルニ、宋ノ時ハ大稱ヲ用ヒタレバ、千金方ニ三兩トアルハ、宋ノ一兩ナルヲ云ヒシナリ、又皇國ノ制醫方書ハ小品方ヲ讀ムベキコト典藥式ニ見ユ、是モ唐ノ制ニテ、皇國ニテソレニ依ラレシモノナルベシ、小品方ハ隋ノ陳延之ガ作リシ書ナリ、隋ニモ大小稱有リシカドモ、藥ヲバ唐ノ千金方ニスラ小稱ニテ記シタレバ、マシテ小品方ハ小稱ナルベキコト知ルベシ、此ヨリ前六朝ノ時ハイマダ大稱無カリシ時ナレバ、其頃ノ醫方書ハ小稱ナリシコトハ云フヲ俟タズ、故ニ大稱ヲ用フレバ事ノ煩ハシキニヨリテ、藥ヲ合スルニノミ小稱ヲ用ヒシモノナルベシ】延喜式ニ云フ所ノ斤兩モ是ナリ、式ノ斤兩ノ大稱ナルコトハ、雜式ニ「官私悉用レ大」トアルニテ明ナレドモ、ナホ木工式ニ「以二埴十一斤一造二瓪瓦一枚一、筒瓦九斤、宇瓦十八斤、鐙瓦十五斤」ト云ヒシニテ考ルニ、瓦ヲ作ルニハ削リ成ス故ニ、其埴ヲ弃ルモ多カルベク、燒テハ其重サモ減ズレバ、今假ニ埴ノ重サノ半ヲ瓦ノ重サトスレバ

瓪瓦　重五斤半【倭名類聚抄ニ唐韻ヲ引テ、瓪ハ音板、牝瓦也ト云ヒ、女加波良ト訓リ、後世ニ云フ平瓦ナリ、其形平ニシテ版ノ如クナレバ版瓦ト云フ、版瓦ノ名漢書昌邑王傳ニ出ヅ、然ルヲ後ニ瓦ニ從ヒテ瓪ニハ作リシナリ】

筒瓦　重四斤半【其形竹筒ヲ剖キタル如クナレバ筒瓦ト名ヅク、筒瓦ノ名、金匱要略ノ狐惑病ノ雄黃熏方ノ條ニ見ユ、淸ノ程敦ガ秦漢瓦當文字ニ、「屋瓦皆仰當二兩仰瓦之際一、爲二牢規之瓦一以覆レ之、俗謂二之筒瓦一、漢ノ筒瓦長二尺餘、兩端皆有二筍距一」ト云ヘリ、又筩瓦トモ云フ、宋ノ陸游ガ渭南集、唐昭宗ノ吳越武肅王錢鏐ニ賜ヒシ鐵券文ノ跋ニ、狀如二筩瓦一ト云ヘリ、筩ハ正字、筒ハ假借字ナリ、又瓦ニ從ヒテ㼧ニモ、𤭛ニモ作ル、後唐ノ重二修法門寺塔廟一記ノ碑ニ「修二塔上層綠琉璃㼧瓦一」ト云ヒ、玉篇ニ「㼧ハ牡瓦也」トアルモ是ナリ、（廣韻ニ甂ヲ牡瓦也ト云ヒシ牡瓦トハ同ジカラズ）𤭛ハ廣韻ニ㼧ニ同ジト云ヘリ、淸俗モ𤭛ト云フト段玉裁ガ說文註ニ出ヅ、筒瓦ヲ後世ニハ丸瓦ト云フ、平瓦丸瓦ノ名、應德二年造二法勝寺一用途註文ニ見ユ、今俗モ然云フナリ、倭名類聚抄ニ辨色立成ヲ引テ、疏瓦ハ、都-々-美-加-波-良ト載セテ筒瓦ヲ載セズ、ツツミカハラハ西大寺ト廣隆寺ノ資財帳又木工式ニ堤瓦ト書リ、（木工式ノ今本ニ提瓦トアルハ誤ナリ）筒瓦・鐙瓦ヲ並ベ葺キタル狀ノ堤坊ニ似タレバ、名ヅケタルナリ、　辨色立成ニ疏瓦ト云ヒシハ此瓦ヲ葺キタル狀上下ノミ接續シテ、　匝瓦宇瓦ノ如ク左右蜜緻ニハ並ベザレバ、疏瓦ト名ヅケシナラン、然ラバツツミカハラハ葺キタル上ノ名ニテ、瓦ノ名ニハアラズ、（羽倉在滿ノ木工式葺工考ニ、　提瓦ヲ宇瓦トシ、提ハ隄ノ通借ナラント云ヒシハ非ナリ）匝瓦宇瓦ヲ並ベテ葺キタルハ瓴甋（シャクハラ）ニ似タレバ甓瓦ト云フモ（甓瓦ノ名木工式ニ出ヅ、廣雅ニ甓ハ瓴甋也ト云ヘリ、木工式ノ今本ニ、甓瓦トアルハ誤ナリ）葺タル上ノ名ニシテ瓦ノ名ニハ非ルニテ筒瓦ト

堤瓦ト同ジカラザルヲ知ルベシ、倭名類聚抄ニ堤瓦ヲ擧ゲテ甍瓦ヲ載セザリシハ、ツツカハラトツツミカハラト名ノ似タルヨリ誤リ混ジタルナルベシ」

宇瓦　重九斤【重瓦ノ屋宇ニ垂ルモノ故ニ宇瓦ト云フ、倭名類聚抄ニ、一唐韻云、瓪ハ牡瓦也、乎加和良一トアル者是テリ、屋宇ニ垂タル狀ノ指圖ニ似タルヨリ、牡瓦ト名ヅケ、後ニ瓦ニ從ヒテ瓶ニハ作リシナルベシ、瓪ハ漢文無ケレバ牡瓦トシ、瓪ハ漢文アレバ牡瓦トセシナリ、（玉篇ニ瓪ヲ牝瓦ト云ヒシトハ名ヅケシ所以同ジカラズ）清ノ朱楓ガ秦漢瓦圖記ニ是ヲ漢瓦頭當文瓦ト云ヘリ、今俗ハ唐草瓦ト名ヅク」

鐙瓦　重七斤宇【倭名類聚抄ニ、雜色瓦、文ヲ引テ一花瓦ハ鐙瓦也」、同布美加波良一トアル者ニテ、今俗ノ云フ巴瓦ナリ、古瓦ハ多ク花文ヲツケ、今ハ巴文ヲツクルニヨリテ、巴名ヅケタルナリ、其瓦ヲ物ニ向レバ、香爐ト云フ馬鐙ノ形ニ似タル故ニ、鐙瓦ト云ヘリ、（目今氏鐙瓦ヲ平瓦トシタルモ誤ナリ）此瓦ヲ西土ニテ瓦當又瓦頭ト云フ、瓦當ハ漢書司馬相如傳ノ注ニ見エ、程敦ガ秦漢瓦當文字ニ一瓦當之有字者、以瓦文中有蘭池宮當、甘泉宮當、黄當、八風壽存當、其秦漢時本名一ト云ヘリ、瓦頭ノ名ハ元ノ李好文ガ長安志圖ニ出タリ、又明ノ王褘ガ集ニ、漢瓦頭記アリテ、一漢未央宮諸殿瓦其身如二半筒一、而覆二簷際一者、則其頭有レ面外レ向、其面徑五寸、面背厚一寸餘、其背平可レ硯、今、唐宋以來、人得レ之、即去二其身一以爲レ硯、故俗呼二瓦頭硯一也一トモ云ヘリ、秦漢瓦當文

字ニ「漢筒瓦云云、（上ニ引リ）覆檐際之瓦一端下ニ彎爲ニ正圓形一、徑五六寸、有ニ至ニ七八寸一者上」ト
云ヒシ者卽是ナリ】

同式ニ人ノ擔ハ瓸瓦十二枚、筒瓦十六枚、宇瓦七枚、鐙瓦九枚、沙土二斗五升爲ニ一擔一【コノ外ニ瓦材・雜材・白土・赤土等ノ重サヲ載セタレドモ、準ズル所無ケレバ省キツ】若聽ニ准積者ハ大六十斤爲ニ一擔一ト云ヘリ、大六十斤ハ九貫六百匁ナレバ、埴瓦沙土モ大稱ニテ稱リシナリ

瓸瓦　【五斤半】十二枚【六十六斤　大稱ノ六十六斤ハ今ノ十貫〇五百六十匁ナリ】

筒瓦　【四斤半】十六枚【七十二斤　大稱ノ七十二斤ハ今ノ十一貫五百二十匁】

宇瓦　【九斤】七枚【六十三斤　大稱ノ六十三斤ハ今ノ十貫〇〇八十匁】

鐙瓦　【七斤半】九枚【六十七斤半　大稱ノ六十七斤半ハ今ノ十貫〇八百匁】

沙　【十升量一升四百二十匁】二斗五升【今十貫〇五百匁、十貫〇五百匁ハ大稱六十五斤十兩】

又內膳式ニ、「耕ニ種園圃ニ糞【糞ハ糞ノ俗字ナリ、干祿字書ニ見ユ、今俗ノ云フコヤシニテ、糞字ノ米ヲ去テ土ニ從ヒ、糞尿ノ字ニ別チシナリ、今本ニ糞ニ改メタルハ正字ナレドモ、延喜ノ舊ニハアラジ、今ハ古鈔本ニ依リテ引リ】擔別准ニ重六斤一」トアリ、【大六斤ハ九百六十匁】六斤ヲ擔ハンコト輕キニ過ギタレバ、六十斤トアリシガ脫タルナラン、六十斤ナラバ是モ大稱ニテ木工式ト同ジ擔率ナルベシ、是等ヲ以テ見レバ式ニ大小ヲ云ハザル斤兩ハ、皆大稱ナルコト知ルベシ、又大稱ヲ三倍シタル稱アリ、主稅式ニ「凡一駄ノ率ハ絹七

十四、絲三百約、綿三百屯、鍋一百斤、鐵卅廷」ト云ヘリ、【コノ外ニ絁布鐵等ノ率ヲ載セタレドモ、此物ドモ今世品類多クシテ輕重定マラザレバ、今ヲ以テ古ヲ知リ難キ故ニ省キツ】主計式ニ「上絲ハ四兩、中絲ハ五兩、麁絲ハ七兩、各爲レ約」【平均スレバ一約ハ五兩八銖】綿ハ四兩爲レ屯、鐵ハ三斤五兩爲レ廷トアルニヨリ【綿ノコトハ後ニ云ヘリ】大稱ニテ一駄ノ重サヲ計レバ

絲三百約　【百斤】　今十六貫匁

綿三百屯　【七十五斤】　十二貫匁

鍋一百斤　【十六貫匁】

鐵三十廷　【九十九斤六兩】　十五貫九百匁

六典注ニ載セタル駄率トハ、略同ジケレドモ【度支郎中ノ注ニ、毎レ駄一百斤、車載ハ一千斤ト云ヘリ】本朝格式等ニ載セタルト合ハザレバ【類聚三代格、不動動用ノ條ニ、弘仁十三年ノ官符ヲ載セテ、「近江國穀一十一萬五千斛、運レ京漕一十萬斛、駄賃料一萬五千斛、駄五萬匹、匹別三斗」トアリ、十萬斛ノ穀ヲ五萬匹ノ馬ニ駄スレバ毎レ駄二斛ナリ、二斛ハ今ノ一石三斗二升五合餘、今京穀一升ヲ稱ルニ、凡二百八九十匁ナレバ、其重三十七貫七八百匁許ナリ、雜式ニ載セタル漕米ノ駄ハ、三十九貫六百匁餘ナルコト雜攷ニ引リ、又木工式ニ載セタル人擔ハ、凡十貫匁ナルニ、車載ハ略十倍スレバ、凡百貫匁ナリ、車載ノ條ノ末ニ「一駄ハ減二三分之二一」トアレバ、三十三四貫匁許ヲ一駄トスベシ、六典ノ注ノ車載十分ノ一ナルトハ同ジ

カラズ、又主水式ニ、「以二氷八顆一爲レ駄、准二一石二斗一」トアルハ、米ヲ以テ准ジタルナラン、一石二斗ハ今ノ七斗九升五合餘ニテ、其重サ三十一貫八百匁有奇ナリ、按ズルニ漢書ノ趙充國ガ傳ニ、「以二一馬一自佗負三十日食、爲二米二斛四斗、麥八斛一」ト云ヘリ、漢ノ二斛四斗ハ今ノ二斗六升四合餘、米一升ヲ三百二十六匁許トシテ計レバ、（此事附錄ニ出ヅ）其重サ八貫六百匁許、又八斛ハ今ノ八斗八升一合餘、麥一升ヲ三百六十匁トスレバ、其重サ三十一貫七百三十匁許（是ハ皇國ノ麥ヲ稱リテ定メタルナリ、西土ノ米ノ皇國ノ米ヨリ輕キヲ見レバ麥モ皇國ノ麥ヨリハ輕カルベケレドモ、證スル所無ケレバ姑ク皇國ノ麥ニテ計リシナリ）合セテ四十貫〇三百匁餘ニテ格式ノ駄法ニ稍近シ、六典注ニ「每駄百斤ト云ヒシハ、大凡今ノ米一俵ノ重サナレバ輕キニ過ギタルニ似タリ、疑フベシ」主稅式ノ駄率ハ、皆大稱ヲ三倍シタルモノナルベシ、絲・綿・銅・鐵一駄ノ重サヲ大稱ノ三倍トスレバ

絲三百約　四十八貫匁
綿三百屯　三十六貫匁
銅一百斤　四十八貫匁
鐵三十廷　四十七貫七百匁

今官ノ定【三十六貫匁】ヨリハ稍重ケレドモ、今モ私ニハ米三俵ヲ駄スト云ヘリ、【三俵ハ一石二斗、其重サ大凡四十八貫匁許ナリ】又主計式ニ、絹ハ長六丈、廣一尺九寸ヲ匹トス、今世ノ絹一匹、凡長曲尺七丈二

尺許、廣一尺一寸許ニテ、重サ凡三百二三十匁ナリ、今ノ一匹ノ重サヲ以テ古ノ一匹ノ重サヲ計レバ、凡四百四十匁許ナルベシ、【今ノ絹ノ長七丈二尺ニ、廣一尺一寸ヲ乘ズレバ其積七千九百二十寸コレヲ法トシテ絹ノ重三百二十五匁ヲ除スレバ、方寸ノ絹重四釐一毫有奇ナリ、古ノ絹ノ長六丈ハ曲尺ニテ五丈八尺一寸三分弱（三分弱恐クハ九分強、猶攷フベシ）廣一尺九寸ハ曲尺ニテ一尺八寸四分有奇、コノ曲尺ノ長廣ヲ乘ズレバ、一萬〇六百九十四寸有奇、コレ古ノ絹ノ今尺ニテノ積ナリ、是ヲ法トシテ今ノ絹方寸ノ重四釐一毫有奇ニ乘ズレバ、四百三十八匁八分餘ヲ得、コレ古ノ絹一匹ノ重サナリ】是ニテ主稅式ノ數率七十四匹ヲ計レバ、三十貫匁餘ナリ、然レドモ古ハ織法今世ノ如ク精シカラザルベケレバ、絲モ太カリツラン、然ラバ一匹ノ重サ五百匁ニモ至リ、七十四ハ三十五貫匁許ニモ及ビシナルベシ、是亦數率ノ重サハ大稱ノ三倍ナルヲ證スベシ、【近衛府式ニ「駄別運ニ葛十二斤」トアリ、大稱ノ十二斤ハ一貫九百二十匁、コレヲ三倍スルモ五貫七百六十匁ナリ、葛ハ輕浮ナル物ナレバ、常ノ數率トハ同ジカラザルベケレドモ、六貫ニ足ラザルハ輕キニ過ギタリ】然ラバ此大稱三倍ノ稱ハ駄法ニノミ用ヒシカトモ思ヘドモ、內藏式ニ「奉諸陵幣ハ緋綵紅花綵蘇芳綵紫綵ノ絲白絲各四絇二兩【下注別各五兩】橡ノ絲、皂ノ絲、生ノ絲、各一絇八兩【下注別各二兩】蘇芳綵紫綵紅綵支子綵纁綵ノ綿各三屯四兩【下注別各四兩】」トアリ、別トハ十陵ニ別テ奉ラルルナレバ、ココニ云ヒシ一絇モ一屯モ各十二兩ニテ、主計式ニ「上絲四兩爲絇、綿四兩爲屯」ト云ヒシ三倍ナリ、七墓ノ料陵墓ノ綵絡料ニ云ヒシモ同ジ、拾芥抄ニモ「十二兩爲屯」ト云ヘリ、是等皆駄法ニ

非レバ、馱法ニモ限ラザルニヤ、尙考フベシ、此三倍ノ稱何レノ御時始リシカ、後世此三倍ノ稱ノ絕タルモ、又宋制ニ倣ヒテ、錢分【十分錢之一】ヲ以テ稱リ、銖分【六銖爲レ分】ノ名ノ廢シタルモ、何レノ御代ナリケン皆詳ナラズ

本朝權衡攷　終

本朝度量權衡攷　附錄卷上之上

予弱冠ノ頃ヨリ皇國ノ制度ヲ知ラント思ヒテ、國史律令格式ナドクリ返シ讀ムニ、知リ難キ事ノ多カル中ニ、度量權衡ハ今モ日日用フル物ナガラ、今ト古ト同ジカリシヤ、異ナリシヤ、タシカニ知ラレネバ、先達ノ人人ニ問質シシニ、委ク教フル人モ無カリシカバ、其筋ノ事書ルモノドモ、彼是取集メテ讀見ルニ、能ク考ヘ明ラメタリト見ユルモ、ヲ、サ、無カリケレバ、何クレト尋求メテ考ヘシニ、皆李唐ノ制ヲ寫シ給ヒシナリケリ、爰ニ思ヒ起シテ其考三卷ヲ作リタリ、又ヨク思ヘバ、其據リ給ヒシ唐ノ度量權衡ノ本ナル周ノ時ノ事、其後唐マデノ有リシサマ、又唐ノ後今ノ淸ニ至ルマデノ沿革ハタ知ラデ有ルベキナラネバ、彼國ノ書ドモヲ考ルニ、尙書左傳等ニ度量權衡ノ事見エタレドモ、【皆度攷ニ引リ】其詳ナルコトハ知ルベカラズ、古ヘ度ハ人體ヨリ定メシモノナレドモ、【此事モ度攷ニ詳ニス】其定メタリシ人體ノ長短、今ヨリハ考ヘ知リ難ケレバ、コレニ依リテハ尺ヲ起スコトヲ得ズ、【大戴禮ニ「布レ手知レ尺」ト云ヒシニヨリテ、今人ノ手ヲ布テ度リ試ルニ、人ノ大小ニヨリテ其長サ異ナレドモ、大方ハ曲尺七寸以上八寸以下ナリ、是ニテ大凡ハ知ラルレドモ、其子細ナルコトハ知リ難シ、コノ外寸咫尋仞ナド、人體ヨリ定メシト云フモ、其長サ今知リ難キコト皆是ニ同ジ、其尺、漢ノ尺ト同ジカリシコトハ、下ノ漢尺ノ條ニテ知ルベシ】隋書律曆志ニ度ノ起リヲ云ヒシニ、史記【夏本紀】ニ禹ノ事ヲ「聲爲レ律、身爲レ度、稱以出、」ト云ヒ、考工記

【玉人】ニ「璧羨度尺好三寸以爲レ度」ト云ヘルヲ引出タレドモ、史記ニ云ヒシハ禹ノ德ヲ贊シタルニテ、尺度ヲ作リシコトニハアラズ、考工記モ璧羨ノ度ヲ云ヒタルニテ、是ヨリ尺度ヲ起スコトニハアラズ、又易緯通卦驗ニ、「十馬尾爲二一分一」ト云ヒ、【是モ隋志ニ引リ、今本ノ通卦驗ニハ此文無シ、タダ「失二之豪釐一差以二千里一」ト云フ文アリテ、其鄭玄ガ注ニ「釐馬尾也」ト云ヘリ、十釐ニテ一分ナレバ、十馬尾ヲ一分トスル說ハ是ナルベシ、然ラバ隋志ハ其意ヲ取リテ、文ヲバ書改メタルモノナラン、サレドモ馬尾ノコトハ鄭注ニテ、通卦驗ノ本文ニハアラズ】淮南子【天文訓】ニ、「秋分蔈定、蔈定而禾熟、律之數十二、故十二蔈而當二一粟一、十二粟而當二一寸一、律以當レ辰、音以當レ日、日之數十、故十寸而爲レ尺、十尺而爲レ丈」ト云ヒ、【注ニ「蔈古文作レ秒」ト云ヘリ、按ズルニ說文ニ、秒ハ「禾芒也」ト訓ジ、蔈ハ「末也」ト訓ズ、ココハ秒字ノ義ナレドモ、蔈モ艸ニ從ヘバ末也トアルハ、草ノ末ノ細キヲ云フナルベシ、音モ同ジク義モ通ズル故ニ、蔈ヲ以テ秒トシタルナリ、同書主術訓ニ、「寸生二於𥝩一」トアルハ、蔈字ノ艸ヲ變ジテ禾ニ從ヒシナリ、宋書律志ニ、天文訓ノ文ヲ載セタルニモ、蔈ヲ皆𥝩トアリ、今本ノ主術訓ニ⿰禾栗ニ作リシハ譌ナリ、然ルニ續字彙補ニ、⿰禾栗ヲ載セ主術訓ヲ引テ、疾足切、音粟ト云ヒシハ、甚シキ誤ナルヲ、康熙字典モ是ニ從ヒシハ非ナリ、說文【禾部稱字注】ニ「春分而禾生、日夏至晷景可レ度、禾有レ秒、秋分而秒定、律數十二、十二秒而當二一分一、十分而寸」、ト云ヒ、【淮南子ニヨリタルナリ、今本律數ノ下ノ十二ノ二字ヲ脫ス、字ノ重リタル故轉寫セシ時、脫シタルコト著ルケレバ、今補ヘリ、又淮南子ニヨレバ、「十分而寸」ハ

「十二分而寸」トアリシガ說タルニヤ、然レドモ說文ノ寸字ノ注ニハ、「十分也」ト云ヒ、程字ノ注ニハ「十分爲レ寸」アレバ、二ノ字ヲ衍シタリトモ定メ難ク、宋書ニ淮南子ノ文ヲ載セタルニハ、「十二粟而當二一粟一、十粟而當二一寸一」トアレバ、許愼。沈約等ガ見タル淮南子ハ、今ノ本ト同ジカラザリシモ知ルベカラズ、又主術訓ノ注ニモ、「十粟當二一分一、十分當レ寸、十寸當二一尺一、十尺當二一丈一」トアレドモ、天文訓ノ律數十二ヨリ、十二秒ト十二粟トヲ生ジ、日數十ヨリ十寸ト十尺トヲ生ズル說ニ合ハザレバ誤ナルベシ」又【禾部程字注】「十髮爲レ程、一程爲レ分、十分爲レ寸」ト云ヒ、【段玉裁ガ注ニ】「一程爲本作二十程一誤、大小徐鍇古漢制考。小學紺珠。皆不レ誤、百髮爲レ分、斷無二是理一」ト云ヘリ、今段氏ガ改メシニ從フ】說苑【辨物】ニ、「度量權衡以レ黍生レ之、一黍爲二一分一、十分爲二一寸一、十寸爲二一尺一、十尺爲二一丈一」ト云ヒ、【今本一黍ノ二字ヲ脫ス、其說明ナレバ今補ヘリ、】隋書律曆志ニ引キタルニハ、「度量權衡以レ粟生、一粟爲二一分一」トアリ、淮南子ニヨレバ、十二粟ヲ一寸トスル定ナルニ、一粟ヲ一分トシ、十分ヲ一寸トシタランニハ短ニ過グベシ、然レドモカカル俗傳ノ說ハ、必ズ各家同ジカラザルベケレバ、淮南子ニ合ハズトテモ、一粟爲二一分一ト云ハンニ難テカルベシ、孫子ガ「六粟爲二一圭一」ト云ヒ、夏侯陽ガ「十粟爲二一圭一」ト云ヒテ同ジカラザルガ如シ、續漢書律曆志注ト、太平御覽トニハ、「因レ粟生レ之、十粟爲二一分一」ト引リ、十粟ヲ一分トスルコトハ、極メテアルベカラザレバ誤ナリ、程瑤田ガ通藝錄ニハ「因レ粟生レ之、十黍爲二一分一」ト引キテ、「黍或當作二十粟一」ト云ヘリ、是ハ淮南子主術訓ノ注ニ據リシナルベシ、サレド彼注ニ十

粟トアルハ、誤ナルベキコト上ニ辨ゼリ、按ズルニ今本ノ黍ヲ以テ起シタルハ、漢書ノ文ニ合ヘドモ、隋書・續漢書注・太平御覽、皆粟ニ作リタルヲ見レバ、度量衡、皆黍ヨリ起スコト、後世ノ通說ナルニヨリ、今本ハ後人ノソレニヨリテ改メタルモノナルベシ」漢書〔律歷志〕ニ「度者分寸尺丈引也、所三以度二長短一也、本起二黃鍾之長一、以二子穀秬黍中者一黍之廣一度レ之、九十分黃鍾之長二一爲二一分一、十分爲レ寸、十寸爲レ尺、十尺爲レ丈、十丈爲レ引、而五度審矣」、ト云ヒ、孫子算經ニ、「度之所レ起、起二於忽一、欲レ知二其忽一、蠶吐レ絲爲レ忽、十忽爲二一絲一、十絲爲二一毫一、十毫爲二一釐一、十釐爲二一分一、十分爲二一寸一、十寸爲二一尺一、十尺爲二一丈一、十丈爲二一引一」ト云ヒシハ〔夏侯陽算經ニ田曹ヲ引キタルモ、忽ヨリ起ルコト孫子ト同ジ、タダ「欲レ知二其忽一、蠶吐絲爲レ忽」ト云フ二句無シ、按ズルニ史記正義、〔太史公自序〕ニ「忽一蠶口出絲也」ト云ヒシモ、孫子ガ說ニヨリタルナリ、然レドモ蠶ノ吐タル絲ヲ忽ト云フコト如何アランオボツカナシ、思フニ忽ハ恍忽ノ義ニテ、素問注〔靈蘭祕典論〕ニ算書ヲ引テ、「似レ有似レ無爲レ忽」トアルゾヨカルベキ、但今傳ル古算書トモニ此文無シ、王冰ガ引キシハ何等ノ書ナルカ詳ナラズ」皆古ノ俗傳ナルベケレバ、何レモ據リドコロトスルニ足ラズ、〔姑ク是等ノ說ニヨラントスルモ其物ニモ大小アルベク、絫ルコトノ麤密ニヨリテモ長短等シカラザルベケレバ、是モ人體ヲ以テ度ヲ起シ難キニ同ジ、後魏ノ大和十九年ニ、九十黍ヲ絫ネテ尺ヲ作リシニ、荀勗ガ尺ト豪釐同ジト云ヘリ、然レドモ古尺ハ百黍ヲ以テ一尺トスト云ヘルニ、九十黍ニテ古尺ニ符合セシハ疑ハシ、假令絫シ黍ノ大ニシテ、九十黍ニテ荀勗ガ尺ト同ジカリシナラバ、偶

中ニシテ古ニ合ヒシニハアラズ、荀勗ガ尺ノ事ハ下ニ詳ニス】
周八寸尺周ノ末、六國ノ時ニ至リテ、八寸ヲ一尺トスル制アリ、漢人コレヲ周尺ト云フ、【周人某時ノ尺ヲ周尺ト云フベキナラネバ、此名秦漢ノ時ヨリ起リシナリ、荻生氏度考ニ、「此周字非二代名一、當猶二京師一言、如二秦故時適レ周朝レ周者是也、宅邦之尺或失レ制、故以二京尺一爲レ正、猶如二後世謂二官尺一耳」、ト云ヒタレドモ、先秦ノ書ニ周尺ノ見エザレバ、秦漢ノ際ニ云ヒ始メシコト疑無シ】禮記【王制】ニ「古者以二周尺八尺一爲レ步、今以二周尺六尺四寸一爲レ步」、ト云ヒ、【經典釋文ニ後漢ノ盧植ガ說ヲ引テ、此篇ハ漢文帝博士諸生ヲシテ作ラシメシト云ヘリ】說文【尺部咫字注】ニ、「中婦人手八寸謂二之咫一、周尺也、又【夫字注】周制以二八寸一爲レ尺、十尺爲レ丈、人長八尺、故曰二丈夫一」トモ見エタリ、【人ノ長ハ八尺ナレバ、周ノ一丈ナル故、丈夫ト名ヅクト云フ說ハ、漢人ノ俗說ナルベキコト下ニ詳ニス】鄭玄【王制注】ハ「周尺之數未二詳聞一也、按禮ノ制周猶以二十寸一爲レ尺」、【正義ニ、「玉人職云、鎭圭尺有二寸、又云、桓圭九寸、是周猶以二十寸一爲レ尺」】ト云ヘリ、按ズルニ左傳（僖九年）國語（齊語）ニ「天威不レ違レ顏咫尺一」ト云ヒ、國語（魯語）列子（湯問）ニ「長尺有咫」ト云ヘリ、咫ハ八寸ナルニ、咫尺トモ、尺有咫トモアレバ、尺ハ十寸ニテ、八寸ナラスコト明ケシ」「蓋六國時、多變二亂法度一、或言周尺八寸、則步、更爲二六尺四寸一」ト云ヘリ、然ラバ古ヨリ盛周マデハ十寸ヲ尺トセシニ、六國ノ時ニ至リテ八寸ヲ一尺トスル尺ハ出來シナリ、「說文序ニ周ノ時ノ事ヲ云ヒテ、「其後諸侯力政不レ統二於王一、分爲二七國一、田疇異レ畮、車涂異レ軌、律令異レ法」、ト云ヒシモ、

鄭玄ガ「多變㆓亂法度㆒」ト云ヒシ時ノ事ナルベシ、カカル時八寸ノ尺ハ出來シナラン、但八寸ノ尺ヲ用フル國モアリ、又古ノママニ十寸ノ尺ヲ用フル國モアリテ、一樣ナラザリシ故ニ、「許愼異㆑畮、異㆑軌、異㆑法」、トハ云ヘルナラン、孟子荀子ナド皆六國ノ人ナルニ、人ノ長ヲ云ヒシハ皆十寸ノ尺ナレバ、周末ニモ悉ハ八寸尺ニ非ザリシヲ知ルベシ　［秦尺］秦天下ヲ一統シテ後八寸ノ尺ヲ廢シ、盛周十寸ノ尺ヲ用ヒシナラン、〔史記始皇本紀ニ、「二十六年一㆓法度衡石丈尺㆒」トアリ、一ニストハ各國ノ區ナリシ制度ヲ改メテ、一樣ニナシシヲ云ヘルナリ」［漢尺］漢ハ多ク秦ノ制ニ法リタレバ〔始皇本紀ニ定メシ制度ヲ漢ニテ用ヒタルニテ、漢ハ多ク秦ノ制ニ沿リシヲ知ルベシ」度モ秦ニ因循セシナルベシ、然ラバ漢尺ハ即眞ノ周尺ナリ、〔晉ノ荀勗漢尺ニ依リテ尺ヲ造リ、其尺ヲ以テ律ヲ定メ、聲韻ヲ調ヘタリケルガ、其後魏襄王ノ冢ヲ發キテ、周ノ時ノ玉律鐘磬ヲ得タリシニ、其聲韻、闇ニ荀勗ガ律ト同ジカリシト、隋書律曆志ニ云ヘリ、（全文下ニ引リ）是漢尺ト周尺ト同ジカリシヲ證スベシ、故ニ隋志ニ、又周尺。漢志王莽時劉歆銅斛尺。後漢武銅尺。晉泰始十年荀勗律尺、（晉前尺ナリ）祖沖之所㆑傳銅尺ヲ並ベ擧テ皆同ジトセリ、（周尺ハ十寸周尺ナリ）宋ノ蔡元定ガ律呂新書ニモ「漢去㆑古未㆑遠、古之律度量權衡猶在也、故班志所㆑志、無㆓諸家異同之論㆒、王莽之制作、雖㆑不㆑足㆑據、然律度量衡當㆑不㆔致變㆓於古㆒也」ト云ヒ、淸ノ孔尚任ガ漢銅尺記ニモ、「漢代去㆑周未㆑遠、且禮經皆出㆓漢儒㆒、漢尺之存、即周尺之存也」ト云ヘリ、然ラバ漢ノ時ノ尺ハ即周尺ナルヲ、漢人是ヲ周尺トハ云ハズシテ、八寸ノ尺ヲ周尺ト云ヒシハ、漢ノ時常ニ用フル尺ヲバ何ノ尺ト云フコトヲ辨

明セズシテ、八寸ノ尺ハ常時用ヒザル尺ナレバ、周尺トハ云ヒシナルベシ、八寸ノ尺モ周ノ尺ニハアレドモ、周末六國ノ時出タル尺ニテ、眞ノ周尺ハ即漢ノ常用尺ナルコトヲ知ラザリシナリ、漢人常用尺ノ周尺ナルコトヲ知ラザランコト有ルマジキ如クナレドモ、今モ常ニ用フル曲尺・鯨尺ノ何ノ尺トモ辨ヘザル人モ多キゾカシ、漢ノ人人此八寸ノ尺ヲ周尺ト云ヒシヨリ、大儒班固・許愼・蔡邕ガ輩スラ、其說ニ惑ヒタリ、然ルニ鄭玄ガ周尺ハ即漢尺ナリト云ハザリシハ飽キ足ラネド、多クノ人ノ周尺ハ八寸ナリト云ヒタルニソレニハ從ハズシテ、未詳ト云ヒ、八寸ノ尺ヲバ或言ト云ヒテ、其說ヲ疑セタレドモ、禮制ニハ十寸ヲ尺トシタレバ、八寸ノ尺ハ、六國ニテ法度ヲ變亂シタルコト多カリシ時ニ用ヒタリシナラント云ヒシハ、誠ニ漢代一人ノ卓見ナリケリ、此周ニハ八寸ヲ尺トスト云フコト、漢儒ノ迂說ナリシカバ、遂ニ三代異尺ト云フ僞說ハ起リシナリ、三代異尺ノコトヲ白虎通ニハ夏ハ十寸、殷ハ十二寸、周ハ八寸トシ、通典ニ引リ、今本ニハ無シ）獨斷ニハ、夏ハ十寸、殷ハ九寸、周ハ八寸トシテ、其說同ジカラザレドモ、周尺ノ八寸ナルコトハ異說無シ、是周尺八寸ト云フ俗說ニ本ヅキテ附會シタレバナリ、其實ハ上古ヨリ周マデモ、尺度ノ異ナルコトハ無カリシナリ、又說文ニ、「人長八尺、故曰二丈夫一」ト云ヘリ、丈夫ト云フ言、周易・左傳以下ノ古書ニ見エタレバ、周初ヨリ八寸ノ尺有リシ如ク聞ユレドモ、周漢ノ書ニ人ノ長ヲ云ヒシヲ攷フニ、周禮（鄉大夫職）列子（黄帝篇）荀子（勸學篇）國策（趙惠文王策）呂氏春秋（上德篇）淮南子（精神訓・氾論訓・脩務訓）說苑（脩文篇）等ニハ七尺トシ、考工記（車人）淮南子（天文訓）潜夫論（卜列篇）論衡

（祀義篇）等ニハ八尺トセリ、又尋ハ八尺ナルヲ、大戴禮ニ「舒レ肘知レ尋」ト云ヘリ、凡人ノ肘ヲ舒ベタルハ、其人ノ長ト同ジキモノナレバ、是モ人長八尺ト云フニ同ジ、カク七尺ト云ヒ、八尺ト云フコト多ケレドモ、說文ヲ除キテ人ノ長ヲ一丈ト云ヒシハ、一ツモ有ルコト無シ、又丈夫ト云コトハ、「大戴禮（本命篇）ニハ「男子者言任二天地之道一、如レ長二萬物一之義也、故謂二之丈夫一、丈者長也、夫者扶也、言レ長二萬物一也」、ト云ヒ、毛詩正義（大雅甫田）ニハ「夫者有二傳相之德一、而可二倚仗一、謂二之丈夫一」ト云ヘリ、二說同ジカラザレドモ、皆丈尺ノ義ニアラズ、故ニ丈夫ト云フ言ハ、男子ト云フベキ處ニノミ云ヒテ、人ノ長ヲ云フ處ニハ云ヘルコト無シ、然ラバ丈尺ヲ以テ丈夫ノ義ヲ解キタルハ、漢人ノ俗說ニテ、唐人モ其說ヲバ用ヒザリシナリ、今丈夫ノ字ノ義マデ引出テ論ゼシハ、事煩クウルサキニ似タレドモ、八寸ノ周尺ハ俗尺ニテ、眞ノ周尺ナラヌヲ辨ゼントテノコトナリ」漢尺モ後世傳ハラザルニヨリ、先輩周漢ノ尺ヲ考ヘシニ、各家同ジカラズシテ一定ノ說無シ、今其說ドモヲ考ルニ皆非ナリ、故ニ荀勗ニ倣ヒ、古器ニ依リテ尺ヲ起サントスルニ、「魏晉ニテ用ヒシ尺謬リテ長カリシカバ、荀勗古器古錢ニヨリテ改メ作レリ、是ヲ晉ノ前尺ト云フ、其事下ニ詳ニス」周漢ノ器ノ尺度ヲ知ルベキ者、今世傳ハラズ、證トスベキモノハ唯王莽ガ錢ノミナリ、「宋史律曆志ニ丁度・胥偃・高若訥・韓琦ニ詔シテ大府寺尺、又鄧保信・阮逸・胡瑗ガ造リシ尺ヲ詳定セシメシ時、丁度等ガ上言セシヲ載セタル內ニモ、「前代制尺非二時累黍一、必求二古雅之器一、以雜校焉、晉荀勗等校二定尺度一、以二古物七品一勘定、而隋氏銷二毁金石一、典正之物罕二復存者一、夫古物之有二分寸一、明著二史籍一、可二

以辭別者、惟有錢法而已、臣謹按詳漢志・通典・唐六典云、大泉五十重十二銖、徑一寸二分、錯刀環如大泉、身形如刀、長二寸、貨布重二十五銖、長二寸五分、廣一寸、首長八分有奇、廣八分、足股長八分、間廣二分、圍好徑二分半、貨泉重五銖、徑一寸、今以大泉・錯刀・貨布・貨泉四物、相參校分寸正同、或有大小輕重與本志微差者、蓋當時盜鑄既多、不必皆中法度、但當較其首足肉好長廣分寸皆合正史者上用之、則銅斛之尺從可知矣、ト云ヘリ、玉海ニヨレバコノ上言セシハ、景祐三年十月十九日ノコトナリ、清ノ程瑤田ガ通藝錄ノ解字小記ニモ、「瑤田據食貨志、王莽所造貨布貨泉及大小泉流傳至今者、擇其薄郭完好者、互相比較定爲莽時造錢布之尺、與此皆尺、毫髮不爽、劉歆莽國師也、然則此尺實銅尺者、卽余今所定之莽尺、於是可見、莽所造錢布、無不精美也」、ト云ヘリ」是ニヨリテ今大泉五十、貨布・貨泉ノ剝蝕セザル者ヲ擇ビ參ヘ按ベテ尺寸合ヘル者ヲ以テ尺ヲ起ス、【宋史ニハ大泉・錯刀・貨布・貨泉ノ四品ニテ起スベシト云ヒタレドモ、今世錯刀ハ傳ハラザレバ三品ヲ以テ起シシナリ、按ズルニ周禮（外府）注ニ「王莽改貨而異作泉布、多至二十品」、今存於民間多者有貨布・大泉・貨泉二」、ト云ヘバ、後漢ノ時既ニコノ三品ノ外ハ多カラザリシコト知ルベシ、通藝錄ニ王莽ノ錢ニテ尺ヲ造リシコトヲ云ヒタルニモ錯刀ヲ舉セザレバ、西土ニモ今ハ傳ハラザルニヤ】其一尺ハ曲尺ノ七寸六分ナリ、近ゴロ清ノ沈彤ガ周官祿田考ヲ讀ムニ、古尺ノ圖ヲ載セテ、宋ノ秦熺ガ鐘鼎款識ノ册ニ載スルヲ摹スト云ヒ、【清ノ朱彝尊ガ曝書亭文集ニ、コノ款識ノ跋アリテ、「宋紹興中、秦相當國、其子熺伯陽居賜第、十九年日治書畫碑刻、果樹

皆其所ﾚ集」、ト云ヘリ、秦相トハ秦檜ガ事ナリ、跋ニマタ「秦氏既敗、冊歸二王厚之一、後轉入二趙子昂家一、隆慶六年、項子京獲ﾚ之、尋歸二徐國賓先生一、先生既逝、所ﾚ收書畫多散失久ﾚ之、是冊竟歸二于予一、宗ハ集中嗜ﾚ古、見前愛二玩之一、因以畀ﾚ之」、トアリ、阮元ガ揅經室集ニ、「王復齋鐘鼎款識」ト云ヘルモ即此冊ノコトナリ、阮元ガ跋ニ、「嘉慶七年、予得二此冊于吳門陸氏一」ト云ヒ、又阮元ガ仿鑄漢建初銅尺歌ノ自注ニ、「宋王復齋、鐘鼎款識、冊內有二晉前尺搨本一、其尺銘識與二周尺劉歆尺一相同、即沈冠雲據以著二周官祿田考一者、此冊今藏二予齋中一」トモアレバ、今ハ阮氏ニ藏スルコト知ラレタリ、通藝錄ニ此尺圖ノコトヲ云ヘルニモ、「阮中丞收藏宋拓本鐘鼎款識」トアリ、阮元ガ跋ニマタ「擬以二攷釋一、摹刻成ﾚ書」、ト云ヘリ、其摹刻本、予イマダ見ズ】冊ニ又尺底ノ篆文ノ銘ヲ載セテ、「一周尺。漢志劉歆銅尺。後漢建武銅尺。晉前尺、並同」、トアリト云ヘリ、【此銘文、淸ノ阮元ガ積古齋鐘鼎款識ニ摹シ出セルハ、首ノ一ノ字ハ無ク、周尺以下ノ十九字ニテ、沈彤ガ書ニ載セタル銘文ノ首ニ、一ノ字多キハ誤リ衍シタルナリト云ヘリ】、按ズルニ尺銘ノ劉歆銅尺ハ劉歆銅斛尺ト云フベシ、荀勗ガ晉前尺ノ銘ニ、古器七品ニテ校セシコトヲ云ヒテ、其目ヲ擧シニハ、銅斛トアリ、漢書（律歷志）ニ銅斛ヲ深尺ト云ヘルニヨリテ、荀勗コノ斛ノ深サヲモ古尺ヲ起スーツノ證トナシシニテ（荀勗ガ尺ノ銘全文下ニ載ス）劉歆ガ作リシ銅尺ノ傳ハリシニハアラズ、隋書（律曆志）ニ十五等ノ尺ヲ載セタルニハ、荀勗ガ尺ヲ第一ニ列シテ。「一周尺。漢志王莽時劉歆銅斛尺。後漢建武銅尺。晉泰始十年荀勗律尺、爲二晉前尺祖沖之所ﾚ傳銅尺一」ト云ヘリ、（一トハ十五等ノ尺ヲ並ベ擧タルニ、

此尺ヲ最初ニ載セタル故ニ一ト云ヒ、其次ヲバ二某尺、三某尺ト云ヘリ）隋書ノ銅斛ハ王莽ノ時劉歆ガ作リタル物ナレバ、隋書ニカクハ云ヘルナリ、秦熺ガ款識ノ尺ノ銘ハ隋書ノ文ヲ節略シタルナレバ、漢志王莽時ノ五字ヲバ删ルトモ、必銅斛尺ト云フベキニ、斛字ヲモ删リテ劉歆銅尺ト云ヒシハ非ナリ、モシ今一字ヲ删ラントナラバ、劉歆斛尺ト云フベシ、魏尺ノ條ニハ、隋書ニモ晋書ニモ此尺ヲ劉歆銅斛尺ト云ヘリ】沈氏コノ尺ヲ宋ノ高若訥ガ造リシ尺ナリトス、【高若訥ガ尺ハ玉海ニ、實錄ノ高若訥ガ傳ヲ引テ、「皇祐中詔累レ黍定レ尺、以制二鐘律一、爭論連年不レ決、若訥以二漢貨泉度一寸一依二隋書一定二尺十五種一上レ之」、ト云ヒシモノナリ、（宋史志傳略同ジ）阮元ハ秦熺ガ款識ニ載セタル尺ヲ晋銅尺ト云ヒ、（其說ニ引キタル江永ガ言ニモ、程瑤田ガ通藝錄ニモ、皆晋尺ト云ヘリ、晋ノ荀勗ガ尺ノ銘ハ八十二字アリテ、其文晋書ニ載セタレバ、全文晋前尺ノ條ニ引リ）此尺ハ荀勗ガ尺ニ非ザルコト明ラカニテ惑フベキニアラズ、然ラバ秦熺ガ款識ノ尺ハ宋ノ時高若訥ガ作リシ尺ナレドモ、其長サ荀勗ガ尺ト同ジキニヨリテ、即晋尺トハ云ヒシナルベシ」是モ其長サ曲尺七寸六分ニテ、【積古齋款識ニ此尺ノ五寸ノ圖ヲ出シテ、「右晋尺之半、可レ以此倍レ之、可レ得二其全度一」トアリ、今曲尺ニテ其圖ヲ度ルニ、三寸七分五釐コレヲ倍スレバ七寸五分ナリ、然レドモ其圖粗略ニシテ、周官祿田考ノ圖ノ精細ナルニ及バズ、阮氏ハ銘文ヲ摹スルヲ專トシ、沈氏ハ長短ヲ考ルヲ主トスレバナルベシ、故ニ今沈氏ガ圖ニ從ヒテ、曲尺七寸六分ト定メシナリ】是ヲ清今尺ニテ度レバ、七寸二分弱ナルヲ、沈彤ガ言ニ、「古尺較二今尺一止七寸四分」ト云ヘリ、是ハ清今尺ノ七寸四分ナル匠尺ヲ

（下ノ漢官尺ノ條ニ詳ニス）孔尙任ガ漢銅尺記ニ、「與周尺同」ト云ヒシ、謬說ニ（是モ下ニ引リ）誤ラレテ秦熺ガ尺圖ヲバ度リ試ミズシテ、秦熺ガ尺ハ周尺ト同ジケレバ、慮俿尺ト同ジク七寸四分ナラント、偶思ヒ誤リシナルベシ、サレドモ尺圖ノ長サハ誤ラザレバ、其言ノ誤ナルコト明ケシ】余ガ王莽ノ錢ヲ以テ起シタル尺ト全同ジ】又朱熹ガ家禮ノ卷首ニ、後人ノ附ケタル宋ノ潘時擧ガ尺式アリ、【嘉定癸酉季秋乙卯臨海潘時擧仲善父式ト題ス】司馬光ガ家ノ石刻ノ古尺ノ圖ニアル言トテ、【玉海ニ、「近歲司馬備刻周尺漢劉歆尺晉前尺蓋文正公光舊物也、」トアルモノナリ】「周尺當三司布帛尺七寸五分弱、當浙尺八寸四分」ト載セタリ、七寸五分弱ト云ヒシ弱ノホド、幾何ナリシカ知リ難ケレバ、布帛尺ヨリ計リシハ姑ク置ク、浙尺ハ曲尺九寸〇四氂ナレバ【浙尺ノコト下ニ詳ニス】其八寸四分ナル周尺ハ曲尺七寸五分九氂三毫六絲ナリ、又同圖ニ「三司布帛尺卽是省尺、又名京尺、當周尺一尺三寸四分」ト云ヘリ、三司布帛尺ハ曲尺一尺〇二分一氂五毫二絲ナリ、【三司布帛尺ノコト下ニ詳ニス】是ヲ一尺三寸四分ニ分チテ、周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸六分二氂三毫二絲八忽餘ナリ、【是ニヨリテ「周尺當三司布帛尺七寸五分弱」ト云ヒシ七寸五分弱ヲ計レバ、七寸四分六氂二毫六絲八忽餘ナリ】司馬光ガ周尺ハ卽高若訥ガ尺ナレドモ【律呂新書ニ、「今司馬公所傳此尺者、出於王莽之法錢、蓋丁度所奏高若訥所定者也、」ト云ヘリ】其比挍少シノ牴牾アルハ、算法ニテ計ラズ、目巧ニテ定メシ故ナリ、【司馬光ガ圖、皆豪氂ヲ云ハザルニテ、算法ヲ以テ計ラザルヲ知ル】若司馬光ヲシテ曲尺ニテ度ラセタランニハ、必七寸六分ト云フベシ

ヲ、漢書【律暦志】ニ書載ヲ漢尺ト云ヘリ、【是王莽ガ銅斛ニテ劉歆ガ校セシモノナリ】コノ尺清マデ傳ハリタルヲ西清古鑑ニ載セテ、「漢今尺七寸二分」ト云ヘリ、【其圖中卷ニ出ス】清ノ今尺ハ、曲尺一尺〇六分ナレバ、【詳ニ下ニ見ユ】ソノ七寸二分ハ曲尺七寸六分三釐二毫ナリ、是ハ尺度ノ鑄ニ度リシニアラザレバ、大凡ニ云ヘルモノナルベシ、「是書諸器ヲ度リシニ、皆釐毫ヲ云ハザルニテ、大凡ニ云ヒシヲ知ルベシ、曲尺七寸六分ヲ清ノ今尺ニテ度ル時ハ、七寸一分六釐九毫八絲一忽強ナレバ、大凡ニ計リタランニハ、七寸二分ト云フベシ】故ニ今ハ王莽ガ錢ト泥形ガ圖トニヨリテ、曲尺七寸六分ト定ムルナリ、【下ニ載セタル晉前尺ハ、漢官尺ナリ、隋書ニ漢官尺ハ「比晉前尺一尺三分七毫」トアルニヨリテ、晉前尺ヨリ周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸六分一釐〇三絲六忽強、又王水ガ云フ所ノ古尺ヲ漢官尺トシテ周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸六分三釐三毫四絲三忽有奇、又法隆寺ノ尺八ヨリ起シタル唐小尺ヲ玉海ニヨリテ晉前尺ノ一尺〇六分三釐トシテ周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸六分〇四毫一絲六忽餘、又コノ唐小尺ヲ卽宋氏尺トシ、隋書ニ「宋氏尺比晉前尺六分四釐」トアルニヨリテ、周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸五分九釐七毫一絲一忽餘ナリ、（唐小尺ハ卽宋氏尺ナルコト下ニ詳ニス）是等ヨリ求ムルモ大ニ違ハズ】

漢官尺 後漢ノ章帝ノ時作リシ尺ヲ漢官尺ト云フ、曲尺七寸八分三釐三毫三絲三忽【隋書（律暦志）ニ漢官尺ハ「實比晉前尺一尺三分七毫、蕭吉樂譜云、漢章帝時零陵文學史奚景於冷道縣舜廟下得玉律度爲此尺」ト云ヘリ、晉書（律暦志）モ同ジ、但比晉前尺云云ト云フコトハ無クテ、「以校荀勗尺、勗尺短四分、

漢官始平兩尺、長短度同」トアリ、是ニヨリテ計レバ曲尺ノ七寸九分一釐六毫六絲六忽不盡ナリ、按ズルニ大戴禮注ニハ、コノ事ヲ明帝ノ時ト云ヒタレドモ、風俗通漢書孟康注宋書樂志等皆章帝ノ時トアルコト、蕭吉樂譜ト同ジケレバ、明帝ノ時ト云ヒシハ誤ナルベシ、又按ズルニ玉律ニヨリテ改メ作リシ尺ノ晉前尺ノ一尺〇三分〇七毫ナルヲ以テ見レバ、章帝ノ時謬長シテ一尺〇四五分ニモ至リシ故ニ、玉律ニヨリテカクハ改メタルナラン、然レドモ其尺ノ三分〇七毫長カリシヲ見レバ、彼玉律モ猶後漢ノ物ニテ、前漢以上ノ物ニハアルベカラズ】清ノ孔尙任ガ得タル慮虒ノ銅尺ハ【孔尙任ガ湖海集ニ、漢銅尺記アリ、其略ニ「江都閔義行博雅好古、所藏銅尺、一朱碧繡錯、爲賞鑒家所玩、余旣得之、乃不敢以玩物畜焉、此尺有文曰、慮虒【原注音臚夷】銅尺建初六年八月十五日造、慮虒乃今五臺邑、建初則東漢章帝號也、考、章帝時、冷道舜祠下得玉律、以爲尺與周尺同、因鑄爲銅尺、頒郡國、謂之漢官尺、此或其遺與」ト云ヘリ、按ズルニ隋志ニハ、「漢官尺實比晉前尺一尺三分七毫」ト云ヒ、晉志ニハ、按荀勗尺ハ、勗尺短四分」ト云ヘリ、然ルヲ孔氏ノ漢官尺ヲ「與周尺同」ト云ヒシハ、何ニ據リタルニカ、「因鑄爲銅尺頒郡國」ト云フ事モ出所ヲ見ズ、疑ラクハ慮虒銅尺ハ即漢官尺ナルコトヲ固クセントテ、如此云ヒ、又此尺ノ光輝ヲ增ントテ、「與周尺同」ト云ヒシニテ、皆孔氏ノ强說ナルベシ、此尺ノ事ヲ王子禎ガ居易錄ニ、「國子監博士孔尙任字東塘曲阜聖裔、博雅好古、丙寅丁卯間、從故工部侍郎孫屺瞻在豐、治下河、在江都、得漢銅尺」ト云ヘリ、然ラバ孔尙任ガ此尺ヲ得タルハ、康熙二十五六年ノ間ノ

コトナリ】其長サ曲尺七寸八分四釐四豪、【孔尙任ガ則尺譜ニ、此尺ヲ「當二今工匠尺七寸四分一、當二今官尺
六寸七分一二」ト云ヘリ、淸工匠尺ハ卽淸今尺ニテ、曲尺ノ一尺〇六分ナレバ、其七寸四分ハ、曲尺七寸八分
四釐四豪ナリ、又友人伊澤蘭軒（信恬）淸ノ裁尺ヲ藏ス、淸今尺ヲ以テ比ブルニ、淸今尺ノ七寸四分ハ其
六寸六分七釐餘ニ當レバ、孔氏ガ言ト略合ヘリ、又通藝錄ニ、江永ガ言ヲ引テ、「曲阜孔氏所レ藏虞虒銅尺、
以較二此晉尺一、長二一分强一」ト云ヘリ、晉尺ハ秦熺ガ款識ニ載セタル高若訥ガ尺ニシテ、淸今尺ノ七寸一分六
釐九豪八絲一忽强、虞虒尺ハ淸今尺ノ七寸四分ナレバ、淸今尺ニテハ二分三釐〇一絲九忽弱長キヲ云ヘル
ニテ、晉前尺ヨリ計レバ三分二釐一豪〇五忽餘長キナリ、隋志ニ漢官尺ヲ「比二晉前尺一尺三分七豪一」ト
云ヒシト、纔ニ一釐四豪有奇ノ異ナリ、又翁方綱ガ兩漢金石記ニ、今者維足證ヲ載セテ、「以二建初尺一度レ
之、通計高六寸、以二今營造尺一度レ之、通高四寸四分耳、」ト云ヘリ、今營造尺モ今工匠尺ト同ジク卽淸今
尺ナリ、淸今尺ノ四寸四分ヲ虞虒尺ノ六寸トスレバ、虞虒尺ノ長サ淸今尺ノ七寸三分三釐三豪三絲三忽不
盡ニテ、孔尙任ガ度リシニ比ブレバ、六釐六豪六絲六忽不盡短シ、恐ラクハ此銘虞虒尺ノ六寸ト云ヒタレ
ドモ、實ハ五寸九分七八釐ニテ淸今尺ニテ度レバ、四寸四分一二釐ナリシヲ收メテ、カクハ云ヒシナルベ
シ】卽漢官尺ナリ、【建初ハ章帝ノ年號ニテ、其長サモ略合ヒタレバ、虞虒尺ノ漢官尺ナルコト疑無シ、然
ルニ兩漢金石記ニ、一沈宗雲著二則官識一因考ハ、所レ繪古尺圖、實ニ與二此建初尺一無レ二、寶晉齋所レ摹刻非二此建初
尺一、而今驗二其圖一正相合、則建初尺之卽建武尺尤爲レ足レ信矣」、ト云ヒ、淸ノ錢塘ガ律呂古義ニ「今曲阜孔

氏所レ藏漢慮虒銅尺、建初六年八月造、當二今工匠尺七寸四分一、與二晉志云晉前尺即劉歆鐘律尺、（鐘律尺ハ銅斛尺ノ誤ナリ）建武銅尺者一正同、即司馬公家周尺亦無レ不レ同也」、ト云ヒ、積古齋鐘鼎款識ニ、周槃ガ言ヲ引タルニモ、曲阜孔氏所レ弆銅尺與二冠軍所レ用尺一同」ト云ヒ、金石萃編ニモ慮虒尺ヲ「按二建武尺一豪釐無レ爽」ト云ヒタルハ皆周官祿田考ノ圖ヲバ度ラズシテ、沈彤ガ誤テ今尺七寸四分ト云ヘル言ニツキテ、彼秦熺ガ款識ノ尺モ慮虒尺モ共ニ、淸今尺ノ七寸四分ナリト思ヒテ、カクハ誤リシナルベシ、（沈彤ガ言ノ誤ナルコトハ上ニ辨ゼリ）サレドモ汪永ハ慮虒尺ヲ「較二晉尺一長二分強」ト云ヒ、淸ノ陳經ガ求古精舍金石圖ニハ、「建初尺與二晉尺一略異」トモ云ヘリ、又西淸古鑑ニ王莽ガ銅斛ヲ「深今尺七寸二分」トアレバ、（實ハ七寸二分弱ナルベキコト上ニ云ヘリ）今尺七寸四分ナル慮虒尺ヲ即晉前尺・銅斛尺・建武尺・司馬光ガ尺（即高若訥ガ尺ナリ）トシタルハ誤ナリ、是ハ孔尙任ガ慮虒尺ヲ「與二周尺一同」ト云ヒシ誣說ヲ承テ誤リシモノナルベシ、律呂正義ニ載セタル淸今尺ヲ以テ、周官祿田考ノ圖ヲ度リ見バ、其誤辨ゼズシテオノヅカラ明ナリ、】又唐ノ王冰ガ云ヒシ古尺モ略同ジケレバ、是モ漢官尺ナルベシ、【素問（六節藏象論）ノ注ニ、史記律書ニ「黃鐘之管九寸」トアルヲ引キテ、「古之九寸今之七寸三分」ト云ヘリ、唐ノ大尺ノ七寸三分ハ曲尺七寸〇八釐一豪ニテ、ソレヲ九寸トシタル古尺ハ、曲尺七寸八分六釐七豪七絲七忽不盡ナレバ是モ漢官尺ナルベシ、釐豪ヲ云ハザルハ大凡ニ計リタルナルベケレバ、少シノ異ハ有ルベシ

魏尺魏ノ尺ハ【三國ノ魏ナリ、曹魏トモ云フ】曲尺七寸九分五釐七豪二絲【隋志ニ魏尺杜夔所レ用調律尺、

比二晉前尺一尺四分七氂一、魏陳留王景元四年、劉徽注二九章一云、王莽時劉歆斛尺弱二於今尺一四分五氂、比二魏尺一其斛深九寸五分五氂、卽荀勗所レ云杜夔尺、長二於今尺一四分半是也」、ト云ヘリ、(今本ノ隋志ニハ四分五氂ヲ誤リテ四寸五氂トアリ、今ハ文獻通考ニ引タルト晉志トニ依リテ改ム) 今傳ハル九章算術注ヲ考ルニ、此ニ引タルハ商功ノ條ノ文ナリ、今本ニハ「王莽銅斛於二今尺一爲レ深九寸五分五氂」トアリテ、「劉歆斛尺弱二於今尺一四分五氂」ト云フ文ハ無シ、「杜夔尺長二於今尺一四分半」トアルハ「長二於古尺一」トアリシヲ誤リタルナリ、隋志ニ又徐廣・徐爰。王隱等ガ晉書ヲ引テ、荀勗後漢ヨリ魏ニ至リテ、尺ノ古ヨリ長キコト四分有餘ナルヲ知ルト云ヘル (全文下ニ引リ) 卽此事ナリ、晉志ニモ「卽荀勗所謂今尺長四分半是也」ト云ヘリ、按ズルニ「魏景元四年、劉徽注九章」ト云フコト、晉書モ同ジ、然レドモ九章算術ノ方田ノ注ニ、晉ノ武庫中ニ、漢ノ王莽ガ作リシ銅斛ノアリシコトヲ云ヘバ、劉徽晉ニ入リシ後、又刪損アリシナリト、四庫全書提要ニ云ヘリ】漢官尺ノ年ヲ經テ稍長セシナリ

晉前尺 晉ノ時モ猶此尺ヲ用ヒシニ樂律ノ和セザリシカバ、荀勗尺ノ稍長シタルヲ考ヘ知リテ、古器古尺古錢ニ依リテ改メ作レリ、【隋志候氣ノ條ニハ、「至二于後漢一尺度稍長、魏代杜夔亦製二律呂一、以レ之候レ氣、灰悉不レ飛、晉光祿大夫荀勗得二古銅管一、校二新レ制、長レ古四分、方知不レ謬、華出二其誤一乃依二周禮一更造二古尺一用レ之、定レ管聲韻始調、」ト云ヒ、(荀勗ガ尺ノ銘ニヨレバ古銅管トアルハ古玉管ノ誤ナルベシ) 審度ノ條ニハ、「周尺。漢志王莽時劉歆銅斛尺。後漢建武銅尺。晉泰始十年荀勗律尺、爲二晉前尺一祖沖之所レ傳銅尺 (祖沖之ハ

劉宋ノ時ノ人ニテ其傳ヘタリシ銅尺ハ、即荀勗ガ作リシ尺ナリ）ヲ皆同ジトシ、又徐廣・徐爰・王隱等ガ晉書ヲ引テ、「晉武帝泰始九年、中書監荀勗校二大樂一、八音不レ和、始知レ爲二後漢至レ魏尺長一於古二四分有餘上、勗乃部著作郎劉恭一、依二周禮一制レ尺、所謂古尺也、依二古尺一更ニ鑄二銅律呂一、以調二聲韻一、以レ尺量二古器一、與二本銘尺寸一無レ差、又汲郡盜二發魏襄王冢一、得二古周時、玉律及鐘磬一、與二新律一、聲韻闇同、于時郡國或得二漢時故鐘一、吹二新律一命レ之皆應」ト云ヒ、又梁武帝ノ鐘律緯ヲ引テ、祖沖之所レ傳銅尺、其銘曰、晉泰始十年中書考二古器一揆ト校、今尺長四分半、所レ校古法有二七品一、一曰、姑洗玉律・二曰、小呂玉律・三曰、西京銅望臬・四曰、金錯望臬・五曰、銅斛・六曰、古錢・七曰、建武銅尺・姑洗微強、西京望臬ハ微弱ク、其餘與二此尺一同、【「本銘十二字」】此尺ハ勗ガ新尺也、今尺者杜夔ガ尺也、」ト云ヘリ、尺度ノ謬リシヲ改正スルコト、是ヲ始トス」其長サ曲尺七寸六分、所謂晉前尺ナリ、【此尺後世傳ハラズ、其攷ヘシ古器モ今知ルベカラザレドモ、王莽ガ銅斛ト錢トニヨリタレバ、其長サ曲尺七寸六分ナルコト知ルベシ】是ニヨリテ裴頠度量權衡ヲ改ムベシト奏シケレドモ用ヒラレザリキ、【晉書裴頠傳ニ、「勗之脩二律度一也、檢二得古尺一短二世所レ用四分有餘、頠上言宜レ改二度量大醫權衡一、不レ見レ省」、ト云ヘリ】

[始平銅尺]荀勗彼尺ニテ鐘律ヲ作リシニ、阮咸ハ其聲ヲ高シト譏レリ、其後始平ト云フ處ニテ、地ヲ掘リテ銅尺ヲ得タリシニ、荀勗ガ尺ニ校ブレバ、勗ガ尺ハ四分短カリシカバ【荀勗ガ尺ニ校ベシニ荀勗ガ尺四分短クバ、荀勗ガ尺ハ始平ノ尺ノ九寸六分ナリ、然ラバ始平ノ尺ハ荀勗ガ尺ニ比ブレバ、一尺〇四分一毫六

豪六絲六忽不盡ニテ、曲尺七寸九分一毫六豪六絲六忽不盡ナリ】時人阮咸ガ晉律ニ妙ナリシヲ感ジタリトゾ、【隋志ニ傳暢ガ晉諸公讚ヲ引テ、「荀勗造ニ鍾律ニ時、人並稱ニ其精密ニ、惟陳留阮咸譏ニ其聲高ニ、後始平掘ニ地得ニ古銅尺ニ、歲久欲腐、以校ニ荀勗今尺ニ短四分、時人以ニ咸爲ニ解ニ」ト云ヘリ（今本ノ隋志ニハ四分ノ上ニ校字ヲ脱ス、今晉說注ニ引タルニヨリテ補レリ）此事ヲ晉志ニハ、「勗作ニ新鍾律ニ、與ニ古器ニ諧韻、時人稱ニ其精密ニ、惟散騎侍郎陳留阮咸譏ニ其聲高ニ、高則悲、非ニ興國之音ニ、亡國之音哀以思、其人困、今聲不レ合レ雅、懼非ニ德正至和之音ニ、必古今尺有ニ長短ニ所レ致也、會咸病卒、武帝以ニ勗律與ニ周漢器ニ合ニ故、施ニ用之ニ、後始平掘レ地得ニ古銅尺ニ、歲久欲腐、不レ知ニ所レ出何代ニ、果長ニ勗尺ニ四分、時人服ニ咸之妙、而莫ニ能厝ニ意焉、」トアリ、晉志ニ度量權衡ヲ云ヒシハ、皆隋志ノ文ヲ節略シテ載セタリト見ユルニ、此處ノミ隋志ヨリ委シキハ別ニ據リドコロアリシナラン、今並ベ擧テ考ニ備フ】然レドモ荀勗ガ尺ハ、古器ニ依リタレバ、其尺ニテ作リシ律管、周漢ノ樂器ト、其聲諧同ジカリシナリ、【隋志ノ文上ニ引リ】サレバ其尺正度ヲ得タリシコト明ラケシ、【武帝阮咸ガ譏ヲ用ヒズシテ、荀勗ガ律ヲ施行セシハ誠ニ然アルベキ事ナリ】阮咸ガ律ハ、始平ニテ得シ尺ニ合ヘルノミニテ、正律ニハアラザリシナリ、【晉書ニ此事ヲ論ジテ、「勗於ニ千歲之外ニ、推ニ百代之法ニ、度數既寛、實相ニ符契ニ、可レ謂ニ切密ニ信而有レ徴也、而時人寡レ識、據ニ無聞之一尺ニ、忽ニ周漢之兩器ニ、雷同臧否、何其謬哉、」ト云ヒシハ、ゲニサルコトナリ、荻生氏ノ度考ニ「我阮咸素諳ニ音律ニ、其傳樂器皆ニ阮咸ニ者、謂咸所レ造、（此說誤ナリ、然レドモソココニ用無ケレバ論ゼズ）其樂器ニ雅樂所レ

用、未レ知咸於二音律一如何、世又傳下咸議二荀勗一之言上、然未レ知下咸以二何尺一爲上レ是、咸死後始平得二古銅尺一、於レ是世爭稱二咸之妙一、然非下咸以二此尺一爲上レ善、畢竟世人臆度之言無レ憑甚矣、但世賤二荀勗之爲一レ人、而晉尋喪亂、咸爲二竹林之一一、時論附レ之、故此説遂傳耳、羿爲二簒逆一、而射稱二萬世一（夏后相ヲ滅シテ其位ヲ簒ヒシ羿ハ、十日ヲ射大風ヲ繳セシ羿トハ別人ナレバ、此ニ云フ所ハ誤レリ、然レドモ今用無ケレバ詳ニ辨ゼズ）古不下以レ人廢上レ言、況藝乎」ト云ヘリ、是論モ理明ナリ、按ズルニ、隋志ニ晉時始平掘レ地得タル古銅尺ヲ漢官尺ト同ジトシ、晉志ニモ「漢官。始平兩尺長短度同」ト云ヘリ、今計ルニ、始平尺ハ漢官尺ヨリハ八氂三豪三絲四忽餘長ケレバ、其實ハ古尺ニハアラデ、即漢官尺ノ少シク謡長セシ者ナルベシ、又按ズルニ晉書阮咸傳ニ、「荀勗每與レ咸論二音律一、自以レ爲遠不レ及也、疾レ之出補二始平太守一」トアリ、荀勗ハ古器ニヨリテ律ヲ定メシニ、阮咸ガコレヲ高シト譏リシハ己ガ耳ヲ以テ計リシノミニテ、別ニ徵スル所無キヲ以テ見レバ、荀勗ガ律ヲ定メシ時、阮咸無根ノ異説ヲ出シテ是ヲ譏リシニ、雷同スル人モ多カリシカバ、音律ヲ定ムル妨ナリシ故、阮咸ヲ出シテ始平太守ニ補シ、其障ヲ除キシモノナラン、荀勗阮咸ト律ヲ論ゼシニ遠ク及バザリシカバ、疾ミテ始平太守ニ補セシトアルハ、カノ「以レ咸爲レ解」ト云ヒシ類ナルベシ、又阮咸ガ始平太守ニ補シタリシニ依リテ考フレバ、後ニ始平ニテ掘得シ尺ハ、荀勗ノ定メシ尺ヲ阮咸ガ肯ハズシテ、別ニ作リシ尺ノ地中ニ埋レタリシニハアラザルニヤ

［田父玉尺］其後田父ノ地中ヨリ得タリシ玉尺ハ、曲尺七寸六分五氂三豪二絲【隋志ニ晉田父玉尺、實ニ比二

晉前尺一尺七釐一世説稱有二田父一、於二野地中一得二周時玉尺一、便是天下正尺、荀勗試以校二己所レ治金石絲竹一、皆短校二一米一」ト云ヘリ、（今本ノ隋志ニ「校己所治」ヲ「校尺所造」トアリ、字形ノ近クテ誤リシナリ、今世説ニヨリテ改ム、晉志ニモ「校己所治」トアレバ今本ノ隋志ハ轉寫ノ誤ナルコト疑無シ）校ズルニ此尺ヲ周時玉尺トアレドモ、莽武尺ヨリ曲尺五釐三毫一絲長ケレバ、周ノ時ノ物ニハアラデ、後漢ノ初ツガタ、イマダ甚長甚シカラザリシホドノ物ナルベシ、荻生氏度攷ニ「世説[illegible]數レ之、以爲二周時玉尺一只是相傳言レ之、以爲二天下正尺一、亦劉義恭ガ語別ニ無レ據、隋志亦疑而不レ決、以下其比二晉前尺一少上レ贏左、故列二第二一」ト云ヘリ、サモアルベキコトナリ】是ニヨリテ尚書古ヲ以テ正スベシト奏シケルニ、潘岳ガ今ノ尺ハ用ヒ慣レテ久シケレバ改ムベカラズト云ヒシヲ、摯虞ハ奏スル所ノ如クスベシト駁シタリ、【晉書摯虞傳ニ、「將作大匠陳勰掘レ地得二古尺一、尚書奏、今尺長二於古尺一、宜下以レ古爲上レ正、潘岳以爲舊用已久、不レ宜二復改一、虞駁曰、昔聖人有下以見二天下之賾一、而擬二其形容一、象レ物制レ器以存二時用一、故參レ天兩レ地、以正二算數之紀一、依レ律計レ分、以定二長短之度一、其作レ之也有レ則、改用レ之也有レ徵、考二步兩儀一、則天地無レ所レ隱二其情一、準二正三辰一、則懸象無レ所レ容二其謬一、施二之金石一、則音韻和諧、措二之規矩一、則器用合レ宜、一本不レ差而萬物皆正、及二其差一也事皆反レ是、今尺長二於古尺一幾二於半寸一、樂府用レ之律呂不レ合、史官用レ之曆象失レ占、醫署用レ之孔穴乖錯、此三者度量之所二由生一、得失之所レ取レ徵、皆絓閡而不レ得レ通、故宜レ改レ今而從レ古也、唐虞之制、同二律度量衡一、仲尼之訓、謹二權審一レ度、今兩尺並用、不レ可レ謂二之同一、知レ失而行、不レ可レ謂二之謹一、

不レ同不レ讙、是謂レ謬レ法、非レ所三以軌レ物垂レ則、示二人之極一、凡物有二多而易一レ改、亦有二少而難一レ變、亦有二改而致一レ煩、有二變而之一レ簡、度量是人所二常用一、而長短非三人所二戀惜一、是而易レ改者也、正二矢於得一、反二邪於正一、一時之變永世無レ二、是變而之レ簡者也、憲章成式、不レ失二舊物一、季末苟合之制、異端雜亂之用、當三以レ時釐改貞二夫一一者也、臣以レ爲宜レ如レ所レ奏、」ト云ヘリ、荻生氏度攷ニ、「陳勰揣レ地、得二古尺一、即用父王尺也、」トアリ】サレドモ史ニ尺ヲ改メシコトヲ載セズ、此後モ猶譌長ノ尺ヲ用ヒタレバ、其言用ヒラレザリシナリ、【按ズルニ尺ノ譌長シタランニハ、樂律ノタガフ事ハアルベシ、律ノ高低ニ依リテ國ノ興亡スルト云フハ、儒者ノ常言ナレドモ、國ノ興亡ハ政ノ善惡ニアリテ、律ノ高低ニアヅカルベキニ非ズ、サレドモ是ハ西土ノ常ナレバ、サモ云フベケレドモ、樂律ハ既ニ荀勗ガ尺ニヨリテ改メタレバ、(此事上ニ見ユ) 今カク云フベカラズ、又測景尺ハ人ノ造リテ天度ヲソレニ合セシモノナレバ、始定ムル時ノ定ニ從ヒテ、何レノ尺ニテモ害無キモノニテ、尺ノ長短ニヨリテ、暦家ノタガフモノニ非ズ、今淸ノ古尺モ、今尺モ實ハ古尺トハ異ナレドモ、暦家ノ事ハ前代ニ比ブレバ詳ヲ加ヘ、皇國近代ノ測影尺ハ、曲尺ヲ用フレドモ、測量タガフ事無キニテ、尺ノ長短ニアヅカラザルヲ知ルベシ、摯虞是等ノ事ヲ引出テ論ゼシハイカガ、其奏セシ論當ラヌ事ナレバ、其言ノ用ヒラレザリシハ宜ナル哉、モシ摯虞古尺ヲ用フベキヲ論ゼントナラバ、今ノ尺ノ古ニ合ハヌコトヲ云ヒテ、既ニ荀勗ガ尺ヲ以テ律ヲ改メタル上ハ、常用ノ尺ヲモソレニ從ヒテ改ムベシ、常用尺ノ譌長シタルヲ知ナガラ、兩尺ヲ並ベ用ヒンハ、堯舜ノ制ニモ、孔子ノ訓ニモタガフベケレ

パ、奏スル如クスベシト論ジテアルベキナリ、然レドモ民間ニ用ヒ慣レタル尺ハ禁ズレドモ改メ難キモノ行見エテ、後魏ニテ長尺ヲ用ヒシニ後ニ其古ニ非ザルヲ知リテ改メ、又後周ニテモ玉尺鐵尺ヲ造リタレドモ、猶市中ニハ後魏ノ長尺ヲ便ナリトシテ用ヒシ故、隋唐ニテハ遂ニ傳來ノ古尺ト、後魏ノ長尺トヲ並ベ用ヒシニ、後ニハ古尺ハ絶タルガ如クニテ、長尺ヲノミ用フルナリ、然ラバ載堉ガ論ニ從ヒテ尺ヲ改メタリトモ、恐ラクハ行ハレザルベシ】

【晉後尺】晉元帝江東ニ遷リシ後用ヒシ尺ハ曲尺八寸〇七氂一毫二絲、晉後尺是ナリ、【隋志ニ「晉後尺、實比二晉前尺一尺六分二氂一、蕭吉云、晉氏江東所レ用、」ト云ヘリ】元帝ノ時劉曜僭號シテ國ヲ趙ト云フ、【詳ニ晉書載記ニ出ヅ】ソノ光初中ニ渾天儀土圭ヲ作リシ尺ハ曲尺七寸九分八氂、趙劉曜渾儀尺【隋志ニ「趙劉曜渾天儀土圭尺長二於梁法尺一四分三氂實比二晉前尺一尺五分一、梁武鐘律緯云、宋武平中原送渾天儀土圭一云、是張衡所レ作、驗二渾儀銘題一、是光初四年、鑄土圭是光初八年作、並是劉曜所レ制、非二張衡一也、制以爲レ尺、長二今新尺一四分三氂、短二俗間尺一二分、新尺謂二梁法尺一也」ト云ヘリ、劉曜ガ光初四年ハ、晉元帝ノ大興四年ニ當リ、光初八年ハ元帝ノ大寧三年ニ當レリ、梁法尺ヨリ計リシニヨレバ、曲尺七寸九分八氂二毫二絲八忽餘、梁俗間尺ヨリ計リシニヨレバ、曲尺七寸九分七氂六毫八絲有奇ナリ】荀勗ガ尺ハ、音律ヲ調ヘシノミニテ、民間ニハ流布セザリシ故、江東ニテ用ヒシ尺モ、劉曜ガ尺モ、晉前尺ト稍近シ、皆新尺ヲ承用ヒシガ稍長シタルモノナリ、【晉志ニ「荀勗新尺、惟以調二音律一、至二於人間一、未二甚流布一、故江左及劉曜儀表並

與魏尺略相依準」、ト云ヘリ、江左ハ卽江東ノコトナリ】

宋氏尺 晉亡ビテ宋ノ代、【南宋トモ劉宋トモ云フ】用ヒシ尺ハ、又少シク譌長シテ曲尺八寸〇八氂六毫四絲、謂ユル宋氏尺ナリ、【隋志ニ宋氏尺實比晉前尺一尺六分四氂、此宋代人間所用尺、傳入齋梁陳以制樂律」ト云ヘリ、宋ノ錢樂之ガ渾天儀尺モ此尺ト同ジト同書ニ見ユ、卽當時ノ尺ヲ用ヒシナリ】南齊・梁・陳モ皆此尺ヲ用ヒタリ【隋志ノ文上ニ見ユ】

梁法尺 梁ニ又法尺ト云フ尺アリ、是ハ昔ヨリ周ノ時ノ物ト云ヒ傳ヘタル銅尺ト、古玉律トノ有リツルニ、銅尺ハ失タリシカバ、玉律ニ據リテ武帝ノ造リシ尺ナリ、祖沖之ガ傳ヘ持タル荀勗ガ尺ニ校シニ、半分長カリシト云ヘリ、曲尺七寸六分五氂三毫二絲【隋志ニ、梁法尺實比晉前尺一尺七氂、梁武帝鐘律緯稱主衣從上相承、有周時銅尺一枚、古玉律八枚、檢主衣周尺東昏用爲章信尺、不復存、玉律一口蕭餘定七枚、夾鐘有昔題刻、迺制爲尺、以相參驗、取細毫中黍積、次訓定今之最爲詳密、長祖沖之尺校半分以新尺、制爲四器、名爲通、又依新尺爲笛以命古鐘、按刻夷則以笛命、飲和韻夷則定合、」ト載セ、玉海ニモ「鐘律緯辨宗第一」ト引テ（荻生氏曰、辨宗蓋篇名）主衣云、從上相承、有周時銅尺一枚古玉律八枚、尺不復存、夾鐘玉琯有昔題刻、迺制爲尺、以相參驗、長祖沖之尺、校半分以今爲鐘者、莫能取齊、律管之妙罕有能知、京房ガ準法傳而莫曉、今以新尺證分毫、製爲四器、名之爲通、」ト載セタリ、荻生氏度考ニ玉海ニ引タルヲ載セテ、「隋書律曆志亦載之、但文錯誤、不可讀、故今

載ニ玉海文ニ、ト云ヘリ、隋志ノ文讀メ難ケレバ、荻生氏ノ云ヒシ如ク錯誤アルナラン、然レドモ玉海ニ載セタルモ、鍾律緯ノ舊文ノママトモ見エザレバ、今兩ナガラ引テ考ニ備フ、但「長ニ祖沖之尺ニ校ニ半分ニ」トアルニヨレバ、晉前尺ノ一尺〇〇五釐〇二絲五忽強ナレドモ、前ニ「比ニ晉前尺一尺七釐ニ」トアレバ、祖沖之ガ尺ヨリ半分長カリシト云ヘルハ、大凡ニ計リシナルベシ、按ズルニ玉律ニヨリテ作リシ尺ノ荀勗ガ尺ヨリ長キヲ見レバ、彼玉律、周ノ時ノ物ニハアラデ、後漢ノ初ノモノニテ、彼田父玉尺ト同時ノモノナルベシ」

「梁表尺」又表尺アリ、祖暅ガ造リシ尺ナリ、當尺七寸七分六釐七毫九絲、弱有奇【隋志ニ「梁表尺實比ニ晉前尺一尺二分二釐一毫有奇ニ、蕭吉云、出ニ於司馬法ニ、梁朝刻ニ其度於影表ニ以測レ影、案此即奉朝請祖暅所ニ算造ニ銅圭影表者也、經ニ陳滅ニ入朝、大業中議以合ニ古乃用レ之、調律以制ニ鍾磬等八音樂器ニ」ト云ヘリ】此表尺ハ調律鍾磬ノ尺ニテ、通行ノ尺ニ非ズ、俗間ニテ用ヒシ尺ハ曲尺八寸一分三釐九毫六絲「梁俗間尺」【隋志ニ「梁朝俗間尺長ニ於梁法尺ニ六分三釐、於ニ劉曜渾儀尺ニ二分、實比ニ晉前尺ニ一尺七分一釐、」ト云ヘリ、ココニ曲尺ニテ比較セシハ、晉前尺ニ比セシニヨレリ、劉曜ガ尺ヨリ計リタルハ、晉前尺ニテ計リシト全同ジ法尺ニテ計リシニヨレバ、曲尺八寸一分一釐九毫一絲七忽強ナリ、按ズルニ梁武帝ノ鑄タリシ五銖錢ハ、內好皆周郭アリ、梁志ニ梁ノ祖暅ガ請ヲ引テ、「天監元年鑄、徑一寸」ト云ヘリ、今此錢ノ傳ハル者ヲ度リ試ルニ、徑曲尺八分二三釐ナレバ、祖氏ガ度リシハ晉前尺ナリ】宋氏尺ノ少シ宛長セ

シモノナリ、【隋志宋氏尺ノ條ニ、「傳入齊・梁・陳、以制樂律、與晉後尺及梁時俗尺・劉曜渾天儀尺、略相依近、當人間恒用增損訛替之所致也」、ト云ヘリ】

【後魏尺】又晉ノ武帝ノ時、拓跋珪化狄ヨリ起リ國ヲ立テテ魏ト云フ、【所謂後魏ナリ、又北魏トモ、元魏トモ云フ】其初ニ用ヒシ尺ハ曲尺九寸一分七釐三豪二絲、中ゴロ用ヒシ尺ハ曲尺九寸二分〇三豪六絲、後ニ用ヒシ尺ハ曲尺九寸七分三釐五豪六絲【隋志ニ「後魏前尺ハ實比晉前尺一尺二寸七釐、中尺ハ實比晉前尺一尺二寸一分一釐、後尺ハ實比晉前尺一尺二寸八分一釐、後尺ハ即開皇官尺及後周市尺」ト云ヘリ、中後ノ二尺ハ前ノ漸訛長シタルモノナルベシ、前尺ハ何ニヨリテ定メタルカ詳ナラズ、荻生氏ハ「此尺乃後世大尺ノ祖也、蓋夷狄無尺、只傳漢粟斛、以此量米以爲米斛、後纂中原、驟聞嘉量之制、輙以其斛爲嘉量、以漢粟法算之、六斗四升、方一尺二寸、深一尺二寸以六四歸之、則積二千七百寸、故以漢一尺二寸爲其一尺、此云一尺二寸七釐者、訛長七釐也」ト云ヘリ、此尺後世ノ大尺ノ祖ナルコトハ、荻生氏ノ言ヘルガ如シ、漢ノ粟斛ニヨリテ此尺ヲ造リシコトハ、如何アランオボツカナシ】

【後魏大和尺】孝文帝ノ大和十九年ニ、【拓跋氏國ヲ建シヨリ、大和十九年マデ百十年ヲ經タリ】一黍ノ廣サヲ分トシ、九十黍ノ長サニテ銅尺ヲ定メタリ、【魏書高祖紀ト（高祖ハ即孝文帝ナリ）北史孝文紀トニ「大和十九年六月戊午詔改長尺大斗、依周禮制度、班之天下」ト云ヒ、魏書律曆志ニハ「大和十九年高祖詔以一黍之廣、用成分體、九十黍之長以定銅尺」ト云ヘリ、又北史元匡傳ニ、「高陽王雍等議以爲、晉

中書監荀勗所造之尺、與高祖所定累黍略同、」ト云ヘルニヨレバ、其長サ晉前尺ト同ジカリシコト知ルベシ、通鑑ニハ「改用長尺大斗」」トアレドモ、北史張普惠傳ニ「高祖廢大斗、去長尺」」トアレバ、改用ト云ヒシハ誤ナルコト著シ

「後魏永平尺」又宣武帝ノ永平年中ニ、【永平元年ハ大和十九年ノ後十三年ナリ】公孫崇・劉芳・元匡等、各黍ヲ累ネテ尺ヲ起シケルガ、三家皆同ジカラザリシニ、【公孫崇ハ縦黍、劉芳ハ横黍、元匡ハ一黍半用】芳ガ尺高祖ト同ジカリシカバ、遂ニ金石ヲ脩ムルコトヲ典ラシム、【魏書ニ「永平中崇更造新尺、以一黍之長累爲寸法、尋太常卿劉芳受詔、脩樂以秬黍中者一黍之廣、即爲一分、而中尉元匡以一黍之廣度黍二縫、以取一分、三家紛競久不能決、而芳尺同高祖所制、故遂典脩金石、」ト云ヘリ、按ズルニ高祖ノ銅尺ハ九十黍ニテ、劉芳ガ尺ハ百黍ナリ、元匡ガ傳ニ「芳造寸唯止十黍」」トモ、「帝曰、劉芳學高一時、深明典故、其所據者與先朝尺、乃寸過一黍」」トモ云ヒシ是ナリ、然レバ高祖ノ一寸ハ、劉芳ガ九分ニテ、高祖ノ一尺ハ劉芳ガ九寸ナレバ、尺寸ノ長サハ異ナレドモ、累ネシ黍ハ横ノ廣サヲ取リシニテ、其長サ全ク同ジカリシ故ニ、「同高祖所制」」トハ云ヘルナルナラン、大和ノ九十黍ノ尺ヲ晉前尺ニ同ジト云ヒシニヨレバ劉芳ガ百黍ノ尺ハ晉前尺ニ比ブレバ、一尺一寸一分一釐一毫一絲一忽不盡ニテ、曲尺ノ八寸四分四釐四毫四絲四忽不盡ナリ、然ルニ隋志ノ歴代ノ尺ヲ載セタル中ニ、大和・永平ノ兩尺ノ比校ヲ云ハザリシハ疑ハシ】是等ノ尺ハ後魏尺ノ古ニ非ザルニヨリテ、黍ヲ累ネテ尺ヲ起シタルナリ、大和ノ時長尺ヲ改ムト

云ヒタレバ、此時後魏尺ハ廢シタルガ如ク聞ユレドモ、後周ノ初ニ用ヒシ尺ノ魏ノ後尺ト同ジカリシヲ見レバ、【後周イマダ、玉尺ヲ造ラザリシ前、魏尺ヲ用ヒシコト隋志ニ見ユ、後周市尺モ魏後尺ト同ジカリシコト、同書ニ出ヅ、上文ニモ下文ニモ引リ】後尺ハ魏ノ亡ブルマデモ用ヒテ、周ニ入リシナリ、サレバ大和・永平ノ兩尺ハ、魏代ニモ民間マデ盡クハ行ハレザリシナラン

此後魏分レテ二ツトナリ、東魏ニハ【東後魏トモ云フ】孝靜帝ノ天平三年齊王高歡【コノ時高歡政ヲ攝シタリ、高歡卒シテ後其二子高洋、東魏ノ禪ヲ受テ國ヲ齊ト云フ、所謂北齊ナリ、是ヲ文宣帝トス、高歡ヲ追諡シテ獻武帝ト云フ、後主ノ時改メテ神武帝ト諡ス】請テ元匡ガ尺ヲ用ヒタリ、此尺一尺一寸四分〇六毫〇八忽、北齊モ此尺ヲ用ヒシナリ、〔東魏尺〕【北齊書本紀ニ「天平三年八月丁亥、神武請レ均二斗尺一、班二於天下一」ト云ヒ、隋志ニ「東後魏尺、實比二晉前尺一一尺五寸八毫一、此是魏中尉元延明累レ黍、用二半周之廣一爲レ尺、齊朝因而用レ之」ト云ヘリ、按ズルニ元延明ハ文成帝ノ孫ニシテ、安豐王猛ガ子ナリ、勅シテ金石ヲ監セシメシコトハ、傳ニ載セタレドモ尺ヲ造リシコトハ見エズ、中尉ニナリタルコトモ載スルコト無シ、又隋志ノココニ載セシ文ノ次ニ魏書ヲ引テ、「中尉元匡以二一黍之廣一度二黍之二縫一、以取二一分一」ト云ヘリ、(是律歷志ノ文ナリ、詳ニ上ニ引リ)元匡ハ穆帝ノ孫ニシテ、陽平幽王新成、(文成帝ノ弟)ノ子ナリ、度量ヲ論ゼシコトモ中尉ニナリタルコトモ傳ニ載セタレバ、元延明ト云ヒシハ、元匡ノ誤ナリ、此尺永平ノ時元匡ガ作リシ尺ナレドモ、當時ニハ用ヒラレズシテ、東魏ニ至リテ始テ世ニ用ヒシナリ、高歡ガ請テ

用ヒシ尺ナレバ、北齊ニテモ是ヲ用ヒタリシニ、後周ニ滅ボサレテ、尺モ隨テ亡ビタリ】西魏ニハ宇文泰【後周閔帝元年ニ、文帝ト追謚ス】政ヲ攝シタリ、廢帝ノ元年ニ蘇綽ヲシテ晉律ヲ正サセシニ、宋氏尺ヲ得テ定メシカドモ、未就ラザリシホドニ、宇文泰卒シ、其子宇文覺【閔帝ト謚ス】西魏ノ禪ヲ受ケ、國ヲ周ト云フ、【後周トモ、北周トモ、宇文周トモ云フ】此時閔帝衷ニ居リ、又北齊トノ軍モアリシ紛ニ、其事世ニ行ハレザリキ、【隋志和聲ノ條ニ、鐘律緯ヲ引テ、「西魏廢帝元年、周文攝レ政、又詔二尚書蘇綽一詳二正晉律一、綽時得二宋尺一、以定二諸管一、草創未レ就、會下閔帝受レ禪政出二冢宰一方有中齊寇上、事竟不レ行」、ト云ヘリ】武帝ノ始マデモ魏尺ヲ用ヒシガ後周市尺」【隋志ニ「後魏前尺・中尺・後尺・後周ノ市尺、此後魏初及二東西分一レ國、後周末レ用二玉尺一之前雜二用此等尺一」ト云リ、按ズルニ後周ノ初、魏後尺ヲ承用ヒ、其後玉尺・鐵尺ナド造リ行ヒタレドモ、民間ニハ猶用ヒ慣レタル魏後尺ヲ用ヒシナリ、是ヲ後周市尺ト云フ、然ルニ隋志ニ、「又後周市尺比二玉尺一一尺九分三釐二」ト云ヘリ、是ニテ曲尺九寸六分一釐九豪二絲七忽餘ナレバ、魏後尺トハ一分一釐六豪三絲二忽餘ノタガヒ有リ、官尺ナラザレバ少シヅツノ錯アリシナルベシ、隋志ニ又甄鸞算術ヲ引テ「周朝市尺得二玉尺九分三釐二」トアルハ玉尺ノ下ニ一尺ノ字ヲ脫セシナリ】保定年中ニ衆ヲ集ネテ尺ヲ造ラシメントシケレドモ、縱橫ノ論定マラザリシニ、晉國ニテ倉ヲ脩ムルトテ、地ヲ掘リケレバ、古玉斗ヲ得タリシヲ正器ナリトテ、ソレニ據リテ律度量衡ヲ作リタリ、此尺後周ノ亡ブルマデモ用ヒシナリ、「後周玉尺」是ヲ後周玉尺ト云フ、曲尺八寸八分〇〇八絲二【是モ魏尺ノ古ニ非ザルヲ以テ、改メ作リシナリ、

隋志ニ「後周玉尺實比二晉前尺一尺一寸五分八釐一、後周武帝保定中、詔遣二太宗伯盧景宣上黨公長孫紹遠岐國公斛斯徵等一累レ黍造レ尺、縱橫不レ定後因レ脩レ倉掘レ地、得二古玉斗一、以爲二正器一、據レ斗造二律度量衡一、因用二此尺一、大赦改二元天和一、百司行用終二於大象之末一、其律黄鐘與二蔡邕古籥一同」ト云ヘリ、同書嘉量ノ條ニハ「後周武帝保定元年辛巳五月、晉國造レ倉獲二古玉斗一、暨二五年乙酉冬十月一、詔改二制銅律度一」ト云ヘリ、天和ト改元セシハ六年正月ナリ、按ズルニ其得タリシ玉斗何レノ時ノ物ナリシカオボツカナシ、尺度ノ謂長梁ノ俗間尺ニ過タルハ無シ、ソレダニ曲尺八寸一分餘ナルニ、曲尺八寸八分有奇ノ尺ニテ造リシ斗有ルベキニアラズ、然ラバ此斗ハ物ヲ量ル斗ニハアラザリシニヤ、「其律黄鐘與二蔡邕古籥一同」トハ長孫無忌ガ言ニシテ、後周ノ時比挍シタルニハアラズ、其古籥ハ、隋志ニ「從上相承有二銅籥一、以レ銀錯題、其銘曰、籥、黄鐘之宮、長九寸、空圍九分、容二秬黍一千二百粒一、稱重十二銖、兩レ之爲二一合一、三分損益轉生十二律一、祖孝孫云、相承傳是蔡邕銅籥」トアルモノナリ、按ズルニ此銅籥、後周ノ玉尺ト其長サ同ジカリシヲ見レバ、蔡邕ガ作リシ物ニハアラジ、魏ノ杜夔ガ時ダニ建武尺ヨリハ四分七釐ノ謂長ニテ、劉宋ニ至リテスラ、六分二釐ノ謂長ナルニ、蔡邕ガ一寸二分餘長カルベキ理無シ、思フニ此籥卽後周ノ時玉尺ニヨリテ作リシ管ノ隋唐ノ時マデ傳ハリタルヲ、蔡邕ガ作リシ籥ト誤リ傳ヘタルモノナルベシ、狩生氏モ「所謂蔡邕銅籥者亦無二他憑一、乃以二劉曜一爲二張衡比一也」、ト云ヘリ

又建德六年【天和ノ後十一年ナリ】北齊ヲ平ラゲシ後、蘇綽ガ作リシ尺ヲ【上ニ見ユ】以テ律度量ヲ同ウシ

テ、天下ニ放チ行ヒタリ、是ヲ後周鐵尺、後周ノ鐵尺ト云フ也、【其長サ宋氏尺ト同ジ、隋志ニ宋氏尺ト後周鐵尺トヲ並ベ擧テ、「周建德六年平齊後、即以此同律度量頒于天下」ト云ヘリ、後鐵尺ノ古ニ非ザルニヨリテ、玉尺ヲ造リシカドモ、猶古ニ合ハザレバ、改メテ蘇綽ガ尺ニヨリシナリ、蘇綽ガ尺ニ依リシコト、達奚震・牛弘等ガ議ニ見エ、下ニ引リ】此尺ヲ作リシ後モ、猶玉尺ヲモ用ヒシニ、【荻生氏ハ、「周平齊之後、用此鐵尺、作律度量、其後改用玉尺」ト云ヒタレドモ、鐵尺ヲ止メテ玉尺ヲ用ヒタルコト物ニ見ユルコト無シ、宣帝ノ時、達奚震・牛弘等玉尺ヲ止メテ鐵尺ヲ用フベキコトヲ議セシニヨリテ、カク云ヘルニヤ、然レドモ其議ノ始ニモ、今之鐵尺トアレバ、宣帝ノ時鐵尺・玉尺ノ兩尺トモニアリシコト明ナリ、建德六年ニハ鐵尺ヲ用フル定メナルニ、玉尺ヲ以テ量ヲ作リシコト見エタレバ（中卷ニ引リ）鐵尺ヲ作リシ後玉尺ヲモ止メズ、兩尺ヲ並ベ用ヒシナルベシ】宣帝ノ時、【武帝ノ子】達奚震・牛弘等、玉尺ヲ止メテ鐵尺ヲ用フベキコトヲ議シケレドモ、定ムルニ及バズシテ亡ビタリ、【隋志ニ「宣帝時達奚震及牛弘等議曰、竊惟、權衡度量經邦懋軌、誠須詳求故實考校得衷、謹尋今之鐵尺、是太祖遣尚書故蘇綽所造、當時檢勘用爲前周之尺、驗其長短、與宋尺符同、即以調鐘律、并用均田度地、今以上黨羊頭山黍、依漢書律曆志度之、若以大者稍累依數滿尺、實於黃鐘之律、須撼乃容、若以中者累尺、雖復小稍、實於黃鐘之律、不動而滿、計此二事之殊、良由消息未善、其於鐵尺、終有一會、且上黨之黍、有異都鄙、其色至烏、其形圓重、用之爲量、定不徒然、正以時有水旱之差、地有肥瘠之異、

取黍大小未必得中、案許愼解秬黍體ハ、大本異於常ハ、疑今之大者正是其中、累百滿尺、即是會古、實篇之外纔剩二十餘ハ、此恐圍徑或差、造律未妙、就若撼動取滿、論理亦通、今勘周漢古錢大小有合宋氏渾儀ハ、尺度無舛、又依淮南累粟十二成寸、明先王制法ハ、索隱鉤深、以律計分、義無差異ハ、漢書食貨志云、黃金方寸、其重一斤、今鑄金校驗鐵尺爲近、依文據理符會處多、且平齊之始已用宣布、今因而爲定、彌合時宜ハ、至於玉尺累黍以廣爲長、累既有剩實復不滿、尋訪古今ハ、恐不可用、其晉梁尺量過爲短小ハ、以黍實管、彌復不容、據律調聲、必致高急ハ、且八音克諧、明王盛範、同律度量ハ、哲后通規臣等詳校前經ハ、斟量時事ハ、謂用鐵尺於理爲便、未及詳定ハ、高祖受終」、ト云ヘリ（高祖ハ隋ノ高祖ナリ）】

隋ハ後周ノ玉尺ヲ受用ヒシニ、【是ハ樂律ノ尺ニテ民間ノ常用ニハ後周市尺ヲ受用ヒシナルベシ】牛弘・辛彥之・鄭譯・何妥等鐵尺ヲ用フベシト議シケレドモ、久シク決セザリシニ、開皇八年陳ヲ平ラゲテ後高祖江東ノ樂ヲ華夏ノ舊聲ナリトテ、是ヨリ玉尺ヲ廢シ、鐵尺ヲ用ヒテ樂律ヲ正シ、［隋調律尺］【隋志ニ高祖受終、牛弘・辛彥之・鄭譯・何妥等久議不決、既平陳上以江東樂爲善曰、此華夏舊聲、雖隨俗改變、大體猶是古法、祖孝孫云、平陳後廢周玉尺ハ、律便用此鐵尺律ハ、以一尺二寸即爲市尺ニ」ト云ヘリ、隋志ニ「又後周鐵尺、開皇初調鐘律尺及平陳後調鐘律水尺」トアリ、水字ハ衍文ナリ、荻生氏ハ水尺ノ上ニ一ノ尺ノ字ヲ脫セリト云ヒシハ非ナリ、水尺ハ萬寶常ガ造リシ律尺ニシテ、是トハ同ジカラズ、（水尺ノコトハ

下ニ詳ニス）按ズルニ鐵尺ハ陳ヲ平ゲテ後用ヒシコト、上ニ引ル文ニテ明ラカナリ、陳ヲ平ラゲシハ開皇八年ナルニ、又兼ネテ開皇初調鐘律尺トアルハ疑ハシ】

隋官尺　後周ノ時ヨリ市中ニテ常用トセシ魏後尺ヲモ官尺トシテ【所謂開皇官尺ニテ鐵尺ノ一尺一寸ナリ、隋志ニ開皇官尺、即鐵尺一尺二寸ト云ヒ、又祖孝孫ガ言ヲ引シニモ、鐵尺律ノ一尺二寸ヲ市尺トスト云ヘル、（上ニ引リ。）是ナリ、其實ハ鐵尺ヨリ後周市尺ヲ計レバ、一尺一寸八分七釐五毫六絲二忽有奇、魏後尺ヲ計レバ一尺二寸〇三釐九毫四絲七忽餘テルヲ、一尺二寸ト定メテ、開皇官尺ト爲シシナリ】仁壽年中マデ兩尺ヲ並べ用ヒシナリ、官尺ノ長サ曲尺九寸七分〇三毫六絲八忽【鐵尺ノ一尺二寸ヲ計リシナリ、按ズルニ晉ノ時荀勗尺ヲ改メ作リテ、音律ヲ正シケレドモ、常用ニハ後漢前ノ尺ヲ用ヒ、後周ノ時玉尺ヲ作リ、後鐵尺ヲモ用ヒ、又市尺ナドモ有リツレバ、兩尺並ビ行ハルルコトモ、是ヨリ前ニモアリシカドモ、正シク兩尺ヲ用ヒヨト制セシコトハ無カリシニ、是時ニ至リテ兩尺ヲ並べ用フル制ハ始マリシナリ、是ハ後周ノ時玉尺鐵尺ヲ行ヒシカドモ、民間長尺ニ慣レテ市中ニハ魏後尺ヲ用ヒ、隋ノ時モ初ハ玉尺ヲ用ヒ、陳ヲ平ラゲテ後ハ鐵尺ヲ以テ、樂律ノ尺トシタレドモ、後周ノ時ヨリ民間ニハ玉尺ヲモ鐵尺ヲモ便ナリトセズシテ、魏尺ノミ用ヒシカバ、民俗ノ改メ難キヲ知リテ、魏尺ヲモ官尺トシテ鐵尺ト並べ用ヒシナリ、隋志ニ又ニ或傳、梁時有ニ誌公道人一作ニ此尺一、寄ニ入周朝一云、與ニ多鬚老翁一周太祖及隋高祖、各自以爲レ謂レ己、周朝人間行用、及開皇初著レ令以爲ニ官尺一、百司用レ之、終ニ于仁壽一」ト云ヘリ、然レドモ後周市尺開皇官

尺ハ、上ニモ云ヘル如ク魏尺ヲ受用ヒシニテ、別ニ造リシ尺ニ非ザレバ、誌公道人ノ事ハ好事ノ者ノ附會ニ出シナルベシ、荻生氏モ「誌公道人卽寶誌和尙、其言頗靈、故周太祖・隋高祖亦遵二用其言一」ト云ヒタルハ、此尺ノ後魏以來市中ニ傳來リシ事ヲ考ヘザリシナリ】開皇十年ニ、萬寶常ガ造リシ水尺ハ律呂ヲ調フルノミノ尺ニシテ、他ニハ用ヒザリキ、曲尺九寸〇一釐三毫六絲【隋志ニ開皇十年、萬寶常所レ造律呂水尺、實比二晉前尺一尺一寸八分六釐一、今太樂庫及內出銅律一部、是萬寶常所レ造、名二水尺律一、說稱其黃鍾律當二鐵尺南呂倍聲一、南呂黃鍾羽也、故謂二之水尺律一」ト云ヘリ、按ズルニ後周ノ時火尺・木尺・土尺・水尺アリ、詔シテ水尺律樂ヲ旋用セシコト、隋志和聲ノ條ニ見ユ、萬寶常ガ水尺律ノ名モ、是ニ依リシナルベシ、ソノ尺何ニ依リテカク定メシニカ詳ナラズ、明ノ郞瑛ガ七修類稿ニ、此水尺ヲ木尺ニ作リテ、「以前多誤爲レ之、至レ此用レ木」ト云ヒシハ甚シキ誤ナリ】

〔大業調律尺〕煬帝ノ大業ノ時、鐵尺開皇官尺ノ兩尺ヲ止メテ、梁表尺ヲ用ヒシカドモ、【隋志審度ノ條ニ、梁ノ表尺ヲ蕭吉ヲ引テ、「經二陳滅一入レ朝、大業中議以レ合レ古乃用レ之、調律以制二鍾磬等八音樂器一」ト云ヘリ、是ヲ和聲ノ條ニハ、「大業二年乃詔改用二梁表律一、調二鍾磬八音之器一、比二之前代一最爲レ合レ古」ト云ヒ、本紀ニハ「大業三年四月壬辰、改二度量權衡一、並依二古式一」トアレバ、二年ニハ樂器ヲノミ改メ、三年ニ至リテ度ハ梁表尺ヲ常用トシ、量衡ハ開皇ノ三ガ一ヲ用ヒタルカ、又ハ紀志ノ內、何レカ年紀ヲ誤リタルモ知ルベカラズ、一事ノ紀ト志ト年紀ノ異ナルモ、史ニ常ニ有ルコトナリ】民間ニハ或ハ私ニ開皇官尺ヲ用ヒ

タリ」【隋志ニ「周朝人間行用及開皇初、著レ令以爲二官尺一、百司用レ之終二于仁壽一、大業中人間或私用レ之、」ト云ヘリ】唐大小尺カカリシカバ唐ハ隋ノ高祖ノ制ニ泝リ、鐵尺ト開皇官尺トノ兩尺ヲ兼用ヒタリ、所謂唐大小尺是ナリ、【律ノ行事抄ニ「隋煬帝立二尺度秤一、準レ古立レ様、余親見レ之、唐朝像レ宇任レ世、兩用不レ違二古典一」ト云ヒシハ是ナリ、唐令又張文收ガ斛銘ニハ、秬黍ニヨリテ尺ヲ起シタルコトヲ云ヒシカドモ、（共ニ全文度攷ニ引リ）隋志鐵尺ヲ「比二晉前尺一尺六分四釐一」ト云ヒ、玉海ニハ趙宋ノ司天監ノ表尺ヲ「此卽唐尺比二晉前尺一、長六分三釐一」ト云ヘバ、其長略同ク、又開皇官尺ハ鐵尺ノ一尺二寸ナルニ（上文ニ見ユ）唐大尺モ小尺ノ一尺二寸ナレバ（度攷ニ見ユ）唐小尺ハ卽隋ニテ用ヒタル鐵尺ニテ、唐大尺ハ開皇官尺ナルコト明ラケシ、サレドモ代ノ改マリタランニハ、制度モ改メズシテハ有ルベカラザレバ、其實ハ隋尺ヲ用ヒナガラ、唐令ニハ新ニ黍ヲ累ネテ小尺ヲ作リ、其一尺二寸ヲ大尺ト定メシ如クニハ云ヒシナリ、譬ヘバ律呂正義ニ淸ノ康熙ノ時、黍ヲ横ニ累ネテ古尺ヲ定メ、其黍ヲ縱ニ累ネテ今尺ヲ作リシト云ヒタレドモ、今尺ノ長サ明ノ營造尺ト全同ジキヲ見レバ、其實ハ今尺ハ明營造尺ニ泝リ、其八寸一分ヲ古尺ト定メタルト同ジ、按ズルニ唐ハ煬帝ヲ亡ボシテコレニ代リタレバ、大業ノ尺ニヨルベキニ、ソノ尺ヲ用ヒザリシハ、大業ノ時尺ヲ改メシカドモ、民間ニテハ開皇官尺ハヲ便トセシカバ、唐ニテハコレニ從ヒタルナラン、サレドモ開皇官尺ハ俗尺ナレバ、正シキ物ヲバ開皇ノ制ニナラヒテ、鐵尺ニテ度リシナリ、隋志和議ノ條ニ、大業二年梁表律ヲ用ヒシコトヲ云ヒテ、「其制度文議並在二江都一淪喪一」トアルニテ、大業ノ尺ノ唐ニ入

ラザリシヲ見ルベキナリ』但小尺ハ律ヲ調ヘ影ヲ測リ、冠ヲ製ルナドニノミ用ヒテ、內外官悉ク大尺ヲ用ヒタリ』【六典ニ出ヅ、唐尺ノコトハ、度攷ニ詳カニス】然レバ唐小尺ハ漢尺ノ【卽周尺ニテ晉前尺モ同ジ長サナリ】漢官尺【晉前尺一尺〇三分〇七毫】魏尺【晉前尺一尺〇四分七氂】晉後尺【晉前尺一尺〇六分二氂】宋氏尺【晉前尺一尺〇六分四氂】ト次第ニ議長セシ尺ヲ後周【鐵尺】隋【開皇調律尺】ト承來リシニ依リタルナレバ【南齊・梁・陳ニテモ此尺ヲ用ヒシナリ、然レドモ梁ノ尺ハ晉前尺一尺〇七分一氂ニテ宋氏尺ヨリハ又七氂爲長セリ】周尺ノ裔孫ナリ、【故ニ唐人此尺ヲ周尺トモ、古尺トモ云ヘリ】又唐大尺ハ後魏尺ヲ後周【市尺】隋【開皇官尺】ト傳ヘタルニ依リシモノナレバ、拓跋氏ノ尺ノ流派ナリ

唐ニ又山東尺アリ【コノ尺ハ魏後尺・後周市尺・開皇官尺ニテ、卽唐大尺ナルベシ、】舊唐書職官志ニ、度量權衡ノコトヲ載セタルハ、唐令・六典・通典等同ジケレドモ、食貨志ニハ、凡權衡度量之制度、以二北方秬黍中者一黍之廣一爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲レ尺、十尺爲レ丈一ト云ヒ、一尺二寸ヲ大尺トスルコトハ無クテ、量衡ノ事ヲ載セ、其後ニ「山東諸州以二一尺二寸一爲二大尺一、人間行二用之一」トアリ、唐ノ時小尺ノ正尺ナルコトヲバ知リタレドモ、山東ニテハ猶此尺ヲ用ヒシガ弘マリテ、遂ニ大尺ヲ常用トセシヲ云ヘルナリ、然ルニ律行事抄ニ、「唐朝文軌無レ二、及レ論レ用レ尺、五種不レ同」、トアルヲ資持記ニ釋シテ「五種者舊云、南尺（本註短レ周二寸）姬周尺（本註十寸爲レ尺）唐尺（本註加レ周、二寸尺二爲レ尺）山東尺（本註加レ唐二寸尺四爲レ尺）潞州羅柯尺（本註加二山東二寸尺六爲レ尺）ト云ヘリ、「山東尺加レ唐二寸尺四爲レ尺」ト

ハ、唐書ニ「山東諸州一尺二寸爲大尺」トアル尺ヲ大尺ノ一尺二寸ト思ヒ誤リシニハ非ザルカ、然レドモ程大昌ガ云ヒシ京尺ハ、其長サ大尺ノ一尺二寸ナレバ、賓持記ニ載セタル山東尺ハ、其原ナルモ知ルベカラズ、然ラバ「加唐二寸」ト云ヒタルモ、誤ニハ非ザルニヤ尙能ク考フベシ、程大昌ガ云ヒシ京尺ハ下ニ見ユ】又江淮吳越ノ尺アリ、【コノ尺ハ宋氏尺。鐵尺ニテ、即唐小尺ナリ、孫思邈ガ千金方ニ、鍼穴ノ分寸ヲ論ジテ、「其尺用夏家古尺、司馬六尺爲步、今江淮吳越所用八寸小尺是也」ト云ヘリ、夏家古尺トハ、荻生氏ノ「此謂六朝還尺存于唐者也、其稱六朝爲夏家、猶如隋高祖稱六朝樂爲華夏舊樂也」ト云ヘル是ナリ、此尺舊長ナガラモ、周尺ノ孫ニテ、六朝傳ヘ來リシ尺ナレバ、北狄ヨリ出タル大尺ニ對シテ、夏家古尺トハ云ヘルナリ、周禮注ニ、「司馬法曰、六尺爲步」トアレバ、ココノ司馬ノ下ニモ法字アリシヲ脫セシナルベシ、八寸トハ大尺ニテ度リシナリ、隋ニテモ唐ニテモ大尺ヲ常用トシタルニ、江淮ニテハ宋氏尺。梁俗尺ヲ用ヒ慣レタレバ、大尺ヲ用ヒザルヲ云ヘルナリ、然レバ江淮尺ハ其長サ大尺ノ八寸三分三釐三豪三絲三忽不盡ナルヲ、孫民ガ八寸ト云ヒシハ、其大數ヲ擧シナリ、賓持記ニ載セシ南吳尺モ即是ナルベシ、然ルニ「短唐二寸」ト云ヒシハ、「八寸小尺」トアルヲ小尺ノ八寸ト誤リシモノナルベシ、歷代ノ尺長短樣樣ナレドモ、周尺ヨリ短キハアルコト無シ】

又潞州羅河尺アリ【賓持記ニ、「潞州羅河尺短山東一寸、尺六爲尺」ト云ヘリ、此尺他書ニ見ユルコト無シ、按ズルニ潞州ハ河東道ニ屬シテ、モト舊周ノ地ナレバ疑ラクハ羅河尺ハ、即後周尺ナルヲ「尺六爲」

尺」トハ强テ五種ノ尺ヲ充ントテ、然云ヒシニハ非ザルカ、又宋ノ陳言ガ云フ所ノ京尺ハ、小尺ノ一尺六寸ナレバ、コノ「尺六爲レ尺」ト云ヒシ尺ノ北邊ニ傳ハリテ、金ニテ用ヒシヲ南宋ニテ京尺ト云ヒシニハ非ザルカ、尚考フベシ、陳言ガ京尺ノコトハ下ニ見エタリ】五代ニ至リテ周ノ王朴ガ律管ヲ定メシ尺ハ、曲尺七寸七分五氂九豪六絲【五代會要ニ周顯德六年正月、樞密使王朴ガ上疏ヲ載セテ、「以三臣曾學二律曆一、宣示古今樂錄一、令三臣討論一、臣雖レ不敏、敢不レ奉レ詔、遂依二周法一以二秬黍一校二定尺度一、長九寸虛徑三分、爲二黃鍾之管一、用所レ補雅樂旋宮八十四調、幷二所レ定尺寸、所レ吹黃鍾管、所レ作律準議一、並上進一」ト云ヘリ、玉海ニ、「王朴律準尺比二晉前尺一、長二分一氂、比二梁表尺一短一氂」ト云ヒ、「又比二景表尺一短四分」ト云ヘリ、晉前尺ヨリ求メタルハ曲尺七寸七分五氂九豪六絲、梁表尺ヨリ求メタルハ曲尺七寸七分六氂〇一絲九忽餘、景表尺ハ卽唐ノ測景尺●宋ノ司天監景表尺ナリ、是ヨリ求ムレバ曲尺七寸七分五氂五豪六絲五忽弱、此尺古尺ヲ再興シタルナレドモ、黍ヨリ起シタル故ニ、高若訥ガ漢錢ニテ起シシ如クハ精シカラザリシナリ】是ハ律ヲ定メタルノミニテ通用ノ尺ニハアラズ、【宋ノ建隆元年、新尺ヲ用フルマデ、此尺ヲ以テ樂律ヲ定ム】趙宋ニテハ唐ノ制ニ依リテ大小尺ヲ用フ、【皇祐新樂圖記ニ、天聖令ヲ引テ、「諸度以二北方秬黍中者一一黍之廣爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲レ尺」、(本注一尺二寸爲二大尺一尺一) 十尺爲レ丈」ト云ヘリ、其文唐令ト全ク同ジケレバ、唐制ニ依リタルコト疑無シ】宋景表尺 小尺ハ司天監ニテ影ヲ測ルノミ用ヒテ【宋ノ司天監ノ景表尺ハ、卽唐尺ニテ、晉前尺ヨリ六分三氂長カリシコト、丁度ガ上言ニ見ユ、既ニ度攷ニ引リ】

大尺ヲ常用トスルコトモ、唐ト同ジ、【資持記ニ、「今ノ朝私用ニ周尺ハ、公用ニ唐尺ハ、」ト云ヒシ、今朝トハ宋朝ヲ指シタルナリ、公用大尺トハ、大尺ヲ常用トスルヲ云ヒ、私用周尺トハ江淮呉越ニテ小尺ヲ用フルヲ云フナラン】然レドモ大尺ノ長サ少シク稍長シテ、曲尺一尺〇二分一釐五豪ニ一絲ナリ、宋布帛尺是ヲ三司布帛尺ト云フ、【又、大府寺尺トモ云フ、玉海ニ見ユ、又省尺トモ京尺トモ云フ、司馬光ガ圖ニ、「三司布帛尺、即省尺、又名ニ京尺ハ當ニ周尺一尺三寸四分ニ當ニ浙尺一尺一寸三分ニ」ト云ヘリ、是ニヨリテ周尺ヨリ求ムレバ曲尺一尺〇一分八釐四豪、浙尺ヨリ求ムレバ曲尺一尺〇二分一釐五豪ニ一絲ナリ、律呂新書ト玉海トニハ、「比ニ周尺ニ一尺三寸五分」、トアリ、コレニヨレバ曲尺一尺〇二分六釐、玉海ニ又「比ニ律準尺ニ長三寸二分強ニ」ト云ヒシニテハ、曲尺一尺〇二分五釐八豪許ナリ、何レカ正シカラン、詳ナラザレドモ、周尺ノ比按ハ二說同ジカラズ、律準尺ノ比按ハ强ト云ヒテ、正シク釐豪ヲ云ハズ、浙尺ヨリ求メタルハ、宋ノ楊輝ガ續古摘奇算法ニ載セシ圖ト全ク合ヘバ、(淸ノ鮑廷博ガ知不足齋叢書ニ收メタル本ハ、纂節ノ本ニテ、尺圖モ縮寫ナレバ據ルニ足ラズ、今ハ朝鮮ノ刊本ニ從フ) 浙尺ヨリ求メタルニ從ヘリ、朱載堉ガ律呂精義ニハ「宋大府尺以ニ大泉之徑ハ、爲ニ九分ハ、今營造尺即唐大尺、以ニ開元錢之徑ニ爲ニ八分ハ、宋尺之八寸一分爲ニ今尺之八寸ニ」ト云ヘリ、明營造尺ノ八寸ハ曲尺八寸四分八釐、是ヲ八寸一分トシタル大府尺ハ曲尺一尺〇四分六釐九豪一絲三忽餘ナリ、又大泉ノ徑ヲ宋尺ノ九分トスルコト、朱氏ノ私說ナレバ、據ルニ足ラザレドモ、姑ク其說ニ從ヒテ、大府尺ヲ求ムレバ、朱氏ガ依リシ大泉ハ、十枚ヲ營造尺八寸九分ニ排スルコト、律學

新說ニ見エタリ、營造尺ノ八寸九分ハ曲尺九寸四分三氂四豪ナレバ、大泉一枚ノ徑ハ曲尺九分四氂三豪四忽ナリ、是ヲ九分トシタル大府尺ハ曲尺一尺〇四分八氂二豪三絲二忽不盡ナリ、二說共ニ司馬光・蔡元定・王應麟ガ說ニモ、楊輝ガ圖ニモ同ジカラズ、朱氏ノ見タリシ大府尺モシ其云フ所ノ如クナラバ、例ノ譌長セシ尺ナルベシ】

浙尺 兩浙ノ間ニテハ、民間浙尺ヲ用フ、【浙尺ハ千金方ノ江淮吳越尺、資持記ノ南吳尺ノ譌長セシモノナルベシ、(コノ尺ドモノコト上ニ詳ニス)】司馬光ガ圖ニ、周尺ハ「當浙尺八寸四分」トアルニヨリテ、周尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸〇四氂七豪六絲二忽弱、農政全書ニハ周尺ヲ浙尺ノ八寸、鈔尺ノ六寸四分ニ當ルト云ヘリ、周尺ノ長サハ誤リタレドモ、浙尺・鈔尺ハ共ニ當時通行ノ尺ナレバ、浙尺ノ八寸ハ鈔尺ノ六寸四分ナルコトハ證トスベシ、今鈔尺ヨリ浙尺ヲ求ムレバ、九寸〇四氂ナリ、又明ノ浙江道紹興府餘姚縣ノ人朱之瑜、萬治中歸化シテ江戶ニ居タリシニ、中村欽、人ニ託テ鈔尺幷ニ彼國通行ノ尺ヲ求メシニ、長短二尺ヲ摹シ授ケテ云ヒケルハ、長キヲ官尺ト云フ、衣服ヲ裁縫フニ用フ、鈔尺モ其ニ近シ、短キヲ鄉尺ト云フ、宅ヲ建、或ハ器ヲ作ルニ用フト云ヘリ、是ヲ比ブルニ短ハ長ノ八寸、長ハ短ノ一尺二寸五分ナリ、其鄉尺ト云フハ即浙尺ナリト、律尺考驗ニ見エタリ、按ズルニ明ノ裁衣尺ハ即鈔尺ナルコト、律學新說ニ見エタルニ、鈔尺モ是ニ近シト云ヒタルハイカガ、又浙尺ハ裁衣尺ノ八寸、裁衣尺ハ浙尺ノ一尺二寸五分ナラバ、浙尺八寸ハ裁衣尺ノ六寸四分ナルコト、徐光啓ガ比按セシト同ジケレドモ、朱氏ハ裁衣尺ヲ曲尺一尺一寸

五分半ト云ヘバ、其八寸ナル浙尺ハ九寸二分四釐ナリ、然レドモコノ裁衣尺律學新説ニ載セタル圖ニ比ブレバ、曲尺二分半長シ、明季ニハ謟長シタルカ、又ハ朱氏賚來リシ尺ノ正シカラザリシナラン、然ラバ曲尺九寸二分四釐ナル浙尺モ謟長セシ尺ナリ、又按ズルニ徐光啓ガ周尺ヲ鈔尺ト浙尺トニ比べ、朱之瑜ガ鈔尺ト云ヒテ賚來リタルヲ見レバ、明ノ時モ浙江ニテハ此尺ヲ用ヒシコト知ルベシ、清ニテモ浙ニテハ、今ニ此尺ヲ用フト見エタリ】又建隆新尺【玉海ニ、「學士竇儼編古今樂事、爲正樂、皇朝受命儼爲太常、建隆元年、詔儼專其事、儼乃改周樂太祖謂、雅樂聲高近於哀思、詔和峴討論、峴奏謂、西京銅望臬可按古法、即今司天臺影表上有銅臬、下有石尺是也（原注丁度謂即是唐尺）今以王朴所定尺量、短影表上石尺四分、知今雅樂之高皆由於此、帝乃令依古法別造新尺并黄鍾九寸管」ト云ヘリ、然レバ建隆ノ新尺ハ司天監ノ影表尺ト同ジ、即唐小尺ヲ再興セシモノナリ】阮逸・胡瑗ガ尺【皇祐新樂圖記ニ、「臣逸・臣瑗所制聖朝樂尺、皆稟聖旨用上黨羊頭山秬黍中者、一黍之廣爲分、十分爲寸、十寸爲尺、比於大府寺見行布帛尺七寸八分六釐、與聖朝銅望臬影表尺符同、」ト云ヘリ、按ズルニ此尺羊頭山ノ黍ヲ累ネテ定メシト云ヒタレドモ、其長サ影表尺ト符合セシト云フヲ見レバ、其實ハ百黍ノ廣サヲ累ネ試ミシニ、略影表尺ト同ジカリシカバ、即影表尺ノ長サヲ以テ定メシナラン、影表尺ハ即唐尺ナレバ（上ニ見ユ）曲尺八寸〇八釐六豪四絲ナリ、是ヲ布帛尺ヨリ計レバ、七寸九分一釐六豪〇四忽餘ナルヲ、布帛尺七寸八分六釐ト云ヘルハイカガ、モシ布帛尺七寸八分六釐ナラバ、曲尺八寸〇二釐九豪一絲四忽餘ニテ、

唐尺ニ比ブレバ、五釐七豪二絲五忽餘短シ、疑ラクハ皇祐ノ頃ニハ、布帛尺爲長シテ曲尺一尺〇二分九釐弱ニ至リシナラン、其尺ニテ計リシ故ニ、七寸八分六釐トハ云ヘルナルベシ】鄧保信ガ尺【玉海ニ「景祐三年六月丙寅、鄧保信上所制樂尺并龠」ト云ヒ、律呂新書ニ、此尺ヲ縱累百黍、短于大府尺一九分、長于胡瑗尺一九分五釐」ト云ヘリ、大府尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸二分九釐五豪八絲三忽強、胡瑗尺ヨリ求ムレバ曲尺八寸八分五釐四豪六絲有奇ニテ、四分四釐有奇ノ異アリ、然ルニ玉海ニハ、「以王朴律準尺爲率、則保信尺長一寸九分強」トアリ、是ニテハ曲尺九寸二分四釐許ニテ、大府尺ヨリ求メタルト略同ジケレバ「長于胡瑗尺九分五釐」ト云ヒシハ誤リナルベシ】ナドアレドモ、樂律ノ尺ニシテ、通行ノ尺ニアラズ】

大晟樂尺　徽宗ノ時ニハ大晟樂尺ヲ作リテ、律ヲ定メ、又天下ニ放チ行ヒタリ【徽宗ノ指ノ長サヲ以テ起シタル尺ナリ、玉海ニ「崇寧三年正月二十九日、魏漢津言、伏羲以三寸之器、名爲含微、其樂曰扶桑、女媧以三寸之器名爲葦籥、其樂曰光樂、黃帝以三寸之器名爲咸池、其樂曰大卷、三三而九、乃爲黃鍾之律、至唐虞未嘗易、禹效黃帝之法、以聲爲律、以身爲度、用左手中指三節三寸、謂之君指、裁爲宮聲之管、用第四指三節三寸、謂之臣指、裁爲商聲之管、第五指三節三寸謂之物指、裁爲羽聲之管、第二指爲民爲角、大指爲事爲祉、故不用爲裁管之法、得三指合之爲九寸、則黃鍾之律定、餘律生焉、漢儒用累黍之法、晉末法廢、隋牛弘用萬法常水尺、唐田畸周王朴並用水尺之法、今請聖人三指爲法、均絃裁管從之、大觀四年四月己卯、（本注十一日）翰學張閣請股指尺于天下、政和

元年五月六日、敕大晟樂尺（原注自七月朔旦行之）比官小尺短五分有奇」ト云ヘリ、文獻通考ニモ、「大觀四年、詔以所宗樂指尺頒之天下、其長短濶狹之數、以今尺計定、政和元年、詔諸路轉運司、以所頒樂尺製給諸州、州製以給屬縣、自今年七月爲始、毀棄舊尺、二年臣僚上言、請以大晟樂尺帝指爲數、制量權衡式、頒之天下、仍釐正舊法、又言新尺既頒、諸條內尺寸宜以新尺紬定、仍令民間舊有斗升秤尺限半年首納、出限許人告論罪給賞」トアリ、玉海ニ官小尺ト云ヒシハ大府尺ノ事ナルベシ、南宋ニ京尺ト云フ長尺アレバ、ソレニ對シテ大府尺ヲ小尺トハ云ヘルナラン、（南宋ノ京尺ハ下ニ見ユ、司馬光ガ圖ノ京尺ニハ非ズ）今大府尺ヨリ五分有奇短キ長サヲ求ムレバ、曲尺九寸七分許ナリ、又律呂新書ニ、此尺ヲ長于王朴尺二寸一分、和峴尺一寸八分弱、阮逸胡瑗尺一寸七分、短于鄧保信尺三分、大府帛尺四分」ト云ヘルニヨリテ、王朴尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸三分六氂九豪一絲一忽餘、和峴尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸五分許、和峴尺ハ即建隆新尺ナリ、阮逸胡瑗尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸三分九氂四豪一絲有奇、鄧保信尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸〇一氂六豪九絲五忽餘、大府尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸八分〇六豪五絲九忽有奇ナリ、求ムル尺ニヨリテ少シノ異同ハ有ルベケレドモ、蔡氏ガ計リシ鄧保信尺ト大府尺トニテハ曲尺七分九氂許ノ異アルハ疑ハシ、荻生氏「短于」ノ二字大府帛尺ノ上ニアルベシト云ヘリ、鄧保信尺ヨリ三分長シトシテ求ムル時ハ、曲尺九寸五分七氂四豪七絲有奇ナレバ、其說從フベキニ似タリ】然ルニ紹興十六年ニ、【高宗ノ時ナリ】皇祐中黍尺ヲ以テ、樂器制度ノ準トシ【玉海ニ「紹興十六年五月十

八日、給事中段拂等言、禮器局準二降下景鐘制度大晟樂書并金字牙尺二十八量及太常少卿李周等所レ立碑刻大樂尺圖本一、付レ局參-照、欲下依二樂書制度一、以二皇祐二年大樂中黍尺一爲上レ準、從レ之」、ト云ヘリ、制度ハ大晟樂書ニ依リ、尺ハ皇祐ノ中黍尺ヲ以テ度リシナリ、皇祐中黍尺ハ阮逸・胡瑗ガ尺ニテ、即唐小尺ナリ」】同三十二年、玉璽ヲ作リシニモ、此尺ヲ用ヒタリ、【玉海ニ「三十二年七月十一日、工-部言、鑄-號玉寶廣四寸九分、厚一寸二分、用二皇祐中黍尺一、」トアリ】後禮部祭祀ノ儀式ヲ倣チシニハ、造禮器尺ヲ用フ、曲尺一尺〇〇三釐二豪【玉海ニ、「後禮部倣二祭祀儀式書一、到二造禮器尺一、比二周尺一尺三寸二分一」トアリ、其長布帛尺ト略同ジクシテ、少シ短キヲ見レバ、布帛尺ノ稍長ナルヲ知リテ改正セシナルベシ】是等ニヨレバ、高宗ノ時ニハ大晟樂尺ハ廢セシコトヲ知ラレタリ、【徽宗宣和七年十二月、位ヲ皇太子ニ禪ル、是ヲ欽宗トス、欽宗位ニ即キ、年號ヲ靖康ト改ム、是歲金ニ汴京ヲ破ラレ、明年四月金人帝・太-上-皇-后・妃・宗戚ヲモ虜ニシテ去ル、五月欽宗ノ弟康王順天府ニシテ位ニ即キ、之ヲ建炎ト改ム、是高宗ナリ、建炎ハ四年ニテ終リ、翌年改テ紹興ト號ス、大晟樂尺ハコノ靖康ノ亂ニ亡ビシナルベシ】又南宋ノ尺ヲ程大昌ハ官尺ハ【省尺トモ云フ】即浙尺ニシテ、淮尺ノ八寸、京尺ハ淮尺ノ一尺二寸ナリト云ヒ、【演繁露ニ、「今雖二國有一度定一、俗不レ一レ制、日二官尺一者、與二浙尺一同、僅比二淮尺十ノ八一、而京尺者又多二淮尺十二一、公私隨レ事致レ用、元無二定則一、」ト云ヘリ、ココニ云フ官尺・浙尺ハ唐小尺ニテ、(此事下ニ詳ニス) 司馬光ガ云ヒシ浙尺トハ、其長サ同ジカラズ、淮尺モ唐大尺ニテ、孫思邈ガ云ヘル江淮吳越尺ニハアラズ、京尺モ淮尺ノ一尺

二寸ナレバ、是モ司馬光ガ云フ京尺ニアラズ】陳言ハ小尺ヲ以テ計ルニ、淮尺ハ一尺二寸、京尺ハ一尺六寸、樂尺ハ一尺二寸五分ト云ヘリ、【三因方ニ、「觀今之尺數等不同、如周尺長八尺、京尺長一尺六寸、淮尺長一尺二寸、樂尺長一尺二寸五分、並以小尺爲準、小尺自三微起、都自可準、」トアリ、小尺ハ唐宋ノ令、皆秬黍ノ廣ヲ一分トシタレバ、漢書（律暦志）ニ「分者自三微而成」ト云ヒシ尺ナリ、然ラバ黍ニテ其長サハ知ラルルナリ、周尺八尺トアルハ八寸ノ誤ナリ、明ノ周定王ノ普濟方ニ、此文ヲ載セタルニモ八尺トアルヲ、律樂新說ニ引キテ八寸ニ作ルベシト云ヘルニ據ルベシ、周尺長八寸トハ宋人モ小尺ヲ卽漢尺トシタレバ、彼「周制八寸爲尺」ト云フ說ニヨリテ、小尺ノ八寸ヲ周尺トセシモノナリ】然ラバ南宋ニテ云フ淮尺ハ、唐大尺ニテ、【程氏ガ官尺ヲ淮尺ノ八寸トシタルハ、陳氏ガ淮尺ヲ小尺ノ一尺二寸ト云ヒシニハ少シ異ナレドモ、大凡ニ云ヒタルニテ、其實ハ淮尺ノ八寸三分三釐三毫三絲三忽不盡ナリシコト、程氏ガ又官尺ノ四十八尺ハ淮尺ノ四丈ナリト云ヒシニテ知ルベシ、（此事下ニ引リ）モシ官尺ヲ淮尺ノ八寸トスレバ、官尺ノ四十八尺ハ淮尺ノ三丈八尺四寸ニテ其數合ハズ】官尺ハ【省尺トモ、浙尺トモ、小尺トモ云フ】唐小尺ナリ、【演繁露ニ、「唐帛每四丈爲一匹、用丈尺準之、蓋租尺四十八尺也、今官帛亦以四丈爲匹、而官帛乃今官尺四十八尺、準以淮尺正其四丈也、國朝事多本唐、豈今之省尺卽唐租尺爲宋耶、不然何爲官府通用省尺、而縑帛特用淮尺也」ト云ヘリ、唐ノ帛ハ大尺ノ四丈ヲ匹トスル定ナレバ、小尺ニテ計ル時ハ四丈八尺ナリ、宋ノ官帛モ四丈ヲ匹トスル制ナルニ、官尺ニテ度レバ、四丈八尺、

淮尺ニテ度レバ四丈ナリ、宋ニテハ諸事唐ノ制ニ本ヅキタルガ多ケレバ、南宋ノ官尺ハ、唐小尺ニテ淮尺ハ唐大尺ナリト云ヘルナリ】南方ニテハ從來小尺ヲ用ヒシ故、【孫思邈ガ云ヒシ江淮吳越尺ナリ】南渡ノ後ハ是ヲ官尺ト爲シシナラシ、【浙尺ハ司馬光ガ時、既ニ譌長シテ曲尺九寸〇四氂ナリシヲ、程氏ガ「官尺與ニ浙尺同」ト云ヒシハ疑ハシ】京尺ハ【程大昌ガ淮尺ノ一尺二寸ト云ヒシニ從ヘバ、小尺ニテハ一尺四寸四分四氂四毫四絲四忽不盡ニテ、曲尺一尺一寸六分四氂四毫四絲一忽餘、陳言ガ小尺ノ一尺六分ト云ヒシニ從ヘバ、淮尺ノ一尺三寸三分三氂三毫三絲三忽不盡ニテ、曲尺一尺二寸九分三氂八毫二絲四忽、二說其長サ同ジカラズ】唐ノ時北方ニテ用ヒシ尺ノ【程氏ノ說ニ從ヘバ、資持記ノ山東尺、陳氏ノ說ニ從ヘバ、潞州羅柯尺ナルベシ、此尺疑ラクハ東後魏尺ノ傳ハリテ、譌長セシモノナラン】金ニ傳ハリ、南宋ノ時汴京ニテ用ヒシ尺ナルベシ【金汴京ヲ奪ヒテ後ハ、其地方此尺ヲ用ヒタルヲ汴京ハ北宋ノ都ナリシカバ、南宋ノ人是ヲ京尺ト云ヒシナラン、其長サ程陳二說同ジカラズシテ定メ難シ、東後魏尺ノ譌リタルモノトスレバ、程氏ガ說稍近ケレドモ、元ノ官尺ハ古尺ノ一尺六寸六分有奇ト云フ者、コノ尺ヲ承フタル如ク思ハルレバ、陳氏ガ說ニ從フベキニ似タリ】樂尺ハ【コノ三因方ノ文ヲ普濟方ニ載セタルヲ律學新說ニ引シニハ約尺トアレドモ、疑ラクハ說ナルベシ】大晟樂尺ヲ云ヘルナラン、【大晟樂尺ハ求ムル所ニヨリテ異同アレドモ、蔡元定ガ大府尺ヨリ計リシモノ最長クシテ曲尺九寸八分有奇ナリ、ココニ載セタル樂尺ハ、小尺ノ一尺二寸五分ト云ヘバ、譌爲キ唐小尺ニテ度リタランニモ、曲尺一尺〇〇八氂七毫五絲ナレバ、曲尺二分八氂有奇ノ

異アリ】金ニテハ南宋ニテ京尺ト云ヒシ尺ヲ用ヒタリケンコト上ニ云ヘリ、【此時淮尺・南宋官尺・浙尺ナドアレドモ、淮尺ヲ金ニテ營造尺ト名ヅケテ、田畝ヲ度ルニ用ヒタリトアレバ（金史ノ文下ニ引リ）別ニ官尺アリシコト知ルベシ、南宋官尺・浙尺ハ南方ノ尺ニテ、唐北宋ニテスラ京ニテハ用ヒザリシカバ、金ニテ用フベキ理無シ、然ラバ必南宋ニテ京尺ト云ヒシ尺ヲ用ヒシナルベシ】又營造尺アリ、田畝ヲ度ルニハ此尺ヲ用フ【金史食貨志ニ、「量レ田以二營造尺五尺一爲レ歩、」ト云ヘリ、按ズルニ禮記ノ王制ニ、「古者以二周尺八尺一爲レ歩、今以二周尺六尺四寸一爲レ歩」、トアリ、然レドモ正義ニ是ヲ「經文錯亂、不レ可レ用也」ト云ヘバ、此說ハ據ルベカラズ、漢書食貨志ニ、殷・周ノ制ヲ說キシニ「六尺爲レ歩」ト云ヒ、周禮小司徒ノ注ニ、司馬法ヲ引キタルニモ「六尺爲レ歩」ト云ヘリ、是等ニ依レバ古ヨリ歩ハ六尺ナリシコト知ルベシ、史記始皇本紀ニハ「二十六年、六尺爲レ歩」トアレドモ、ソノ注ニ「譙周曰、歩以二人足一爲レ數、非二獨秦制然一也」ト云ヘリ、古モ歩ハ六尺ニテ、秦ニテ始メテ六尺ニ定メシニハ非ザルヲ云ヘルナリ、律學新說ニ「夏籥、單穆公曰、目之察レ度也、不レ過二歩武之間一、荀子曰、立視二前六尺一、然則荀卿所レ謂六尺者歩也、單穆公所レ謂歩者六尺也、故司馬法曰、六尺爲レ歩、太史公失二於詳考一、因二漢儒王制之誤一、遂謂二六尺爲一レ歩者乃秦始皇之所二創制一、夫歩生二於人之足跡一、亙レ古至レ今無レ有レ異也、歷代改二正朔一易二服色一、而豈能改二易人之足跡一、使二歩者伸縮一哉、周以レ木王木之數八、秦以レ水王水之數六、則六尺爲レ歩、若然漢以レ火王、魏晉以二土金一王、其以二七尺・十尺・九尺一爲レ歩可乎、此蓋司遷之謬、譙周辨レ之當矣」ト云ヒシハゲニサルコトナリ、但朱載堉ガ歩

ハ人ノ足跡ヨリ生ズ、人ノ足跡ハ古モ後世モ同ジケレバ、古ノ歩モ後世ノ歩モ異ナルコト無シ、始皇ニ始マリシニハアラズト云ヒタレドモ、初歩ヲ定ムル時コソ、足跡ニテ定ムレ、田畝ノ廣サノ名トナリタラン上ハ、名ハ歩ト云フトモ、五尺ニセンモ、七尺ニセンモ、害無カルベシ、譬ヘバ尺ハ人手ニテ定メタレドモ、北魏ノ一尺二寸ナルヲ、北齊ノ一尺五寸ナルヲモ、皆尺ト云フガ如シ、サレバコレヲ改メザリシハ民ノ便トセザリシ故ニテ、足跡ヨリ定メタル故ニ改メ難キニハアラズ、然ラバ古ヨリ歩ハ六尺ナルヲ、六國ノ時ハ法度ヲ變亂シテ、各國ノ歩法心心ナリシニ、秦一統ノ後、古ニ復シタルナルベシ、其後歷代六尺ヲ歩トスルコト異ナラザリシニ、六典ニ「凡天下之田、五尺爲レ歩」トアレバ、唐ノ時ハ五尺ヲ歩トセシコト明ナリ、然レバ六典工部ノ注ニ「今ノ京城ハ隋文帝開皇二年六月、詔ニ左僕射高熲、(穎當作熲)所レ置至三年三月一、移二入新都一焉、名曰二大興城一、東西十八里一百一十五歩、南北十五里一百七十五歩」トアルモ、五尺ノ歩ナルニ、隋書地理志ニモ「開皇三年、置二雍州城一、東西十八里一百一十五歩、南北十五里一百七十五歩」トアレバ、隋ニテモ唐ト同ジク五尺ヲ歩トセシコト知ルベシ、思フニ歩ハ古ヨリ六尺ナリシニ、開皇ノ時、古尺ノ一尺二寸ヲ官尺トシタレバ、古ノ六尺ヲ官尺ニテ度ル時ハ、五尺ナル故ニ、歩ノ大サハ舊ニ依リタレドモ、六尺ヲ歩トスルヲ改メテ、五尺ヲ歩トセシナラン、唐ニテ開皇ノ官尺ヲ大尺トシ、田畝ヲモコノ尺ニテ度リシ故、歩ヲ五尺トスルコトモ、隋ノ制ニ依リシナリ、然レバ古ニ六尺ヲ歩トスト云ヒシモ隋唐以來五尺ヲ歩トスルモ、其實ハ同ジト知ルベシ、其後明清ニ至リテモ五尺ヲ歩トスレバ、少ノ訛替アリト

云ヘドモ、古ヨリ今ニ至リテモ歩ノ廣サハ異ナルコト無シ、カク古ヨリ後マデモ同ジカリシハコレヲ改ムルヲバ民ノ便トセザリシニヨリテナリ、金ノ官尺ハ南宋ニテ云フ京尺ナルベケレドモ、歩ノ大サハ改メ難ケレバ、隋唐以來用ヒ來リシ大尺ヲ以テ五尺ヲ歩トスルコトモ、前代ノ制ニ從ヘリ、但萬事ハ官尺ヲ用ヒタレバ、從來ノ大尺ヲバ營造尺ト云ヒテ、官尺ニ分チシナルベシ、但元明ノ量地尺モ此尺ナルニ、宋尺ヨリハ六分モ稍長セリ、金ノ時ハ如何ナリシカ、詳ナルコトハ知リ難シ、按ズルニ營造尺ノ名ニヨレバ、田ヲ度ルノミナラズ、居宅ヲ作ルニモ、此尺ヲ用ヒシナラン】元ノ官尺ハ、古尺ノ一尺六寸六分有奇ト云ヘリ、然レドモ州縣ノ間ニテハ、猶營造尺ヲ用ヒシナリ、【明ノ方以智ガ通雅ニ「傳聞元尺至大志無考焉」トアリ、此官尺ヲ云ヘルナリ、官尺ハ元ノ王與ガ無冤錄ニ「國朝權衡度尺已有定制、至若營造尺亦相傳、度衷官制長短、夫何州縣闊狹官尺用營造尺乎、考之古制、度者分寸尺丈引也、以北方秬黍中者一黍之廣爲分、十分爲寸、十寸爲尺、一尺二寸當大尺、往往即營造尺耳、省部所降官尺、比古尺一尺六寸六分有奇、天下通行公私一體、蠹見盡水部件、作檢覆、並用營造尺、思之既非法物、較勘豪釐有差、長短難準、況明有禁制、若官府緣公行使而責民間私用、是不揣其本而齊其末、遂毀而棄之」、即宋官尺打量ニ一ト云ヘリ、古尺トハ、即宋ノ鐵尺ニテ、隋ノ開皇ノ調律尺、唐ノ小尺、宋ノ司天監ノ影表尺モ皆是ナリ、此尺ノ一尺六寸六分有奇ナル元ノ官尺ハ、潞州羅利尺ヨリ出デテ、陳言ガ云ヒシ南宋ノ京尺ノ稍長シタルモノナラン、其長サ小尺ノ一尺六寸六分有奇ハ、曲尺ノ一尺三寸四分有奇ナレドモ、元ノ時目無キ唐尺ハ傳ラ

ザルベケレバ、營造尺ヲ大尺トシ、其六ノ五ヲ小尺トシテ、其一尺六寸六分有奇ヲ求ムレバ、曲尺ノ一尺五寸有奇ナリ、無冤錄ニ云ヒシ趣ヲ見レバ、元ノ時コレヲ官尺トシタレドモ、民間ニハ金ノ營造尺ヲ用ヒシナリ、營造尺ハ後魏以來用ヒ慣レタレバ、元ノ官尺ヲ不便トセシナルベシ】其地ヲ量ルニ用ヒシ尺ハ、明ノ量地尺ト同ジ、【元ノ劉應季ガ翰墨大全ニ、「庶人墓田向去心ハ、各九步、卽是四圍相去十八步、按ㇾ式度ㇾ地五尺爲ㇾ步、則是每二一向一合ㇾ得二四丈五尺一、以二今俗營造尺一計ㇾ之、五丈四尺小尺也」トアリ、俗營造尺ハ朱之論ガ賛リシ鄕尺ト云ヘルモノナルベシ、鄕尺ハ宅ヲ建、器ヲ作ルニ用フト云ヘバ、俗營造尺トアルニ合ヘリ、鄕尺ハ卽司馬光・徐光啓ガ云ヒシ浙尺ナルコト、上ニ云ヘリ、浙尺ノ五丈四尺ハ、曲尺ノ四丈八尺八寸一分六釐、是ヲ四丈五尺トスレバ、其一尺ハ曲尺ノ一尺〇八分四釐八毫、コレ元ノ量地尺ナリ、其長サ明ノ量地尺ト同ジ】明ニテハ營造尺・量地尺・鈔尺ノ三尺ヲ用フ、【律學新說ニ「今見二常用官尺一有二三種一、皆國初定制」ト云ヒ、一曰、鈔尺、二曰、曲尺卽營造尺、三曰、寳源局鍮五尺、卽量地五尺也」ト云ヘリ】其圖律學新說ニ見エタリ、營造尺ハ曲尺一尺〇六分、量地尺ハ曲尺一尺〇八分五釐弱、【此尺其長サ營造尺ト近ク、又金ニテ田ヲ量ルニ、營造尺ヲ用ヒタルニヨレバ、量地尺ハ卽營造尺ヲ用ヒシニ、營造尺ハ細ク度レバ譌長セズ、地ヲ量ルハ粗キ故ニ、譌長シテ遂ニ兩尺トハナリシナルベシ、量地尺ノ長サ元明同ジケレバ、元ノ時既ニ譌長セシト見エタリ】鈔尺ハ曲尺一尺一寸三分【卽裁衣尺ニテ「織染所欽降金星尺」ト云フモ是尺ナリ、其長サ明ノ寳鈔ノ紙ノ長サト同ジキ故ニ、鈔尺ト云フ、是モ營造尺ノ譌長セルモ

ノ類、或ハ是ハ胡承ノ尺ニハアラデ、別ニ明ノ寶鈔ニ據リテ作レル尺ナル歟詳ナラズ、寶鈔ハ俗ニ云フ鈔札ニテ、其制詳ニ明會典ニ見エタリ、其大サハ律學新說ニ圖セリ】コノ外浙江ニテハ浙尺ヲ用フ、【浙尺ノ事ハ上ニ詳ニス、又朱氏ガ譜ニ、四尺ヲ載ス、一ニハ「明朝木匠尺・量地尺・營造尺・浙尺小尺・曲尺・準尺、寧尺、皆同比古日本木匠曲尺玖寸三分弱」二ニハ大明鈔尺・量地尺、明以レ之作レ升、比古日本木匠曲尺壹尺貳分強」三ニハ大明鈔尺・裁衣尺也、比古日本木匠曲尺壹尺陸分半」四ニハ「明裁衣尺・鈔尺・銀准尺・官尺・錢糧所會牙尺、比古日本木匠曲尺壹尺壹寸五分半」トアリ、浙尺ノ長サ司馬光ガ圖ヨリ長ク、三種尺モ皆朱載堉ガ圖ニ同ジカラザルハ、明末ニ至リテハ謬リシモノナルベケレバ、今皆取ラズ、浙尺ヲ量地尺・又曲尺ト云フコト、裁衣尺ニ長短二種アルコト、其長キ者ヲ鈔尺トモ云フナド、皆疑ハシ】明會典ニハ、三種尺アルコトヲ載セザレドモ、朱載堉ハ、即明ノ鄭恭王厚烷ノ世子ナレバ、其圖證トスベシ、【朱載堉ガ律呂精義、律學新說等ニ說ク所ノ三代以下ノ諸尺、皆牽強附會ニシテ、一モ證トスルニ足ラザレドモ、明代ノ制度ニ至リテハ、誤有ルベカラズ、故ニ今朱氏ノ圖ニ從フ、荻生氏ハ「唐大尺・明營造尺・吾邦今尺全同、權律學新說圖二此尺一、長六分、因レ此裁衣・量地係二于短小一、蓋係二偽造三代尺一、故長二此尺一、將レ通二其說一今不レ取二圖說一」ト云ヒタレドモ、コレハ朱氏ガ明營造尺ハ即唐大尺ナリト云ヒシヲ以、唐大尺ナラバ本朝ノ曲尺ト同ジカルベキニ、（本朝曲尺モ稍長シテ唐尺ヨリハ三分許長キコトヲ度攷ニ云ヘリ）營造尺又ハ曲尺ヨリ六分許長ケレバ、カクハ云ヒシナリ、然レドモ朱氏モシ三代尺ノ說ヲ立ントテ、當時行ハルル營造尺ヲ長ク

圖シタランニハ、時人肯ハザルベク、ソレニヨリテ三代尺ヲモ信ゼザルベケレバ、必サハアルマジキ事ナリ、營造尺ヲ承ケタル淸尺モ、其長サ朱氏ガ圖ト全ク同ジケレバ、決シテ朱氏ガ殊更ニ長ク圖シタルニハアラジ、營造尺モ本朝曲尺モ、共ニ唐大尺ヲ承ケタレドモ、千餘歲ヲ經テ傳ヘタレバ、是ホドノ竊長ハアルベキ事ナリ、荻生氏マタ「明三種尺見二朱載堉書一以爲太祖所レ定、然會典不レ載、且裁衣・量地・營造在レ古未レ聞二其異一レ尺、而太祖立二此三種尺一極可レ疑矣、然載堉明人言二其當世之事一、亦當レ不レ謬、因思レ之、太祖建レ國初、造鈔量田之際親審二其度一、時値二草昧一、萬事苟且、吏之所レ稟尺有レ不レ齊、太祖一時隨レ事隨定、不二復用レ意、其尺各官守レ之、後世遂謂有二三種尺一矣、其實明尺惟營造曲尺一而已」ト云ヘリ、此論サモアルベシ、淸ニモ今尺（卽營造尺）古尺ノ外ニ量地尺・裁衣尺ナドアレドモ、淸會典ニハ載セズ】コノ外明ニ種種ノ尺アレドモ詳ナラズ』【明ノ方中履ガ古今釋疑ニ「度量衡之大小豈獨古今不レ同、而當時亦已不レ一、如二近代之尺一、則有二鈔尺一、有二司布帛尺一、有二工匠尺・衞家尺・魯班九天玄女尺一、曆家有二晷度尺一、醫家有二全身尺一、或有下長二於前代一者上、或有下短二於前代一者上、量衡更異同不レ能レ使二之齊一也」ト云ヘリ】淸ニテハ古法ヲ考ヘテ、橫ニ百黍ヲ累ネテ古尺トシ、縱ニ百黍ヲ累ネテ今尺トスト云ヘリ、【淸會典ニ、「聖祖仁皇帝考二古法一、以制レ度、而量與二權衡一準焉、以二絫黍一定二分寸之率一、一黍之廣度爲二一分一、橫絫二十黍一得二古尺一寸一、一黍之縱度爲二一分一、直累二十黍一得二今尺一寸一、今尺八寸一分當二古尺十寸一」トアリ、聖祖ハ康熙帝ナリ、コノ古尺ヲ律尺トモ云ヒ、今尺ヲ工部營造尺トモ云フ、是モ淸會典ニ出ヅ】其圖卽聖祖ノ律呂正義ニ載セタリ、橫黍

古尺ハ、曲尺八寸五分八釐、縱黍今尺ハ曲尺一尺〇六分ナリ、然レドモ其今尺ノ長サ明營造尺ト全ク同ジキヲ見レバ、【錢塘ガ溉亭述古錄ニモ「今之營造尺卽明之營造尺」ト云ヘリ】實ハ明尺ヲ卽今尺トシ、明尺ニ百黍ヲ縱ニ絫ネ、其百黍ヲ橫ニ絫ヌレバ、明營造尺ノ八寸一分ナルヲ古尺ト定メシナリ、【朱載堉ハ營造尺八寸ニ、縱黍八十一、橫黍百ヲ排列セリ、然ラバ營造尺一尺ニハ、縱黍百〇一黍四分黍ノ一ヲ排スベシ、淸ニテハ朱載堉ニ本ヅキ、今少シ大ナル黍ヲ用ヒ、營造尺ニ縱ニ百黍ヲ排シ其百黍ヲ橫絫スレバ、縱絫セシ八十一黍ニ當ルヲ古尺トシタルナリ、淸會典ニハ先黍ヲ絫ネテ古尺ヲ定メ、其古尺ニヨリテ新尺ヲ作リシト云ヒタレドモ、然シテ作リシ今尺ノ明尺ト全ク同ジカルベキニアラズ、實ハ明尺ヲ今尺トシ、其尺ニ黍ヲ絫ネテ、ソレニテ古尺ヲ作リタルナリ、然レバ淸尺ハ絫黍尺ナレドモ、其黍ハ今尺ニテ大サヲ定メシ黍ナレバ、淸尺ノ絫黍ヨリ尺ヲ生ジタルニハアラデ、營造尺ヨリ黍ヲ生ジタルナリ】世ノ改マリタルトテ、度ヲ改メンハ上ニ益無ク、民ハ不便ナルベケレバ、其實ハ明ノ度ニ沿リナガラ、表ニハ黍ヲ絫ネテ古尺ヲ作リ、ソレニヨリテ今尺ヲ作ルヨシニ云ヘルナルベシ、【唐ニテモ黍ヲ累ネテ尺ヲ造リシト云ヒタレドモ、實ハ隋尺ニヨリシト同ジ】然ラバ宋ノ布帛尺・造禮器尺・南宋ノ淅尺・金元明淸ノ營造尺・皆唐大尺ヨリ出タルモノナリ』

淸ニ又量地尺【孔尙任ガ周尺辨ニ、匱庴尺ヲ「當二今量地尺六寸六分一」ト云ヘリ、是ニテ求ムレバ、曲尺ノ一尺一寸八分六釐三毫六絲有奇ナリ、同人ノ周尺考ニ「我朝丈レ田稍增二尺數一、每レ尺加二一寸一以二明官尺五

尺五寸爲二一步一」トアリ、淸ノ量地尺ノ一尺ハ、明ノ量地尺ノ一尺一寸ナルヲ云ヘルナリ、明ノ量地尺ノ一尺一寸ハ曲尺ノ一尺一寸九分三釐強ナレバ、周尺辨ニ、慮虒尺ヲ度リシ、量地尺ト略同ジ、又周官祿田考ニ、「一步五尺、見二唐杜氏通典一、宋迄レ明沿レ之、國朝以二五尺五寸一爲レ步、見三孔氏尚任周尺考一、今仍以二五尺一爲レ步、凡歷代步弓尺長短不レ一、今步之尺乃乾隆元年、工部所二重頒一、當二今裁衣尺之中者九寸一」トアリ、康熙ノ量地尺ハ明ノ量地尺ノ一尺一寸ヲ一尺トシタリシニ、乾隆元年ニ重ネテ頒行セシ量地尺ハ、裁衣尺ノ中ナル者ノ九寸ナリシヲ云フナリ、孔尚任ガ慮虒尺ヲ度リシ裁衣尺ニテ九寸ヲ計レバ、曲尺ノ一尺〇五分七釐九絲有奇ニテ今尺ノ長サト略同ジク、淸會典今尺ノ外ニ量地尺ヲ載セザレバ、乾隆元年重頒ノ量地尺ハ、卽縱黍今尺ナルベシ、又沈氏ハ歷代步弓尺長短不一」ト云ヒタレドモ、古ヨリ今ニ至ルマデモ大ナル異ハ無カリシナリ、其事金營造尺ノ條ニ云ヒシヲ見テ知ルベシ】裁衣尺【周尺辨ニ慮虒尺ヲ「當二今裁尺六寸七分一」ト云ヘリ、是ニテ求ムレバ曲尺ノ一尺一寸六分八釐六毫五絲六忽餘ナリ、沈彤ハ乾隆重頒ノ量地尺ヲ裁衣尺ノ中ナル者ノ九寸ト云ヘリ、乾隆ノ量地尺ヲ縱黍今尺トスレバ、裁衣尺ノ中ナル者ハ、曲尺ノ一尺一寸七分七釐七毫七絲七忽不盡ナレバ、孔尚任ガ度リシ裁衣尺ハ中ニ及バザル者ナルニヤ、伊澤氏藏スルハ曲尺ノ一尺一寸六分三釐、中村佛庵（連）ガ藏スルハ、曲尺ノ一尺一寸五分、皆孔氏ガ度リシ尺ヨリ短ケレバ、是等ハ裁衣尺ノ小ナル者ナルベシ】河北大布尺、【周尺辨ニ慮虒尺ヲ「當二今河北大布尺四寸七分一」ト云ヘルニテ求ムレバ、曲尺ノ一尺六寸六分五釐九毫五絲七忽有奇ナリ】ナドアリ、量地

尺ハ卽明ノ量地尺ニテ【康熙ノ量地尺ノ明ノ量地尺ノ一尺一寸ナリシハ、淸ニテ然改メタルニハアラデ、漸長シタルモノナルベシ、故ニ乾隆ニ重頒シテ改メタルナラン】裁衣尺ハ明ノ裁尺ノ漸長セシモノナリ、【鈔尺ハ卽明ノ裁衣尺ナリ】河北大布尺ハ元ノ官尺ノ遺リテ漸長シタルモノナルベシ

本朝度量權衡攷附錄卷上之上　終

先輩周漢ノ尺ヲ攷ヘシニ、各家同ジカラズシテ、一定ノ說ナク、其說ドモ皆非ナリト云フ者ハ

宋ノ饒魯ハ曲尺五寸八分三釐七豪二絲五忽餘

其說ニ周ノ七寸ハ今ノ四寸許【孟子集注大全公孫丑下篇】

按ズルニ是ニ司布帛尺ニテ度リシナラン、布帛尺ノ四寸ヲ周ノ七寸トシテ周尺ヲ起セバ、布帛尺ノ五寸七分一釐四豪二絲八忽餘、曲尺ノ五寸八分三釐七豪二絲五忽餘ナリ、然レドモ大凡ニ許ト云ヒタレバ、其精密ナルコトハ知リ難キ上ニ、其說據リドコロヲ云ハザレバ、證トスルニ足ラズ【按ズルニ此尺ハ「潘時擧ガ尺式ニ「程氏文集溫公書儀多誤注爲二五寸五分弱一」ト云ル類ノ尺ナルベシ、其誤ナルコト、潘氏コレヲ辨ジタリ、又按ズルニ司馬光書儀ニハ、周尺ヲ布帛尺ノ五寸五分トシタルコト、潘氏ガ說ノ如クナレドモ、其家ニ刻セシ周尺圖ニハ、「周尺當二三司布帛尺七寸五分弱一」ト云ヘリ、五寸五分ノ誤ナルヲ知リテ後ニ改メタルナルベシ】

元ノ吾衍ハ「欲レ知二古尺一、以二小半兩錢一準レ之、言二徑寸一也」ト云ヘリ、【閑居錄】

按ズルニ小半兩錢トハ、四銖半兩ヲ云ヘルナラン、半兩錢ノ徑一寸ト云フコト、史漢ヲ始メ、歷代ノ食貨志・泉志等ニモ見エズ、何ニ據リテ如レ是ハ云ヘルニカ、據リ所タシカナラザレバ、其說證トスルニ足ラ

ズ、【疑ラクハ貨泉徑一寸ト漢書食貨志ニ云ヒタルヲ誤リ記セシナルベシ】假令其事出處アリトモ、今傳ル半兩錢大小一ナラザレバ、尺ノ長短定メ難カルベシ

明ノ丘濬ハ曲尺七寸二分許

其說ニ、朱熹家禮神主ノ制度程頤ノ說ニ本ヅキタレドモ尺式ナシ、後人潘時擧ガ得シ司馬家ノ尺式ヲ卷首ニ圖シタルモ、刻本短ケレバ、其圖モ隨テ短シ、唯鄭霖ガ刻セシ家禮尺式ヲ横ニ畫ガキシハ體ヲ得タレドモ、準ズル所無ケレバ、武林ノ應氏ガ圖ト貨泉錢トヲ以テ周尺ヲ定メ準ズルニ、今ノ鈔尺ヲ以テスレバ、其六寸四分弱ニ比ス【朱熹家禮儀節】

按ズルニ鈔尺六寸四分ハ、曲尺七寸二分三釐二毫ナレバ、六寸四分弱ハ曲尺七寸二分許ナルベシ、武林ノ應氏ガ圖ト云フ者今知ルベカラズ、又貨泉ヲ以テ定ムト云ヒタレドモ、丘氏ノ尺ニテハ貨布ト合ハザレバ、其據リタル貨泉後鑄縮少ノ錢ナルベシ、然ラバ據トナシ難シ

徐光啓ハ曲尺七寸二分三釐二毫

其說ニ浙尺八寸ニ當リ、今織染所欽降金星牙尺六寸四分ニ當ル【農政全書】

按ズルニ浙尺八寸ハ、曲尺七寸二分三釐二毫ナリ、司馬光ガ浙尺ノ比按ハ、八寸四分ト云ヘリ、其說ヲ用ヒズシテ別ニ說ヲ立ントナラバ、司馬光ガ說ノ非ナルヲ辨ジ、己ガ據ル所ヲ顯シテコソ立ツベキニ、然ハアラデ、タダ八寸トノミ云ヒシハ如何、【思フニ鈔尺六寸四分ヲ周尺ト定メ、鈔尺六寸四分ヲ浙尺ニテ計

レバ八寸ナルニヨリ、然云ヘルニテ、司馬氏ノ說ヲ考ルマデニ及バザリシナルベシ】織染尺ハ裁衣尺ト同ジキコト、朱之瑜ガ文集ニ見エ、裁衣尺ハ鄭氏尺ナルコト、律學新說ニ出タレバ、織染尺ハ鄭氏尺ニシテ、其六寸四分ハ曲尺七寸二分三釐二毫ナルコト、浙尺ヨリ計リシト同ジ、此說モ出處ヲ擧ゲズ、疑ラクハ丘濬ガ六寸四分弱ト云ヒシニ據リテ、弱ノ字ヲ略シタルナラン、丘濬ガ說ノ據ニ足ラザルコトハ、上ニ云ヘリ、況ヤ此ハ弱ノ字ヲ略シタレバマ、ス、證トナシ難シ【タヾ織染尺ト浙尺トノ比較ヲ云ヒタレバ、織染尺ニヨリテ浙尺ヲ求ル據トスベシ】

朱載堉ハ周尺ハ曲尺六寸七分八釐四毫、【李之藻ガ頖宮禮樂疏張介賓ガ類經附翼等、皆是ニ從フ】其說ニ唐尺最大ナリ、今ノ木匠曲尺是ナリ、魯般ガ家ヨリ傳ヘテ唐ニ至リ、唐人コレヲ大尺ト云フ、唐ヨリ今ニ至ルマデ用ヒテ今尺ト云フ、又營造尺トモ云フ、是殷湯ノ尺ナリ、【按、明營造尺ハ唐大尺ノ九分三釐强長セシモノナリ、本朝ノ曲尺ヨリハ六分許長キナリ】、此尺ノ二寸ヲ去リタルハ【營造尺八寸】夏禹ノ尺ナリ、夏禹ノ尺ノ二寸ヲ去リタルハ【營造尺六寸四分】周武王ノ尺ナリ、【律學新說】黃鍾ノ長サヲ【黃鍾ハ夏禹ノ尺ナリト律學新說ニ云ヘリ】五段ニシテ、其一段ヲ去リテ尺トスルヲ周尺ナリ【律呂精義】

按ズルニ三代尺ヲ異ニスル說、白虎通・宋書禮志ニ出ヅ、白虎通ニハ各三寸ヲ異ニシ、杜氏通典、古禮部歷代所尙ノ條ニ、「夏后氏十寸爲尺、殷人十二寸爲尺、周人八寸爲尺」ト云ヘル注ニ引リ、玉海ニ載セ

タル景祐三年九月十一日阮逸ガ上言ニモ、御製樂髓新經ニ、「白虎通八寸」ト引キタリト云ヘリ、今本白虎通ニハ此文無シ】獨斷ニハ各ヲ一寸ヲ異ニスト云ヘリ、【獨斷ニ「夏以二十寸一爲レ尺、殷以二九寸一爲レ尺、周以二八寸一爲レ尺」トアリ】宋ノ劉恕ガ通鑑外紀鄭樵ガ通志モ白虎通ニ依リタレドモ、此事古經ニ徴スル所無ケレバ信ジ難シ、【三代異尺ノ俗說ナルコト、周尺ノ條ニ辨ゼリ、荻生氏ノ度考ニモ正謬トテ、詳ニ論ジタリ】朱載堉二寸ヲ異ニスルノ說ニ本ヅキ、殷ハ十二寸ヲ尺トスト云フヲ改メテ【是ニテ殷尺ヨリ夏尺ヲ計レバ八寸三分三氂不盡ナリ】殷尺ノ二寸ヲ去リテ、夏尺トスト云ヘリ、然ラバ殷尺ハ夏尺ノ一尺二寸五分ナリ、此說古ニ有ルコト無シ、據ドコロトスベカラズ

漢尺ハ九尺四分一氂六豪六絲六忽不盡

其說ニ、「漢尺十寸、當二大泉十枚一」トモ【律學新說】漢尺以二大泉之徑一爲二一寸一【律呂精義】ト云ヘリ

按ズルニ律學新說ニ裁衣尺七寸五分ニ、大泉九枚ヲ排スル圖ヲ載ス、裁衣尺七寸五分ハ曲尺八寸四分七氂五豪、コレヲ九ニ分レバ九分四氂一豪六絲六忽不盡ナリ、然レドモ大泉ノ徑ヲ一寸トスルコト據無シ、律呂精義ニ、「又志云、大泉徑寸二分者、謂莽以二漢尺之寸一爲二其尺之寸二分一、故云、變二漢制一非レ變二周制一也」ト云ヒタレドモ、王莽漢ノ尺ヲ改メシコトモ證スル所無シ、又食貨志ニ「王莽居レ攝變二漢制一」ト云ヒシハ、從前五銖錢ノミヲ用ヒシニ、王莽ガ時ニ當五十ノ大泉ヲ鑄タルヲ云ヘルコトナリ、シカルヲ從前大泉ノ徑一寸ナリシヲ、王莽ガ時一寸二分トシタリト云フハ誤ナリ、【漢ノ時周景王ノ大錢ヲ一寸トシタル

コト漢無キコト上ニ云ヘルガ如シ】又同書ニ貨泉ニテ尺ヲ起シ、是ヲバ劉歆ガ僞周尺ナリトシ、僞尺莽錢ヲ作リテ荀勗ガ尺ハ漢錢・漢銅斛ニヨリテ造リタレバ、周尺ニアラズ、是ヲ周尺ト云フハ漢ノ莽ノ斛ヨリ得タル玉律ニ合ヒタル故ニ周尺ト云フナレドモ、是ハ晩周ノ物ニテ隆周ノ律度ト云フベカラズ、劉歆ガ銅斛・王莽ガ錢貨ハ本ヨリ法トスルニ足ラズ、西京圜泉 建武銅尺モ王莽劉歆ニヨリテ作リシ者ナルベケレバ、是モ依ルニ足ラズ、「都講所レ得漢時故鐘モ是ト同ジケレバ尤信ズベカラズトモ、荀勗ガ尺ノ周尺ニ非ルヲ論ジ、高若訥ガ荀勗ニヨリテ貨泉ヲ以テ起シタル周尺ニ、司馬光・范景仁等ノ從ヒシヲ誤トシタリ、然レドモ隆周ノ器ノ徴トスベキ物無カラン上ハ、晩周ノ物トテモ宋ノ諸儒ノ私議ニ勝ルニアラズヤ、【銅斛銘ナド王莽ガ造リシ物ニヨリテ起シタル晉前尺ノ隆周ノ律ニ合ヒタリト云ヘバ、王莽ガ晩周ノ度制ヲ改メザリシヲ證スベシ】朱氏ガ立ル所ハ明營造尺ヲ晩周尺トシ、ソレヨリ夏尺ヲ求メ、夏尺ヨリ周尺ヲ求メタルナリ、【三代異尺ノ據ルベカラザルハ上ニ云ヘリ】其明營造尺ハ、北魏尺ノ傳ハリタルモノニシテ、殷尺ニ非ルコト、上文ニ舉タル沿革ヲ見テ知ルベシ、魯般ガ家ヨリ傳ヘタリト云フモ、據ドコロナキ妄說ナリ、【工匠コノ尺ヲ以テ營造ヲ計ル故ニ、カカル俗說モ出來シナリ】假令コノ尺魯般ガ家ヨリ出タリトモ【魯般ハ公輸班ニテ魯哀公ノ時ノ人ナリ】イカデ殷尺トハ定ムベキ、其說皆證トスルニ足ラズ

淸ノ營造尺ハ曲尺六寸八分六釐八毫八絲

其說ニ晉志ニ、十五等ノ尺ヲ列シ、晉前尺ヲ以テ主トシテ是ヲ周尺ト云フ、玉海ニ、六等ノ尺ヲ列シ、司馬

ガ摹セシ高若訥ガ漢錢尺ヲ主トシテ周尺ト云フ、是等ハ皆漢尺ニテイマダ周尺ヲ見ザリシナリ、今曲阜孔氏ノ虞虒尺ハ、今ノ工匠尺七寸四分ナリ、此尺モ晉前尺司馬光尺ト同ジク漢尺ナリ、周尺ハ曲阜ノ顏氏ニ藏ス、今尺ノ六寸四分八氂ナリ、昔人漢尺ヲ周尺トセシハ非ナリ、周ニ八寸尺アリ、十寸尺アリ、顏氏ガ尺ハ七寸尺ニテ此尺四分ノ一ヲ加レバ今尺ノ八寸一分是十寸尺ナリ、昔人コレヲ夏尺ト云フ【潛研堂文集錢塘別傳載其所著律呂古義】

按ズルニ漢尺ノ卽周尺ナルコトハ上ニ辨ズ、又虞虒尺ハ漢官尺ニテ、淸今尺七寸四分、晉前尺司馬光尺ハ淸今尺七寸二分ナレバ同ジカラザルヲ、【隋志ニモ「漢官尺實比二晉前尺一一尺三分七毫」トモアリ】虞虒尺ヲ晉前尺ゝ司馬光尺ト同ジト云ヒシハ誤ナリ、【此事モ上ニ辨ズ】又曲阜顏氏ノ尺ハ朱載堉ガ周尺ノ傳ハレルモノナルベシ、【朱載堉ガ尺ヨリ八氂四豪八絲長キハ譌長セシナラン】然ラバ據ルニ足ラザルコト前條ニ云ヘルガ如シ、八寸尺十寸尺ノ事モ既ニ周尺ノ條ニ辨ジタリ、十寸尺ヲ夏尺トスルコト、例ノ三代尺ノ僞說ナレバ云フニ足ラズ

任兆麟ハ曲尺六寸八分許

其說ニ吳ノ市ニテ古尺ヲ獲タリ、今ノ戶部ノ頒尺ニテ挍スルニ、長サ六寸四分强ナリ、鄭玄ガ禮記注ニ周尺八寸ト云ヘリ、八々六十四ナレバ、戶部頒尺ニテ六寸四分ナルニ合ヘリ、其幕ニ陽文ニテ「長安銅尺卅枚、第卄元延二年八月十八日造」ト云フ篆書ノ銘十八字アリ、元延ハ前漢ノ成帝二十二年ナリ、此尺ニテ

貨布ヲ度レバ、寸度豪氂ヲ爽ハズ、又盧傂尺・銅斛尺・荀勗律尺ニ比校スルニモ異ナルコト無シ、又半両銭ヲ得テコノ尺ニテ度リシニ、周四寸・中函二寸・徑一寸有奇、重十銖有半ナレバ、通考泉志ニ載セタル重サト合ヘリ【有竹居集、漢元延尺記】

按ズルニ戸部領尺ハ即清今尺ナリ、此周尺長サ六寸四分強ナラバ【清今尺ノ六寸四分ハ曲尺六寸七分八氂四豪ナレバ、六寸四分強ハ曲尺六寸八分許ナルベシ】是モ朱載堉ガ周尺ニ依リシモノナルベシ、李氏・孫氏・張介賓等モ朱氏ノ説ニ従ヒ、朱載堉ガ三代異尺ノ説ヲ立シヨリ、清ニ至ルマデモ是ヲ非トセシ者無カリシカバ、六寸四分ト云フコト定說ノ如クナル故ニ、【但丘濬鈔尺六寸四分弱ト云ヒシニ従ヒシニモアルベシ】是等ノ尺世ニ殘リシモノナルベシ、周尺八寸ト云フコトノアルニヨリテ、此尺ヲ漢ノ時作レル八寸ノ周尺トシテ十寸尺ヲ求レバ、清今尺ノ八寸ニテ其一寸ハ清今尺ノ八分ナレバ、八八六十四ト云ヒシナラン、サレド漢尺ヲ清今尺ノ八寸トセシ説曾ニ見ユルコト無ケレバ従ヒ難シ、假令サル説アリトテモ、漢ノ時用ヒザル八寸ノ周尺ヲ元延ノ時鑄作ルベキ理アランヤ、然ルニ元延二年ニ作リシト云フ銘アルハ、後世好事ノ者ノ僞作ナルコト疑無シ、又盧傂尺ハ清今尺七寸四分ナレバ、任氏ガ得シ尺ヨリハ一寸弱長キヲ、盧傂尺・銅斛尺・荀勗尺ト異ナルコト無シト云ヒシモ違ヘリ、【盧傂尺ノ銅斛尺・荀勗尺ト同ジカラザルコト前條ニ云ヘリ】又此尺ニテ貨布ヲ度レバ、豪髮タガハズト云ヒシニヨリテ任氏ガ説ノ漢尺【清今尺八寸】ヲ以テ、二寸五分【漢書貨布長二寸五分】ヲ度レバ、清今尺ノ二寸ニテ曲尺二寸一分二氂ナリ、然ルニ今見ル

所ノ貨布ヲ度レバ皆一寸九分ナリ、律學新說ニ墓シ出セシ貨布ノ圖モ全ク同ジケレバ、此尺ヨリ貨布ヲ度レバ、豪髮タガハズト云ヒシハ、僞ナルコト明ラケシ、是等ノ說、皆朱載堉ガ說ニ依リテ作リシ尺ヲ、八寸周尺トセントテ誣タルニテ、其實ハコレニ二寸ヲ增セバ、慮虒尺ニテ貨布ニモ合ハザルナリ、又半兩錢ヲ計リシ說モ疑ハシ、圜周四寸ナラバ徑ハ一寸二分五釐六豪六絲三忽餘ナルヲ、徑二寸有奇ト云ヒシハイカガ、函二寸ト云ヒシハ猶心得ラレズ、又重十銖半トハ何ノ稱ヲ以テ計リシニカ、又半兩錢ハ重十二銖【漢書食貨志ニ、「秦兼二天下一、銅錢質如二周錢一、文曰二半兩一、重如二其文一」ト云ヘリ、一兩ハ二十四銖ナレバ、半兩ハ十二銖ナリ】ナルベキニ、十銖半ナルヲ通考泉志ニ合ヒシト云ヘルモ、例ノ誣ヒタルナリ、【文獻通考モ、泉志モ、漢書ノ文ヲ載セタルノミニテ異說無シ】カカル贋物ヲ造リテ世ヲ惑ハスハ、惡ムベキノ甚キナリ、不鑒ノ人ハ欺カレテ、遂ニハ牽强ノ說モ出來ルナリ

陳經ハ曲尺五寸五分〇二豪四絲

其說ニ嘉慶十七年古劍一ヲ買得タリ、晉尺【曲尺七寸六分】ヲ以テ度ルニ、臘ノ廣サ【考工記注ニ「臘謂二兩刃一」トアリ】一寸八分一釐【曲尺一寸三分七釐五豪六絲】莖長サ【鄭司農云莖謂二劍夾人所レ握鐔以上一也】三寸六分二釐【曲尺二寸七分五釐一豪二絲】首ノ徑一寸二分、【曲尺九分一釐二豪】身ノ長サ一尺八寸一分【曲尺一尺三寸七分五釐六豪】ナリ、考工記ニ「桃氏爲レ劍臘廣二寸有半寸、以二其臘廣一爲二之莖圍一長倍レ之（鄭玄云莖長五寸）參二分其臘廣一去レ一以爲二首廣一而圍レ之」【注ニ首圍其徑一寸三分寸之二】身長五ニ

其莖長一【莖ノ長サ五寸ヲ五ツ合スレバ二尺五寸莖ト共ニ三尺ナリ、注ニ上制長三尺トアル是ナリ】トアルニヨリ、臘ノ廣サヲ二寸五分トシ、莖ノ長サヲ五寸トシ、首ノ徑ヲ一寸六分六釐六毫六絲六忽不盡トシ、身ノ長サヲ二尺五寸トシテ周尺ヲ計レバ、晉尺ノ七寸二分二釐周尺ノ一尺ナリ、【今臘身莖ヨリ計レバ、七寸二分四釐、首ヨリ計レバ七寸二分ナリ、二釐ト云ヒシハイカガ】後又一劍ヲ得シニ莖ノ長サ前劍ト毫釐ヲタガハズ、【タダ一環首不同口徑一寸六分餘長合一」ト云ヘリ】王厚之ガ鐘鼎款識【即薛尚功ガ款識ナリ】ニ載セタル晉尺ヲ今人周尺トスレドモ、是ハ荀勗ガ劉恭ニ造ラセシ周尺ニテ即晉尺ナリ、然ラバ周ノ尺ト云フ證ナル證モ無ケレバ、余ハ周劍ニヨリテ莖ヲ五寸トシ、是ヲ倍シテ周尺ヲ定ムルナリ【求古精舍金石圖】按ズルニ晉尺三寸六分二釐ナル劍莖ヲ周尺五寸トスレバ、周尺一尺ハ晉尺七寸二分四釐ニテ、曲尺五寸五分〇二毫四絲ナリ、【陳祥ガ周尺ヲ晉尺七寸二分二釐ト云ヒシニヨレバ、曲尺ニテ計レバ五寸四分八釐七毫二絲ナリ、然ルニ陳氏ガ新定周尺ノ圖ヲ度レバ、曲尺五寸三分六七釐ナルハ疑ベシ】晉前尺ノ即周尺ナルコトハ上ニ辨ゼリ、陳氏是ニ從ハズシテ劍莖五寸ヲ以テ尺ヲ起シ、コレヲ周尺トス、然レドモ此古劍桃氏ノ作リシト云フ證モ無ケレバ、六國ニテ制ヲ異ニセシ時作リタルモノナルモ知ルベカラズ、又古ニ云フ尺度ニ合ハザル古器モ多ケレバ、偏ニ此劍ノ孤證ニ依リテ周尺ヲ定ムルコトヲ得ベカラズ、晉前尺ニテ作リシ鐘磬ノ聲諧周ノ樂器ニ合ヘリト云ヒ、今按ルニ王莽ノ銅斛又錢トモ合ヘバ、晉前尺ヲ即周漢ノ尺トスルノ徵アルニシクベカラズ、又古昔人體ヲ計リシハ、中婦人手八寸」ト云ヒ、又五尺童子、六尺ノ孤ト

云ヒ、人ノ長ヲバ或ハ七尺、或ハ八尺ト云ヘリ、今曲尺七寸六分ヲ一尺トシテ計レバ、八寸ハ曲尺六寸〇八釐、今ノ中婦人ノ手ヲ度ルニ略同ジ、五尺ハ曲尺三尺八寸ニテ、十一二歲ノ童ノ長六尺ハ曲尺四尺五寸六分ニテ、十四五歲ノ長ナリ、七尺ハ曲尺五尺三寸二分ニテ、今ノ常人ノ度ニ合ヒ、八尺ハ曲尺六尺〇八分ニテ、今ノ偉人ノ度ニ合ヘリ、【是ニ依レバ古昔人ノ長ヲ七尺ト云フハ常人ノ度ニテ、八尺ト云フハ偉人ヲ云ヒシナルベシ、今モ常ニハ男子ノ長ヲ凡五尺三寸トスレドモ、大ナル人ヲ云フニハ六尺男ト云ヘリ】又陳經ガ定ムル所ノ曲尺五寸五分〇二毫四絲ヲ一尺トシテ度レバ、八寸ハ曲尺四寸四分〇一毫九絲二忽、五尺ハ曲尺二尺七寸五分一釐二毫、六尺ハ曲尺三尺三寸〇一釐四毫四絲、七尺ハ曲尺三尺八寸五分一釐六毫八絲、八尺ハ曲尺四尺四寸〇一釐九毫二絲ナレバ、皆今人ノ度ニ合ハズ、又周禮廩人ニ「凡萬民之食レ食者、人（ゴトニ）四鬴ハ上也、三鬴ハ中也、二鬴ハ下也、若食不レ能二二鬴一ハ、則令ニレ邦移レ民就レ食」、鄭注ニ「此皆謂二一月食米一也、六斗四升曰レ鬴」ト云ヘリ、今曲尺七寸六分ノ尺ヲ以テ計レバ、鬴ハ今ノ六升八合有奇、【此事量考附錄ニ詳ニス】四鬴ハ今ノ二斗七升二合、三鬴ハ今ノ二斗〇四合、二鬴ハ今ノ一斗三升六合ナリ、四鬴ナレバ一日ノ得ル所今ノ九合〇六撮大半撮是ヲ上トス、三鬴ナレバ一日ノ得ル所今ノ六合八勺是ヲ中トス、二鬴ナレバ一日ノ得ル所今ノ四合五勺三撮小半撮是ヲ下トス、四合五勺三撮小半撮ヲ得ルコト能ハザレバ、一日ノ食ニ充ルニ足ラザル故ニ、民ヲ食ノ有ル方ニ遷スナリ、又陳經ガ尺ヲ以テ鬴ヲ作リ、【方一尺。深一尺】曲尺ノ積ヲ計レバ一百六十六寸五百九十二分八百九十五釐〇五十三毫八百二十四絲

ナリ、今ノ斛法〔六千四百五十五寸〕ニテ除スレバ、斛ハ今ノ二升五合八勺有奇、四斛ハ今ノ一斗三合二勺有奇ニテ、一日ノ食今ノ三合四勺四撮有奇、三斛ハ今ノ七升七合四勺有奇ニテ、一日ノ食今ノ二合八勺七撮有奇、二斛ハ今ノ五升一合六勺有奇ニテ、一日ノ食今ノ一合七勺二撮有奇ナリ、一日ノ食三合四勺四撮有奇ナルヲ上ト云フベキニアラズ、又一日ノ食一合七勺二撮有奇ニ及バザルニ至リテ、始テ民ヲ移シテ食ニ就シムベキニ非ザレバ、此尺據トナシ難シ

林春齋（恕）ハ農政全書ニ載セタル圖ニ據リテ神主ヲ作ル、曲尺六寸四分強ナリ【泣血餘滴】

按ズルニ農政全書ニ周尺ノ圖ヲ載セテ、其下ニ「計周尺一尺當二今尺八寸一、當二今織染所鈔隆金星牙尺六寸四分一」トアリ、尺圖ハ形ヲ繪ガキシノミニテ、尺準ニハ非ルヲ、其圖ノ長サヲ度リシニ曲尺六寸四分強ナル故ニ、織染尺六寸四分トアルニ適同シキニヨリ、織染尺ハ即曲尺ニテ、彼圖ハ周尺ノ眞ナリト思ヒ誤リシナルベシ、【朱氏家禮ニ載セタル尺圖諸本縮寫ナルコト、丘濬ガ儀節ニ云ヘリ、康熙帝ノ律呂正義ニ繪ガキシ淸尺活字原本ハ、横圖・縱圖共ニ尺準ナリ、律暦淵源ニ載セタル本ハ、横圖ハ尺準ナレドモ、縱圖ハ縮寫ナリ、滿會典ニ載セシ尺圖ハ共ニ縮寫ナルコト言ヲ俟タズ、農政全書ニ圖シタルモ此類ナリ】徐氏ガ記據ドコロ詳ナラザルコト上ニ云ヘリ、況ヤソノ縮寫ヲ周尺ノ長サナリト誤リタルナレバ、據トナスベカラズ

中村惕齋（欽）ハ或ハ曲尺七寸八分三氂二毫強ト云ヒ、或ハ曲尺七寸七分八氂二毫強トモ云ヘリ、其說ニ、古來禁裏ノ御府ニ竹尺アリ、弘法大師將來ノ物ト云傳フ、背ニ周尺ト刻メリ、小倉[illegible]一年勅ヲ承テ御

府ノ書籍ヲ晒サレシ時、コレヲ見テ精摹セラレケルガ、其後寛文元年內裏炎上ノ時、古尺ハ燒亡タリ、此尺ニテ漢唐ノ錢ヲ度リ見ルニ、此尺唐ノ淮尺ニテ卽梁裘尺ナリ、梁裘尺ハ「比二晉前尺一尺〇二分二釐一豪有奇一」ト隋書ニ見エタルニ因リテ、此尺ヲ一尺〇二分二釐一豪ニ分チテ、其一尺ヲ古周尺ト定ム、大尺ノ七寸八分三釐二豪ニ比ス、【律尺考驗】古尺當ニ曲尺七寸七分八釐二豪強、淮尺當ニ曲尺七寸九分五釐弱、【按ズルニ七寸九分五釐弱トアルニヨリテ七寸九分四釐九毫トシテ一〇二二一ヲ以テ除スレバ、七寸七分七釐七豪一絲二忽餘ニテ、此ニ七寸七分八釐二豪強ト云フニ合ハズ、故ニ七寸九分五釐四豪ヲ一〇二二一ヲ以テ除スレバ、七寸七分八釐二豪〇一七四強ヲ得レバ、此ニ七寸九分五釐弱トアル弱字ハ強字ノ誤ナルベシ】本朝御府周尺亦是也【三器攷略】

按ズルニ律尺考驗ニヨリテ、曲尺七寸八分三釐二豪ヲ周尺トシ、一尺〇二分二釐一豪ヲ以テ乘ズレバ、御府尺ノ長サ八寸〇〇五豪〇八忽七二ナリ、三器攷略ニ七寸九分五釐弱ト云ヒシニ合ハズ、二書一人ノ手ニ出デテ其長サ同ジカラザルコト疑フベシ、【御府尺ハ一ナレドモ度リシ曲尺ニ長短アリシ故ニ、同ジカラザリシニヤ】又按ズルニ實起卿ノ摹サレシハ、唐小尺ノ譌尺ナリ、【度攷ニ詳ニス】中村氏是ヲ淮尺トシ、【淮尺ハ其長サ唐小尺ト同ジキコト上ニ云ヘリ、然レバ御府尺ヲ淮尺ナリト云ヒシハ當レリ】淮尺ヲ卽梁裘尺トシテ、周尺ヲ求メタレドモ、梁裘尺ハ祖暅ガ作リシ尺、淮尺ハ宋氏尺ノ南朝ニ傳ハリシ尺ニテ、裘尺ヨリ出シモノニ非ズ、其長サモ同ジカラザレバ此說徵トナシ難シ、【淮尺ヲ卽梁裘尺トシタルハ、譌

吉ガ梁表尺ヲ「出ニ於司馬法ニ」ト云ヒシヲ、隋書ニ載セ、又千金方ニ准尺ヲ「夏家古尺、司馬六尺爲レ歩」ト云ヒ（法字ヲ脱シタルナラン）共ニ司馬法ヲ引キタレバ、同ジ尺トシタルナルベシ、梁表尺モ准尺モ宗ハ晉周尺ヨリ出デ、後魏ノ長尺ニ非ル故ニ、並ニ司馬法ノ尺ナリト云ヒシニテ、其長サ全ク同ジキニハアラズ、縱令晉前尺ヲモ唐小尺ヲモ、共ニ周尺ト云ヘドモ、其長サ同ジカラザルガ如シ】況浙府尺ハ鑄尺ナレバ、コレニヨリテハ周尺ヲ起スコトヲ得ズ

朱舜水（之瑜）ハ二說ヲ擧、一ハ曲尺六寸四分弱

其說ニ「周尺ハ黃鍾之長均作ニ充段ハ、去ニ一段ニ作ニ神主尺ニ」【舜水文集】

按ズルニ此說朱載堉ガ說ニ據リシナリ、朱載堉ノ周尺ハ明營造尺ノ六寸四分ナルヲ舜水其說ニ據リナガラ、六寸四分弱ト云ヒシハ、丘濬ガ鈔尺六寸四分弱ト云ヒタルヲ混ジテ、誤衍シタルナラン、朱載堉ガ三代尺ノ說據ルベカラザル上ニ、其周尺ハ營造尺六寸四分ナレバ、本朝ノ曲尺ニテハ六寸七分八釐四毫ナルニ、朱之瑜ハ本朝曲尺ヲ卽明營造尺ナリト思ヒテ、曲尺六寸四分弱トハ云ヒシナルベシ、【朱載堉營造尺ヲ「今木匠曲尺也」ト云ヒ、マタ「唐人謂之大尺ニ」ト云ヒシヲ以テ、本朝曲尺ヲ卽明營造尺ナリトハ思ヒシナリ、營造尺モ本朝曲尺モ共ニ唐大尺ヨリ出タレドモ、曲尺ハ三分ノ譌長ナルニ、營造尺ハ九分一釐譌長シタリ、然レバ營造尺ト本朝曲尺トハ六分一釐ノ違アルナリ】其據リタル朱載堉ガ說ノ譌トスルニ足ラザルノミナラズ、弱學ヲ衍シ、且明營造尺・本朝曲尺ヲ誤混シタレバ、其說據トナシ難シ

一ハ曲尺七寸三分强
其說ニ「當二明裁尺六寸四分弱一、家禮所謂六寸四分弱鈔尺也」【同上】
按ズルニ朱熹家禮ニモ、後人ノ家禮ニ附ケタル潘時擧ガ尺式ニモ、六寸四分弱ト云フコト無シ、是ハ丘濬ガ家禮儀節ニ「比二今鈔尺六寸四分弱一」トアルヲ引キシナラン、鈔尺ノ六寸四分弱ハ曲尺七寸二分許ナルヲ、朱之瑜ハ鈔尺ヲ曲尺一尺一寸五分半トシタレバ、【是モ文集ニ見ユ】六寸四分弱ヲ曲尺七寸三分强トハ云ヒシナリ、然レドモ丘濬ガ說據リドコロ明ナラザル上ニ、朱之瑜ガ鈔尺謬長セシモノナレバ、是說モ據リ難シ【朱之瑜ガ說ノ曲尺一尺一寸五分半ノ鈔尺ニテ農政全書ニヨリテ浙尺ヲ求ムレバ、曲尺九寸二分四氂ナリ、此浙尺ヲ以テ司馬光ガ圖ニヨリテ布帛尺ヲ求ムレバ、曲尺一尺〇四分四氂一毫二絲ニテ、續古摘奇算法ニ載セタル圖ニ合ハズ、又コノ布帛尺ヨリ周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸七分九氂一毫九絲四忽有奇ニテ、西淸古鑑ニ載セタル王莽ガ銅斛ニモ、周官祿田考ニ載セタル秦熺ガ欵識ノ古尺ニモ、今世傳ハル王莽ガ錢貨ニモ合ハザレバ、朱之瑜ガ鈔尺ハ謬長セシモノナルコト明ラケシ、朱載堉ガ圖ニ従ヒテ、鈔尺ノ長サハ曲尺一尺一寸三分ト定ムベシ】
中根玄珪（璋）ハ曲尺六寸五分六氂有奇
其說ニ黃鍾ノ長サ【卽夏尺】五分ノ一ヲ加ヘタルヲ商尺トス、夏尺ノ十二寸ナリ、【法隆寺牙尺卽是ニテ、曲尺九寸八分四氂二毫餘ニ當ルト云ヘリ、法隆寺尺ヲ余ガ度リシハ九寸八分弱ナリ、中根氏ハイカニ度リシ

ニカニ黄鐘ノ長サ五分ノ一ヲ減ジタルヲ周尺トス、夏尺ノ八寸ナリ【律原發揮】按スルニ是モ朱載堉ガ說ニ本ヅキシナリ、【中根氏原書ヲバ見ズシテ、續經圖彙ニ引キタルニ據ルト云ヘリ】但朱氏ハ明營造尺ヲ殷尺トシ、其八寸ヲ夏尺トス、夏尺ヨリ殷尺ヲ度レバ、一尺二寸五分ナリ、中根氏ハ朱氏ノ說ニ從ヒテ法隆寺尺ヲ殷尺トシタレドモ、【朱氏ガ明營造尺ハ卽唐大尺ニテ、殷尺是ナリト云ヒシニ從ヒ、法隆寺尺ハ卽唐大尺テレバ明營造尺ト同ジト思ヒ、遂ニ殷尺ト定メシナリ、假令法隆寺尺ヲ九寸八分四釐二毫トスルモ、營造尺ヨリハ七分五釐八毫短シ、中根氏朱氏ノ原書ヲ見ザリシ故、營造尺ノ圖アルヲ知ラズシテ、卽唐大尺ト云ヒシ文ニヨリテ、法隆寺尺ト同ジト思ヒシナリ】白虎通ニ「殷人十二寸爲尺」ト云ヒシヲ以テ、朱氏ガ殷尺八寸ヲ夏尺トスル說ヲ改メテ、殷尺【法隆寺尺ヲ云】八寸三分三釐三毫三絲三忽不盡ヲ夏尺トス、【コノ夏尺ヨリ殷尺ヲ度レバ一尺二寸ナリ】コノ夏尺ヲ五分シテ一ヲ去テ【夏尺ノ八寸】周尺ト定メシナリ、【殷尺ハ曲尺九寸八分四釐二毫、夏尺ハ曲尺八寸二分〇一毫六絲六忽不盡、周尺ハ曲尺六寸五分六釐一毫三絲三忽不盡】三代異尺ノ說從フベカラズ、明營造尺ヲ殷尺トセシモ妄說ナル上ニ【是等ノ事朱載堉ガ尺ノ條ニ云ヘリ】法隆寺尺ヲ明營造尺ト同ジト誤リタレバ、其說マヽス、據ルベカラズ、【度制略考ニ玄珠晩年臣ニ語テ云、往年律原發揮ヲ著シテ今大ニ悔ユ、何ニトナレバ權衡度量皆律ヨリ生ズルニ非ズ、是一ツ、法隆寺ノ尺ハ度ニ非ズ、壓鎮ノ類ノミ、是二ツト云ヒシトアリ、權衡度量律ヨリ生ズルニ非ズト云ヘルハ、荻生氏ノ說ニ服シタルナルベシ、法隆寺尺ヲ壓尺ニテ尺

度ニ非ズト云ヒシハ、唐ノ鏤牙尺ナルコトヲ知ラザリシナリ、玄珪晩年ノ定說ハイカナリシカ知ラザレドモ、思フニ荻生氏ノ範圍ヲ出ルコト能ハザリシナラン】

荻生徂徠（茂卿）ハ七寸一分九釐六豪三絲一忽餘

其說ニ後周ノ玉尺ハ武帝ノ保定中ニ作リシ尺ナリ、唐ニテ是ヲ法尺トシ律冠冕ヲ制スルニ用ヒ、【唐小尺ナリ】其他ハ大尺ヲ用ヒシナリ、唐大尺ハ今ノ曲尺ナレバ、唐小尺ハ曲尺八寸三分三釐三豪三絲三忽不盡ニテ、是卽後周ノ玉尺ナリ、隋書ニ「玉尺比ニ晉前尺一尺一寸五分八釐」トアレバ、玉尺ノ長サヲ一一五八ニテ除シ、此長サヲ得ルナリ【度考】

按ズルニ荻生氏ガ唐小尺ヲ、卽後周玉尺ト爲シハ、通典ニ貞觀十年張文收新令累黍尺ヲ以テ嘉量ヲ作リシニ、古玉斗ト符スト云ヒシ【全文度攷ニ引リ】古玉斗ヲ卽後周ノ時掘得タリシ物ト思ヒシヨリ、後周玉尺ヲ唐尺ト同ジトシタレドモ、【律呂新書ニ後周玉尺ノコトヲ「唐之度量權衡與ニ玉斗一相符者、卽此尺爾」ト云ヒシ誤リヲ襲ヒタルナリ】張文收ガ尺ハ隋以來用ヒ來リシ鐵尺ニヨリタルコト疑無ケレバ、【說唐度ノ條ニアリ】ソレニ符合シタル古玉斗ヲ後周ノ古玉斗トハ云ヒ難シ、【コノ玉斗唐小尺ニ合ヒシヲ見レバ、劉宋以後ニ作リシモノカ、後周ノ時蘇綽ガ尺ニ依テ度量ヲ作リシ時ノモノニモアルベク、又晉後尺モ其長サ鐵尺ト租同ジケレバ、東晉ノ時作リシモノナルモ知ルベカラズ、山田正珍ノ「詳ニ通典權量篇全文ハ、始擧ニ虞書漢志之文ハ、中及ニ魏隋ハ、終則載ニ唐張文收所レ鑄銅斛秤尺皆與ニ古玉斗一符之說上ハ、而中間無ニ一字及ニ後

周玉尺玉斗二者、出土證レ之、其所レ謂古玉尺指二周漢器物一言レ之無レ疑矣」ト云ヒシモ、後周ノ玉斗ニ非ズ
トシタルナリ、然レドモ周漢ノ器トシタルハ誤ナリ、次ノ條ニ辨ズ】モシ玉尺ト唐尺ト同ジカランニハ、
隋書ニ「玉尺比二晉前尺一一尺一寸五分八釐二」（曲尺八寸八分〇〇八絲）トアルヲ、王溥ニ宋ノ司天監ノ景
表尺ハ即唐尺ナリ、晉前尺ニテ校スレバ長キコト六分三釐【晉前尺ノ一尺〇六分三釐ハ曲尺ノ八寸〇七毫
八豪八絲】ト云フベキニアラズ【玉尺ハ唐ノ小尺ニ比スレバ曲尺ニテ七分二釐二毫長シ】

伊東東涯（長胤）ハ六寸餘

其說ニ「孟子ニ一稱七寸康稱レ之二」ト云ヘリ、大全ニ「饒氏曰、周七寸、只如二今四寸許一」トアリ、大樣周ノ
一尺ハ六寸餘ト心得ベシ【制度通】

按ズルニ饒氏ノ說據リ難キコト上ニ云ヘリ、饒氏ノ說ニ從ヘバ曲尺五寸七分餘ナルヲ、六寸餘ト云ヒシモ
違ヘリ

正木濔平（政幹）ハ曲尺七寸七分八釐

其說ニ明和四年三月京ノ書肆含英堂ニテ半兩錢ト、五銖錢トヲ見タリ、半兩錢ニハ邊郭無シ、五銖錢ニハ
背ニ郭有リテ、面ノ郭無シ、泉志ヲ考ルニ、梁武ノ天監元年ニ公式女錢ヲ鑄ル、徑一寸、文ヲ五銖ト云フ、
張台ガ曰、背肉孔郭有ル者、公式女錢ト云フト、今ノ秤ニテ計リシニ、五分六釐、是ニ據リテ秤ヲ作リ梁
秤トシ、諸秤ヲ推シテ唐ノ秤ニ至リシニ今ノ一匁弱ナリ、然レバ此錢公式女錢ナルコト疑無シ、又今ノ曲

尺ヲ以テ度リシニ、其正ヲ得ザルニヨリ法ニヨリテ、錢ノ徑ヲ六累ネテ、四寸七分ヲ得、コレヲ右ニ置キ又梁ノ法尺ハ晉前尺ノ一尺〇〇七釐ナレバ、是ヲ六累ネテ六尺〇四分二釐ヲ得、コレヲ左ニ置キ【錢徑ヲ六累ネタルニヨリ、是ヲモ六累ネテ等數ヲ求メシナリ】約術ヲ以テ約スレバ、等數二釐ヲ得、【右ノ四寸七分ヲ以テ左ノ六尺〇四分二釐ヲ減ズルコト十二度ニ至レバ、左四寸〇二釐殘ル、此四寸〇二釐ヲ以テ右四寸七分ヲ減ズレバ、右六分八釐殘ル、此六分八釐ヲ以テ左四寸〇二釐ヲ減ジ、五度ニ至レバ左六分二釐殘ル、此六分二釐ヲ以テ右六分八釐ヲ減ズレバ、右六釐殘ル、此六釐ヲ以テ左六分二釐ヲ減ジテ十度ニ至レバ、左二釐殘ル、此二釐ヲ以テ右六釐ヲ再減スレバ、右二釐殘リテ、左右共ニ二釐トナル、是ヲ等數二釐ヲ得ト云フ】此二釐ヲ以テ、左ノ六尺〇四分二釐ヲ約スレバ、三千〇二十一ヲ得、右ノ四寸七分ヲ約スレバ二千三百五十ヲ得、即晉前尺長サハ曲尺ヲ三千〇二十一ニ分チタル二千三百五十ナルコトヲ知ル、是ニテ求ムレバ周尺【即晉前尺】ハ曲尺七寸七分七釐八豪八絲八忽强ナリ、【母子ヲ分チ、母ノ三千〇二十一ヲ以テ、子ノ二千三百五十ヲ除スレバ、此數ヲ得、按ズルニ母子ヲ分ンニハ此ノ如ク計ルベケレドモ、周尺ヲ曲尺ノ何ホドト計ンニハ、此錢六枚ヲ累ネテ曲尺四寸七分ヲ得、コレヲ六歸スレバ一錢ノ徑曲尺七分八釐三豪三絲三忽不盡ナリ、是ヲ梁法尺ノ一寸トセバ、コノ徑ヲ一〇〇七ニテ除スレバ、晉前尺ノ長サハ知ラルヽナリ】古錢ハ多クノ年ヲ經タルニヨリ、少シノ刓泐ハアルベケレバ、今曲尺七寸七分八釐ト定メシナリ【三器逢源考】

按ズルニ隋書食貨志ニ、「梁武帝乃鑄錢、肉好周郭、文曰二五銖一」【所謂内郭五銖ナリ、從前ノ五銖ハ肉郭ノミテ、好郭ハ無カリシヲ、梁ニテ鑄タル五銖ハ肉好トモニ郭アリシナリ】同書ニ、「又別鑄二五銖一、除二其肉郭一謂二之女錢一」ト云ヘリ、【内郭五銖ノ好郭ノミアリテ肉郭無キモノナリ、】泉志ニ隋志ヲ引テ、「天監元年鑄二公式女錢一、徑一寸、稱兩如二新鑄五銖一、但邊無二輪郭一」トモ云ヘリ】又泉志ニ隋志ヲ引テ、「背有二好郭一者謂二之公式女錢一、背無二好郭一者正謂二之女錢一」ト云ヘリ、【面ニハ好郭アリテ肉郭無ク、背ニハ肉好共ニ郭アルハ官ニテ鑄タル女錢ナル故ニ、公式女錢ト云ヒ、民間ニテ鑄タリシハ面ハ公式女錢ト同ジケレドモ、背ハ肉郭ノミアリテ好郭無シ、是ヲバ公式トハ云ハデ女錢トノミ云ヒシトナリ】余童年ヨリ古錢ヲ好ミ普ク諸家ノ珍錢ヲ見タレドモ、イマダ女錢ヲ見シコト無ク、同好ノ人々モ見タリシト云フコトヲ聞カズ、正木氏ノ見シハ眞ニ女錢ナリシヤ、オボツカナシ、【正木氏ノ見シ五銖錢好郭アルコトヲ云ハズ、モシ好郭無クバ女錢ニアラズ、疑ラクハ正木氏ノ見タリシハ、漢ノ五銖ノ至テ精緻ナルモノカ、或ハ對文錢ノ類ニハアラザルニヤ】又梁ノ五銖錢ヲ法尺ノ一寸ニ作リシコトモ史ニ見エルコト無シ、顧氏ガ徑一寸ト云ヒシハ、顧氏其錢ヲ度リシニ一寸ナリト云ヘルナレバ、其度ハ梁ノ俗間尺ナルベシ、【今世傳ハル内郭五銖ヲ度ルニ、曲尺八分一二釐ニテ、略梁ノ俗尺ノ一寸ナリ、内郭五銖ヲモ公式女錢ヲモ、顧氏共ニ徑一寸ト云ヒタレバ、モシ女錢ノ傳ハリタランニハ、是モ必曲尺八分一二釐ナルベキニ、正木氏ノ見シ五銖錢ハ徑七分八釐三毫三絲三忽不盡ナリシト云ヘバ、是モ女錢ナラザリシ一

證ナリ】然ラバ正木氏ノ見タリシ錢、假令眞ニ女錢ナリトモ梁俗尺ニヨリテ算ヲ起スベキニ【女錢ノ徑ヲ曲尺七分八釐三豪三絲三忽不盡トシ、是ヲ梁俗尺ノ一寸トスレバ、周尺ハ曲尺七寸三分一釐四豪〇三忽餘ナリ】法尺ヲ以テ算セシモタガヘリ、且梁稱ヲ作リテ唐稱ヲ求メシ說モ明ナラザレバ、此說據トナシ難シ

山田圖南（正珍）ハ曲尺八寸三分三釐三豪三絲三忽不盡

其說ニ唐貞觀中張文收銅斛尺升合ヲ鑄シヲ樂署ニ藏メタリシニ、則天ノ時武延秀ソレ等ト律マタ古玉尺玉斗升合ヲモ獻ジタリ、【按ズルニ玉尺ノコト唐書ニハアレドモ、通典ニハ載セザレバ誤ナラン】其斛ノ銘ニモ、「與二古玉斗一相符」トアリシト云ヘリ、此古玉斗ヲ後周ノ時得タリシ物ト、荻生氏ノ云ヒタルハ誤ニテ【辨證上ノ條ニ引リ】周漢ノ物ナルベシ、張文收ガ尺、ソレニ符合スレバ唐小尺ハ即周尺ナリ、長孫無忌ガ、唐律ニ「以二大尺六之五一爲二古尺一」ト云ヒ、隋書ノ志モ同人ノ作ナルニ、晉前尺ヲ古尺トシタレバ、晉前尺モ大尺ノ六ノ五ナルコト明ラケシ【權量撥記】

按ズルニ張文收ガ云フ所ノ古玉斗、何レノ代ノ物ナルコト定カニ知ラレザレバ、ソレニ同ジトテ、唐小尺ヲ即晉前尺トハ定ムベカラズ、【コノ古玉斗疑ラクハ東晉以後ノ物ナルベキコト前條ニ云ヘリ】又唐律ニ「以二大尺六之五一爲二古尺一」ト云ヘリト引キタレドモ、魏徵等ガ唐律ニモ長孫無忌ガ疏議ニモサル文アルコト無シ、是ハ通典ニ貞觀ノ尺ヲ開元ノ時通行ノ尺ニ校ベタリシニ、六ノ五ニ當ルト云ヒシヲ思ヒタ

ガヘシナルベシ、貞觀ノ尺ハ小尺、開元ノ通行尺ハ大尺ナレバ、通典ニ云ヒシハ大尺ト、小尺トノ比較ニテ、ココニ引證スベキニ非ズ、然ラバ晉前尺ノ唐小尺ト同ジキ證ハアルコト無シ、況玉海ニ唐尺ヲ晉前尺ヨリ六分三釐長シトアレバ、唐尺ノ晉前尺ニ非ルコト明ナルヲヤ

田村西湖（善之）ハ曲尺七寸八分三釐二豪〇八忽有奇

其說ニ今ノ曲尺ハ唐大尺ニテ、曲尺八寸三分寸ノ一唐小尺ナリ、唐小尺ハ即宋氏尺ナレバ、隋書ニ「宋氏尺實比晉前尺一尺六分四釐」トアルニヨリテ、曲尺八寸三分寸ノ一ヲ一零六四ヲ以テ除スレバ、七八三二零八有奇ヲ得、是晉前尺ナリ【度量小識】

按ズルニ諸家ノ周尺ヲ求メタルヤウ、皆誤リタルニ、獨コノ考其法ヲ得タリ、但唐書ニ開元錢ヲ徑八分ト云ヒシヨリ、今ノ曲尺ヲ唐大尺ノ誤無キモノト思ヒシハ非ナリ、【今ノ曲尺ハ唐大尺ナレドモ、三分許長セシコト度攷ニ云ヘリ】曲尺ヲ即唐大尺トシタルニヨリ、周尺モ二分三釐餘長カリシナリ、モシ周尺ヲ曲尺七寸八分三釐二豪〇八忽有奇トシテ布帛尺ヲ求ムレバ、曲尺一尺〇四分九釐四豪九絲八忽餘【司馬光ガ圖ニ布帛尺ヲ「當周尺一尺三寸四分二」ト云ヒシニヨル】浙尺ハ曲尺九寸三分二釐三豪九絲有奇【司馬光ガ圖ニ周尺ヲ「當浙尺八寸四分二」ト云ヒシニヨル】鈔尺ハ曲尺一尺一寸六分五釐四豪八絲七忽餘ニテ【農政全書ニ「浙尺八寸當今鐵渠所欽降金星牙尺六寸四分二」ト云ヒシニヨル、鐵渠所尺ハ即鈔尺ナリ】布帛尺ハ楊輝ガ圖ニ合ハズ、鈔尺ハ朱載堉ガ圖ニ合ハズ、其周尺ハ王莽ガ錢貨銅斛秦煬ガ欵識ノ古尺ニ

モ合ハザレバ、此說モ據リ難シ

藤蒙齋（貞幹）ハ三說アリ、一說ハ七寸六分

其說ニ大寶ノ勅書ニ捺シタル天皇御璽【方曲尺二寸三分弱】大學寮印【方一寸六分】ヲ載セテ、嘗テ元狩五銖・五行大布・太貨六銖・大和五銖・布泉・白錢五銖・貨泉・貨布等ノ錢ヲ以テ泉志ノ言フ所ニヨリテ別ニ度ヲ起シシカバ、今ノ曲尺七寸六分ニ當レリ、是晉前尺ナリ、凡泉志ニ舊譜トテ古泉ヲ度リシハ皆此晉前尺ナリ、此尺ニテ大寶勅書ノ御璽ヲ度レバ、方三寸大學寮印ハ方二寸二分ニテ、正ニ令ニ云ヒシト合ヘリ、是ニヨレバ大寶令ヲ作リシ時ハ、晉前尺ヲ用ヒシナラン【金石遺文】

按ズルニ藤氏ノ說ニヨリ、泉志ニ引キタル舊譜ニテ尺ヲ起セバ、元狩五銖ニテハ、【舊譜ニ徑一寸ト云ヘリ、今度ルニ曲尺八分五釐】曲尺八寸五分ヲ一尺トス、五行大布ニテハ【舊譜ニ徑一寸一分ト云ヘリ、今度ルニ曲尺九分弱】八寸一分餘ヲ一尺トス、布泉ニテハ【舊譜ニ徑一寸トアリ、今度ルニ曲尺八分强】八寸餘ヲ一尺トス、白錢五銖ノ【舊譜ニ徑一寸トアリ、今度ルニ大ナル者ハ曲尺八分三釐、小ナル者ハ曲尺七分五釐】大ナル者ニテハ八寸三分ヲ一尺トシ、小ナル者ニテハ七寸五分ヲ一尺トス、【舊譜ニ徑一寸ト云ヒシハ、大ナル者ヲ云フナルベシ】多ク八寸以上ナレバ舊譜ニ計リシ尺度ハ皆唐小尺ナリ、【舊譜ハ唐ノ封演ガ錢譜ナレバ其度リシ尺ハ唐小尺ナリ、此事度攷ニ詳ニス】又太貨六銖ハ舊譜ニ徑度ヲ載セズ、大和五銖ハ今世傳ハラザレバ、此二錢ハ尺度ノ證ニハナシ難シ、貨泉ハ泉志ニハ張台ヲ引テ、「有二徑寸

四分者一、有二径六分者二」ト云ヒ、李孝美モ「有レ径寸五分至二四分一者上」ト云ヘバ、泉志ニヨリテハ度ヲ起スコト能ハズ、然レバ元符五銖以下ニテ尺ヲ起シシガ曲尺七寸六分ニ當リシト云フハ僞ナリ、タダ貨布ノ條ニ張台ヲ引テ、「以二今尺一量レ之、得二寸九分二」ト云ヘリ、曲尺一寸九分ヲ二十五分シテ一分ヲ得、【漢書食貨志ニ貨布長二寸五分トアリ】ソレヨリ一尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸六分ナル故ニ、晉前尺ヲ曲尺七寸六分ト定メシナルベシ、サレドモ張台ハ唐人ナレバ【張台ガ唐人ナルコト宋ノ周輝ガ清波雜志ニ見ユ、晁公武ガ讀書志ニモ「唐張台有二泉譜一卷」」ト云ヘリ、】增長セシ曲尺ニテ度ルベキニ非ズ、【曲尺ハ唐大尺ノ三分增長セシモノナリ、度攷ニ詳ニス】必唐大尺ニテ度リシナラン、唐大尺ノ一寸九分ハ曲尺ノ一寸八分四釐三豪ナレバ、是ヲ二十五分シテ尺ヲ求ムル時ハ、曲尺七寸三分七釐二豪ナリ、【唐大尺ヨリ三分增長セシ今ノ曲尺ヲ以テ貨布ヲ度ルニ、一寸九分アレバ、張台ガ一寸九分ト云ヒシハ、大凡ニ度リタルニテ、其實ハ一寸九分五六釐モアリシナルベシ】然ラバ藤氏ノ七寸六分ト云ヒシハ偶中ニテ眞ニ其度ヲ得タルニハ非ズ、【故ニ或ハ七寸四分弱トモ云ヒ、後ニハ八寸許ナドト云ヒテ七寸六分ヲ定說トナサズ】又大寶新書ノ璽印ヲ證トシテ、大寶ノ時ハ晉前尺ヲ用ヒシナラント云ヒタレドモ、大寶ノ時ハ唐ノ大小尺ヲ用ヒテ【此事度攷ニ云ヘリ】晉前尺ハ用ヒザリシニヨレバ、彼勅書ハ張台ガ言ニヨリテ曲尺七寸六分ノ度ヲ起シ、其尺ニテ璽印ヲ作リ贋造セシモノナルベシ

一ハ七寸四分弱

同人ノ集古圖ニハ其金石遺文ト全ク同ジクシテ、タダ七寸六分ヲ、七寸四分弱トアリ

按ズルニ是ハ今ノ曲尺ノ濶長尺ナルコトヲ知リテ、曲尺九寸七分三釐許ヲ唐大尺トシ、【法隆寺尺ニヤ據リツラン】一寸九分ヲ度レバ曲尺一寸八分四釐八豪四絲ナリ、是ヲ二十五分シテ一尺ヲ求ムレバ、七寸三分九釐四豪八絲ナレバ、七寸四分弱ト云ヒシナルベシ、然レドモ張合ガ一寸九分ト云ヒシ言精シク度リシニ非ザルニ似タレバ、證トナシ難キ上ニ、七寸四分弱トスレバ、古泉・銅斛・古尺・布帛尺・鈔尺ノ圖ニモ合ハザレバ、コノ尺モ據リ難シ

一ハ八寸許

其說ニ伯耆守近家宿禰ノ說ニ、曲尺六寸六分五釐弱ヲ周尺トシ、周尺ノ一尺二寸ヲ古尺トス、是所傳ノ祕說ナリト云ヘリ、幹按ズルニ古尺ハ卽晉前尺ナリ、余嘗テ古錢【原注】元狩鑄五銖錢・鍾官赤側錢・太貨六銖錢・常平五銖錢・布泉錢・五行大布錢・白錢・五銖錢、已上眞正大樣者】ヲ以テ晉尺ヲ起ス、一尺ハ曲尺ノ八寸許ナリ【好古日錄】

按ズルニ近家宿禰ハ樂家辻氏ナリ、云フ所ノ曲尺六寸六分五釐弱ヲ周尺トシ、ソノ一尺二寸ヲ一尺トシタル古尺ハ曲尺七寸九分八釐弱ナレバ、卽惕齋ガ云フ所ノ御府尺ナルベシ、然ラバ御府尺ヲ古尺トシ、古尺ノ八寸ヲ周尺ト定メタルモノナラン、【周尺ヨリ古尺ヲ起シシ如ク云ヒタレドモ、周尺ヨリ古尺ヲ起シタルニハアラデ、古尺ヨリ周尺ヲ求メタルモノナルベシ、但古尺ノ八寸ヲ周尺トスレバ、古尺ハ周尺ノ一尺二

寸五分ナルヲ、周尺ノ一尺二寸ヲ古尺トスト云ヒシハ非ナリ、此說往往アルコトナリ】所傳ノ舊說ナリト云ヒシカドモ、御府尺ヨリ起シタレバ、律尺考驗ニヨリテ立テタル說ナルベシ、然ラバ此說古傳說ニハアルベカラズ、八寸ノ尺ハ戰國ニ出テ、眞ノ周尺ニ非ザルコト、鄭玄コレヲ辨ジタリ、【上ニ引リ】況鄭玄ノ辨ジタルハ漢尺【卽周ノ十寸尺ナリ】ヨリ八寸ナルヲ、是ハ唐小尺【御府尺ノ唐小尺ナルコトモ上ニ云ヘリ】ヨリ八寸ト定メタレバ、其說據ルベカラザルコト辨ヲ俟タズ、藤氏コノ古尺ヲ晉前尺ナリト云ヒシハ、初泉志ノ張台ガ言ニヨリテ七寸六分ヲ晉前尺ト定メ、舊譜ニテ起シタルモ七寸六分ナリト稱ヒタレドモ、實ハ舊譜ノ度ル所ハ唐小尺ナレバ【此事度攷ニ詳ニス】曲尺八寸餘ナルニヨリ、一モ合ハザルヲ以テ其說ヲ改メテ、辻氏云フ所ノ古尺ヲ晉前尺ト定メシナリ、【藤氏晃戴尺ヲ唐大尺トシ、曲尺ヲ唐小尺トシタリ、舊譜ニ云フ所ノ度ハ八寸許ニテ、曲尺ヨリハ稍短ケレバ、晉前尺ナリト思ヒシナルベシ、藤氏ガ大小尺ノ說ノ誤ナルコトハ度攷ニ辨ゼリ】然レドモ辻氏ノ古尺ハ御府尺ニテ、卽唐小尺舊譜ニ度リシ尺モ唐小尺ナレバ、何レトモ王莽ガ銅斛・錢貨・秦燒ガ古尺ノ圖ニモ合ハズ、是ヨリ計レバ布錢尺ハ一尺〇六分九釐強、貨尺ハ九寸五分弱、斛尺ハ一尺一寸八分七釐五豪弱ニテ、皆合ハザレバ此尺ノ晉前尺ニ非ルコト明ナリ、【晉前尺ハ荀勗ガ古器古錢ニヨリテ造リシ尺ナリ、今古錢ヲ以テ尺ヲ起セバ、曲尺七寸六分ナレバ、晉前尺ノ八寸許ナラザルコト辨證ヲ俟タズ】藤氏又古錢七品ヲ擧テ、是ニヨリテ八寸許ノ尺ヲ起スト云ヒタレドモ、【是卽唐小尺ニテ晉前尺ニ非ザルコト上ニ云ヘリ】其七品ノ古錢ヲ考フルニ、布

泉ト五行大布ト白錢五銖【大樣者】ニテ起セバ、八寸餘ナレバ云フ所ノ如シ、元狩五銖ニテ起セバ、八寸五分ニテ頗長シ、【此五銖徑曲尺八分五釐レバ、唐小尺ニテハ、一寸〇五釐五豪許ナルヲ、舊譜ニ徑一寸ト云ヒタルハ大凡ニ度リシナリ】然レドモ是ハ强テ八寸許トモ云フベケレドモ、常平五銖ハ舊譜ニ徑八分ト云ヘリ、今曲尺ニテ度ルニモ大凡八分ナレバ、是ニヨリテハ爭デ八寸許ノ尺ヲ起スコトヲ得ン、又太貨六銖ハ舊譜ニ尺度ヲ云ハズ、鍾官赤側錢ハ今世傳ハラザレバ、此二錢ニテハ尺ヲ起スコト能ハズ、サレバ赤側ト太貨ト常平等ノ錢ニ依リテ、八寸許ノ尺ヲ起シタリト云ヒシハ僞ナリ、信ズベカラズ

最上德內（常矩）ハ曲尺七寸五分許

其說ニ我邦中人ノ長曲尺五尺四五寸ナリ、今試ニ曲尺五尺七八寸ヲ周人中ノ上トシテ求ムレバ、周尺ハ大率曲尺七寸二分、【按ズルニ曲尺五尺七寸六分ヲ八尺トシタルナリ】戰國秦漢ノ事跡ヲ推スニ能合ヘドモ、其重サヲ考古圖ト博古圖ト古錢等ニ考フレバ當ラザルナリ、【度ニヨリテ權ヲ起ス法、假令バ、一尺ノ長サ曲尺七寸二分ナラバ七寸二分ヲ再自乘シ、是ニ漢ノ斛法千六百二十寸ヲ乘ジテ實トシ、今ノ斛法六十四寸五百五十分ヲ以テ除シ、漢ノ斛ハ今ノ幾何ナルヲ知リ、今ノ一升ハ重サ略四百匁ナレバ、四百匁ヲ以テ乘ズレバ、漢斛ノ重サ幾何ナルヲ知ル、漢ノ一石ノ重サ百二十斤ナレバ、百二十斤ヲ以テ除スレバ、漢ノ一斤ノ重サ今ノ三十一匁有奇ナルコトヲ知ル、十六兩ヲ斤トスル故、十六兩ヲ以テ除スレバ、兩ハ今ノ一匁九分九釐强ナリ】又周人ノ長ヲ曲尺五尺八九寸トシテ、古器ニ按ベ考フルニ是モ當リ難シ、【五尺八寸五分ヲ八

尺トスレバ、其一尺ハ七寸三分一釐二毫五絲、是ヨリ一斤ノ重サヲ求ムレバ、三十二匁三分七釐有奇ナリ】又曲尺六尺二寸トスレバ【六尺一寸五分ヲ八尺トスレバ、一尺ハ七寸六分八釐七毫五絲ナリ】醫書ニ云フ所ト同ジカラズ、故ニ今其間ヲ以テ曲尺六尺ヲ定トス、ソレニ據リテ周尺ヲ求ムレバ曲尺七寸五分ナリ、

【度量衡說統】

按ズルニ考古圖・博古圖ニ載セタル器ノ斤兩ヲ知ルベキ者ヲ考フルニ、輕キ者ハ一斤、今ノ三十七匁五分餘、重キ者ハ今ノ七十匁餘、【平均スレバ五十三匁七分五釐ナリ】古器ノ至テ重キ者ヨリ計レバ今ノ九十六匁ニ至ル者アリ、【至テ輕キ者ヲ合セテ平均スレバ五十七匁六分八釐ナリ】周尺ヲ曲尺七寸二分トスルモ、七寸三分一釐二毫五絲トスルモ、古器ニ合ハザルコト最上氏ノ云ヘルガ如シ、然レドモ最上氏ノ說ニ從ヒ、周尺ヲ曲尺七寸五分トシテ一斤ヲ求ムレバ、今ノ三十五匁一分四釐有奇ニテ、是モ考古圖・博古圖ノ古器ニモ古義ニモ合ハズ、然ラバ所謂五十歩ヲ以テ百歩ヲ笑フノ類ナリ、【漢ノ一斤ハ六十匁許ナルコト下卷ニ證セリ、今試ニ上ノ算法ニヨリテ求ムレバ曲尺八寸五分許ノ尺ニアラザレバ一斤ノ重サ六十匁ナルコト能ハズ、度權比校ノ說ハ通ゼザルナリ、米一石重百二十斤ト云フノ依、輕キコトモ、下卷ニ辨ジタリ】又八ノ長ヲ曲尺六尺二寸トスレバ、醫書ニ合ハズトハ何書ヲサシテ云ヘルニカ、【最上氏八ノ長ヲ曲尺六尺トシ、周尺ヲ曲尺七寸五分ト定メタルニヨリテ、醫書ニテ其說ニ合フ者ヲ考フルニ、醫[illegible]端ニ二八〇之七一トアリ、曲尺六尺ヲ古ノ八尺トシテ八ニ分テバ、一尺ノ長七寸五分ナレバ、是ヲ云ヘル

カ、然レドモ人ノ長八尺ト云フコトハ、考工記・說文等ニ出タレバ是ヲ引テ證スベキニモアラズ、況骨度篇ニハ「人長七尺五寸」ト云ヘリ、是ニヨリテ今人ノ長ヲ曲尺六尺トシ、是ヲ古ノ七尺五寸トシテ一尺ヲ求ムレバ、曲尺八寸ニテ其立テタル七寸五分ノ說ト合ハザレバ、靈樞ニ依リシニモアラジ、猶其說ヲ尋ヌベシ」又人ノ長ヲ曲尺六尺トシ、八ニ分テバ周尺七寸五分、又曲尺六尺一寸五分トシ、是ヲ八ニ分テバ曲尺七寸六分八釐七毫五絲ナリ、何ヲ以テ曲尺七寸五分ナレバ、醫書ニ合ヒ七寸六分八釐七毫五絲ナレバ、醫書ニ合ハザルニカ其說明ナラズ、又凡形ノ大ナル物ニ依リテ度ヲ起セバ必密ナラザルニ、況定マルコト無キ人ノ長ヲ推シ量リテ古尺ヲ起シタレバ、據トスルニ足ラズ

諸葛覺髮（謠）ハ曲尺六寸四分二釐

其說ニ、古ハ八尺ヲ以テ人ノ常度トス、【考工記・淮南子（天文訓）說文・素問・靈樞】或ハ七尺五寸トシ、【靈樞】或ハ七尺トス、【列子（黃帝篇）荀子（勸學篇）淮南子（精神訓）】皆中人ノ大概ヲ擧ゲテ云ヒシナリ、今人ノ常度ハ大抵曲尺五尺三四寸、或ハ五尺一二寸ナリ、予ガ長大抵常人ト同ジ、試ニ度ルニ曲尺五尺一寸四分强ナリ、八ヲ以テ是ヲ除スレバ、六寸四分二釐五毫ヲ得、コレ周尺ナリ、【淮南子・說文載スル所モ周人ト同ジケレバ周漢尺度タガハザリシナリ】又累黍ヲ得テ蠹ヲ去テ百ヲ累ネテ度リシニ、曲尺六寸四分二釐ナリ、又予ガ友人肥前ニ往シガ黍ヲ得テ還リシヲ以テ百ヲ累ネテ度リシハ、六寸四分ナリ、室師禮ノ駿臺祕書ニ、井上河內守ニ命ジテ周尺ヲ考ヘサセラレシニハ、山崎闇齋四方ノ黍ヲ聚メ中黍ヲ擇ビテ尺ヲ作リシ

カバ、曲尺六寸四分弱ト云ヒ、朱舜水モ古尺ハ本邦ノ曲尺六寸四分弱ト云ヘリ、故ニ今身度ニヨリテ曲尺六寸四分二釐ヲ周漢ノ一尺ト定ム【律呂全編】

按ズルニ古書ニ人ノ長ヲ八尺トモ、【按ズルニ潛夫論（十列篇）論衡（祀義篇）ニモ八尺トアリ】七尺五寸トモ云ヘリ【按ズルニ周禮鄭大夫・趙策・呂氏春秋上農篇・淮南子氾論訓・脩務訓・說苑脩文篇等ニモ七尺トアリ】七尺トハ常人ノ度ヲ云ヒ、八尺トハ傳偉ナル人ヲ云ヒシモノナルベシ、然ルニ諸葛氏二說ヲ並ベ引ナガラ、八尺ト云フノミヲ取レルハイカガ、【モシ八尺ヲ常人ノ度トシタランニハ、七尺ト云ヒシハ矮人ヲ度リタルモノトセンカ、人ノ度ヲ云フニ偉人ヲバ度ルベケレドモ、矮人ヲ度ルベキニアラズ、今モ常人ヲバ五尺二三寸トスレドモ、偉人ヲバ、六尺男子トモ云ヘリ】又自己ノ身度ヲ以テ周漢ノ尺ヲ起シタランニヨク古尺ニ符センヤ符セザランヤ、論ゼズシテ其非ヲ覺ルベシ、山崎闇齋ガ黍ヲ以テ定メタル尺ノ長サニ合ヒタリト云ヒタレドモ、黍ヲ累ネテ度ヲ起シ難キコト既ニ云ヘリ、又朱之瑜ガ古尺ニ合ヒタリトスレドモ、朱之瑜ガ周尺ハ朱載堉ガ僞說ニヨリテ、又誤リタルモノナルコトモ上ニ辨ジタリ、然ラバ皆謬說トスルニ足ラザレバ此說モ據リ難シ

藤本[二]（寬）ハ曲尺六寸八分九釐五毫五絲有奇

其說ニ小倉實起卿ノ傳ヘラレシ衛府尺、長サ今尺ノ七寸九分八釐五毫、【三器考略ニハ此尺ヲ「當曲尺七寸九分五釐弱」ト云ヒ、律呂考證ニ此尺ヲ一尺〇二分一釐一毫有奇ニ分チテ、古尺ヲ曲尺七寸八分三釐二毫

ト定メシニ據リテ算スレバ、曲尺八寸〇〇五豪有奇ナリ、二說同ジカラザレドモ、共ニ此ニ云フ所ト同ジカラズ、藤本氏ハ何ニ依リテカク云ヒシニカオボツカナシ】周尺ト題セリ、空海唐ヨリ賫歸リテ朝ニ獻ゼシ物ナリ、隋唐ノ僧徒ノ周尺ト稱スルハ、後周ノ玉尺ニテ卽唐小尺ナリ、後周玉尺ハ晉前尺ノ一尺一寸五分八氂ト隋書ニ見エタレバ、御府尺ノ長サヲ一尺一寸五分八氂ニテ除スレバ、晉前尺ノ長サヲ得【三器彙考】

按ズルニ御府尺ハ律衣尺ナリ、是ヲ唐小尺ナリト云ヒシハ是ナリ、其長サ後周ノ玉尺ト同ジケレバ、周尺ト云フト思ヒシハ誤ナリ、唐小尺ハ南朝歷代傳來ノ古尺ニシテ、周漢ヨリ傳ハリタルモノナル故ニ、時俗コレヲ周尺ト云ヒ、大尺ハ其一尺二寸ヲ一尺トシタル尺ナレバ唐尺ト云フ、【猶古尺今尺ト云フガ如シ】故ニ唐僧道宣・宋僧元照等唐小尺ヲ姬周尺ト云ヘリ、是周尺ト云フハ後周ノ尺ト云フコトニアラザルヲ證スベシ、唐小尺ヲ後周ノ玉尺ナリト云ヒシハ荻生氏ノ說ニテ、其誤ナルコトハ既ニ辨ゼリ、然ラバ藤本氏ノ說ハ惕齋ガ固陋ニテ、獨御府尺ニ據リテ他ニ傳ハレル律衣尺ヲ考ヘザルト、荻生氏ガ唐小尺ヲ卽後周尺トセシ誤トヲ合セテ立テタルナレバ、是モ據ルニ足ラズ

仁井田南陽（好古）ハ曲尺六寸八分二氂六豪

其說ニ丘濬周尺ハ鈔尺六寸四分弱ト云ヘリ、又營造尺ノ八寸ハ裁衣尺ノ七寸五分ト朱載堉ガ云ヒシニ據リテ、鈔尺【卽裁衣尺】ヲ求ムルニ營造尺ハ唐大尺ニテ卽曲尺ナレバ、曲尺八寸ヲ七寸五分トシタル鈔尺ハ今ノ一尺〇六分六氂ナリ、是ニ六寸四分ヲ乘ズレバ今ノ六寸八分二氂六豪ヲ得、是周尺ナリ、コノ周尺ヲ以テ

黄鐘成ガ尚書通考ニ載セタル漢錢ノ圖ニ按ルニ、毫髮ノ差無シ、又司馬光ノ圖ニ「以周尺一校之、布帛尺正是七寸五分弱」ト云ヒシニ據リ、七寸五分ヲ以テ此周尺ヲ除スレバ、曲尺九寸一分〇一毫三絲ヲ得、是ヲ布帛尺トス【稽古雜編】

按ズルニ丘濬ガ說據リ難キコト上ニ云ヘリ、鈔尺ハ曲尺一尺一寸二分ナルコト是モ既ニ云ヘリ、然ルヲ一尺〇六分六毫トシタルハ、明ノ營造尺ヲ朱載堉ガ卽曲尺ナリト云ヒタルニ據リテ、卽本邦ノ曲尺ト同ジト思ヒシヨリノ誤ナリ、【明ノ營造尺ハ曲尺ノ一尺〇六分ナルコト、是モ上ニ云ヘリ、律學新說ニ營造尺、量地尺ト鈔尺トモニ圖ヲ出セリ、仁井田氏朱載堉ガ說ニ據リナガラ、此圖ヲ證トセザルハイカガ】丘濬信ジ難キ上ニ鈔尺ノ長サモ誤リタレバ據トスベカラズ、尚書通考ニ載セシ漢錢ノ圖ニ合ヒタリト云ヒシレドモ、其書傳刻ヲ經タルモノニテ畫ガケル圖モ甚拙ケレバ證トナシ難シ、今世傳ハル貨布ヲ見テ、其圖ノ證スルニ足ラザルヲ知ルベシ、又此周尺ニテ布帛尺ヲ起シ、曲尺九寸一分強ト定メタレドモ、宋ハ唐ノ制ニ沿リタレバ、然ル尺ヲ用フベキニ非ズ、【今朱載堉ガ鈔尺ノ圖ニヨリ、徐光啓ガ比校ニ從ヒテ布帛尺ヲ定メ、司馬光ガ圖ヲ以テ布帛尺ヲ起セバ、曲尺一尺〇二分一釐五毫二絲、楊輝ガ續古摘奇算法ニ載セタル宋尺ノ圖全同ジ、律呂新書ト玉海トニテ起セバ、曲尺一尺〇二分六釐ナリ、又至大重修宣和博古圖ハ宋時ノ博古圖ノ元ノ代マデ傳ハリシヲ至大ノ時漫患ノ處ヲ補修セシ本ナリ、其圖毎ニ「或依元樣製」ト云ヒ、「或減小樣製」ト云ヘリ、（今本ノ博古圖ハ皆縮寫ナリ、故ニ是等ノ語悉ク刪去レリ）今布帛尺ヲ一尺〇二分

許トシテ彼元樣ニ依リタル圖ヲ計ルニ、其錄スル所ノ尺度ト略合ヘバ、布帛尺ヲ曲尺九寸一分强ト云ヒシハ據ルベカラザルコト明ラケシ、モシ布帛尺ヲ曲尺九寸一分强トシテ浙尺ヲ求ムレバ、曲尺八寸〇五氂三毫有奇、コノ浙尺ヨリ鈔尺ヲ求ムレバ曲尺一尺〇〇六氂六毫有奇ニテ、仁井田氏ノ一尺〇六分六氂ト定メシニモ合ハズ、況朱載堉ガ圖ニ比レバ一寸二分餘短キヲヤ】

此他尙有ルベケレドモ、今ハ見及ブ所ヲ論ズルノミナリ、【荻生氏ノ度考ニ、「貨泉・大泉世或有レ之、年代久遠眞僞不レ可レ知、且周漢古錢世多贋レ之、故多二贋物一不レ可レ爲レ憑」ト云ヘリ、讀書人ハ多クハ不鑒ナル者ナレバ、古錢ニヨリテ尺ヲ起サンコトハ難カルベシ、周官祿田考・西淸古鑑ノ二書ニ據レバ、周尺ノ長サ辨ヲ俟タザレドモ、此二書ハ近年舶來シタレバ、古人ハ見ザリシ故、是ニヨリテ周尺ヲ定ムルコトモ能ハザリシナリ、然レドモ明ノ鈔尺ハ律學新說ニ圖アレバ其長サ知ルベシ、農政全書ニ鈔尺・浙尺ノ比挍アレバ、鈔尺ニヨリテ浙尺ヲ起スベシ、又司馬光ガ圖ニ浙尺・布帛尺・周尺ノ比挍アレバ、浙尺ヲ以テ周尺ヲ定ムベシ、中根氏・正木氏ノ輩ハ云フニ足ラズ、春齋・惕齋・徂徠・東涯等ノ諸先生コレラノ書ヲ見ザリシ人ニアラザルニ、是ニ心ツカザリシハ如何ナリシコトニカ疑ハシ】

本朝度量權衡攷附錄卷上之下　終

【周量】周ノ量ハ左傳【昭三年】ニ「齊舊四量、豆區釜鍾、四升爲豆、各自其四、以登於釜、釜十則鍾」杜預ガ注ニ、「四豆爲區、區斗六升、四區爲釜、釜六斗四升、鍾六斛四斗」ト云ヒ、【釜ハ積千寸ナルコト下ニ引キシ考工記ニテ知ルベシ、然ラバ鍾ハ萬寸、區ハ二百五十寸、豆ハ六十二寸五百分、升ハ十五寸六百二十五分ナリ】考工記ニ「栗氏爲量、深尺、內方尺、而圜其外」ニ【宋ノ胡瑗ガ拼蕤藁ニ「栗木鬴除度支使請ヲ載テ「茲遵ニ鬴中深而外直體圓而用方」」ト云ヒ、又代木斛謂表ニ「乾興合制祖守均平」トアルモ、皆コノ量ノ形ヲ云ヘルナリ、陔餘叢考ニコノ拼蕤藁ヲ證トシテ、趙宋以前ノ斛ハ圓製ナリト云ヒシハ、胡瑗ガ古斛ノ形ヲ云ヒタルヲ誤リテ、當時ノ斛ノ形ヲ云ヒシト思ヒシナリ】其實一斛【釜ノ正字ナリ】其實一寸、【鄭玄ガ注ニ其底深一寸】其實一豆、【深サ一寸ニテ一豆ヲ容ンニハ、方古尺ノ七寸九分〇五毫六絲九忽餘ナリ、一豆ノ積六十二寸五百分ヲ深一寸ニテ除スレバ、冪六千二百五十分ナリ、コレヲ方ニ開キテ此數ヲ得、此術九章算術少廣ノ條、孫子算經卷中夏侯陽算經論步數不等ノ條、五經算術千乘國ノ條等ニ見エタリ、所謂開方ナリ】「其耳三寸。其實一升」ト云ヘリ、【深サ三寸ニテ一升ヲ容ンニハ、方古尺ノ二寸二分八厘二毫一絲七忽餘ナリ、一升ノ積十五寸六百二十五分ヲ深三寸ニテ除スレバ、冪五百二十〇分八厘三毫三絲三忽不盡、是ヲ方ニ開キテ此數ヲ得、深サヲノミ云ヒテ、方面ヲ云ハザルモノハ其實一豆、其實一升ト云

ヒシニテ、方面ハカクノ如ク求メ知ルベキ故ニ省キシ古文ノ巧ナリ、荻生氏「以二其圓一故止曰二一寸三寸一」ト云ヒタレドモ、圓ナル證モ無ク、又圓ナレバ、タダ一寸三寸ト云フベキ理モ無ケレバ、從ヒ難シ、鬴ハ方寸トアリテ其下ニ「其臀一寸其耳三寸」トアレバ一寸モ三寸モ方ノ字ヲ蒙ラセタルナルベケレバ、今ハ豆ヲモ升ヲモ方トシテ計リシナリ】然レバ鬴ハ深尺方尺ニテ、其面冪八百寸、【面冪八百分ヲ一寸トス、律呂正義面冪ノ注ニ「平方定位法、百釐成レ分、百分成レ寸、故曰、幾十幾分、幾十幾厘」ト云ヘリ】積ハ千寸【積ハ千分ヲ一寸トス、律呂正義體積ノ注ニ「立法定位法千釐成レ分、千分成レ寸、故曰、幾百幾十幾分、幾百幾十幾釐」ト云ヘリ】是ニテ六斗四升ナレバ、一斛ノ積ハ千五百六十二寸五百分ナリ、【千寸ヲ六斗四升ニ分チテ升ノ積十五寸六百二十五分ヲ得、コレヲ百乘シテ斛ノ積數ヲ得ルナリ】故ニ隋書【律歷志】ニ栗氏ノ嘉量ヲ載セテ「祖沖之以二算術一考レ之、積凡一千五百六十二寸半方尺、而圓二其外一、減二傍一釐八豪一、其徑一尺四寸一分四豪七秒二忽有奇、而深尺、即古之斛也」ト云ヒ、【是ハ考工記ノ量ハ千寸ニシテ、六斗四升ヲ受ル方器ナレバ、其一斛ハ千五百六十二寸五百分ナル故ニ、千五百六十二寸五百分ノ斛ヲ受ル圓器ヲ作ル法ヲ云ヘルナリ、今祖氏ノ說ニヨリテ方一尺ノ弦ノ內ニテ、左右各一釐八豪ヲ減ジ、其徑ヲ一尺四寸一分〇四豪七絲二忽トスレバ（是ニテハ方一尺ノ弦ハ一尺四寸一分〇四豪七絲二忽ナリ、コノ祖氏ガ云フ所ノ弦ノ數イカナル法ニテ求メシカ詳ナラズ、今勾股弦ヲ求ムル術ニヨリテ算スレバ、一尺ノ弦ハ一尺四寸一分四釐二豪一絲三忽五六二三七三〇九五〇四八八有奇ナリ、此事下ノ漢ノ嘉量ノ條ニ詳ニス）

周八四尺四寸三分一毫一豪二絲八忽餘ナリ、（祖氏ガ圓周ヲ求ムル密法ハ徑一丈周三丈一尺四寸一分五釐九豪二絲六忽餘ナリ、下ニ詳ニス）是ヲ折半シテ半徑ヲ乗ジテ冪ヲ得、又深尺ヲ乗ジテ積ヲ求ムレバ一千五百六十二寸四百九十五分六百五十八毫二百一十〇豪六百〇八絲一百三十四忽餘ヲ得、祖氏ガ一千五百六十二寸半ト云ヒシハ、是ヲ云ヘルナリ、半周・半徑ヲ乗ジテ冪數ヲ知ルハ、九章算術方田ノ條ニ、【有二圓田一周幾歩、徑幾歩、問、爲二田幾何一、答曰幾、術曰、半周・半徑相乗得二積歩一」トアルニヨル、又術ニ一周徑相乗四而一」ト云ヒシモ同ジ、又一術曰、徑自相乗三之四而一、又術曰、周自相乗十二而一」ト云ヒシ術ハ周三徑一ノ率ニヨリタルナレバ精シカラズ」鄭玄ガ考工記ノ注ニハ一方尺積千寸、於今粟米法少二升八十一分升之二十二、其數必容レ鬴、此言二大方一耳一ト云ヘリ、【是ハ考工記ノ一鬴ハ一千五百六十二寸五百分ナルニ、漢ニテハ千六百二十寸ヲ一斛トスル故ニ千〇三十六寸八百分ニテ、六斗四升ナリ、考工記ノ鬴ハ千寸ニテ六斗四升ナレバ漢ノ六斗四升ニ比スレバ三十六寸八百分足ラザレバ、如此ハイヘルナリ、三十六寸八百分ヲ千六百二十寸ノ斛法ニテ除スレバ、二升〇四千四百分ヲ得、是ニテ考工記ノ六斗四升ハ漢ノ六斗四升ヨリ二升ト積四千四百分少キコトヲ知ル、一升ノ積ハ一萬六千二百分ナレバ、其四千四百分ヲ一萬六千二百分升之四千四百分ト云フベケレドモ、然云ハンハ煩ハシキニヨリテ、一升ノ積一萬六千二百分（分母ナリ）ト奇零ノ四千四百分（分子ナリ）トヲ約分術ニテ約スレバ【約分ノ術ハ九章算術方田ノ條ニ、「副二置分母子之數一、以少減多、更相減損求二其等一也」ト云ヘル是ナリ、此事孫子算經中ニモ見エタリ】等數

二ヲ得（分母ノ一萬六千二百分ヲ左ニ置キ分子ノ四千四百分ヲ右ニ置、左ノ一萬六千二百分ノ內ニテ、右ノ四千四百分ヲ三度引ケバ、左三千分トナル、又右ノ四千四百分ノ內ニテ、左ノ三千分ヲ引ケバ、右千四百分トナル、左ノ三千分ノ內ニテ、右ノ千四百分ヲ二度引ケバ、左二百分トナル、右ノ千四百分ノ內ニテ、左ノ二百分ヲ六度引ケバ、右モ二百分トナリテ左右トモニ二百ノ數ヲ得、是ヲ等數二ヲ得ルト云ナリ）此二ヲ法トシテ一萬六千二百分ヲ除スレバ八十一分ヲ得、四千四百分ヲ除スレバ二十二分ヲ得、コレヲ「八十一分升之二十二」ト云ヘルナリ、是四千四百分ハ一升ヲ八十一ニ分チタル二十二分ナリ、是ハ四千四百分ヲ斛法千六百二十寸ニテ除シ行ケバ、二合七勺一撮六〇四九三八二七有奇ニテ、其數盡ルコト無キ故ニ一升ヲ八十一ニ分チタル二十二分ト云ヘルナリ、律呂新書ニ范鎭ガ說ヲ引テ、「周鬴方尺者八寸之尺、深尺者十寸之尺方八寸、圓㆓其外㆒庣㆓其旁㆒、則冪一百三十六分八釐深八寸、則積一千三十六寸八分、與㆓漢斛㆒同㆑法無㆑疑也」ト云ヒテ、鄭玄ガ「方尺積千寸、又圓㆓其外㆒者爲㆓之脣㆒」ト云ヒシ說ヲ皆非ナリトセリ、然レドモ其說ニ從ヒテ積ヲ求ムルニ、八寸ノ弦ハ一尺一寸三分一釐三豪七絲〇八四九八九八四七六有奇、兩庣ヲ加ヘテ一尺一寸五分〇三豪七絲〇八四九八九八四七六、是ヲ徑トスレバ周ハ三尺六寸一分三氂九豪九絲六忽六〇六八一五三有奇、是ニテ冪數ヲ求ムレバ一十〇寸三十九分三十六氂七十〇豪八十七絲〇十二忽餘、積數一千〇四十一寸〇七十五分八百四十一氂七百三十五豪三百九十九絲二百四十一忽餘ナレバ、云フ所ノ積一千〇三十六寸八分ノ數ト合ハズ、且「庣㆓其旁㆒」ト云フコトハ、漢ノ嘉量ノコトニシテ、考工記ニハ其事無ク、

又一器ヲ度ルニ、濶ハ八寸尺ヲ用ヒ、深サハ十寸尺ヲ用フベキニ非ザレバ、此説ノ誤ナルヲ知ルベシ」考工記云フ所ノ積寸皆古尺ナルニヨリ、今漢銭尺ヲ以テ方尺深尺積千寸ノ量ヲ作リ、【所謂鬴ナリ】曲尺ニテ度レバ方七寸六分、深サモ同ジ方面ヲ自乗シテ冪五十七寸七十六分ヲ得、又深ヲ乗ジテ積四百三十八寸九百七十六分ヲ得、今ノ斛法【六千四百五十五寸】ヲ以テ除スレバ、六八〇〇五五七七有奇ヲ得、是ニテ量ヲ起セバ

鬴　積千寸、容六斗四升、【漢ノ千六百二十寸ヲ斛トスル法ヲ以テ計レバ、千寸ハ六斗一升七合二勺八撮餘ニテ、周ニテ計リシ六斗四升ヨリハ二升二合七勺一撮餘少シ、鄭玄ガ「少二升八十一分升之二十二」ト云ヒシハ是ナリ、一升ヲ八十一ニ分チテ、ソレヲ二十二合スレバ二合七勺一撮餘ナリ、然レドモ鄭玄又「此言大方耳」ト云ヘリ、周漢ノ量ハ本同ジコトニテ、古ハ後世ノ如ク精ク計ラザリシ故、少シノ異有リシト云ヘルナリ、下ノ諸量是ニ倣ヘ、愚按ズルニ千寸ニテ六斗四升ヲ容レバ、斛ハ千五百六十二寸五百分ナルコト上ニ云ヘル如シ、然ルヲ漢ニテ千六百二十寸トセシハ古斛ニ依リナガラ少シク改メタルナルベシ、其コト漢量ノ條ニ辨ズ】曲尺積四百三十八寸九百七十六分、今六升八合有奇【漢ノ六斗四升ハ積千〇三十六寸八百分ナレバ、曲尺ノ積四百五十五寸一百三十〇分三百一十六釐八百毫、今ノ七升〇五勺一撮弱ナリ】

區　積二百五十寸、容　斗六升【二百五十寸ハ漢ノ一斗五升四合三勺二撮有奇】曲尺積百〇九寸七百四十

四分、今ノ一升七合有奇、【漢ノ一斗六升ハ積二百五十九寸二百分、曲尺積一百一十三寸七百八十二分五百七十九氂二百豪、今ノ一升七合六勺三撮弱ナリ】

豆　積六十二寸五百分、容四升【六十二寸五百分ハ、漢ノ三升八合五勺八撮有奇】曲尺積二十七寸四百三十六分、今四合二勺五撮有奇【漢ノ四升ハ積六十四寸八百分、曲尺ノ積二十八寸四百四十五分六百四十四氂八百豪、今ノ四合四勺一撮弱】

升　積一十五寸六百二十五分【一十五寸六百二十五分ハ、漢ノ九合六勺四撮餘】曲尺積六寸八百五十九分、今一合〇六撮有奇【漢ノ一升ハ積一十六寸二百分、曲尺積七寸一百一十一分四百一十一氂二百豪、今ノ一合一勺有奇】

鍾　積一萬寸容六斛四斗【一萬寸ハ漢ノ六斛一斗七升二合八勺四撮餘】曲尺積四千三百八十九寸七百六十分、今ノ六斗八升〇〇五撮餘、【漢ノ六斛四斗ハ積一萬〇三百六十八寸、曲尺積四千五百五十一寸三百〇三分一百六十八氂、今ノ七斗〇五合〇八撮强】

此外ニ

觳　【周禮旊人ニ「豆實三而成觳」トアリ、豆實三ハ一斗二升ナリ】積一百八十七寸五百分【漢ノ一斗一升五合七勺四撮有奇】曲尺積八十二寸三百〇八分、今ノ一升二合七勺五撮有奇【漢ノ一斗二升ハ積百九十四寸四百分、曲尺積八十五寸三百三十六分九百三十四氂四百豪、今ノ一升三合二勺二撮有奇

庾【周禮陶人ニ「庾實二觳」トアリ、二觳ハ二斗四升ナリ、論語ニ「與之釜、請レ益、曰、與之庾」トアルモ、六斗四升ノ釜ノ外ニ二斗四升ノ庾ヲ増シタルナリ、包咸ガ注ニ「十六斗曰庾」トイヒタルハ庾ト籔ト音近キ故ニ、誤混ジタルナリ、此誤傳注往往アリ、從シタル者、本ノ數ニ満ツベカラザレバ、十六斗ニハアラジト、清ノ戴震ガ考工記圖ニ見エタリ】積二百七十五寸【漢ノ二斗三升一合四勺八撮強】曲尺一百六十四寸六百一十六分、今ノ二升五合五勺有奇【漢ノ二斗四升ハ積二百八十八寸八百分、曲尺積百七十〇寸六百七十三分八百六十八釐八百毫、今ノ二升六合四勺四撮有奇】

籔【儀禮聘禮記ニ、「十六斗曰レ籔」、注ニ「今文籔爲逾」トアリ、籔ト庾ト音近キ故、傳注往往庾ト混ズルモノアリ】積二千五百寸【漢ノ一斛五斗四升三合二勺一撮弱】曲尺積一千〇九十七寸四百四十分、今ノ一斗七升〇〇一撮餘【漢ノ一斛六斗ハ積二千五百九十二寸、曲尺積一千一百三十七寸八百二十五分七百九十二釐、今ノ一斗七升六合二勺八撮弱】

秉【聘禮記ニ「十籔曰レ秉」、注ニ「十六斛」トアリ】積二萬五千寸【漢ノ十五斛四斗三升二合一勺弱】曲尺積一萬〇九百七十四寸四百分、今ノ一石七斗〇〇一勺二撮餘【漢ノ十六斛ハ積二萬五千九百二十寸、曲尺積一萬一千三百七十八寸二百五十七分九百二十釐、今ノ一石七斗六升二合七勺八撮弱】

溢【喪服傳注ニ「溢爲米一升二十四分升之一」トアリ、喪大記注モ同ジ、一升二十四分升之一ハ一升〇四勺一撮六六不盡ナリ】積一十六寸二百七十六分〇四毫一絲六忽六六不盡【漢ノ一升〇四撮餘】曲尺

積七寸一百四十四寸七百九十一分六百六十六釐六百六十六豪六百六十六絲六百六十六忽不盡、今ノ一合一勺一撮弱【漢ノ一升〇四勺一撮六六不盡ハ、積一十六寸八百七十四分九百九十九釐九九不盡、曲尺積七寸四百〇七分七百一十九分九百九十九釐九九不盡、今ノ一合一勺五撮餘】

𣁲　考工記弓人ニ「漆三𣁲」、注ニ「𣁲輕重未聞」ト云ヘリ、說文ニモ「𣁲量名也」トノミアリナドアリ、猶度ノ分寸尺丈引ノ外ニ咫尋仞ナドアル類ナリ

［秦量］秦量ノ銘、積古齋鐘鼎欵識ニ載セタレドモ、【銘文卷末ニ摹出ス】量ノ尺寸ヲ云ハザレバ、其積數知ルベカラズ

［漢量］漢ニテハ龠合升斗斛ト量リタリ、【按ニ斛ハ儀禮（聘禮記）ニ、「十斗曰斛」ト云、莊子（田子方篇）ニ、「斔斛不敢入於四竟」ト云ヘリ、斗ハ晏子（諫下）ニ「合升斗之微以滿倉廩」墨子（備城門篇）「令陶者爲罌容四十斗以上」戰國策（秦策）ニ「斗食」ト云ヒ、史記（廉頗傳）ニ「一飯斗米」ト云ヘリ、升ハ左傳、考工記ニ見エテ上ニ引ケリ、考工記（梓人）ニ「一獻而三酬、則一豆矣」ト云ヒ、「飮ニ一豆酒」ト云ヒシヲ、共ニ鄭玄ガ注ニ、「當爲斗」トモ云ヘリ、然ラバ漢ニテ升斗斛ト云フ量ノ名ハイヅレモ先秦ノ制ヲ承タルナリ、タダ合龠ノ名、古書ニ見エズ、然ラバ合龠ノ名ハ王莽ガ時、劉歆ガ定メシニヤ、但漢ノ時モ龠ヲ以テ量リシコト見エタルコト無キニヨリテ考フレバ、度ハ分。寸。尺。丈。引、稱ハ銖。兩。斤。鈞。石ト、各五ヲ以テ計ルニヨリ、量モ升。斗。斛ノ外ニ、合。龠ト云フ量ヲ增シテ、五度。五權。五量ト

シ、合ヲバ用ヒタレドモ、實ハ龠ヲバ用ヒザリシナルベシ】漢書【律曆志】ニ、「量者龠合升斗斛也、所三以量二多少一也、本起二於黃鐘之龠一、用二度數一審二其容一、以二子穀秬黍中者千有二百一實二其龠一、以二井水一準二其槩一、合レ龠爲レ合、十合爲レ升、十升爲レ斗、十斗爲レ斛、而五量嘉矣、」ト云ヘリ、サレドモ荻生氏ノ量考ニ、量ノ黍ヨリ起リシニ非ルヲ論ジテ、「黃鐘之管所レ容爲二一龠一、兩龠爲二一合一、本二於班志一、其說出二劉歆一、是據二周禮栗氏其聲中二黃鐘之宮一、與二書舜典一同二律度量衡一、而杜撰者、豆遂二豆之豆一、篆文可レ證、以二人一次食一立レ制、鬴卽釜、一釜所レ受、以二人一家一次飲一立レ制、鐘鍾同、一鍾所レ受、其它度乘亦必爾、但不レ可レ考耳、則量亦取レ適二人用一焉、權衡亦當レ爾、何關二黃鐘一」ト云ヘリ、豆・區・釜・鍾ノ量ノ黍ヨリ出ザルコトサモアルベシ、思フニ合・升・斗・斛モ黍ヨリ生ゼシニハアラジ、【小爾雅】ハ據リ難キコト多キ書ナレドモ、「兩手謂二之掬一、掬四謂二之豆一」ト云ヒシハ古義ナルニ似タリ、是ヲ以テ考ルニ、左傳ニ「四升爲レ豆」トアルハ卽四掬ノコトナルベシ、毛詩椒聊ノ篇ノ首章ニハ、「椒聊之實蕃衍盈レ升」ト云ヒ、二章ニハ「蕃衍盈レ匊」ト云ヘルモ同ジホドナレバ、文ヲ易ヘタルノミニテ、其實ハ同ジコトナルベシ、サレバ升ハ一掬手ヨリ定メシモノニテ、ソレヲ十累シテ斗ト名ヅケ、斗ヲ十累シテ斛ト名付シナラン、然ラバ是等モ黍ヨリ定メタルニハアラデ、人體ヨリ定メシモノナルベシ、然レドモ龠ト合トハ、其名ニヨレバ、黃鐘管ヨリ起リシト聞ユレバ、ソレヨリ升・斗・斛モ十累シテ名付タランニハ、皆黍ヨリ起リシトモ云フベケレドモ、孰考スルニ、度ノ寸・尺・尋ハ人體ニテ定メシニ、尋ヲ倍シテ常ト云ヒ、尺ヲ十累シテ丈ト云ヒ、又寸ノ内ヲ十分シ

テ分ト云ヒシハ、後ニ定メシ度法ナラン、（釐豪絲忽ハ又其後ニ出シナルベシ）是ニヨレバ量モ古手ヲ掬シテ升ヲ定メ、ソノ四掬ヲ豆ト云ヒ、四豆ヲ區ト云ヒ、四區ヲ釜ト云ヒ、十釜ヲ鍾ト云ヒシニ、後ニ十升ヲ斗ト云ヒ、十斗ヲ斛ト量リ、又升ノ内ヲ十分シテ合ト量リシハ、十ヲ絫ネテ登レバ數フルニ便ナルニヨリテ、豆。區。釜ナド量ルコトハ廢セシコト、猶權衡ノ錢分ヲ用ヒテ後ハ、銖。兩ナド稱スルヲ便トモセザルト同ジキナルベシ、龠ハ疑フラクハ、又後ニ合ノ半ヲ名ヅケシナラン、然ルヲ漢書ニ度ヲ分ヨリ起ルト云ヒ、量稱ヲモ龠ヨリ起リ、ソレヲ絫ネテ合。兩トシ、合。兩ヲ絫ネテ升。斤トスナド云ヒテ、度量衡皆小ニ始マリテ大ニ至ルモノトシタルハ、度量稱ヲ皆黍ヨリ起サントテ、牽强シタルナリ、但升ヲ十ニ分チテ合トシ、合ヲ二ツニ分チテ龠トセシニ、其積八百一十分ニテ、黃鐘管ノ積ト符節ヲ合セタルガ如ク全ク同ジカルベキコト有ルマジキニヨリテ考ルニ、古ハ考工記ニ云ヒシ如ク積千寸ヲ鬴トシタレバ、升ハ積一萬五千六百二十五分（コノ升ハ掬手ヨリ定メタルベキコト上ニ云ヘリ）斛ハ積一千五百六十二寸五百分ナリシヲ後ニ五量ニ定メントテ、積千五百六十二分五百釐ノ合ヲ二ツニ分チテ、積七百八十一分二百五十釐ノ量ヲ造リシカドモ、其積數ヨル所無キ故、改メテ黃鍾管ノ積ニヨリ、八百一十分トシテ龠ト名ヅケ、二龠ノ合ヲ千六百二十分、升ヲ萬六千二百分、斗ヲ百六十二寸、斛ヲ千六百二十寸ト定メタルナルベシ、然ラバ千六百二十寸ノ量ハ、古ノ千五百六十二寸五百分ノ量ヲ隱括シタルナレドモ、龠ノ積ヨリ定メタレバ、黃鍾管ヨリ定メタリト云フベシ、カク古ノ千五百六十二寸五百分ヲ改メテ、千六百二十寸トセシハ、何レノ時ナリケン詳

ナラズ、疑ラクハ王莽ノ時ナドニヤ、改メタリケン」タトヒ黍ヨリ生ズル說ニヨランニ、黍ニ大小アレバ、今ヨリ黍ヲ以テ量ヲ起シ難キコト、黍ニテ度稱ヲ起シ難キニ同ジ、然ラバ今日漢量ヲ定メントナラバ、王莽ガ嘉量銘古算書ドモニ、斛積千六百二十寸ト云フニヨリテ、漢量ヲ定ムベシ、【王莽ガ嘉量ノ銘ニ、「斛積千六百二十寸、斗積百六十二寸、升積萬六千二百分、合積千六百二十分、龠積八百一十分、」ト云ヒ、九章算術ノ商功ノ條ニ「米一斛積一尺六寸五分寸之一、注謂積一千六百二十寸、」五曹算經ノ倉庫ノ條ニ、「斛法一尺六寸二分（一升ノ積ナリ、孫子侯陽ノ算經モコレニ同ジ、下ニ詳ニス）ト云ヒ、鄭玄ガ考工記ノ注ニ今粟米法ト云ヒシモ、千六百二十寸ノ斛法ナリ】

說苑【辨物篇】ニ、「度量權衡以レ黍生レ之、千二百黍爲二一龠一、十龠爲レ合、十合爲二一升一、十升爲二一斗一、十斗爲二一石一」ト云ヒタルモ、漢書ニ載セタルト略同ジ【續漢書注ト太平御覽トニ引キタルニハ、「以レ粟生レ之、千二百粟爲二一籥一」トアリ、然ラバ劉向ガ說ハ漢書ニ載セシ說トハ同ジカラザリシナルベシ、今本ノ說苑ニ、「以レ黍生レ之、千二百黍一」トアルハ、後人漢書ニ依リテ改メタルナラン、續漢書注、太平御覽、一石ヲ一斛ニ作レリ、斛ト石トハ同ジケレバイヅレニテモアルベシ、「十龠爲レ合」ト云ヘルハ誤ナルコト、詳ニ量攷ニ云ヘリ】古ヘ量ヲ定メシハ、黍ヨリ生ゼシニハアルマジキコト、タトヒ黍ヨリ生ジタリトモ、今日黍ヲ以テ量ヲ起シ難キコト上ニ云ヘリ、孫子算經ニハ「量之所レ起、起二於粟一、六粟爲二一圭一、十圭爲二一撮一、十撮爲二一抄一、十抄爲二一勺一、十勺爲二一合一、十合爲二一升一、十升爲二一斗一、十斗爲二一

斛ハ斛得二六千萬粟一ハ所二以得レ知者、六粟爲二一圭一、十圭六十粟爲二一撮一、十撮六百粟爲二一抄一、十抄六千粟爲二一勺一、十勺六萬粟爲二一合一、十合六十萬粟爲二一升一、十升六百萬粟爲二一斗一、十斗六千萬粟爲二一斛一、」ト云ヒ、【今漢錢尺ヲ以テ一千六百二十分ノ合ヲ作リ粟ヲ容レテ數フルニ、一萬粟有奇ナリ、孫子ノ說ニヨレバ一合ハ六萬粟ト云ヘリ、假令粟ニ大小アリトモ、是ホドノ異アルベキナラネバ、此說ノ據雜キヲ知ルベシ】夏侯陽算經ニハ、倉曹ヲ引テ、「量之所レ起起二于粟一、十粟爲二一圭一、十圭爲二一撮一、十撮爲二一抄一、十抄爲二一勺一、十勺爲二一合一、十合爲二一升一、十升爲二一斗一、十斗爲二一斛一」ト云ヒタレドモ【十粟ヲ一圭トスレバ一撮ハ百粟、一抄ハ千粟、一勺ハ萬粟、一合ハ十萬粟ナリ、十萬粟ハ漢ノ九合餘ナレバ其說ノ誤最甚シ】二書共ニ倉廩等ノ積數ヲ計リシニハ、此斛法一尺六寸二分トアルヲ見レバ、六粟。十粟ナド云ヒシハ量ノ起リヲ說クニ、カカル俗傳アリシヲ擧タルノミニテ、算スルニハ必一千六百二十寸ノ法ヲ用ヒシナリ、一千六百二十寸斛法ノ通數ナリシカバ、粟ヨリ起ル說ノ當否ハ論ズルニ及バザリシナリ

或人問、漢ノ斛積千六百二十寸ナルコトハ、王莽嘉量銘。九章算術以下皆同ジケレバ論無シ、コレニヨレバ龠ノ積ハ八百一十分ナリ、然ラバ龠ヲ定メシ黃鐘ノ管モ、其積八百一十分ナルベキニ、黃鐘管ハ容圍九分【鄭玄ガ禮記ノ注ニ見ユ、隋志ニ載セタル蔡邕ガ銅龠ト云フモノノ銘モ同ジ、韋昭ガ國語ノ注、孟康ガ漢書ノ注ニハ「圍九分、徑三分」ト云ヘリ、圍九分ノ徑ヲ三分トシタルハ圓徑ヲ計ル古法ニテ、孫子算經ニ「周三徑一」ト云ヘル是ナリ】長サ九寸ナリ【漢書（律曆志）ニ、「黃鐘爲二天統律長九寸一」ト

アリ、律呂正義ニ、「律呂新書言、黄鐘九寸、寸作二十分一、爲二九十分一、又言、黄鐘九寸、寸作二九分一、得二八十一分一、夫九十分乃黄鐘之正數、而八十一分原二於管子絃音五聲度分一、史記◦淮南子遂因以爲二聲音度分一、新書雖二兼取一レ之、而九寸之說、實不レ可レ易」ト云ヘリ】九章孫子夏侯陽等ノ算書ニ載セタル術ニヨリテ其積ヲ求ムレバ【九章算術商功ノ圓堢壔ノ積ヲ計ル術ニ、【周官相乘以二高乘一レ之、十二而一」ト云ヒ、孫子算經圓窖ヲ計ル術ニ、「先置二周相乘一、以レ深乘レ之、以二三十二一除レ之」ト云ヒ、夏侯陽算經圓窖ヲ計ル術ニ、「置二周尺一自相乘、以二高數一乘レ之十二而一、得二積尺一」ト云ヒ、五曹算經圓囷ヲ計ル術ニ、「列周自相乘、以二高乘一レ之、以二十二一除レ之」ト云ヘリ】容圍ノ九分ヲ自乘シ、又長九寸ヲ乘ジ、十二ヲ以テ除スレバ、六百〇七分五百毫ヲ得、一龠ノ積八百一十分ニ比レバ、二百〇二分五百毫足ラザル者ハ如何、蓋、韋昭◦孟康等ガ圍九分、徑三分ト云ヒシハ、鄭玄ガ「容圍九分」ト云ヒシヲ誤讀ミタルナリ、「容圍九分」ト云ヒシハ、容積ノコトニシテ、【卽冪積ナリ】圓周ノコトニハアラズ、【律呂新書ニ「鄭康成月令注云、凡律容圍九分、蔡邕銅龠銘亦云、容圍九分、蓋容圍中實九分也」ト云ヒ、律呂正義ニハ「言圓面積九方分也」ト云ヒシモ、皆容圍九分ヲ冪積ノコトトシタルナリ」冪九分ニ長九寸ヲ乘ズレバ、所謂八百一十分ヲ得ルナリ、故ニ胡瑗ハ「徑三分四氂六豪、周十分三氂八豪」トシタリ、【蔡元定是ニヨル】然レドモ其術粗ニシテ多キニ過タリ、【徑三分四氂六豪ノ周ヲ十〇分三氂八豪トシタルハ、周三徑一ノ法ヲ用ヒシナリ、是ニヨリテ算スレバ冪八分九十七氂八十七豪ヲ得、然レドモ祖氏ノ密法ニヨリテ、徑三分四氂六豪ノ周ヲ求ムレ

バ、十〇分八釐六毫九絲九忽一〇五六九、是ニテ算スレバ冪九分四十〇釐二十四毫七十二絲六十四忽二一八五、長サ九寸ヲ乘ジテ、積八百四十六分二百二十二釐五百三十七毫七百九十六絲六百五十〇忽ナレバ三十六分餘多シ」律呂正義ニ「徑三分三釐八毫五絲一忽、周十分零六釐三毫四絲六忽」トシタル者ヲヨシトス【然レドモ是ニテ冪積ヲ求ムレバ、八分九釐九毫九絲七忽九六一一六ヲ得テ二忽有奇足ラズ、是ハ祖氏ノ密率ニヨリシ故イマダ精シカラズシテ、徑ニハ三七五有奇ノ尾數、周ニハ一忽二三有奇ノ尾數足ラザリシニヨリテナリ、コノ尾數ヲ加ヘテ求ムレバ、冪八分九釐九毫九絲九忽九九九有奇ヲ得、冪積ニヨリテ圓徑ヲ求ムル術ハ下ノ嘉量ノ條ニ詳ニス】然ラバ周九分、徑三分トセシハ誤ナレバ、從フベカラズ

徑ノ長ニヨリテ周ノ長サヲ知ルコトハ、古ハ周三、徑一トテ、徑一尺ナレバ、周ヲ三尺ト定メシナリ、劉宋ノ祖沖之ニ至リテ、徑數一、周數三一四一五九二六餘ト定メタリ、【隋志ニ「古之九數圓周率三、圓徑率一、其術疏舛、自二劉歆。張衡。劉徽。王蕃皮。延宗之徒一各設二新率一、未レ臻二折衷一、宋末南徐州從事史祖沖之、更開二密法一以二圓徑一億一爲二一丈一圓周盈二數三丈一尺四寸一分五釐九毫二秒七忽一（古版本。毛晉本等ニ三丈ヲ二丈トアルハ誤ナリ、南雍本ニ、三丈トアルニ從フベシ）朒數三丈一尺四寸一分五釐九毫二秒六忽、正數在二盈朒二限之間一」ト云ヘリ、諸家ノ圓率中是最密ニ近シ、然ルニ元明ニ至ルマデノ算書、皆周三、徑一ヲ以テ算セシハ疑フベシ】其說是ニシテ淸ノ數理精蘊モ其數ニテ諸物ヲ計リタレドモ、【徑數一、周數三一四一五九二六五」ト云ヘリ、卽祖沖之ガ密法ノ盈朒二數ノ間ナリ、四庫全書

提要ニ、「割圓術古以徑一圍三爲周徑之率、宋祖沖之用圓容六邊起算、元趙友欽用圓容四邊起算、皆觝求勾股、得徑一者周三一四一五九二六五、泰西法亦同、其率古今四率之密無以逾於是ニ一ト云ヒ、「又測圓以爲方、方田於矩、得自西人、得古人徑一圍三之術而未臻、至梅氏之精術、以推已近之率、而測圓若望之周徑定率、乃用三角弦外切以求勾股之法、而近西術、合於三線以周用割術內、周田以求方之義暗合、所定徑一周三一四一五九二六五、自六以上、又皆與密率之術率一合、是以數理精蘊之類用之ニ一ト云ヘリ、提要ニ「二六五」ヲ「六二五」トアリ、誤ナリ、今數理精蘊ニ依リテ改ム、元ノ李冶ハ三一四二六九六八〇五二四トシ、清ノ錢塘ハ三一六以上トシ、長綫ハ三一二五トシタレドモ、其說未明ラカナラザレバ、今ハ數理精蘊ニ從ヘリ】尚未盡數ヲ盡スコト能ハザルニヨリ、假ニ圓徑ヲ一兆ト定メ、內ニ六觚形ヲ容レ、【密率ハ祖沖之密率此法ヲ用ヒシナリ、九章算術方田ノ術ノ注ニ見エタリ】勾股ヲ求メ、一千〇三十億〇七千九百二十一萬五千百〇四邊トスレバ、一兆六十〇【小餘九五四九一九九六九四六四九八六七一三七〇有奇】形數相乘ズレバ、六兆二千八百三十一億八千五百三十〇萬七千百七十九【小餘五八六四七七二五八一六〇有奇】ヲ得、圓徑二兆ヲ以テ除スレバ、三一四一五九二六五三五八九七九三二三八六二九〇有奇、是徑數一ノ周數ナリ、今予ガ算スルハ皆此新率ヲ用フ、【今コノ有奇ト云フモノ、皆積億ノ數アレドモ、此書小數ノ名釐毫絲忽ノ外ハ古書ニ見ユルコト無ク、且要スル所ニアラザレバ今悉ク去リシナリ】漢尺【曲尺七寸六分】ヲ再自乘シテ、曲尺四百三十八寸九百七十六分ヲ得、コレニ漢斛法一千六百二十寸ヲ

乘ズレバ、曲尺ニテ斛積七百一十一寸一百四十一分一百二十釐ナリ、今ノ斛法ヲ以テ除スレバ一一〇一六九〇有奇ヲ得、是ニテ量ヲ起セバ

斛　今一斗一升〇一勺七撮弱

斗　今一升一合〇一撮餘

升　今一合一勺有奇

合　今一勺一撮有奇

龠　今五撮半有奇

古ハ升・豆【四升】區【一斗六升】釜【六斗四升】ト四ヲ絫ネテ計リタレドモ【左傳ノ文上ニ引リ、齊ノ田氏ハ五ヲ絫ネシコトモ左傳ニ出ヅ】四ヲ絫ネテ多クノ數ヲ計ルハ不便ナレバ、後ニ十ヲ絫ネテ斛・斗・升・合ト改メシモノナルベシ、譬ヘバ古ハ銖・兩【二十四銖】斤【十六兩】ト稱リシニ、十ヲ絫ネザル故不便ナレバ、後世錢分ヲ以テ稱ルガ如シ

漢嘉量　漢書ニ嘉量ヲ作ル法ヲ載セテ、「其法用銅方尺而圜其外、旁有庣焉、其上爲斛、其下爲斗、左耳爲升、右耳爲合龠、其狀似爵以縻爵祿、上三下二、參天兩地、圜而函方、左一右二、陰陽之象也、其圜象規、其重二鈞、備氣物之數、合萬有一千五百二十【三十斤ヲ鈞トス、鈞ハ萬一千五百二十銖ナリト孟康ガ法ニ見エタリ】聲中黃鐘、始於黃鐘而反覆焉」ト云ヘリ、是卽王莽ガ銅斛ナリ、九章

算術注ニ、其銘ヲ載セテ、「律嘉量斛、內方尺、而圜其外、庣旁九釐五豪、冪一百六十二寸、深一尺、積一千六百二十寸、容十斗」ト云ヘリ、【西清古鑑ニ此量ヲ載ス、銘文九章注ニ載セタルト全ク同ジ、其全文及圖、此巻末ニ出ス】律呂新書ニ此銘ヲ釋シテ、「方尺者所以起數也、圜其外者、循四角而規之圜之也、其徑當二尺四寸有奇也、庣旁九釐五豪者、徑一尺四寸有奇之數、猶未足也、冪百六十二寸者、方尺冪百寸、圜其外、每旁約十五寸、合六十寸、庣其旁約二寸也、深尺積一千六百二十者、以十而容也、容十斗者、一寸冪、百六十二寸爲容一斗、積十寸容一千六百二十寸、爲容十斗也」ト云ヘリ【按ズルニ「庣旁九釐五豪」トアレドモ、庣旁一分〇九豪有奇ナラザレバ、一千六百二十寸ヲ容ルコト能ハズ、其算、下ニ詳ニス】漢ノ嘉量ハ考工記ノ嘉量ノ「內方尺而圜其外」トアルニ依リテ作リタレドモ、考工記ニ內方尺ト云ヒシハ、鬴ヲ受ル處上下四旁各一尺、其積千寸ニシテ鬴ヲ容ルヲ云ヒ「圜其外」トハ量ノ形ヲ云ヘルナリ、【鄭玄ガ注ニ、「圜其外者爲之脣」ト云ヒシハ是ナリ、脣トハ此量外圓クシテ內ノ鬴ヲ受ル處方ナルニヨリテ、量ノ口邊弦ヲ張リタル弓ノ狀ノ如クナルヲ云フ】漢ノ嘉量ハ考工記ニ「內方尺」ト云ヒシニ本ヅキテ、先內ヲ方一尺ト定メ、其方一尺ノ弦ヲ徑トシテ造リタル圓器ナリ、「圜其外」トハ彼先定メシ方一尺ノ外ヲ圓クシテ、鬴ヲ容ルヲ云ナリ、【「內方尺而圜其外」ト云ハ、考工記モ漢書モ同ジ文ナレドモ、其形ハ同ジカラズ、荻生氏ガ此量ノ形ヲ說キシハ甚ダ誤レリ】漢ノ時ハ鍾・鬴・區・豆ノ量ハ用ヒズシテ斛・斗・升・合ヲ以テ量リシニ、王莽ガ時漢事古ニ倣ヒシカバ、考工記ニヨリテ嘉量ヲ作ラントセシカドモ、鬴・區等ノ量ハ當時用フ

ル所ニアラザレバ、周ノ嘉量ノ臀ヲ去テ圓器トシ千寸ノ龠ヲ受ルヲ改メテ、一千六百二十寸ノ斛ヲ受クベク、臀ノ一豆ヲ受ルヲ改メテ一升ヲ受クベク、又兩耳共ニ一升ヲ受ルヲ改メテ一耳ハ一升ヲ受クベク、一耳ハ上ニ合、下ニ龠ヲ受クベク造リシナリ、【斛ト升ト合トハ上ニ向ヒ、斗ト龠トハ下ニ向フ、故ニ「上三下二、參天兩地、」ト云ヒ、一耳ハ升ヲ受、一耳ハ合ト龠トヲ受ル、故ニ「左一右二」ト云ヘルナリ】然ドモ方尺ノ弦ハ一尺四寸一分四釐二豪一絲三忽五六二三七三〇九五〇四八八有奇ナレバ、【弦ヲ求ムル法、孫子算經等ニ「方五斜七」ト云ヒシニ依レバ、方一尺ノ弦ハ一尺四寸ナレドモ、其術粗ニシテ據ルニ足ラズ、九章算經ニ、「勾股各自乘幷而開方除レ之卽弦」ト云ヒ、周髀算經注ニモ、「勾股各自乘幷レ之爲レ弦、實開方除レ之卽弦」トアルヲ、後周甄鸞ガ釋ニ「假令勾三自乘得レ九、股四自乘得二十六一、幷レ之得二二十五一、開方除レ之得レ五爲レ弦也」ト云ヘリ、故ニ今一方面ヲ自乘シテ百寸ヲ得、又一方面ヲ自乘シテ百寸ヲ得、合セテ二百寸ヲ弦實トシ、方ニ開キテ弦ノ數ヲ得ルナリ】周ハ四尺四寸四分二釐八豪八絲二忽九三三〇八一六三一九六三有奇【徑ニヨリテ周ヲ得ル法ハ、上ノ黃鍾管ノ條ニ詳ニス】其深サ一尺ニテハ積千五百七十〇寸七百九十六分三百二十四釐九百九十九豪八百九十六絲四百六十九忽餘、【積ヲ求ムル法モ黃鍾管ノ條ニ云ヘリ】ナレバ、一千六百二十寸ノ斛ヲ容ルコト能ハザルニヨリ、弦ノ兩旁ニ各九釐五豪ノ庣ヲ增シ加ヘ【漢書ノ注ニ「鄭氏曰、庣過也、算方一尺所レ受一斛、過二九釐五豪一、今尙方有二王莽時銅斛制一、盡與レ此同」ト云ヒシヲ引キテ、顏師古ハ「庣不レ滿之處也」ト云ヘリ、律學新說ニモ「庣者言二一尺之外有餘之數一、所謂九釐五

豪是也」トアリ、説文ニ斛字ヲ載セテ、「斛旁有庣也」ト云ヒシモ是ナリ、然ルニ説文ニ斛字ノ從ヒシ庣字ヲ載セズ、段玉裁ハ窕字ノ異文ナリト云ヘリ、然ラバ爾雅ニ「窕閒也」トアル者即此義ナリ、按ズルニ劉氏ガ一算方一尺實受一斛ト云ヒシハ疑ハシ、恐ラクハ方一尺ノ下ニ其強ヲ徑トシテ圓冪ヲ作リシコト、又深一尺ナルコトノ有シガ脱タルナラン、同ジ文字ノアル所ヨリ脱スコト常有ルコトナリ」周圍ヲ寛メ大ニシテ一千六百二十寸ヲ容ルベク作リシナリ、然ルニ今庣旁九釐五毫ヲ加ヘテ、積ヲ求ムレバ、一千六百二十三寸二百八十七分二百四十三釐〇三十三毫九百二十一絲二百〇六忽強ニテ、【方尺ノ強一尺四寸一分四釐二毫一絲三忽五六二三七三〇九五〇四八八強ニ、庣九釐五毫ヲ倍シテ一分九釐ヲ加フレバ、一尺四寸三分三釐二毫一絲三忽五六二三七三〇九五〇四八八強、是ヲ徑トスレバ周ハ四尺五寸〇二釐五毫七絲二忽一九七四三〇九八一九六有奇ナリ、深サ一尺ナル故ニ、コノ積數ヲ得】一千六百二十寸ヲ容ンニハ、六寸七百一十二分七百五十六釐九百六十六毫〇七十八絲八百九十三忽猶足ラズ、是ハ漢ノ時算法イマダ精シカラザリシカバ、增シタル庣ノ數猶足ラザリシナリ、今算スルニ兩庣各一分〇九毫八絲九忽三一八六有奇【兩庣ヲ合スレバ二分一釐九毫七絲八忽六三七六有奇ナリ】ヲ加ヘテ、其徑一尺四寸三分六釐一毫九絲二忽二有奇ニ非レバ、一千六百二十寸ヲ容ルコト能ハズ、【積千六百二十寸ヲ深一尺ニテ除スレバ、冪百六十二寸卽平積ナリ、別ニ徑率三三三一〇二一ヲ四倍シテ一三三二四〇八ヲ得、コレヲ以テ百六十二寸ニ乘ズレバ二一五八四九〇九六ヲ得、周率一〇三九九三ヲ以テ除スレバ二〇六二六四八〇六二四七有奇ヲ得、是ヲ方ニ開キテ徑ノ數ヲ得、九章算

術少廣ノ條、開圓ノ術ニ有二積△歩一、問、爲二圓周一幾何、答曰、△歩、術曰、置二積歩數一、以二十二一乘レ之、以二開方一除レ之、卽得レ周」ト云ヘリ、然レドモ是ハ周三徑一ノ率ナレバ粗ナルニヨリ、劉徽ハ三一四ノ率ニテ算シ、李淳風ハ祖沖之ガ密率ニヨリテ算シタリ、然レドモ猶精密ナラザレバ、今ハ冪積百六十二寸ニ割圓ノ新率ヲ四倍シテ以テ乘ジ、方ニ開キテ此數ヲ得、九章算術ハ圓周ヲ求ムル故、積ヲ四倍シ周三ヲ乘ズ、「以二十二一乘レ之」ト云フモノ是ナリ、圓田ノ平積ヲ求ムル「周自相乘十二而一」ト云フ術ヲ反覆シタルモノナリ、祖沖之ガ密律ハ徑率一一三、周率三五五トシタレドモ、其周率少シク强シ、數理精蘊モコレニヨリテ此率ヲ十二萬七千三百二十四トシタレドモ、祖沖之ノ徑率ニ四ヲ乘ジ、周率ヲ以テ除スレバ、十二萬七千三百二十三九一五餘ナルヲ二十四ト收メタルナレバマ、ス、粗ナルニヨリ、今新率徑三三一〇二、周一〇三九九三トス、隋志ニ漢書ノ嘉量ヲ作ル法ヲ載セテ、「祖沖之以二圓率一考レ之、此斛當二徑一尺四寸三分六釐一毫九秒二忽一、庣旁一分九毫有奇、劉歆庣旁少二一釐四毫有奇一、歆數術不レ精之所レ致也」ト云ヒシハ是ナリ、徑一尺四寸三分六釐一毫九絲二忽ノ內ニテ、方一尺ノ弦一尺四寸一分四釐二毫一絲三忽餘ヲ去レバ、殘ル二分一釐九毫七絲八忽餘是兩庣ナリ、是ヲ二ニ分レバ一分〇九毫八絲九忽餘、故ニ祖氏庣旁一分九毫有奇ト云ヘリ、コノ一分〇九毫八絲九忽餘ノ內ニテ、劉歆ガ云ヒシ庣九釐五毫ヲ去レバ、一釐四毫八絲九忽餘ナリ、「劉歆庣旁少二一釐四毫有奇一」トハ是ヲ大凡ニ云ヘルナリ】然レバ庣旁九釐五毫ト云ヒタルハ、算術ノ精シカラザリシナレバ【律呂新書ニ「漢志止言レ有レ庣焉、不レ言二九釐五毫一者、數猶有レ未レ足也」、ト

云ヘリ、然ラバ庣旁ハ九釐五毫ノ非ナルコトヲ知リタリシニヤ】積千六百二十寸トアルニ從ヒテ、庣旁九釐五毫ト云ヒシニハ據ルベカラズ【コノ嘉量今清朝ニ傳ハリ、西淸古鑑ニ載セテ、「斛深七寸二分、徑一尺四分」ト云ヘリ、清ノ營造今尺ニテ度リシナリ、斛銘ニ漢尺ト云ヒタレバ、清ノ今尺ノ七寸二分ヲ漢ノ一尺トシテ、漢尺ノ徑一尺四寸三分六釐一毫九絲二忽ヲ求ムレバ、清ノ今尺ノ一尺〇三分四釐〇五絲八忽強ナルヲ一尺四分ト云ヘルハ、此嘉量ノ僞ニ作リシモノニ非ル故ニ、大凡ニ度リタルコト奇零ヲ云ハザルニテ知ラレタリ、モシ實ニ徑清尺ノ一尺〇四分ナラバ、漢尺（清尺ノ七寸二分）ニテハ一尺四寸四分四釐四毫四絲四忽不盡、其周ハ四尺五寸三分七釐八毫五絲六忽〇五ナリ、深一尺其積千六百三十八寸六百七十〇分二百四十〇釐二百七十七毫七百七十七絲七百七十七忽不盡ナレバ、必一尺〇四分ニハアラジ】

宋以來諸家ノ定メシ漢量ヲ漢器ニ容受ノ試驗アル者ノ後世マデ傳ハリタルヲ量リタルモ、各同ジカラズシテ紊リ訟フルガ如クナレバ、今皆措シテ據トナサズ

夏侯陽算經ニ、「一斛漢王莽ノ改量銅斛圓深一尺九寸二分」ト云ヘリ、王莽ガ銅斛ハ、一千六百二十寸ナルコト嘉量ノ銘ニテ異論無キヲ、一千九百二十寸トシタルハ疑ハシ、今暫其說ニ從ヒテ算スルニ、【漢錢尺ヲ再自乘シ、又一尺九寸二分ヲ乘ズ】曹尺ノ積八百四十二寸八百三十三分九百二十釐ヲ得、今解法ニテ除スレバ

算　今一斗二升〇五勺七撮有奇【斗升合準ヘ知ルベシ】

此事他ニ絕エテ見ルコト無ケレバ、返返疑ハシ

魏嘉量 魏ノ杜夔、周ノ嘉量ニ倣ヒテ斛ヲ作リタリ、【通典ニ「魏初杜夔造レ斛、卽周禮所レ謂嘉量也、深尺方尺、實一斛、臂一寸、實一豆、耳三寸、實一升」ト云ヘリ、此事他書ニ載セズ】深尺方尺ナルコトハ考工記ニ依リタレドモ、魏尺ハ曲尺ノ七寸九分五氂七豪二絲ナレバ、曲尺ニテ度ル時ハ、卽方七寸九分五氂五豪二絲、深サモ同ジ、コノ冪六十三寸三十一分七十〇氂三十一豪八十四絲ニテ積五百〇三寸八百二十六分二百八十五氂七百五十七豪二百四十八絲、コレ一斛【六斗四升】ノ積ナレバ、六十四分シテ一升ノ積七寸八百七十二分二百八十五氂七百一十四豪九百五十七絲ヲ得、今ノ斛法ニテ除スレバ

斛　今一斗二升一合九勺五撮餘

斗　今一升二合一勺九撮餘

升　今一合二勺二撮弱

合　今一勺二撮有奇

按ズルニ是ヨリ後ナル景元ノ大司農ノ斛【隋志ニ「魏陳留王景元四年、劉徽注九章商功曰、當今大司農斛云云」ト云ヘリ】却テ漢量ニ近ケレバ、杜夔ガ量ハ古ニ倣ヒテ作リシノミニテ、普ク世ニハ用ヒザリシナラン

魏大司農量 魏ノ大司農ノ斛ハ、徑一尺三寸五分五氂深サ一尺ナリ、【魏劉徽ガ九章算術商功ノ注ニ、「當今

大司農銅斛徑一尺三寸五分五釐、正深一尺、於ニ徽術ニ爲ス積一千四百四十一寸、排成餘分、又有ニ十分寸之三ニト云ヘリ、今コレヲ算スルニ徑一尺三寸五分五釐ニ劉徽カ率三一四ヲ乘ズレバ（九章算術音義ニ、徽率周一百五十七、徑五十ト云ヘリ、五十ヲ以テ一百五十七ヲ除スレバ、三一四ヲ得ルナリ）周四尺二寸五分四釐七毫、深サ一尺ニテコノ冪一百四十四寸一十二分七十九釐六十二毫五十絲、積一千四百四十一寸二百七十九分六百二十五釐ナルヲ、一千四百四十一寸十分寸之三トハ大凡ニ計ヘシモノナラン、十分寸之三トハ三百分ヲ云フ」此斛ヲ曲尺ニテ度レバ徑一尺〇七分八釐二毫〇〇六、深サ七寸九分五釐七毫二絲一コノ周三尺三寸八分七釐二毫六絲七忽〇八〇一八五五九ニテ、冪九十一寸三十〇分三十八釐三十五毫〇〇絲〇四忽三二〇一二三三八五、積七百二十七寸五百二十二分八百七十六釐八百六十五毫四百三十七絲六百〇八忽餘ナリ、今斛法ニテ除スレバ

斛　今ノ一斗一升二合七勺有奇

斗　今ノ一升一合一勺七撮有奇

升　一合一勺二撮餘

合　一勺一撮餘

其容ルコト漢斛ト略同シケレバ、魏ニテハ漢尺ニ依リシナリ、一孫生ガ是ヲ一漢斛之在ニ于魏一者、其於ニ漢斛ニ積有ニ少ニシ合、乃敍ニ玄晁ガ當ニ木誤所レ致也ニト云ヘリ、漢斛ノ儘マデ遺リシハサルコトナレドモ、展轉

ヲ蔵去タルニヨリテ、漢斛ト同ジカラズト云ヒシハ非ナリ、モシ尾數ヲ蔵去タランニハ漢斛ヨリ小ナルベキニ却テ大ナルニテ其誤ナルコト明ナリ、魏斛ノ漢斛ニ依リナガラ、漢斛ヨリ大ナルハ年ヲ經テ訛リタルニテ、度ノ年ヲ經テ訛長スルガ如キナルベシ」然レドモ魏斛ハ漢斛ヨリ少シク大ニシテ、漢ノ一斛ハ魏ノ九斗七升七合四勺八撮餘ナリ【九章算術ノ注ニ、大司農斛ノ度積ヲ云ヒシニ、次デ「王莽銅斛於今尺爲深九寸五分五釐、徑一尺三寸六分八釐七豪、以徽術計之、於今斛爲容九斗七升四合有奇」トアリ、今尺トハ魏ノ尺ニテ今斛トハ魏ノ斛ナリ、隋志ニ此文ヲ引キテ、「此魏斛大、而尺長、王莽斛小、而尺短也」ト云ヘリ、今劉徽ガ言ニ從ヒ、王莽ガ斛ヲ徑一尺三寸六分八釐七豪トシ、徽ガ圓法三一四ヲ乘ズレバ周四尺二寸九分七釐七豪一絲八忽ニテ、冪一千四百七十〇寸五十七分一十六釐五十六豪六十五絲、是ニ深サ九寸五分五釐ヲ乘ジテ積一千四百〇四寸三百九十五分九百三十二釐一百〇〇豪七百五十絲ヲ得、是ヲ魏ノ斛積一千四百四十一寸十分寸之三ニテ除スレバ、漢ノ一斛ハ魏ノ九斗七升四合三勺九撮餘ナルヲ、大凡ニ九斗七升四合有奇トハ云ヒシナリ、然レドモ隋志ニ「魏尺比晉前尺一尺四分七釐」ト云ヘリ、是ニヨリテ魏尺ヨリ漢尺ヲ計レバ、其實ハ九寸五分五釐一豪〇九忽八三七六有奇ニテ、漢斛ノ徑ハ魏尺ノ一尺三寸七分一釐七豪二絲一忽三弱、コノ周四尺三寸〇七釐二豪〇五忽弱、コノ積一千四百一十〇寸七百六十五分二百一十〇釐四百一豪餘ナルヲ、大凡ニ漢尺ヲ九寸五分五釐トシ、漢斛ノ徑ヲ一尺三寸六分八釐七豪トシタル故ニ、積少クシテ九斗七升四合有奇ト云ヒタレドモ、魏斛ノ積一千四百四十一寸十分寸ノ三ヲ以テ、魏尺ニテ計リシ漢斛ノ積

ヲ計レバ、其實ハ九斗七升七合四勺八撮餘ナリ

晉・宋・南齊ノ間、量ノ制聞エズ、隋志ニ「梁陳依古」ト云ヒタレバ、晉ヨリ陳マデモ、魏斛ノ舊ニ依リシナルベシ、【北朝北方ニハ北魏・北齊ノ斛アレドモ、梁・陳マデモ晉・魏ヨリ受テ改ムルコト無リシト云ヘルナラン、サレドモ度ノ年ヲ經テ訛長シタリシヲ見レバ、量モ少シノ訛アリシモ知ルベカラズ、今證トスベキモノ無ケレバ考ヘ難シ】

夏侯陽算經ニ「至宋元嘉二年、徐受重鑄【鑄斛ヲ鑄タルヲ云フ】用二尺三寸九分、至梁大同元年甄鸞校レ之、用二尺九寸二分」ト云ヘリ、夏侯陽算經ニ王莽ガ斛法ヲ云ヒシコト疑ハシケレバ、是モ同ク信ジガタケレドモ、姑其說ニ依リテ算フルニ宋氏尺【曲尺八寸〇八釐六毫四絲】ヲ再自乘シテ、曲尺五百二十六寸七百六十六分六百〇四釐〇一十二毫五百四十四絲ヲ得、云フ所ノ積二千三百九十寸ヲ乘ズレバ、曲尺ニテ斛積一千二百六十三寸七百五十六分九百六十三釐五百八十九毫九百八十〇絲一百六十忽ナリ、今斛法ニテ除スレバ

　斛　今ノ一斗九升五合七勺八撮弱

「至梁大同元年」トハ靑尺ヲ作リシ後、コノ量ヲ變シタリト云ヘルニヤ、「甄鸞校レ之、用二尺九寸二分」ト云ヒシニ據リテ、甄鸞ガ校セシ尺ヲ求ムレバ、其尺曲尺ノ六寸六分一釐八毫六絲六忽餘ナリ、【宋斛ノ積二尺三寸九分ヲ置キ、二尺九寸二分ヲ以テ除スレバ、八一八四九三一五〇有奇、是ニ宋尺ノ長サ八

寸〇八釐六豪四絲ヲ乘ズレバ、コノ長ヲ得ルナリ」此ノ如キ尺歷代アルコト無ケレバ、是モ疑ハシ、尙ヨク考フベシ

【北魏量】北魏ノ量ハ古ニ一倍セリ、【左傳定八年ノ正義ニ、「魏齊斗稱於二古一而爲レ一」ト云ヘリ、隋志ニハ此事ヲ載セザレドモ、大和ノ時長尺大斗ヲ改ムト云ヒタレバ、魏ノ初大量ヲ用ヒシコトハ明ラケシ、北齊ノ斗稱ハ、古ノ二ニ非ルベキコト下文ニ詳ニス】古トハ漢量ヲ云フナルベシ、【唐人ハ唐小量ヲ古量ト云ヘリ、五經正義ハ唐初ニ作リタレバ、ソノ古ト云フハ唐小量カトモ思ヘドモ、唐小量ハ鐵尺ヨリ起シタル量ナリ、北魏ノ初イマダ鐵尺無ケレバ古ト云フモノハ必漢量ヲ云ヘルナルベシ】漢量ヲ倍スレバ

斛　今二斗二升〇三勺四撮弱

斗　今二升二合〇三撮餘

升　今二合二勺有奇

合　今二勺二撮有奇

【後魏大和量】北魏ノ孝文帝、漢志ニヨリテ斗尺ヲ作リシハ、【隋志ニ「後魏孝文時一依二漢志一作二斗尺一」トアリ】大和十九年ノ事ナルベシ、【後魏書ニ「大和十九年改二長尺大斗一依二周禮制度一」ト云ヘリ、詳ニ上卷ニ引リ】大和ノ尺ハ荀勗ガ尺ニ同ジト云ヘバ【上卷ニ詳ニス】量モ漢量ト同ジカリシナラン、サレドモ大和ニモ永平ニモ、度ヲ改メタレドモ、民間猶魏後尺ヲ用ヒタリシニ據レバ、大和ノ量モ普ク民間ニハ用ヒザリ

シナルベシ

【北齊量】北齊ノ量ヲ考フルニ隋志ニ「齊以古升五升爲一斗」トアリ、按ズルニ此時ニ至リテ、漢量ノ半ナル小量ヲ用フベキ理無シ、左傳正義ニ「魏齊斗稱、於古二而一」ト云ヒシニ據レバ「以古斗一斗爲五升」トアリシガ錯リタルカト思ヒシニ、北齊ノ尺ハ周尺ノ一尺五寸ニテ稱モ古ノ一斤半ヲ一斤トシタレバ、量モ古ノ一斗五升ヲ一斗トシタルナルベシ、【北齊ノ稱】隋志ニハ、「齊以古稱一斤八兩爲一斤」ト云ヒ、左傳正義ニハ「魏齊斗稱、於古二而一」ト云ヒテ二說同ジカラザレドモ、今北齊ノ常平五銖錢ヲ稱ルニ其五銖ノ重サ隋志ノ說ニ合ヒテ、左傳正義ノ說ニハ合ハザレバ、斗モ「於古二而一」ト云ヒシハ誤ナルベシ、然ラバ隋志ニハ「齊以古斗一斗五升爲一斗」トアリシヲ誤リ脫シタルナリ、【隋志ニ「又至斗一斗得古斗一斗一升三合四勺」トアルベキヲ、今本ニ「至升一升得古斗一升三合四勺」ト誤リ、同書ニ「又周朝市尺得玉尺一尺九分三釐」トアルベキヲ、今本ニ「得玉尺九分三釐」ト誤リタルト同ジ誤ナリ】漢ノ一斗五升ヲ一斗トスレバ、今ノ一升六合五勺二撮餘ナレドモ【隋ノ六量ノ一斗五升ヲ一斗トシタルカトモ云フベケレドモ、隋志ニ北齊ノ尺ヲ舊制尺ノ一尺五寸（一本又豪ト云ヘリ）如此度ヲ精覈スルハ許リタレバ、量モ廣量ヨリ計リシニハアルベカラズ、】然ラザレバ緝古算經ニ、斛法二尺五寸ト云ヒシ者コノ斛法ナラン、【算數ニ異ニス】古尺ニテ二尺五寸ノ量ヲ起セバ、曲尺ノ積一千〇九十七寸四百四十分【漢量尺ヲ以自乘シテ二尺五寸ニ乘ズレバ此數ヲ得】今斛法ニテ除スレバ

斛　今一斗七升〇〇一撮餘
斗　今一升七合有奇
升　今一合七勺有奇
合　今一勺七撮有奇

此一斗ヲ漢量ニテ計レバ、一斗五升四合三勺二撮餘ナルヲ、一斗五升ト云ヒシハ、大凡ニ計リシナラン、【唐小量ニテ計レバ、一斗二升八合一勺一撮五、ナレバ一斗五升ト云ヒシハ、唐量ヨリ計リシニハアラジ】

按ズルニ「東魏ノ天平三年、均二斗尺一班二於天下一」ト北齊書ニ見エタレバ、此量東魏ノ時ニ造リテ、北齊ニテモコレヲ用ヒシナルベシ【北齊ニテ用ヒシ一尺五寸ノ尺ハ、東魏ニテ作リシ尺ナルヲ承用ヒタルコト上卷ニ出セリ、又北齊ニテ一斤半ヲ一斤トスル稱モ、東魏ヨリ承ケタルベキコト下卷ニ云ヘリ、然ラバ量モ天平三年ニ班チタルヲ、北齊ニテモ用ヒシナラン、東魏ノ制度ハ北齊ノ文宣帝ノ父、高歡東魏ノ政ヲ攝シタル時定メタレバ北齊ニテ遵ヒ用フベキ理ナリ】

後周玉斗　後周ノ初ニハ後魏尺ヲ用ヒタレバ、【上卷ニ詳ニス】量モ後魏ノ量ヲ承用ヒシナルベシ、保定ノ時作リシ斛ハ徑七寸一分、深二寸八分、是ヲ玉斗ト云フ、【隋志ニ、「後周武帝保定元年辛巳五月、晉國造レ倉獲二古玉升一、暨二五年乙酉冬十月一詔改二制銅律度一、遂致二中和一、累レ黍積レ籥、同二茲玉量一、與レ衡度無レ差、準爲二銅升一、用頒二天下一、內徑七寸一分、深二寸八分、重七斤八兩、天和二年丁亥正月癸酉朔十五日戊子校定、

移二地官府一、為レ式、此銅升之銘也、其玉升銘曰、維大周保定元年、歲在二重光一、月旅二蕤賓一、晋國之有司修二繕倉廩一、獲二古玉升一、形制典正、若二古之嘉量一、大師晋國公以聞、勅納二於天府一、暨五年歲在二協洽一、皇帝乃詔稽二准繩一、考二灰律一、不レ失二圭撮一、不レ差二累黍一、遂鎔レ金寫レ之、用頒二天下一、以合二太平權衡度量一、今若以レ數計レ之、　玉升積玉尺一百一十寸八分有奇、　斛積一千一百八十五分七釐三毫九秒一ト云ヘリ、　按ズルニ玉升銅升トアルハ、皆玉斗銅斗ノ訛、累黍ハ絫黍ノ假借ナリ、又此斗ノ積ヲ算ルニ、祖沖之ガ率ニヨリテ求ムレバ、徑七寸一分ノ周ハ二尺二寸三分〇五毫三絲〇七八一五ニテ、冪三十九寸五十九分一十九釐二十一毫三十七絲一十六忽二五、深サ二寸八分ヲ乘ズレバ其積一千一百〇八寸五百七十三分七百九十八釐四百〇五毫五百絲ナリ、是ヲ斛積一千一百八十寸五分七釐三毫七秒九忽ト云ヘルナレバ、今本ニ八十五分トアル十ノ字ハ寸ノ字ノ誤ニテ、九秒トアルモ七秒九忽ノ脫誤ナリ、又斗ノ積ハ斛ノ十分一ナレバ、一百一十〇寸八百五十七分三百七十九釐八百四十〇毫五百五十絲ナリ、是ヲ玉斗積玉尺一百一十寸八分有奇ト云ヒタルナレバ、今本ニ一十八寸トアル八ノ字ハ衍文ナリ】玉尺【曲尺八寸八分〇〇八絲】ニテ度リシナリ、曲尺ニテ度レバ、徑六寸二分四釐八毫五絲六忽八、深サ二寸四分六釐四毫二絲二忽四、コノ周一尺九寸六分三釐〇四絲五忽五三〇一八二五二ニテ、冪三十〇寸六十六分五十五釐五十八毫七十〇絲六十一忽〇三八二一五七八四積七百五十五寸六百六十八分〇五十七釐三百六十九毫八百九十九絲八百三十六忽餘ナリ、今斛法ニテ除スレバ

斛　今一斗一升七合〇六撮餘

斗　今一升一合七勺有奇

升　今一合一勺七撮有奇

合　今一勺二撮弱

「後周官斗」又後周ニ官斗アリ、斛積玉尺ノ九百七十七寸有奇ニテ、玉斗ノ一斗ハ官斗ノ一斗一升三合四勺餘ナリ、「隋志ニ、一甄鸞算術云、玉升一升、得二官斗一升三合四勺一、此玉升大、而官斗小也、以レ數計レ之、甄鸞所レ據後周官斗、積玉尺九十七寸有奇、斛積九百七十七寸有奇」ト云ヘリ、「玉升一升得二官斗一升三合四勺一」ト云ヒシニ據リテ、一三四ヲ以テ玉斗ノ斛積一千一百〇八寸五分七釐三毫七秒九忽ヲ除スレバ、官斗ノ斛積八百二十七寸餘トナリテ其數合ハズ、故ニ官斗ノ斛積九百七十七寸有奇ト云フニヨリテ、九七七ニテ玉斗ノ斛積ヲ除スレバ、玉斗ノ一斗ハ官斗ノ一斗一升三合四勺六撮七強ナリ、是ニヨレバ玉升一升トアルハ玉斗一斗ノ誤ニテ、官斗一升三合四勺トアルモ、一升ノ上ニ一斗ノ字ヲ脫シタルナリ、故ニ一一三四ヲ以テ玉斗ノ斛積ヲ除スレバ、九百七十七寸五百七十八分强、コレ官斗ノ斛積ナルヲ約シテ、九百七十七寸有奇ト云ヘルナレバ、今本ノ隋志ニ「玉升一升得二官斗一升三合四勺一、此玉升大、而官斗小也」トアルハ「玉斗一斗得二官斗一斗一升三合四勺一、此玉斗大、而官斗小也」トアリシヲ誤リタルコト明ナリ」今玉尺ヲ再自乘シテ、【曲尺六百八十一寸六百五十七分八百七十二釐八百九十六毫五百一十二絲】官斗ノ斛積【九百七十七寸五百七十八分三百〇五釐四百七十二毫二百二十二絲二百二十二忽不盡】ニ乘ズレバ、曲尺ニテ斛積六百六十

六寸三百七十三分九百四十八釐一百九十七毫九百七十一絲六百二十六忽餘ナリ、今解法ニテ除スレバ

斛　今一斗〇三合二勺三撮餘

斗　今一升〇三勺二撮餘

升　今一合〇三撮強

合　今一勺餘

隋志ニ玉斗ノ徑深、斗斛ノ積ヲモ詳ニ記シ、官斗ノ比量、其斗斛ノ積ヲモ載セタルコト右ノ如クナルニ、荻生氏コレニ從ハズシテ別ニ玉尺千寸ノ算量ヲ起シタレドモ、【正木氏。最上氏皆コレニ依ル】千寸ノ算ヲ作リタルコト物ニ見ユルコト無シ、藤本氏ハ方七寸一分、深二寸八分ノ方量トシタレドモ、隋志ニコノ量ヲ徑ト云ヒテ方ト云ハザレバ、方量ニアラザルコト明ラケシ、【方七寸一分、深二寸八分ノ量ハ、ソノ積一千四百一十一寸四百八十分ニテ、玉斗ノ斛積一千一百〇八寸五分七釐三毫七秒七忽ナルニモ合ハザルヲヤ】山村氏コレヲ圓積トシタル者是ナリ、【但周尺ノ長サヲ誤リシ故、玉尺ノ長サモ隨ヒテ誤リシカバ、其容積モ稍多キニ過ギタリ】然ルニ斛積ノ論ニ及バザリシヲ見レバ、イマダ隋志ノ文ヲ熟ク解セザルニ似タリ、中村氏。中根氏。山田氏ハ此量ヲ載セズ、又官斗ヲバ諸家トモニ皆載セザリシハ如何ナル故ナルカ、【律呂新書ニモ玉斗官斗ヲ載セズ】思フニ隋志ノ玉斗ノ斗積ニハ一十寸ヲ一十八寸ト誤リ、斛積ニハ八寸五分七釐三毫七秒九忽ヲ八十五分七釐三毫九秒ト誤リ、官斗ノ比校ニハ玉斗一斗ヲ玉升一升ト誤リ、官斗ノ下ニ一斗ノ字

ヲ脫シタル故ニ、諸家皆コノ條ヲ讀カネテ、或ハ其說ヲ改メ作リ、或ハ省キシモノナルベシ

後周建德尺 建德六年鐵尺ヲ作リ律度量ヲ同クシテ、天下ニ頒ツトアレバ、【上卷ニ出ヅ】是時鐵尺ニヨリテ、一千六百二十寸量ヲ作リシナルベシ、【但シ建德ニ鐵尺ヲ用ヒ、ソレニヨリテ律量ヲモ改メシトアレドモ、玉尺ノ條ニハ玉斗ニヨリテ、律度量衡ヲモ作リ、大象ノ末マデ用ヒシトアレバ、保定ノ時ヨリ建德マデハ玉尺・玉斗ヲ用ヒシニ、建德ノ時鐵尺ノ度量ヲ作リテ後、大象マデハ度量トモニ玉尺・鐵尺ノ兩制アリシナルベシ、隋志ニ「後周玉斗并副金錯銅斗及建德六年、金錯題銅斗實同」ト云ヘバ、建德ノ銅斗ニモ玉斗ト同ジカリシモアリシナリ】鐵尺【曲尺八寸〇八釐六豪四絲】ヲ再自乘シテ、曲尺五百二十八寸七百六十八分六百〇四釐〇一十二豪五百四十四絲ヲ得、千六百二十寸ニ乘ズレバ、曲尺ニテ斛積八百五十六寸六百〇五分一百三十八釐五百〇〇豪三百二十一絲二百八十忽ナリ、今斛法ニテ除スレバ

斛　今一斗三升二合七勺有奇

斗　今一升三合二勺七撮有奇

升　今一合三勺三撮弱

合　今一勺三撮強

後周三倍量 是、隋唐小量ノ本ヅク所ナリ、然ルニ左傳正義ニ「周隋斗升於古三而爲一」ト云ヘリ、【コノコト隋志ニハ載セズ】按ズルニ後周ノ初ニハ、後魏ノ度量ヲ用ヒシニ、保定ニ改メテ玉斗ヲ用ヒ、建德

ニハ鐵尺ニヨリテ量ヲ作リシカドモ、並ニ其量小クシテ不便ナリシカバ、後ニ建德ノ量ヲ三ツ併セタル、倍量ヲ作リシナルベシ、【保定ニハ玉尺ヲ作リ、建德ニハ鐵尺ヲ用ヒタレドモ、市中ニハ是ヲ不便ナリトシテ、猶後魏ノ尺ヲ用ヒシモ、是ト同ジ、然レドモ是ハ民間ノ私ニテ、官量ニハアラザリシ故ニ、隋志ニハ載セザルナラン】鐵尺ヲ古尺トセシ故ニ、【達奚震・牛弘等ガ議セシコト詳ニ上卷ニ引リ】建德ノ量ヲ古ナリトシテ、「於古三而倍一」ト云ヒシナラン、建德ノ量ヲ三倍スレバ

斛　今三斗九升八合一勺一撮有奇

斗　今三升九合八勺一撮強

升　今三合九勺八撮強

合　今四勺弱

是隋唐大量ノ本ヅク所ナリ、然ラバ大小量並ベ用フルコトハ、後周ヨリ始リシナリ、【諸葛氏ハ周漢既ニ大小量アリトシ、毛詩ノ「酌以大斗」トアルヲ以テ、周ニ大小斗アリシ證トシ、漢書ニ「合龠爲合」トアルヲ小量トシ、說苑ニ「十龠爲合」トアルヲ大量トシ、又金匱要略ニ鱠ヲ食ヒタルガ心胸ノ間ニアリテ化セズ、吐ケドモ出ザルヲ治スル方ノ藥劑ヲ「以水一大升煮」ト云ヒ、紅藍花酒ノ方ニ「以酒一大升煎」ト云ヒ、漢書貨殖傳ニ「黍千大斗」トアルヲ、顏師古ガ注ニ、「大斗者異於量米粟之斗也、今俗猶有大量」ト云ヒシヲ引テ、漢ニ大小量アリシ證トセリ、然レドモ予ヲ以テ見レバ、皆周漢大小量ヲ用ヒシ證ト

スルコトヲ得ズ、先毛詩ノ斗ハ鄭箋ニ、「以二大斗一酌而嘗レ之」トアレバ、酒ヲ挹ム器ニシテ量器ニアラザレバ、料ノ借字ナリ、斗ハ斗升ノ字ニテ、音當口反、料ハ料勺ノ字ニテ、音之庾反ナレバ、二字同ジカラザルヲ、古ハ文少カリシカバ斗。料古音同ジキニヨリ、斗字ヲ借リテ料トシタルナリ、故ニソノ釋文ニ「大斗字又作レ料」ト云ヘリ、毛詩ニ「又維北有レ斗、不レ可三以挹二酒漿一」トアルモ是ナリ、釋文ニ此二ツノ斗字ノ音、イヅレモ、都口反、徐音主」トアリ、都口反トアルハ非ニテ、音主トアルニ從フベシ、周禮梓人ノ職ニ、「大喪之大渳設レ斗」注ニ「斗所三以沃二尸也一」トアル、釋文ニハ音主トノミアリテ、都口反ノ音無キハヨロシ、毛詩ハ人ゴトニ塾師ニ就テ誦讀ヲ學ビシニ、村郷ノ俗儒誤テ都口反ニ讀傳ヘシヲ、陸德明モ考ヘ正スニ及バズシテ載セシナルベシ、然レドモサスガニ徐邈ガ音ノ誤ラデ傳ハリシヲモ載セタルハ喜ブベキコトナリ、周禮ハ俗儒ノ誦傳ヘザリシ故、其音誤ラザリシナルベシ、又漢書王莽ガ傳ノ威斗ヲ、宋ノ韓玉汝ガ家ニ藏シタルニハ銘ニ「銅料」トアリシコト、葉少蘊ガ避暑錄話ニ見エ、史記趙世家ニ趙襄子請二代王一使三廚人操二銅料一食二代王一」トアルヲ張儀ガ傳、又呂氏春秋列女傳等ニ載セタルニハ、「皆斗」トアルニテ、古斗ヲ借リテ料トセシヲ證スベシ。然レバ毛詩ノ大斗ハ勺ノ大ナル者ニシテ、升斗ノ斗ニハ非ズ、又說苑ノ十龠ハ偶誤リタルモノナルコト既ニ量攷ニ辨ジタリ、又金匱要略ニ鱠ヲ食テ化セザルヲ治スル方ニ「水一大升」トアレドモ、此方ヲ千金方ニ載セタルニハ、「酒二升」トアレバ、仲景ノ舊ニアラジ、又紅藍花酒ヲ外臺祕要ニ、近效方ヲ引テ載セタルニハ、「清酒半升」トアリ（近效方ハ唐人ノ撰ナリ）又金匱要略ノ此方ノ原

注ニ「疑非二仲景方一」ト云ヘリ、ゲニ仲景ノ方ナラバ王燾コレヲ置テ近効方ヲ引ベキニアラズ、宋ノ陳自明ガ婦人良方ニハ此方ヲ載セテ、「本出二肘後一」ト云ヘリ、肘後方ハ晉ノ葛洪ガ作ナレバ、是モ仲景ガ方ニ非ルヲ證スベシ、然ラバ此方ハ後人ノ續添ナリ、捴テ金匱要略ハ是ノミナラズ、後人ノ羼入多キ書ナリ、又此書ニ藥ヲ何錢ト稱リシモアリ、稱ニ何錢ト云フコト、唐末宋初ヨリノコトナレバ、此書ノ稱ハ仲景ノ舊ニアラズ、コレニヨレバ此一大升モ後人ノ改メシニ疑ナシ、又漢書ニ黍千大斗トアレドモ、史記ニ此事ヲ載セタルニハ、「漆千斗」トアリテ大ノ字無ケレバ、漢書ノ大ノ字ハ衍文ナルヲ顏師古是ニ心付ズシテ、唐ニ大小斗アルヲ以テ古モアリシモノト思ヒテ注シタルナリ、然レバイヅレモ古大小量ヲ並ベ用ヒシ證トハナシ難シ、凡ソ大小量ヲ並ベ用フルコトハ、後魏ニテ古ヨリ無キ大量ヲ用ヒシガ、後ニ其古ニアラザルニヨリテ改メテ古ニ反シ、又玉尺鐵尺ナドニヨリテ量ヲ作リタレドモ、民ノ大量ヲ用ヒ慣レテ、古量ヲバ便トセザリシ故ニ、官ニテハ小量ヲ用ヒ、民間ニハ大量ヲ用ヒシナレバ、量ニ大小アルハ六朝ノ時ヨリ起リシナリ、然ラバ周漢ノ時大量アルベキ理ナシ」

[隋量] 隋ニハ後周ノ俗量ニヨリテ三倍ノ量ヲ用ヒタリ、【左傳正義ニ「周隋斗稱、於二古三一而爲レ一、」ト云ヒ、隋志ニハ「開皇以二古斗三升一爲二一升一」ト云ヒ、通典ニモ「隋制前代三升、當二今一升一」ト云ヘリ】按ズルニ隋ノ初、尺度ハ後周ニ受テ玉尺ヲ用ヒ、陳ヲ平ラゲテ後玉尺ヲ廢シテ、鐵尺ヲ以テ律ヲ調ヘ百司ハ後周市尺ヲ用ヒタレバ、【上卷ニ詳ニス】量モ隋ノ初ニハ玉斗ヲ用ヒ、陳ヲ平ラゲシ後、古ニ三倍セシ量ヲ

用ヒシカトモ思ヘドモ、サハ無クテ、後周ノ市中ニテ用ヒシ三倍ノ量ヲ隋初ヨリ民間ニ承用ヒタルヲ、即官量ニナシタルナラン【大業ノ時ノ贖銅ノ斤兩ノ數ハ、開皇元年ニ定メシ贖法ノ三倍ナレドモ、大業ノ斗稱ハ開皇ノ三ノ一ナレバ、其實ハ同ジト隋書刑法志ニ云ヘリ、（全文下卷ニ引リ）是ニヨレバ、開皇元年既ニ三倍ノ量ヲ用ヒテ開皇八年陳ヲ平ゲシ後ニ、始テ此量ヲ用ヒタルニハアラズ、然レバ隋ニテハ初ヨリ玉斗ヲバ用ヒザリシナリ】

[隋大業量] 煬帝ノ時ハ三倍ノ量ヲ廢シテ、古量ヲ用ヒタリ、【隋書本紀ニ「大業三年度量權衡並依二古式一」ト云ヒ、律歷志ニモ「大業初依二復古斗一」ト云ヘリ】コノ時梁ノ表尺ヲ用ヒタレバ量モソレニ依リテ作ルベキ理ナルニ、梁尺ニハ依ラズシテ、開皇三分一ノ量ヲ用ヒタリ、即建德ノ量ト同ジ、【隋書刑法志ニ「煬帝即位時、升稱皆小二舊二倍一」ト云ヘリ、詳ニ下卷ニ引リ】然レドモコノ時度ハ梁表尺ヲ用フベキニ、民間ニテ或ハ開皇官尺ヲ用ヒタリト云ヘバ、量モ私ニハ開皇ノ量ヲ用ヒシナルベシ

[唐大小量] 唐ニテハ隋ノ大小二量ヲ令ニ著シタレドモ、湯藥ノ外ハ皆大量ヲ用ヒシナリ、【六典等ニ出ヅ、隋ノ開皇ノ制ニ依リシナリ、開皇ニハ古ノ三斗ヲ一斗トセシニ、（上ニ見ユ）唐ノ房玄齡ガ管子ノ注ニモ古ノ一石ハ唐ノ三斗三升三合ニ準フト云ヒシニテ、唐大量ト開皇量ト同ジカリシヲ證スベシ、大業ノ制ニヨラザリシハ民ノ便トセザリシ故ナリ、唐量ノコトハ量攷ニ詳ニス】

[宋量] 宋ノ量ハ、皇祐新樂圖記ニ、天聖令ノ文ヲ引テ、「諸量以三秬黍中者容二千二百黍一爲ㇾ龠、合ㇾ龠爲ㇾ

合、十合爲レ升、十升爲レ斗、【原注】三斗爲二大斗一】十斗爲レ斛」ト云ヒ、「合、龠爲レ合、今令文誤作二十龠爲レ合」ト云ヘリ、皆唐令ノ文ト全ク同ジク、「建隆元年八月丙戌、有司新量衡ヲ造リテ天下ニ頒ント請ヒシニ、「精考二古制一、按二前代舊式一作レ之」ト詔シ、【玉海ニ見ユ】景祐四年范鎭ガ上書ニモ、「今斛方尺、深一尺六寸二分」ト云ヒタレバ、【宋史律歷志ニ出ヅ、按ズルニ、方一尺、深一尺六寸二分ハ、卽其積一千六百二十寸ニテ、小量ノ斛ナリ、宋ニテハ大量ヲ用ヒタレドモ、大量モ本小量ヲ三倍シテ起シタルモノナレバ、如レ此ハ云ヒシナリ】宋ノ量ハ唐ノ量ニ依リシナリ、又唐ノ常用量ハ古ノ三倍ナルニ宋人モ古ノ三升ハ今ノ一升ト云ヒ、【傷寒總病論、芍藥・甘草湯注、及上蘇端明論・傷寒論書・又林億ガ千金方凡例・[illegible]雜志ニ引キタル王仲弓ガ傷寒證治論注・徽宗ノ聖濟總錄等皆同ジ】又唐宋ノ食糧同ク二升ナルニテ【量攷ニ詳ス】唐宋ノ量ノ同ジカリシヲ證スベシ、サレドモ皇祐ノ時、阮逸・胡瑗等ガ定メシ尺ニテ、【曲尺八寸〇二釐九毫一絲四忽七二】一千六百二十寸ノ量ヲ作リシニ【曲尺八寸〇二釐九毫一絲四忽七二ヲ再自乘シテ曲尺五百一十七寸六百一十六分六百七十六釐五百八十四毫七百〇二絲五百一十六忽弱、コレヲ斛法一千六百二十寸ニ乘ジテ、曲尺斛積八百三十八寸五百三十九分〇一十六釐〇六十七毫二百一十七絲三百二十三忽餘ヲ得、今斛法ニテ除スレバ其一斛ハ今ノ一斗二升九合九勺有奇ナリ】其二升九合一龠ハ、大府寺量ノ一升ニテ、其二斗九升五合ハ大府寺量ノ一斗ナリト云ヘリ、【皇祐新樂圖記ニ出ヅ、大府寺升斗ハ卽宋ノ通用量ナリ、皇祐量ハ樂律ヲ定メントテ造リシ量ニテ、通用ノ量ニハアラズ、皇祐量大府寺量比校ノ全文及ビ圖卷末ニ載ス】今阮逸・胡瑗ガ言ニ

ヨリテ大府寺量ヲ計レバ

斗　今三升八合三勺二撮强

升　今三合八勺三撮强

コレニ依レバ宋量ハ唐量ヨリハ少シク小サカリシナリ

〔宋政和量〕政和二年ニハ大晟樂尺ニヨリテ、量權衡ヲモ作リ、天下ニ頒行ヒタリ【玉海ニ、「政和二年八月、詔量權衡以二大晟樂尺一爲レ度ニ」ト云ヘリ、コノ事文獻通考ニモ出ヅ、上卷ニ引リ】大晟樂尺ヲ以テ一千六百二十寸ノ小量ヲ作リシナラン、又コレヲ三倍シタル大量ヲ作リシニモアルベシ、然ルニ其尺蔡元定ガ計リシ四說、又王應麟ガ說皆同ジカラズ【上卷ニ詳ニス】其尤短キヨリ此量ヲ起セバ【鄧保信ガ尺ニ比挍セシ者尤短クシテ曲尺ノ九寸〇一氂六豪九絲五忽ナリ、是ヲ再自乘シテ曲尺七百三十三寸一百二十六分六百一十二氂〇三十七豪二百七十七絲三百七十五忽ヲ得テ、一千六百二十寸ニ乘ズレバ、曲尺斛積一千一百八十七寸六百六十五分一百一十一氂五百〇〇豪三百八十九絲三百四十七忽餘】

斛　小量ナラバ、今一斗八升三合九勺九撮强

大量ナラバ、今五斗五升一合九勺七撮强

其最長キヨリ起セバ【大府尺ニ比挍セシモノ最長クシテ、曲尺ノ九寸八分〇六豪五絲九忽ナリ、再自乘シテ曲尺九百四十三寸〇九十一分九百八十七氂八百七十二豪三百三十一絲一百七十九忽ヲ得、一千六百二十寸

ニ乘ズレバ、曲尺斛積一千五百二十七寸八百〇九分〇二十〇釐三百五十三毫一百七十六絲五百一十忽弱】

斛　小量ナラバ、今二斗三升六合六勺八撮餘

大量ナラバ、今七斗一升〇〇六撮弱

此事徵スル所無ケレバ、今審ニ知リ難シ

南宋量　南宋ニテハ大晟樂尺ヲ廢シタレバ【此事上卷ニ詳ニス】最モ舊ニ復セシナリ、【朱熹ハ南宋ノ人ナルニ、ソノ晦庵語錄ニ「今之一升卽古之三升」ト云ヘリ、北宋ノ人ノ云ヒシト同ジケレバ舊ニ復セシコト疑無シ】然レドモ南宋ノ末ニハ稍大ニナリテ、斛積大府寺尺ノ二千七百寸ナリ【南宋ノ楊輝ガ續古摘奇算法ニ「輝伏覩京城見行用官斛、號杭州百合、浙郡一體行用、未較積尺積寸者、蓋斛勢上闊、下狹、準板凸突、又有堤梁難於取用、況楞梭斛循習爲之、今將官斛與市尺較證、少轉日用萬一、每立方三寸（原注謂斛維各三寸、高三寸、積二十七寸）受粟一勝、每方五寸深五寸四分（原注積一百三十五寸）受粟五勝、每方一尺、深二寸七分（原注積二百七十寸）受粟一斛、每方一尺、深一尺三寸五分受粟五斛、每方一尺深二尺七寸受粟一石」、ト云ヒ、マタ尺樣五寸ノ圖ヲ載セタリ、（圖上卷ニ出セリ）コレヲ度ルニ曲尺ノ五寸一分强ナレバ、ココニ市尺ト云フモノハ卽大府寺尺ナルベシ、此書德祐元年ノ自序アリ】大府寺尺【曲尺一尺〇二分一釐五毫五絲】ヲ再自乘シテ、曲尺一千〇六十五寸九百五十九分二百九十七釐三百三十五毫八百〇八絲ヲ得、斛法二千七百寸ニ乘ズレバ【此書ニ斛法ヲ二尺七寸トシタレドモ、南宋ノ末ニ量ヲ然定メタル

ニハアラズ、本小尺ノ千六百二十寸ヲ三倍シテ、四千八百六十寸ニ作リシ量ノ、南宋ニ至リテ訛リテ大ニナリシモノヲ、楊輝ガ大府尺ニテ度リテ、二千七百寸ト定メシナリ】曲尺斛積二千八百七十八寸〇九十〇分一百〇二釐八百〇六豪六百八十一絲六百忽ナリ、今斛法ニテ除スレバ

斛　今四斗四升五合八勺七撮弱

斗　今四升四合五勺八撮餘

升　今四合四勺六撮弱

合　今四勺四撮餘

大府寺量ノ漸訛リテ大ニナリシ物ナルベシ、【大府寺量ヨリ計レバ、コノ一斗ハ一斗一升四合八勺三撮弱、唐大量ヨリ計レバ一斗一升二合一勺二撮餘ナリ】

[元量] 元ノ量ハ二千五百寸ヲ斛法トス、コノ法東魏北齊ヨリ受タルモノナラン、【元ノ朱世傑ガ算學啓蒙ニ、「斛法二尺五寸、此依唐時斛法」ト云ヘリ、按ズルニ唐ハ一千六百二十寸ノ法ヲ用ヒタルニ、朱世傑ガ二尺五寸ヲ唐ノ斛法ニ依ルト云ヒシハ疑ハシ、然ルニ唐ノ王孝通ガ緝古算經ニモ、「斛法二尺五寸トアリ、思フニ二尺五寸ハ唐ノ斛法ニハアラデ、魏齊ニテ用ヒシ斛法ナルベシ、此事量攷ニ詳ニス】然レドモ北齊ニテハ古尺ノ二尺五寸ナリシヲ、【此事上文ニ云ヘリ】元ニテ用ヒシ斛ハ、北齊ノ尺ニテ二尺五寸ニ定メシモノナルベシ、【是ハ北齊ニテ後ニ改メタルカ、又ハ後世ニ改メシカ詳ナラズ、按ズルニ元ニ官尺・營造尺ノ

兩尺アリ、今試ニ官尺（曲尺一尺五寸有奇）ヲ再自乘シテ曲尺三千三百七十五寸ヲ得、斛法二尺五寸ニ乘ズレバ曲尺斛積八千四百三十七寸五百分、今斛法ニテ除スレバ今ノ一石三斗〇七合一勺二撮餘ナリ、又營造尺（曲尺一尺〇八分五釐）ヲ再自乘シテ曲尺一千二百七十七寸二百八十九分一百二十五釐ヲ得、二尺五寸ニ乘ズレバ曲尺斛積三千一百九十三寸二百二十二分八百一十二釐五百毫、今斛法ニテ除スレバ斛ハ今ノ四斗九升四合六勺九撮弱ナリ、共ニ元斛ヲ承ケタル明斛ト大ニ異ナレバ、如ㇾ此ハ思ヒヨリシナリ】北齊尺【曲尺一尺一寸四分〇六毫〇八忽】ヲ再自乘シテ曲尺一千四百八十三寸九百一十五分七百三十四釐八百七十五毫六百三十五絲七百一十二忽ヲ得テ、二尺五寸ニ乘ズレバ、曲尺斛積三千七百〇九寸七百八十九分三百三十七釐一百八十九毫〇八十九絲二百八十忽ナリ、今斛法ニテ除スレバ

斛　今五斗七升四合七勺一撮餘

斗　今五升七合四勺七撮強

升　今五合七勺五撮弱

合　今五勺七撮餘

然ルニ算學啓蒙ニ、「以㆓斛法二尺五寸㆒約ㇾ之、此依㆓唐斛法㆒」ト云ヒタルニ次テ、「以㆓今斛法㆒考ㇾ之有ㇾ異、緣㆓各朝代尺法不㆒ㇾ同、不ㇾ可ㇾ爲㆓定法㆒也」トアリ、元ノ斛ヲ二尺五寸ト云ヒ傳ヘタルニヨリテ、元ノ尺ニテ度リシニ、二尺五寸ニ非ルヲ云ヘルナリ、【元量ハ元尺ノ二尺五寸ニ非ルコトハ上ニ云ヘリ】朱世傑各朝

ノ尺ノ異ナリシニヨリ、斛ノ同ジカラザルコトハ知リタレドモ、元ニテ用フル斛法ノ二尺五寸ハ何ノ尺ナルベキヲ尋ネザリシハ精シカラザルナリ、又元史食貨志ニ「宋一石當今七斗」ト云ヘリ、宋ノ一石ハ今ノ三斗八升三合二勺二撮有奇、是ヲ七ニテ除シテ斗ヲ得、又十倍スレバ斛ヲ得、今ノ五斗四升七合四勺五撮餘ナリ、然レドモ合勺ノ奇零ヲ云ハザレバ大凡ニ計リシト聞ユル上ニ、元量ヲ承タル明量五斗八升有餘ヲ一斛トスレバ、猶前說ニ從フベシ、【宋ノ一石ヲ前說ノ五升七合四勺七撮有奇ノ量ニテ量レバ、六斗六升六合八勺有奇ナリ、是ヲ大凡ニ七斗トハ云ヘルナラン】

[明量] 明ノ量ハ算法統宗ニ、斛法二尺五寸ト云ヘリ、元ノ斛法ト同ジキヲ見レバ、元量ニヨリシナリ、然ルニ成化ノ鐵斛ハ口內方九寸、底方一尺五寸、深一尺、積一千四百七十寸、【清ノ斛モ其形是ト同ジ、陔餘叢考ニ、「今之斛式、上窄下廣、乃宋賈似道之遺、明人農田餘話云、今之官斛、起於賈似道、元至元間、中丞崔彧上言、其式口狹底廣、出入之間、盈虧不甚相遠、遂頒行之、[原注]亦見元史崔彧傳」トアリ、然レドモ崔彧傳（元史傳六十）ニハ此事無シ】コレ斛ノ積ニテ、【明ニテ斛ト云フハ五斗ナリ、下ニ詳ニス】石ノ積ハ二千九百四十寸ナリ、【律學新說ニ、大明頒行鐵斛算法、依寶源局量、斛口內方九寸、底內方一尺五寸、深一尺、置口九寸、自來得八十一寸、置底一尺五寸、自乘得二百二十五寸、又以口底相乘、得一百三十五寸、三宗相併、得四百四十一寸、三歸得一百四十七寸、以深一尺乘之、得一千四百七十寸、是爲鐵斛五斗實積、倍之得二千九百四十寸、是兩鐵斛、即十斗實積、」ト云ヘリ、寶源局尺ハ即量地

尺ナリ、鐵斛ノ圖卷末ニ出ス、按ズルニ此鐵斛ノ積ヲ計ル算法ハ、卽九章算術ノ商功ノ條ニ、「今有二方亭一、下方五丈、上方四丈、高五丈、問、積幾何、答曰、一十萬一千六百六十六尺大半尺、術曰、上下方相乘、又各自乘并レ之、以レ高乘レ之三而一」トアル術ナリ】明ノ量地尺【曲尺一尺〇八分五釐】ヲ再自乘シテ、曲尺一千二百七十七寸二百八十九分一百二十五釐ヲ得、鐵斛ノ積二千九百四十寸ニ乘ズレバ、曲尺斛積三千七百五十五寸二百三十〇分〇二十七釐五百毫、今斛法ニテ除スレバ

石　今五斗八升一合七勺五撮餘

斛　今二斗九升〇八勺八撮弱【明淸ニテ斛ト云フハ五斗ニテ、十斗ヲバ石ト云フ、律學新書ニ「古人米ハ嘗以二五斗一爲レ斛、五斗爲レ斛者蓋自二唐宋一始也、」ト云ヒタレドモ、六典・通典・唐書「皆十斗爲レ斛」ト云ヒタレバ、唐ノ斛ハ十斗ナリシコト明ナリ、倭名類聚鈔ニ、唐令私記ヲ引テ、「大倉署函斛函者受二五斗一、形如二此間酒槽一耳」ト云ヘリ、然レバ唐ニモ五斗ヲ受ル量ハ有リツレドモ、五斗ヲ斛トハ云ハザリシナリ、然ルニ陔餘叢考ニ、「按二葦航記談一宋韓彥古爲二戶部尙書一、孝宗問曰、十石米有二多少一、對曰、萬合千升百斗二十斛、然則五斗爲二一斛一宋時已然」ト云ヒ、續古摘奇算法ニ、「每立方△受二粟一勝一、每方△深△受二粟五勝一、每方△深△受二粟一㪷一、每方△深△受二粟五㪷一、每方△深△受二粟一石一」ト云ヒシ「受粟五㪷」ノ下ニ、求二圓斛一術ヲ擧ゲタレバ、五斗ヲ斛トセシハ、宋ノ時ヨリ有リシナルベシ、サレドモ算學啓蒙ノ（大德三年ノ序アリ）倉囤積粟ノ算法ニ斛ト云ヒシハ、皆十

斛ニテ、元ノ丁巨算法（至正十五年ノ作ナリ）ニモ、石・斗・升・合・勺トノミ量リテ斛ノ名無ケレバ、元ニ至リテモ專ラ五斗ヲ斛トスルコトハイマダ無カリシナリ、明ノ陶穀ガ碧里雜存ニ「今官制五斗爲二一斛一蓋取二其輕一而易擧耳、實當二古斛之半一也」、ト云ヒ、正字通ニモ今制五斗曰レ斛、十斗曰レ石」、トアリ、今官制ト云ヒ、今制ト云ヘバ、五斗ヲ斛トシ十斗ヲ石ト定メシハ、明ヨリ始マリシナルベシ、玉海ニ「建隆元年八月丙戌、有司請レ造二新量衡一以頒二天下一、詔精考二古制一、按二前代舊式一作レ之、禁二私造者一」トアレバ、宋初ノ量法唐制ニ依リタルコト知ラレタリ、故ニ天聖令ニモ、「十斗爲レ斛」ト云ヘリ、其後乾德・紹聖・政和等ノ時モ、量衡ノ制アリシカドモ、五斗ヲ斛トスルコトハ見エズ、「紹興七年三月十九日、製二五斗斛一頒二諸路一、二十五年四月四日、製二一石斛一頒レ之、以革二倉庚之弊一」ト玉海ニ載セタレバ、紹興七年ニ始テ五斗ヲ斛トシタリシ如ク聞ユレドモ、二十五年ニ一石斛トモアレバ、ココニ云フ斛ハ量ト云フニ同ジクテ、五斗ヲ斛ト名ヅケタルニハアラジ、又算法統宗ニ、「斛古一石、今五斗或二斗五升」トアレバ、明ニハ二斗五升ヲ斛トスル俗量モ有リシト見エタリ」

斗　今五升八合一勺七撮餘

升　今五合八勺二撮弱

合　今五勺八撮强

朱載堉コノ鐵斛ノ二千九百四十寸ナルニ依テ、二千五百寸ト云フ、斛法ハ算家ノ杜撰ナリト云ヒタレドモ、

【律學新說ニ、「二千九百四十寸、是爲鐵斛、即十斗實積、然則今之斛法非二二千五百一也、民間俗傳算術多以二二千五百一爲二斛法一者、疑術士杜撰也」トアリ】思フニ二千五百ハ東魏・北齊ノ斛法ニテ唐宋ノ時モ北邊ニ遺リ、元ニ至リテ南方マデモコレヲ用ヒ、古ヨリ唐宋マデ用ヒ來レル一千六百二十寸ノ法ハ廢シタリシニ、其量明ニ入リテ鐵斛ヲバ作リシナラン、鐵斛ヲ作リシ時、元ヨリ受タル量ナレバ、別ニ其積ヲ料スコトモナカリシカバ、明ノ算家モ元人ノ言ニ從ヒテ二尺五寸ト傳ヘシモノナルベシ、【鐵斛ノ石積二千九百四十寸ハ、成化ノ鐵斛ヲ朱載堉ガ量地尺ニテ計リシニテ、初鐵斛ヲ作リシ時積ヲ改メテ二千九百四十寸ト定メシニハアラズ、明ニテ此量ヲ用ヒタルニ、算術家明尺ノ二千五百寸ノ斛法ヲ用ヒシハ誤ナレドモ、二千五百寸ト云フコトハ元ヨリ傳ヘタルヲ守リシニテ、明ノ算術家ノ杜撰ニハアラズ、然ルヲ朱載堉ガ鐵斛ヲ度リ算セシニ、石ハ明尺ノ二千九百四十寸ナリシ故、二千五百寸ト云フハ算家ニ妄ニ云出セルモノト思ヒシハ、二千五百寸ノ斛法ヲ魏齊ヨリ元明ニ至ルマデ受ケ來リシヲモ、二千五百寸ハ元匠ガ尺ニテ計リタルヲモ知ラザリシナリ、數理精蘊ニモ、石法二尺五寸ト擧ゲテ、今現行斛積爲二二千五百八十寸一、石積三千一百六十寸、舊算書所レ載數各不レ同、古今量法亦不レ一、須三先求二其斗斛之積數一、然後用二其積數一、比例之方得密、合今設例從二舊數一」ト云ヘリ、然ラバ清ニテモ、算書ニハ二尺五寸ヲ石法トスルコト明ノ算家ト同ジ】又朱氏談綺ニハ、唐山ノ升不同ナリ、餘姚ノ升ハ日本ノ四合ヲ一升トス、是ヲ鄕升ト云フ、官升ハ六合ヲ一升トス、【按ズルニ鄕升ト云フモノハ宋量ノ訛リシモノニテ、官升ト云フモノハ鐵斛ナルベシ、何レモ

奇零ヲ云ハザレバ、大凡ニ計リシナラン】然レドモ處處不レ同、河南ノ升ハ日本ノ八合五勺ヲ一升トス、大方通用ハ日本ノ五合五勺ホドヲ一升トスル也ト云ヘリ、明ニ樣樣ノ俗量アリシト見エタリ

淸康熙量　淸ノ康熙ノ量ハ方八寸・深五寸・積三百二十寸ナリ、【淸ノ余金ガ熙朝新語ニ、「康熙四十三年、造二新樣斗一、具方八寸、深五寸、積數見方得三十二萬分ニ」ト云ヘリ、淸ノ今尺（曲尺一尺〇六分）ニテ度リシナリ】コノ斗ヲ曲尺ニテ度レバ方八寸四分八釐、深サ五寸三分ニテ、冪七十一寸九十一分〇四釐、積三千八百一十一寸二百五十一分二百釐【淸ノ今尺ヲ再自乘シテ、積三百二十寸ニ乘ズルモ此數ヲ得】今斛法ニテ除スレバ

石　今五斗九升〇四勺三撮餘
斛　今二斗九升五合二勺一撮餘
斗　今五升九合〇四撮餘
升　今五合九勺有奇
合　今五勺九撮強

又數理精蘊ニハ石積三千一百六十寸ト云ヒ、【數理精蘊聖祖ノ時ニ作ル】淸會典ニモ「升方四寸・深一寸九分七釐五豪・積三十一寸六百分」ト云ヘバ、【全文及ビ圖卷末ニ載ス、此書乾隆二十三年御製ノ序アリ】其後制ヲ改メタルナルベシ、コノ升ヲ曲尺ニテ度レバ方四寸二分四釐、深二寸〇九釐三豪五絲ニテ、冪一十七寸九

十七分七十六菴、積三十七寸六百三十六分一百〇五菴六百豪、今斛法ニテ除スレバ

石　五斗八升三合〇五撮餘

斛　今二斗九升一合五勺二撮餘

斗　今五升八合三勺有奇

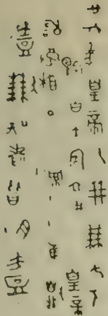
升　今五合八勺三撮有奇

合　今五勺八撮餘

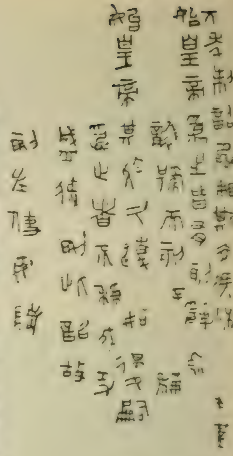
余嘗テ底板ニ「福州布政司較準官升」ト刻セシ升ヲ見タリ、方曲尺四寸三分、深二寸〇三菴【積三十七寸五百三十四分七百菴】今ノ五合八勺一撮餘ヲ容ル、【明ノ鐵斛ト略同ジ、又方曲尺四寸三分、深二寸〇三菴五豪五絲トスレバ、積三千七寸六百三十六分三百九十五菴ニテ、今ノ五合八勺三撮有奇ニテ、略數理精蘊・清會典ニ云フ所ト合ヘリ、豪絲ニ至リテハ日力ニ及バザレバ、是即官升ナルコト疑無シ】又蘇州ノ陳元順ガ齎來リシ升ハ、口方曲尺四寸六分、底方二寸二分、深三寸ト云ヘリ、【度量衡說統ニ載タリ、積三十六寸一百二十分】今ノ五合五勺九撮餘ヲ容ル、大坂ノ人木村世肅ガ藏スル清升ハ口方曲尺四寸八分三菴、底方二寸三分八菴、深二寸九分八菴、【積四十〇寸二百一十八分七百七十五菴三百三十三豪三百三十三絲三百三十三忽不盡】今ノ六合二勺三撮有奇ヲ容ル、成形圖說ニ載セタル清升ハ、口方曲尺五寸一分、底方二寸六分、深三寸二分、【積四十九寸〇九十八分六百六十六菴六百六十六豪六百六十六絲六百六十六忽不盡】今ノ七合六

勻有奇ヲ容ル、陳元順以下ノ升ハ皆諸國ノ私量ニテ、官量ニハアラザルベシ、【陔餘叢考ニ、「至市斗市稱則又有隨レ地不レ同者ハ、如三今川斛大二於湖廣ハ、湖廣斛又大二於江南稱ハ、則有二行稱官稱之不レ同、庫平市平之各別、又非三禁令所二能畫一ハ、而市儈牙行自能參二校錙黍ハ、不爽則雖レ不二畫一一而仍通行也」ト云ヘリ】

秦量銘　　積古齋鐘鼎欵識



廿六年皇帝□幷兼天下
□□黔首大安立□□皇帝□
詔丞相□□灋□量則□
壹歉疑者明壹□

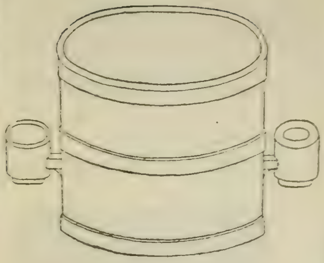


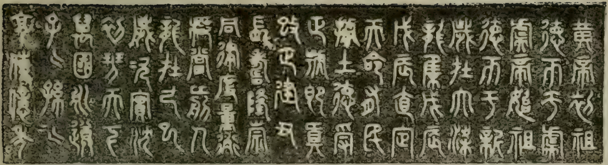
元年制詔丞相斯去疾灋□□盡
始皇帝爲之皆有刻辭焉今
襲號而刻□□□稱
始皇帝其於久遠□如時嗣
爲之者不稱成功
盛德刻此詔故
刻左使毋疑

右秦量銘一百字摩滅者十六字器在杭州據陳秋堂搨本摹入

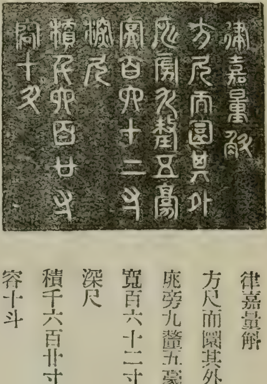
漢嘉量

西淸古鑑



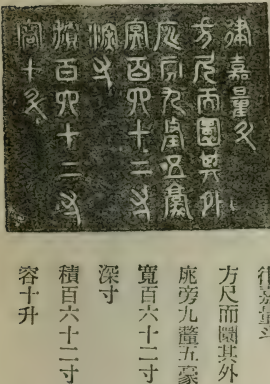


黃帝初祖
德帀于虞
虞帝始祖
德帀于新
歲在大梁
龍集戊辰
戊辰直定
天命有民
據土德受
正號即眞
改正建丑
長壽隆崇
同律度量衡
稽當前人
龍在己巳
歲次實沈
初班天下
萬國永遵
子子孫孫
享傳億年

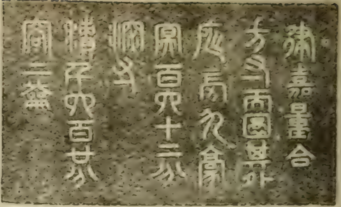


律嘉量斛
方尺而圜其外
庣旁九釐五豪
寬百六十二寸
深尺
積千六百廿寸
容十斗

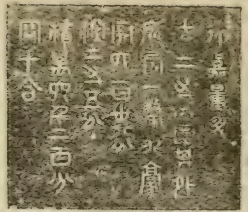
望之按當釋冥百六十二寸冥讀爲冂後作冪此釋爲寬非是隋志及九章筭術方田注引並作冪百六十二寸



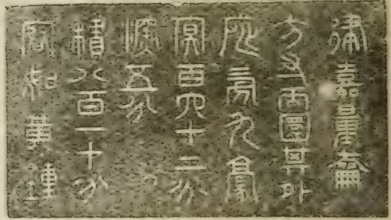
律嘉量斗
方尺而圜其外
庣旁九釐五豪
寬百六十二寸
深寸
積百六十二寸
容十升



律嘉量升
方二寸而圜其外
庣旁一釐九豪
冥六百卌八分
深二寸五分
積萬六千二百分
容十合



律嘉量合
方寸而圜其外
庣旁九豪
冥百六十二分
深寸
積千六百卌分
容二龠



律嘉量龠
方寸而圜其外
庣旁九豪
冥百六十二分
深五分
積八百一十分
容如黃鍾

右斛斗升合龠凡五統曰嘉量爲一器合今尺通高八寸二分通闊一尺六寸五分斛深七寸二分徑一尺四分斗深七分有二徑與斛同升深一寸八分有一徑二寸一分合七分有二徑一寸一分龠深三分有六徑一寸蓋莽尺每一尺當今七寸二分

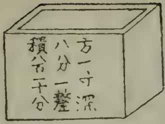
通重三百六十三兩

宋皇祐四量（是ハ皇祐新定尺ニテ作リシ小量ニテ宋朝常用ノ量ニ非ズ）　皇祐新樂圖記

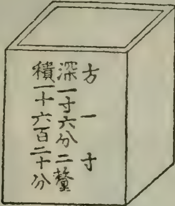
臣逸臣瑗謹詳周禮漢志及歷代至聖朝天聖令文量法制成皇祐龠合升斗以今太府寺見行升斗校之三升九合一龠弱得大府寺升一升以二斗九升五合得大府寺斗一斗

謹圖四量形制於左

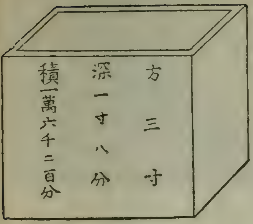
龠



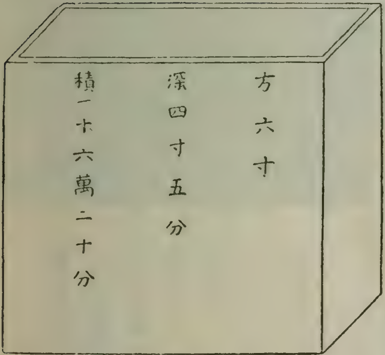
合



升

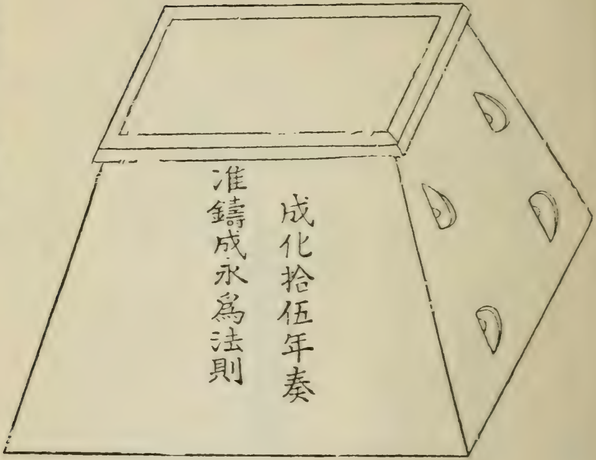


斗



臣逸臣瑗謹按隋志開皇中以古斗三斗爲一斗今以黍斗校之尚少五合未合三斗者蓋自隋開皇至聖朝五百餘年矣其間制造得無差舛哉

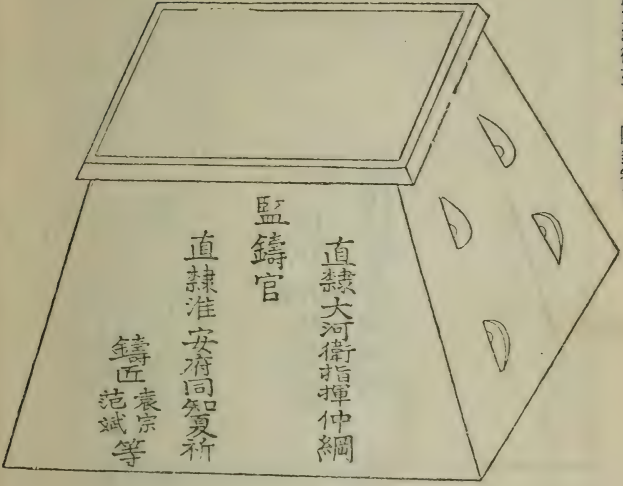
明鐵斛前面小樣



律學新說

依寶源局量地銅尺斛口外方一尺內方九寸斛底外方一尺六寸內方一尺五寸深一尺厚三分平秤重一百斤依古横黍

明鐵斛後面小樣



度尺斛口外方一尺二寸八分內方一尺一寸五分有奇底外方二尺〇五分內方一尺九寸二分深一尺二寸八分厚四分

淸　量

以寸法定容積之率

升、方積三十一寸六百

分面底方四寸、深一

寸九分七釐五豪

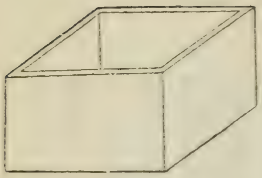


淸會典

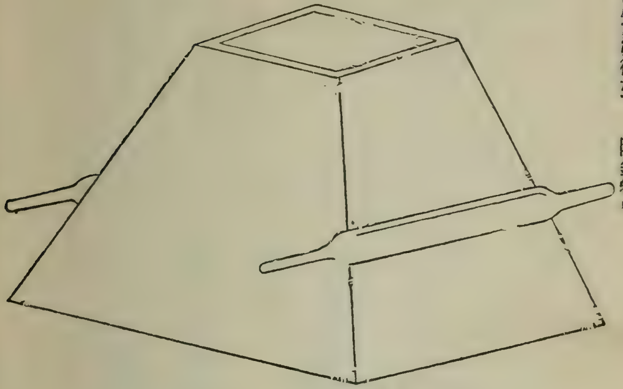
斗、方積三百一十六寸

面底方八寸、深四寸

九分三釐七豪五絲



斛、方積一千五百八十寸、口方六寸六分底方一尺六寸深一尺一寸七分



兩斛爲石、容積三千一百六十寸、各得容量之準、斛之制、由部定式、工部鑄造以鐵頒倉場侍郎、漕運總督、直省布政使司、布政使司、如式造木斛、通頒所屬、以出納倉糧

或人問、漢器ニ容受ノ欵識アルモノ皆同ジカラズシテ、量々起スコト能ハズ、諸家ノ定メシ漢量モ皆據ルベカラズト云フ者如何、答、歐陽脩ガ集古錄ニ、「始元四年ノ谷口銅甬ヲ載ス、【珊瑚鉤詩話ニ是ヲ銅斛ト云ヒシハ誤ナルベシ】銘ニ「容㆓十斗㆒」トアリ、「劉原父以㆓今量㆒校㆑之容㆓三斗㆒」ト云ヘリ

宋ノ量ハ今ノ三升八合三勺二撮餘ヲ一斗トス、三斗ハ今ノ一斗一升四合九勺六撮餘ナリ、此三斗ヲ受ル角ニ「容㆓十斗㆒」トアルニヨリテコレヲ十分スレバ

斗　今一升一合四勺九撮餘

王黼ガ宣和博古圖ニ【晁公武ガ讀書志ニ、王楚撰トアルハ誤ナリ、蔡絛ガ鐵圍山叢談ニ、大觀ノ初、李公麟ガ考古圖ニ倣ヒテ、宣和殿博古圖ヲ作ルト云ヘリ、陳振孫ガ書錄解題ニ、黃伯思ガ博古圖說ヲ採リテ刪改シタリト云ヒシハ非ナリ、又此書ヲ洪邁ガ容齋隨筆ニモ、錢曾ガ讀書敏求記ニモ、宣和年間ニ成リシト云ヒタレドモ、殿ノ名ニヨリテ宣和ト名ヅケタルニテ、年號ヲ冠ラセタルニハアラズ、年號ノ宣和モ後ニ此殿ノ名ニヨリテツケタルナリ、此コトモ鐵圍山叢談ニ見ユ、蔡絛ハ蔡京ガ子ニテ、博古圖ヲ作リシヲバ目ノアタリ見タリシ人ナレバ、大觀ノ時ニ作リシト云フモ宣和殿ニヨリタルコトモ誤ニハアラジト、四庫全書提要ニ云ヘリ、此事世人多ク誤ル故ニ驚カシ置ナリ】載セタル元康元年ノ梁山鋗ノ銘ニ「二斗」トアルヲ、「容㆓六升㆒」ト云ヒ、始建國元年ノ「注水匜」ハ銘ニ「容㆓一升㆒」トアル「容㆓三合㆒」トアリ、皆谷口甬ト同ジ量法ナリ

綏和元年ノ壺ノ銘ニ、「容二一斗二」トアルヲ「容二六升二合二」ト云ヘリ

宋ノ六升二合八今ノ二升三合七勺六撮弱ナリ、コレヲ二分スレバ

斗　今一升一合八勺八撮弱

建武二十年ノ大官鍾ノ銘ニ「容二一斛二」トアルヲ「容二一斗九升五合二」ト云ヘリ

宋ノ二斗九升五合ハ今ノ一斗一升三合〇五撮弱、コレヲ十分スレバ

斗　今一升一合三勺有奇

呂大臨ガ考古圖ニ載セタル好時共廚鼎ノ銘ニ、「容二九升二」トアルヲ【以下四器ノ款識皆年號ヲ載セズ】「容二三升一合二」ト云ヘリ

宋ノ三升一合八今ノ一升一合八勺八撮弱、コレヲ九分シ、又十倂スレバ

斗　今一升三合二勺弱

軹家釜ノ銘ニ、「容二四斗二」トアルヲ、「容二斗有二一升九合二」ト云ヘリ

宋ノ一斗二升九合ハ、今ノ四升九合四勺三撮餘、コレヲ四分スレバ

斗　今一升二合三勺六撮弱

軹家釜ノ銘ニ、「容二三斗三升二」トアルヲ「容レ斗」ト云ヘリ

宋ノ斗ハ今ノ三升八合三勺二撮强、コレヲ三三ニテ除スレバ

斗　今ノ一升一合六勺一撮餘

積古齋鐘鼎彝器款識ニ載セタル陶陵鼎ノ銘ニ、「容二一斗一」トアルヲ「以二今官倉斗一較レ之得二一升八合二」ト云ヘリ、【攈古録金文三】

清ノ量ハ今ノ五合八勺三撮有奇ヲ一升トス、其一升八合ハ

斗　今一升〇四勺九撮餘

以上ノ諸器、其容ル所皆同ジカラザレバ、證トナシ難シ【貝家釜・貝家甑ハ一時ニ造リシモノナルニ、其容量同ジカラザルニテ漢器ノ證トナシ難キヲ覺ルベシ】

諸家ノ說ノ據トナシ難キハ

沈括ガ夢溪筆談ニ二說ヲ載ス、一ハ今ノ一升一合四勺三撮餘ヲ漢ノ一斗トス

其說ニ「予考二樂律一及受レ詔改二鑄渾儀一、求二秦漢以前度量一、計六斗、當今之一斗七升九合」ト云ヘリ【宋ノ一斗七升九合ハ今ノ六升八合六勺弱、コレヲ六分スレバ、漢ノ一斗ハ今ノ一升一合四勺三撮餘ナリ】

一ハ今ノ一升〇三勺四撮餘

其說ニ「漢之一斛今之二斗七升」ト云ヘリ、【宋ノ二斗七升ハ今ノ一斗〇三合四勺七撮弱、コレヲ十分スレバ、漢ノ一斗ハ今ノ一升〇三勺四撮餘ナリ】

王懋ガ野客叢書ニハ二說ヲ載ス、其一ハ今ノ七合六勺六撮餘

其說ニ「漢二斗七升當二今五升四合一」ト云ヘリ、【宋ノ五升四合ハ今ノ二升〇六勺九撮餘、コレヲ二七ニテ除スレバ、漢ノ一斗ハ今ノ七合六勺六撮餘ナリ】陳言ガ三因方ニ「以二紹興一升一得二漢五升一」ト云ヒシモ是ト同ジ、【按ズルニ王懋ガ下ノ二說及ビ諸家ノ考ル所ノ漢斗、皆今ノ一升以上ナレバ此比校ハ誤ナリ】

一ハ今ノ一升〇三勺四撮餘

其說ニ、「八升當二二升一合六勺一」トモ【宋ノ二升一合六勺ハ今ノ八合二勺七撮餘、コレヲ八歸スレバ一斗ハ今ノ一升〇三勺四撮餘ナリ】「五升當二一升三合有半一」トモ云ヘリ、【宋ノ一升三合有半ハ、今ノ五合一勺七撮餘、是ヲ五歸シタルモ、今ノ一升〇三勺四撮餘ナリ】

一ハ今ノ一升〇二勺二撮弱

其說ニ「六升當二今一升六合一」ト云ヘリ【宋ノ一升六合ハ今ノ六合一勺三撮強、コレヲ六歸スレバ今ノ一升〇二勺二撮弱ナリ】

清ノ閻若璩ガ、孟子生卒年月考ニハ、今ノ一升一合七勺九撮餘

其說ニ「古量甚小、漢二斗七升、當二今五升四合一、然則古之五纔當二今之一一也」ト云ヘリ、【康熙ノ五升四合ハ今ノ三升一合八勺四撮餘、コレヲ二七ニテ除スレバ、一斗ハ今ノ一升一合七勺九撮餘ナリ、按ズルニ康熙ノ量ハ四十三年ニ造リシコト上ニ引リ、潛研堂文集ニ閻若璩ガ傳ヲ載セテ、康熙四十三年ニ卒ストアレバ、閻氏ノ按セシハ康熙ノ量ニハアラズ、然レドモ淸初ノ量、徵スル所無ケレバ、今姑ク康熙ノ量ニヨリテ

計リシナリ】周官祿田考ニ、此說ヲ載セ、又「有容六升者、當今一升二合、是古之十當今之二也」
［原注］容六升者形親見而較之】トアルモ同ジ量法ナリ
以上諸說、皆據ルトコロヲ云ハザレバ、其說明ナラズ
皇國ニテ中村氏ノ三器攷略【一升〇七勺九撮二弱】荻生氏ノ量考【九合三勺一撮二九】正木氏ノ三器通考
【一升一合八勺二撮弱】山田氏ノ權量撥亂【一升四合四勺六撮七】田村氏ノ度量小識【一升二合】最上氏ノ
度量衡說統【一升〇五勺弱半】皆周尺ヲ以テ、一百六十二寸ノ斗ヲ起シタルナリ
以上諸家定メタリシ周尺ノ長サ異ナリシカバ、量モ從ヒテ同ジカラズ、然ルニ定メシ周尺イヅレモ誤リ
タレバ【詳ニ上卷ニ辨ゼリ】其量モ皆據ルニ足ラズ
諸葛氏ノ律量全編ニハ六合四勺五撮强ヲ一斗トス【原書六合五勺八撮トアリ、算ノ誤ナリ】
其說ニ定ムル所ノ周尺ヲ以テ黃鍾ノ龠ヲ作リ、ソレニ黍千二百粒ヲ容レテ今ノ京量ニ校スル三十一龠ニシテ
一合ヲ得、故ニ三一ヲ以テ一合ヲ約スレバ、三撮二二五八有奇ヲ得、【原書三撮二圭九トアリ、算ノ誤ナ
リ】是龠ニシテ二龠ノ合ハ六撮四五一六ナリ、【原書誤テ六撮五圭八トアリ】
是モ其定メタリシ周尺誤リタレバ據ルニ足ラズ、【周尺ヲ定メタランニハ其一千六百二十寸ヲ計リテ積ヲ
知ルベキニ、黃鍾管ヲ作リ、ソレヨリ求メシモ迂遠ナリ】
藤本氏ノ三器彙考ニハ、周鬴ヨリ斗ヲ求ムレバ、今ノ七合九勺有奇、秦漢ノ斗ハ今ノ七合九勺四撮餘、東

漢ノ斗八今ノ八合一勺九撮強

其定ムル所ノ周尺ヲ以テ千寸ヲ度リ、是ヲ周ノ鬴トシ【今ノ五升〇五勺七撮餘、鬴ハ六斗四升ナレバ斗八今ノ七合九勺有奇ナリ】又方尺ノ弦ヲ徑トシ、深サ一尺ナル圓量ヲ作リ、劉徽ガ率ニ依リテ一千五百七十寸ヲ得、是ヲ秦漢ノ斛トシ、【斗ハ今ノ七合九勺四撮餘ナリ】秦漢ノ斛ニ庣ヲ加ヘテ、一千六百二十寸トシタルヲ東漢ノ斛トス、【斗ハ今ノ八合一勺九撮強ナリ】

秦漢ノ斛一千五百七十寸ナルコト徵スル所無ク、且周尺モ誤リタレバ、此說モ據トナシ難シ

朱載堉ガ律學新說ニハ今ノ九合五勺有奇ナリ

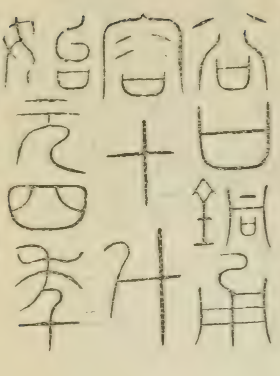
其說ニ考工記ノ嘉量ヲ漢ノ嘉量ノ庣無キ圓量トシ、是ヲ古ノ八斗トス、【考工記】ニ「深尺、內方尺而圜ニ其外ハ、其實一鬴、」トアルヲ、朱載堉ガ考正ニ、「深尺方尺、圜ニ其外ハ當ニ徑一尺四寸一分四氂二毫一絲三忽五微六纖ハ、周四尺四寸四分四氂四毫四絲四微、面冪一百五十七寸一十三分四十八氂四十毫、積實一千五百七十一寸三百四十八分四百氂、容古八斗」トアルニ依リテ算スルニ、(三一四二六九六七七九有奇ノ周法ナリ)朱載堉ガ周尺ハ營造尺ノ六寸四分ナレバ、六四ヲ再自乘シテ營造尺二百六十二寸一百四十四分ヲ得、嘉量ノ積一千五百七十一寸三百四十八分四百氂ニ乘ズレバ、營造尺ノ鬴積四百一十一寸九百一十九分五百五十四氂九百六十九毫六百絲ナリ、營造尺ハ曲尺ノ一尺〇六分ナルニヨリ一〇六ヲ再自乘シテ曲尺一千一百九十一寸〇一十六分ヲ得、營造尺ノ積ニ乘ズレバ、曲尺鬴積四百九十〇寸六百〇二分七百八十〇氂六百八十一毫

六百七十三絲一百一十三忽餘、今斛法ヲ以テ除スレバ、今ノ七升六合有奇、是一鬴ニテ古ノ八斗ナリ、是ヲ八ニテ除スレバ、斗ハ今ノ九合五勺有奇ナリ】

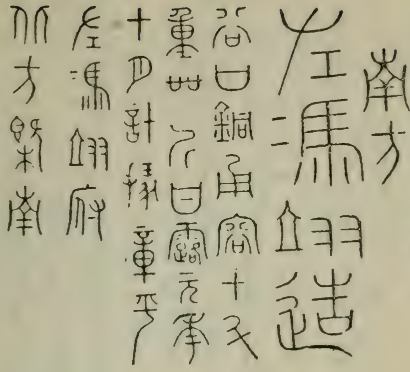
考工記ノ嘉量ヲ圓器トスルコト、明證無ク、【宋ノ沈括ハ圓量トシタレドモ、其非ナルコト上ニ辨ゼリ】又鬴ヲ八斗トスルコトハ齊ノ陳氏ガ民ノ心ヲトラントテノ所爲ナレバ、【左傳昭三年ニ見ユ】齊ノ釜モ六斗四升ニテ、考工記ノ注ニ云ヒシト同ジコトナルハ、杜預ガ注ニモ明ニ云ヘリ、コノ陳氏ガ量ノ外ニ鬴ヲ八斗ト云ヒシコト絶テ無シ、又朱氏度ノ咫・仞・常・尋、皆八ニテ數ヘタレバ、鬴鍾モ八ヲ以テ數フベシ、十ヲ以テ數フルハ、河圖ノ全數八ハ、八卦ノ變數ナリナド云ヒテ、漢儒六斗四升ノ說ヲ非トシタレドモ、皆彼ガ穿鑿虛造ノ說ニシテ、古ニ徵スルコト無ケレバ、總テ據トスルニ足ラズ

薛氏鐘鼎欵識

谷口甬



谷口銅甬
容十升
元始四年



南方

左馮翊造

谷口銅甬容十升

重廿斤甘露元年

十月計掾章平

左馮翊府

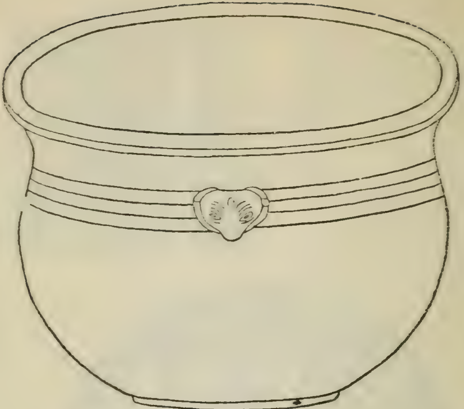
北方賢南

右古器物銘云谷口銅甬舊藏劉原父家一器而再刻銘

集古錄云漢谷口銅甬原父在長安時得之其前銘云谷口銅甬容十其下滅兩字始元四年左馮翊造其後銘云谷口銅甬容十斗重四十斤甘露元年十月計掾章平左馮翊府下滅一字原父以今權量挍之容三斗重十五斤

漢梁山鋗

宣和博古圖

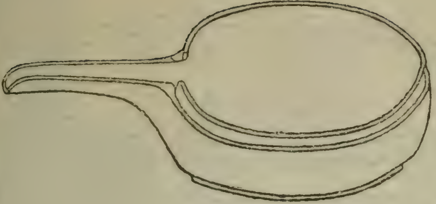




右高四寸二分深四寸一分口徑七寸四分腹徑七寸六分容六升重二斤十有三兩

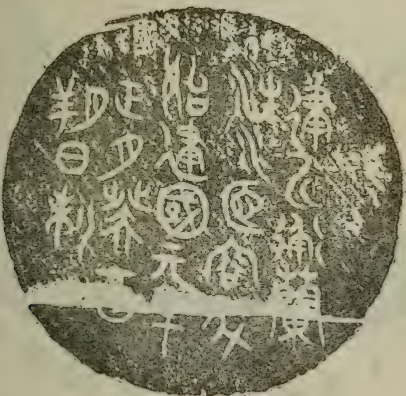
漢注水匜

宣和博古圖



右高一寸二分深一寸一分徑三寸容三合重五兩

據江朔堂所藏舊搨本

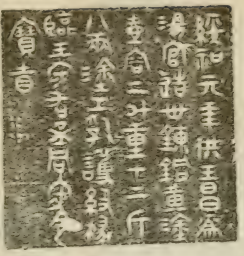


律斤衡蘭
注水匜容
一升始建
國元年正
月癸酉朔
日制

漢綏和壺



宣和博古圖



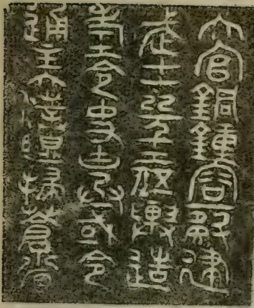
綏和元年供工昌爲
湯官造卅鍊銅黃塗
壺容二斗重十二斤
八兩塗工乳護級掾
臨主守右丞同守令
寶省

右高八寸七分深七寸四分口徑三寸七分腹徑六寸四分容六升二合重五斤有半

漢大官壺



宣和博古圖



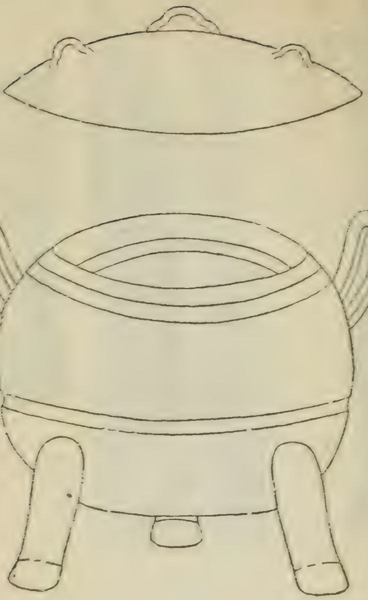
大官銅鍾容一斛建
武十十選工伍興造
考工令史由丞或令
通主大僕監掾蒼省

右高一尺五寸五分深一尺三寸口徑五寸八分腹徑一尺一寸容二斗九升五合重二十一斤二兩

廬江劉常所藏舊本摹入　建武十十者二十年也薛氏款識銘文說一十字且以十十爲工四字釋作二十

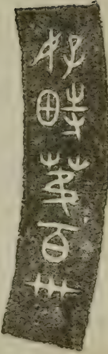
五年二當是傳抄之訛史甶甶字釋作右亦誤

好時共廚鼎　廬江李氏



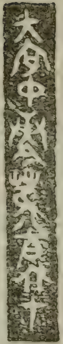
考古圖

考古図



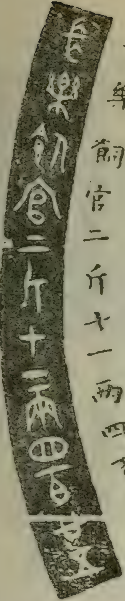
好時第百卅

盖



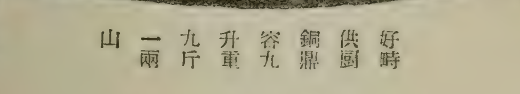
太官中丞令第百六十

長樂飼官二斤十一兩四百卅五



右不知所從得高五寸深三寸徑五寸有半容三升一合重三斤六兩有銘十五字在腹二十有一字在蓋據下解廿有六字

此器刻云重九斤一兩今重三斤六兩今六兩當漢之一斤與車宮樂之法同

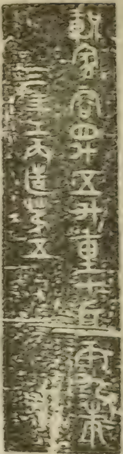


好時供廚銅鼎容九升重九斤一兩山

軹家釜　京兆孫氏

形制與今同

考古圖

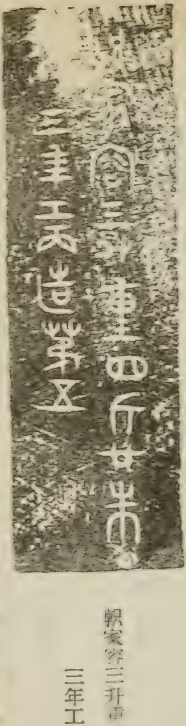


軹家容四斗五升重十斤一兩九銖

三年工丙造第五

軹家甑　同上

形制與今同



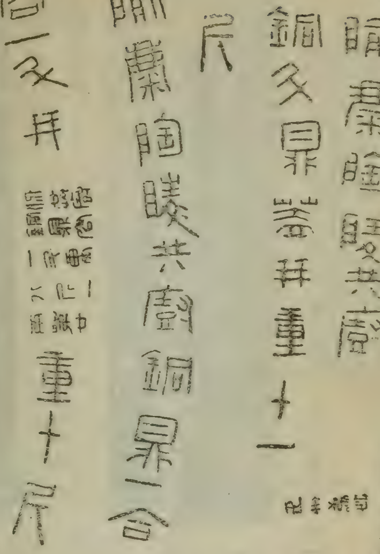
軹家容三升重四斤廿銖

三年工丙造第五

右二器皆得於京兆形制與今器同更不圖寫　釜重二斤十一兩六銖容斗有二升九合銘廿有一字　甑重一斤七兩容斗銘一十七字

以今權量校之釜四兩七銖甑五兩十八銖當漢之一斤釜三斗甑三斗一升當漢之一斗二品亦不同

漢陶陵鼎



讀古齋漢器款識

蓋　陰欒陶陵共廚　幷[illegible]
銅斗鼎蓋幷重十一斤

器　陰欒陶陵共廚銅鼎一合
容一斗幷　[illegible]　重十斤

右漢陶陵鼎銘蓋鏊銘、大字十五、小字四、器銘大字十七、小字十六、宛所ㇾ藏器銘云、幷重十斤、又云、重八斤、一兩、則蓋當ㇾ重一斤十五兩ㇾ矣、今除ㇾ蓋以ㇾ庫平法ㇾ馬稱ㇾ之、重五十三兩七錢二分、銘云、容一斗以ㇾ今官倉斗ㇾ較ㇾ之得三一升八合、

本朝度量權衡攷附錄卷中　終

昭和二年四月十五日印刷
昭和二年四月二十日發行

（非賣品）

日本[illegible]二回

本朝度量權衡攷

上卷

編纂者　與謝野寛
同　正宗敦夫
同　與謝野晶子
裝幀圖案者　廣川松五郎
發行者　東京府北豊島郡長崎町一六二　長島豐太郎
印刷所　東京府北豊島郡長崎町一六二　新樹社製版印刷所
印刷者　高瀨清吉

發行所　東京府北豊島郡長崎町一六二
日本古典全集刊行會
振替口座東京七三三二一
電話番號小石川七〇〇九九



日本古典全集刊行會板

日本古典全集

與謝野寛
正宗敦夫　編纂
與謝野晶子　校訂

本朝度量權衡攷　下卷

錢幣攷遺

（狩谷棭齋全集ノ內）

V.5

狩谷棭齋全集第五解題

一、此巻には「本朝度量權衡攷」下巻と共に、「錢幣攷遺」の本文を収めた。但し「錢幣攷遺」に挿まれたる古錢の搨摹は、印刷の便宜上、別に之を總集し、寫眞玻璃版を用ひて第六巻に收めた。其れには編者等が貫井銀次郎、三村清三郎二家に議つて假りに「錢幣攷遺圖録」の名を附した。

一、「錢幣攷遺」は古錢學の書にして、我國と支那とに於ける古代錢貨の製作、時代、書風、銅色と共に、其の眞僞・異同等を併せて考究辨證したるものである。支那に於て此種の書の有るは、宋の洪遵の「泉志」の自序に據れば、「梁ノ顧烜始メテ譔ス之ガ書ヲ」、「唐ノ封演ノ號從ツテ而廣ム之ヲ」と云はれるのであるが、其等の書は彼國に於て早く佚亡したらしい。また「泉志」の自序に「國朝ノ金光襲、李孝美、董逌之徒纂錄寖出ス」と有る如く、宋に入つて金石學と共に古錢研究の勃興を見たが、金、李、董諸家の著述も、其書を「泉志」以後の古錢書に引用せらるるのみで、既に久しく全本の傳を失つてゐる。其等に次いで宋の紹興十九年（一一四九）七月に著されたものが右の「泉志」であり、支那現存の古錢書は此の「泉志」を以て最も古しとする。我國に於て古錢の鑑賞の始まつた時代は的確に知ることを得ないが、恐らく室町中期以來、明との交渉に由つて彼國の古錢趣味を長崎、堺、及び京都に傳へたであらう。將軍足利義政（一四三五「永享七年」——一四九〇「延德二年」）、及び徳川初期の本阿彌光悦（一五五七「弘治三年」——一六

三七「寛永十四年」）等が早く古錢を愛したと云はれるが、未だ文獻上の證左を得ない。徳川中期に及んで、右の「泉志」（十卷、合三册）を、元祿十年（一六九七）正月、京都の書肆林九兵衛の翻刻したのが、我國に古錢書の板行せられた最初である。翻刻した「泉志」の底本は、洪遵の書を明の胡震亨、毛晉二家が校訂し、同じく明の萬曆三十一年癸卯（一六〇三）に徐象梅の跋を加へて梓行したものを用ひたのである。次いで同じく元祿年間に越前富山の藩主前田正甫が「化蝶類苑」（未刊）を著した。是より後明和七年出版の「萬法全書」の中にも古錢の記述を見るが、一部の書として邦人の手に成る古錢書の嚆矢は此の「化蝶類苑」である。是等の板本を見るに至つた事は、當時既に古錢鑑賞の好事が我國上中流人士の一部に行れた事を語つてゐる。更に享保年間には京坂地方に多くの古錢愛好者を輩出し、中谷顧山は享保十三年（一七二八）三月に「和漢孔方圖繪」（通稱「孔方鑑」）を著したのを始とし、「珍貨孔方圖繪」（通稱「珍貨鑑」）、「百錢圖」、「珍貨古錢圖」、「弄錢雜記」（三卷）、「享保冬書」、「孔方各詠」、「世寶錄」等を著し、瀨尾栁齋は「板兒錄」、「後明錄」（背文類）、「背文考」、「古泉考」、「正誤世寶錄」等を、宇野宗明は「續化蝶類苑」（未刊）を著した。三氏は共に大坂の人にして、著名なる古錢家である。更に古錢趣味が全國的に盛行するに至つたのは天明年度以來の事であり、寛政以後には江戸に於ても斯道の名家が多く現れた。當時に著された古錢書の重なるものには、丹波福知山の藩主朽木昌綱（隱岐ノ守、號龍橋、また彩雲堂）の「古今泉貨鑑」（一名、和漢泉貨鑑）、「新撰錢譜」、「弄錢奇鑑」、「古今分量考」、「西洋錢譜」、

大坂の河村羽積(流石庵)の「寛政改正、孔方鑑」(芳川維堅同編)、「新渡大錢譜」、「寄錢百圖」、大坂の芳川維堅(甚右衛門、珍貨堂)の「和漢泉彙」、藤原貞幹(無佛齋、蒙齋)の「寛永錢譜」(未刊)、福知山の藩士小澤辰元の「改正孔方鑑」、「改正珍貨孔方鑑」等が有る。是等は天明より寛政の間に板行されたものであるが、更に文化より安政間に亘つて著された古錢書の重なるものは、此の「錢幣攷遺」の外に、江戸の久野貞寶(仲藏、約卿、玄龜齋)の「泉貨位次錄」、「弄錢奇鑑後篇」(大村成富同編)、江戸の大村成富(深川の錢阿、散陽舍)の「弄錢奇鑑續篇」、「資貨漫文鈔」、「泉幣攷遺」(再版改題、「珍錢圖彙」)、江戸の小山政敷(靜好堂)の「泉幣後圖」、倍蘇海の「畫錢圖錄」、江戸の村田元成(吉原大文字樓主、文樓)の「對泉譜」(大村成富共撰)、江戸の近藤守重の「錢錄」(棭齋共纂)、「金銀圖錄」、棭齋の子懷之の「新校正孔方圖鑑」、大坂の草間直方の「三貨圖彙」、京都の中川泉壽(稽古齋)の「安政孔方圖鑑」、「和漢古今寶貨泉譜」等を數へ得るのである。

一、「錢幣攷遺」は「泉幣攷遺」とも書く。「泉」字と「錢」字は古くより行れたる共通文字である。此書は「久野克寛著、狩谷棭齋校」と署せられてゐるが、實は二家の共著であつて、久野氏の意見に棭齋が自家の考證を加へ、且つ文章に至つては專ら棭齋が筆を執つたものであらうと云ふのが、從來の古錢家の通說であつた、また今日の古錢研究家も此の通說を是認してゐる。久野氏の傳記は不明であり、唯だ江戸の武家にして學者であり、下谷の池の端に住んで居たとのみ傳へられてゐるが、江戸の武家だとすれば江戸の備

者にして尾張藩に仕へた久野鳳洲（一六九〇「元祿三年」――一七六六「明和三年」）の後裔であらうか。此人が著名なる古錢家であつた事は、前記の如く他にも古錢書の著述の有ることに由つて明白である。棭齋に比べて年長者であり、また古錢家としても棭齋の先輩であつたと想はれる。

一、「錢幣攷遺」は、前に擧げた朽木昌綱の「古今泉貨鑑」を以て當時に於ける古錢全集と見做し、彼書の遺漏を補ふことを主要の目的として編述したると共に、「古今泉貨鑑」以後、此の「錢幣攷遺」以前に出版したる他の錢書、例へば芳川維堅の「和漢泉彙」の如きに記載せられたる物に對しては、特に立言の必要あるものの外、概ね記載を省略したやうである。錢書の多き中に、「錢幣攷遺」の特色とする所は、和漢の古錢に對する各種の精緻なる史學的考證と科學的實驗的の記述とに存する。從來の錢書は概して鑑賞の參考として好事家の爲めに著され、古錢の圖鑑を主としたものであつたが、此書は少しく前に書かれたる藤原貞幹の「寛永錢譜」と共に、初めて古錢學の研究書たる面目を備へ、後の穂井田忠友の「中外泉史」、成嶋柳北の「古泉鑒識訓蒙」、今井風山軒の「古泉大全」（兩書は明治年間出版）、佐野英山氏の「鑄貨圖錄」（大正二年十二月出版）等、古泉書中の白眉である。

一　「錢幣攷遺」は何故か著者等の生前及び其後にも出版せられず、久野克寛の自筆稿本のまま、初め伊勢國津市の魚問屋にして古錢家である辻彥作（不朽庵）父子の所有となり、更に京都の錢商泉貨堂中嶋孝次郎の藏弃に入り、現に孝次郎氏の嗣子辨次郎氏に傳はつてゐる。（泉貨堂の原本が克寛の自筆である事は、

其れを一覽した明治大正の古錢家諸氏が、卷首例言の下に克寛の朱印「裕卿、玄龜齋」が押されてゐるのに由つて決定されてゐる。）猶此の「泉貨堂本」以外にも一本が有つたらしく、其れの傳寫されたものに守田寶丹本、貫井青貨堂本（もと馬場杏雨手寫本）泉幣館本等の諸本が有り、此中の守田寶丹本は久原文庫に入つたが、更に守田寶丹本を寫したる中川近禮本がある。さうして「泉貨堂本」より直ちに寫したものに佐野英山本があり、更に其れを寫したる三村清三郎本がある。茲に「日本古典全集」の底本としたるものは右の中の三村本であるが、三村清三郎氏は編者等の乞を容れて底本の筆寫を許され、我我に代つて森潤三郎氏が筆寫されたる原稿の爲めに、更に中川近禮本と對照して校訂の勞を取られたのである。次いでに云ふ。泉貨堂の原本の中、第六卷は、東京の某氏が借覽中、大正十二年の大震に由つて不幸にも燒失したから、其卷のみは他の寫本に由る以外、原著の稿本に就いて見ることを得られなくなつてゐる。

一、「錢幣攷遺」は未刻本であると述べたが、著者の一人久野克寛の歿後、棭齋の生前に、此中の錢圖のみを抄錄し、其れに簡單なる解說を附して、「泉幣攷遺」と云ふ題簽を用ひ、江戶の大村成富が文化五年（一八〇八）に出版した一本がある。其れは我我が茲に初めて板行する全本と區別する爲め、假りに「抄略本、泉幣攷遺」と云つて置かう。

一、さて茲に我我が便宜上別冊として第六卷に收めた「錢幣攷遺圖錄」の蒐集に就いて、三村清三郎氏のお心添（ココロゾヘ）とお引合（ヒキアハセ）に由り、現代に於て古錢研究の造詣深き貫井（ヌクヰ）銀次郎氏に乞ひ、原本に著者が「右云云」と書

いて錢貨の解說を加へたまゝ、未だ錢圖を入るるに至らなかつた物の搨摹を殆ど全部補つて頂くことを得たのは幸ひである。貫井氏は之が爲めに多大の心勞と時とを費された。次に其事の大要を各卷に亘り貫井氏の述べられた所に從ひ筆記して置く。

一、貫井氏云く。第一卷より第六卷の「南宋、度宗、咸淳元寶」に至るまでの錢圖全部は、大村成富の出版した抄錄版本「泉幣攷遺」の文化五年版より轉載した。但し第一卷の中の「寶永通用」は本文に秤量を缺き、抄錄版本にも其圖の無いのを見れば、原本にも挿圖の無かつたものと考へ、敢て私に補入する事を避けた。

一、貫井氏云く。第六卷に有る「宋附品、遼、應曆通寶」以下は、文意を按じて、大村成富編、文化十四年版の「珍錢奇品圖錄」より七品を轉載し、一品は弊藏の搨摹を用ひて補つた。

一、貫井氏云く。第七卷は、田中啓文氏の泉幣館（所在、東京府平塚町字戶越）に藏する「錢幣攷遺」の寫本を參照し、錢圖あるものは其れに準據し、錢圖を缺くものは文意を按じて、十五品を「珍錢奇品圖錄」より、廿九品を泉幣館所藏の古錢拓本より、一品を東京藤井榮三郞氏所藏の古錢拓本より、一品を周防三田尻の梶山升二郞氏所藏の古錢拓本より何れも補入した。

一、貫井氏云く。第八卷もまた第七卷の例に準じて補入したが、內參品は弊藏の搨摹を用ひたる外、全部は泉幣館所藏の古錢拓本を用ひた。

一、貫井氏云く。第九巻もまた前巻の例に準じ、「珍錢奇品圖錄」より轉載したるもの廿六品、泉幣館の古錢拓本に由りたるもの廿參品、泉幣館本の「錢幣攷遺」より筆寫せるもの六品、古拓本を筆寫せるもの五品、今井貞吉（風山軒）の「古泉大全」より筆寫せるもの四品、幣識拓本を用ひたるもの廿參品である。

一、第十巻は泉幣館本にも錢圖が無い爲めに、専ら文章を按じて、「珍錢奇品圖錄」より轉載したるもの十八品、泉幣館所藏の拓本より轉載したるもの參品、幣識の拓本を用ひたるもの參品、其餘は河村羽積の寛政元年版「奇錢百圖」、中川積古齋の安政六年版「和漢古今新撰泉譜」、今井貞吉の「古泉大全」、及び諸種の拓墓集を探討して採集したが、今日その錢貨と拓墓の所在を失つた物が多く、從つて思ふやうに完備する事を得なかつたのを遺憾とする。

一、以上貫井氏の談話に由つて、如何に氏が此の圖錄補入の爲めに深大の熱意と傾勞とを寄與して下さつたかの大要を、永く「日本古典全集」の讀者に諒察して頂けると思ふのである。殊に是等錢圖の採擇蒐集に就き、貫井氏の篤厚意を通じて、泉幣館主田中啓文氏、同館主事三上香哉氏を煩はしたる所多く、また東京の錢商小川浩氏は貫井氏の採擇類稿を手記して、此中に京都の泉貨堂所藏、久野克實自筆の原本と對照せられ、遠く周防三田尻に梶山氏を訪うて第七巻に入れたる「天啓背新」の拓本を乞ひ、其れを齎し歸るまでの勞を取られた。また此事の爲めに三村清三郎氏は屢貫井氏を往訪して督促せられ、貫井氏は前述の如く泉幣館其他を屢往訪し、諸友に依頼して拓本の蒐集に努められ、總べての拓墓の集まるを待つて、氏自

ら寫眞の臺本に貼付して誤謬無きを期せられたのである。貫井氏は是れが爲めに大正十五年の春より夏季を過ぎ晩秋に至るまで約十箇月を費された。人は書を善く讀むことも容易で無いが、書を善く編纂することは更に容易で無い。茲に我我は未刻の書「錢幣攷遺」と「錢幣攷遺圖錄」を刊行し得る事の喜びを思ふと共に、刊行の背景に隱れたる貫井、三村二家の恩情勞苦の多大なるを感謝し、また併せて田中、三上、佐野、中嶋、藤井、梶山、小川其他の諸賢が、此書の爲めに、二家を通して間接に惠まれたる御厚意を幾重にも感謝する。因みに云ふ。貫井氏は謙虚溫厚の人にして自ら語ることを好まれないが、古錢の鑑賞と批判とに就いては特に天禀の資質を備へた權威の一人として現代古錢研究家の共に推服する所である。氏の古錢批判は尖銳なる直覺、豐富なる熟錬に加ふるに說文の硏究に準據する所があると聞いてゐる。氏が古錢家としての雅號は靑貨堂である。

一、狩谷棭齋が古錢の鑑賞に志したのは何れの時よりであるかを知らない。古錢流行の當時に於て、彼れもまた好古の性癖より之に關心するに至つた事と想像される。しかも考證學者としての彼れは單なる鑑賞に止まること能はず、「箋注和名抄」、「日本靈異記攷證」、「扶桑略記校譌」等に用ひたる學殖と精力とを之にも移して、「學」としての古錢硏究を遂行したのである。之が又その「本朝度量權衡攷」の大著にも役立つた。棭齋の古錢學に關する著書は、此の「錢幣攷遺」の外に「新校正孔方圖鑑」及び近藤守重と共纂の「錢錄」が有る。前者は棭齋の生前に子の懷之の著として文化十二年に板行せられた。「錢幣攷遺」を

克寛の著として功を先輩に譲つた如く、棭齋は古錢の述作を以て時俗と（例へば大村成富の如きと）競ふ心が無かつたから、わざと子の名を署したのであらう。猶「新校正孔方圖鑑」の奥書を見ると、「嗣出書目」として、「新校正珍貨圖鑑」一卷、「新校正寛永錢譜」三卷、「諸家藏泉圖譜」一卷、「續編」一卷、「泉志攷證」（家君所ㇾ著）二卷、「皇國幣貨通考」（同上）五卷を豫告し、「家君所ㇾ著ㇲ」と注したる二書の外は懐之の著になつてゐるが、實は何れも棭齋の著であらうと云ふ事である。是等豫告の六書は何故か板行するに至らず、久しく其の稿本の所在さへも失はれてゐる。此中の「新校正珍貨圖鑑」の稿本を大村成富が私して、文化十四年に「大村成富編、珍錢奇品圖錄」と題して出版し、屢版を重ねて、後の天保年間には大坂の書肆伏見屋嘉兵衛（心齋橋南本町）よりも發行せられ、また明治となつても東京の書肆北澤伊八（淺草茅町、古泉閣）より覆刻せられた。大村成富は江戸深川の錢商にして著名なる古錢家であるが、其性格は俗商の氣習を脱せず、當時の古錢家の名錄を編むに、士人以上には敬稱を附し、以下の人には棭齋の如き學者に對しても、呼捨にする如き差別思想の有つた人である。成富が、棭齋の稿本より濫りに右の「珍錢奇品圖錄」を出版した事は、少なからず棭齋の學者氣質を不快ならしめたらしい。即ち棭齋は子懐之の名を以て、人を介して成富を譴責し、陳謝せしめ、書肆をして絕版を約せしめた。其時、書肆は懐之（實は棭齋）に對し、「珍錢奇品圖錄」の板木を廢物たらしめずして其れを訂正し、書名を新たにして出版せん事を乞うたので、懐之（實は棭齋）は之を諾し、訂正增補を加へて題名を「新校正珍貨圖鑑」と改め

る積りであつたが、幕末多事の際に此事は實現せられず、却て覆刻のまゝ前記の如く明治版をも生じたのである。次いでに云ふ。貫井氏の談に據れば、文化元年以前の「古錢家番附」に未だ棭齋の名を見受けないが、文化十四年（一八一七）の「番附」には一躍して東の關脇に列してゐる相である。斯く語られた貫井氏も、編者が三村氏の家で見せて貰つた現代古錢家の「番附」に於て、西の大關久原房之助氏の次に關脇として其名を見るのである。

一、棭齋以前に讀まれた支那の錢書は既定の「泉志」のみであり、其他は「事林廣記」、「萬法全書」、「三才圖會」などより抜萃して參考として居たらしい。棭齋時代には淸の「欽定錢錄」、淸の陳萊孝の「鍾官圖經」などが舶載せられて居た。後者には寫本が多く存し、中には棭齋の書入ある自寫本をも見受ける。「泉志新編」は天保年間に渡來したかと想はれるが、「古今錢略」、「古金待問錄」、「古金所見錄」、「古泉匯」其他數種の錢譜は總べて明治以後の舶載である。中に李佐賢の「古泉匯」が今日最も重用せられてゐる。是等の事も貫井氏に由つて敎へられたる所である。

一、また貫井、三村二家の談話に據つて、棭齋前後の重なる古錢家の名を擧ぐれば、既出の朽木昌綱、久野克寛、大村成富、小山政敷、僧慈海、芳川維堅、川村羽積、小澤辰元、藤原貞幹、村田元成、近藤守重、草間直方、辻彥作等の外に、內藤方圓齋（幕臣、隼人正、御勘定奉行）、長良顧齋（伊勢の醫師、名承芳、字子軌、醫名洞彥、十金堂）、永田有隺堂（伊勢の人、九良作、蘿道）、新井青壽堂（姬路藩士、小一兵

衞、成敷）、八尾傲霜堂（攝津伊丹の人、與作、寛猶）、閲古堂（姓名未詳）、服部雲鵞室（幕臣、仲、直之進、或は直之丞、伊賀守、御使番）、觀月公（未詳）、酒井忠道（洪平館、姫路藩主）、前田正甫（富山藩主、峰心）、日比松風堂（内記）、田中半年堂（伊勢の人、治郎右衞門）、荒木方斌（攝津伊丹の人）、荒木方彬（同上）、安藤某（田安家臣）、内山金昌堂（幕臣、七兵衞、御鷹師頭）、松平萬岡齋（志摩守）、米田某（同上家臣）、寺本某（肥後藩士、御留守居）、戸田玄堂（三左衞門、清水家臣）、平岡白虎齋（四郎兵衞次男）、小林道隆（大和五條の人）、山田一豐舍（名古屋の人、孔章、油屋小平）、安田而唐（門次）、宇都宮建皐堂（江戸の人、撿校、俊良）、井上存義堂（玄意）等である。

一、「錢幣攷遺圖錄」の錢圖は番號に由つて本文と對照せられたい。錢圖は悉く原寸を覆刻して、毫も增減する所が無い。

一、「錢幣攷遺」の題簽に底本を藏せられてゐる三村清三郎氏の筆、「錢幣攷遺圖錄」の題簽は貫井銀次郎氏の筆を煩はした。

一、古錢は偏に好古的鑑賞としても趣味の深いものであらうが、古錢學としての研究は史學、考古學の上より更に必要であり、興味の無盡なるものであらう。棭齋は「書を讀まん人は古器に心を留めて考ふべし、必ず益あるものなり」と警告してゐる。編者等は從來全く門外の徒であるが、「錢幣攷遺の」編纂に與(アヅカ)つて少しく錢書に親接する機緣を得た事を喜ぶものである。

一、此の解題の初めに董道の書に就いて一言したが、世に董道の「錢書」と云ふ傳寫本が有り、現に三村氏も一本を藏せられてゐる。東魏の書の存するのは珍しいが、或は後人假托の書では無いか。高明の士の示敎を乞うて置く。

一、最後に、編者等が此の解題を書くにも、貫井、三村二家の示敎に負ふ所多きを感謝する。猶編者が耳學半解の故に誤つた所の有るべきを恐れるが、其れは更に二家及び識者の高訓を待つて訂正するであらう。

本朝度量權衡攷

狩谷棭齋著

權衡ハ隋書ニ、「古有二黍絫錘錙鐶鈞鋝石鍰之名一、歷代差變其詳未レ聞、」ト云ヘリ、「今按、隋書文本出二宋書一第十六ニ、鐶作レ鍰、歷代以下文句有レ異」今按ズルニ

黍絫【漢書（律曆志）ニ、「權輕重者不レ失二黍絫一」トアリ、注ニ、「應劭曰、十黍爲レ絫、十絫爲レ銖」ト云ヒ、說文ニモ、「絫十黍之重也」、ト云ヘリ、黍トハ黍一粒ノ重サナリ、黍絫ノ名、先秦ノ書ニ見エザレバ、是ヲ以テ輕重ヲ云フハ、秦漢以後ノコトナルナルベシ】

錙錘　呂氏春秋（應言篇）ニ、「割國之錙錘矣、而因得大官、」淮南子（詮言訓）ニ、「割國之錙錘以事レ人、」又（說山訓）「無二錙錘之礛諸一」ナド見エタリ、高誘ガ詮言訓注ニハ、「六兩曰レ錙、倍レ錙曰レ錘」、ト云ヒ、說山訓注ニハ、「六銖曰レ錙、八銖曰レ錘」、ト云ヘリ、說文ハ說山訓注ト同ジ、又荀子（議兵篇）ニ「得二一首一者、則賜二贖錙金一」、又（富國篇）「割國之錙銖以賂レ之」、禮記（儒行篇）ニ、「雖レ分國如二錙銖一」ナドトモアリ、是等ノ注ニハ皆「八兩爲レ錙」トアリ、廣韻ニハ「八銖爲レ錙」ト見エタリ、六兩八兩ト云ヒシハ誤ナルベシ】

鍰【鐶ト同ジ、鐶ハ鍰ト通ズ、考工記冶氏ノ注ニ、「今東萊稱或以二大半兩一爲レ鈞、十鈞爲レ環、環重六兩大半兩一、トアル即是ニテ、環ヲ借リテ鍰トシタルナリ、故ニ尚書正義（呂刑）ニ、此注ヲ引キタ

ルニハ、「十鈞爲レ鍰」トアリ、漢書（五行志又外戚傳）ニ、「宮門銅鍰」トアルヲ、注ニ「鍰、讀與レ環同」、ト云ヘルモ、鍰環通ジ用ル字ナル故、鍰ヲ以テ環トシタルナリ、淸ノ浦鏜ガ十三經正字ニ、冶氏ノ注ノ環ヲ鍰ノ譌ト云ヒシニ、戴震モコレニ從ヒタルハ環ハ鍰ノ假借ナルコトヲ知ラザリシニヤ、阮元ガ周禮（校勘記）ニ宋ノ余仁仲ガ刻本ニハ、環字空缺シタリト云ヘリ、余氏モコノ環字ヲ讀カネテ缺タルナラン、宋ノ岳珂ガ刻本、又足利學校ニ藏スル宋版巾箱本ニハ、環トアルコト今本ト同ジ、但經典釋文冶氏ノ條ニ環字ヲ擧ザレバ、陸德明ガ據リシ本ニハ、鍰トアリシニモアルベシ、戴震ガ考工記ノ解ニ、此鍰字鋝字ト字形似タルニヨリテ互ニ誤ルコト多シ、冶氏ノ注ニ、「十鈞爲レ鍰、鍰重六兩、大半兩、」ト云ヒシハ、鋝ノ重サナルヲ誤リテ鍰ノ重サトシ、說文鋝字ノ注ニ、「十一銖二十五分銖之十三」ト云ヒシハ、鍰ノ重サナルヲ誤リテ、鋝字ヲ注セシナリ、呂刑ニ「其罰百鍰」トアルハ鋝ノ誤ニテ、弓人ニ「膠三鋝」トアルハ、鍰ヲ誤レルナリ、又冶氏ニ「重三垸」トアルハ、コノ鍰字ノ假借ナリ、故ニ注ニ「垸讀爲レ丸」ト云ヘリ、段玉裁ガ周禮漢讀考ニ、「讀爲」ハ「讀如」ニ作ルベシトアリ

鈞【冶氏ノ注ニ「今東萊稱、或以二大半兩一爲レ鈞」ト云ヘリ、大半兩ハ十六銖ナリ、又左傳（定八年）ニ「顏高之弓六鈞、周禮（大司寇）ニ「入鈞金」、管子（小匡篇）ニ「卜罰入以鈞金、」呂氏春秋（仲秋紀）ニ、「正鈞石」ナドアリ、注ニ「皆三十斤」ト云ヘリ、漢書（律歷志）ニモ「三十斤爲レ鈞」ト

アレバ、漢ニテモ此稱ヲ用ヒシナリ、此鈞ハ冶氏ノ注ノ鈞トハ同ジカラズ】

鋝【冶氏ニ「重三鋝」トアル、注ニ「玄謂、許叔重說文解字云、鋝鍰也、今東萊稱、或以大半兩爲鈞、十鈞爲環、環重六兩、大半兩、鍰鋝似同矣」、トアルヲ、戴震ハ六兩大半兩ハ鋝ナリ、說文ニ一鍰鋝也トアルニヨリテ、鄭玄十鈞ヲ鍰トシタレドモ、鍰ト鋝ト篆體ノ似テ混ジタルニテ、恐ラクハ同ジカラジト云ヘリ、又說文ニ、「北方以二十兩爲鋝」、トアルヲ、戴震「爲三鋝」ニ作ルベシ、三ノ字ヲ脫シタルナリト云ヘリ、二十兩ヲ三鋝トスレバ鄭玄ガ「三鋝爲一斤四兩」ト云ヒシニ合ヘリ、一斤四兩ハ二十兩ニテ、四百八十銖ナレバ、一鋝ハ百六十銖ナリ、百六十銖ハ六兩大半兩ナル故、鄭玄ガ「十鈞爲鍰、鍰重六兩大半兩」ト云ヒシハ、鋝ノ重サヲ誤テ注シタルナリトハ云ヘルナリ、戴震又云ヘルハ、冶氏ノ鄭衆ガ注ニ「鋝讀爲剔」ト云ヘリ、故ニ率・選・饌・撰等ノ字ヲ假借ス、剔ト古音同ジケレバナリ、史記周本紀ニ其罰百率平準書ニ白選漢書蕭望之傳ニ金選、尚書大傳ニ罰二千饌、漢書ニハ撰ニ作ル、皆鋝ノ假借ナリ、今ノ尚書呂刑ニ「其罰百鍰」トアルハ、此鋝ノ誤ニテ、弓人ノ「膠三鋝」ハ鍰ノ誤ナリト云ヘリ、周禮漢讀考ニ此「讀爲」ヲモ「讀如」ニ作ルベシトアリ】

鎰【古溢ニ作ル、鎰ハ俗字ナリ、儀禮（喪服傳旣夕記・禮記・間傳喪大記）ニ一溢米、孟子（梁惠王上篇）ニ萬溢、戰國策（秦策）ニ黃金萬溢（趙・韓・燕・衞等ノ策ニモアリ）、呂氏春秋（異寶篇）ニ金千鎰、

穆天子傳ニ黃金四十鎰、史記（平準書）ニ「黃金以鎰爲名」、漢書（食貨志）ニモ、「黃金以溢爲名」トアリ、注皆二十兩ヲ溢トスト云ヘリ、國語（晉語）ニ黃金四十鎰トアル、注ニハ「二十四兩爲鎰」ト云ヘリ、文選永懷詩ノ李善注ニ、國語ノ賈逵注ヲ引キタルニモ、一鎰二十四兩トアリ、韋昭ハ是ニヨリシナルベシ、吳都賦ニ、「金鎰磊砢」トアル、劉良ガ注ニモ「二十四兩爲鎰」トアリ】

秦權ノコト、顏氏家訓【書證篇】ニ見エ、其圖銘文考古圖薛氏阮氏鐘鼎款識等ニ載セタレドモ【卷末ニ摹出ス】其重サハ知リ難シ

漢ニテハ、銖・兩・斤・鈞・石ト稱リタリ、漢書（律曆志）ニ「權者銖・兩・斤・鈞・石也、所以稱物平施知輕重也、本起於黃鍾之重、一龠容千二百黍、重十二銖、兩之爲兩、二十四銖爲兩、十六兩爲斤、三十斤爲鈞、四鈞爲石」ト云ヘリ、【石ハ尚書（五子之歌）ニ、「關石和鈞」、國語（周語）ニ、「重不過石」ト云ヒ、鈞ハ周禮・左傳・管子・呂氏春秋等ニ見ユ、（上ニ引リ）兩ハ史記（平準書）ニ、「秦並天下云云、銅錢識曰、半兩重如其文」ト云ヘリ、是ヨリ先ニ兩ト云フコト見エザレバ、兩ハ秦ノ制ナルカ、斤ト銖トハ漢書食貨志ニ、「太公爲周立九府圜法、黃金方寸而重一斤、錢圜函方輕重以銖」、トアリ、戰國策（東周秦齊楚等策）ニモ、斤ヲ以テ黃金ヲ稱リタレバ、斤銖ヲ以テ稱ルコトハ、周初ヨリアリテ、戰國ノ時モ同ジカリシナルベシ、然ルニ食貨志ニマタ「漢興以爲秦錢重難用、更令民鑄莢錢黃金一斤」」ト云ヘルヲ

顏師古ガ注ニ、「復二周之制一更以二斤名一レ金」トアレバ、秦始皇・漢高祖ノ時ナドハ、斤ヲ以テハ稱ラザリシニヤ、是等ヲ合セ考レバ、漢ニテ銖・兩・斤・鈞・石ト五權ヲ定メシハ、周秦ノ制ヲ受タルモノナルベシ、孫生氏ノ量考ニ度量ヲ黄鍾管ヨリ起シシハ劉歆ガ牽強ナリト云ヒ（全文度攷ニ引リ）「權衡亦當消、何謂二黄鍾一」ト云ヘリ、錙銖ナドノ古稱ハ本ヨリノコトニテ、銖斤鈞石ナドモ黄鍾ヨリ出タルニハアラザルベケレドモ、兩ノ名ハ漢書ニ龠ヲ兩合セタルヨリ、兩ト云フトアルヨリ外ニ證無ケレバ、黍ヨリ起ラズトモ定メ難カルベク、兩ノ名周ヨリアルヲ見レバ、劉歆ガ牽強トモ云ヒ難カルベシ】權ノ起リヲ云フ說據リ難ケレドモ、姑ク此說ニ依リテ黄鍾管ヲ作リ、ソレニ千二百ヲ容ル黍ヲ擇ビテ稱リタリトモ、黍ニ虛實モアルベケレバ、稱ヲ起スベカラザルコト黍ニテ度ヲ起シガタキニ同ジ、況說苑【辨物篇】ニハ「十六黍爲二一豆一、六豆爲二一銖一」ト云ヒ【是ニテハ一銖ハ九十六黍ニテ、漢書ニ百黍ヲ一銖トセシニ比レバ、四黍少シ、續漢書注ニ說苑ヲ引タルニハ、「十粟重一圭、十圭重一銖」トアリ、是ニテハ一銖ハ百粟ナリ、今本ノ說苑黍トアルハ、後人ノ改竄ナルベキコト上卷ニ辨ゼリ】淮南子【天文訓】ニハ「其以爲重【今本量ニ作ルハ誤ナリ、今說文ニ依リテ改ム】十二粟而當二一分一、十二分而當二一銖一」ト云ヒテ【是ニテハ一銖ハ百四十四粟ナリ、說文モ此說ニ從ヒタリ】漢人ノ說モ一定ナラザレバ、今是等ニ據リテハ稱ヲ起スコトヲ得ズ、【余嘗テ漢書ニ依リ、漢錢尺ニテ黄鍾管ヲ作リ、ソレニ千二百ヲ容ル黍ヲ擇ビテ稱リシニ、其重一匁七分四釐ナリキ、是ニテ兩ヲ求レバ三匁四分八釐、斤ハ五十五匁六分八釐ナリ、此黍ヲ以テ說苑ノ說ニヨリテ一斤ヲ求レバ、五十三

匁四分五釐二豪八絲ナリ、朱載堉ガ稱リシ黍ハ千二百黍ニテ、三匁程瑤田ガ稱リシハ大者二匁六分八釐弱、中者二匁四分五釐強ト云ヒテ、各同ジカラズ、又淮南子ニ依リテ百四十四粟ヲ稱レバ、八九釐ノ間ナリ、是ヲ平均シテ兩ヲ求レバ、一匁〇三釐九豪有奇斤ハ三十二匁六分二釐餘、續漢書ニ引タル說苑ニ依レバ、二十六匁九分七釐餘ナリ、程瑤田ガ稱リシハ「十二銖千七百二十八粟、重一匁八分八釐強」ト云ヘリ】

儀禮喪服傳ノ一溢米ノ注ニ、「二十兩曰レ溢、爲二米一升二十四分升之一一」ト云ヘリ、【禮記喪大記注同ジ、一升二十四分升之一トハ、一升ノ外ニ、一升ヲ二十四ニ分ケタル一分ヲ增シタルナリ、五經算術ニハ、「一斛米重百二十斤」ト云ヘリ、一斤ハ三百八十四銖ナレバ、一斛米ノ重サノ百二十斤ハ、四萬六千〇八十銖ニテ、一升ノ重サハ四百六十〇銖八絫ナリ、是ニテ一升二十四分升之一ノ重サヲ計レバ、四百八十銖ナリ、二十四銖ヲ一兩トスル故、四百八十銖ニテハ二十兩ナリ、此說卽鄭注ニ依リタルナリ】是ニ依レバ一升二十四分升之一ノ米ヲ稱リテ稱ヲ起スベシ、漢ノ一升二十四分升之一ハ【一升〇四勺一撮六六不盡ナリ】今ノ一合一勺四撮七六弱ニテ、其米ノ重サ四十五匁九分有奇、【今皇國ノ米ヲ稱ルニ、大凡一升ノ重サ四百匁ナリ、今是ニ準ジテ計リシナリ、按ズルニ夢溪筆談ニ「今人以二粳米一斛之重一爲二一石一、凡石以二九十二斤半一爲レ法」ト云ヘリ、其計リシハ大量大稱ナリ、宋ノ一斛ハ今ノ三斗八升三合二勺強、九十二斤半八十四貫八百匁ナレバ、今ノ一升ニテハ其重サ三百八十六匁二分強、今ノ一合一勺四撮七六弱ヲ計レバ、四十四匁三分二釐強ナリ、又尙書後案ニハ、今市中所レ用量、校レ之米一升、僅得二一斤零三兩一」トアリ、清ノ一

升ハ今ノ五合八勺三撮有奇、一斤〇三兩ハ百九十匁ナレバ、今ノ一升ハ三百二十五匁七分餘、今ノ一合一勺四撮七六弱ハ三十七匁三分八釐強ナリ】是一溢ノ重サニテ一兩、【二十分溢之一】ハ二匁二分九釐五毫強【夢溪ニヨレバ二匁三分一釐六毫強、後案ニヨレバ一匁八分七釐弱】一斤【十六兩】ハ三十六匁七分二釐三毫三絲三忽不盡、【夢溪ニヨレバ三十五匁四分五釐八毫三絲有奇、後案ニヨレバ二十九匁九分有奇ナリ、又五經算術ニヨリテ計レバ、漢ノ一斛、今ノ一斗一升〇一七弱ヲ實トシ、米一升ノ重サヲ乘ジ、百二十斤ニテ除スレバ、斤ノ重サヲ得ルナリ】是ニテ五銖ヲ求レバ四分七釐八毫強、【夢溪ニヨレバ四分六釐強、後案ニヨレバ三分九釐弱】然ルニ今漢ノ五銖錢ヲ稱レバ、最輕キ者モ七分以上ニテ【是ニテ一斤ヲ求レバ五十匁以上ナリ】其重サ合ハザレバ、鄭玄ガ一溢ノ重サヲ米一升二十四分升之一ト云ヒシモ據リ難シ、漢書食貨志ニ、「黃金方寸而重一斤」ト云ヘルハ據ルベキニ似タリ、故ニ今精錬ノ赤金ヲ稱ルニ、曲尺方寸ノ重サ百三十四匁五分ナリト云ヘリ、【荻生觀ノ衡考ニ「享保十四年十一月、該部使㆓局官㆒鑄㆑金、今尺方寸得㆓時衡十三兩㆒」トアルハ其金ノ未妙ナラザリシナルベシ】是ヲ以テ漢ノ方寸【曲尺ニテハ方七分六釐】ノ重サヲ計レバ、五十九匁〇四釐二毫二絲七忽強、【七分六釐ヲ再自乘シテ曲尺積四百三十八分九百七十六釐ヲ得、曲尺方一分ノ金ノ重サ一分三釐四毫五絲ヲ乘ズレバ此數ヲ得】又淸會典ニハ「赤金方寸重十六兩八錢」ト云ヘリ、是ニ依リテ漢ノ方寸ノ重サヲ計レバ、六十一匁九分一釐九毫九絲二忽強ナリ、【淸今尺ハ曲尺一尺〇六分ナレバ、漢ノ一寸ノ長サ曲尺七分六釐ヲ一〇六ニテ除スレバ、漢ノ一寸ハ淸尺七分一釐六毫九絲八忽強

ナリ、是ヲ再自乘シテ淸尺積三百六十八分五百七十〇釐九百六十八毫五百二十〇絲三百九十二忽ヲ得、十六兩八錢ヲ乘ズレバ此數ヲ得】古ノ金ハ其實如何ナリシカ詳ニ知ルベカラザレバ、是モ的證トハナシ難シ、又王莽ガ銅權ノ銘二器ヲ積-古-齋-鐘-鼎-款-識ニ載セタレドモ、【銘文卷末ニ載ス】其輕重知ルベカラズ、タダ西淸古鑑ニ、王莽ガ嘉量ヲ載セテ、「重三百六十三兩」ト云ヘリ、【三百六十三兩ハ三貫六百三十匁ナリ、嘉量ノ圖及銘文共ニ中卷ニアリ】コノ嘉量ヲ漢書【律歷志】ニ「重二鈞」トアルニ依リテ、【全文中卷ニ引リ、漢書ニ「又三十斤爲レ鈞」トアレバ、二鈞ハ六十斤ナリ】コレヲ六十分スレバ、一斤ノ重ナリ、一斤ヲ十六分スレバ、一兩ノ重サ、一兩ヲ二十四分スレバ、一銖ノ重サナリ、此嘉量今淸マデ傳ハリタルニ、副倣ノコトモ聞エザレバ、是ニ從ヒテ漢稱ヲ起スベシ【淸ノ陳經ガ求古精舍金石圖ニ「以二庫平一較二周權一、則庫平之六兩五分、即得二周權一觔一矣」トアリ、庫平トハ官稱ト云フガ如シ、觔ハ斤ノ俗字ナリ、其重サ予ガ起シシト全ク同ジ、タダ其據リドコロヲ云ハザルハ憾ムベシ】

銖　今一分五釐七毫五絲五忽强

兩　今三匁七分八釐一毫二絲五忽

斤　今六十〇匁五分

鈞　今一貫八百十五匁

石　今七貫二百六十匁

コノ外、漢器ノ銘ニ其重ヲ記シタル者、又古鏡ノ重ヲ稱リ試ルニ、皆同ジカラザレバ其等ニヨリテハ論ヲ起スコトヲ得ズ、又宋明ノ人ノ定メシモ畢竟先輩ノ說ニモ、或ハ明證無ク、或ハ其說誤リタレバ、皆據トナシ難シ

或人難ジテ曰、銘文ニ其重サヲ記シシ銅器、又史ニ重サヲ載セタル古器錢貨等、其重サヲ稱ルニ皆同ジカラズハ、總テ證トスベカラザルニ、佗ノ銅器・錢貨ニハ從ハズシテ、嘉量ニノミ據リテ、漢稱ヲ推シシハ如何、答、欵識ニ重サヲ載セタル銅器ハ、鼎壺鐘等彝尊爵ノ類ニテ、重サヲ主トセシモノニ非レバ、其記セル重サ大凡ニ云ヒシナラン、故ニ器每ニ其重サ同ジカラザルナルベシ、錢ハ年ヲ經テ磨滅多ク錆ルモノナレバ、始ニ鑄シハ法制ノ如クナレドモ後ニ錆タルハ輕小ナルコト度考ニ云ヘリ、且錢ハ微物ナレバ、深ク心ヲ用ヒズシテ鑄タル時、既ニ少シノ輕重モアルベク、又鑄タリシ時ハ盡ク同ジ重サナリトモ、土ニ埋レテ近ゴロ世ニ顯レシ者ト、人間ニ通用シテ刓渤スル者トハ、其輕重懸隔ナルコト云フヲ俟タズ、王莽ガ嘉量ハ氣物ノ數ヲ備ヘテ、萬一千五百二十ヲ合スナド云ヒテ、重二鈞ニ作リタレバ【一鈞ハ萬一千五百二十銖ナリ、此事漢書律曆志ニ出ヅ、全文中卷ニ引リ】其重サ必精ク稱リテゾ造リツラン、然ラバ是ニヨリテ稱ヲ定ムベケレバ、今コレニ從ヒテ漢稱ヲ起シシナリ、抑北宋ノ時古器多ク世ニ出デ、考古圖・續考古圖・嘯堂集古錄・鐘鼎款識・集古錄・金石錄等ノ諸書アリト云ヘドモ、此嘉量ヲ載セズ、和峴・丁度・阮逸・胡瑗・蔡保信・蔡元定ノ輩、又元明ノ人人モ絶テ見ザリシニ、清ニ至リテ此器見レ

テ漢ノ度量權衡皆徵ヲ此ニ取ルコトヲ得ルハ、實ムベク喜ブベキニ非ズヤ

或人又曰、宋以來此器ノ事云ヒ及ボセルモノ無カリシニ、淸ニ至リテ驟ニ顯レタルコト疑ハシ、且淸人ノ度量權衡ヲ云フモノ、此器ニヨリテ證スルコト無キヲ見レバ、此嘉量後人ノ僞作ニハ非ルニヤ、答、物ノ隱顯ハ常ナラザレバ、古ニ聞エズシテ、後世出タルモ多ケレバ、ソレニ依リテハ疑フベキニ非ズ、思フニ此器、宋ヨリ以前戰爭ノ際、早ク塞外ヘ奪行キタルヲ【荀勗ガ晉前尺ヲ作リシ時、證ヲ此器ニ取リシコト隋書ニ出ヅ、又此器晉ノ武庫中ニアリシコト、劉徽ガ九章算術ノ注ニ云ヘリ、其後諸書ニ見エザレバ、晉ノ江東ニ遷リシ時ノ亂ナドニヤ、北方ニ奪行キタリケン、按ズルニ漢書律歷志注ニ、「鄭氏曰、云云、今尙方有二王莽時銅斛一」ト云ヘリ、鄭氏何レノ時ノ人ナルカ詳ナラズ】遼朝ニ傳ヘ、淸一統ノ後北京ニ入リシニモアルベシ、淸ノ學者ノ是ヲ證セザリシハ疑ハシキニ似タレドモ、祕府ニ藏メタル器ハ容易ク臣下ノ見ルコト能ハザルベク、又此器ノ圖、西淸古鑑ニ載セタレドモ、其書乾隆十四年ニ就リタレバ、ソレヨリ前ナル閻若璩・沈彤ガ輩ハ、今世此器ノ傳ハリタルヲ知ラザリシナルベシ、其製度古ニ合ヘル上ニ、隋志ニ載セタル後魏ノ景明中ニ、王顯達ガ獻リシ王莽ノ銅權ノ銘ハ、此量ノ銘ト同ジケレドモ【隋志ノ全文下ニ引リ】戊辰ノ二字重リタルヲ脫シタル故ニ、八十一字ト云ヒシニ合ハザルニ、此量ノ銘ニハ戊辰ノ二字重リテ正ニ八十一字ト云フニ合ヘリ、【錢大昕ガ二十二史考異ニ、隋志ノ銅權ヲ「按黃帝初祖以下、凡七十九字、幷律權石重四均六字、計レ之則爲二八十五字一矣」ト云ヘルハ、隋志ノ權銘ヲ算

ヘシニ七十九字ニテ、隋志ニ「銘八十一字」トアルニ合ハズ、又上ノ律權石重四鈞ノ六字ヲ合セテ計フレバ、又八十五字ニテ是ニテモ隋志ノ言ニ合ハザルヲ疑ヒシナリ、錢氏コノ嘉量ヲ以テ證シタランニハ、戊辰ノ二字ノ脱タルヲ知ルベカリシニ、此ニ心ヅカザリシナルベシ、書ヲ讀ン人ハ古器ニ心ヲ留メテ考フベシ、必益アルモノナリ】權ノ銘ニ、「德帀于辛」トアル辛ハ新ノ譌ナルヲ、量ノ銘ニハ譌ラズ、【北史ノ元匡ガ傳ニ、彼權銘ヲ引キタルニハ譌ラズシテ新トアリ】又寡ヲ寔ニ作リシモ、後人ノ思ヒヨルベキニアラザレバ【西淸古鑑ニ寔ヲ皆寬ト釋シタルハ、寔ヲ借リテ寡トシタルコトヲ知ラデ誤リタルナリ】古物ナルコト、疑無カルベシ

或人又難ジテ曰、隋唐ノ小度・小量・小稱ハ漢ノ制ヲ承ケタルモノナルニ、年ヲ經ルコト久シケレバ譌替シテ、尺ハ漢尺ヨリハ六分長ク、斛ハ漢斛ヨリ二升餘多ケレバ、稱モ漢稱ヨリハ重カルベキニ、漢ノ一斤ヲ六十匁〇五分ト定ムレバ、唐ノ一斤用テ漢ノ一斤ヨリハ七匁餘輕キハ如何、答、尺度ノ年ヲ經テ譌長スルコトハ古ヨリシテ然リ、量ハ尺度ニテ起セバ【所謂千六百二十寸ト云フ、是ナリ】是モ年ヲ經テ譌ハ其容ルコト多クナルベキ理ナリ、稱ハ尺度ニテ定ムル者ニアラザレバ、譌替ノ樣同ジカラザリシト見エタリ、【唐大尺ハ皇國ニテモ、西土ニテモ、今ニ其制ヲ承用フルニ、此ニテモ彼ニテモ譌長シ、量モ其ニ後世ハ古ヲ失ヒテ大ニナリシニ、稱ノミ皇國モ西土モ、皆唐ノ時ト同ジキモ、度量ニ關ラズシテ傳ハリシ故ナルベシ】今傳ハレル漢ノ五銖錢ヲ稱ルニ七八分ノ者多ク、【漢ノ一斤ヲ六十匁〇五分トスレバ、

五銖ハ七分八氂七豪七絲七忽不盡ナリ】隋ノ五銖錢ヲ稱レバ六分餘ナル者多シ、【隋唐ノ小稱ハ一斤五十三匁三分三氂三豪三絲三忽不盡ナレバ、五銖ノ重サハ六分九氂四豪四絲四忽不盡ナレドモ、隋書（食貨志）ニヨルニ、隋ノ五銖錢ハ實ハ四銖七絫五黍有奇ナレバ、今ノ六分六氂弱ナリ】コレニ依レバ隋唐ノ稱ハ漢ノ稱ヨリ輕カリシヲ證スベシ【荻生氏以下ノ定メタル漢稱、皆隋唐ノ小稱ヨリ輕シ、漢ノ五銖ノ重サト、隋ノ五銖錢ノ重サトヲ按ブレバ、諸說ノ非ナルコト辨ゼズシテ明ナルベシ】

或人又難ジテ曰、漢稱諸家ノ說、李時珍十六匁ヲ一斤トスル者最輕シ、然レドモ傷寒論ノ藥劑多クハ煎ジ難シ、【タトヘバ桂枝加大黃湯ノ藥劑二十兩、水七升ニテ煮テ、三升ヲ取リ分テ三服ストアリ、十六匁ヲ一斤トスレバ、二十兩ハ二十匁ナリ、水七升ハ今ノ七合八勺九撮弱、三升ハ今ノ三合三勺八撮強、假ニコレヲ三服ニ分テバ一服ノ藥劑六匁六分六氂不盡、水一合五勺三撮弱ヲ以テ煎ジ、一合一勺二撮餘ヲ取ルベケレバ、藥多ク水少クシテ煎ジ難シ】況六十匁有奇ヲ一斤トセバ絕テ煎ズルコト能ハズ、【六十匁〇五分ヲ一斤トスレバ前方二十兩ハ七十五匁六分二氂五豪ナリ、モシ三服ニ分テバ、一服ノ藥二十五匁二分有奇ナレバ、前ニ云ヒシ水ノ量ニテハイヽヨヽ煎ジ難シ、三因方ニ、「按二藥書一、漢方湯液大劑三十餘兩、小劑十有餘兩、用水六升或七升、多煎取二一升三升一、並分三服、若以二古龠量一、水七升煎二今之三十兩一、未レ濟レ得レ過、況散末藥、只服二方寸一、刀圭匕丸子如二梧桐子大一、極至二三十粒一、湯液豈得レ如レ此懸絕」ト云ヒシモ煎湯ノ藥劑ノ多キヲ疑ヒタルナリ、古龠量トハ宋ノ小量小稱ヲ云ヘルナラン、宋小量ノ七升ハ

今ノ八合九勺四撮強、宋小稱ノ三十兩八百匁ナリ】今一斤ヲ六十匁〇五分ト定メタラバ古醫方ノ轉ジ難キヲ如何、答、此書度量權衡ヲ考ル大切ノ事ニシテ、度量權衡ノ本末ヲバ略考得ルモ、此ニ至リテ皆通ズルコト能ハズ、【今ノ世ニテ古ノ度量權衡ヲ知ラデ在ルベカラザルハコノ古醫方ノ一事ノミナリ】是ハ常用ノ稱ヲ以テ藥劑ヲ稱ル故ニ、【此ニ常用稱ト云フハ、漢魏ノ時常ニ用フル權衡ヲ云ヘルニテ、唐宋大稱ノ事ニハアラズ】轉ズル事能ハザルナリ、醫家ノ稱ハ常用ノ稱トハ同ジカラズ、常ノ稱ノ一斤ヲ古醫方ノ十斤トス、其故ハ漢書ニハ「一龠容千二百黍重十二銖」トアレバ、一銖ハ百黍ノ重サナルニ、名醫別錄ニハ「古稱惟有銖兩而無分名、今則以十黍爲一銖、六銖爲一分、四分爲一兩、十六兩爲一斤、雖有子穀秬黍之制、從來均之已久、正稱依此用之」ト云ヒ、【此書今逸シテ傳本ナシ、證類本草ニ載セタルニ據ル】千金方ニ其文ヲ載セタルニモ、「十黍爲一銖」トアリテ、其末ニ「此則神農之稱也」ト云ヘリ、【朱載堉コノ十黍ヲ「當作百黍」ト云ヘリ、張介賓モ此說ヲ承用ヒタレドモ、醫心方ニ引キタル范汪方ニモ、「六十黍粟爲一分」トアリ、（黍粟トハ、黍ノイマダ舂カザルヲ云ヘルニテ、黃粒ノ粟ニハアラズ）一分ハ六銖ナレバ、是モ十黍ヲ一銖トセシナリ、然レバ朱氏ガ百黍ニ作ルベシト云ヒシハ、誤リテ藥稱ト常用稱トヲ混ジタルナリ、清ノ王丙ガ攷正古方權量說ハ、其說誤多クシテ據ルニ足ラザル書ナレドモ、張介賓ガ朱載堉ノ誤ヲ承ケテ、「當作百黍」ト云ヒシヲ非ナリトセシハ當レリ、李時珍ガ十六匁ヲ一斤トスト云ヒシモ、百六十匁ノ十分ノ一ナリ、百六十匁ハ明ノ一斤ニテ、其本ハ隋唐大稱

ノ一斤ナルヲ、卽古ノ一斤ト思ヒシハ誤ナレドモ、其十分ノ一ヲ一斤トセシハ、十黍ノ說ヲ用ヒシナリ」是ニヨレバ十黍ヲ銖トスルハ、醫家傳來ノ稱法ニシテ、百黍ヲ銖トスル常用ノ稱トハ同ジカラズ、【十黍ヲ銖トスル時ハ、十銖ハ漢ノ常用ノ一銖ニシテ、十兩ハ漢ノ常用ノ一兩、十斤ハ漢ノ常用ノ一斤ナリ、然レバ古醫方ノ一銖ハ、今ノ一釐五毫七絲五忽餘、一兩ハ今ノ三分七釐八毫一絲二忽餘、一斤ハ今ノ六匁〇五釐ナリト知ルベシ】故ニ陶弘景ハ漢書ニ子穀秬黍ノ制アレドモ、醫家ニハソレニハヨラズシテ、十黍ヲ銖トスルコトヲ云ヒ、孫思邈ハ「神農之稱也」ト云ヒテ、百黍ノ銖ニ非ルヲ示シタリ、【此稱法何レノ時始リシカ其實ハ知ラレザレドモ、古來醫家ニコレヲ用ヒテ常用ノ稱ト同ジカラザル故ニ、俗ニ神農ノ稱ナリト云ヒナラハシシモノナラン】今十黍ヲ銖トシテ、傷寒論ノ「桂枝加二大黃湯一」ノ方ヲ計レバ、藥劑二十兩ハ今ノ七匁五分六釐二毫五絲ナリ、是ヲ分テ三服トスレバ、一服ノ藥二匁五分二釐有奇ニテ、【水ト煎法ハ前ニ云ヘルト同ジ】一日ノ服スル所三服ハ、三合三勺八撮強ナレバ、今人ノ藥ノ煎法ト甚異ナルコト無シ、【コノ佗ハ此方ヨリ皆藥少ク、水多ケレバ、煎ズベカラザル方無シ、余別ニ傷寒論權量表アリ、故ニ是ニハ具ニ載セズ、モシ百黍ノ銖ヲ以テ計レバ、七十五匁六分二釐五毫ナレバ、煎ジ難キノミナラズ、イカデ是ホドノ藥ヲ一日ニ飮得ベキ、三因方ニ丸散ト煎湯ト服スル分量ノ甚異ナルヲ疑ヒシハ、卽コレヲ云ヘルナリ】サレバ古昔醫家ニ云フ所ノ稱ハ、常用稱ノ十分ノ一ト知ルベシ、【小島寶素君（尙質）曰、從來權量ヲ考ヘシ人人、醫家ニテ十黍ヲ銖トスルコトヲ知ラズシテ、常用稱ヲ以テ古方

ヲ論ズル故、皆藥劑多ク水少クシテ煎ズルコト能ハザリシナリ、十黍ヲ一銖トスレバ、古方ノ分量ニテ今皆煎ズベシ、又古藥方ハ其合劑ノ時世ヲ正シ、稱量ノ沿革ヲ考ヘザレバ、其分量ヲ誤ルコト多シ、刀圭ノ家必ココニ心ヲ用フベキ事ナリト云ヘリ、小島君此說ヲ演ベテ、漢魏六朝隋唐宋元諸方ノ稱量ヲ歷代ノ沿革ニ考ヘ、經方權量考ヲ選集セラル、其書未全ク就ラズト云ヘドモ、日アラズシテ稿ヲ脫スベシ、是ヲ見テ諸家ノ論ゼシ藥方權量ノ說ノ誤リタルヲ覺ルベシ、

魏晉宋齊權衡ノ制聞エズ【宋書文帝紀ニ、「元嘉七年冬十月戊午、立二錢署一鑄二四銖錢一」トアリ、漢ノ四銖ハ今ノ六分三釐〇二絲有奇ナルニ、此錢ノ傳ハリタルヲ稱レバ、其重サ五分三釐、是ヨリ一斤ヲ求レバ、五十匁〇三分三釐ナリ、漢稱ニ比レバ頗輕シ、然レドモコノ錢今世傳ハルモノ多カラズシテ、數錢ヲ校スルコト能ハザレバ、此確證ニヨリテ、宋稱ヲ定ムルコトヲ得ズ、梁陳ノ時ノ稱是ヨリ重キヲ以テ見レバ、今傳ハル四銖錢ハ初鑄錢ヨリ輕薄ニ作リシ者カ、又ハ世ニ傳ハルコト久シウシテ消耗セシモノナルベシ】隋書ニ一「梁陳依二古稱一」ト云ヒタレバ、魏ヨリ陳ニ至ルマデ、古ノママナリシト見エタリ、【按ズルニ、隋書食貨志ニ、「梁武帝乃鑄レ錢、肉好周郭、文曰五銖、重如二其文一」トアリ、所謂內郭五銖ナリ、漢ノ五銖ヲ計ルニ、今ノ七分八釐七毫七絲五忽有奇ナリ、然ルニ顧烜ガ錢譜ニ、「此錢ヲ一重四銖三絫二黍、每百枚重一斤二兩一」ト云ヘリ、是ニ依レバ銘文ハ五銖ナレドモ、其實ハ五銖ニ及バザリシナリ、漢ノ四銖三絫二黍ハ、今ノ六分八釐〇六絲二忽弱ナリ、今此錢ヲ稱ルニ、重キハ七分五釐、輕キハ五六分ナレバ、漢稱ト甚

異ナルコト無シ、又同ジ食貨志ニ「陳宣帝大建十一年、鑄二太貨六銖一」ト云ヘリ、漢ノ六銖ハ今ノ九分四氂五豪三絲ナルニ、今此錢ヲ稱レバ重キ者八分五氂ナリ、假ニ八分五氂ヲ六銖トシテ一斤ヲ求レバ、五十四匁四分ニテ、漢ノ一斤ヨリハ五匁六分少シ、然ラバ今世ニ傳ハル錢ノ初鑄錢ニアラザルカ、又ハ陳ノ頃ハ漢ノ稱ヨリモ輕クナリテ、唐ニ至リテハ遂ニ五十三匁三分三氂三豪三絲三忽不盡ニナリシニモアルベシ、然ラバ陳ノ稱ハ譌リテ漢ノ稱ヨリ輕クハナリタレドモ、北魏・北齊・後周ナドノ如ク、別ニ作リシ稱ニアラザレバ、隋書ニ「依二古稱一」トハ云ヘルナラン、制ヲダニ改メズバ譌リタルトテモ、史ニハ「依二古稱一」ト云フベキコトナリ、尺度ノ年ヲ經テ次第ニ譌リタルヲ見レバ、稱モ少シヅツノ異ハ必アリシナラン、然レドモ證トスルモノナケレバ、子細ニハ考ヘ難シ】

左傳正義【定八年】ニ、魏齊斗稱【北魏・北齊ナリ】「於二古一二而爲レ一」トアレバ、後魏ノ初ニハ、古稱ニ倍シタル稱ヲ用ヒシナルベシ、【隋志ニハ此事ヲ載セザレドモ、北史ノ張普惠ガ傳ニ、北魏ノ高祖重稱ヲ改メシ事見エタレバ、其重サハ知ルベカラズトイヘドモ、後魏ノ始重稱ヲ用ヒシコトハ疑無シ、北齊ノ稱ヲ古ニ倍ストシタルハ誤ナルベキコト下ニ辨ズ】古稱ト云ヒシハ、漢稱ヲ指テ云ヒタルカ、唐小稱ヲ云ヒタルカ、又ハ陳隋ノ稱ヲ云タルカ詳ナラズ、【漢稱ヲ古稱トスルハ論無シ、唐人ハ唐小稱ヲ卽周漢ノ稱ナリトシテ古稱ト云ヘリ、唐小稱ヲ漢稱ニ比レバ、譌ハシタレドモ、北朝ノ稱ノ如ク別ニ作リシモノニアラザル故ニ、唐人コレヲ古稱ト云ヒシナルベシ、陳稱ノコトハ上ニ云ヘリ】漢稱ヲ倍スレバ、

斤　今百二十一匁

兩　今七匁五分六釐二毫五絲

銖　今三分一釐五毫一絲有奇

唐ノ小稱ヲ倍スレバ

斤　今百〇六匁六分六釐六毫六絲六忽不盡

兩　今六匁六分六釐六毫六絲六忽不盡

銖　今二分七釐七毫七絲七忽不盡

後魏ノ孝文帝ノ時、此重稱ヲ停メタリ、【北史張普惠ガ傳ニ、「高祖廢二大斗一、去二長尺一、改二重稱一、以愛レ民薄賦」ト云ヘリ、高祖ハ即孝文帝ナリ、後魏書ニモ、北史ニモ、本紀ニハ大和十九年ニ「改二長尺大斗一」トアリテ稱ノコトハ見エズ、隋志權衡ノ條ニモ、「後魏孝文時一依二漢志一作二斗尺一」トノミアリテ、稱ヲ改メシコトハ云ハザレドモ、是ヲ權衡ノ條ニ載セタルニテ稱ヲモ改メシコト知ルベク、且張普惠ガ傳ニ改重稱トアルニテ其事明ラケシ、斗尺ヲ改メシハ大和十九年ナレバ（上卷ニ詳ニス）稱ヲ改メタルモ、必其時ナルベシ、【其改メシ稱ハ漢稱ト同ジカリシナラン、其故ハ宣武帝ノ景明中ニ【大和二十三年、孝文帝崩ジテ太子位ニ卽ク、是宣武帝ナリ、翌年景明ト改元ス】王莽ガ銅權ヲ獻リタルヲ、公孫崇ガ漢志ニ依リテ作レル稱ニテ、稱リタルニ符契ヲ合セタルガ如クナリシト云ヒ、【隋志ニ「後魏景明中幷州人王顯達、獻二古銅權

一枚ハ、上銘八十一字、其銘云、律權石重四鈞、又云、黃帝初祖德帀二于虞一、虞帝始祖德帀二于辛一、歲在二大梁一、龍集戊辰、直定二天命一、有レ人據二土德一、受二正號一、卽レ眞、改レ正建レ丑、長壽隆崇同二律度量衡一、稽二當前人一、龍在二己巳一、歲次二實沈一、初班二天下一、萬國永遵、子子孫孫、享傳億年、此亦王莽所レ制也、其時大樂令公孫崇依二漢志一先修二稱尺一、及レ見二此權一、以二新稱一稱レ之、重一百二十斤、新稱與レ權、合如二符契一、於レ是付レ崇調レ樂」ト云ヘリ、北史ノ元匡ガ傳ニ權銘ヲ引キタルト、西淸古鑑ニ載セタル王莽ノ銅斛ノ銘トニ依ルニ、「德帀于辛」トアル辛字ハ新ノ譌ナリ、又斛銘ニヨルニ、戊辰ノ下、直定ノ上ニ、又「戊辰」ノ二字アルベシ、モシ此二字無ケレバ八十一字ト云ヒシニ合ハズ、又「有人」ヲ斛銘ニハ「有民」トアリ、然ラバ權銘ニモ「有民」ト有リツルヲ、隋書ヲ作リシ時太宗ノ名ヲ避ケテ改メシナルベシ、按ズルニ「公孫崇依二漢志一先修二稱尺一」トハ大和ノ稱ヲ云ヘルナルベシ、大和ノ稱ヲ公孫崇ガ作リシコト北史ニモ、北魏書ニモ見エザレドモ、景明ヨリ先ニハ大和ノ時ヲ置テハ外ニ稱尺ヲ改メシコト無ケレバナリ、但景明ノ後、正始ノ時、公孫崇ガ造リシ尺ハ黍十二ヲ一寸トセシコト、北史元匡ガ傳ニ見エ、永平ノ時ハ公孫崇縱黍ノ說ヲ立シコト北魏書律曆志ニ見エテ、共ニ古キ背キシニ、稱ノミ王莽ガ權ト符契ヲ合セタルガ如クナリシハイブカシキコトナリ、公孫崇ト云ヒシハモシ誤ニハアラザルカ】孝莊帝ノ永安二年ニ【景明ノ後二十餘年ナリ】鑄タル五銖錢ノ【後魏書ノ食貨志ニ、「孝莊永安二年秋、詔改鑄、文曰二永安五銖一」ト云ヘリ】今世ニ傳ハレルヲ稱ルニ、其重サ七分餘、八分ニ及バズシテ漢ノ五銖錢ト略同ジケレバ、此ゴロノ稱、漢ト同ジカリシヲ證ス

ベシ、然レドモ大和ノ時改メタル尺ヲ民間ニテ用ヒザリシヲ見レバ、此稱モ普ク世ニ行ハレザリシニモアル
ベシ

隋志ニ「齊以二古稱一斤八兩一爲二一斤一」ト云ヘリ、是北齊ノ稱ナリ、漢ノ一斤八兩ヲ一斤トスレバ

斤　今九十匁〇七分五釐

兩　今五匁六分七釐一毫八絲七忽餘

銖　今二分三釐六毫三絲三忽弱

唐小稱ノ一斤八兩ヲ一斤トスレバ

斤　今八十匁

兩　今五匁

銖　今二分〇八毫三絲三忽不盡

北齊ニテ鑄タル五銖錢ノ【北史齊文宣帝紀ニ、「天保四年春正月、自二魏末一用二永安錢一、又有二數品一、皆輭濫、己丑鑄二新錢一、文曰二常平五銖一」トアリ、隋書食貨志ニ此錢ヲ載テ、「重如二其文一」ト云ヘリ】今ノ世ニ傳ハル者ヲ稱ルニ、大凡一匁前後ニシテ、一斤八兩ヲ一斤トスト云ヘルニ略合ヘリ、【北齊ノ一尺ハ漢ノ一尺五寸許ナリ、北齊ノ一斗モ漢ノ一斗五升許ナルベク思ハルレバ、北齊ノ稱ノ一斤八兩ヲ一斤トスルモ、漢稱ヨリ計リシニ似タリ、然ラバ此ニ云フ古稱ハ漢稱ヲ指ス如クナレドモ、漢ノ一斤八兩ヲ一斤トスレバ、五

銖ハ一匁一分八厘一毫六絲四忽有奇ニテ、常平錢ヨリハ少シ重シ、又唐小稱ノ一斤八兩ヲ一斤トシテ五銖ヲ求レバ、一匁〇四厘一毫六絲六忽不盡ニシテ、常平錢ノ重サト略合ヘバ、唐小稱ヨリ計リシモノナルカ、又ハ陳ノ頃ノ南方ノ稱ヲ云ヘルモ知リ難シ、又左傳正義ニハ、「魏齊斗稱於古二而爲一」ト云ヒタレドモ、試ニ其說ニ從ヒテ漢稱ヲ倍シテ五銖ノ重サヲ求ムレバ、一匁五分七厘五毫五絲二忽有奇、唐小稱ヲ倍シテ求ムルモ、一匁二分八厘八毫八絲八忽不盡ニテ、共ニ常平錢ノ重サト合ハザレバ、北齊ノ稱ヲ古ニ倍スト云フ說ハ非ナルベシ】 按ズルニ此稱北齊ニ始リシニハアラデ、東魏ノ天平三年【孝靜卽位ノ三年】「均斗尺」ト云ヘル時、改メシ制ナルベシ、【天平三年斗尺ヲ均クセシコトハ北齊書ニ出デ、上卷ニ引リ、但權衡ノコトヲ云ハザレバ斗尺ヲノミ改メタリシ如ク聞ユレドモ、後魏ノ大和ノ時、度量衡共ニ改メタルヲ、後魏書ニモ隋書ニモ衡ノコトヲバ云ハズシテ、皆斗尺ヲ改ムトノミ云ヘルト同ジク、文ヲ略シタルモノナリ、西土ニハ文法ノ簡易ナルヲ貴ブ故ニ、カカル事ヲモ省キテ、其實ヲ失フコトママ有リ、書ヲ讀ン人ヨク心ヲツクベシ、大和ノ時ノ事ハ上ニ云ヘリ】 其故ハ後魏ノ永安五銖錢ハ徑曲尺七分五厘、重八分ニ及バザルニ【徑、漢ノ一寸、重、漢ノ五銖ニ造リシモノナルベシ】 一種徑曲八分、重一匁ノモノアリ、徑・重常平錢ト同ク略北齊ノ五銖ノ重サニ合ヒテ、後魏ノ五銖ノ重サト同ジカラズ、銅色製作モ常平錢ニ似タレバ、北齊ノ錢ナルベク思ハルレドモ、北齊ニハ永安錢ヲ鑄ザレバ【隋書食貨志ニ、「齊神武霸政之初、承魏用永安五銖云云、文宣受禪除永安之錢、鑄常平五銖」トアリ、齊神武霸政之初トハ、後魏ノ末ニ齊王高

歡、孝靜帝ヲ擁立シ政ヲ攝シテ東魏ト云ヒシ時ノコトナリ、神武ハ北齊ニテ高歡ヲ追諡セシ號ナリ、「文宣受禪」トハ高歡ガ次子高洋、東魏ノ禪ヲ受テ國ヲ齊ト改メシ時ノコトニテ、（所謂北齊ナリ）文宣ハ高洋ガ諡ナリ、高洋禪ヲ受テ年號ヲ天保ト改メ、其四年ノ春ニ至リテ常平錢ヲ鑄タリ、然ラバ三年ノ冬マデハ東魏ヨリ用ヒ來リシ永安錢ヲ用ヒシナルベシ、モシ三年マデニ錢ヲ鑄タリトモ、既ニ國號年號ヲモ改メタル上ハ、永安ノ號ヲ用フベキニアラザレバ、北齊ニテハ必永安錢ヲバ鑄マジキ理ナリ】此錢ハ後魏書食貨志ニ、武定六年文襄王【文襄ハ高歡ガ長子高澄ナリ、武定五年高歡卒シテ後、嗣テ政ヲ攝シタリ、武定七年高澄卒シ、翌年其弟高洋遂ニ東魏ノ禪ヲ受テ國ヲ齊ト號ス、後兄澄ヲ文襄ト追諡セシナリ】以二錢文五銖一名須レ稱レ實、宜三稱錢一文重五銖者聽二人市用一計百錢重一斤四兩二十銖、自餘皆準レ此爲レ數」ト云ヘル錢ナラン、【泉志ニモ「此錢當レ堅レ之、東魏董逌謂二之北齊永安五銖一非也」ト云ヘリ、武定六年ハ孝靜帝即位ノ十年ニテ、斗尺ヲ均クセシ天平三年ヨリ八年ノ後ナリ、然レバ此時ハ既ニ古ノ一斤半ヲ一斤トスル稱ヲ用フル時ナレバ、其稱ニテ後魏ノ永安錢ヲ稱レバ、三銖三絫三黍不盡ニテ五銖ト云フ名ノ實ニ稱ハザルニヨリ、天平ノ稱ノ五銖ニ永安錢ヲ鑄改メシナリ、天平稱ノ五銖ハ古稱ノ七銖半ナル故ニ、此錢ノ重サ一匁許ニシテ、後魏ノ永安錢トハ同ジカラザルナリ、此錢今世ニ傳ハルコト後魏ノ永安錢ヨリ少キモ、行用ノ間僅ニ五年ナレバ、鑄シ錢多カラザリシ故ナルベシ、朽木龍橋公（昌綱）泉貨鑑ニモ、後魏ノ永安五銖錢ハ周郭渾厚ニシテ、形勢隋ノ五銖錢ニ似タリ、此錢ハ周郭細ク背ノ好郭少シ返張ヲナシテ、常平錢ニ彷彿タリ、後魏

ノ永安錢ニ比ブレバ大ニ異ナリト云ヘリ、徑重ノコトマデハ考ヘラレザリシカドモ、製作ヲ考ヘテ東魏ノ錢トセラレシハ、サスガニ凡庸ノ鑒識ニハ非リシナリ」此錢ノ重サ北齊ノ五銖ニ合ヘルヲ見レバ、東魏ノ武定六年、既ニ古稱一斤八兩ヲ一斤トセシ稱ヲ用ヒシナリ、然ラバ古稱一斤八兩ヲ一斤トスルハ、北齊ニ始マリシニハアラデ、東魏ノ天平三年ナリシコト明ナリ、此稱ヲ北齊ニテ用ヒシハ、東魏ノ制ニ從ヒシナリ、【東魏ノ制度ハ高歡ガ立テタルニ、北齊ノ文宣ハ高歡ガ二子ナレバ、東魏ノ制ニ從フベキ理ナリ、東魏ノ尺ヲ北齊ニテ承用ヒシヲモ思フベシ】隋志ニ、「周玉稱四兩、當二古稱四兩半一」ト云ヘリ、周トハ後周ヲ云ヘルナリ、【コノ稱法、何ニ依リシカ詳ナラズ】漢稱ノ四兩半ヲ四兩トスレバ

斤　今六十八匁〇六釐二毫五絲

兩　今四匁二分五釐三毫九絲有奇

銖　今一分七釐七毫二絲四忽餘

唐小稱ノ四兩半ヲ四兩トスレバ

斤　今六十匁

兩　今三匁七分五釐

銖　今一分五釐六毫二絲五忽

按ズルニ隋志ニ又「後周玉斗幷副金錯銅斗、及建德六年金錯題銅斗實同、以二秬黍一定レ量、以二玉稱一權レ之、

一斗之實、皆重六斤十三兩」ト云ヘリ、【一斗之實ヲ今本ニ一升之實トアルハ、傳寫ノ誤ナリ】玉斗ノ一斗ハ今ノ一升一合七勺有奇ナリ、今ノ米ノ重サニヨリテ今ノ一升ヲ四百匁トシテ此重サヲ計レバ、四百六十八匁許コレヲ六斤十三兩トシテ一斤ヲ求レバ六十八匁餘ニシテ、漢稱ヨリ計リシニ近ク、王鳴盛ガ云ヒシ米ノ重サニヨリテ今ノ一升ヲ三百二十六匁許トスレバ、玉斗ノ一斗ハ三百八十匁許、一斤ハ五十六匁餘ニテ唐小稱ヨリ計リシニ近シ、今何レトモ定メ難ケレドモ、常平錢ノ重サモ唐稱ヨリ計リシニ似、隋稱ヲ計リシ古稱ハ全ク唐小稱ナルベケレバ、古稱四兩半ト云ヒシハ、唐小稱ヲ云ヘルカ、又ハ上ニモ云ヒシ如ク、南方ニ漢稱ヨリハ輕ク、唐稱ヨリハ重キ稱アリテ、ソレヲ古稱ト云ヒシニモアルベシ

隋志ニ、「開皇以古稱三斤爲一斤」ト云ヘリ、【通典ニ、隋ノ權衡ヲ「前代三兩當今一兩」ト云ヘリ、前代トハ漢魏ヨリ梁陳マデヲ云ヒ、今トハ隋ヲ云フナリ、千金方ニ「隋人以三兩爲一兩」ト云ヒシモ、即是ナリ】按ニ唐大稱ハ、即此稱ニ依リタルナレバ【上卷中卷、唐ノ度量ノ條併セ見ルベシ】ココニ古稱ト云ヘルハ、唐小稱ナルベシ、開皇ノ稱ヲ唐大稱トスレバ

斤　今百六十匁

兩　今十匁

銖　今四分一釐六毫六絲六忽不盡

按ズルニ後周ノ時、市中ニテ度ハ一尺二寸ノ尺、量ハ三倍ノ量ヲ用ヒタルヲ、開皇ノ時ニ至リテモコレヲ

民ノ便トスルニ從ヒテ、官尺・官量トシタルニ準ズレバ、三斤ヲ一斤トスル稱モ後周ノ市中ニ用ヒタリシヲ、開皇ノ時ニ官稱トセシモノナルベシ、常ニハ此稱ヲ用ヒシカドモ、法物ヲ稱ルニハ此稱三分ノ一古稱ヲ用ヒタリ、【此時鐵尺一尺二寸ノ尺ヲ官尺トシテ常用トシタレドモ、鍾律ヲ調フルニハ鐵尺ヲ用ヒタルト同ジ】其證ハ此時鑄タル五銖錢ハ其重サ實ハ四銖七絫五黍ナリト云ヘルニヨリ【隋書ノ高祖紀ニ「開皇元年九月、行五銖錢」ト云ヘリ、食貨志ニハ「高祖受周禪、以天下錢貨輕重不等、乃更鑄新錢、背面肉好皆有周郭、文曰五銖、而重如其文、毎一千重四斤二兩」トアリ、是ニヨレバ其實ハ一錢ノ重サ四銖七絫五黍ナリシナリ、(四斤二兩ハ大稱ナリ) 故ニ封演ガ錢譜ニハ此錢ヲ重一銖六絫トアリ、(今本泉志ニ一銖六黍トアルハ傳寫ノ誤ナリ) 是ハ大稱ニテ稱リシナリ、大稱ノ一銖六絫ハ小稱ノ四銖八絫ナレバ、實ハ大稱ノ一銖五絫八黍三分黍之一ナレドモ、大凡ニ一銖六絫ト云ヘルナルベシ】四銖七絫五黍ヲ大稱ニテ計レバ、一匁九分七釐九毫一絲六忽餘、小稱ニテハ六分五釐九毫七絲二忽有奇ナリ、今此錢ノ傳ハル者ヲ見ルニ、徑曲尺七分五釐許ノ者多シ、コレヲ稱ルニ重六分餘ナレバ、隋ノ五銖錢ノ小稱ニテ定メシコト知ルベシ、【又此錢ニ一種製作渾厚ニシテ、徑曲尺八分五釐重一匁ノモノアリ、是ハ隋志ニ「開皇三年四月、詔四面諸關各付百錢爲樣不同者、卽壞以爲銅入官、京師及諸州邸肆之上、亦皆立榜置樣爲準、不中樣者不入于市」トアル時、改鑄タリシモノナルカ、然レドモ一匁ハ大稱ノ二銖四絫小稱ノ七銖二絫ニテ五銖ト云フニ合ハズ、其重サ東魏北齊ノ五銖錢ノ重サト略同ジキニヨリテ考フルニ、此時民間東魏北齊ノ錢ノ重キヲ好ミテ、

隋ノ錢ノ輕小ナルヲ不便トセシニヨリ、隋書ニテモ後ニ東魏北齊ノ錢ノ重サニ倣ヒテ鑄改メシナラン、然ラバ大稱ノ二銖五絫、小稱ニテハ七銖五絫ナルベキニ、大稱ノ二銖四絫、小稱ノ七銖二絫ナリシハ、(大稱二銖四絫小稱七銖二絫ハ東魏北齊ノ四銖八絫ナリ) 其據リタル東魏・北齊ノ錢其實重サ五銖ナラザリシカ、又ハ開皇元年五銖錢ヲ鑄シ時實ハ四銖七絫五黍ナリシヲ思ヘバ、東魏・北齊ノ錢ハ制ノ如クナリシカドモ、(カク見ル時ハ今傳ハル東魏・北齊ノ錢ハ初鑄錢ニアラザルカ) 隋ニテ鑄シ大様ノ五銖ハ、東魏・北齊ノ四銖八絫ニ造リシモ知ルベカラズ、此事史ニ見エザレドモ、唐ノ開元錢ヲ大稱二銖四絫ニ作リシモ、民ノ此錢ヲ便トセシニヨリテ、此錢ノ重サニ沿リシモノナルベケレバ、必然カアリシナラン、開元錢ヲ如レ此造リシ故ニ民ノ好ニ合ヒテ通行甚便ナリシニヨリ、唐書ニ開元錢ヲ「得二輕重大小之中一」ト云ヒ、コノ後ノ諸錢皆開元錢ノ輕重ヲ法則トセシナリ】

「大業中依二復古稱一」ト、是モ隋志ニ出ヅ、【煬帝紀ニ、「大業三年、度量權衡並依二古式一」ト云ヒシモ此事ナリ】此時三倍ノ大稱ヲ止メテ小稱ヲ用ヒシナリ、【隋書刑法志ニ、高祖開皇元年ニ新律ヲ定メシコトヲ云ヒ、其贖法ヲ載セテ、「笞十者銅一斤、加至二杖百一則十斤、徒一年贖銅二十斤、每等則加二銅十斤一、三年則六十斤矣、流一千里贖銅八十斤、每等則加二銅十斤一、二千里則百斤矣、二死皆贖銅百二十斤」ト云ヘリ、又其文ニ次テ「煬帝即位、又勅修二律令一、時升稱皆小舊三倍、其贖銅亦加二三倍一爲レ差、杖百則三十斤矣、徒一年者六十斤、每等加二三十斤一爲レ差、三年則一百八十斤、流無二異等一、贖二百四十斤、二死同贖二百六十斤、其

實不レ異二開皇舊制一トアルハ、大業律ヲ制セシ事ヲ云ヘルナリ、大業ノ稱ハ開皇ノ三分ノ一ナレバ、大業贖銅ノ數ハ開皇贖銅ニ三倍シタレドモ、其實ハ同ジキヲ云フナリ】唐ノ小稱ハ此稱ニヨリタレバ、【律行事抄ニ「隋煬帝立二尺度秤一準二古立一樣、余親見レ之、唐朝御宇任二世兩用一、不レ違二古典一」トアリ、兩用トハ開皇ノ稱ヲ大稱トシ、大業ノ稱ヲ小稱トシテ、並ベ用フルヲ云フナリ】

此稱ノ重サ唐ノ小稱ト同ジ

斤　今五十三匁三分三氂三毫三絲三忽不盡

兩　今三匁三分三氂三毫三絲三忽不盡

銖　今一分三氂八毫八絲八忽不盡

唐ニハ大小二稱ヲ並ベ用フ、【開皇ノ舊ニ依リシナリ】但湯藥ヲ合スル外ハ悉ク大稱ヲ用ヒシナリ、【六典・通典・舊唐書又南部新書ニ引キタル開元令ニ見ユ、唐稱ノコトハ既ニ權衡攷ニ詳ニス】

宋ノ稱ハ建隆元年、精シク古制ヲ考ヘ、前代ノ舊式ヲ按ジテ作ルベシト詔シタリ、【玉海ニ「太祖受命之初、受二藏吏歲輸一金幣權衡失レ準、建隆元年八月丙戌、有司請下造二新量衡一以頒中天下上、詔精考二古制一、按二前代舊式一作レ之、禁二私造一者一」トアリ、宋史モ同ジ】前代ノ舊式ト云ヒタレバ、唐稱ニ依リシコト知ルベシ、又皇祐新樂圖記ニ、天聖令ヲ引テ、「諸權衡以二秬黍中者一、以二百黍之重一爲レ銖、二十四銖爲レ兩、十六兩爲レ斤」ト云ヘリ、唐令ノ文ト全ク同ジケレバ、是モ宋稱ノ唐稱ニ依リシヲ證スベシ、但三斤ヲ大一斤トスルコト

ヲ載セザレバ、小稱ヲ常用トセシ如クナレドモ、宋人皆今ノ一兩ハ古ノ三兩ト云ヒタルニテ、【傷寒總病論、林億ガ千金方凡例、成無己ガ傷寒論注、傷寒證治論注】大稱ヲ用ヒシコト明ラケシ、【新業圖記ニハ、業律ノ僞ニ引證セシ故、大斤ノコトハ用無ケレバ載セザリシナリ、天聖令ニハ必其事アリシナルベシ】又唐八開元錢ヲ一十錢重一兩、一千重六斤四兩、每兩二十四銖、則一錢重二銖半以下」ト云ヘルニ、【六典・通典等ニ出ヅ、權衡攷ニ引リ】宋ノ淳化錢ヲモ重二銖四絫、ソノ錢二千四百ニテ重十五斤ト云ヒ、【玉海ニ一景德中劉承珪加ニ參定一、而權衡之制益備、以ニ御書眞草行三體一、淳化錢較定、重二銖四絫、爲ニ一錢ニ者、以ニ二千四百ニ得ニ十五斤一、爲ニ一稱之則ニ一トアリ、宋史ニ載セタルモ是ニ同ジ、二千四百ニテ十五斤ナレバ、一斤ニテハ六斤四兩、十錢ニテハ一兩ナリ】咸平錢十文ヲモ重一兩ト云ヘリ、【陸友仁ガ硯北雜志ニ、一咸平錢十文、重一兩一トアリ】今淳化・咸平ノ錢ヲ稱ルニ、開元錢ト同ジケレバ、宋稱ハ唐稱ニ依リタルコトヲモ、又大稱ヲ常用トセシコト唐ト同ジカリシヲモ證スベシ、【上ノ諸錢ヲ稱リシモノ皆大稱ナリ、但イヅレモ後ヨリ稱リシニテ、錢ヲ造ル時、大稱ニテ定メタルニハアラズ】又宋ノ時ヨリ大稱二銖四絫ナル開元錢ノ重サヲ一錢トシ、其十分ノ一ヲ一分トシ、毫釐絲忽ヲ以テ稱リタリ、【度ノ尺寸ハ人體ヨリ定メ、ソノ寸ヲ十分シタルヲ分ト云ニヨリテ、稱ニソノ名ヲ借リテ一錢ヲ十分シタルヲ分ト云ヒ、毫釐絲忽モ皆度ノ名ヲ借リテ稱ノ名ニ用ヒシナリ、按ズルニ開元錢ノ重サハ、隋ノ大稱ノ五銖錢ノ重サニヨリシナルベシ、隋ノ大稱ノ五銖錢ノ重サハ東魏・北齊ノ五銖錢ニ依リタルベキコト上ニ云ヘリ、然ラバ一錢ト云フ稱ノ本ハ、東魏ノ天平

ノ稱ノ四銖八絫ノ重サヨリ出タルモノナリ】此事何レノ時定メタルカ、サダカニ記セルモノ無シ、【淸ノ王鳴盛ガ十七史商榷ニモ、「分本レ度名、今人乃以爲二權之名一、不レ知レ起二於何時一」ト云ヘリ】玉海ニ「淳化三年三月、癸卯、詔曰、秬黍之制、或差二豪氂揮鉤一、爲二姦害一及二黎獻一、宜下詳二定秤法一著爲中通規上、事下二有司一、內藏庫使劉承珪・劉正參言、太府寺銅式【宋史ニハ銅式ノ上ニ舊字アリ】自二一錢一至二十五斤一【宋史ニ十斤トアルハ脫シタルナルベシ】凡五十一、輕重無レ準、府藏歲受二黃金一、必自二豪氂一計レ之、式自レ錢始、則傷二於重一、權衡法以二十黍一爲レ絫、十絫爲レ銖、二十四銖爲レ兩、度法起二於忽一、十忽爲レ絲、至二十氂一爲レ分、每分二絫四黍、以二開元通寶錢肉好周郭均者一校レ之、十分爲二一錢一、積二十錢一爲二一兩一」トアリ、【權衡法ト云ヨリ以下、宋史ニ無シ、淸ノ趙翼ガ陔餘叢考ニ、「宋太宗詔吏二定權衡之式一、崇儀・使下劉蒙劉承珪等乃取二樂尺積黍之法一、移中於權衡上、於レ是權衡中有二絲忽豪氂分錢之數一、此近代兩錢分氂豪忽絲之所二由起一也」ト云ヒシモ此事ナリ】此文脫簡アルカ其義明ナラザレドモ、古來銖兩ヲ以テ稱リシニ、此時ヨリ開元錢ノ重サヲ錢ト名ヅケ、其內ヲバ度ノ名ヲ借リテ、分氂豪絲忽ト稱リタルヲ云ヘルナリ、【按ズルニ錢分ノ稱法ハ、開元錢一枚ヲ一錢ト定メ、ソレヲ十分シタルヲ分ト云ヒ、分ヲ十分シタルヲ氂ト云ヒテ、絲忽ニ至リシナリ、宋史ニ忽ヨリ起リ、十絫シテ終ニ錢兩ニ至ルト云ヒシハ、倒ニ誤レリ】サレドモ是ヨリ前ノ太府寺ノ銅式ニ【銅式ハ法馬ノコトナルベシ、法馬ハ今ノ分銅ナリ】重一錢ノモノアリト云ヒ、歲ゴトニ黃金ヲ受ルニハ、豪氂ヲ以テ計ルコトヲ云ヒタレバ、錢分氂豪ヲ以テ稱ルコト淳化ノ時ニ始マリシニハアルベカラ

ズ、又太平聖惠方ニモ藥種ヲ計ルニ何錢ト云ヘリ、【書錄解題ニ、聖惠方ヲ載セテ「太平興國中求集名方淳化三年御製序」ト有リ】唐マデノ醫方書ハ皆銖兩ヲ以テ云ヒタルニ、聖惠方ニハ錢ヲ以テ記シシハ、此時世専銖ニテハ稱ラズ、錢ニテ稱リシ故ナルベシ、モシ此年始テ錢分等ヲ用ヒタランニハ、イマダ世ニ普ク用フルニハ至ラザルベケレバ、忽ニ方書ニ是ヲ以テ記サンコトハ不便ナレバ、必サハアルマジキナリ、按ズルニ貞元廣利方ハ唐ノ德宗ノ時ニ撰ビシ書ナルニ「治中惡客忤垂死屬者一錢重」ト云ヘリ、【此書今世傳ハラズ、今證類本草ニ引シニ據ル】一錢重トハ開元錢一枚ノ重サト云フコトニテ、稱ノ名ニハ非ルベケレドモ、錢ヲ以テ輕重ノ準トスルコトハ、既ニ唐ニ始マリシナリ、【三國志、華佗ガ傳ニ、「與ニ君散ニ兩錢ニ」トアルハ、錢五匕ノコトニテ、稱ノ名ニハアラズ、思ヒ混ズベカラズ、錢五匕ハ太草序例ニ「錢五匕者今五銖錢、邊五字者以抄之、亦令不落爲度」ト云ヘルモノナリ】是一兩【大稱】ヲ十分シタル一ナレバ、數フルニ簡便ナルヲ以テ、唐末五代ノ間、市中コレヲ用ヒ、又錢ノ十分ノ一ヲ分、分ノ十分ノ一ヲ釐ナドト稱リ、銖ヲ以テ稱ルヲバ不便ナリトセシカバ、宋ノ淳化ニ至リテ、官ニテモ遂ニ錢分釐豪絲忽ト云フ稱法ヲ用ヒ、古ヨリノ銖絫ト並ベ行ヒシナルベシ、【隋唐ニテ古稱、今稱ヲ並ベ用ヒシト同ジ】故ニ景德中ニハ銖絫ヲ以テ稱ルト、錢分ヲ以テ稱ルトノ權衡二ツヲ制シタリ、【玉海ニ「景德中承珪・重加參定、而權衡之制大備」云云、從ニ其大樂之尺ニ就成ニ二衡ニ、因ニ度尺ニ而求レ釐、自ニ積黍ニ而取レ絫、以ニ御書眞草行三體ニ淳化錢較定、實二銖四絫爲ニ一錢ニ」ト云ヘリ、(宋史同)「就成ニ二衡」トハ權衡二ツヲ造ルヲ云ヒ、「因ニ度尺ニ而求レ釐」トハ

度ノ名ヲ借リテ稱ノ名トシ、錢分ヲ以テ稱ル權衡ヲ作ルヲ云ヒ、「自二積黍一而取レ絫」トハ舊ノ如ク銖絫ヲ以テ稱ル權衡ヲ作ルヲ云ヘルナルベシ、玉海又會要ト紀トヲ引タルニ依レバ、是ヲ定メシハ景德二年八月丙戌ノ事ナリ、按ズルニ稱ノ一錢ハ開元錢ヨリ始マリシハ本ヨリサルコトニテ、淳化ノ時モ開元錢ニテ定メタレドモ、景德ノ時カク淳化錢ヲ一錢ト定メテ權衡ヲ造リ、後世是ニヨル時ハ今ニテハ一錢ノ稱ハ淳化錢ヨリ定メタルモノトスベシ】如レ是錢分ヲ以テ稱ルコト始マリテハ、從來ノ稱ハ二十四銖ヲ積テ兩トスル故算計容易ナラズ、錢分ハ十ヲ以テ登レバ數多キモ算フルコト便利ナルニヨリ、ソレノミ俗間ニ行ハレテ銖絫ヲ以テ稱ルコトハ停止セシニハ非レドモ、オノヅカラ廢セシガ如クナリシナラン、【隋書ノ小度。小量。小稱ノ、後ニハ廢セシガ如クナリタルト同ジ、今世皇國ニテモ西土ニテモ、錢分ヲ以テ稱レドモ、銖絫ヲ廢セシニハ非ズ】其錢分ノ重サハ今世用フル稱ト全ク同ジカリシナリ、【今開元錢ヲ稱ルモ、淳化咸平等ノ錢ヲ稱ルモ、刓泐セザル者ハ其重サ一匁ナレバ、宋ノ稱ノ今ノ稱ト同ジキヲ知ルベシ、權量撥亂ニハ「友人田村元雄、家嘗藏二宋明二秤一、試以二本邦今秤一校レ之、宋一兩當二今九錢六分一、明一兩當二今九錢八分一」トアリ、此二稱今モ田村氏ノ家ニ藏セラルルヲ借按スルニ、宋稱ト云フモノモ明稱ト云フモノモ共ニ今ノ稱ト全ク異ナルコト無シ、又田村氏ノ度量小識ハ權量撥亂ト同年ノ撰ナルニ、此稱共ノ今ノ稱ト異ナルコトヲ云ヘルコトモ無シ、山田氏ハ如何ニ稱ラレシカ、オボツカナシ】

政和二年ニ大晟樂尺ニヨリテ量權衡ヲモ作リ、天下ニ頒チ行ヒタリ、【文獻通考ニ出ヅ、全文上卷ニ引リ、

玉海ニモ「政和二年八月詔、是權衡以二大晟樂尺一爲レ度」トアリ】然レドモ其輕重考フベキモノ無シ、南宋ニテハ大晟樂尺ヲ廢シ、權衡モ舊ニ復セシナリ【朱熹ノ語錄ニ、今之一兩、古之三兩」ト云ヒ、三因方モ紹興ノ時ニ作リシ書ナルニ、「宋廣秤以二開元錢十箇一爲レ兩」ト云ヘルコト、皆唐人・北宋人ノ云ヒシト同ジケレバ、南宋ニテハ北宋ノ舊ニ復セシナリ】

元ノ王好古ガ湯液本草ニ「六銖爲レ分、即二錢半也、二十四銖爲レ兩、古云三兩、即今之一兩、云二兩即今之六錢半也」ト云ヘリ、【古ノ三兩元ノ一兩ナラバ、古ノ二兩ハ元ノ六錢六分六釐六毫六絲六忽不盡ナルヲ、六錢半ト云ヒシハ大凡ニ計リシナリ、或ハ六錢大半トアリシ大字ヲ脫シタルニヤ】古ノ三兩ヲ一兩トスルコト、宋人ト同ジケレバ、元稱ハ宋稱ニ沿リシナリ

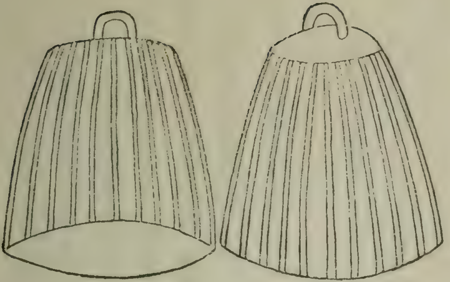
明ノ稱ハ律學新說ニ、「按杜氏通典、唐以二其尺之八分一爲二開元錢之徑一、以二開元錢十枚之重一爲二一兩一、嘗以二其錢一校二今之鈔尺一、全與レ唐同、不レ差二分毫一」ト云ヘリ、【開元錢ヲ徑八分ト云ヒシコト通典ニ載セズ、唐書ノ文ヲ誤リ引シモノナルベシ、【開元錢ヲ徑八分ト云ヒ、明尺ノ八分ニ合ヒシト云ヒシハ非ナレドモ、【唐書ニ開元錢ヲ徑八分ト云ヒシハ、大凡ニ計リシニテ、眞ノ度ニアラズ、實ハ唐小尺一寸ニテ大尺ノ八分三釐三毫三絲三忽不盡ナレバ、曲尺ニテハ八分〇八毫三絲三忽不盡ナルコト、詳ニ度攷ニ辨ジタリ、又明尺ハ唐尺ヲ承ケタレドモ、唐尺宋ニ至リテハ五分許長シ、明ニテハ又四分許長シタレバ、明尺ノ八分ハ曲尺ノ八分五釐六毫八絲三忽三三不盡ナルヲ、強テ明尺ヲ唐尺ノ差無キモノトセントテノ說ナレバ、其說據ルベ

カラズ】開元錢十枚ヲ一兩トスルコトハ唐ノ時ト同ジケレバ　明稱ハ宋元ノ稱ニ沿リタルナリ、又明會典ニ、「令㆘戸部及各行省㆖鑄㆓洪武通寶錢㆒、其制凡五等、當十錢重一兩、當五錢重五錢、當三當二當一重皆如㆓其當之數㆒、小錢重一錢」ト云ヘリ、【明史食貨志ニモ、「頒㆓洪武通寶錢㆒其制凡五等、曰當十、當五、當三、當二、當一、當十重一兩餘、遞降至㆓重一錢㆒止」ト云ヘリ】今此諸錢ヲ稱ルニ皆少シヅツ輕ケレドモ、略其云フ所ト同ジ、【新撰錢譜ニ此錢ヲ「今世所㆑見當一重一錢、當二重一錢七分、當三重二錢八分、當五重四錢九分、當十重九錢五分以下」ト云ヘリ、余ガ稱リ試シモ大凡同ジ、總テ諸古錢ヲ稱リ試ルニ、小平錢ノ刓泐セザル者ハ其重サ大概法制ノ如クナレドモ、大錢ハ刓泐セザルモノモ、多クハ法制ヨリ輕キ者ナリ、然ルニ泉貨鑑ニコノ錢ヲ、「當一重一錢、當二重二錢、當三重三錢、當五重五錢、當十重十錢」トアルハ、後ニ初鑄錢ヲ得テ稱ラレタルカ、又ハ明史會典ナドニヨリテ其文ノママニ記サレタルニハ非ルニヤ】且明稱ノ今世ニ傳ハル者ヲ稱リ校ルニ、今稱ト全同ジケレバ、明稱ハ宋元ノ稱ニヨリテ、卽唐ヨリ出シモノナリ

清會典ニ權衡ノコトヲ載セタレドモ、準ズベキ所無シ、然レドモ清人ノ賚來リタル稱ヲ今稱ニ比ブルニ豪釐ノ異無ケレバ、清稱ハ明稱ニ沿リシナリ、抑度量ハ代代漸ク譌リシニ、權衡ノミ隋唐ノ舊ヲ失ハザリシハ如何ニト云フニ、度量ハ其計ル物粗ナレドモ、權衡ハ金銀藥物ヲ量レバ、代代ノ人コレヲ重クシテ濫ニセザリシ故ナルベシ、【皇國ノ度ニ今鐵尺・竹尺ノ異アリ、量ニモ私量、又ハ國國ノ量アリ、西土ニモ今私度・私量アルコト上中卷ニ云ヘリ、然ルニ權衡ニ至リテハ皇國ニモ、西土ニモ私稱アルコトヲ聞カザルハ此

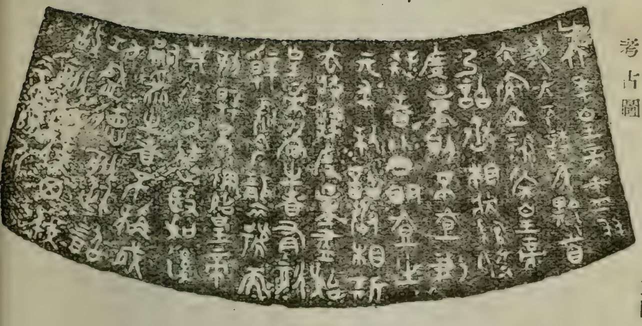
故ナルベシ、按ズルニ隋志ニ歴代ノ度ヲ擧テ、豪釐ニ至ルマデ詳ニ論ジタレドモ、量稱ノコトハ甚粗略ナリ、又漢稱唐小稱ハ同ジ稱ナレドモ、七夕餘ノ異アルニ至ル、思フニ尺度ハ長短ニヨリテ音律ニ高下アリ、音律ノ高下ハ國ノ興亡ニカカルナド、儒者ノ常ニ云フ故ニ詳ニ論ジタレドモ、量稱ハ音律ニアヅカラザルヲ以テ、少シノ謁替ハ論ゼザリシニヨリ、カクハ異アリシナルベシ、後世ニ至リテハタマサカ音律ノ論モアリシカドモ、常用ノ度ト音律ヲ定ムル度トハ同ジカラザル故ニ、常用ノ度ハ謁リタルママニ改ムルコトモ無ク、量モ二尺五寸ノ法ヲ用ヒテ、千六百二十寸ノ法ハ知ル人モ無ク、二尺五寸モ謁リテ二尺九寸四分ニナリ、三百二十寸ニナルニ至リシニ、權衡ハ市中ニテ利ノタメニヨク守リツレバ、隋唐ヨリ今ニ至ルマデモ、謁替ノ無カリシナルベシ】

秦權



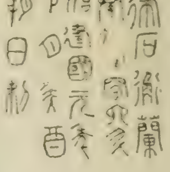
秦權銘

考古圖

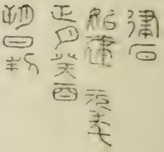


右秦權銘一百字此與ニ下一器ハ（秦斤ナリ）皆據ニ江邨堂所藏舊拓精本ニ摹入、右秦斤銘一百三字器舊藏平湖
高文恪士奇家ハ今不レ知ニ所在一

新莽銅權二器　　積古齋鍾鼎款識



律石衡圜
秦□□容大升
始建國元年
正月癸酉
朔日制



律石
始建元年
正月癸酉
朔日制

右新莽銅權二器上ノ器二十二字、摩滅者二字、下一器可レ辨者十三字、皆據ニ陳仲魚摹本ニ編入

本朝度量權衡攷附錄卷下之上　終

漢、莽古錢ニ據リテ古稱ヲ起スコトヲ得ズ、先輩ノ說モ皆據リ難シト云フモノハ、集古圖ニ載セタル谷口銅甬ノ銘ニ【始元四年】「重四十斤」トアルヲ、「劉原父以₂今權₁校レ之重十五斤」ト云ヘリ

宋ノ十五斤ハ二貫五百匁ナリ、【明淸與國ノ稱皆同ジ】コレヲ四十分スレバ

斤　今六十匁

博古圖梁山鋗ノ銘ニ【元康元年】「重十斤」トアルヲ、「重二斤十三兩」ト云ヘリ

二斤　十三兩ハ四百五十匁ナリ、コレヲ十分スレバ

斤　今四十五匁

考古圖甘泉內者鐙ノ銘ニ【元康二年】「重二十五斤十一兩」トアルヲ「重十斤四兩」ト云ヘリ

十斤四兩ハ一貫六百四十匁ナリ、コレヲ四百十一分シテ、【二十五斤十一兩ハ四百十一兩ナリ】兩ノ重ヲ得、十六兩ヲ斤トスルニヨリテ、ソレヲ十六倂スレバ

斤　今六十三匁八分四釐四毫二絲七忽有奇

齊安熏爐ノ銘ニ、【神爵四年】「重五斤六兩」トアルヲ「以₂今權₁校レ之、三兩十八銖、當₂漢一斤₁」ト云ヘリ

三兩ハ三十匁、十八銖ハ七匁五分ナレバ

斤　今三十七匁五分

首山宮鴈足鐙ノ銘ニ【永始四年】「重六斤」、甘泉上林宮行鐙銘ニ【五鳳二年】「重六斤十兩」トアルヲ、「共重三斤、十四兩」ト云ヘリ

三斤十四兩ハ六百二十匁ナリ、コレヲ二百〇二分シテ【六斤ト六斤十兩トヲ合セテ十二斤十兩ハ二百〇二兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六倂スレバ

斤　今四十九匁一分〇八毫九絲一忽有奇

車宮承燭槃ノ銘ニ【五鳳四年】「重三斤八兩」トアルヲ、「重一斤五兩」ト云ヘリ

一斤五兩ハ二百十匁ナリ、コレヲ五十五分スレバ【三斤八兩ハ五十六兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六倂スレバ

斤　今六十匁

兩漢金石記內者雁足鐙ノ銘ニ【建昭三年】「重三斤八兩」トアルヲ「重一斤八兩」ト云ヘリ

一斤八兩ハ二百四十匁ナリ、コレヲ五十六分シテ【三斤八兩ハ五十六兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六倂スレバ

斤　今六十八匁六分五釐六毫二絲九忽弱

博古圖綏和壺ノ銘ニ【綏和元年】「重十二斤八兩」トアルヲ「重五斤有半」ト云ヘリ

五斤半ハ八百八十匁ナリ、コレヲ十二斤半ニ分レバ

斤　今七十匁〇四分

積古齋鍾鼎款識尙方鷹足鐙ノ銘ニ、【永元二年】「重九斤」トアルヲ、「以二今權一分レ之、則永元時權一斤、重今權七兩有奇耳、」ト云ヘリ

コレニテハ

斤　七十匁有奇

考古圖好時共廚鼎ノ腹ノ銘ニ、【此器欵識ニ年號無シ、下ノ六器皆同ジ】「重九斤一兩」トアルヲ、「今重三斤六兩、今六兩當二漢之一斤一與二車宮鑿之法一同」ト云ヘリ

三斤六兩ハ五百四十匁ナリ、コレヲ百四十五分シテ【九斤一兩ハ百四十五兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六倂スレバ

斤　今五十九匁五分八釐六毫二絲一忽弱

軹家釜ノ銘ニ、「重十斤一兩九朱」トアルヲ、「重二斤十一兩六銖」ト云ヘリ

二斤十一兩六銖ハ四百三十二匁五分ナリ、コレヲ三千八百七十三分シテ、【十斤一兩九銖ハ三千八百七十三銖ナリ】銖ヲ得、ソレヲ二十四倂スレバ兩ヲ得、又十六倂スレバ

斤　今四十二匁八分八釐七毫八絲八忽有奇

軹家甑ノ銘ニ、「重四斤廿朱」トアルヲ、「重一斤七兩」ト云ヘリ

一斤七兩ハ二百三十匁ナリ、コレヲ千五百五十六分シテ【四斤二十朱ハ千五百五十六銖ナリ】銖ヲ得、ソレヲ二十四倂シテ兩ヲ得、又十六倂スレバ

斤　今五十六匁七分六釐〇九絲二忽有奇

博古圖虹燭錠ノ銘ニ、「重廿二斤四兩」トアルヲ、「重四斤八兩」ト云ヘリ

四斤八兩ハ七百二十匁ナリ、三百五十六分シテ【二十二斤四兩ハ三百五十六兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六倂スレバ

斤　今三十二匁三分五釐九毫五絲五忽〇有奇

西淸古鑑ニ、「食官鍾」一器ヲ載ス、一器ノ銘ニ「重五十斤四兩」トアルヲ「三百二十七兩」ト云ヘリ

三百二十七兩ハ三貫二百七十匁ナリ、コレヲ八百〇四分シテ【五十斤四兩ハ八百〇四兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六倂スレバ

斤　今六十五匁〇七釐四毫六絲三忽弱

一器ノ銘ニ「五十斤」トアルヲ、「重三百四十兩」ト云ヘリ

三百四十兩ハ三貫四百匁ナリ、コレヲ五十分スレバ

斤　今六十八匁

積古齋鐘鼎款識ニ、漢陽陵鼎ノ蓋ノ銘ニ、「重十一斤」ト云ヒ、器ノ銘ニ「重十斤」、又倒書シテ「重八斤一兩」トアルヲ、「蓋當ニ一斤十五兩ニ矣、今除レ蓋以ニ庫平法馬一稱レ之、重九十三兩七錢二分」ト云ヘリ、【十斤ハ蓋ヲ併セタル重サニテ、器ノミニテハ八斤一兩ナル故ニ、蓋ノ重一斤十五兩ナルベシト云ヘリ、然ルニ蓋ノ銘ニ「重十一斤」トアルモノハ、碑經室集ノ焦山定陶鼎考ニ「此鼎蓋與ニ器銘一辭不ニ相應一者、當時共器正多、不レ知ニ何時互錯一也」ト云ヘリ、然ラバ此鼎數多ク造リシニ、第二十八器ノミ存シ、第三十五ハ蓋ノミ残リタルヲ取リ合セタルモノニテ、第三十五ノ鼎ハ器蓋ヲ併セテ十一斤アリシナルベシ】

五百三十七匁二分ヲ百二十九分シテ【八斤一兩ハ百二十九兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六倂スレバ

斤　今六十六匁六分二厘九毫四絲六忽弱

律學新說ニ、王莽ガ錢ニテ稱リシニ【其說ニ、「臣家所レ有漢錢數十枚、凡若干種、每種錢ニ度ニ數分寸一彷彿、而厚薄輕重不レ均、以ニ漢食貨志一按レ之、彼志云貨泉重五銖、貨布重二十五銖、大泉重十二銖、大布重二十四銖、因以ニ今時等子一稱ニ其錢一、每種或十枚、或五枚總稱レ之以均ニ其輕重一、而用ニ算法一乘除以求ニ漢之一兩一、則大泉合ニ今之三錢三分一、貨泉合ニ今之三錢五分一、貨布合ニ今之三錢七分一、大布合ニ今之三錢八分一各爲ニ漢之一兩一、而率皆乖異、與ニ呂氏考古圖之說一相同也、大率漢之一兩惟有ニ今之三錢強半一」ト云ヘリ】大泉五十ニテハ漢ノ一兩ハ三匁三分ニ當ルト云ヘリ

三匁三分ヲ十六倂スレバ

斤　今五十二匁八分

貨泉ニテハ漢ノ一兩ハ三匁五分ニ當ルト云ヘリ

三匁五分ヲ十六倂スレバ

斤　今五十六匁

貨布ニテハ漢ノ一兩ハ三匁七分ニ當ルト云ヘリ

三匁七分ヲ十六倂スレバ

斤　今五十九匁二分

大布ニテハ漢ノ一兩ハ三匁八分ニ當ルト云ヘリ

三匁八分ヲ十六倂スレバ

斤　今六十匁〇八分

如レ此其重サ異ナレドモ、大率漢ノ一兩ハ今ノ三匁半强ナリト云ヘルハ、大泉・貨泉・貨布・大布ニテ度リシ漢ノ一兩ヲ平均スレバ、三匁五分七釐五毫ナルヲ以テ、三匁半强トハ云ヒシナルベシ、三匁五分七釐五毫ヲ十六倂スレバ

斤　今五十七匁二分

清ノ顧炎武ガ日知錄ニハ、「貨布重四匁二分」ト云ヘリ

四匁二分ヲ二十五分シテ【貨布重二十五銖】銖ヲ得、ソレヲ三百八十四倍スレバ【一斤ハ三百八十四銖ナリ】

斤　今六十四匁五分一釐二毫

今世傳ル所ノ古錢ヲ稱ルニ、秦ノモノト思ハルル半兩錢ノ重キモノハ、二匁九分ナリ、コレヲ倍シテ【漢書食貨志ニ、「秦兼天下、銅錢質如周錢、文曰、半兩、重如其文」史記索隱ニ「顧氏案古今注云、秦錢半兩、徑寸二分、重十二銖」トアリ、顧氏ハ梁ノ顧烜ナリ、錢譜一卷アリ、隋書經籍志ニ見ユ】兩ヲ得、ソレヲ十六倍スレバ

斤　今八十三匁二分

輕キモノハ一匁

斤　今三十二匁

漢ノ莢錢ト覺シキハ、四分八釐、コレヲ三分シテ【食貨志ニ、「漢興、以秦錢重難用、更令民鑄莢錢」史記索隱ニ「顧氏案、古今注云、莢錢重三銖」トアリ、泉志ニ「伏無忌曰、漢鑄莢錢重三銖」ト引シモ同ジ、泉志ニ「又顧烜曰、今世猶有小錢、重一銖半、徑五分、文曰漢興小篆文、余按、班馬二史、皆云、莢錢不載錢文、顧烜之說蓋近之矣、金光襲、董逌皆因之」ト見エタレドモ、清ノ陳萊孝ガ鏑官圖

經ニ、「莢錢文曰二半兩一」ト云ヘリ、コノ說是ニ似タリ、今コレニ從フ】銖ヲ得、ソレヲ三百八十四倂スレバ

斤　今六十一匁四分四釐

八銖錢ナルベク見ユルハ、重キモノハ一匁四分、コレヲ八分シテ【漢書高后紀ニ、「二年七月行二八銖錢一」泉志ニ舊譜ヲ引テ「重八銖文、曰二半兩一」ト云ヘリ】銖ヲ得、ソレヲ三百八十四倂スレバ

斤　今六十七匁二分

輕キモノハ八分

斤　今三十八匁四分

四銖錢ナルベキモノノ重キハ八分五釐、コレヲ四分シテ【食貨志ニ「孝文五年、更鑄二四銖錢一、其文爲二半兩一」ト云ヘリ】銖ヲ得、又三百八十四倂スレバ

斤　今八十一匁六分

輕キモノハ五分五釐

斤　今五十二匁八分

五銖錢ノ重キモノハ一匁二分五釐、コレヲ五分シテ銖ヲ得、又三百八十四倂スレバ

斤　今九十六匁

輕キモノハ七分

　斤　今五十三匁七分六氂

王莽ガ大泉五十ノ大ナル者ハ二匁強、コレヲ十二分シテ【食貨志ニ「王莽居ㇾ攝變二漢制一、以二周錢有一子母相權、於ㇾ是更造二大錢一、徑寸二分、重十二銖、」ト云ヘリ】銖ヲ得、又三百八十四併スレバ

　斤　今六十四匁

小ナル者ハ七分三氂

　斤　今二十三匁三分六氂

貨泉ノ重キハ九分二氂、コレヲ五分シテ【食貨志ニ「貨泉徑一寸、重五銖」ト云ヘリ】銖ヲ得、又三百八十四併スレバ

　斤　今七十匁〇六分五氂六毫

輕キハ五分

　斤　今三十八匁四分

貨布ノ重キハ四匁六分、コレヲ二十五分シテ【食貨志ニ「天鳳元年罷二大小錢一改作二貨布一、重二十五銖」ト云ヘリ】銖ヲ得、又三百八十四併スレバ

　斤　今七十三匁七分二氂八毫

輕キハ三匁七分四釐

斤　今五十七匁四分四釐六豪四絲弱

漢器古錢ノ重サ此ノ如ク皆同ジカラザレバ、據リテ稱ヲ定ムルコトヲ得ズ

宋明又皇國ノ人人ノ定メシモ據リ難シト云フハ

皇祐新樂圖記ニハ七十八匁九分五釐許ヲ一斤トス

其說ニ「謹詳下周禮及歷代至二聖朝一令文之制定上、成二銖秤一、一鈞秤、一石秤、以二太府寺一見レ行、秤法物校レ之、得二太府寺秤七兩二十一銖半弱一」ト云ヘリ【七兩ハ七十匁、二十一銖半ハ八匁九分五釐八豪三絲二忽不盡ナリ】

按ズルニ、其考ヘ定メシ據ヲ云ハザレバ、其說明ナラズ

同書ニ、「謹按、隋志開皇中、以二古秤三斤一爲二一斤一【原注、隋書誤作、三斤爲二一斤一】則今太府寺十五斤秤、乃古一鈞之權衡也、然今黍秤十六兩比二太府寺八兩一、尚少二三銖半强一者、亦以二年代浸遠而制造有一レ差也」ト云ヘリ

按ズルニ、古ヲ考ヘテ七十八匁九分五釐許ト定メシヲ、【黍秤ト云ヒタレバ、黍ヲ稱リテ定メシニヤ】開皇ノ百六十匁ノ稱ニ按レバ、大凡半ナルヲ以テ、「以二古稱三斤一爲二一斤一」トアルヲ「以二二斤一爲二一斤一」ノ誤トセシモノナリ、然レドモ通典ニモ、千金方ニモ、隋ニハ古ノ三兩ヲ一兩トスト云ヒタレバ、

隋書ノ誤ニハアラズ、又二斤ノ誤ナランニハ、「大業中依二復古秤一」トアレバ、煬帝ノ時ハ開皇ノ半ナルベキニ、刑法志ニ煬帝ノ時ノ升秤皆舊ノ三分ノ一ナレバ、贖銅ノ數ハ三倍シタレドモ、其實ハ異ナラズトアルニテ、【全文上ニ引リ】、開皇ノ一斤ハ古ノ三斤ナルコト明ナレハ、其説ノ證タルヲ知ルベシ

夢溪筆談ニ、古秤ノ比校ヲ載スルモノニ、其重少ク同ジカラズ、一ハ四十三匁三分三釐三毫不盡ヲ一斤トス

其説ニ「予考二樂律一、受レ詔改二鑄渾儀一、求二秦漢以前度量一、秤三斤當二今十三兩一」ト云ヘリ【十三兩ハ百三十匁、コレヲ三分スレバ、四十三匁三分三釐三毫不盡ナリ】

一ハ四十二匁六分六釐六毫不盡ヲ一斤トス

其説ニ「鈞石之石百二十斤、以二今秤一計レ之當二三十二斤一」ト云ヘリ【三十二斤ハ五貫百二十匁、コレヲ百二十分スレバ、四十二匁六分六釐六毫不盡ナリ】

二説トモニ據ドコロヲ云ハザレバ、其説明ナラズ

三円方ニハ四十八匁ヲ一斤トス

其説ニ「毎兩則古文六銖錢四箇、開元錢三箇、至二宋廣秤一以二開元錢十箇一爲レ兩、今之三兩得二漢唐十兩一明矣」ト云ヘリ【六銖錢四箇ニテハ二十四銖ナレバ即一兩ナリ、是ニヨリテ六銖錢四箇ヲ稱リ試ルニ、開元錢三箇ニ當ル、然ラバ開元錢三箇ハ古ノ一兩、三十箇ハ十兩ナリ、又宋ノ稱ニテ開元錢ヲ稱レバ十箇ニテ一兩、三十箇ニテ三兩ナレバ、宋ノ三兩ハ古ノ十兩ナリト云ヘルナリ、開元錢三箇ハ三匁ナレバ、三匁

ヲ一兩トシ、コレヲ十六倂シテ一斤ヲ求ムレバ、四十八匁ナリ】

按ズルニ、六銖錢ハ陳ノ宣帝ノ鑄タル太貨六銖錢ナリ、【陳書宣帝紀ニ、「大建十一年秋七月辛卯、初用ニ太貨六銖錢ニ」ト云ヘリ】「梁陳依ニ古稱ニ」トアルニ依レバ、陳ノ六銖ハ即漢ノ六銖ナリ、今予ガ藏スル六銖錢ノ内ニテ、形質完厚ノ者ヲ稱ルニ、重八分五釐、【朽木龍橋公ノ藏セラレタルハ八分二釐、其佗予ガ見ル所ノ六銖錢二十餘品、何レモ此二錢ヨリ輕シ】是ニテ一斤ヲ求ムレバ五十四匁四分ナリ】是ヲ初鑄錢トモ定メ難ケレバ、コレヨリ重キガアリシモ知ルベカラズ、王莽ガ銅斛ニ據レバ初鑄錢ハ九分四釐五豪餘ナルベシ、然レドモ陳ノ頃ハ譌リテ一斤五十四五匁ナリシモ計リ難シ、此事陳稱ノ條ニ詳ニス】然レバ陳言ガ見タリシ錢ハ【三匁ヲ四箇ニ分テバ、一箇ノ重サ七分五釐ナリ】後鑄ノ錢カ、又ハ通行ヲ經テ耗勠セシモノナルベケレバ、稱ヲ起スベキ證トハナシ難シ

淸ノ沈彤ガ果堂集ニハ、七十二匁〇三釐七絲二忽ヲ一斤トス

其說ニ漢書ニ「貨布重二十五銖」ト云ヘルニヨリ、其最完善ナル者ヲ稱レバ、今ノ布政司等（ハカリ）【即淸ノ官稱ナリ】四錢六分八釐九豪五絲ナリ、然ラバ一銖ハ今ノ一分八釐七豪五絲六忽【八忽ノ誤】十二銖ハ今ノ二錢二分五釐〇九絲六忽ナリト云ヘリ【是ニテ一兩ヲ計レバ、四匁五分〇一豪九絲二忽、一斤ハ七十二匁〇三釐〇七絲二忽ナリ】

按ズルニ、偏ニ貨布ニヨリテ稱ヲ定ムルコトヲ得ザルコト前ニ論ゼリ、況ヤタダ一枚ノ貨布ニヨリテ稱ヲ

起スコトハ難定説トナスベカラザレバ、其説據リ處トナシ難シ【モシ見レ處最重キ者ニヨリタルト云ハバ、予ガ蔵スル貨布ノ内ニ四匁八分アルモノアリ】

三器攷略ニハ七十二匁ヲ一斤トス

其説ニ「周漢古稱一兩當二今四錢半一、古稱權重今以二寸金一斤及漢錢參伍一校驗、得二其大約一矣」ト云ヘリ【四匁半ヲ一兩トシテ一斤ヲ求ムレバ七十二匁ナリ】

按ズルニ、「寸金一斤」ト云フニヨリテ、中村氏ノ定メシ七寸八分二釐二毫ノ周尺ヲ以テ方寸ノ金ヲ計レバ、其重サ六十四匁六分一釐六毫〇四忽弱ナリ、漢錢ニテ稱ヲ起シ難キコトハ上ニ云ヘリ、【モシ上ニ稱リシ古錢ヲ平均スレバ、五十九匁七分餘ナリ】然ルニ七十二匁ト定メシモノ、其據リドコロ詳ナラザレバ證トナシ難シ

律原發揮ニハ九十六匁ヲ一斤トス

其説ニ「古稱神農稱也、梁陳皆依レ此、一斤九十六錢」ト云ヘリ

按ズルニ、「神農稱也」トハ、孫思邈ガ醫家ニテ用フル稱ヲ云ヒシ言ナリ、【醫家ノ稱ハ常ノ稱ト同ジカラズ、詳ニ下文（〇下文恐上文誤）ニ證セリ】是ヲ周稱ヲ云ヘルト思ヒシハ、朱載堉ガ誤ヲ受シナリ、「梁陳皆依レ此」、トハ隋志ニ「梁陳依二古稱一」トアルニヨリタルニテ、梁陳マデモ漢稱ノ舊ニ依リシヲ云フ、【醫家ニテ用フル神農ノ稱ニ依リタルニハ非ズ】朱載堉ハ漢稱ハ周稱ニ非ズトシタレドモ、中根氏ハ周漢

ノ稱ヲ一ナリトセシ故ニ、隋志ノ文ヲココニ引シナリ、一斤ヲ九十六匁ト定メシハ、又朱載堉ガ周稱ノ說ニ從ヒタルナリ、朱說ノ非ナルコトハ下ニ辨ズ、中根氏朱氏ガ定メタル周稱ヲ漢魏モ同ジト思ヒシハ誤ナリ【朱載堉ガ定メシ漢稱ハ五十七匁二分ナルコト詳ニ上ニ載ス】

荻生氏（觀）衡考ニハ、四十七匁四分〇七毫四絲〇七四不盡ヲ一斤トス

其說ニ古稱ノ四兩半ハ玉稱ノ四兩ニ當リ、玉稱ノ三兩ハ今ノ一兩ニ當リ、玉稱ノ一斤ハ五十三匁三分三釐三毫三絲三忽不盡ナレバ【唐小稱ト同ジ】古稱ノ一斤ハ、四十七匁四分〇七毫四絲〇七四不盡ナリト云ヘリ

按ズルニ、玉稱ヲ卽唐小稱トシタルハ、徂來ノ玉尺ヲ唐小尺トセシ說ヲ承テ衡モ玉稱ヲ唐小稱ト定メシナラン、然レドモ玉尺ト唐小尺トハ同ジカラズ、【上卷ニ辨ゼリ】又玉稱ノ唐小稱ナルコトハ、絕テ證トスル所無ケレバ、其說據ルニ足ラズ

三器逢源考ニハ十六匁ヲ一斤トス

本草綱目序例ニ「古之一兩今用㆓一錢㆒可也」トアルニ據ル

按ズルニ、李時珍ガ定メタル古稱其據ル所詳ナラズ、思フニ明ニテハ百六十匁ヲ一斤トスレバ、一銖ハ三百黍ナルヲ、【大稱ナリ】誤リテ百黍ノ銖【小稱】ナリトシ、又陶弘景、孫思邈ガ「十黍爲㆑銖」ト云ヘルヲ以テ【此事下ニ詳ニス（〇下恐上字譌）】明稱ノ十分ノ一ヲ神農ノ稱トセシモノナルベシ、李氏醫家ノ稱ヲ常ノ稱ノ十分ノ一トスル說ヲ用ヒタルハ當リタレドモ、三百黍ヲ銖トスル大稱ノ十分ノ一トシタルハ誤ナ

リ、又李氏ガ云フ所ハ合藥ノ稱ナルヲ、正木氏古ノ尋常通行ノ稱トシタルモ誤ナレバ、據ルニ足ラズ

權量擬衡ニハ四十五匁六分ヲ一斤トス

其說ニ唐小尺ハ、卽周漢ノ尺、唐小稱ハ卽周漢ノ稱ナリ、「開元錢積十錢、重一兩」【大稱】ト云ヒシニヨリ、開元錢ヲ稱ル二十箇ノ重サ八匁五分ヨリハ强、六分ヨリハ弱ナレバ、唐ノ大一兩ハ今ノ八匁五分五釐、是ヲ三分スレバ、二匁八分五釐、唐ノ小一兩ニテ、卽周漢ノ一兩ナリ

按ズルニ、唐小尺ヲ卽周漢ノ尺トセシハ誤ナルコト、上卷ニ辨ゼリ、唐小稱モ周漢ノ稱ト同ジカラズ、【上ノ後魏稱ノ條、隋稱ノ條合セ見ルベシ、】然レバ開元錢ヲ三分シテ漢稱トスルハ誤ナリ、又開元錢ノ輕重中ヲ得ル者ハ一匁ナルコト權衡攷ニ詳ニス、山田氏ノ八分五釐半トセシハ、千年來人間ニ通行シテ刓勐セシ錢ヲ稱リテ定メタルモノナルベケレバ、其唐稱モ據トナシ難シ】

度量小識ニハ四十二匁六分六釐六毫六絲六忽不盡ヲ一斤トス

其說ニ、今開元錢十箇ヲ稱レバ、重八匁ナレバ唐ノ一兩ハ八匁ナルコト知ルベシ、通典ニ六朝ノ賦稅ヲ論ジテ「歷二宋齊梁陳一皆因而不レ改」ト云ヒ、【是ハ賦稅ノ法ヲ改メザルニテ稱ヲ改メズト云ヒシニハ非ズ】「稱則三兩、當二今一兩一」ト云ヒタレバ、八匁ヲ三分シテ、漢魏六朝ノ稱ヲ定ム

按ズルニ、唐ノ一兩ハ古ノ三兩ト云ヒシハ、大凡ニ云ヘルナレバ的證ニ非ズ、且開元錢ノ十箇重八匁ナリシハ、刓勐ノ錢ニテ據ルニ足ラザルコト上ニ云ヘリ

度量衡說統ニ、前漢ノ一斤ハ三十五匁許、後漢魏晉ノ一斤ハ三十八匁ト云ヘリ

同書ニ、傷寒論ヲ引テ、「桂枝加二大黃湯二」ノ一斤三兩ヲ四十一匁ト云ヒ、【一斤三兩ハ十九兩ナレバ、四十一匁ヲ十九ニ分レバ、二匁一分五釐餘、漢ノ一兩ナリ、コレヲ十六倂スレバ、三十四匁五分餘、コレ一斤ナリ】大青龍湯ノ條ニハ、一斤六兩半ヲ四十九匁ト云ヘリ、【一斤六兩半ハ二十二兩半ナリ、四十九匁ヲ二十二半ニ分レバ、二匁一分八釐弱、漢ノ一兩ナリ、是ヲ十六倂シテ三十四匁八分四釐有奇ヲ一斤トス】前漢ノ一斤三十五匁許ト云ヒシ稱ヲ用ヒテ定メシナルベシ

按ズルニ、其定メシ據ドコロヲ云ハザレバ、證トナシ難シ

同書ニ「唐小稱一兩、大約漢一兩三四銖也、」ト云ヘリ、【最上氏唐大稱ノ一兩ヲ八匁五分有奇ト定メタレバ、小稱ノ一兩ハ二匁八分三釐餘ナリ、一兩四銖ハ二十八銖ナレバ、是ヲ二十八分スレバ一分有奇、漢ノ一銖ナリ、又是ヲ三百八十四倂スレバ、三十八匁餘ヲ得】コレ後漢魏晉ノ斤三十八匁許ト云ヒシモノナルベシ

按ズルニ、唐大稱ノ一兩ハ十匁ニシテ、八匁五分有奇ト定メシハ、刓泐ノ開元錢ニヨリシナレバ、證トスルニ足ラズ、又唐小稱一兩ヲ、漢ノ一兩三四銖ナリト云フモ、明徵無ケレバ據ドコロトナシ難シ

律量全編ニハ三十七匁九分二釐ヲ一斤トス

其說ニ、西國ノ黍ヲ稱ルニ、今ノ一合ノ重サ三十六匁七分四釐ナリ、是ニテ漢ノ二龠ヲ計レバ、今ノ二匁三分七釐、東國ノ黍ハ今ノ一合ノ重サ三十七匁弱、漢ノ二龠ハ二匁四分ナリ、周尺西國ノ黍ニ合ヘバ、今ハ

西國ノ黍ニヨリテ定メシナリ

二龠ヲ計ルト云ヒシハ、漢書ニ「一龠容千二百黍二兩ㇾ之爲ㇾ兩」ト云フニヨリテ、一兩ノ黍ヲ計リシナリ、サレドモ黍ニ虛實モアルベケレバ、黍ニテハ稱ヲ起シ難キコト上ニ辨ジタリ、又黍ニテ稱ヲ起スコトヲ漢書ニハ二千四百黍ヲ一兩トシタレドモ、說苑ニハ二千三百〇四黍ヲ一兩トシテ、【全文上ニ引リ】其說同ジカラズ、今イヅレヲカ正シトハ定ムベキ、又其造リシ龠ノ長サモ六寸四分ノ尺ヲ用ヒタレバ、此說モ據リ難シ

三器彙考ニハ四十六匁〇八釐ヲ一斤トス

其說ニ三因方ニ、六銖錢四箇ハ二十四銖ナレバ卽一兩ナリ、開元錢三箇ニ比ストアリ、六銖錢今世ニ希ナルヲ、宋ノ代マデハ甚久シカラザレバ、陳氏其實錢ヲ得テ是ニヨリ古稱ヲ定メタレバ、其法精密ニシテ據ドコロトスベシ、開元錢三箇ハ今稱ルニ二匁八分八釐、是古ノ一兩ナリ

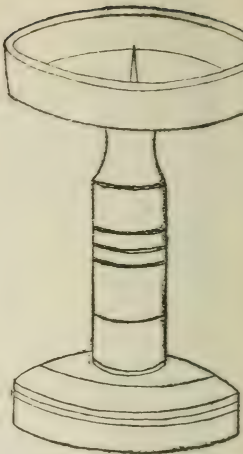
按ズルニ、陳言ガ見タリシ六銖錢ハ、後鑄輕小ノモノナレバ、證トナシ難キコト上ニ云ヘリ、藤本氏開元錢三箇ヲ二匁八分八釐ト云ヘリ、三分スレバ一箇ノ重サ九分六釐ナリ、開元錢ノ一匁ニ足ラザルモノハ、初鑄錢ニ非レバ準トナシ難ケレバ、此說モ據リ難シ

律學新說ニハ漢稱ヲ非ナリトシテ、【同書ニ漢稱ヲ王莽ガ錢ニテ起シタルコト上ニ引リ】別ニ周稱ヲ起ス、九十六匁ヲ一斤トス

其說ニ國語ニ、「單穆公曰、先王之制レ鍾也、大不レ出レ均、重不レ過レ石、律度量衡於レ是乎生、」トアルヲ引キテ、「則三代之制、權衡之起、信亦出二於律一矣」ト云ヒ、「今考、羊頭山秬黍以二時制等子一秤レ之、其中者百粒爲二一分五釐一、整積至二兩龠一千四百粒一、秤重六錢、然則今之六錢爲二古一兩一、古之一斤今之九兩六錢也」ト云ヘリ、【九兩六錢ハ九十六匁ナリ】又大率漢之一兩惟有二今之三錢半强一、是漢三兩爲二今之一兩强一、與二秬黍之法一不レ同者、蓋因下劉歆誤以二秠黍一爲上レ秬、故律度量衡皆失二之小一、其餘益率多二舛謬一、王莽僞錢益無レ足レ取、今宜以二秬黍一爲レ法可也」トモ云ヘリ

按ズルニ、漢書ノ度量衡、秬黍ヨリ生ズル說取ルベカラザルコトハ、朱載堉既ニコレヲ云ヘリ、然ルニ又國語ニ依リテ秬黍ヲ以テ衡ヲ起シシハ如何、國語ヲ信ジテ漢書ヲ取ラザルニヤ、然ラバ兩龠一千四百黍ヲ兩トスルコトハ何ニ據リタルニカ、又漢ノ律度量衡皆小ニ失ヘリト云ヒタレドモ、漢錢ニヨリテ度ヲ起セバ曲尺七寸六分ナルニ、朱氏ガ周尺ヲ營造尺六寸四分【曲尺六寸七分七釐一毫二絲】トセルハ漢度ヨリ小ナルニ非ズヤ、又考ルニ朱氏ガ定メシ衡ノ重カリシハ、營造尺八寸ヲ夏尺トシ、卽黃鍾トス、【曲尺八寸四分六釐四毫】是ニ百黍ヲ排シテ其黍ヲ稱リシニ一分五釐ナリシヨリ稱ヲ起シタレバ、此ノ如ク重クハナリシナリ、明尺ノ八寸ヲ夏尺トスルコト、是ヲ黃鍾トスルコト、ソレニ據リテ稱ヲ起スコト、皆朱氏ノ私說ニシテ徵スル所無ケレバ、據トスルニ足ラズ、【中根氏是ニ從ヒシハ非ナリ】

甘泉內者鐙　京兆陳氏　考古圖



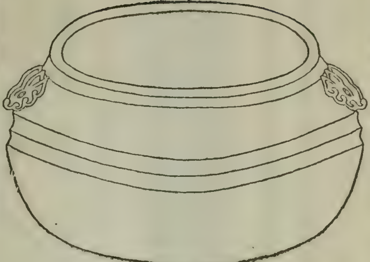


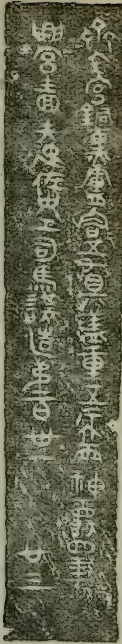
內者元康二年三月河東安邑守者官王軒造重廿五斤十一兩

右不知所從得高尺有一寸面徑六寸三分底徑五寸七分中有仰錐長二分重十斤四兩銘大小三十字（疑二寸之譌）

熏爐廬江李氏

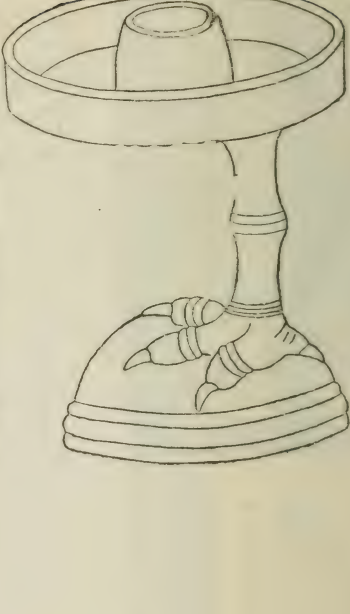
同上





齊安宮銅熏鑪容五升具蓋重五斤
六兩神爵四年典宮嗇夫忠佐史工
司馬譚造第一百卅一　廿三

右得於京師重一斤三兩銘三十有六字
銘云重五斤六兩以今權校之三兩十八銖當漢之一斤
三十三　薛氏欵識作廿三



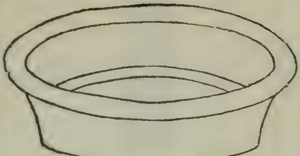


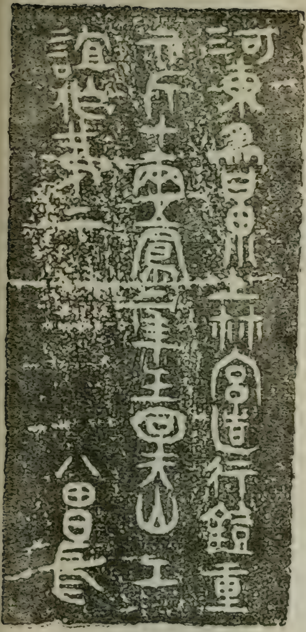
蒲反首山宮銅鴈足八寸蓋重六斤永始四年二月工賈陽造

望之按當釋登重六斤登讀爲鐙即今俗燈字呂氏釋爲蓋非是

右不知所從得高六寸三分面徑四寸有半足縮四寸衡三寸七分銘廿有四字

甘泉上林宮行鐙　同上

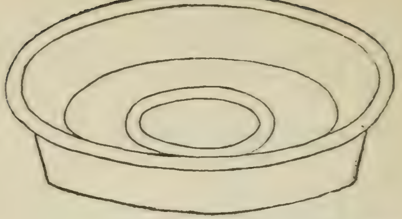


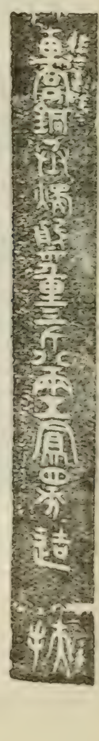


河東爲甘泉上林宮造行鐙重
六斤十兩五鳳二年王回夫山工
誼作第二　曾□

右不知所從得惟承槃存徑七寸有半深寸有二分銘三十有一字并鳩足鐙共重三斤一十四兩

車宮承燭槃　京兆母氏　同上





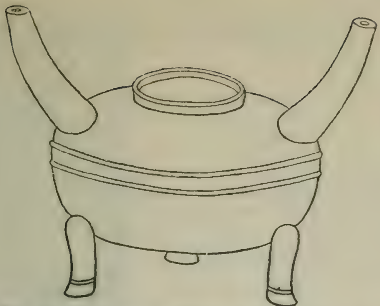
車宮銅承燭槃重三斤八兩五鳳四季造　扶

右不知所從得面徑七寸六分深八分底徑四寸三分重一斤五兩

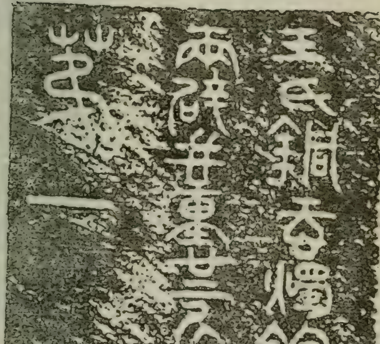
銘十七字

以上四鐙皆漢宣帝時器所權輕重以今權校之首山上林二鐙五兩奇內者鐙六兩半有奇車宮槃六兩當漢之一斤贊皆不同

漢虹燭錠



博古圖



王氏銅虹燭錠
兩辟并重二十二斤四兩
第一

右高五寸四分深四寸五分口徑三寸容四升八合重四斤八兩三足銘一十八字自三代至秦器無斤兩之識此器顯其斤重與漢五鳳鐙款識相類寔漢物也

積古齋鐘鼎款識

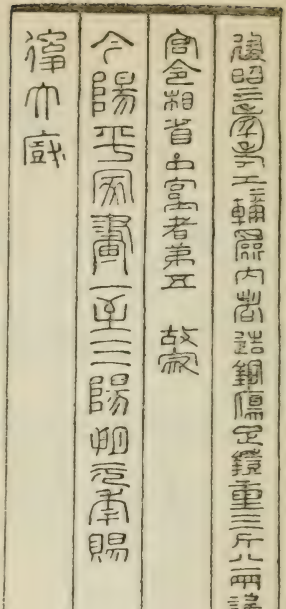
尚方永元鴈足鐙

永元二年中尚方造銅鴈足鐙重九斤工宋次等作

永元二年中尙方造銅鴈足鐙重九斤工宋次等作

右永元鴈足鐙銘二十字秦太史所藏器　(中略)　江鄭堂云文云重九斤以今權分之則永元時權一斤重今權七兩有奇耳

內者鴈足鐙款　　金石萃編



建昭三年考工々輔爲內者造銅鴈足鐙重三斤八兩護建佐博嗇夫福掾光主右丞

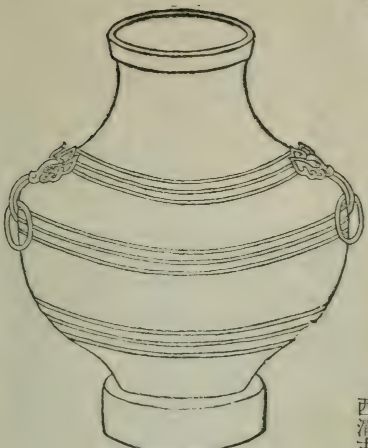
宮令相省中宮內者第五　故家

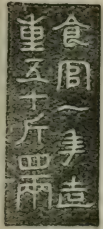
今陽平家畫一至三陽朔元年賜

後大廚

欵文云重三斤八兩而以今權權之重一斤八兩則漢權之較今權殺不及半（兩漢金石記）

漢食官鍾　西清古鑑



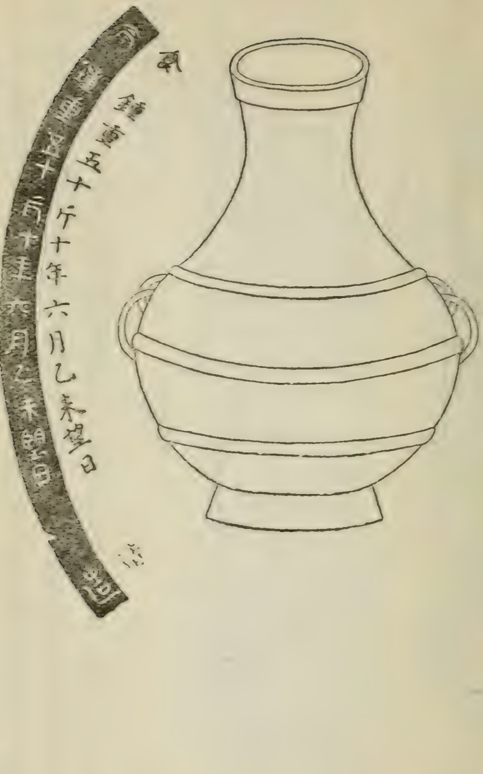


食官一朋造
重五十斤四兩

右高一尺三寸九分深一尺一寸六分口徑六寸腹圍三尺五寸二分重三百二十七兩　下識云五十斤四兩按律

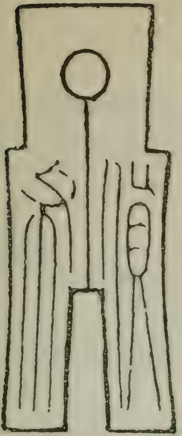
羅志三百八十四銖爲一斤合易二篇之爻又十六兩爲斤者四時乘四方之象也則斤爲十六兩古今所同此五十斤四兩當爲八百四兩今權重三百二十七兩則漢之毎百兩今四十兩六錢七分有奇也

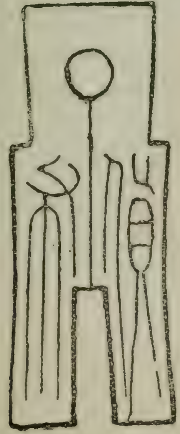
漢食官鍾　同上

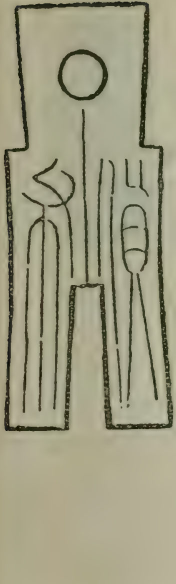


右高一尺三寸七分深一尺二寸五分口徑五寸二分腹圍三尺四寸二分重三百四十兩兩耳有環制與前器同銘亦云重五十斤而今權重三百四十兩則漢之每百兩今又爲四十二兩五錢矣與前二鍾異按三才圖會載漢蕭鐘重一斤三兩銘云重五斤六兩以今權較之三兩十二銖八絫有奇當漢之一斤觀此器則六兩一十九銖二絫當漢一斤矣與圖會亦弗合

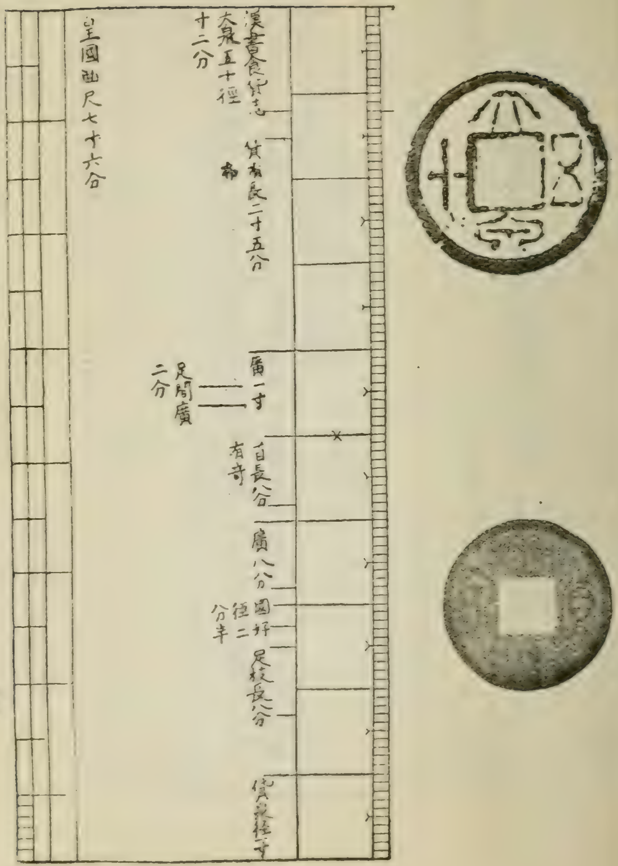
本朝度量權衡攷圖譜





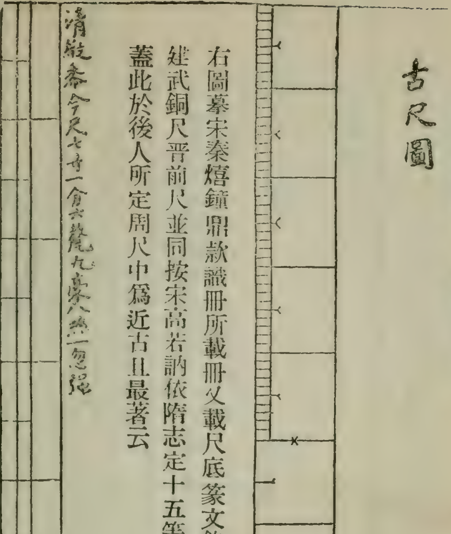


漢錢起尺


漢書食貨志
大泉五十徑寸二分
貨布長二寸五分
首長八分有奇
廣八分
圓好徑二分半
足枝長八分
廣一寸
足間廣二分
貨泉徑一寸
皇國曲尺七寸六分

古尺圖

周官祿田考

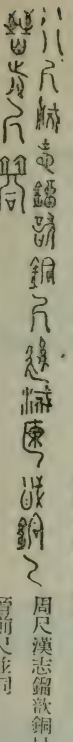


清絲秦今尺七寸一分六釐九豪八絲一忽強

右圖摹宋秦熺鐘鼎款識冊所載冊又載尺底篆文銘云一周尺漢志鎦歆銅尺後漢建武銅尺晉前尺並同按宋高若訥依隋志定十五等尺第一爲周尺即此也詳蔡氏律呂新書

蓋此於後人所定周尺中爲近古且最著云

晉銅尺　即上所古尺

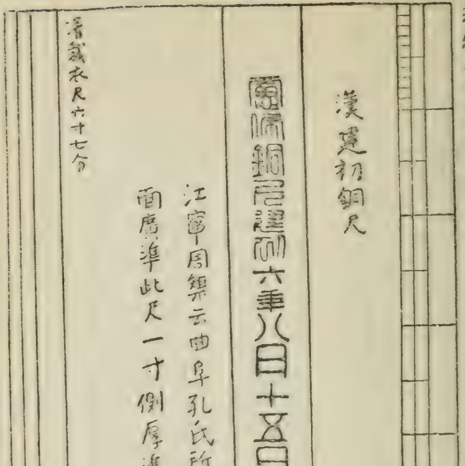


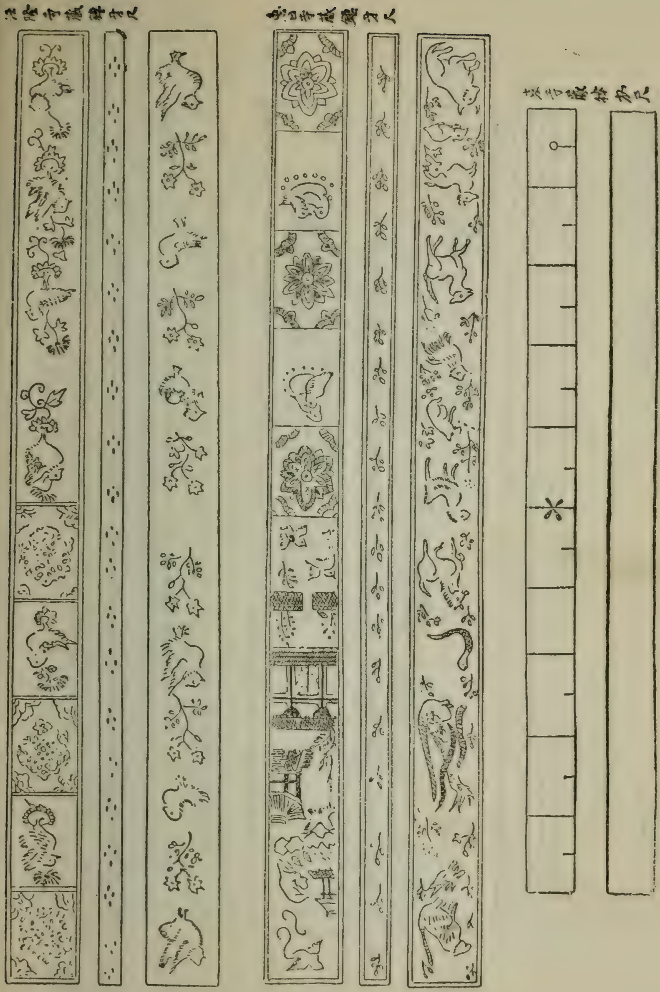
積古齋鐘鼎款識

周尺漢志鎦歆銅尺後漢建武銅尺晉前尺並同

右晉銅尺銘十九字據宋王氏款識搨本摹入沈彤（下略）所摹銘文建下一字正作武惟首多一字係誤衍

清縱黍今尺七寸四分

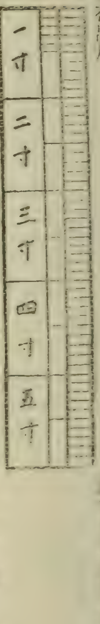

漢建初銅尺
慮俿銅尺建初六年八月十五日造
積古齋鐘鼎款識
江寧周榘云曲阜孔氏所藏銅尺重今庫法平十八兩
面廣準此尺一寸側厚準此尺五分
清裁衣尺六寸七分

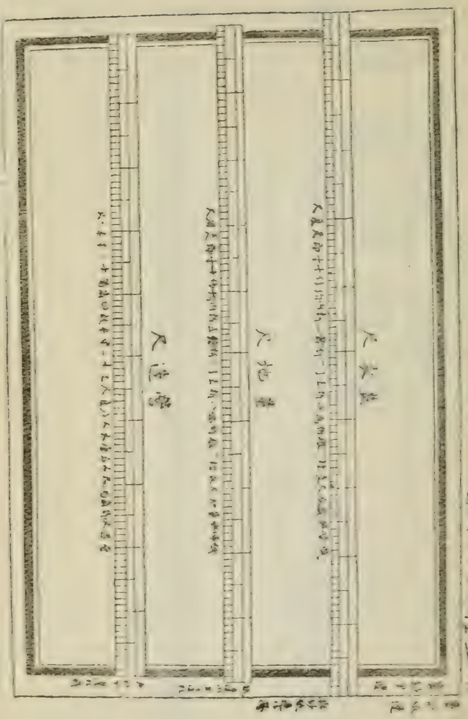


法隆寺藏撥牙尺

宋市尺圖　即大府寺布帛尺

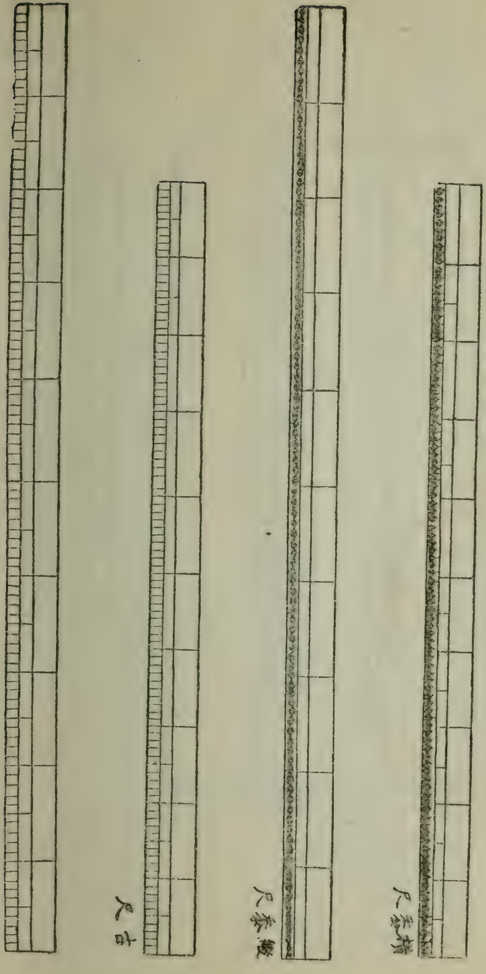
尺樣



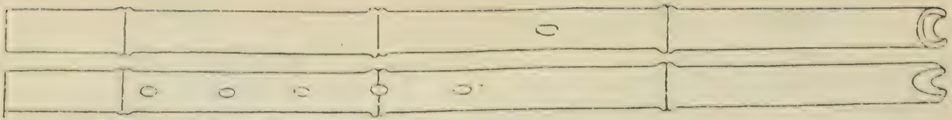


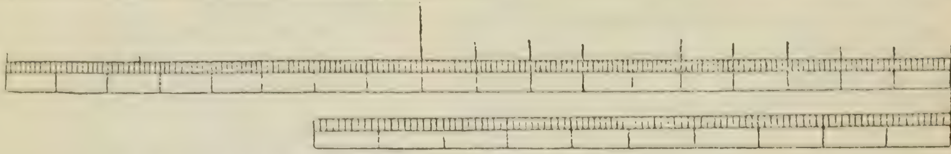
清康熙二種尺

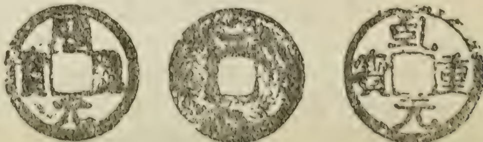
黍ハ縱橫トモ各一寸間十粒ヲ容ルルナリ



法隆寺藏尺八



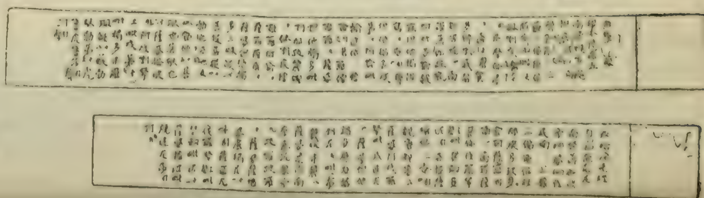




雜令曰一尺二寸
爲大尺一尺

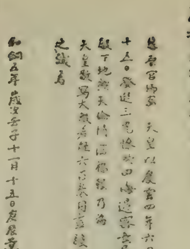
封演錢譜曰乾元
重寶重輪錢徑一
寸四分

封演錢譜曰乾元
當十錢徑寸二分

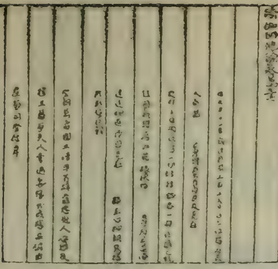


梓スルニ無垢淨光大
陀羅尼經一卷唐ノ則
天皇后ノ時天竺ノ沙
門彌陀山等譯ス宋藏
元藏ニハ過字函ニア
リ高麗藏ニテハ知字
函ニアリ明藏ニテハ
彼字函ニアリ

和銅五年寫經　紙長曲尺一尺六寸一分餘、廣七寸六分餘



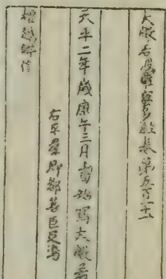
是ハ長屋王文武天皇ノ御爲ニ寫シ奉リ給ヒシ經ナリ長屋王ハ天武天皇ノ御孫高市親王ノ御子ニテ文武天皇ノ御從弟ナリ後罪アリテ天平元年二月死ヲ賜リテ自盡シタマヘリ



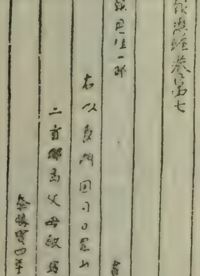
長一尺九寸廣八寸九分

藤原夫人名詳ナラズ天平九年二月戊午正三位ニ叙シ寶字四年正月辛卯薨ス正一位ヲ贈ルト續日本紀ニ見エタル夫人ナリ亡考贈左大臣府君トハ房前公ヲ云ヘルナリ

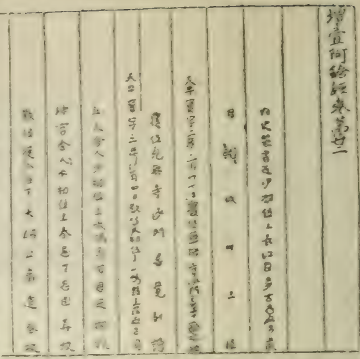
天平二年寫　紙長一尺六寸一分餘、廣八寸四分有奇



平羣郷ハ大和國平羣郡ニアリ都菩臣足島解信共ニ考無シ

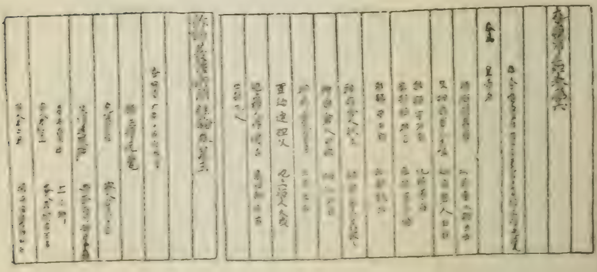


長一尺七寸五分、廣九寸五分

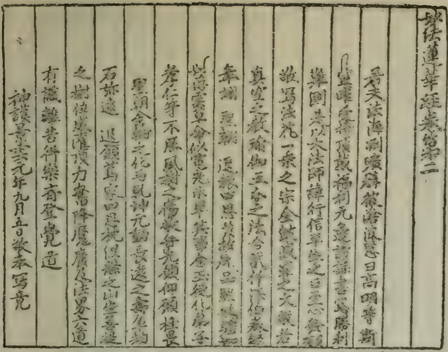


還位ハ復位ナリ續紀天平寶字元年九月辛巳云云其僧綱及京内僧尼復位以上並聽同道トアル復位即此ナルベシ此位コノ外物ニ見エタルコト無シ

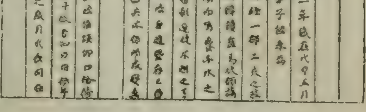
坤宮ハ皇后宮ナリ十七(卅二右)改皇后宮職曰紫微中臺卷廿一(十四右)改中臺曰坤宮官卷廿五(十九右)復舊ト見エタリ然ラバ坤宮舍人ハ皇后宮ノ舍人ナリ



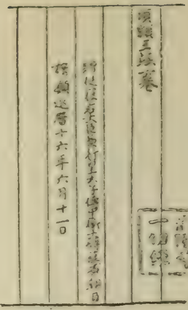
華嚴八會剛目章一巻
天平神護元年四月廿二日東大寺僧興
顯此書字者簾内□不及當成眞佛子迴
此功德施法界皆願常得寂靜樂


妙法蓮華經巻第二
……
有識離苦得樂奇登覺道
神護景雲元年九月五日敬奉寫竟

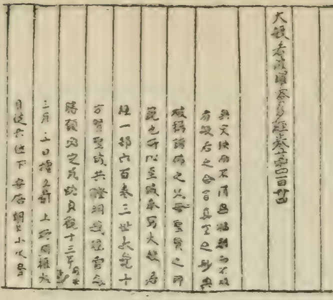
行信ハ天平十年七月三日律師ニ任ジ天平勝寶二年ニ寂スト七大寺年表ニ見ユ孝仁事跡詳ナラズカカル漢文ニ掛マクモ畏コキト云シコト珍ラシ漢文ナガラサスガニ朝廷ヲ仰ギ尊ミ奉リシコト嘉尚スベキコトナリ

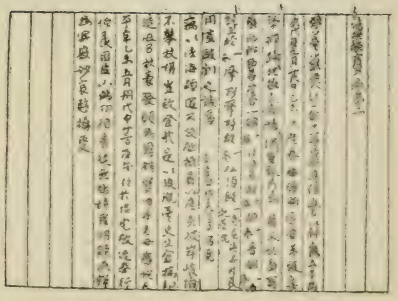

……神護景雲二年歳在戊申五月
十三日景申弟子……奉寫
……

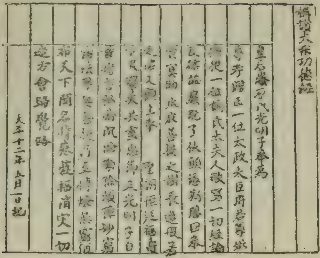
此經ハ孝謙皇帝御父聖武皇帝ノ御爲ニ寫サセ給ヒシ經ナリ御跋ニ先聖ト詔ヒシハ卽聖武皇帝ノ御事ナリ續日本紀ニ神護景雲元年八月丙午從五位下若江王外從五位下秦忌寸智麻呂並爲寫一切經次官トアルハ此經ヲ寫サセ給フニヨリテ其事ヲ檢挍スル官人ヲ任ゼラレシナリ



コノ經ハ右大臣繼繩公ノ誓願ニテ寫シタル經ナリ（繼繩公ハ續日本紀ヲ修シ總裁ナリ）日本後紀ニ延曆十五年七月乙巳右大臣正二位兼行皇太子傅中衛大將藤原朝臣繼繩薨繼繩者右大臣從一位豐成之第二子也ト云ヒ十一月壬辰詔故右大臣贈從一位藤原朝臣繼繩度七人トアレバ十一月ヨリ前ニ贈位アリシナリコノ經ハ此右大臣ノ發願アリテ果サレザリシヲ繼ゼラレシ後小祥ノ追福ニ寫シタルモノナルベシ





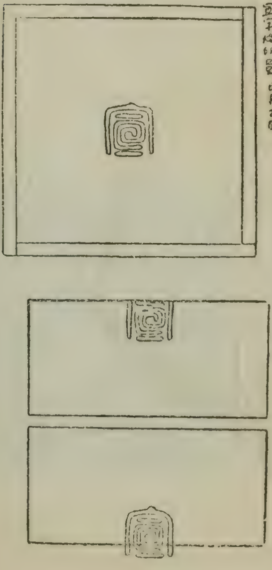


佛說大乘功德經

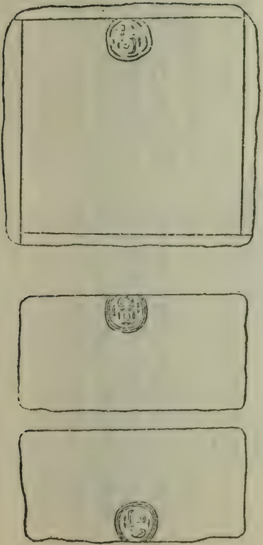
皇后藤原氏光明子奉爲
尊考贈正一位太政大臣府君尊妣
贈從一位橘氏太夫人敬寫一切經論
及律莊嚴既了伏願憑斯勝因奉
資冥助永庇菩提之樹長遊般若
之津又願上奉　聖朝恆延福壽
下及寮采共盡忠節又光明子自
發誓言弘濟沉淪勤除煩障妙窮
諸法早契菩提乃至傳燈無窮流
布天下聞名持卷獲福消災一切
迷方會歸覺路

天平十二年五月一日記

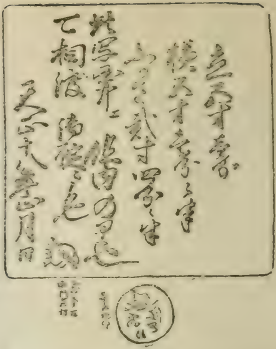
宜字塔印量　出集古圖

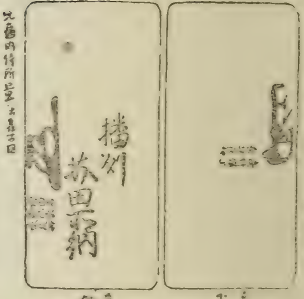


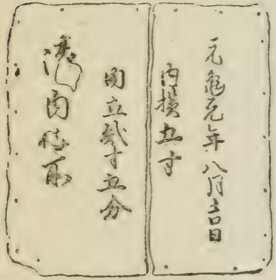
元龜內侍所量　出集古圖



播磨國印南郡[illegible]村井田五郎右衛門所藏古升







本朝度量權衡攷附錄卷下之下　終

泉幣考遺

例言

此書爲拾泉貨鑑所遺者而作也其雖原所載者有字文肉好之異及背文遺漏者亦錄之、但其別有益者並與原所載不異者復載如半兩大泉五十是也其餘惟舉錢文及說而闕圖如萬年通寶是也

如不知年代品泉貨鑑詳載者併錢文不舉之如天福鎮寶大興平寶是也

如厭勝品泉貨鑑及寛政孔方鑑所載者皆略但撞騎特勒印馬荒閑參差等故復出

皇朝鑄錢詔文新撰錢譜及叢家寶錢譜已詳載今不復錄特延曆錢詔文以昔時日本後紀散逸之故錄出

凡所載錢貨不敢以一己之見鑑定其眞贋賞鑑家僉稱善而后取之

文化四年十一月望日　久野克寛誌

錢幣攷遺總目

錢幣攷遺　卷一

久野克寬輯
狩谷望之校

皇朝錢

〔圖錄　一頁ノ1　2　3　4　5〕

右元明天皇始鑄和同錢○續日本紀云、和銅元年五月壬寅始行銀錢、二年正月壬午、詔曰、國家為政、兼濟居先、去虛就實、其理然矣、向者頒銀錢以代前錢、又銅錢並行、比姧盜逐利、私作濫鑄、紛亂公議、自今以後、私鑄銀錢者、其身沒官、財入告人、行濫逐行者、加杖二百、加役當徒、知情不告者、各與同罪、三月甲申制、凡交關雜物、其物價銀錢四文以上、即用銀錢、其價三文以下、皆用銅錢、八月乙酉廢銀錢、一行銅錢、三年九月乙丑、禁天下銀錢○謹按、此錢五種、初一品、徑八分四釐、重一錢九分、輪郭精潤、字文微小、形制甚古朴、次一品、徑八分四釐強、重一錢八分、文字稍大　其開字用正書之亦書、次一品徑八分三釐、重一錢四分四釐強、輪郭差細、開字从二戸、字體粗類銅錢、次一品、徑八分二釐、

重二錢三分七釐、錢質渾厚、於諸品中最重、後一品、徑八分二釐、重一錢四分五釐、並輪郭廣濶、字文差異、而開字結構如初二品也、凡和同錢銀鑄新舊甚難辨別、或疑爲非古鑄、然當時賞鑑家、皆以爲古鑄、今詳觀之、與近世銀鑄諸錢不相類、計皆和銅中所造、並臚列備攷、

初三種伊勢國長良氏所收

後二種尾張國西川氏所收

〔圖錄　一頁ノ6　7　8　9　10　11　12〕

右銅鑄和同錢　○續紀和銅元年二月甲戌、始置催鑄錢司、七月丙辰、令近江國鑄銅錢、八月己巳、始行銅錢、五年閏十二月、以錢五文、准布一常、○藤蒙齋錢譜云、按續紀和銅三年正月丙寅、太宰府獻銅錢、戊寅播磨國獻銅錢、據此則當時令諸國鼓鑄、可知矣、其錢今不可辨識、○愚按所載七種、前一品、制作麁惡、字文類銀錢在第五者、次二品、寛政中於丹波國山中掘地所得、一字畫各爲挑剔、一和字之禾終畫稍長、共面背濶緣、制度亦不精、次一品、亦字畫各爲挑剔、外郭稍細、制作粗佳、次一品、制造頗精、字文類銀錢在第三者、皆今世所希有、次一品、字文明徹、制作精妙、外郭最細、今世尚多、後一品、頗輕小、而制作麤惡、疑當時姦民所盜鑄者、又按、和銅錢制度有精粗、字文有異同、有濶緣、有細緣、而銅質則皆

相同也、其形制字文、類銀錢者、蓋初鑄也、細緣而制作精妙者、肉好字文如唐之開元錢、而端正又過之、意者當時天下寧靖、文物滋盛、如錢貨亦以致作法爲事、故及鑄此品、特擇錢工妙手、鑄作者也矣、

〔圖錄　二頁ノ13〕

右廢帝開基勝寶金錢　○續紀云、天平寶字四年、三月丁丑、敕造新錢、文曰萬年通寶、以一當舊錢之十、銀錢文曰太平元寶、以一當新錢之十、金錢文曰開基勝寶、以一當銀錢之十、○荒木方彬曰、寛政六年甲寅、四月十九日、於南都西大寺西塔之舊址、地下七尺餘、得金錢一枚、銅錢若干品、余與同好、就而觀之、金錢文曰開基勝寶、金色如新、徑八分、重三錢八分、其書隸體、類銀錢和同錢、乃搨摸而還、其銅錢者、萬年錢神功錢也、〔京師寺井氏曰、所得開基錢、乃藏西大寺寶庫、西塔之舊址、今龍池院即此、〕○愚按此錢、余雖未見之、二氏之說、最足爲據、故今錄于此、如太平銀錢、余未之見、

〔圖錄　缺〕

廢帝萬年通寶錢○寶字四年所鑄（說見前）○愚按此錢、濶緣、細緣、大樣小樣、種狀不一、大者至徑九分餘、重一錢五分、小者不及徑八分、重八分、又有年字點爲橫畫者、〔藤貞幹錢譜云、續紀曰、天平寶字二年八月甲子、以紫微內相藤原朝臣仲麻呂、任太保、姓中加惠美

二字、名曰押勝、給功封三千戸、功田一百町、聽鑄錢擧稻、及用惠美家印、此錢字文形製、史雖不載、其爲萬年通寶錢、可知矣、愚按聽押勝鑄錢、在萬年錢鼓鑄之前、定知仍舊鑄和銅錢也、寶字四年鑄錢詔下之後至八年伏誅、並鑄萬年錢未可知矣、)

〔圖錄 二頁ノ14〕

右稱德天皇神功開寶錢〇續紀云、天平神護元年、九月丁酉、更鑄新錢、文曰神功開寶、與前新錢、並行於世、(乾隆錢錄、及鐘官圖經、皆作開珍、並襲洪遵泉志之訛耳)〇愚按此錢、功字从刀者、與从力者、二體、而開字、或从二戸、或用正書之筆畫、有大樣小樣各種、今所載、徑八分五釐、輪郭稍濶、字文結體、異于諸品、細觀神寶二字、如大樣者、功開二字、類功、字从刀者、而不從力、最爲異品、(往年近江國勢多鄉人於水中大獲古錢此品在其中云)

〔圖錄二頁ノ15〕

右桓武天皇隆平永寶錢〇日本後紀云、延曆十五年、十一月八日乙未、詔曰、周朝撫曆、鑿開九府之珍、漢室膺期、爰設三官之貨、用能遷有無、以均利、通□夷而得宜、濟民之要須、乃經國之嘉策、然而□機適時、賢哲所以成務、權輕作重、母子於是並行、頃者私鑄滋起、奸鑑紛然、施之交關、既爲輕賤、宛之貯蓄、不堪實用、即欲禁止卒誰懲淸、事須平直、以救流弊、是以更制新錢、仍增其直、文曰隆平永寶、宜以新錢一、當舊錢十、新舊兩色兼使行用、

但潤錢者、始自來歲、限以四年、然後停廢、十四日辛丑、始用新錢、奉伊勢神宮賀茂上下二社松尾社、亦施七大寺及野寺、賜皇太子親王已下職事正六位已上、僧綱律師等、各有差、

○愚按、隆平錢、亦有大樣小樣各種、字文、數樣、又永字从二从水者、有字文狹濶之二種、今所載、其狹小者、此錢徑八分弱、重一錢、

〔圖錄　二頁ノ16　17〕

右嵯峨天皇富壽神寶錢　○日本紀略云、弘仁九年、十一月辛巳朔、詔改錢文、曰富壽神寶、

○愚按富壽錢、大者有字文二躰、一壽字上从士、一壽字竪畫貫至下横畫、共寶字从缶貫、田中横畫連綴左右、所戴、徑八分五釐、重一錢一分五釐、壽字竪畫貫而寶字田中横畫、不粘左右者、（此錢伊勢國白井氏所收）小者有肉好、字文小異者各種、並寶字从缶、今所載、徑七分九釐、重九分九釐、神字示从二、差爲異品、大小錢、皆制作精巧、

〔圖錄　缺〕

右仁明天皇承和昌寶錢、○續日本後紀云、承和二年正月戊辰、令鑄新錢、文曰承和昌寶、

○愚按此錢有大小二種、大者徑八分、小者徑六分七八釐、共制作最精、其大者固不多有、

〔圖錄二頁ノ18〕

右仁明天皇長年大寶錢　○續日本後紀云、嘉祥元年、九月乙亥、令鑄新錢、下詔曰、云云、

文曰長年大寶、一以當舊之十、○愚按、長年錢、有大者二種、小者一種、今載大者一種、此錢徑七分弱、字文稍大、今世最希、

〔圖錄 二頁ノ19〕

右淸和天皇饒益神寶錢 ○三代實錄云、貞觀元年四月二十八日、詔曰、云云、更制新錢、文曰饒益神寶、一以當舊之十、十月庚戌、鑄錢司進新錢、○愚按、此錢徑七分弱、重八分三釐五豪、字文廣潤、銅質黃色、制作頗佳、（此錢伊勢國長良氏所收）其他有大小二種、大者今世不易得、

〔圖錄 缺〕

淸和天皇貞觀永寶錢 ○三代實錄云、貞觀十二年春正月二十五日戊寅、詔曰云云、文曰貞觀永寶、一以當舊之十、○愚按、此錢字文止一樣、

〔圖錄 缺〕

宇多天皇寬平大寶錢 ○拾芥抄云、寬平二年五月鑄、○愚按此錢有肉好、字文小異者五樣、

〔圖錄 缺〕

醍醐天皇延喜通寶錢 ○拾芥抄云、延喜七年十一月鑄○愚按、此錢、緣有細潤、字亦有小異、

〔圖錄二頁ノ20〕

右村上天皇乾元大寶錢　○日本紀略云、天德二年三月、改錢貨文、延喜通寶、爲乾元大寶、圖書允河保懷之、書錢文、○河宮齋青蚨私誌云、洪志載此錢、作乾文大寶、乾隆錢錄、引宋史、文曰乾文大寶、而所圖乃與洪志同、其爲贋作可知已、○愚按、錢官圖經、載此錢、作乾文大寶、亦傳訛耳、今所載、徑六分五釐、重五分二釐、四字稍近內郭、與他品異、最爲勁矣、又按、自貞觀錢以下四品、共徑六分五釐左右、自重五六分、至一錢餘、字畫闊淺、制作不精、皆有銅錢鉛錢二樣、

〔圖錄　缺〕

後陽成帝御慶長通寶錢　○慶長十一年鑄（南嶺子）○愚按、此錢有字文小異者四樣、

〔圖錄　缺〕

後水尾帝朝、元和通寶錢 ○愚按、此錢元字係行書、背文有一、六、十、廿等字、又有銀錢、背文有十六、十七、廿四、廿八等字、小山氏曰、余嘗閲鑄錢座文簿云、元和錢、背文自一到四十、

〔圖錄　二頁ノ21〕

右寛永通寶錢　○愚按、此錢徑九分、重一錢三分、江戶芝所鑄之母錢、彫成其文者、今時最難見、故特揭之、又按、寛永錢、自明正帝寛永十三年初鑄、至今凡百七十年、所鑄相遷、形

製鼓出、不遑枚擧、且諸譜所備載、今竝略之、

〔圖錄　缺〕

銀代通寶錢　○愚按、此錢徑九分五釐、重一錢五分、蘭叢齋曰、元祿十六年、京師賈人、請鑄此錢、官已準之、旣而有故、停廢不果行、今存者當時樣錢也、

〔圖錄　缺〕

寶永通寶錢　○愚按、元祿十七年、改元寶永、此錢寶永四年所鑄、徑一寸二分五釐、重二錢五分、以一當寬永錢之十、六年停不行、又有一種穿左右在寶永二字者、此制鑄當亦官樣錢也、當時有議、用寶永通寶之字云云、又按泉貨鑑數十錢通寶、寶通通寶二種、曰此錢或云、當時樣錢也、然今所見皆戲鑄者、如樣錢未嘗之見、

〔圖錄　缺〕

天正錢、文祿錢、文共曰通寶、竝銀鑄、又有銅錢、形制陋拙、是後人所戲鑄、

〔圖錄　缺〕

貞享通寶、此錢有銀銅二種、背文曰甲子、貞享元年（歲次甲子）所鑄云、

〔圖錄　缺〕

元祿錢、三種、曰德寶者、徑七分八釐、背文曰五卜、曰開珍者、徑九分弱、背文曰一卜、

日本珍者、二種、一徑八分八釐、一徑一寸一分、共背文曰一匁、以上兩品、並背[illegible]省生、

按泉彙、此錢元祿六年（歲次癸酉）所鑄云、

〔圖錄　缺〕

右一品、愚嘗見之、一面曰寶永通用、一面有方郭中壹匁二字、上下緣有花文、長一寸五分五釐、寬九分五釐、重（ママ）　摘之、銅質制作、大類寶永通寶錢、蓋係異品、

〔圖錄　缺〕

享保通寶錢、徑八分五釐、背文穿上有永字、享保元年所鑄云、

愚按、天正錢以下、至享保錢、若干品、蓋皆當時所鑄、然錢非通行之品矣、今姑錄條末、以備考、

愚按

皇朝錢貨、乾元大寶後不聞鼓鑄之事、殆三百七十餘年、是乃以外境之錢、通用于民間之故也、後醍醐天皇、還幸平安之後、庶事尚復古、於是詔鑄新錢、文曰乾坤通寶、事見建武記、然未知果行否也、其後仍用唐宋錢、民間或摹宋錢、私鑄耳、其錢輕少粗惡、不過重二三分、俗稱之惡錢、寬永年間、以前宋明永樂錢、亦與古錢雜用、關東[illegible]專[illegible]錢較小、市中[illegible]、

於是議廢古錢、用永樂錢、謂之永錢、關西猶用從來流行古錢、謂之京錢、慶長鑄錢之後、都廢宋明諸錢、至寬永、鼓鑄之法大備、以迨于今日、未聞自古錢幣之多如此也、是亦足以察昇平之美矣、又大隅國加治木村、所鑄有大中洪武二種、此用明太祖錢文、常陸國水戶所鑄、有用宋朝錢文者各種、蓋皆慶長以前所鑄也、其餘寬永鑄錢之後、錢工戲鑄者、如畫錢佛名錢、種類甚夥、皆泉貨鑑及泉彙、所載詳悉矣、故略之、又按用金幣銀幣其來尚矣、形制不得詳焉、天正文祿之間、制度漸備、有大小各體、其大者撱之、小者方之圓之、至慶長年、大布於國家、其後時或改鑄、迨于今以便用之、其他列國所造、有數種、獨甲斐國最爲多、如今亦用之、皆國家金銀錢譜、三貨備覽、備論之、今不復錄出、(今世有金銀錢面文各種、或鑄成之、或印記之、泉彙備載之、按武德編年集成、天正十九年神祖殊今後藤光次造小撱金重四錢八分當營所行金金錢四枚之量、民以爲便與並行、今熟玩金錢、有重一錢二分許、金質精美、印記其文者、集成所謂蓋此等之者、猶俟後考)

今恐令誤、
金恐衍

錢幣攷遺　卷一

辛酉六月初四一校　　大村成富覆校

泉幣攷遺　卷二

久野克寛輯
狩谷望之校

秦正品

〔圖錄　二頁ノ22　23〕

右秦半兩錢　○漢書食貨志云、秦兼天下、銅錢質如周錢、文曰半兩、重如其文、○史記索隱顧氏按古今注云、秦錢半兩、徑寸二分、重十二銖、○乾隆錢錄、據通典云、古稱此爲時三之一、一開元錢爲古之七銖以上、今以開元錢較半兩錢、則凡今稱一錢五分左右之半兩、大抵皆秦半兩、○曹昭格古要論曰、紫金古云半兩錢、即紫金、今人用赤銅、和黃金爲之、然世人未嘗見紫金也、○愚按、所藏二種、初一品、徑一寸餘、雖銅質錯銀、得重一錢有奇（此錢舊知山侯藏弆）後一品、形模稍小、青綠浸密、半字匿滅、並較他錢、形質文字共大、故繫之秦錢、

西漢正品

〔圖錄　二頁ノ24　三頁ノ25　26〕

右漢初半兩錢　○漢書高后紀云、二年秋七月、行八銖錢、應劭注曰、文曰半兩、○顧烜錢譜云、前漢高后時、既患莢錢之輕、按（食貨志云、漢興以爲秦錢重難用、更令民鑄莢錢、伏無忌曰、重三銖、高后紀云、六年行五分錢、應劭注曰、所謂莢錢者、顧烜曰、文曰漢興鑄官圖經謂莢錢自徑二分有奇、至徑三分不等、重不及銖、文曰半兩、又按應劭曰、文帝以五分錢太輕小、作四銖錢、文亦四半兩、據此等之說、則莢錢文爲半兩明矣、然今世所見存半兩錢、未見如此輕小者也、）又苦秦錢之重、故更鑄八銖錢、○舊譜云、重八銖文曰半兩　○錢錄據通典云、凡今稱一錢者、漢八銖之半兩也、○愚按、所載三種、前一品、徑八分五釐、重九分、（福知山侯所收）次以肉好銷蝕、雖不及重六分、尙徑八分四釐、字文亦大、（利倉氏所收）後一品某侯所收、河寶齋曰、嘗見此錢、形質字文最大、當是八銖錢耳、今詳考之、俱形制篆法、類秦錢而稍小、故繫之漢初、臚列可見、

〔圖錄　三頁ノ27　28　29　30〕

右文帝半兩錢　○史記平準書云、至孝文時、莢錢益多輕、乃更鑄四銖錢、（按漢書孝文五年）其文爲半兩、令民縱山自鑄錢、故吳諸侯也、以卽山鑄錢、富埒天子、其後卒以叛逆、鄧通大夫也、以鑄錢財過王者、故吳鄧氏錢、布滿天下、而錢之禁生焉、○錢錄據通典云、今稱重五

六分以上者、漢四銖之半兩也、○愚按所載四種、初一品、徑七分七釐、重六分有奇、肉好篆法、類八銖錢、而亦輕小、後三品字文形制、雖小異、制度最正、銅質或黄褐、或紫赤、共徑八分弱、重五六分、當皆四銖錢耳、

〔圖錄　三頁ノ31〕

右半兩小錢　○愚按、此錢徑七分、重三分有奇、肉狹孔濶、形制奇古、於半兩錢中、最輕小、殆所謂莢錢者、

〔圖錄　三頁ノ32　33〕

右傳形半兩錢　○鐘官圖經引顧烜錢譜云、半兩有半字在左兩字在右者、曰傳形半兩、漢孝文鑄　○洪志云、傳形半兩錢、字文坦明、背面皆無輪郭、徑八分、重二銖一參、○愚按、此錢二品、一徑八分弱、字文明坦、兩字之中作兩人、一徑七分六釐、字文湮晦、兩字之中畫不明、

〔圖錄　三頁ノ34　35〕

右有郭半兩錢　○錢錄云、武帝有郭半兩錢、按漢書武帝建元五年、罷三銖錢、行半兩錢、顏師古注曰、又新鑄作也、明非八銖四銖之舊、然其異同莫辨、此品則以有郭爲異、故錄之、○愚按、此錢二種、一兩字之中作兩人、一作十字、並徑八分强、重八分、形模大于四銖半兩、

而有肉郭、錢錄所稱、雖未知是非、姑錄于此備攷、

〔圖錄　三頁ノ36　四頁ノ37　38〕

右竪文半兩錢　〇愚按、此錢三種、前一品、兩字之中作十字、穿上有三竪文、次一品、兩字之中畫不明、穿下有一竪文、後一品、兩字之中、作兩人、穿下肉推起、蓋亦竪文之變也、共形質類四銖半兩、洪志曰、封氏云、半兩錢、有穿下三竪文者、及鐘官圖經、曰有穿下一竪文者、正此等類、

〔圖錄　四頁ノ39　40〕

右半兩錢　〇愚按、此錢前一品、徑七分四釐、重七分有奇、兩字作㒳（俗稱之兩山）較之四銖半兩、則字文頗肥、錢質稍重、又別爲一種者、後一品、肉孔字文與前品不異、惟穿上有一星耳、最爲異品、（按西京雜記、謂吳有銅山鑄錢、錢微重、以此錢微重、或爲吳王濞所鑄、未知是非、猶俟後攷、）

〔圖錄　四頁ノ41〕

右半兩錢　〇愚按、此錢制度一如四銖半兩、封氏所謂兩字之中、唯作十字、不復爲兩人者、

（按或以此錢、爲鄧通所鑄、不足信、）

〔圖錄　四頁ノ42　43　44　45　46　47　48〕

右半兩錢　愚按、所藏數種、兩字作𠕒者、兩字作𠕓者、半字堅畫湮沒者、如有孔郭者、字畫纖瘦者、字文肥大而畫斜者、兩字甚廣濶而溢內外者、（圖經所謂兩字作㒳者蓋是）以上各種、自重四分、至六七分、篆法不正、計皆邊邑所僞鑄也、

圖錄　五頁ノ49　50一

右武帝三銖錢　○漢書武帝紀云、建元元年春二月、行三銖錢、（顏師古曰、新壞四銖錢造此錢也、重如其文、）平準書云、自孝文更造四銖錢、至是歲、（按文獻通考自孝文更造四銖錢、至元狩四年四十餘年云云、又按元狩四年距建元元年二十有一年）四十餘年、從建元以來用少、縣官往往、卽多銅山、而鑄錢、民亦間盜鑄錢、不可勝數、錢益多而輕、物益少而貴、有司言曰、今半兩錢、法重四銖、而姦或盜摩錢裏、（漢書作質）取鋊、（漢書作鋊、臣瓚曰、許愼云、鋊銅屑也、考徵鑑云、鋊一本作鎔作鎔非）錢益輕薄、而物貴、則爲皮幣、又造銀錫、爲白金三品、令縣官銷半兩錢、更鑄三銖錢、文如其重、○洪志云、此錢史氏以爲銷半兩、更鑄三銖錢、重如其文、則三銖之文明矣、李孝美又畫半兩錢於其下、蓋從封氏之說也、○小山政數曰、余所收三銖錢二品、一如半兩錢、一有肉郭、似有郭半兩、蓋如半兩者、建元中所鑄、有肉郭者、元狩中所鑄、又按洪志、三銖錢當時所未經見、故其說紛紜、然今見之、形質輕小于四銖半兩、稱兩亦合、更非可疑者、○愚按、此錢二種、前一品、徑七分有奇、重四分弱、制

作一如半兩錢、後一品、徑同前、重三分五釐、銅色紫赤、微爲肉郭之形、皆如小山氏所云也、

〔圖錄　五頁ノ52〕

右五銖錢　○平準書云、大將軍驃騎、大出擊胡、（徐廣曰元狩四年）是時財匱、有司言、三銖錢輕易姦詐、乃更請諸郡國、鑄五銖錢、周郭其下、（凌稚隆云一本下作質、漢書同）令不可磨取鋊焉（漢書作鋊）錢錄云、武帝紀元狩五年、罷半兩錢、行五銖錢、世謂五銖輪郭周正、輕重得中、可以爲法、然行五銖、後因民多姦鑄、乃鑄赤仄五銖、食貨志言、後二年赤仄又廢、於是禁郡國毋鑄錢、專令上林三官鑄、故有三官五銖之名、蓋漢之錢法屢變、惟三官五銖爲無弊、○愚按所藏二種、一徑八分三釐、重八分弱、一徑八分餘、雖銅質銷蝕、重亦不下六分、但肉郭細、制作精、又按五銖錢、自漢武初鑄、迨隋季、各朝皆行之、種類甚夥、有細緣濶緣星文甲文豎文橫文決文等之異、不能一一爲分辨、今錄其稱兩稍合者、姑繫之漢武、

〔圖錄　五頁ノ53〕

右五銖錄　○愚按、此錢徑八分三釐、重一錢、肉郭細纖、制作最精、凡五銖錢、穿濶者文字亦大、穿狹者文字亦小、意文字倣穿之狹濶者、蓋禦磨取錢質也、此品特不然穿濶字短、類三銖錢之銖字、雖稱兩頗重、疑元狩中所鑄矣、

〔圖錄　五頁ノ54〕

右五銖錢 〇愚按、此錢今世所見、徑八分四釐、重八分許、五字兩斜竪直邊畫端、輪郭甚細、制作精好、世稱之三官五銖、未知何據、

〔圖録 五頁ノ55〕

右五銖錢 〇愚按、此錢徑八分五釐、重八分、輪郭細纖、字文甚長爲異、

〔圖録 五頁ノ56〕

右五銖錢穿下星文 〇愚按、此錢徑八分六釐、重一錢、肉郭字文共纖、制作精好、或側立于爐上不顚倒、其外郭方正如此也、蓋未經行用、而入土久者、（或云寛保二年二月、周防國宇部村民、穿地得古錢八百枚許皆半兩五銖之類也、此錢乃在其中云、今世所見、五銖錢、外郭方正者、往往有之、蓋皆當時所掘獲、）

〔圖録 五頁ノ57 58〕

右五銖二品、一穿上左角一星、一穿上右角一星、

〔圖録 五頁ノ59〕

右五銖、五字右邊傍好一星、

〔圖録 五頁ノ60〕

右五銖、五字左邊一星、

〔圖錄　六頁ノ61　62〕

右五銖二品、一穿下左角甲文、一穿上右角甲文、

〔圖錄　六頁ノ63〕

右五銖、穿四角决文、此錢肉好字文、與所常有者異、

〔圖錄　六頁ノ64〕

右五銖、五字之內一甲文、背穿下四星、

〔圖錄　六頁ノ65〕

右五銖、五字之內上下各甲文、上仰下斜、

〔圖錄　六頁ノ66〕

右五銖、穿下三星、

〔圖錄　六頁ノ67〕

右五銖、背穿上直文、

〔圖錄　六頁ノ68〕

右五銖、背穿上二直文、

〔圖錄　六頁ノ69〕

右五銖、穿四角星文、

〔圖錄　七頁ノ70〕

右五銖、穿下橫文、此錢徑八分四釐、重一錢有奇、字文粗濶、錢質渾厚、制作最陋、

〔圖錄　七頁ノ71〕

右五銖、穿上橫文、此錢徑八分弱、輪郭平潤、字文狹小、疑南梁以後所鑄也、

〔圖錄　七頁ノ72〕

右五銖大錢、此錢雖銅質銹蝕、得徑九分有贏、重一錢、面外高內下、最別爲一種者、（按宋書文帝紀、元嘉二十四年六月、以貨貴、制大錢、一當兩、舊譜云、重八銖、文曰五銖、此品於五銖中最厚大、疑近之、）○愚按、以上各種五銖、計一十九品、質有厚薄、銅有紫褐、輕重亦不同、自五六分至一錢餘、雖其源弗可探討、推攷形制、蓋漢五銖之支流也、故姑列于此、佇後攷、其他種類繁賾、不能一一錄之、

西漢僞品

〔圖錄　七頁ノ73　74　75〕

右王莽大泉五十錢　○漢書食貨志云、王莽居攝變漢制、以周錢有子母相權、於是更造大錢、

徑寸二分、重十二銖、文曰大泉五十、鑄作錢布、皆用銅、殺曰連錫、(孟康注云、連錫之別名也、李奇曰、鉛錫璞名曰連、應劭曰、連似銅、師古曰、孟李二說皆非也、許愼云、鏈銅屬也、然則曰連及錫雜銅而爲錢也、此下又云、能采金銀銅連錫知連非錫矣、) ○錢錄云、王莽大錢、按今尺約得徑九分有欸、大約是時尺度、每寸爲七分餘 ○愚按此錢所載三種、字文各有小異、後一品、面背穿四角、爲決文者、皆以閱歲久遠、或雖銅質銷蝕、以今尺秤量之、得徑九分、重一錢二三分、食貨志稱貨泉徑一寸、重五銖、貨布長二寸五分、廣一寸、重二十五銖、今量之、貨泉得徑七分五六釐、重六七分、貨布長一寸九分、廣七分五六釐、重三錢餘、皆大約相合、當知漢時一寸、則爲今七分以上、五銖則今六分以上也、今此三品、以制作最正、尺秤稍合、繫於此、

〔圖錄　七頁ノ76　77　78〕

右大泉　○愚按、前一品、徑九分五釐、重二錢一分、字文狹小、孔郭甚濶、(嘗見貨泉類之者) 後二品、共錢質厚大、一泉字方正者、一泉字平濶者、

〔圖錄　七頁ノ79〕

右大泉　○愚按、此錢徑八分八釐、制作精美、洪志敦素所謂面外高內下、精妙可觀者、蓋此、

〔圖錄　七頁ノ80〕

右大泉（○愚按、此錢徑八分、量七分許、文字瘦、制作佳、按漢書食貨志、稱行大錢與新貨泉、俱枚直一、此品形模殊小、疑當時所鑄、

〔圖錄　八頁ノ81〕

右大泉（○愚按、此錢徑八分七釐、重七分、孔濶質薄、字文欹斜、制作陋拙、蓋鄙民所私鑄、

以上各種大泉、皆銅色紫赤、制作篆法、亦相類矣、

〔圖錄　八頁ノ82　83〕

右王莽貨泉（○漢書食貨志云、王莽天鳳元年、罷大小錢、改作貨泉、徑一寸、重五銖、枚直一、又以大錢行久、恐民挾不止、迺令且行大錢、與新貨泉、俱直一、並行盡六年、毋得挾大錢矣、○愚按、所載二種、共徑七分六釐、重七分弱、字畫明徹、制作精好、以尺度稱兩稍相符、揭于此、

〔圖錄　八頁ノ84　85　85　86　87〕

右貨泉（○愚按、四種初一品、徑七分八釐、重七分、貨字中橫畫兩端斜下、如偃月狀、（貨布亦有如此者）次徑七分五釐、重七分五釐、貨字之下微斷不相屬、差爲異品、次徑七分有奇、孔濶字狹者、後一品徑七分五釐、內郭廣濶者、

〔圖錄　八頁ノ88〕

右貨泉　○愚按、此錢徑七分二釐、面穿上兩隅、爲决文、最所罕見、

〔圖錄　八頁ノ89〕

右貨泉　○愚按、此錢徑七分六釐、重八分五釐、篆法似係玉筯篆、洪志張台所謂有玉筯篆者、蓋近之、

〔圖錄　八頁ノ90〕

右貨泉　○愚按、此錢徑七分弱、重四分五釐、面無孔郭、字畫纖瘦而長大、

〔圖錄　八頁ノ91〕

右傳形貨泉　○愚按、此錢徑七分五釐、洪志張台所謂有傳形者、此品正是、以上八種、大小輕重不一、字文亦有小異、雖未可謂盡王莽鑄、姑附于此備考、又按貨泉、種狀甚多、好郭或有或無、或作重文、又有决文星文細緣濶緣、不可究盡、今略于此、

〔圖錄　八頁ノ92　九頁ノ93〕

右布泉錢　○洪志云、敦素曰、布泉徑寸一分、形製精巧、字體與貨泉略同、疑王莽時鑄、後周亦有布泉、字皆玉筯、與此相並、殊不侔也、鐘官圖經引董逌錢譜云、布泉錢徑一寸、重四銖、懸針書者、自梁武帝以來有之、文曰布泉、世謂之男錢、又引稗史類編云、布泉有玉筯

篆、又有重郭者、○錢官圖經云、懸針書布泉、有重郭者、有正面穿上一星者、有穿上二角決文者、有穿下二角決文者、○愚按、此錢所載二種、初一品、徑八分三釐、字文明備、制作極巧、而穿下兩隅有決文、(有穿上決文者、已載泉貨鑑)後一品、錢質稍磨滅、而穿上有一星、共銅質紫赤、懸針書、而近似莽貨泉、較之後周布泉大異、且決文星文重郭等、制度全同貨泉、故今依敦素說、姑附于此、(按此錢、洪志列入厭勝品、)

錢幣攷遺　卷二　　大村成富覆校

辛酉紀元節抄

同六月十一日校竹清㊞

錢幣攷遺　卷三

久野克寛輯
狩谷望之校

東漢正品

〔圖錄　九頁ノ94〕

右貨泉大錢〇鐘官圖經、引張燕昌金石契云、貨泉笵底有文、曰建武二年、按建武係光武紀元、豈光仍莽制耳、漢書光武紀曰、建武十六年、始行五銖錢、注曰武帝始爲五銖錢、王莽時廢、今始行之、晉書食貨志曰、漢錢舊用五銖、自王莽改革、百姓皆不便之、至光武中與、除莽貨泉、建武十六年、馬援又上書曰、富國之本、在於食貨宜、（按宜原作何今依晉志改正）如舊鑄五銖、帝從之、於是復鑄、天下以爲便、後漢五行志曰、建武六年、蜀童謠曰、黃牛白腹、五銖當復、則光武十六年以前尚仍莽制、行貨泉可知、得此笵、更增一段證據矣、又引張端木錢餘云、端木於乾隆七年、在京師、見株太常公子坤平案頭有建武年錢笵、乞以歸、上列三錢、漫文各三、形質文字精好特甚、較今所見五銖錢頗大、皆有識云、建武二年二月

丙申、太僕監掾蒼、考工令通、齊國令史鳳、工周錢造、篆文遒美、較新莽錢范、文質俱遠過之 ○愚按、此錢徑八分七釐、重一錢三分、銅質渾厚、制作不精、殆非張端木謂錢范、形質文字精好特甚者、然較莽貨泉、形制殊異、而厚大于五銖錢、疑建武中所鑄也、姑錄于此以俟後攷、

［圖錄　九頁ノ95　96　97］

右靈帝四出五銖錢 ○後漢書靈帝紀云、中平三年、鑄四出文錢流布四海、○愚按、初一品徑八分三釐、重八分、世多有之、次一品、徑八分二釐、文字狹小而逼近孔邊、最爲難得、後一品、文字肉好大小輕重、與在初者大同、惟無背四出文耳、俗謂之四道樣、故附于此、（按又有一種、形小穿濶、背四出者、亦所希見、）

蜀漢正品

［圖錄　九頁ノ98］

右昭列帝傳形五銖錢 ○洪志引舊譜云、劉備與直百同時鑄、○鐘官圖經云、傳形五銖、有背四出文者、又兩面同文、而一面銖字倒置者 ○愚按、此錢今世所見、僅不過三四品、並徑八分二釐、重七分許、字文肉好、粗無小異、圖經所謂背四出文者、兩面同文者、愚未見之、

宋正品

〔圖錄　九頁ノ99〕

右文帝四銖錢〇宋書本紀云、文帝元嘉七年十月戊午、立錢署、鑄四銖錢、〇洪志云、此錢徑七分、重二銖四參、肉薄好潤、背面皆有周郭、文字甚明、〇愚按、此錢徑七分三釐、重五分三釐、銅色紫黑、形制一如洪志所說也、今世希見、

梁正品

〔圖錄　九頁ノ100　101〕

右武帝內郭五銖錢〇隋書食貨志云、武帝乃鑄錢、肉好周郭、文曰五銖、重如其文、而又別鑄除其肉郭、謂之女錢、二品並行、（張台曰背有好郭者、謂之公式女錢、背無好郭者、正謂之女錢、蓋聽民私鑄有不精也、龍橋公嘗曰、梁武公式女錢、據顧烜說、似而有好郭矣、愚按、理或然也、又近見因宗堂法帖、有梁女錢笵、而背肉好、共無周郭、豈非張台謂女錢之類耶、）〇愚按、所錄二種、首一品、徑八分有奇、重七分五釐、字文明徹、銅色淡黃、制作精好、與泉貨鑑所載者大同、後一品、字畫漫暗、錢質薄小、制作陋惡、李孝美所謂盜鑄者當此、

（洪志、李孝美曰、有一種徑八分、重三鐃、形製稚肖、而肉漫薄惡、疑當時所盜鑄者、）

梁附雜品

〔圖錄　九頁ノ102〕

右五銖潤緣　○愚按、此錢徑八分強、重六分二釐、銅質肉好、字文相類、于內郭五銖、而惟無內郭耳、計梁代所鑄、

〔圖錄　十頁ノ103〕

右兩柱五銖錢　○隋書云、梁末又有兩柱錢、○愚按、此錢、穿上下各列一星、穿兩側有郭、字文形制、類于前品稍飽惡矣、

〔圖錄　一〇頁ノ104〕

右五銖錢（○隋書食貨志云、武帝乃鑄錢、百姓或私以古錢交易、有直百五銖、五銖女錢、太平百錢、定平一百、五銖稚錢、五銖對文等號、輕重不一、○洪志引顧烜曰、徑一寸、重五銖、文曰五銖、無輪郭、○洪遵曰、此錢謂之五銖女錢、梁武新鑄、亦曰女錢、蓋梁之前、已有女錢矣、○愚按、此錢、一徑七分三釐、一徑八分三釐、共文字各闊、面肉好無周郭、惟背有郭、疑梁代古錢女錢之類也、

〔圖錄　缺〕

右五銖稚錢　○愚按、此錢今世所見、徑六七分、不至重四五分、

〔圖錄　一〇頁ノ105〕

右五銖對文錢　○洪志引顧烜曰、對文錢、剪五銖之所成也、民利古錢多銅、剪鑿取其輪郭、所錄甚輕小、○洪遵曰、五銖有輪郭去鑿、名對文者、○河賓齋曰、對文者、剪取輪郭之名、錢錄以而背同文者、爲對文、余未之信也、○愚按、此錢、今世所見、徑七分四五釐、重五分弱、字文湮滅、背有孔郭耳、

〔圖錄　一〇頁ノ103〕

右五銖錢　○洪志引顧烜曰、徑七分半、重三銖半、文曰五朱、源出稚錢、但稍遷異、以銖爲朱、三吳屬縣行之、亦差少、○洪遵曰、此錢徑七分、重二銖一參、制作簡古、銅質純靑、背文坦平、外輪有緣、今世尚有之、○鑄官圖經云、此錢大小不一、又有兩面同文、而橫置朱字、或五字在上者、○愚按、此錢、徑七分、重三分許、字狹孔濶、略如洪志所說也、

（按兩柱錢以下洪志列不知年代品、今從錢錄及圖經、附于此、）

陳正品

〔圖錄 一〇頁ノ107〕

右宣帝太貨六銖錢（隋書食貨志云、陳宣帝大建十一年、又鑄大貨六銖、以一當五銖之十、與五銖並行、後還當一、○愚按、此錢、徑八分四釐、重九分、較之泉貨錄所載者、形制字文稍大、而銖字結體殊異、

六朝附品

〔圖錄 一〇頁ノ108 109 110〕

右後魏永安五銖錢（魏書食貨志云、建義初重盜鑄之禁、開糾賞之格、至永安二年秋、詔更改鑄、文曰永安五銖、官自立爐、起自九月、至三年正月而止、○愚按、永安錢、今世所見、形質有大小、字文有肥瘦、茲所錄三種、前一品、徑八分、重八分、文字豐潤、次一品、徑七分九釐、重八分五釐、文字稍狹長、而背孔郭微反張、後一品、錢質薄小、制作麁惡、計史所謂盜鑄者、（按泉貨錄、以背孔郭反張者、形制細薄常平五銖、繫于北齊神武、未知果然否、）

〔圖錄 一〇頁ノ111〕

右永安土字錢（鑄官圖經引李孝美錢譜云、永安五銖、幕文有一土字、徑九分、重二銖四參、

銅色純赤、輪郭皆爽、計後魏所鑄、（洪志同）〇愚按、此錢、柴侯所收、河寛齋曰、此品背緈上有文字、如士字、古色深密可愛、今就搨携攷之、輪郭廬濶、五字兩斜竪圖綴成文、與他品異、又按隋書食貨志、有吉錢之稱、鷲山公嘗曰、所謂吉錢者、蓋士字錢也、士字在於孔郭之上、其象如吉字、故云爾耳、（按錢錄、所載士字錢、背爲四出文、）

〔圖錄　一一頁ノ112〕

右永安四出文錢（洪志云、丘悅三國典略曰、西魏大統七年正月、東魏有雀、銜永安錢置渤海王高歡前、歡世子澄、乃令百爐、別鑄此錢、鄴中號令公百爐錢、封氏曰、背文四出、張台曰、徑八分、重二銖五黍、李孝美曰、按此錢、據所見者、背文大小皆如封張所說、面文輕重、不與魏錢小異、銅色深赤、肉鑄向外漸薄、如碾輪狀、然不知其他如何也、〇錢錄云、永安四出文、同前無士字、洪志引三國典略云、是令公百爐錢、未可爲據、今附於士字錢之後、〇愚按、此錢、徑八分、重七分五釐、輪郭平濶、字文與他品粗異、計當時所鑄、今世甚希、（按洪志、此錢列入神品、）

〔圖錄　一一頁ノ113〕

右五銖錢〇愚按、此錢、今世所見、徑八分六釐、重八分有奇、銅質純赤、制作精好、篆法大類常平五銖錢、西魏文帝所鑄者、豈非此類耶、（洪志引北史云、西魏文帝大統六年二月、

鑄五銖錢、十二年三月、鑄五銖錢、舊譜曰、以赤銅鑄）世謂之赤側錢、亦爲無據、（按如淳曰、赤側五銖、以赤銅爲其郭也、今錢見有赤側者、不知作法云何、又按錢錄、載赤側錢謂此錢郭稍赤色、雖年久、仍與他錢異、愚未見如此者、）

〔圖錄　一一頁ノ114〕

右北齊文宣帝常平五銖錢〇隋書食貨志云、文宣受禪、除永安之錢、改鑄常平五銖、重如其文、其錢甚貴、且製造甚精、至乾明皇建之間、往往私鑄、鄴中用錢、有赤熟青熟細眉赤生之異、河南所用、有青薄鉛錫之別、青齊徐兗梁豫州輩類各殊、武平已後、私鑄轉甚、或以生鐵和銅、至于齊亡、卒不能禁、〇愚按、常平錢、今世所見、字文有肥瘦二體、肥者、平字下畫、連接外郭、背孔郭方正、瘦者平字曲畫、不粘外郭、背孔郭稍反璞、肉好字文、殊善勝于瘦者、比之瘦者、所存居十之二三矣、泉貨彙載之、故今以肥者錄於此、

〔圖錄　一一頁ノ115　116　117〕

右後周武帝布泉錢〇隋書食貨志云、後周之初、尚用魏錢、及武帝保定元年七月、乃更鑄布泉之錢、以一當五、與五銖並行、〇洪志引舊譜云、徑寸、其文左曰布、右曰泉、皆玉筋篆非男錢也〇愚按、此錢徑八分強、肉好字文、與五行大布錢小者無異、後周所鑄、更無可疑者、

〔圖錄　一一頁ノ118〕

右武帝五行大布錢〇隋書食貨志云、建德三年六月、更鑄五行大布錢、以一當十、大收商估之利、與布泉錢並行、四年七月、又以邊境之上、人多盜鑄、乃禁五行大布、不得出入四關、布泉之錢、聽入而不聽出、五年正月、以布泉漸賤而人不用、遂廢之、〇洪志引舊譜云、徑寸一分〇小山政敷曰、世所存大布錢、皆錢質薄小、制作不精、按舊譜、布泉徑一寸、大布徑寸一分、予所收、大布錢、以今尺量之得徑九分弱、布泉徑八分強、以之比舊譜尺度、相較一分、此品正官鑄、而其小者蓋盜鑄耳、〇愚按、此錢、乃小山氏所收、篆文明徹、制作精好、與他品不絕類、然行布之傍缺損不完、可惜矣、

隋正品

〔圖錄　一二頁ノ119〕

右白錢五銖〇隋書食貨志云、高祖既受周禪、以天下錢貨輕重不等、乃更鑄新錢、背面肉好、皆有周郭、文曰五銖、而重如其文、〇洪志引舊譜曰、徑一寸、重四銖六絫、肉郭平闊、五字右邊傍好有一畫、餘三面無郭、用蠟和鑄、故錢色白、〇愚按、白錢、字文有二樣、一五字上下兩畫、連綴肉郭、竪圓綴成文、一五字上下兩畫、較短、兩斜竪直趨畫端、並徑七分五六

釐、制有精粗、質有厚薄、又有一種、徑八分五六釐、重一錢左右者、也稱之置樣錢、皆五字右邊傍好有一畫、而錢色白者多、今所載一品、徑七分五釐弱、重五分、所謂五字兩斜縣直邊畫端者、而面穿上有大星、字文爽漫制作、薄惡、按隋書、是時私鑄轉盛、朝廷患之、京師及諸州、置樣爲准、不中樣者、不入于市、計此品當時盜鑄者、

隋附雜品

〔圖錄　一一頁ノ120〕

右一品、亦五銖、愚按所謂傳形五銖者、其字左文也、此品特不然、五字居左銖字居右耳、肉好字文與隋白錢頗同、疑當時錢工戲造也、

〔圖錄　一一頁ノ121〕

右雙五錢（愚按此錢、徑八分五釐、銅色純赤、制作薄惡、洪志所謂顧氏所見、奇異五錢之中者、蓋此、（洪志此錢載入奇品、今從錢錄及圖經、附于茲））

〔圖錄　一一頁ノ122〕

右一品、亦雙五錢、愚按、此錢徑七分四釐、釐文形制全類隋白錢、是亦別爲一種者、

錢幣攷遺　卷三

大村成富覆校

大正十年三月十二日謄

六月十一日校［竹］［清］

錢幣攷遺　卷四

久野克寛輯
狩谷望之校

刀布品

〔圖錄　一二頁ノ123　124〕

右王莽貨布〇漢書王莽傳云、地皇元年、是歳罷大小錢、更行貨布、長二寸五分、廣一寸、直貨泉二十五、（按食貨志云天鳳元年罷大小錢改作貨布、）〇洪志云、張台曰、貨布如今最多而易得、以今尺量之、得寸九分、〇愚按、此布二種、一貨字中横畫正平、一貨字中横畫兩端斜下、如偃月狀、共銅色黑赤、長一寸九分弱、廣七分半、重三錢許、攷之史、與大泉五十、及貨泉、尺度輕重正合、銅質篆法、亦一如貨泉也、計當時所鑄、（此布二種福知山侯所收、）

〔圖錄　一二頁ノ125〕

右大布黃千〇錢官寶經引張燕昌金石契云、洪遵錢志、舊譜曰、重七銖、長二寸三分、文曰、大黃布刀、張台曰、此亦王莽所鑄、文曰大黃布刀、莽自言黃虞之後、又改平帝安太后爲黃

寶主、卽大黃莽之自稱也、意者豈非莽之初謂刀布一物、後分爲二耶、李孝美曰、按此制作、
切類貨布、但足外差廣、銅色稍赤耳、食貨志與莽傳、皆所不載、余按此布今世所存尙多、
吳門張端木曰、余得此布、有二品形制稍異、乃是大布黃千、則漢書所云莽布十品、大布價
値千錢、意謂是歟、而泉志所云大黃布刀、了無意義、且篆文刀字、豈有中多一點者乎、蓋
千字也、但觀幺布差布弟布三式、形制似覺相彷彿、硏究自明、裴而出之、丁傳曰、洪氏泉
志所載大黃布刀一種、沿誤日久、今以漢書食貨志及新莽所鑄諸布覈之、大黃布刀當作大布
橫千、旁行讀之、文義自顯、蓋莽所鑄布、自小布一百起、次第而至大布、是爲布中之第十
也、故名大布、其直當千、故名橫千、黃卽橫字、古橫衡二字通、詳禮經鄭康成注毛詩箋等
書、橫者平也、契刀平五百之類也、橫作黃者、猶黌舍卽橫舍、䑋與卽橫與、黃乃橫省可據、
又橫本讀黃、古韻康陽互通、國策、合從連橫兵革不藏、楚詞、收恢炱之孟夏兮然欿傺而沈
藏、葉菸邑而無色兮、枝煩挐而交橫、冀州箴、更盛更衰、载從载橫、漢興定制、改列藩王、
如是者甚多、又可證也、自泉志至今、皆以新莽自認黃帝後裔、遂順讀篆文、曰大黃、如大
漢大唐大宋等稱誤矣、又此是布非刀、而誤讀千字爲刀、不但不識篆文千字、幷不識刀與布
之分矣、亦因篆文千字類刀、其間以點代畫之處、未辨明耳、篆文以點代畫者、如周穆公鼎朱
作朱、䖵牛鼎之生作生之類不一而足、若褒山趙氏楚藩禾氏、皆好古文、深於攷訂、亦復沿

謬、豈以微物不足留意也夫、陸以誠哉、按大黃布刀四字、自洪氏至國朝張[illegible]、始有布千之辨、今丁晉齋、辨大黃布刀、當作大布橫千、誠讀書有得之論、合之差布五百、(差布五百)幼布三百、(幼布三百)皆旁行讀之、二布洪氏未錄、得此證彼、互相發明、[illegible]也、又引趙彥衛、雲麓漫抄云、新莽大黃布刀文、諸家皆曰布刀、細觀篆文中一畫貫四千字也、此幣有布形、無刀形、謂之刀誤也、況刀與布二物、不可得兼、曰千者、當千用之、(按今本雲麓漫抄無此文、)(愚按、此布長一寸八分、廣六分、首長及肩各四分五釐、肩闊七分弱、足長四分五釐、外廣八分、首闊好、及足間、徑一分半、重(ママ)銅質制作、近李氏所說也、然今詳觀之、雖不及貨布精好、與今世奸匠贋造者、不絕類、故姑錄于此、又按此布作几非几明矣、今從金石契之說、讀曰大布黃千、(此布小山氏所收、)

[圖錄　一三頁一四頁ノ126　127　123]

右齊刀(此品三種、前一品、銘作厺杏大、背文作三♦ㄱ、次一品、銘文同前、背文作三♦乂、後一品、銘作厺杏㕣、背文作三丨吉、與前二品稍異、共雖大小輕重有等差、大抵長六寸、身廣八分、長二寸八分許、柄廣五分有奇、長一寸九分、環徑八分許、外有棱郭、重十二錢左右、按錢錄載齊刀一品云、厺坒、古文皆齊字、杏字不可識、六字揣篆鼎文從北、說文爲鑛、然於錢刀無取舊釋爲貨、尤未安、意是化字、即貨字也、背文一字如工、錢官[illegible]、

又載一品云、面文三字、據六書略、齊作𠓛、貨作化、正合、中間一字、與背文二字、不可識、或云、𠀘即大公二字、又按古今殊文圖、齊公貨ノ貨、作𠔁、齊刀別種貨作化、公貨刀貨作𠔁、齊公布ノ布作大、齊布布作𠃉、愚按、據二說、𠓛𠔁當釋爲齊貨、而至𠀘字、無明證、又按鐘官圖經引吉金錄、載安陽邑之吉貨、即墨邑之吉貨、𠀘𠀘共釋爲吉、意近似此𠀘字、且後一品背文吉字、蓋共吉字也、故余竊讀爲齊吉化、於義亦通、然未知是否、背文又作𠃌、作𠔁者、皆當化字、作三𠆢者、不可識、又考此品無他可以證者、不能辨其眞贋、然銅質形制、以足愛玩、並臚列備攷、

錢幣攷遺　卷四

大村成富覆校

大正十年辛酉三月十三日謄六月十一日竹濤校

缺同缺

錢幣攷遺　卷五

久野克寬輯
狩谷望之校

唐正品

〔圖錄　一五頁ノ129〕

右高祖開元通寶錢　○新唐書食貨志云、武德四年、鑄開元通寶、徑八分、重二銖四參、積十錢、重一兩、武后時錢非穿穴、乃鐵錫銅液皆得用之、熟銅排汁沙澀之錢、皆售、自是盜鑄蜂起、開元初、禁惡錢、行二銖四參錢、二十年禁惡錢頓沙澀蕩染白強黑強之錢、二十六年、詔出銅所在置監、鑄開元通寶錢、天下盜鑄益起、公鑄者號官鑪錢、一以當偏鑪錢七八、天寶十一載、天下鑪九十九、絳州三十、揚潤宣鄂蔚皆十、益鄧郴皆五、洋州三、定州一、天下歲鑄三十二萬七千緡、太和八年、天下歲鑄錢不及十萬緡、○愚按、開元錢、制有精粗、字有小大、又有背月文星文數十種、今所載徑八分二釐、重八分五釐、於數品中、制作最精好、是蓋武德中所鑄、

〔圖錄　一五頁ノ130　131　132　133　134　135　136　137　138〕

右開元錢九種、一徑八分六釐、重一錢二分五釐、背穿上有月文、於數品中、最厚大者、次字文潤大者、次俗稱隷書者、次開字上連屬者、次三品、背兩月文、一在穿兩側、一在穿上下、一在穿上及穿右、次爲穿右月文穿下星文者、後一品、背穿上爲雲星狀者、最爲異品、

〔圖錄　缺〕

右高宗乾封泉寶錢　○新唐書食貨志云、乾封元年、改鑄乾封泉錢、徑寸、重二銖六分、以一當舊錢之十　○愚按、此錢、形微有大小、而字文止一樣、

〔圖錄　一五頁ノ139　一六頁ノ140〕

右肅宗乾元重寶錢　○錢錄引舊唐書云、乾元元年、詔曰、御史中丞第五琦奏請改錢、以一當十、別爲新鑄、不廢舊錢、宜聽於、諸監別鑄、一當十、錢文曰乾元重寶、二年三月、琦入爲相、又請更鑄重輪乾元錢、一當五十、詔從之、按此則乾元錢、似止於當十當五十小大二種、然攷、寶應元年、改行乾元錢、一以當二、乾元重棱小錢、一以當一、重棱大錢、亦一以當三、尋又改行乾元大小錢、並以一當一、則當日所鑄、大小雜出、而重輪又名重棱、且非獨大錢名重輪明矣、○愚按、乾元錢、今世甚多、有大小各種、背文或爲月文、或爲星文、今所載、徑八分、背穿上爲雲星狀者、差爲異品、又有重輪錢、大者徑寸二分、最難得之、茲載其

棱虞登切即廉隅也

小者一、此錢徑八分五釐、重七分五釐、惟面穿上左角有星文、

〔圖錄　一六頁ノ141　142〕

右代宗大暦元寶錢（洪志引張台曰、大暦是代宗年號、計此時所鑄、○愚按所藏二種、初一品、文化二年四月、攝津國伊丹鄉人、發田中所獲、今就拓本量之、得徑七分六釐、次一品、徑七分七釐、重九分五釐、銅色灰白、錢質完厚、（此品水井某所收。）其字畫皆精、粗有小異、

〔圖錄　一六頁ノ143〕

右德宗建中通寶錢（○新唐書食貨志云、建中初戶部侍郎韓洄、以商州紅崖冶銅多、請復洛源廢監、起十鑪、歲鑄錢七萬二千緡、每千錢費九百、德宗從之、○愚按、此錢、徑七分六釐、重八分許、面文旋讀、銅色紫赤、制作頗拙、按洪志張台說云、此錢今民間往往有之、錢小于開元錢、徑十分、（十當作七）重二銖以下、文曰建中通寶、文字淺晴、銅色純赤肉好薄小、又洪志所圖、其文對讀、而不辨大小輕重、疑洪遵未見之也、今詳考此錢、與張氏說、正相符、計當時所鑄、

洪志圖錢恐後人所加

〔圖錄　一六頁ノ144　145　146　147　148　149　一七頁ノ150　151　152　153　154　155　156　157　158　159　160　161　一八頁ノ162　163　164　165　166　167　168　169　170　171　172　173

一九頁ノ174　175　176　177　178　179　180　181　182　183　184　185　二〇頁ノ186
187　188　189〕

右武宗開元錢　〇洪志引舊譜云、武宗會昌年鑄、楊州節度使李紳、乃于新錢背、加昌字、以表年號而進之、有勅、遂勅鑄錢之所、各以本州郡名、爲背文、（背文有京洛昌楊益藍襄荊越宣洪兗潭潤鄂平興梁廣梓福丹桂二十三種）〇藤蒙齋好古日錄云、唐書柳仲郢傳云、時廢浮屠法、以銅像鑄錢、仲郢爲宗鑄錢使、工欲於幕加新字、仲郢止之、唯淮南加新字、新開元錢、幕文品類、皆傳此間不乏、獨新字者、余未之見、〇愚按、洪志所載、穿左梁字者、鐘官圖經所載、楊字（洪志引李孝美曰、楊字錢終莫之見、疑當時已行昌字、而未嘗改耳、圖經云、楊字現今有此錢久、西淸古鑑、亦載摹樣）蜀字者、及下梁、上梁左向、上梁右向者、下洪者、泉貨鑑所載、穿右藍字者等、愚未之見、今以泉貨鑑所不載變文者、四十餘種、錄于此、

唐僞品

〔圖錄　二〇頁ノ190　二一頁ノ191〕

右史思明順天元寶錢　〇新唐書逆臣傳云、乾元二年四月、史思明更國號、曰大燕、建元順天

鑄順天得壹錢、○沈括夢溪筆談云、熙寧中、嘗發地、得大錢三十餘千文、皆順天得壹、當時在廷、皆疑古無得壹年號、莫知何代物、予按唐書、史思明僭號鑄順天得一錢、順天乃其僞年號、得一特以名錢錢耳、非年號也、○洪志引舊譜云、順天錢、徑寸五分、重十五銖、○洪遵曰、此錢重十三錢二參、○愚按、此錢前一種、徑一寸二分五釐、重五錢四分、輪郭廣闊、錢質渾重、字文明徹、背穿上有仰月文、後一種、徑一寸一分、重二錢七分五釐、輪郭稍細、字文頗肥、背穿下有偃月文、（此錢二品共攝津國伊丹八尾氏所收、）

五代正品

〔圖錄　二一頁ノ192　193　二二頁ノ194〕

右後晉高祖天福元寶錢　○洪志引宋白續通典云、天福三年十一月、詔三京鄴都諸道州府、無問公私、應有銅者、並許鑄錢、仍以天福元寶爲文、左環讀文、○愚按所載三種、一徑七分八釐、重八分五釐、銅色青白、背穿上有仰月文、較所常有者、制作頗精、計是官鑄、一錢質稍小、字文漫暗、背穿上右角有月文狀、後一品、極輕小、而字文最湮晦、蓋皆私鑄、其他有大小輕重字體異者各種、

〔圖錄　缺〕

右後漢隱帝漢通元寶錢　○愚按此錢、漢字有狹濶二體、而餘三字、一如開元錢、蓋模範開元錢、削開字、塡漢字者、背文亦有月星文、今世尙多、（按錢餘讀曰漢元通寶、）

〔圖錄　二三頁ノ195〕

右後周世宗周通元寶錢　○五代史云、世宗卽位之明年、廢天下佛字三千三百三十六、是時國中乏錢、乃詔毀天下銅佛、以鑄錢、○愚按同通錢、制作精好、背穿四方或爲月文或爲星文、皆今世尙多、今所載、背穿上爲雲星狀、稍爲異品、（按錢錄讀曰周元通寶、）

五代附品

〔圖錄　二三頁ノ196〕

右前蜀高祖王建永平元寶錢　○五代史蜀世家云、王建、武成三年八月、有龍見洵陽水中、十月麟見壁州、十二月大赦、改明年、爲永平元年、○愚按洪志、永平錢條、文闕不全、意者洪遵未之見也、然今世所見、字文昏暗、背文夷漫、與通正天漢諸錢不異、計王建所鑄、（按錢錄亦載臺樣、）

〔圖錄　缺〕

王建通正元寶錢、形質有大小、元字有左挑右挑、

王建天漢元寶、光天元寶錢、共字文止一樣、

〔圖錄　二二頁ノ197〕

右後主衍乾德元寶錢　○五代史蜀世家云、光天元年六月、建卒、子衍立、明年改元乾德、○愚按、乾德錢、字文有大小、今所載、其小者、

〔圖錄　缺〕

後主衍咸康元寶錢　○字文止一樣、

愚按、通正以下五品、皆字文漫暗、制作不精、背或爲月文、或爲星文、

〔圖錄　二二頁ノ198　199　200〕

右南唐元宗開元通寶錢　○洪志引陶岳貨志（按志當作泉）錄謂、元宗時以鐵爲錢、大小一如開元通寶、文亦如之、徐鉉篆其文、比于舊錢、稍大而輪郭深濶、○洪遵曰、此錢史氏但云鐵錢、不載其文、岳國初人、耳目所接、其言當不妄也、○愚按此錢今世所見、皆銅錢、而有正篆二體、今所載三種、一徑八分有奇、重九分、其文正書、背孔郭爲反張狀、次二品、俱其文篆書、一徑八分弱、重七分五釐、一徑七分六釐、重六分、並字樣異所常有者、皆輪郭深濶、如陶岳言、

〔圖錄　二二頁ノ201　202　203　二三頁ノ204〕

右元宗唐國通寶錢　○陸游南唐書元宗本紀云、顯德六年、秋七月、鑄大錢、文曰永通泉貨、一當十、與舊錢並行、又鑄唐國通寶錢、一當開通錢之一、○愚按唐國錢、有眞書篆書如八分者各種、又有背爲圓點者、今所載四種、一徑八分、其文眞書、一徑八分四釐、其文篆書、俱輪郭甚細、字樣亦與他品異、次徑七分八釐、篆文國字圓、輪郭濶者、後一種、徑六分半、其書含八分、錢質最輕小、按事林廣記、有楷書小錢、小錢中又有錢子、此錢豈非此類耶、

（按此錢愚未經見）

〔圖錄　缺〕

元宗大唐通寶錢　○愚按此錢、形有大小、銅有黄白、

〔圖錄　二三頁ノ205〕

右後蜀孟昶廣政通寶錢　○錢錄云、孟知祥明德元年卒、子昶立、不改元、仍稱明德、至五年、改元廣政、十國紀年、謂四年改元者謬也、○愚按、此錢、字文有小大、銅質有黄白、共不易得、今所錄其小字者、

〔圖錄　二三頁ノ206〕

右南漢劉龑乾亨錢　○五代史南漢世家云、梁貞明三年劉龑即位、國號大越、改元曰乾亨、○愚按乾亨錢、今世所見、文曰通寶者、字文止一樣、而頗不易得、文曰重寶者、有字文狹濶二

讀、而今世尚多、今所錄其狹字者、

宋正品

〔圖錄 二三頁ノ207 208〕

右太祖宋通元寶錢 ○宋史食貨志云、太祖初鑄錢、文曰宋通元寶、（按錢譜讀曰宋元通寶、）
○愚按宋通錢、今世所存甚多、皆輪郭平濶、有字文小無者各種、背文一如周通錢也、今所錄
二種、一輪細孔濶、字文亦他得錢異者、一輪濶孔狹、背爲雲星狀者、今世所罕見、

〔圖錄 二三頁ノ209 210〕

右太宗太平通寶錢 ○宋史食貨志云、太宗改元太平興國、更鑄太平通寶錢、○文獻通考云、
太平興國八年、以福建少銅錢、同於建州鑄大鐵錢、與銅錢並行、尋罷鑄、○愚按所載二種、
一肉好字文、與宋通錢孔濶者大同、一通寶二字太長者、並爲異品、其他有背月星文、及穿四
方、爲月文星文者、通攷所謂如大鐵、愚未之見、

〔圖錄 二三頁ノ211 212〕

右太宗淳化元寶錢 ○宋史食貨志云、淳化改鑄錢書淳化元寶、作眞行草三體、二年趙安易
請改鑄、一當十大錢御書錢式、五年川陝仍以鐵錢、一當鐵錢十、民以小錢二或三、易大錢

一、○愚按淳化錢、三體書、有肉好字文小異者各種、今所錄一徑七分八釐、重九分、銅色紫赤、字文平潤、而含八分體、一徑八分三釐、輪細孔潤、字文行書、並爲異品、如御書當十錢、余未之見、

〔圖錄　一三頁ノ213〕

右太宗至道元寶錢　○宋史食貨志云、至道中歲鑄八十萬貫、○愚按至道錢、亦三體書如淳化錢也、今所錄、字文行書、孔潤形制類前品、

〔圖錄　一三頁ノ214〕

右眞宗咸平元寶錢　○愚按咸平錢、今世所存甚多、錢質微有大小厚薄、今此一品、徑八分五釐、元字作行書體、與他錢異、

〔圖錄　缺〕

眞宗景德元寶錢　○宋史食貨志云、至道中歲鑄八十萬貫、景德中增至一百八十三萬貫、○本紀云、景德二年二月、嘉功州、鑄大鐵錢　○愚按、此錢、形有大小、字亦有小異、凡四種、如大鐵錢、余未之見、

〔圖錄　缺〕

眞宗祥符錢　○宋史本紀云、眞宗大中祥符七年、二月乙亥、益州鑄大鐵錢、○王應麟玉海

余恐愚誤

余恐愚誤

云、祥符元年六月癸巳、賜輔臣新鑄淳書祥符元寶錢、○愚按、祥符錢、有元寶通寶二體、曰元寶者三種、曰通寶者四種、其大字者及寶字從缶者、差爲異品、

〔圖錄　二四頁ノ215〕

右真宗天禧通寶錢　○宋史食貨志云、天禧三年、鑄錢有四監、饒州曰永平、池州曰永豐、江州曰廣寧、建州曰豐國、京師昇鄂杭州南安軍、舊皆有監、後廢之、凡鑄錢用銅三斤十兩、鉛一斤八兩、錫八兩、得錢千、重五斤、惟建州增銅五兩、減鉛如其數、又云、天禧末鑄一百五萬貫、鐵錢有三監、功州曰惠民、嘉州曰豐遠、興州曰濟衆、○愚按、天禧錢、字文有五樣、今所蔵、徑八分五釐、較之他品、輪郭最細、字文差大、余嘗獲此、尋逸之、又於他無見、

〔圖錄　缺一

仁宗天聖元寶錢　○沈括夢溪筆談云、至天聖中歲鑄一百餘萬貫、○愚按此錢、今世所存甚多、肥字、瘦字、細緣、潤緣、大樣、小樣、皆正篆相對、肉好字樣如一、(按以下至淳熙正篆相對者亦同、)

〔圖錄　二四頁ノ216〕

右仁宗明道元寶錢　○愚按、亦正篆二體、共有六樣、今此一種、字文員書、徑八分七釐、於諸品中最大者、

〔圖錄　缺〕

仁宗景祐元寶錢　○宋史本紀云、仁宗景祐元年正月戊辰、詔三司、鑄景祐元寶錢、○愚按、
以錢亦正篆共有六樣、

〔圖錄　二四頁ノ217〕

右仁宗皇宋通寶錢　○宋史本紀云、仁宗寶元二年、三月丁未、鑄皇宋通寶錢、○文獻通攷云、
及改號寶元、文當曰寶元元寶、詔學士議、因請改曰豐濟元寶、仁宗特命、以皇宋通寶爲文、
○鐘官圖經云、此錢有大小各種及鐵者、○愚按、皇宋錢、亦正篆二體、共有二十餘樣、其正
書宋字下從兩點、惟此一種、宋字正從木者、差爲異品、

〔圖錄　二四頁ノ218　219〕

右仁宗慶曆重寶錢　○宋史食貨志云、慶曆五年軍興陝西、移用不足、始用知商州皮仲容
議、采洛南縣紅崖山虢州青水冶青銅、置阜民朱陽二監鑄錢、旣而陝西都轉運使張奎、知永興
軍范雍請鑄大銅錢、與小錢兼行、大錢一當小錢十、又請因晉州積鐵鑄小錢、及奎徙河東、
又鑄大鐵錢於晉澤二州、亦以一當十、助關中軍費、未幾三司奏罷河東鑄大鐵錢、而陝西復
采儀州竹尖嶺黃銅、置博濟監、鑄大錢、因敕江南、鑄大銅錢、而江池饒儀虢、又鑄小鐵錢、
大約小銅錢三、可鑄當十大銅錢一、以故民間盜鑄者衆、河東鐵錢以二當銅錢一、行之一年、

又以三當一、或以五當一、慶曆末葉清臣與張方平等、請以江南儀商等州、大銅錢一當小錢三、小鐵錢三當銅錢一、河東小鐵錢、如陝西亦以三當一、其後令陝西大銅錢大鐵錢、皆以一當二、盜鑄乃止、○愚按慶曆錢、循讀者、有大小二樣、大者徑一寸、小者徑九分、制作頗精、對讀者、大小不一、自徑一寸一分、至八分、制作麁惡、多磨鑢鑿郭者、小有完者、考其形制、雖小樣者、皆大錢而非小錢也、今所載二種、一徑八分、孔狹字小、制作稍佳、恐此品小平錢也、一徑九分强、以細緣大字爲異、

〔圖錄　二四頁ノ220〕

右仁宗皇祐元寶錢　○宋史食貨志云、皇祐中饒池江建韶五州、鑄錢百四十六萬緡、嘉功興三州、鑄大鐵錢二十七萬緡、○愚按皇祐錢、錢錄及鑑古圖譜載之、然未聞此間有傳者、余以寬政戊午歲、至京師、時安藝人芥川某者、携此錢來示余、徑八分弱、重九分許、元字作左挑、類嘉祐錢元字左桃者、而小異、其他未之見、

〔圖錄　缺〕

仁宗至和錢　○愚按文曰元寶、曰通寶、元寶錢眞篆共有二樣、又有眞書大字者、通寶錢有眞書二樣、篆書二樣、其通字如含八分者、寶字亦如含八分者、及至字作[illegible]者、最所罕見、

〔圖錄　二四頁ノ221〕

右仁宗嘉祐錢　○李燾長編云、嘉祐四年、以陝西民間多盜鑄大錢、于是以見行當三大錢、折小銅錢二、謂之折二錢、○愚按、嘉祐錢、亦正篆二體、曰元寶者各三樣、曰通寶者各七樣、皆正篆相對、又元寶錢有眞書及如含八分者數種、今錄其一、如當三大錢、竟無見之、

〔圖錄　缺〕

英宗治平錢　○宋史食貨志云、治平中、饒池江建韶儀六州、鑄錢百七十萬緡、而嘉功以率買鐵炭爲擾、自嘉祐四年停鑄、十年以休民力、至是獨興州鑄錢三萬緡、○愚按治平錢、曰元寶者、眞篆及如含八分者三體、而形有大小、緣有細濶小異者甚多、曰通寶者、眞篆各三樣、皆肉好相符、

〔圖錄　二四頁ノ222　223　224〕

右神宗熙寧錢　○宋史食貨志云、熙寧四年、陝西轉運副使皮公弼奏、自行當二錢、銅費相當盜鑄衰息、請以舊銅鉛盡鑄、詔聽之、自是折二錢、遂行於天下、後乃詔京西淮南兩浙江西荊湖五路各置鑄錢監、又以興國軍睦衡舒鄂惠州、既置監六、通舊十六監、時諸路大率、務於增額、至七年衛州黎陽監、興州濟衆監、陝西三銅錢監、各歲增緡、而睦州則置神泉、徐州則置寶豐、梧州萬州皆置監、又詔秦鳳等路、卽鳳翔府斜谷置監、已而所鑄錢靑銅夾錫、脆惡易毀、罷之、然私錢往往雜用、不能禁、乃詔禁私錢、商虢洛南增三監、耀鄜權置兩監、

通永興華河中、鄜州等五監、候能改鑄、并其工作、歸永興等四監、專鑄大錢、八年詔河東、鑄錢七十萬緡、外增鑄小錢三十萬緡、○宋史本紀云、熙寧六年十月壬辰、行折二錢、八年二月甲子、增陝西錢監、改鑄大錢、○沈括夢溪筆談云、熙寧六年以後、歲鑄銅鐵錢六百餘萬貫、○錢官圖經云、熙寧重寶大錢、有背上折字者、有鐵者、○愚按、熙寧錢小錢、文曰元寶、眞篆二體、肉好形制相符者凡十有餘品、又有爲背文者、正篆二種、皆湮滅、未見鮮明者、或云衡字、(此錢正書者含八分體)今所載眞書錢元字作行書、有背上文亦昏晦不明、疑類衙衛鄴等字、蓋鑄錢地名也、其他有眞書及好含八分者數種、折二錢、文曰重寶、亦眞篆及如含八分者三體、而自徑一寸五釐、至八分、有字文小異者數樣、然其輕小者、錢質薄惡、蓋民間私鑄錢也、今所載三種、初一品、徑九分弱、其文眞書、熙字烈火連點者、次二品、一眞書、一篆書、並徑八分有奇、重七分五釐、眞書者、外輪面細背濶、篆書者反之、共較前所謂輕小者、制作頗精、差爲異品、又按圖經所載、背文折字者、愚未之見、

〔圖錄　缺〕

神宗元豐通寶錢　○宋史食貨志云、元豐以後西師大舉、邊用匱闕、徐州置寶豐下監、歲鑄折二錢二十萬緡、○愚按、元豐錢行篆二體書、有形制字文小異者、各二十有餘品、皆肉好相符、其不合者亦有各種、中如八分書者最爲罕矣、又有折二錢行篆各體、

〔圖錄　二五頁ノ225　226〕

右哲宗元祐通寶錢　○宋史本紀云、元祐八年八月庚午、詔陝西、復鑄小銅錢、○食貨志云、元祐八年、命公私給納貿易、並專用鐵錢、又云、令折二銅錢、許行於陝西及河東京西諸路、仍限二年毋更用、尋河東安撫提刑司言、又禁折二銅錢不通行非便、乃聽行使如舊、○愚按、元祐錢亦行篆二體書、相符者各至二十許品、皆肉好字文、有大同小異、又有一種皆穿上陝字者、行篆二體、計陝西所鑄、於諸品中最罕、今所載二種、並行書、一徑八分弱、重一錢許、銅色紫褐、背上陝字者（篆書錢背上陝字者已載泉貨鑑）一徑七分八釐、元字尾異者、又有折二錢行篆各種、

〔圖錄　缺〕

哲宗紹聖錢　○宋史本紀云、紹聖元年正月辛丑、罷河東大銅錢、三年十二月癸酉、置施州鑄錢廣積監　○食貨志云、紹聖初銅錢千、遂易鐵錢二千五百、鐵錢寖輕、○鐘官圖經云、紹聖通寶元寶、皆有鐵鑄、○愚按此錢、文曰元寶者、亦行篆二體書、相符者十有餘品、又有爲月文星文者、折二錢亦二體書、文曰通寶者、眞書止一様、而形制字文與元寶錢頗異、

〔圖錄　二五頁ノ227　228　229〕

右哲宗元符通寶錢　○宋史食貨志云、元符二年下陝西諸路安撫司、博究利害、于是詔陝西、

悉禁銅錢在民間者、令盡送官、而官錢悉取就京南置監、〇鐘官圖經云、元符亦有鐵錢、〇愚按、元符錢亦行篆二體書、共有十有餘品、今所載三種、初二品、其文行書、一元字尾上挑、一字文狹小、後一種、其文眞書、肉好形制、類紹聖通寶錢、此品稍郭磨鑢、難見完者、又有折二錢二體書、

〔圖錄　缺〕

徽宗聖宋錢　〇宋史食貨志云、崇寧元年五月、始令陝西及江池饒建州、以歲所鑄小平錢增料、改鑄當五大銅錢、以聖宋通寶爲文、三年遂罷鑄小平錢及折五錢、〇錢錄云、今所錄二種、皆文元寶、意當時原有通寶元寶兩品耶、〇愚按、聖宋錢、文曰通寶者、徑八分五釐、其文楷書、背文曰當伍、此品龍橋公藏弆、據背文則宋史折五錢蓋此也、然不合所謂大銅錢之文、未知果然否也、曰元寶者、行篆二體、共有三十有餘樣、中宋字下從木者頗爲少者、折二錢、亦二體書、

〔圖錄　二五頁ノ230一〕

右徽宗崇寧錢　〇宋史本紀云、崇寧三年正月戊子、鑄當十大錢　〇食貨志云、崇寧四年、立錢綱驗樣法、崇寧監以所鑄御書當十錢來上、〇鐘官圖經云、崇寧大銅錢、係徽宗御書、名瘦金體、廣川書跋謂、薛稷書用筆纖細、結字疏通、此其是也、〇按書史會要云、徽宗行草正書、

筆勢勁逸、初學薛稷、變其法度、自號痩金書〕又曰崇寧通寶重寶、皆有小平錢鐵錢、文如大錢、〇愚按、崇寧錢、文曰重寶者、其字如八分書、有大小數種、大者徑寸二分、曰通寶者、結字疏通、蓋所謂痩金體、有大錢及小平錢各種、今所載、徑九分、縁細字大、制作不精、此錢通字傍缺損、量之得重八分、最所罕見、又按食貨志、崇寧中鑄錢、有當十當二小平錢、後以當十錢不便、爲折五、又以兩浙盜鑄尤甚、八分鑄小平錢、二分鑄當十錢、繼復能其令、盡鑄小平錢、諸州重寶錢、作當三、或作當五、以故此錢傳今甚多、條序不一、至此矣、

〔圖錄　二六頁ノ231　二五頁ノ232〕

右徽宗大觀通寶錢　〇宋史食貨志云、大觀元年二月、首鑄御書當十錢、宋喬年鑄烏背漉銅錢來上、是歲京畿旣置錢監、乃專鑄當十大錢、而小平錢則鑄於諸路、復置眞州鑄錢監、明年令江池饒建州錢監、以鑄當十小平錢、四年張商英爲相、奏曰、當十錢爲害久矣、擇其惡者、鑄小平錢、存其好者、折三行用、又云、大觀元年、京復相、衡州熙寧、鄂州寶泉、舒州同安監、暨廣南皆鑄焉、二年江南東西福建兩浙、許鑄便鐵錢、〇愚按大觀錢、有小錢當二當三當十、並制造精好、有肥字瘦字、如小錢有小異者十餘種、今所載、一徑八分二釐、筆畫纖細、制作極工緻、一當三錢、徑一寸六釐、重二錢三分二釐、是其肥字者、較瘦字錢、制作

差劣矣、

〔圖錄　二五頁ノ233〕

右徽宗政和通寶錢　○宋史食貨志云、政和元年、錢輕物重、細民艱食、詔聽陝西舊行使鐵錢地名、依元豐年大鐵錢折二、公私通行、夾錫錢同之、毋得分別、二年蔡京復得政、條奏廣惠康賀衡鄂舒州昨鑄夾錫錢精善、請復鑄如故、廣西湖北淮東如之、且命諸路以銅錢監、復改鑄夾錫、遂以政和錢頒式焉、○青蚨私誌云、此錢及宣和錢、文字似隸體者、錢錄目爲分楷、蓋謂字含八分及楷體者、○愚按政和錢、分楷篆書二體、各相符者、有四十有餘品、中制作精美、文字濶大、類重和錢者、及緣細字大、政字旁從文者、最爲精矣、其他有楷書者數樣、中亦有從文者各種、折二錢亦二體書、有各種、其正書者、皆改字從文、此品特從支、故錄、

〔圖錄　缺〕

徽宗重和通寶錢　○宋史食貨志云、重和元年、權罷京西鑄夾錫錢、繼以論中糴貿、用之通流、復令鼓鑄、專給關中、夾錫行、小民往往以藥點染、与銅錢相亂、○錢官圖經云、徽宗政和七年、改明年爲重和、而明歲又改宣和、匝歲之間、鑄錢自少、故此品頗不易覯、余家所藏者、有眞書篆書文二體、○愚按重和錢亦二體書、其制作精妙、字文各一樣、今世所存頗少、又有錢質薄小麁悪者、

〔圖錄　二六頁ノ234　235　236　237　238〕

右徽宗宣和錢　○宋史食貨志云、東南錢額不敷、宣和以後尤甚、乃令饒贛錢監、鑄小平錢、繼又令池江饒錢監、盡以小平改鑄當二錢、以抒用度　○宋史宗室子湜傳云、子湜請鑄小錢錢、因範格以進、徽宗大說、御書宣和通寶四字、爲錢文　○鐘官圖經云、宣和通寶、眞篆體、皆有大小各種、又有背上陝字者、鐵錢種類如銅錢、元寶較少鐵錢及陝字者、○愚按宣和錢、文曰元寶、曰通寶、元寶錢分楷篆書、各有六樣、今所載五種、初二品、共徑八分五釐、一分楷、一篆書、並輪郭細、文字大、所謂正篆相符者、次二品、亦分楷篆書二體、較所常有者、字文結構、大同小異、且制作極工緻、後一品、徑八分、其文篆書、元字次畫最長者、皆今世少有、圖經所謂背陝字者、余未見之、通寶錢亦二體書、共有四十餘品、

〔圖錄　二六頁ノ239〕

又有楷書背上陝字者、結字疏通、所謂瘦金書、今所錄細緣、稍異泉貨鑑所載者、折二錢亦二體書、有各種、

〔圖錄　二六頁ノ240　241　242　243〕

右欽宗靖康通寶錢　○宋史食貨志云、靖康元年罷政和、勅陝西路、用銅錢、○錢錄云、靖康元寶大錢、與宣和當二錢、規制相等、按宣和七年、徽宗內禪、次年改元靖康、○鐘官圖經

云、靖康亦有小平錢、又有篆書者、有文曰通寶者、○愚按、靖康錢、亦有元寶通寶二種、元寶錢、今世所見、篆書一樣、而有小平錢折二錢、通寶錢正篆二體、共有四樣、今所載、楷書者二品、一徑八分四釐、細緣者、一徑七分八釐濶緣者、後二品篆書者、共徑八分四釐、肉好字體有小異、皆今世不易得焉、

錢幣攷遺　卷五

大村成富覆校

大正十年辛酉四月初五戊戌鈔畢天明竹清

六月十一日雨窻一校了

錢幣攷遺　卷六

久野克寬輯
狩谷望之校

南宋正品

〔圖錄　二七頁ノ244〕

右南宋高宗建炎元寶錢　〇錢錄載建炎通寶錢云、靖康二年、康王即位于南京、改元建炎、按食貨志、建炎經兵、鼓鑄皆廢、然考本紀　建炎元年九月壬辰、鑄建炎通寶錢、然則此錢是也、〇愚按建炎錢、曰元寶、曰通寶、共真篆二體、通寶錢、有大字小字濶緣細緣各種、及背三豎文者、(或云川字也未詳)又有折二錢、大小各體、皆今世尚多、今錄元寶篆書錢一枚、此錢徑七分五釐強、重八分、銅質精煉、制作如通寶錢、計同時所鑄、正篆共甚妙矣、(荒木方彬曰、文化元年春、攝津國伊丹鄉人、鑿田中(字內臺故城)而大獲古錢、建炎元寶篆書錢、及三星五銖、重濶通寶等在其中、世所希見、明年四月復鑿其他、獲古錢、中有大曆元寶宣和元寶等古錢無慮數十萬以收近衞藤公府庫云、)

二寶當作元寶

〔圖錄　二七頁ノ245　246　247　248〕

右高宗紹興錢　○宋史本紀云、紹興元年八月壬午、鑄紹興錢、三年春正月、鑄當十大錢、二十三年詔利州、鑄小平錢、並折二錢、後又鑄折三錢、○食貨志云、紹興初、併廣寧監於虔州、併永豐監於饒州、歲鑄纔及八萬緡、六年斂饒二監、新額錢四十萬緡、九年詔陝西諸路、復行鐵錢、十三年復鑄新錢、十五年置利州紹興監、鑄錢十萬緡、二十二年復置泉惠民二監、鑄小平錢、二十三年詔利州、並鑄折二錢、後又鑄折三錢、二十四年、罷鑄錢司、二十七年、復置諸路鑄錢監、又云、每當一錢千、重四斤五兩、小平錢千、重四斤十三兩、視舊稍輕、銅少鉛多、錢愈薄惡矣、○愚按紹興錢、曰元寶者、眞篆二體、有細緣濶緣、又有折二錢大小各種、而有背爲月星文者、小者制作甚薄惡、今所存最多、通寶錢、眞書一體、而有小錢折二錢折三錢、今所錄、初一種、徑八分三釐、重九分、字文眞書、緣細穿濶、似係折二、次二品、共徑八分強、一眞書、一篆書、所謂濶緣者、皆以二寶爲記、後一品、徑七分九釐、寶字從缶、其他字結體、與常有者異、以通寶爲記、如本紀稱、當十大錢、余未之見、

〔圖錄　二七頁ノ249　250〕

右孝宗隆興元寶錢　○宋史食貨志云、孝宗隆興元年、詔鑄當二小平錢、如紹興之初、○愚按、隆錢興、今世所存、眞篆二體、皆有大小輕重之異、皆係折二錢、而如小平錢未經見、

今所載二種、前一品、某侯所收、河寛齋曰、嘗見此錢、面文眞書、輪郭細、孔穿狹、字形狹小而體勢不類折二錢、蓋小平錢也、今就搨模畫之、得徑八分、錄以備攷、後一品、當二錢、徑九分八釐、重一錢八分二釐、文亦眞書、肉好字文、與他品稍異、

〔圖錄　二七頁ノ251　252〕

右孝宗乾道元寶錢 ○宋史食貨志云、乾道初、詔兩淮京西、悉用鐵錢、六年以舒蘄黃皆產鐵、請各置監、且鑄折二錢、（愚按舒州置同安監、蘄州置蘄春監、黃州置齊安監）九年大江之西、及湖廣間多毀錢、夾以沙泥重鑄、號沙尾錢、（鑄官圖經作沙泥錢）詔嚴禁之、○愚按所載二種、一徑九分、其文眞書、背穿上有正字、（按嘗閱篆書錢亦有正字者）一徑八分八釐、重一錢二分、其文篆書、輪郭廣濶者、其他正篆二體、有形質大小、字文狹濶者各種、而有背或爲月星文者、又有小平錢、余所見篆書篆一品耳、復于他無見、（按乾道錢、有銅質剝蝕者、疑食貨志所謂沙泥錢也、）

〔圖錄　二七頁ノ253〕

右孝宗淳熙元寶錢 ○宋史本紀云、淳熙元年十二月丙寅、罷鐵錢、改鑄銅錢、三年十二月丁酉、定鑄錢司、歲爲十五萬緡、○鑄官圖經云、淳熙錢篆眞二體、皆有大小各種、眞書大小錢、皆有背爪星、背泉字、背自元字至十六字者、鐵錢背文數月字同、又有同字者、○愚按此錢、

眞篆二體、有闊緣、有細緣、右背偃月星文、有數月字者、眞書只一體、而自柒判至十六、又有其文細八分背作月文者、字文眞書、無背文者、今所載、徑八分、其文眞書、字文平濶、背文成濶、穿上有同字、蓋舒州同安監所鑄篆文也、又按事林廣記、七年以後、折二小平錢、皆有年數者焉、錢監多只就民間增直、買見行新錢以進、朝廷知之、欲在其弊、遂令諸監逐年、以所行新鑄錢、背鑄年數以別之、其幣遂止、圖經所謂有背自元字至十六字者、蓋謬矣、

〔圖錄　二八頁ノ254〕

右淳熙元寶折二錢（愚按、此錢徑九分五釐、其文篆書、背穿上有泉字、（按小山氏曰、余家藏眞書錢有泉字者、愚未及見之）蓋神泉監所鑄也、其他眞篆二體有月星文、數月字、如小平錢、而今世所傳、眞書者多、篆書者少、

〔圖錄　二八頁ノ255〕

右淳熙通寶錢○　宋史食貨志云、淳熙十二年、詔舒蘄、鑄鐵錢、並增五萬貫、以淳熙通寶爲文（○洪遵曰、此錢面文眞書、背有月星文、肉好字文、與元寶錢相等、以銅作之、○愚按此錢、雖未之見、就錢譜放之、當時所鑄、更非可疑者、

〔圖錄　二八頁ノ256〕

右光宗紹熙元寶錢○　宋史食貨志云、光宗紹熙二年、減蘄春同安兩監、歲鑄各十萬貫、○繩

官圖徑云、紹熙錢、大小二種、背文皆有元字至五字者、鐵錢如之、更多背上春字同字、○愚按、淳熙十七年、改元紹熙、此錢背文、自元至五、此所錄者、背穿上增春字、蓋蘄春監所鑄、圖徑所謂、多同字者、余未見之、又有折二錢、背文亦自元至五、

〔圖錄　缺〕

寧宗慶元通寶錢　○鐘官圖徑云、慶元錢三品皆正書、背文年數、止于六字、鐵錢亦然、更多春字漢字、○愚按、紹熙六年、改元慶元、此錢小錢折二錢、共背文年數、止于六字、多春字漢字者、未徑見、又有當三錢、背文有四五六耳、蓋三年之後所鑄、

〔圖錄　二八頁ノ257 258〕

右寧宗嘉泰通寶錢　○宋史食貨志云、嘉泰三年、罷舒蘄鼓鑄、開禧三年復之、○鐘官圖經云、嘉泰錢背文年數、止于四字、鐵錢無沓字、餘同慶元、○愚按、慶元七年、改元嘉泰、此錢小錢折二錢、共背文年數、止于四、今所載、一徑八分、背穿上下有春三字、一徑九分五釐、背有月星文、又有當三錢、其文循讀無背文、

〔圖錄　缺〕

寧宗開禧通寶錢　○鐘官圖經云、寧宗嘉泰四年之次年、改元開禧、其錢有通寶元寶等文、大小二種、皆眞書、背文年數、止於三字、鐵錢同、更有背漢字者、○愚按、此錢、大小錢、

背寶如圖經所謂、而漢字者、及元寶者、余未經見、

〔圖錄 缺〕

寧宗嘉定通寶錢 ○宋史本紀云、嘉定元年十二月庚午、四川初行當五大錢 ○食貨志云、嘉定元年、即利州鑄當五大錢、（續官圖經云、嘉定錢品類同開禧、惟無元寶、背文年數、止于十七、鐵錢多春字、○愚按、開禧四年、改元嘉定、此錢今世所見、小錢折二錢、共背文、止于十四、其餘背文、及當五錢、余未見之、（按錢錄、載當五錢圖、）

〔圖錄 缺〕

理宗大宋元寶錢 ○宋史本紀云、寶慶元年七月乙酉、詔行大宋元寶錢、○續官圖經云、嘉定十七年、理宗即位、明年改元寶慶、大宋錢無背文、○愚按、此錢、小錢折二錢、共背文年數、止于三字、

〔圖錄 二八頁ノ259〕

右理宗紹定通寶錢 ○續官圖經云、紹定錢、背文年數、止于六字、鐵錢有漢字、餘同大宋、○愚按、寶慶四年、改元紹定、此錢小錢折二錢、共背文年數、如圖經所謂、今所錄、一品背文曰二、較之所當有者、形稍頗大、制作亦工緻、其漢字者、余未見之、

〔圖錄 二九頁ノ260〕

右理宗端平元寶錢　○錢錄云、紹定七年、改元端平、理宗朝專措置楮幣、而銅冶大衰、攷本紀、端平元年六月癸巳、禁毀銅錢、○鐘官圖經云、端平錢大小三品、背文年數、止于三字、無鐵錢、○愚按此錢、大小有間、背文年數、唯有元字、今所錄、背穿上有午字、較之元字錢、輪郭平濶、字文差小、又按、端平元年、歲在甲午、疑當年別鑄此錢、爲識耶、又有當三錢、文曰通寶、面文有二樣、如圖經所謂二三等字者、余未經見、

〔圖錄　缺〕

理宗嘉熙錢　○愚按、端平四年、改元嘉熙、此錢曰通寶者、小錢折二錢、共背文年數、止于四、當三錢、文曰重寶、背無文、又按鐘官圖經云、重寶錢、亦有大小種、背文年數、皆止于四字、通寶同、並正書、然今所存重寶錢、如小錢及有背文者、竟莫之見、

〔圖錄　缺〕

理宗淳祐錢　○愚按嘉熙五年、改元淳祐、此錢曰元寶者、小錢折二錢、共背文年數、止于十二、曰通寶者、小錢字文只一樣、背無文、面背好郭稍反張、又有大錢、徑寸七分、背文曰當百、

〔圖錄　缺〕

理宗皇宋元寶錢　○宋史本紀云、寶祐元年八月乙丑、行皇宋元寶錢、○愚按、淳祐十二年、

改明年、爲寶祐元年、此錢小錢折二錢、共背文年數、止于六字、

〔圖錄　缺〕

理宗開慶通寶錢　○宋史本紀云、開慶元年五月乙丑、行開慶通寶錢、○愚按、寶祐七年、改元開慶、此錢小錢折二錢、共背文年數、唯有元字、（按折二錢、輪郭完者、最難覯、）

〔圖錄　缺〕

理宗景定元寶錢　○王圻續文獻通考云、景定元年九月、詔鑄新錢、以景定元寶爲文、○愚按、開慶二年、改元景定、此錢小錢折二錢、共背文年數止于五字、

〔圖錄　二九頁ノ261〕

右度宗咸淳元寶錢　○續官圖經云、咸淳錢、背文年數、止于十一、餘同景定、○愚按景定六年、度宗即位、改元咸淳、此錢今世所見、小錢折二錢、共背文年數、止于八字、今所錄、徑八分五釐、重一錢有奇、背有九字、較之他錢、銅質精煉、字畫明徹、制作甚巧、疑此樣錢、而非不及鑄通行品、錢監裒熄耶、又按圖經淳熙以下所載背文數目字有絕不見者、恐推紀號年數而未盡稱見也、（按淳熙至咸淳小錢折二錢共有錢質薄小無背文者蓋民間所私鑄也、）

宋附品

〔圖錄　缺〕

契丹太祖天贊通寶錢　○愚按、遼耶律阿保機、於後梁末帝龍德二年、改元天贊、此錢、背穿上有仰月文、今世不易得、

〔圖錄　二九頁ノ262〕

右穆宗應曆通寶錢　○愚按、穆宗於後周太祖廣順元年、改元應曆、此錢小山氏所藏、通字下闕損、量之、得重五分、又於他莫見、（新撰泉譜及泉貨鑑所圖頗訛眞、故復錄、）

〔圖錄　二九頁ノ263〕

右聖宗統和元寶錢　○事林廣記云、北地錢統和元寶、太平興國八年、耶律隆緒鑄、○愚按、統和錢今世所聞見、僅二三品、一已載新撰錢譜、及錢貨鑑、茲所錄、徑八分、錢質稍輕薄、而孔穿亦狹小、

〔圖錄　二九頁ノ264〕

右興宗重熙通寶錢　○錢錄云、宋仁宗、明道元年、爲遼興宗景福元年、（按景福盖宗眞誤）次年遼改元重熙、興宗本紀、重熙二十二年閏七月己亥、長春州置錢帛司、○愚按、此錢徑八分、輪郭細、字文潤、異于他品、最爲希品、

〔圖錄　二九頁ノ265〕

右道宗清寧通寶錢、○愚按、道宗嗣位、以重熙二十三年、改元清寧、爲宋仁宗至和二年也、（按錢譜謂重熙二十四年改元清寧、恐誤、）此錢徑八分、重七分、銅色純赤、比之所常有者、文字稍小、

〔圖錄　缺〕

道宗咸雍大康大安壽昌錢　○遼史食貨志云、道宗之卅、錢有四等、曰咸雍、曰大康、曰大安、曰壽隆、皆因改元易名、○畢沅續通鑑云、遼史紀表志傳、俱作壽隆、余在京師、遊陶然亭、見遼碑、以壽昌紀年、歸攷東都事略文獻通攷、俱云遼改元壽昌、復得攷遼碑、無不作壽昌者、嘗以語錢辛楣、云遼人謹於避諱、光祿之改崇祿、避太宗諱也、改女眞爲女直、避興宗諱也、追稱重熙爲重和、避天祚嫌名也、聖宗名隆緒、道宗爲聖宗之孫、而以壽隆改元、犯聖宗之諱、此理之必無者、又洪遵（邁遵之誤）泉志、有壽昌元寶錢、引李季興東北諸蕃樞要云、契丹主天祚年號壽昌、北遼通書云、天祚即位、壽昌七年、改爲乾統、寔今壽昌元寶錢、猶有存者、證以諸石刻、知遼史爲誤、今定作壽昌、（畢之曰、錢錄、錢志新編、竝壽隆元寶錢者、依遼史錄出耳、不足據也、反謂壽昌爲誤者亦大非、畢攷精核、可以開千古之疑也、）○愚按、文曰咸雍者、以通寶爲記、曰大康、以元寶通寶、並字體如一、曰大安、曰壽昌、亦以元寶、共字文有二様、

〔圖錄　缺〕

天祚乾統天慶錢　○遼史食貨志云、天祚之世、更鑄乾統天慶二等新錢、○愚按、天祚即位、改元乾統、爲宋徽宗建中靖國元年、至十一年、改元天慶、乾統錢、以元寶爲記、字文止一樣、天慶錢以元寶通寶爲記、元寶錢、有細緣濶緣、通寶錢、字樣各種、有背爲月文者、又按天寶錢以下諸品、其文循讀、其字隷體、銅色紫赤、制作陋惡、獨天慶通寶錢對讀耳、

〔圖錄　缺〕

金煬王正隆元寶錢　○金史海陵紀云、正隆二年、十月乙卯、初鑄銅錢、三年二月壬辰朔、都城及京兆、初置錢監、○愚按、煬王改元正隆、爲宋高宗紹興二十六年也、此錢制作精好、正字作正、又有一種、錢質稍薄小而正字下横畫、出左畫之左者、

〔圖錄　二九頁ノ266〕

右世宗大定通寶錢　○金史食貨志云、世宗大定十五年十一月、上謂宰臣曰、或言鑄錢無益、所得不償所費、朕謂不然、天下一家、何公私之間、公家之費、私家得之、但新幣日增、公私俱便也、十八年代州立監鑄錢、所鑄斑駁黑澁、不可用、更命張大節麻珪監鑄、其錢文曰大定通寶、二十年、初新錢之未行也、以宋大觀錢、作當五用之、名代州監、曰阜通、二十七年二月、曲陽縣鑄錢、別爲一監、以利通爲名、章宗大定二十九年、歳鑄錢十四萬餘貫、

而歳所費乃至八十餘萬貫、從龍代州曲陽二監、○錢官圖經云、背面以申酉爲字、舊說係屬紀年、惟有金世宗、自十五年乙未起鑄錢、至二十九年己酉止、中間雖歴丙申丁酉戊申己酉等歳、何以獨不及他支、鄙意竊以五行家言、申酉爲金、完顏以金紀國、義或取此耳、○愚按世宗、改元大定、爲宋紹興三十一年也、此錢制作有精粗、文字有小大、背文曰申曰酉、或在穿上或在穿下、又有無背文者、今此一品、以字文差異錄之、

〔圖錄　二九頁ノ267〕

右章宗泰和通寶錢　○金史食貨志云、泰和四年八月、鑄大錢、一直十、篆文曰泰和重寶、與鈔並行、○錢官圖經云、泰和重寶篆文錢、徑二寸許、又泰和通寶眞書錢、亦極精好、徑一寸有奇、似係當二、而史譜均不載、○愚按、章宗改元泰和、爲宋寧宗嘉泰元年也、泰和錢、今世所存、小平錢、制作精好、有大樣小樣二種、今所載、徑九分有奇、銅質文字類小錢、而制作稍劣、圖經所謂係當二者、蓋此、皆楷書、以通寶爲記、當十錢、徑一寸五分許、（圖經謂徑二寸許蓋誤）小異者三錢、而制作甚精美、篆文以重寶爲記、

〔圖錄　二九頁ノ268〕

右宣宗貞祐通寶錢　○金史食貨志云、宣宗貞祐四年、陝西行省令史惠吉言、券者所以救弊、一時非可流通、與見錢比必欲通之、不過多斂少支爾、然斂多則傷民、支少則用不足、二者

皆不可爲、今日計莫若更造、以貞祐通寶爲名、自百至三千、等之爲十、詔集百官議、衆議紛紛、竟用惠-吉言、造貞祐通寶、興定元年二月始詔行之、〇愚按、宣宗改元貞祐、爲宋寧宗嘉定七年也、余嘗見此錢、徑八分二釐、肉好字文類泰和通寶錢、食貨志所謂者、雖非銅錢、已以貞祐通寶爲名、然則此錢當時所鑄非可疑者、

〔圖錄　缺〕

夏仁宗天盛元寶錢　〇宋史外國傳云、紹興二十八年（仁宗天盛十年）西夏李仁孝始立通濟監鑄錢、〇愚按、天盛錢、有細緣濶緣二種、細緣者制作精好、濶緣者稍劣矣、

〔圖錄　缺〕

仁宗乾祐元寶錢　〇鐘官圖經云、西夏仁宗李仁孝改元鑄、仁孝天盛二十一年、改元乾祐、爲宋孝宗乾道四年、此錢有銅鑄二種、鐵錢西省致多、銅者精好而少、（按至天盛二十三年、改元乾祐時爲宋乾道七年、圖經所稱、恐誤也、）〇愚按、乾祐錢、大樣者、字畫明徹、制作精好、小樣者字文昏暗、制造陋惡、圖經所謂鐵錢者、豈非此類耶、皆今世所罕覯、

〔圖錄　二九頁ノ269〕

右襄宗皇建元寶錢　〇鐘官圖經云、西夏襄宗李安全鑄、安全爲桓宗純-祐弟、即位應天四年、改元皇建、其元年爲宋寧宗嘉定二年、錢極精好、（按傳統錄、應天五年、皇建一年云云、錢

譜曰、嘉定四年、改元皇建、復可攷、）〇愚按皇建錢、有細緣濶緣及小字者、今錄小字者一品、

此錢比于他錢、制作稍粗也、

〔圖錄　缺〕

神宗光定元寶錢　〇鐘官圖經云、　西夏神宗李遵頊鑄、遵頊爲襄宗安全族子、宋寧宗嘉定四年、僭元光定、錢極精好、〇愚按、光定錢、亦有細緣濶緣二種、

宋僞品

劉豫阜昌錢　〇鐘官圖經云、阜昌錢、僞齊劉豫鑄、有重寶元寶二種、元寶錢徑八分、重寶錢徑寸二分、並楷書精好、〇愚按劉豫於宋高宗建炎四年、紀元阜昌、阜昌元寶錢、今世所見、正篆二體、共制作甚精、重寶錢、余未經見、

錢幣攷遺　卷六

大村成富覆校

大正十年辛酉四月二十五日寫天明鈔

六月十三日校

錢幣攷遺　卷七

久野克寛輯
狩谷望之校

元正品

〔圖錄　三〇頁ノ270〕

右世宗至元通寶錢　○元史食貨志云、至元十二年、添造釐鈔、其例有三、曰二文、三文、五文、初鈔印用木爲版、十三年鑄銅易之、○愚按至元錢、眞書者徑七八分、字文二樣、今所載徑七分五釐、背穿上下爲花點者、最爲異品、蒙古書者、徑一寸或九分、左右、大小錢皆有銅色深黄如鍮錢者、

英山本字文下有有字

〔圖錄　缺〕

成宗元貞通寶錢　○愚按、成宗至元三十四年即位、改元元貞、此錢字文欹斜、制作陋拙、今世少有、

〔圖錄　三〇頁ノ271〕

右成宗大德通寶錢、○愚按、成宗元貞三年、改元曰大德、此錢今世所見、面文有二様、今所
載者、以字文接近内郭爲異、

〔圖錄　三〇頁ノ272〕

右武宗至大通寶錢　○元史食貨志云、至大三年初行錢法、立資國院泉貨監以領之、其錢曰至
大通寶者、一文準至大銀鈔一釐、曰大元通寶者一文準至大通寶錢一十文　○愚按、至大錢小
平錢、有形制字文小異者數十種、今所載徑八分五釐、重八分、輪郭細、字文大、制作不佳、
蓋似係折二錢也、

〔圖錄　缺〕

大元通寶錢　○蒙古書、制有精粗、形有大小、字亦有肥瘦、（自徑寸五分至寸二分、）

〔圖錄　三〇頁ノ273〕

右仁宗皇慶通寶錢　○新撰錢譜引國憲家獻云仁宗鑄、○愚按、此錢徑八分弱、銅色深黄、字
文昏晴、形制類至大錢、（小山氏所收）錢譜又載圖故錄焉、

〔圖錄　三〇頁ノ274〕

右英宗至治通寶錢　○新撰錢譜引國憲家獻云英宗鑄、○愚按、至治錢今世所傳、有字文狹闊
二體、今載其狹小者、銅質紫赤、制作麤惡、

〔圖錄　三一頁ノ275　三二頁ノ276　277〕

右順帝至正通寶錢　○元史食貨志云、至正十年右丞相脫脫、欲更鈔法、乃會中書省樞密院御史臺及集賢翰林兩院官共議之遂定更鈔之議而奏之、詔以中統交鈔一貫文省權銅錢一千文、准至元寶鈔二貫、仍鑄至正通寶錢、與歷代銅錢並用、十一年置寶泉提擧司、掌鼓鑄至正通寶錢、印造交鈔、○愚按、至正錢小錢當二當三當十、共制作有精粗、小錢背文五樣及無背文者、當二錢背文五樣、當三錢背文六樣、當十錢背文二樣、今載泉貨鑑所逸折二背文一樣、折三背文二樣、

〔圖錄三一頁ノ278〕

右至正之寶錢　○河寬齋曰、嘗見此錢、古色青黑少帶綠斑、文曰至正之寶、自上及下讀之、背文有五字、穿上一字不可識、穿左曰權鈔、穿右曰伍分、面背共正書而肉好字文与至正當十錢不異、計當時所鑄、○愚按、此錢某侯所收、就搨模量之、徑一寸三分八釐、較之當十錢稍小、蓋當五錢也、又按、鐘官圖經云、近人見有文嘉定之寶者、意者此錢文義亦同之、

大村成富曰、嘗有大坂人致弘治之寶求鬻者、當時不以爲意卽返與、不知今藏何人之家耶、特爲可惜矣、

元末僞品

英山本作與之同

英山本作弘治之寶錢

〔圖錄　三〇頁ノ279〕

右張士誠天佑通寶錢 ○陶宗儀輟耕錄云、張士誠淮南泰州白駒場人、至正十三年陷通泰高郵自號誠王、改至正十六年爲天佑、三年國號大周由淮渡浙攻破平江、卽承天寺以居佛像悉毀壞、銅觀音鑄爲錢、（摘文取義）○鐘官圖經云、泉志天佑通寶、大理國段正明鑄、鏝穿上有蒙古字一、分注曰、此錢徑一寸二分、西清古鑑、列於李唐、但錢質大小字文與天定大錢相同、當屬大理國鑄無疑、（按圖經所引泉志非洪氏撰、不知何等書也、又按謂穿上有蒙古字者、以當三錢、背文漫滅不可讀云爾耳）錢錄數當五錢云、昭宗天復四年辛酉八月子柷立、改元天佑、是爲哀宗、考元至正時張士誠據吳、改元天佑、或疑此錢爲士誠造、顧佑子非祐、（按文義當作顧祐字非佑蓋寫誤也）不敢遽斷也、今錄于李唐之末、○泉貨彙云、錢錄以天佑錢爲李唐鑄、然此錢有折二折三當五等、而形制文字似至正錢、非李唐所鑄明矣、意史氏以佑字誤作祐字者也、○愚按、天佑錢有小錢折二折三當五、背文各篆書以一貳參五等字置穿上、皆今世不易得、獨小錢頗多耳、又按此錢錢錄以爲李唐鑄、圖經以爲大理國錢、共未安考、輟耕錄已作佑、陶九成當時人應不誤、故今斷係士誠國小錢一品、

〔圖錄　三〇頁ノ280〕

右韓林兒龍鳳通寶錢 ○鐘官圖經云、龍鳳錢、元末韓林兒僞鑄、至正十五年、欒城人韓山童、倡以白蓮教惑衆、至是詭云、宋徽宗八世孫、約以紅巾爲號、將起兵被執、其黨潁人劉福通

等、迎立其子韓林兒、號小明王、建都亳州、國號宋、建元龍鳳、凡十二年、二十六年而死、又按龍鳳通寶錢、徑寸三分甚精巧(一作好)、○愚按龍鳳錢、有小平錢折二折三錢、如圖經所謂似係當三錢、今所載徑八分有奇、重一錢一分、字文形制、類折二錢、俗稱之折二樣、又有一種背穿下偃月文者、共比常有者、頗少、如折二折三、最難得焉、皆銅色紫赤、制作精好、

〔圖錄　三〇頁ノ281　282　283〕

右陳友諒、天定通寶、天啓通寶、大義通寶錢、○鐘官圖經云、大義通寶、元末陳友諒僞鑄、陳友諒陷太平、僭號漢、徙居武昌、僭元大義、大義錢有大小二種、又載天定錢、引楊愼滇載記(一作紀)云、後大理國段智興改元天定、此錢疑當時所鑄、大小兩種、大者徑一寸二分、小者徑九分、文學精好、制作頗佳、(按圖經、明天啓錢係下注、引郭子章傳續記云、萬曆間、豫邑人掘得一法馬、上鑿天啓三年造、背有安吉啓三字、考太和舊志、至正戊戌、紅巾徐貞一、陳友諒、陷江西、下吉安泰和、稱天啓三年、法馬正其時物也) 永原凝翁(伴興)曰、世所傳古錢、有天定通寶錢、小錢折二錢折三錢、又有天啓通寶錢、小錢折二錢、而類大定通寶錢、故流俗稱爲天定類、悉考字樣、並如明初大中洪武之制、然未詳冶鑄年代、間閱明劉基歷卿傳統錄曰、陳友諒、沔陽漁人子、嘗爲縣令、不樂、會天完徐壽輝起兵、慨然往從之、後乘釁、以江州爲都、自稱漢王、迎其主壽輝居之、入城襲殺其部屬、迨至正二十年庚子、殺壽輝、自

殺一作弑

戰死一作死戰

師一作帥

王阮亭池北偶談云明太

稱漢皇帝、改元天定大啓大義、江西諸路、俱受節制、僭位四年、与高皇帝相拒、大戰於鄱陽湖、御舟膠淺、張定邊奮前直犯、常遇春射中定邊、得脫、當是時兩軍殊戰死、友諒敗、中流矢死、其子理走武昌、自立改德壽、我師遂圍之、陳理師其屬、詣軍門請降、至正二十五年漢亡、知天定天啓大義共、爲漢年號、今攷定並爲陳友諒所鑄矣、○或請箇釋云、天定錢、爲大理國所鑄、天啓錢太類大定錢、則蓋南詔成豐祐所鑄豐祐有天啓年號、南詔卽大理國也、○愚按此說非是、依弘簡錄南詔傳、豐祐唐穆宗長慶三年立、宣宗大中年中死、後理國段與智、宋理宗寶祐中、爲蒙古所滅、今細觀此二品、非唐宋之體制、且絕類大義錢、故據永原氏說、及圖經太知（恐和）舊志、天啓三年之文、定係于友諒鑄、各錄其一品、以備攷、（按天定天啓二品、泉貨鑑列入于不知年代品、）

明正品

〔圖錄　三三頁ノ284　三四頁ノ285　三五頁ノ286〕

有明太祖大中通寶錢　○大明會典云、洪武初置寶源局於應天府、鑄大中通寶錢、與歷代錢兼行、以四百爲一貫、四十爲一兩、四文爲一錢、設官專管、江西等行省、各置貨泉局、頒大中通寶大小五等錢、設官鑄造、○愚按、大中錢、有大小五等、而背文各鑄本州郡名、共有數

祖初定天下是國號意在大中既而祈天乃得大明故當時錢文有大中通寶按大祖滅元定天下救民之疾苦保宗廟錢文所由來有意味深長豈非偶然

種、今所載三種、初一品、徑一寸五分五釐、重（マヽ）背文曰十、在穿上、面背共字文極濶大、次一品、徑一寸四分、重三錢九分、背文曰十淅、在穿上下、較之他十淅者、則輪郭甚細、孔穿最濶、後一品徑一寸五分弱、重六錢五分、銅色紫黑、背文穿上置十字、穿左在廣字、最難覩焉、（按泉貨鑑所載、穿左廣字者、似係折二、小錢桂字者、大錢桂十者、及二福三福者、余未之見、）

〔圖錄　三六頁ノ287　288　289　290　三七頁ノ291　292　293〕

右太祖洪武通寶錢　〇大明會典云、令戶部及各行省、鑄洪武通寶錢、其制凡五等、當十錢重一兩、當五錢重五錢、當三當二重皆如其當之數、小錢重一錢、〇愚按、洪武錢、亦有五等、背文以一錢二錢三錢五錢十一兩等字、其餘亦各鑄本州郡名、如大中錢也、今所載七種、一徑七分八釐、重一錢二分、背文曰福、此錢通字結體、與他福字者異、一徑九分弱、重一錢四分、背穿左有廣字、一徑九分七釐、背文曰二錢、字文以最瘦爲異、一徑一寸五釐、背文曰三錢、以細緣爲異、一徑一寸四分、背文曰五錢、背字以小爲異、（此錢面文、泉貨鑑已載之、故不復錄、一徑一寸三分五釐、背文曰五福、背字以大爲異（此錢面文與所常有五福者、無異、故不復錄）一徑一寸二分五釐、背穿上有五字、最爲罕矣、（按泉貨鑑所載、小錢穿右廣字者、大錢鄂十者、余未見之、）

〔圖錄　三八頁ノ294　295〕

右成祖永樂通寶錢　○大明會典云、永樂九年、令差官於浙江江西廣東福建四布政司、鑄永樂通寶錢、○愚按、此錢字有肥瘦、形有厚薄、今世甚多、今錄二品、

〔圖錄　缺〕

右宣宗宣德通寶錢　○大明會典云、宣德九年、令南京工部并浙江等布政司、鑄宣德通寶錢、○愚按、此錢、字文有二樣、今世多有之、

〔圖錄　三八頁ノ296　297　298〕

右孝宗弘治通寶錢　○明史食貨志云、弘治十六年以後、鑄弘治錢、○愚按、弘治錢、錢有銅潤、質有厚薄、有黃錢、有鎔錢、文字有楷書及如八分者數樣、今以如八分者三種錄于此、

〔圖錄　三八頁ノ299〕

右世宗嘉靖通寶錢　○大明會典云、嘉靖六年、奏准鑄造嘉靖通寶、一千八百八十三萬四百文、南京寶源局鑄造二千二百六十六萬八百文、每文重一錢三分、四十三年、以私鑄盛行、錢法阻滯、令內外各衙門、嚴加訪治、該局鑄造、暫行停止、○愚按、嘉靖錢、亦黃錢鎔錢二種、而有字文小異者數樣、制作有精粗、形質有大小、今所載制字精好、假鎔作之、

〔圖錄　三八頁ノ300　301　302〕

右世宗大明通寶錢　○明史食貨志云、隆慶初、直隷巡按家楊相、請鑄大明通寶錢、不識年號、部議格不行、○鐘官圖經云、大明錢背文、有穿上戸字、帥字、穿右帥字、○愚按、大明錢、今世所見、背文曰戸曰帥曰招共在穿上、又有無背文者、皆假鑰作之、今錄帥字招字及無背文者三品、並錢質渾厚、其戸字者於諸錢中最多、制作稍佳、圖經所謂穿右帥字者余未之見、

李竹朋泉匯曰彙考引春明夢錄曰其錢之名當改爲大明通寶使萬世行之無阻此啓禎時語是嘉靖時無鑄大明錢之明證惟黃宗羲行朝錄魯王紀年稱崇禎十七年魯王回越鑄大明通寶錢其戸工二種尤與天啓崇禎錢相似故決爲魯王鑄其帥字者或明亡後諸帥所鑄

作一作造

〔圖錄　缺〕

右穆宗隆慶通寶錢　○大明會典云、隆慶四年、令以新鑄隆慶通寶、送戸部發太倉庫量放京官折俸、○愚按、隆慶錢、字文一様、制作精好、

〔圖錄　三八頁ノ303〕

右神宗萬曆通寶錢　○明史食貨志云、萬曆四年命戸工二部、準嘉靖錢式、鑄萬曆通寶、金背及火漆錢、一文重一錢二分五釐、又鑄鏇邊錢、一文重一錢三分、頒行天下、尋命十三布政司、皆開局、採工部言、以五銖錢爲準、用四火黃銅鑄金背、二火黃銅鑄火漆、麤惡者罪之、蓋以費多利少、則私鑄自息也、○愚按、萬曆錢、形有大小、制有精粗、字有肥瘦、

亦一作差

皆今世尙多、獨跂曆者頗少、跂曆者、曆字左畫直下也、今圖一品此錢制作精好、曆字上横畫出左畫前、亦爲異品、又有背文數品、及兩面同文者、（按泉貨鑑所載、背文鴻字者、余未之見也、）

〔圖錄　三九頁ノ304〕

右光宗泰昌通寶錢　○錢錄云、萬曆四十八年八月丙午朔、光宗卽位、詔以明年爲泰昌元年、九月乙卯朔、熹宗卽位、以明年爲天啓元年、改萬曆四十八年八月、爲泰昌元年、○錢官圖經云、張次仲、竹窗解頤襍錄云、熹宗踐祚、見嘉靖萬曆光朝所鑄錢、不見泰昌錢、命寶源寶泉二局、並鑄泰昌天啓通寶、亦孝思也、又云、泰昌錢、所見有背面星月、及一面泰昌、一面天啓者、兩面同文者、一面泰昌一面天字向下、泰字向上、左寶字向下、右寶字向上者、○愚按泰昌錢字文有四樣、背或爲星文、今錄通字傍增一點者、

〔圖錄　三九頁ノ305　306　307　308〕

右熹宗天啓通寶錢　○愚按、所載四種、背文曰新、曰密、但在穿上、曰一分者二種、一在穿左、一在穿上下、其他背文十餘種、又有無背文者、（泉貨鑑所載背昌字者余未之見、）

〔圖錄　三九頁ノ309〕

右天啓折二錢　○愚按、此錢徑九分九釐、重一錢六分五釐、寶字尓增一點、背穿上有星文、

較之小平錢、則字文制作稍陋、蓋二錢也、

大正六年六月十日以共古齋藏本鈔　竹清三村天明印

〔圖錄　四〇頁ノ310　四一頁ノ311　四三頁ノ313　四二頁ノ312　四四頁ノ314〕

右天啓大錢　○明史食貨志云、天啓元年、兵部尙書王象乾、請鑄當十當百當千三等大錢、用龍文略倣白金三品之制、於是兩京皆鑄大錢、○愚按、天啓大錢、泉貨鑑所載、背穿上十字者、穿上十字傍一兩字者、穿上十字穿下星文者、凡三種也、今又錄五種、一徑一寸四分五釐、重(ママ)　背十一兩字者、此錢以細緣爲異、一徑一寸六分、重(ママ)　亦十一兩字者、此錢輪郭廣濶、通字結體異諸品、一徑一寸五分、重六錢、背穿下有十字、一徑一寸五分、重八錢有奇、背穿上有府字、一徑一寸五分五釐、重八錢七分、無背文、共字文明坦、制作精好、獨濶緣者、制作稍陋、又按鐘官圖經、載天啓大錢、上府、下十、上十右一兩及兩面同文、一面倒置面右各種、

〔圖錄　四五頁ノ315　316　317〕

右莊烈帝崇禎通寶錢　○明史食貨志云、崇禎元年其所鑄錢皆以五十五文當銀一錢、三年自南北兩局外僅存湖廣陝西四川雲南及宣密二鎭、而所鑄之息不盡歸朝廷、遂定錢式每文重一錢每千直銀一兩、南都錢輕薄、屢旨嚴飾、乃定每文重八分、末年勅鑄當五錢、不及鑄而明亡、

○愚按、崇禎錢、今世所見、背文凡四十餘品、中穿下作馬形者、最爲異品、圖經亦載之、今所錄三種、一背穿傍爲二直文、一背穿上置汇字傍亦作二直文、一背穿上有府字、其佗有折二錢、背文曰二、或爲星文、又末年所鑄、有當五錢、背文曰戶五、曰監五、圖經載左右有工者、余未見之、

明季附品

〔圖錄 四五頁ノ318〕

右福王弘光通寶錢 ○鑄官圖經云、弘光通寶、明季福王鑄、福王名由崧、神宗孫、福王常洵之子、洛陽陷、避亂南下、馬子英迎立于江上、甲申五月、至南京即位、稱弘光元年、在位一年、所鑄弘光通寶錢、有正書八分書二體、背尙穿上有星及鳳字者、○愚按、弘光錢、有正書三樣、八分書者、背有鳳字、今所載、徑九分餘、重一錢四分五釐、背穿左有貳字、蓋折二錢也、

〔圖錄 四五頁ノ319 320 321〕

右唐王隆武通寶錢 ○鑄官圖經云、隆武通寶錢、明季唐王鑄、唐王名聿鍵、太祖九世孫、乙酉六月、即位于福州、稱元隆武、在位一年、所鑄錢、有大小二種、背穿上有星及戶工等

字、○愚按隆歩錢、形質有大小、字文有小異、今所載三種、初二品共徑七分七釐、後一品徑八分四釐、皆文字結體殊異、共無背文、又有折二錢、徑一寸字文止一様、

〔圖錄　四五頁ノ322　四六頁ノ325　326　四七頁ノ323　324〕

右永明王永曆通寶錢　○鐘官圖經云、永曆通寶錢、明季永明王鑄、永明王名由榔、神宗孫、桂王常瀛少子、初封衡陽王丙戌十月、稱元永曆、以肇慶署爲行宮、在位□□年、所鑄錢、有大小各種、正草行篆八分各體、背穿上下有星及上下戸工、又二厘五厘一分者、又有御勅輔明定國留粤督部等一字者、○愚按、永曆錢字文數樣、並正書、特背督字者八分書耳、背文十有餘品、大率如圖經所載、而但二厘及御勅三種、未見之、今所圖五種、初一品、字體平濶、永字不從二水、次二品、一背文曰道、一曰部、共在穿上、其部字者、文字制作、甚陋拙、次徑一寸七釐、重一錢八分、背文曰五釐、後一種、徑一寸一分九釐、重二錢一分五釐、背文曰壹分、共在穿上下、肉好字文類背穿下工字者、又按新撰錢譜云、今世永曆折二錢、頗行草篆者有數品、制作至陋、此錢恐非當時所鑄、

明季僞品

〔圖錄　四七頁ノ328　327〕

右李自成永昌通寶錢　○吳偉業綏寇紀略云、甲申李賊自關中奔襄陽、居武昌五十日、改江夏爲端符縣、設僞令運鍋炭、鑄永昌錢、○鑄官圓經云、崇禎十七年正月、李自成稱王於西安、據秦府爲宮、僭國號大順、建元永昌、所鑄錢有大小數種、○愚按、永昌小平錢、有大小二種、共永字從二從水、今所載者永字不從二水、或疑贋造、今審錢質確然有明末之風、故係于此、後一品徑一寸二分有奇、重三錢五分、輪郭渾重、字文結體類小錢小樣者、（此錢伊勢國田中氏所收、）

〔圖錄　缺〕

張獻忠大順通寶錢　○鑄官圖經云、大順通寶錢、明季張獻忠僞鑄、崇禎□□年、張獻忠僭僞號稱成都爲大西國、即西王位、僞號大順、所鑄錢、皆作當二大、背穿下有戶工等字、○愚按、大順錢、除戶工字外、有無背文者、並徑七分許、

〔圖錄　四六頁ノ329〕

右孫可望興朝通寶錢　○陳鼎滇黔紀遊云、雲南東郭有金牛寺、寺外八角亭中有銅牛一、重數萬斤、以鎭太怪、明末孫賊僭號取牛鑄錢、○鑄官圖經云、順治□□年孫可望爲張獻忠監軍、獻忠伏誅、可望承兵入滇、自稱東平王、僭元興朝、所鑄錢如當二大、背穿下有工字者、又背上壹下分字、徑寸六分　○愚按、興朝錢、背文有工字者、有字文肥瘦二體、曰五厘者二

種、一徑一寸一分五釐、一徑一寸一分、字文結體有小異、今以寸一分者、錄于此、曰壹分者、徑一寸六分、字文有三樣、又有徑一寸四分、錢質灰白麁惡者、

〔圖錄　四七頁ノ330　331〕

右吳三桂昭武通寶錢　○鐘官圖經云、　昭武通寶、利用通寶錢、吳三桂僞鑄、康熙十三年吳三桂稱帝於衡州、僞號大周、僭元昭武、改元利用、所鑄昭武錢有正篆大小各體、及背穿下戶工等字、左右一分等字、○愚按、昭武錢、今世所見、武字之點、在于橫畫上者、字體一樣、在于橫畫下者、字文三樣、今錄二品、一寶字貝作貝、一通字初畫作方、稍爲異品、又有背穿下工字、穿上一星、穿四方各一星者、圖經所謂篆書者、及戶字、一分等字者、余未之見、（按昭武錢、舊說、係聿鏄鑄、聿鏄僭號紹武、從糸、今依圖經改正、）

〔圖錄　四七頁ノ332　四八頁ノ333〕

右利用通寶錢　○鐘官圖經云、　利用錢、背穿上有星、又拘上下兩側、有雲、貴、厘、二厘、五厘、一分等字者、○愚按、利用錢、大者徑九分有奇、小者徑七分弱、字文亦有小異、用字平濶者、通字初畫方者、細緣濶緣、種狀不一、皆有左雲上貴、漸、兩側厘等字、及星者、今錄通字初畫方者、及漸字者二品、折二錢徑九分五釐、背穿兩側有二厘字、圖經所謂五厘一分等字者、未之見、

〔圖錄　四八頁ノ334〕

右吳世璠洪化通寶錢　○鑄官圖經云、洪化通寶錢、吳世璠僞鑄、康熙□□年、吳三桂孫世璠、僭元洪化、所鑄錢有大小二種、背穿右有戸工等字、○愚按洪化錢、有細緣濶緣、字文有小異者各種、形質亦有大小、今錄通字初畫方者一種、又有背穿左右壹乂、穿左戸工等字、及星者、

〔圖錄　四八頁ノ335〕

右耿精忠裕民通寶錢、○鑄官圖經云、裕民通寶錢、耿精忠僞鑄、康熙十三年、故靖南王耿仲明孫精忠叛閩中、僭號裕民、所鑄錢、有大小各種、背有一分至一錢字、以次增、○愚按、裕民錢、有大小三種、小者徑九分、次徑九分六釐、背穿左有一分字、皆今世尙多、蓋所載、徑一寸二分五釐、重四錢五分、背穿兩側有壹錢字、最不易得焉、圖經所謂二分至九分者、竟無見之、(或云裕民大錢、有背穿左浙右一錢字者余未之見、又按、利用錢以下、泉貨鑑列入于不知年代品、)

淸正品

〔圖錄　四八頁ノ336〕

右淸太祖天命通寶錢　○愚按、大淸太祖、初國號滿州、建元曰天明、都于遼東、時則明萬曆四十六年戊午也、此錢今世所見、雖有字體小異、皆輪潤好狹、字文欹斜、制作陋拙、以假鑰作之、計當時所鑄、今錄一品、(此錢姬路侯藏弆、)

〔圖錄　缺〕

世祖順治通寶錢　○愚按、此錢、有大樣小樣各體、背文六十有餘品、中有一厘字、倒向左、又向右者、所罕見、(按泉貨鑑所載、穿上同字、穿左襄字、福字、寧字、荊一厘字、福及鑓字者余未之見、)

〔圖錄　缺〕

聖祖康熙通寶錢　○愚按、此錢亦有大樣小樣各種、背文二十有餘品、又有二滿字倒在穿上下者、

〔圖錄　缺〕

世宗雍正通寶錢　○愚按、此錢亦有背文數種、

〔圖錄　缺〕

弘曆帝乾隆通寶錢　○愚按、此錢、背文如雍正錢、

〔圖錄　四八頁ノ337　四九頁ノ338　339　340　341〕

右今帝嘉慶通寶錢　○愚按、乾隆六十一年、永琰卽位、改元曰嘉慶、我寛政八年丙辰也、此錢背文及形制、如乾隆錢、而銅質稍麁惡耳、

錢幣攷遺　卷七

大村成富覆校

大正十年五月二十日鈔竹淸天明

一校了

錢鑄二字可乙正

如字當作始字

錢幣攷遺　卷八

久野克寛輯
狩谷望之校

高麗國錢

〔圖錄　四九頁ノ342　343〕

右高麗國、海東通寶、東國通寶錢　○河寛齋半江暇筆云、高麗國錢、以海東三韓東國爲記、錢譜諸書、不詳何年所鑄、按雞林類事云、高麗國癸未年、倣本朝錢鑄交易、弘簡錄云、高麗國地產銅、器皿悉用、然不知鑄錢、崇寧後如學鼓鑄、有海東等錢、合二書攷之、乃知癸未爲崇寧二年、而國王顒末年也、○愚按、此錢今世所見、共有眞行隷篆各體、今錄海東錢其文行書、東國錢其文如八分書、而東字及寶字下爲反挑之勢者各一枚、

〔圖錄　缺〕

海東重寶錢、面文眞書止一樣、

〔圖錄　缺〕

東國軍寳錢、面文眞書對讀者、大小二種、徑讀者、只一様、

三韓錢、亦文曰通寳、曰重寳、通寳錢有眞篆各二様、重寳錢有對讀徑讀二種、

〔圖錄　缺〕

〔圖錄　四九頁ノ344 345〕

右朝鮮通寳錢　○續官圖經引稗史類編云、朝鮮通寳（眞書）海東舊錢、（按洪武二十五年、改國號、復朝鮮舊號、）○愚按、所載二種、一徑八分五釐、重一錢、孔狹輪闊、一徑八分有奇、重一錢五分、外郭細錢質厚、共字文如八分書、而銅色黃褐、計朝鮮所鑄、又有眞書者、今世甚多、

安南國錢

〔圖錄　四九頁ノ346〕

右太祖黎利順天元寳錢　○明史黎利初仕陳季擴爲金吾將軍、後爲安南太祖、宣德六年命利、權署安南國事、八年利卒、（宣德三年、紀元順天、僭位六年、）○愚按、此錢輪郭有細闊、文字有肥瘦、今所錄細瘦字者、

〔圖錄　四九頁ノ347〕

右太宗麟紹平通寳錢　○明史太宗麟、一名龍、利子、宣德九年立、紀元紹平、自是其君長皆有二名、以一名奏天朝、貢献不絕、如常例、正統元年六月、封安南國王、七年卒、改元二、（紹平六年大寳三年）○愚按、紹平錢、有輪郭細潤二種、共紹字傍從刀、茲所載字文隱起、紹字傍帶行筆、差爲異品、

〔圖錄　缺〕

大寳通寳錢、字文有大小二種、大字者、頗不易得、

〔圖錄　四九頁ノ348〕

右仁宗濬大和通寳錢　○明史仁宗濬、一名基隆、麟子、正統八年立、紀元大和、天順三年十月、其庶兄諒山王琮、殺濬自立、改元二、（大和十一年、延寧六年、）○愚按、此錢雖有輪郭細潤、字文大小之異、皆徑八分強弱也、今所錄輪郭甚廣潤、徑八分五釐、差爲異品、

〔圖錄　四九頁ノ349〕

右延寧通寳錢　○愚按、延寧錢、形有大小各種、字亦有小大、惟寧字中从皿者、頗所罕有、茲所載徑八分三釐、寧字下橫畫甚短者、亦爲異品、

〔圖錄　五〇頁ノ350〕

右諒山王琮天興通寳錢　○明史諒山王琮一名宜民、濬庶兄、天順三年弒濬自立、純元天興

常字帝誤也

竹云庄當作

○愚按、此錢有大樣小樣、今所載以輪郭甚濶爲異、

〔圖錄 五〇頁ノ351〕

右聖宗灝光順通寶錢 ○明史聖宗灝、一名思誠、誥弟、天順四年國人誅琮立灝、紀元光順、六年二月封安南國王、弘治十年卒、改元二、（光順十年、洪德二十八年） ○愚按、此錢徑八分三釐強、重一錢、較之所常有者、輪郭渾重、制作更工緻、又有一種制造精好、光字挑筆至横畫者、

〔圖錄 五〇頁ノ352〕

洪右德通寶錢 ○愚按、此錢形質字文、有大小各種、今所載以輪郭甚濶爲異、

〔圖錄 五〇頁ノ353〕

右憲宗暉景統通寶錢 ○明史憲宗暉、一名鏳、灝子、弘治十一年立、紀元景統、○愚按、此錢徑八分、輪郭廣濶、字文狹小、与他品異也、

〔圖錄 缺〕

威穆常誼端慶通寶錢 ○明史威穆帝誼、一名璿、暉孫、正德元年、册安南國王、誼寵任母黨、阮种（一作仲）阮伯勝兄弟、恣行威虐、四年逼誼自殺、擁立其弟伯勝、貶誼爲厲愍王、國人誅之、立灝孫賙、改諡誼威穆帝、庄位四年、改元端慶、○愚按、此錢面文有二樣、形質

（五年之下、立字脫歟）

字下脫則廣字之三字

有大小厚薄、

〔圖錄　五〇頁ノ354　355〕

右襄翼帝晭洪順通寶錢　○明史襄翼帝晭、一名瀅、灝孫、正德五年、紀元洪順、七年封安南國王、十一年爲陳嵩被弒、在位七年、○愚按、此錢有字文小異者各種、今錄二品、

〔圖錄　缺〕

莫登庸明德通寶錢　○明史正德十一年、莫登庸起兵、討陳嵩等、立晭兄灝之子譓、登庸既握兵柄、潛蓄異志、嘉靖元年、自稱安興王、謀殺譓、譓間行以免、登庸立庶弟懬、六年簒其位自立、改元明德、（摘文取義）○愚按、明德錢、字文有二様、

〔圖錄　缺〕

莫方瀛大正通寶錢　○明史嘉靖九年、登庸禪位於子方瀛、改元大正、○愚按、大正錢形質有大小、

〔圖錄　缺〕

廣和通寶錢　○龍橋公曰、按明之嘉靖九年譓卒、國人立寧爲世孫、僭帝號、改元和、攷文義、似元下脫一字、熟玩廣和錢、制作大類明德光紹諸錢、依知明史脫字、今斷以廣和錢係黎寧鑄、○愚按、此錢有濶緣細緣二種、又有一種錢質薄小麤惡者、今从龍橋公說、姑例于此

（按鑄官圖經、亦作元和、）

〔圖錄　缺〕

黎憲光紹通寳錢　○明史黎寧、爲登庸所攻、竄占城界、國人立其弟憲、改元光紹（嘉靖十二年）○愚按、此錢形質微有大小、大樣者制作極巧、而最少流傳、

大村成富覆校

錢幣攷遺　卷八

大正十年五月二十日以葵山本一校

琉球國錢

〔圖錄　五〇頁ノ356　357　358　359　360〕

右尚泰久大世通寳尚德世高通寳錢　○河寛齋曰、所傳古錢、有大世通寳、世高通寳、未知何國所鑄也、按中山傳信錄云、下天妃宮有鐘一架、刻云、琉球國王大世主、庚寅慶生、茲現法王身、量大慈願海、而新鑄洪鐘下畧景泰丁丑年月朔日蓮、又云、天界寺有鐘、銘曰、琉球國君世高王、乘大願力、新鑄巨鐘下畧時成化己丑十月七日、按景泰丁丑、其王尚泰久卽位之四

年、成化己丑、其王尙德卽位之九年也、大世世高、乃國中所自稱號也、又按此錢通寶二字、蓋摸範於明永樂通寶錢、而添入大世世高等字者、體勢欹斜、製作陋惡、外國所造、無可疑者、今定爲琉球錢、○愚按、大世錢、質有厚薄、字有肥瘦、或摸大中錢、或摸永樂錢、又有一種背作隱起文者、世高錢文字、或大、或小、又有作世者、皆銅質形制甚陋拙、如河寬齋所說也、今從之、

右琉球國錢以英山本補入大正辛酉五月念一日

泉幣攷遺　卷九

久野克寛輯
狩谷望之校

不和年代品

〔圖錄　五一頁ノ361〕

右應感通寶錢　○愚按、此錢徑七分八釐、重八分五釐、銅色字文、相類遼諸錢、豈非契丹所鑄耶、此品所見僅一品、田代某文化元年十二月、於古錢五百文中獲之、又見某侯所收摸本一品、正同矣、

〔圖錄　五一頁ノ362　363　364〕

右開泰元寶錢　○愚按、此錢三種、一徑八分强、銅質紫赤、或云、此品遼聖宗所鑄、意遼諸錢皆順讀、獨天慶通寶錢爲對讀耳、且此錢字體亦不似遼錢、故列于此、一徑八分弱、字合八分體、一徑同前、重九分强、楷書背上有陳字、共較于前一品、則肉好文字大異、計此亦別一種者也、

英山本稍細
篆書之下有
大旦字

〔圖錄　五一頁ノ365　366　367〕

右紹豐錢　○愚按、此錢曰元寶、曰通寶、寶各不同、共字文有各體、今所錄元寶錢、徑八分弱、字文行書、通寶錢二種、一徑八分有奇、輪郭廣濶、面文隸體、背穿上有陳字、(此錢尾張國大津某於通行錢中所得云、) 一徑七分八釐、字文行書、輪郭稍細、按何亮續安南志云、紹豐陳裕宗年號、且此錢背文曰、豈非陳氏所鑄者耶、然形制字法、不似安南黎氏諸錢、猶俟後攷、

〔圖錄　五一頁ノ368　369　五二頁ノ370　371　372　373　374　375〕

右大治錢　○青蚨私誌曰、此錢近世所見、曰通寶、曰元寶、爲對讀、爲循讀、爲眞行草隸篆五體、或摸太平錢、或摸大觀錢、種類甚多、至凡二十餘品、未詳何國所鑄、○愚按、此錢數十種、如私誌所說、今以其可辨者若干品、繫于此、如元寶錢、面文隸體、制作精巧、背穿上有一字者、對讀行篆雜書者、輪郭平濶篆書者、通寶錢、面文隸體制造差工、背穿上有元字者、輪郭廣濶如八分書、循讀眞書者、外輪稍細篆書者、輪郭廣廣濶書者、最爲奇品、所圖諸品、皆泉貨鑑所不載者、並臚列可見、

〔圖錄　五二頁ノ376〕

右政化治寶錢　○愚按、此錢銅質剝蝕、字畫湮晦、正篆雜書、廻環讀之、爲政化治寶、未見

英山本大世
世高二錢入
琉球國錢部
附第八卷末

完者、

〔圖錄　五二頁ノ377〕

右永天通寶錢　○愚按、此錢某侯所收、河寬齋曰、嘗見此錢、徑八分、銅質頗精、

〔圖錄　五二頁ノ378〕

右順天大寶錢　○愚按、此錢徑八分二釐、重一錢三分、銅色青白、字文欵斜、背穿上有月字、

〔圖錄　五二頁ノ379〕

右平安道寶錢　○愚按、此錢徑七分八釐、重七分、輪郭廣濶、銅色紫褐、自上及下讀之曰平安道寶、豈非朝鮮平安道所鑄耶、（此錢齋藤氏所收也、宇野宗明曰、嘗見此錢搨本、其文行書、未知此錢否、）

〔圖錄　五〇頁ノ356 357 358〕

右大世通寶錢　○青蚨私誌云、尚泰久襲封、乃明景帝景泰五年也、○愚按、此錢背有厚薄字有肥瘦、或摸大中錢、或摸永樂錢、又有一種背作隱起文者、

〔圖錄　五〇頁ノ359 360〕

右世高通寶錢　○青蚨私誌云、尚德於明英宗天順五年襲封、按琉球國世臣屬於明、未嘗自稱

王號、但中山傳信錄、載二王所鑄其國中天妃宮、及天界寺鐘銘、稱大世世高二王號、蓋其居國僭稱王號、如安南諸國之事、又按此錢通寶二字、蓋摸範於明永樂通寶錢、而添入大世世高等字者、體勢欲斜、製作陋惡、外國所造無可疑者、今定爲琉球錢、（按尙泰久乃大世王、尙德乃世高王也、）〇愚按、此錢銅質形制、与大世錢不異、字或大或小、又有作世者、（按大世世高二品、泉貨鑑及諸書、皆列入于不知年代品、今姑从之以待後證、）

〔圖錄　五三頁ノ380 381 382 383〕

右景興錢　〇青蚨私誌云、或謂明和中海商漂流、至大越國、景興乃彼中紀元也、今無史書可以徵、姑列之不知品　〇愚按、鑄官圖經載通寶重寶巨寶大寶至寶正寶内寶泉寶中寶永寶各種曰、右錢有大小正篆各體、又背有星月工字、及右山左西上壬下戊等文、泉貨鑑亦載通寶巨寶二品云、徑八分、重一錢、有眞行草篆、及眞篆雜書者、有鍮錢、有銅錢、有背穿下工字者、今所載四種、文曰通寶者、背有上壬下戊字、曰至寶、曰泉寶、曰永寶、並銅質制作麤惡、圖經所謂重寶大寶正寶内寶中寶、及背山西字者、余未見之、又按續化蝶類苑云、景興安南紀號、元年辛酉、當我寛保元年、未知何據、又云、此錢有背穿下星面重輪者、巨寶錢、有背穿上一字及星者、

〔圖錄　五三頁ノ384〕

禛禎之誤
原本幕下有
一皆字

右正德通寶錢　○王士禛池北偶談曰、於慈仁寺市、見正德錢二面、幕有文如蟠龍狀、与今制殊異、正德文夏國僞年號也、錢不知何年所造、○愚按、此錢徑一寸、面外緣有文如蔓草、幕爲龍鳳昇降狀、漁洋所見蓋卽此、

〔圖錄　五三頁ノ385〕

右景德元寶錢　○愚按、此錢徑八分、重九分强、似所謂正隆様者、而質稍渾重、俗字之曰一心景德錢、言宋景德錢、省德字中一畫、此品不然、故云爾耳、

〔圖錄　五三頁ノ386〕

右聖宋元寶錢　○愚按、此錢徑八分、制造精好、字文如分楷、而微類宣和錢、疑北宋崇寧年間所鑄、然形制頗異、故今姑錄于此、以俟後攷、

〔圖錄　五三頁ノ387〕

右政和重寶錢　○愚按、此錢肉好字文、与宋政和通寶錢大同、蓋取範於政和通寶錢所造、

〔圖錄　五三頁ノ388〕

右乾道元寶錢　○愚按、此錢徑八分有奇、重一錢、或爲南宋乾道小平錢、或爲西夏惠宗所鑄、今較于南宋乾道錢、則絕不相類、比于西夏諸錢、則雖頗彷彿、有未穩者、此錢鋼質字文、甚與金正隆元寶錢相等、疑金國所造、然未得金紀元乾道之徵、故列于此以備攷、

英山本永元作至元

竹清按持恐特誤

〔圖錄　五三頁ノ389　五四頁ノ390　391　392　393〕

右五品、曰熙法元寶、曰紹豐元寶、曰元通通寶、曰淳豐元寶、曰永元通寶、按共徑八分五釐、重一錢左右、輪郭廣濶、穿不正方、字文狹小、行書篆體相雜、皆今世所罕見、泉貨鑑識四種、曰祥祐元寶、曰元平聖寶、曰皇宋熙寶、曰景元通寶、按肉好字文、蓋一手所成也、俗謂之祥祐様、

〔圖錄　五四頁ノ394〕

右宣德通寶錢　○按此錢徑七分八釐、重七分、字文正書、持寶字爲篆書、類熙元通寶錢、俗謂之熙元様、泉貨鑑識熙元及景元通寶宋元通寶三品、

〔圖錄　五四頁ノ395〕

右一品、文曰皇宋熙寶、按此錢徑八分二釐、字文篆體、特熙字爲正書、類所謂熙元様者而小異、今世不易覯焉、

〔圖錄　五四頁ノ396〕

右政和通寶錢、按此錢徑七分八釐、重七分、字文篆書、肉好字體、粗類前品、

〔圖錄　五四頁ノ397　398〕

右二品、曰祥符通寶、曰政和通寶、按共徑八分、重八分、銅質字體、類明宋定寶錢也、（按

鐘官圖經、載明宋錢、自上及下讀之、曰明定宋寶、未知孰是〕

〔圖錄　五四頁ノ399〕

右元豐通寶錢、按此錢徑八分、字文草書、惟寶字用篆法、形制類前品而小異、

〔圖錄　五四頁ノ400〕

右一品、曰佛法僧寶、按此錢徑八分、文字眞書、背有月星文、

〔圖錄　五五頁ノ401〕

右祥符元寶錢、按此錢徑八分、重七分五釐、與泉貨鑑所載正隆元寶以下、紹平洪順諸錢十二品全同、俗謂之正隆樣、青蚨私誌云、此類多用安南紀號、葢彼國民間所私鑄也、

〔圖錄　五五頁ノ402〕

右宣和通寶錢、按此錢徑八分、重七分、肉好字文、類皇恩通寶錢、俗謂之皇恩樣、泉貨鑑載皇恩及佛法僧寶政命通寶篆書錢三品、

〔圖錄　五五頁ノ403　404〕

右二品、曰紹祐元寶者、徑七分弱、曰紹豐平寶者、徑八分、泉貨鑑載俗所謂安法樣者、三十五品、此二品正同、

〔圖錄　五五頁ノ405　406〕

英山本正隆作天豐

右二品、曰紹宋元寶、曰元符通寶、共篆書、銅色純赤、制作麤惡、泉貨鑑載紹符元寶以下相類者十八品、此二錢正相同、俗謂之紹符樣、

〔圖錄　五五頁ノ407　408〕

右二品、曰（祥符通寶紹隆通寶、）按此錢徑七分五釐、輪郭平濶、面背孔郭反張、銅質純赤、制作不精、

〔圖錄　五五頁ノ409　410〕

右二品、曰（上位武陽萬劫通寶、）按此錢徑七分五釐、重八分三釐、輪郭廣濶、字文狹小、面背孔郭反張、制作頗精、

〔圖錄　五五頁ノ411　412　五六頁ノ413　414　415　416〕

右七品、文曰永治元寶、周通元寶、曰皇宋　曰佑寶、曰正隆元寶、曰太和通寶、曰利用通寶、曰順治通寶、按俱輪郭廣濶、字文狹小、以鉛造之、形質稍有大小厚薄、或背爲月星文、泉貨鑑載祥宋元寶以下、相類十五品、俗稱祥宋樣者全相同、

〔圖錄　五六頁ノ417〕

右一寶、文曰太平通寶、按徑六分五釐、重三分五釐、輪郭孔大、字文狹隘、銅質麤惡、蓋近歲所造、

〔圖錄　五六頁ノ418　819　420　421〕

右四品、文曰紹元通寶、曰咸元通寶、曰宗元通寶、曰聖元通寶、按共徑八分、重七分左右、其文正書、似所謂明宋樣者、而銅質稍麁、俗稱之紹元樣

〔圖錄　五六頁ノ422　423　424　五七頁ノ425　426　427　428　429　430〕

右九品、曰太平通寶、曰景祐元寶、曰皇宋通寶、正篆二體、曰治平元寶、曰元豐通寶、曰元祐通寶、曰紹聖元寶、曰政和通寶、按共徑八分、重八九分、輪郭平濶、穿不正方、俗稱之景祐樣、意皆準宋朝錢文、而別成一種者也、

〔圖錄　五七頁ノ431　432〕

右二品、曰太平通寶、其文隸書、曰淳化元寶、其文草書、共徑七分六釐、重六分許、銅色黃白、形制與宋朝錢頗異、計外國所造也、

〔圖錄　五七頁ノ433　434　435〕

右三品、曰至道元寶者、眞草二體書、曰景德元寶者、眞書、共徑七分五釐、重共六分許、輪郭甚廣濶、而文字狹小、

〔圖錄　五七頁ノ436　五八頁ノ437〕

右二品、曰大聖元寶、文共篆體、一輪郭平濶、天字篆法大異、一銅色紅褐、字畫有肥瘦、蓋

竝外國所造者、

〔圖錄　五八頁ノ438〕

右明道元寶錢、按此錢今世所見、形有大小、質有厚薄、雖制作頗佳、肉好字體不似宋錢、

〔圖錄　五八頁ノ439〕

右治平通寶錢　徑七分六釐、重六分、銅色紫褐、比于宋錢、輪郭廣濶、錢質輕小、

〔圖錄　五八頁ノ440〕

有紹聖通寶錢、按此錢徑八分弱、重一錢強、文字濶大、錢質渾重、與所常有者大異也、

〔圖錄　五八頁ノ441〕

右宣和通寶錢、按此錢徑八分、其文篆書、輪郭平濶、字畫纖瘦、與宋錢頗異、亦爲異品、

（此錢新撰錢譜係徽宗、）

〔圖錄　五八頁ノ442〕

右嘉泰通寶錢、按此錢徑八分一釐、重一錢、輪郭廣濶、形制字體、与宋錢大異、（按太平通寶以下、模宋朝錢文之諸品種類繁頤不遑枚擧、今錄其一二耳、）

〔圖錄　五八頁ノ443　444　445〕

右永樂通寶錢　所載三種、形質字文各異、蓋倣明永樂錢、而外國所造、

徑上脫按此錢三字

〔圖錄　五八頁ノ446　447　448〕

右三品、日咸平元寶、日祥符通寶、日明道元寶、共徑八分左右、重七分餘、雖銅質頗精、字畫省不成體、計邊邑所鑄、

〔圖錄　五九頁ノ449　450〕

右二品、字文欹斜殆不成體、然銅質簡古、頗可愛玩、此類俗謂島錢、蓋邊境島夷、不熟識漢字者所造、今强讀一日通通通寶、一日太康元寶、

錢幣攷遺　卷九

大村成富覆校

右八九卷以其古齋藏舊鈔本鈔畢

大正十年五月廿一日以佐野英山君鈔泉貨堂本校

錢幣攷遺　卷十

久野克寛輯
狩谷望之校

撒帳吉語厭勝諸品

〔圖錄　五九頁ノ451〕

右明月錢　○愚按、此錢近歲鑿某地所獲、徑八分有奇、重六分、面背肉好皆無郭、一如半兩錢、青綠深密、制甚古質、又按、洪志載明月錢、曰徑九分、重四銖二參、制作鍥薄、形質簡古、外無輪郭、背文明澈、舊譜所圖與此小異、今所錄形制近之、（按洪志列入于奇品、）

〔圖錄　五九頁ノ452〕

右天下太平錢　○愚按此錢、徑七分五釐、背文曰至元、在穿上下、面背共正書、而肉好文字、稍類至大通寶錢、

〔圖錄　五九頁ノ453〕

右一品亦曰天下太平、徑八分、重七分、字（一作共字）文篆體、銅色紫褐、背夾漫、大異前品、（按中谷

一本薄小作輕小

顯山孔方鑑所圖者爲是、）

〔圖錄　五九頁ノ434〕

右長命富貴錢　○愚按此錢徑九分五釐、重一錢五分、背文爲翔鶴及玄武七星文、而背孔郭稍仄張、又按錢錄云、崇高莫大乎富貴、富貴二字相聯屬始此、又稱初李唐撒帳錢、其文曰長命富貴、金玉滿堂、忠孝傳家、五男二女、天下太平云云、（撒張錢事詳泉志瓚務品之部）

〔圖錄　缺〕

右長命富貴錢　○愚按、此錢、徑一寸八分、重八錢三分、銅質有黃白二種、穿閭肉好、共有周郭、惟面於孔郭外、復爲方郭、背文爲十二地支、皆肖生爲之、而肖生文字、雜參伍錯綜、

〔圖錄　六一頁ノ456〕

右長命富貴錢　○愚按、此錢徑一寸四分五釐、重五錢五分、銅色紫褐、緣濶孔閭、背文亦爲肖十二屬、中爲圓形及十二道、肖生外遶、文字內迴、類泉貨鑑所載者、而小異矣、

〔圖錄　缺〕

右一品一面文曰長命富貴、一面文曰準提佛祖、徑六分餘、重四分許、靑蚨私誌、載此錢曰、面背四道輪郭、並作重文、形製薄小、黃銅鑄造、與洪志諸書所載、長命富貴錢大異、準提乃觀音七號之一、亦掌人生壽命之事、今所餘乃此、

右一品文曰、千秋萬歲、背文曰、天地兩側有月文、按徑八分二釐、銅質細潤面夷漫、

〔圖錄　五九頁ノ458〕

〔圖錄　缺〕

右一品文曰千秋燕喜、按徑七分有奇、其文對讀、背文夷坦、

〔圖錄　六一頁ノ460〕

右一品、文曰日有萬陪、背文爲提秤及月文狀、按徑八分五釐、重六分五釐、銅質制作、類千秋萬歲錢、

〔圖錄　六一頁ノ461〕

右一品文曰福壽康寧、按徑七分八釐、銅色深黃、制作頗精、

〔圖錄　缺〕

右一品、文曰照臨聖師、按徑八分、制作頗佳、

〔圖錄　缺〕

右一品、文曰福德壽長、（一作長壽）按徑一寸五分五釐、重五錢一分、銅色紅黃、背文穿上爲七星文、左星官一人踞椅子、前有物如走獸　右方郭中有文、日本命星官、其下爲雲形、按錢錄云、道家有祭星法、常以其愛生所直之日、祈請司命、語詳於洞章諸篇、

〔圖錄　六三頁ノ464〕

右一品、一面穿上、作牌之狀、牌中文、日本命星官、左右作星官二、旁有鶴鸞、一面背作文、上作虎頭、穿上有篆字、下安一鼎、徑一寸六分五釐、面背方郭中、穿爲圓孔、按酉陽雜俎云、時俗于門上、畫虎頭、書聻字、謂陰府鬼神之名、可以消瘧癘、

〔圖錄　六四頁ノ435〕

右一品、一面爲一人憑杖立、一人侍立形、上作雲星、下有一龍、取象辰位也、一面上一人安坐、侍立嬪、左右作六男、一執如傘蓋者、各爲舞蹈狀、下安一鼎、徑一寸四分三釐、製作甚工、

〔圖錄　六四頁ノ436〕

右一品、按徑九分、重一錢五分、緣邊圓穿、一面作星官及雲星之形、一面於內郭之外、更爲圓形、又作十二道、其間有文、字蹟微漫、文義不可解、姑俟後攷、

〔圖錄　六四頁ノ437〕

右一品、一面文凸起、作一人趺坐、一獸蹲踞之形、上下文不可識、一面文爽塏、八字遶環、其字漫漶、細玩惟辨天下太平四字耳、

〔圖錄　六五頁ノ468〕

一本书字下有又有穿鏤者皆六字

右臺閣錢、按此錢、徑二寸六分、重二十五錢、爲樓閣人物及草木之象、面背同文、而只左右其文耳、以赤銅造之、耳（一作且）制作甚工緻、於諸品中最重大也、今世不多有、（按錢錄所載臺閣錢穿鏤而徑二寸二分許寬政孔方鑑亦錄徑二寸二分者併考各撲狀殊異、）

〔圖錄　六七頁ノ469〕

右一品、按徑一寸九分五釐、一面作飛雁二、一俯一仰、又爲蒹葭蓮華（一作草）水車之形、一面作背十二屬及彩雲、廻外邊狀、銅質黃褐、輪郭細、孔郭圓、郭外上下有小柄、各開孔、而其上柄缺損、今量之、得重十一錢四分、（此錢齋藤氏所收、）

〔圖錄　六六頁ノ470〕

右一品、一面文曰卯生、在穿上下、左右亦有文、如丁子、一面上爲七星文、兩側星官及一兎、徑八分三釐、輪細穿圓、

〔圖錄　六六頁ノ471〕

右一品、一面文曰辰生、在穿上下、左右亦有文、夷滅不可識、一面上爲四星連珠文、兩側星官、及一龍、徑八分弱、銅色黃褐、輪細穿圓、

〔圖錄　六六頁ノ472〕

右一品、一面爲步馬之狀、上有午字、一面書符文、左右共作連星、徑七分五釐、輪細穿方、一

一本作唐太宗七馬之一見殷仲容贊

〔圖錄　六六頁ノ473〕

右一品、徑八分弱、重一錢一分、爲馳馬之形、穿圓銅砦、制作稍古、按爲馬形之諸錢、（一作品）蓋取義於地用莫如馬也、

〔圖錄　六六頁ノ474〕

右一品、面文曰趙騎特勒、背爲一人執兵器騎馬之形、徑八分八釐、重一錢四分、銅質精砦、制作頗佳、此錢或右環讀之、曰趙勒特騎、蓋取于後趙石勒特騎之意也、此說恐非、按特勒驃唐太宗馬見田藝衡留青日札、趙騎即齊騎燕騎宋騎秦騎楚騎之類耳、故余從泉貨彙、讀爲趙騎特勒、泉貨彙所載、外郭剪鑿不完、仍復表出之、

〔圖錄　六八頁ノ475〕

右一品、徑一寸七釐、重二錢九分二釐、銅色黃褐、面文曰追風之馬、背爲走馬之形、按追風、秦始皇七名馬之一、見崔豹古今註（一作詁）、

〔圖錄　六八頁ノ476〕

右一品、徑一寸六釐、重二錢八分、面外郭重輪、穿兩側有文、曰魚目、背爲奔馬之狀、按漢書西域傳贊云、蒲梢龍文魚目汗血之馬、充于黃門、注孟康曰四駿馬名也、

〔圖錄　六六頁ノ477〕

右一品、徑八分二釐、面文曰紫燕、其字篆體、在穿兩側、背爲馳馬之狀、按紫燕漢文帝九逸之一見西京雜記、

一本作西京雜記云、文帝自代還、有良馬九匹、皆天下之駿馬也、一名紫鷰騮

〔圖錄　六八頁ノ478〕

右一品、徑八分五釐、重一錢三分、文曰騏驥、又爲左向立馬之形、面背同文、按史記東方朔傳云、騏-驥-騄-耳飛-兎騕-褭天下之良馬者也、

一本也下有与飛兎日以明向有德則至十一字

〔圖錄　六八頁ノ479〕

右一品、徑九分三釐、重一錢七分、銅色紫褐、文曰驌驦、又爲臥馬之狀、面背同文、按左傳定公三年、唐成公如楚、有兩肅爽馬、注曰、肅爽駿馬名、又文選吳都賦云、招驌驦到、

〔圖錄　六九頁ノ480〕

右一品、徑九分弱、重一錢二分、銅色紫褐、文曰騕褭、又爲走馬之狀、按騕褭者神馬也、見瑞應圖、

〔圖錄　六九頁ノ481〕

右一品、徑九分弱、重一錢五分強、銅色深黃、文曰追風、又爲奔馬左向之形、

〔圖錄　六九頁ノ482〕

右一品、徑一寸一分弱、重三錢三分二釐、銅色黃褐、錢質渾厚、文曰飛兎、又爲奔馬右顧之

形、按乘黃見東方朔傳、（此錢較錢貨錄所載者最厚大故錄出、）

〔圖錄　六九頁ノ483〕

右一品、徑一寸、面穿上下、有的顱二字背爲左向馬形、按蜀照昭烈馬有的顱、又晉庾公乘馬有的顱、見世說、

〔圖錄　六九頁ノ484〕

右一品、徑八分五釐、重一錢五分、穿圓銅精、面背夷坦、如無肉郭、穿上下有文、曰青驄、背爲奔馬之形、按古樂府云、青驄白馬紫絲韁、又杜甫詩云、安西都護胡青驄、留青日札、青驄明太祖御騎、

〔圖錄　七〇頁ノ485〕

右一品、徑九分八釐、輪細孔圓、文曰白駒、在穿上下、背爲奔馬之形、制作銅質、如青驄錢、按詩小雅云、皎皎白駒、食我場苗、

〔圖錄　七〇頁ノ486〕

右一品、徑七分八釐、一面爲一馬左顧之形、穿上圓形中有意字、一面爲一猿行步之形、俗謂之意馬心猿、按參同契注云、心猿不定、意馬四馳、神氣散亂于外、欲望丹結、不亦難乎、又許渾贈杜居士詩云、機盡心猿伏、神閑意馬行、

〔圖錄　七〇頁ノ487〕

右一品、徑八分、重一錢五分、銅色白、錢質厚、一面爲一馬背面之形、穿上圓形中有印字、一面爲步甩之形、穿上圓形中有官字、俗謂之印馬官甩、泉貨鑑所載、印字漫漶、故復錄于此、

〔圖錄　缺〕

日行千里錢、一面曰日行千里、一面爲奔馬之狀、按神異經云、西南大宛、宛丘有良馬、其大二丈、鬣至膝、尾委於地、蹄如汗腕可握、一作掘日行千里、

〔圖錄　缺〕

一日千里錢、一面曰一日千里、一面爲奔馬之狀、按孫卿子云、騏驥一日千里、駑馬十駕、則亦不及之矣、

千里錢、文曰千里、在穿上下、又爲奔馬之狀、按漢書、文帝時、有獻千里馬者、

〔圖錄　缺〕

千里之能錢、一面曰千里之能、一面爲奔馬之狀、或爲一人騎馬之狀、

〔圖錄　缺〕

汗血錢、一面曰汗血、一面爲奔馬之狀、按史記西域傳云、大宛國別邑七十餘城、多善馬、馬汗血、言其先天馬子也、

一本作唐太宗七馬之一見殷仲容賛

〔圖錄　缺〕

赤驥錢、一面曰赤驥、一面爲奔馬之狀、按穆天子傳、赤驥周穆王八駿之一、

〔圖錄　缺〕

華留錢、一面曰華留、一面爲馬形、又有作驊騮、添入馬形者、按史記云、造父以善御、幸於周穆王、得驥騏溫驪驊騮騄耳之駟、

〔圖錄　缺〕

綠耳錢、一面曰綠耳、一面爲馬形、又有曰綠耳添入馬形、面背同文者、按綠耳見史記、

〔圖錄　缺〕

什伐赤馬錢、一面曰什伐赤馬、一面爲立馬之狀、按什伐赤者、唐太宗馬見留青日札、〔寬政孔方鑑誤釋竹伐赤馬〕

〔圖錄　缺〕

寶扇駒錢、爲立馬之狀、背上扇形中有寶字、按白氏六帖云、東胡來貢頓寶馬、又起世經、有馬寶之名、又按寶字、蓋或取寶用之義也、猶俟後攷、

〔圖錄　缺〕

奔寶錢、一面曰奔寶、一面爲奔馬之狀、

淸虛錢、一面曰淸虛、一面爲奔馬之狀、按洞冥記云、修彌國有馬、如龍騰虛、故謂馬駿逸如騰淸虛耳、

〔圖錄　缺〕

〔圖錄　缺〕・

追電錢、一面曰追電、一面爲奔馬之狀、

〔圖錄　缺〕

右日行千里錢以下十三品泉貨鑑及寛政孔方鑑所載故今不復圖、

〔圖錄　七〇頁ノ488〕

右一品、其文篆體、上曰大、下曰五、左曰十、右文漫滅、細玩近錢字、今右旋讀之、爲大錢五十、此乃新莽錢文、而五字倒置、徑八分、重七分二釐、字小孔大、面背孔郭大反張、如四出文、殊爲異品、

〔圖錄　七〇頁ノ490〕

右貨泉、按此錢亦用新莽錢文、背穿四方有星文、雖文字制作頗精、考銅質形制、恐非新莽之錢、故姑錄于此、

〔圖錄　七一頁ノ491〕

一本狀下有按追電秦始皇七馬之一見西京雜記十五字

英山本錄臺閣錢於此下其次戴大貨六銖今補之

右大貨六銖錢背文有穿上戌字又穿下書犬銅色紫黑制作陳宣帝所鑄同品也

右一品、按此錢、一面文曰貨泉、一面爲龍鳳之象、徑一寸一分、重二錢、外輪細、內郭濶、
銅色深黃、制作不佳、

〔圖錄 七一頁ノ492〕

右大平百錢、按隋書食貨志云、梁武帝時、百姓或私以古錢交易、有大平百錢、洪遵曰、此
錢又有一種、其字含篆隷體、錢字漫滅、徑九分、重二銖七參、今所錄、徑八分、銅色紫褐、
其文初含篆隷、洪氏所謂者、豈非此類耶、然考篆法形制、不似梁初者、故姑列于此、以俟
後攷、

〔圖錄 缺〕

右常平五銖錢、此錢用北齊文宣帝錢文、背穿上下爲月星之文、按雖肉好字文如北齊錢、銅
色紫黑、字畫昏晴、制作不佳、

〔圖錄 七一頁ノ494〕

右永通萬國錢、此錢用後周宣帝錢文、背文爲十二屬、皆肖生爲之、按徑八分弱、黃銅闊穿、
制作不精、

〔圖錄 缺〕

右一品、文曰宣和、其字篆書、穿兩側各爲月星文、背穿左右爲月星文、徑七分二釐、字畫闇

晦、制作不佳、

〔圖錄　七一頁ノ496〕

右一品、文曰大定、穿兩側爲月文、徑七分五釐、重七分、制作不佳、

附錄

〔圖錄　七二頁ノ497〕

右一品、一面作一人、背面立像、左右有文、各一、其湮晦不可識、一面爲五言四句文、傍缺損亡初四字、所餘文、曰成、丁寧意甚頻、蹯桃誰竊去、須捉坐中人、按一面人物、似婦人之狀、疑西王母也、此品面背有輪郭、無穿孔、銅質精煉、其色紫赤、今量之、得徑一寸五釐、重一錢九分、又莫識其何所用之、

〔圖錄　缺〕

右一品、其文循讀、曰皇宋元寶、不開孔、中央有寶字、其篆書、而寶字特大、輪郭甚細、外邊有小孔、按徑九分二釐、重一錢二分三釐、背夷坦、銅色紫黑、最爲奇品、

〔圖錄　七二頁ノ499〕

右二品、一作裝飾馬、背戴物不詳、一亦作裝馬、背戴圓形、中爲福字、馬腹有銅塡孔痕、考

一傍上有然字

其形制、蓋非本有穿孔、爲妄人所鑿開、故復補塡之耳、共徑一寸、爲郭甚細一面坦平、外邊有小孔、按皇宋以下三品、皆不鑿孔、背一若鏡面、疑小鏡之類也、然銅質制度、稍類厭勝諸品、故併著之於圖、以備考、

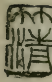
錢幣攷遺卷十　　大村成富覆校

右泉幣攷遺第十卷稿本左守田寶丹架中糊拓本及剪刊本之圖者云中川春布庵會鈔而傳焉大正六年六月以共古齋覆鈔本鈔之　竹清

辛酉六月初四校以英山藏補其缺文

六月十九日雨窓閒居乃以大村成富所刊錢幣圖錄補圖象然止于宋錢已上宋錢已下以珍錢奇品圖錄補之原本不記右何何者皆無圖今加之自嗤畫蛇且添足　竹清

右泉幣攷遺十卷予索之久矣嘗得八九十卷共古齋而鈔之昨冬佐野英山君來從浪華曰成富稿本現在西京泉貨堂祕惜不貸轟英山君爲其子媒因得鈔之私教予鈔焉乃閱半歲日月而漸卒業且以刊本泉幣攷遺圖象珍錢奇品圖錄等補圖象可謂翰臺有緣大正十年辛酉五月二十日癸未竹清三村天明（印）（印）



昭和二年六月十五日印刷　昭和二年六月二十日發行

日本古典全集第二回
本朝度量權衡攷
下卷
錢幣攷遺
【非賣品】

編纂者　與謝野寛
同　正宗敦夫
同　與謝野晶子
裝幀圖案者　廣川松五郎

東京市麹町區永樂町一丁目一
丸ノ内ビルディング七階七二九區
發行者　株式會社日本古典全集刊行會
代表者　關戸信次

印刷所　東京府北豐島郡長崎町一六二
新樹製版印刷所
印刷者　高瀬清吉

發行所
東京市麹町區永樂町一丁目一
丸ノ内ビルディング七階七二九區
株式會社日本古典全集刊行會
振替口座東京七三〇三二
電話丸ノ内一〇七一

編纂所
東京市麹町區富士見町五丁目九
與謝野寛方
日本古典全集編纂所
電話九段二一一〇



日本古典全集刊行會板

日本古典全集

與謝野寛
正宗敦夫
與謝野晶子
編纂
校訂

錢幣攷遺圖錄

v. 6

狩谷棭齋全集第六解題

一、此卷には「錢幣攷遺圖錄」を收めた。是れは本文に挿むべきを、印刷の便宜上編者が別卷としたのである。讀者は據つて本文と對照せられたい。「圖錄」は特に玻璃版を用ひ悉く搨墓の原寸を正確に複製した。

一、本文を印刷して後に、貫井銀次郎氏が「照譜聖師」の搨墓を發見せられたので、此卷の六二頁第四六一の次に挿んだ。由つて本文一一六頁十行目の「圖缺」の二字を省く事にする。

一、「錢幣攷遺」の本文に就いて、貫井氏が「日本古典集本」と同氏の藏せられる「青貨堂本」とを對照して異同表を作つて下さつた。其れを更に三村淸三郎氏が今一應、同氏藏の「三村本」と對照して異同を明かにせられたので、倂せて「日本古典全集本」の訂正表が次の如く出來上つた。此中「ﾚ」の記號を附したのは貫井、三村二本が一致するもので、明かに「日本古典全集本」の誤植である。「○」の記號を附したのは「三村本」も「青貨堂本」も共に誤つてゐるのを、貫井氏が正されたものである。「○ﾚ」は「三村本」の誤寫で、「青貨堂本」が正しいものである。是等の對照と訂正は貫井、三村二家が本年八月の炎暑の中に於て此の煩勞を敢てせられた。茲に二家の御厚意を感謝する。また「竪」「豎」二字は古くから漢土に於ても共通の文字ながら、本文に「豎」と書かれた所が多い。すべて「豎」の字として讀まれたい。また「錢幣攷遺」奧書末行の三村氏の名を「天明」の二字に書いたのは「齋」一字の誤植で「アキラ」と訓ずるのである。

「錢幣攷遺」本文訂正表

頁	行	誤	正
五	二	須	頌。レ
同	三	逐	逐レ
九	十二	右仁明	仁明レ
一一	三	乾文大寶	乾文寶。レ
一四	一〇	與並行	與金錢並行。
一六	五	文亦四半兩	文亦曰半兩レ
一七	八頭注		鐘恐鍾誤以下皆同。
一九	十二	劃三銖文	則三銖文レ
二〇	七	母鑄錢	毋鑄錢レ
二〇	十二	右五鉄錄	右五銖錢レ
二四	六	徑一才	徑一寸レ
二六	四	筋	筋レ

頁	行	誤	正
同	同	逐	逐レ
八	九	字从刀者	字从力者レ
一〇	十二	寶平二年	寬平二年レ
一四	九	今後藤	命後藤。
一六	三	按（食貨志	按莢錢、食貨志。
一七	二頭注		雖小異一作雖有小異。
一九	二	溢內外者	溢肉外者。
一九	十五頭注		更一作決。
二〇	九頭注		一本作肉郭最細制作精好。
二四	二	鏈	鏈レ
二五	九	母	毋レ
二六	十頭註		未一作不。

頁	行	誤	正
二六	一一	筋	筋ㇾ
二六	一五	筋	筋ㇾ
二八	末ヨリ五	在於食貨宜、	在於食貨、宜
三〇	末ヨリ三	室	宜ㇾ
三一	一	重三鑄	重三銖ㇾ
三一	末ヨリ九	〔圖錄十頁ノ103〕	〔圖錄缺〕ㇾ
三二	七	右兩柱五銖	兩柱五銖。ㇾ
三三	五	所錄	所餘ㇾ
同	九	右五銖錢	右五朱錢ㇾ
同	同	廬濶	寬濶ㇾ
三五	一〇頭註		於一作于。
三六	末ヨリ二	鑞	鑞ㇾ。
三七	三	字文夷漫制作、	字文夷漫、制作ㇾ
三九	末行	平帝安太后	平帝定安太后ㇾ
四〇	末行	生朱	生朱ㇾ

頁	行	誤	正
二六	一五	白	自ㇾ
二七	一頭註		一本篆下有葉篆三字。
二八	末ヨリ二	張端木錢餘	張端木錢錄ㇾ
三〇	同頭註		面背肉好、共無周郭一本作面背共有周郭。
三一	末ヨリ十一	肉郭五銖	肉郭五銖ㇾ
三一	九	〔圖錄一〇頁ノ104〕	〔圖錄一〇頁ノ103・104〕
三二	二	右五銖稚錢	五銖稚錢。ㇾ
同	同	去盡	去盡ㇾ
三四	二	揭攜	揭摸ㇾ
同	九	鑄	郭ㇾ
三五	一三	筋	筋ㇾ
三六	末行	竪	竪ㇾ。
三七	末行	叢文	字文ㇾ
四〇	一〇	孟夏	孟夏ㇾ
四一	一頭註		以誠一作誠以。

「錢幣攷遺」本文訂正表

四一	三	以經讀經也	以經證經也レ
四三末ヨリ六及頭注ノ上字		缺	鈌レ
四四	七頭註		形微有大小一本作形質有大小厚薄レ
四五	一	穿上	穿下レ
四六	五	澗	潤レ
四六	六	宗議	京議レ
四八	四	佛字	佛宇レ
四八	五	爲墨文	爲星文レ
五一末ヨリ九		亦他得錢	亦與他錢レ
五一	末行	川峽	川陝
五四	三	以錢	此錢
五四	一四	英銅	黃銅レ
五五一〇頭註			弱一作強。
五八	六頭註		今所載二種、並行書、一經一本作所載行書錢徑。
五九	三頭註		難一本作末。

四一	一二	共	倶。
四三末ヨリ四		澗	潤レ
四四	六	右高宗	高宗レ
四五	五頭註		水井某一本作舊息中某。
四六	五	淳屠	浮屠レ
四八	一	右後漢隱帝	後漢隱帝レ
四八	五	同通	周通レ
五一末ヨリ一〇		小無者	小異者レ
五一末ヨリ、		同於建州	令於建州レ
五二	九頭註		一本異下有今世甚稀四字レ。
五四	一一	號州	虢州レ
五五	八	饒錢	鑄錢レ
五七	七	好含八分	如含八分レ
五八	七頭註		一本背上陝字者、經七分八厘、元字尾一異者之十六字無。
六〇	七	此矣	于此矣レ

頁	行	誤	正
六〇	一三	便	使レ
六一	九	改	政レ
六一	末行	鹿	麁レ
六五	三	紹利州	詔利州
七六	一〇	銅鑄二種	銅鐵二種レ
八一	二	淮	准レ
八一	三頭註		承天寺一本作承夫寺。
八一	八	佑子非祐	佑字非祐レ。
八二	十二	類大定	類天定レ
八三	二	舊前	奮前レ
八三	三	遷	進レ
八六	一註	楊家相	揚家相
八七	十三	左	右レ
八九末ヨリ八		明李福王	明季福王レ
九二	七	貝作貝	貝作見レ
六一	四	母	毋レ
六一	五	精喜	精善レ
六四末ヨリ六		夏篆	眞篆
七四	一二	問	間レ。
七九	一二	又載	不載レ。
八一	三	店	居レ
八一	八	改元天佑	改元天祐レ。
八一	十五	僞	爲レ
八二十三頭註			基一本作碁。
八三	三	改德壽	改元德壽レ
八四	十三	故不復錄	故不復錄）
八六	十三	壽命	壽命レ
八八	一	蓋二錢	蓋折二錢也レ
九〇	一	隆步錢	隆武錢レ
九二	九	事鐏	車鐏・

頁	行	誤	正
九三	四	〆	〆」
九八	十五	純元	紀元
九九	一三頭註		墒一作墒。
一〇八	七	或請	或謂。
一一〇	七	（上位武陽萬劫通寶）	萬劫通寶上位武陽
一一〇	九	日皇宋日佑寶	日皇宋佑寶
一一一	二	日宗元	日宋元
一一五	八	鑑綜	錯綜
一一五	一一	所戴	所載
一一六	一〇	〔圖錄缺〕	圖錄六一頁ノ462〕
一一九	一一	一作註	一作注
一二〇	頭註	与飛兎目	与飛兎同
一二二	千里錢之前		〔圖錄缺〕
一二四	頭註太貨六銖ノ前ニ		〔圖錄七〇頁ノ488〕
一二六	一五	背戴圓形	背載圓形
九八	九	殺濬自立、改元二	殺之而自立、濬改元二。
九九	三	紀紀元	紀元
一〇〇	六	立曮兄灝之子曮	立曮兄灝之子諶
一一〇	四	（祥符通寶紹隆通寶）	紹隆通寶祥符通寶
一一〇	九	周通	日周通
一一〇	頭註	天豐	天聖
一一二	三	原薄	厚薄
一一五	一一	外還	外環。
一一六	二	面夷漫	背面夷漫
一一七	七	六男	五男
一二〇	五	驟耳	騄耳
一二一	三	照照烈	照烈
一二三	五	騂騂	騂騮
一二四	八	圖錄七〇頁ノ488〕	圖錄缺〕

泉幣攷遺圖錄



1



2



3



4



5



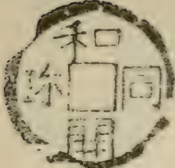
6



7



8



9



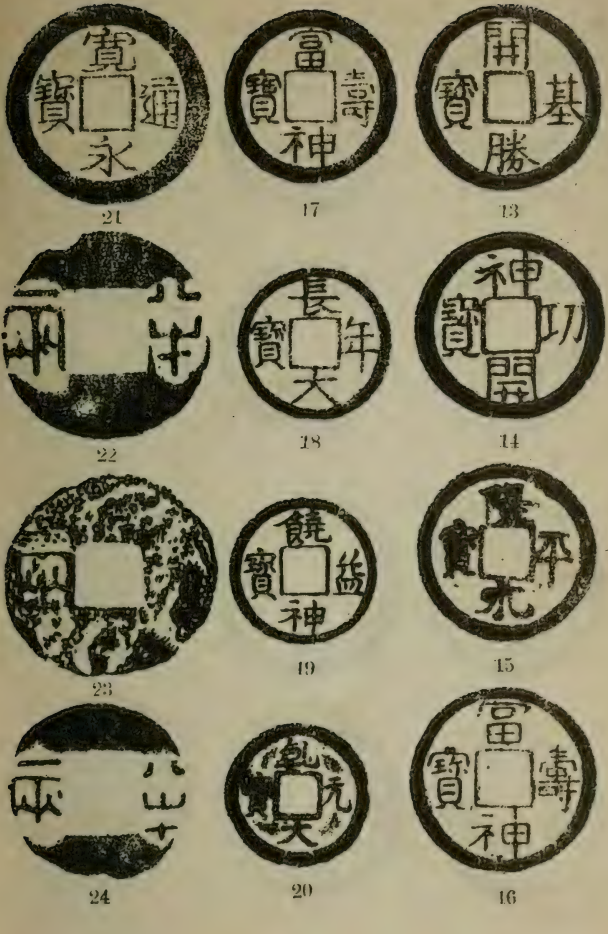
10



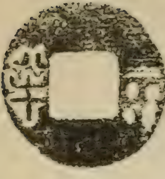
11



12



21
17
13
22
18
14
23
19
15
24
20
16



33



29



25



34



30



26



35



31



27

三



36



32



28


15


11


[illegible]


16


12


[illegible]


17

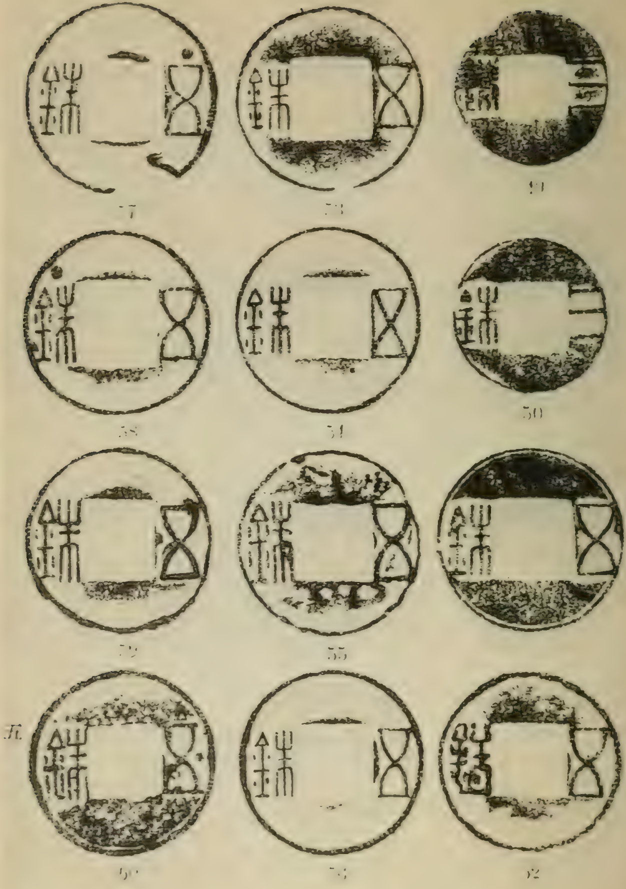

13


[illegible]


[illegible]


[illegible]


[illegible]



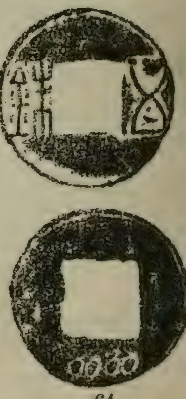
五
50



61



62



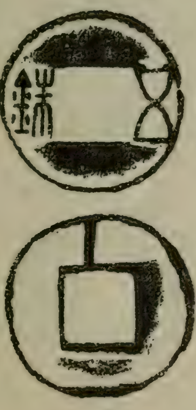
64



63



65



67



66



69



68

六

七


70

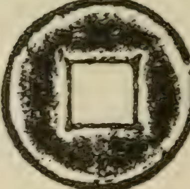

71


72


73


74




75


76


77


78


79


80



[illegible]



85



81



90



[illegible]



82



91



87



[illegible]



92



[illegible]



[illegible]



99

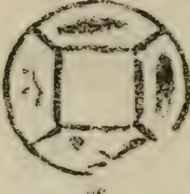




93



100



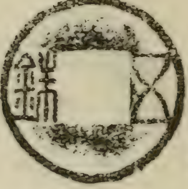
96



94



101



97



九



102



98



95



108



109



110



111



105



103



106



107



104

10





112



113



114



115



116



117



118



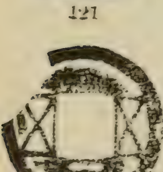
119



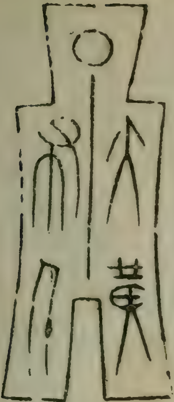
120

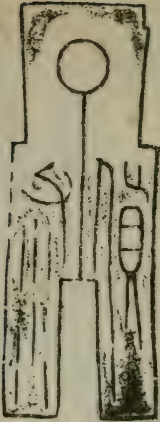


121

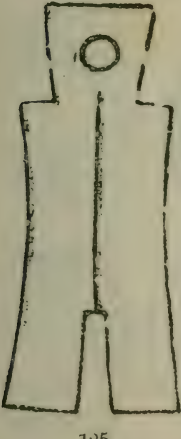


122

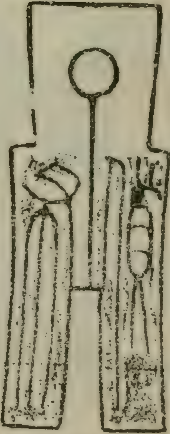




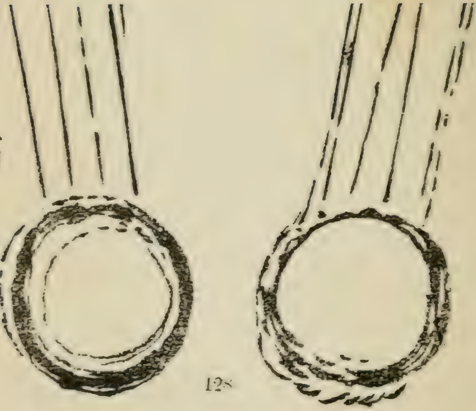
123



125



124



128



126



127



128



129



130



131



132



133



134



135



136



137



138





139



146



143





147

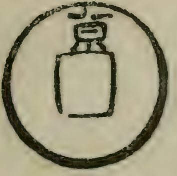




140



148



144



141



149



145



142



158



154



150



159



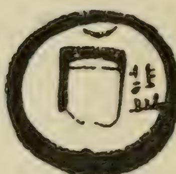
155



151



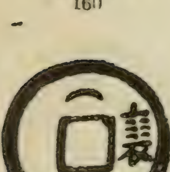
160



156



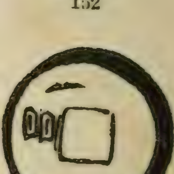
152



161



157



153


162


163


164


165


166


167


168


169


170


171

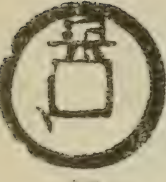

172


173

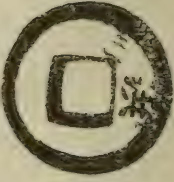

182


178


174

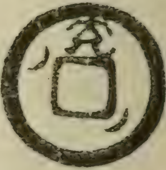

183


179


175


184


180

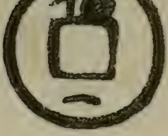

176


185


181


177





186



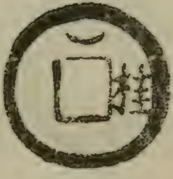
187



190



188



189



192



191



193



200



197



194



201







202



198



195



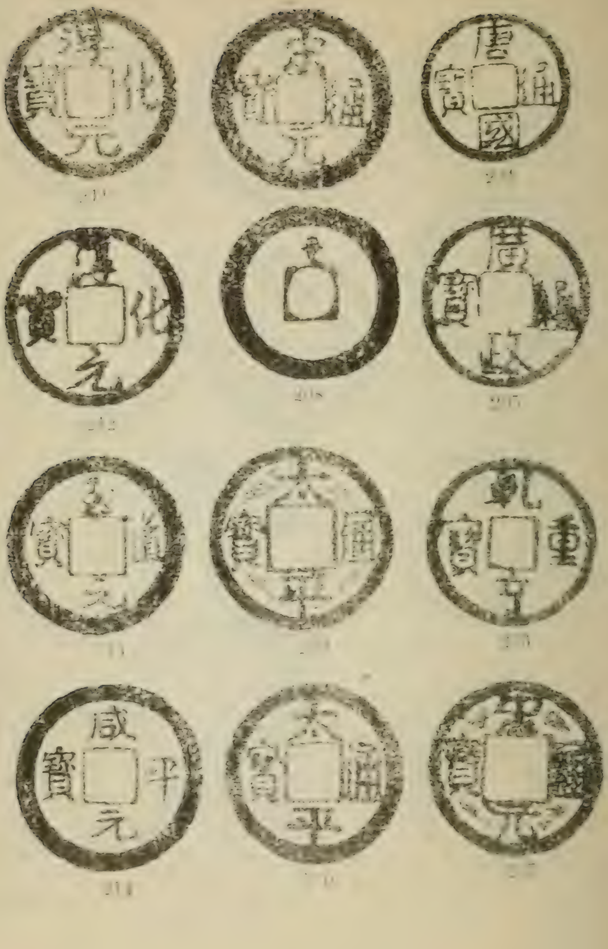
203



199



196





215



219





216



220



222



217



221



224



218



223



225



230



229





226



232



227



233



228



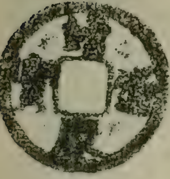
240



236



231


241


237



234


242

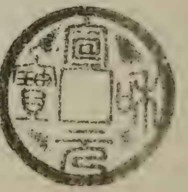



235


243



239


233





248



244



251



249



245





250



246



253



252



247



254



256



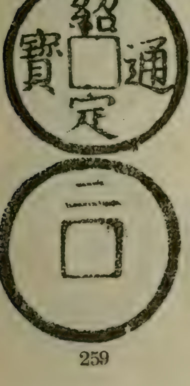
258



255



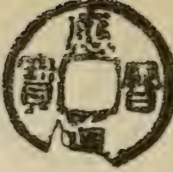
257



259



266



262





267



263



260



268



264





269



265



261

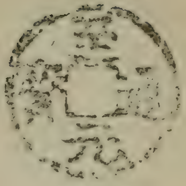
二九



280



273





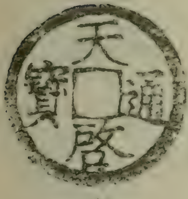
281



274

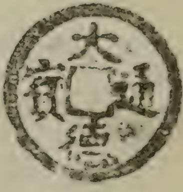


270



282





271



283



270



272



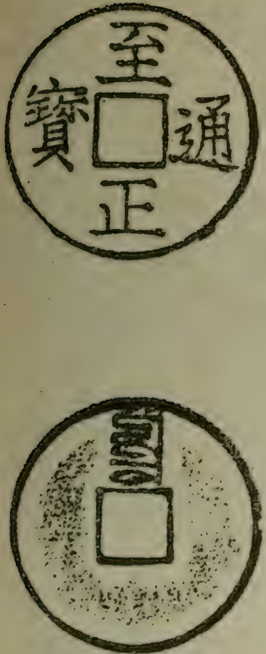




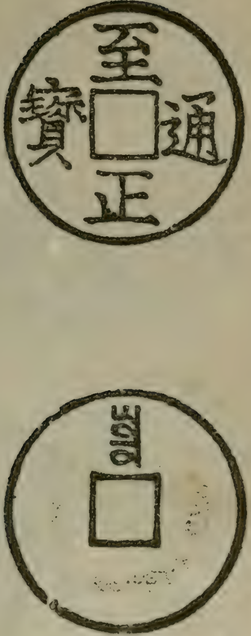
278



275



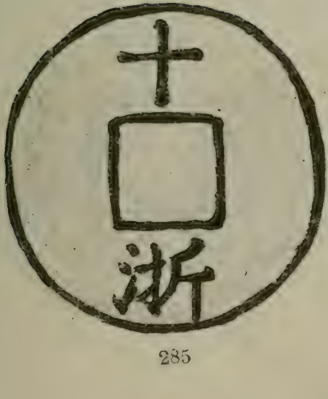
277



276

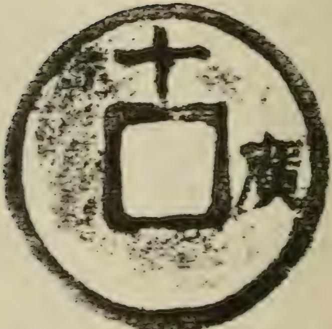

大
中
通
寶
十





三四


大
中
通
寶


十
廣



287



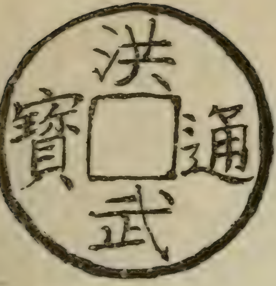
288



289

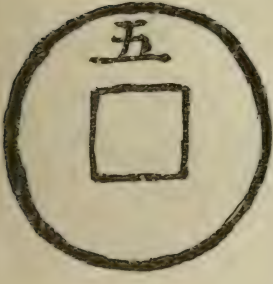


290





291



293



292



294



295



296



297



298



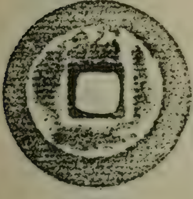
299





300





301



302



303



308



306



304



309

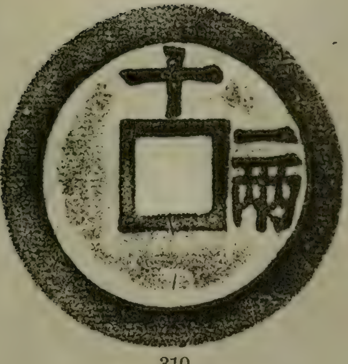


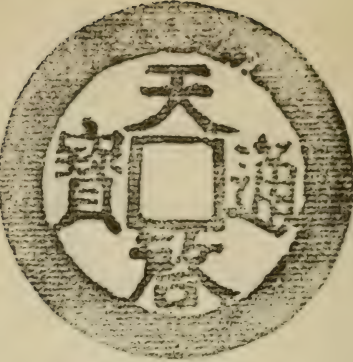
307

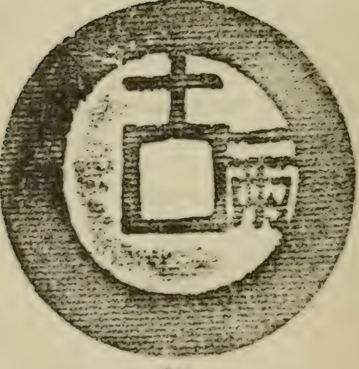


305

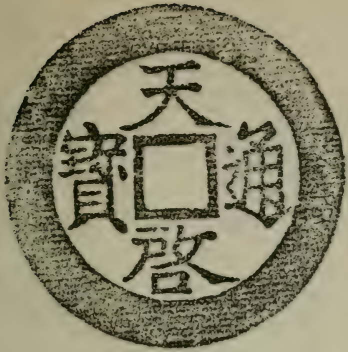

天
啓
通
寶

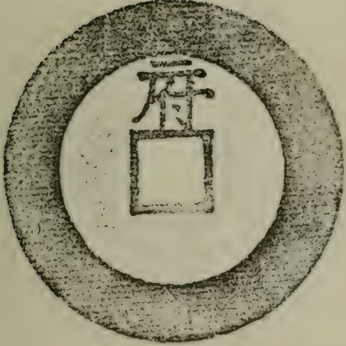

十
一兩





四一



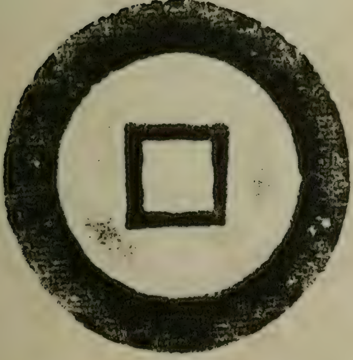


四二



313


天啓通寳





319



317



315



320



321



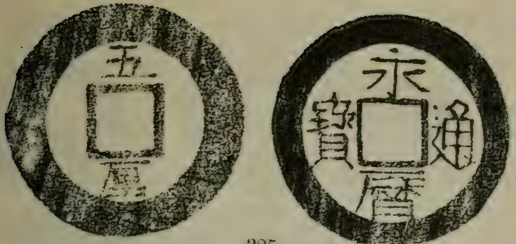
318



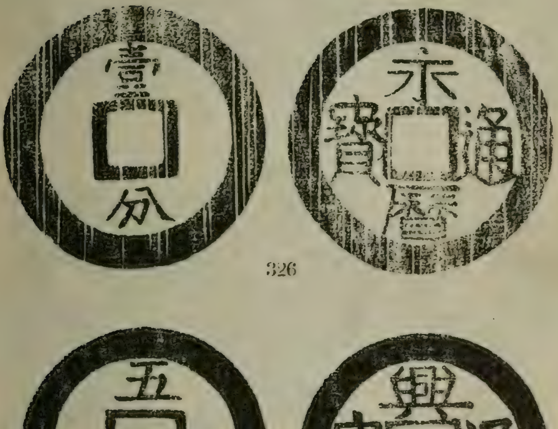
316



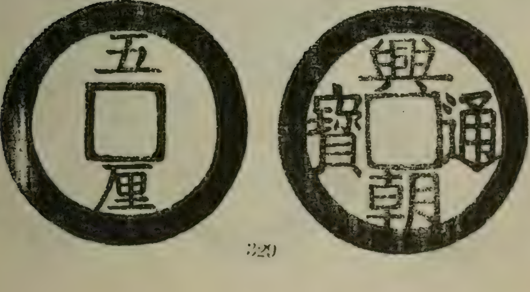
322



325



326



329



328



323



331



327





332



330

324



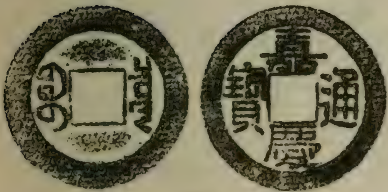
333



335



334



337



336



346



342



338



347



343



339



348



344



340



349



345



341


350


351


352


353


354


355


356

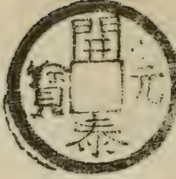

357

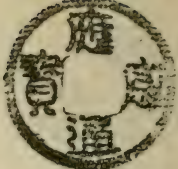

358


359


360


367


363


361




365

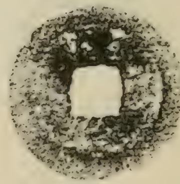

362

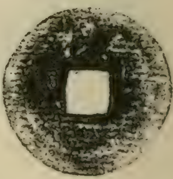

368

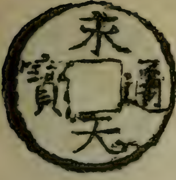





369


366


364



377



373



370



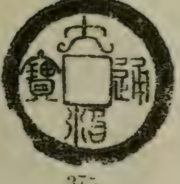


374





378



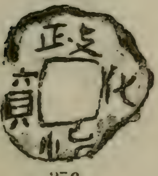
375



371



379



376



372



386



383





387





380



388



384



381



389



385



382



398



394



390



399



395



391





396



392



400



397



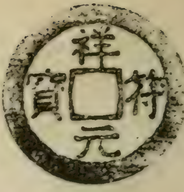
393



409



405



401



410



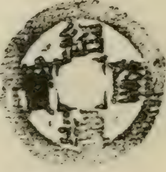
406



402



411



407



403



412



408



404


421


417


413


422


418


414


423


419


415


424


420


416



433



429



425



434



430



426



435



431



427



436



432



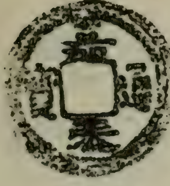
428


445


441


437


446

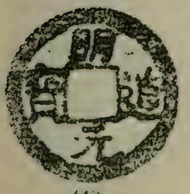

442


438


447


443


439


448


444


440



457



449



452



450





451





458



454



453

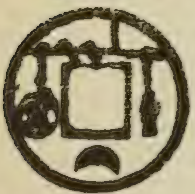
455

六〇

459







460



456



461



462

463


本命
星官





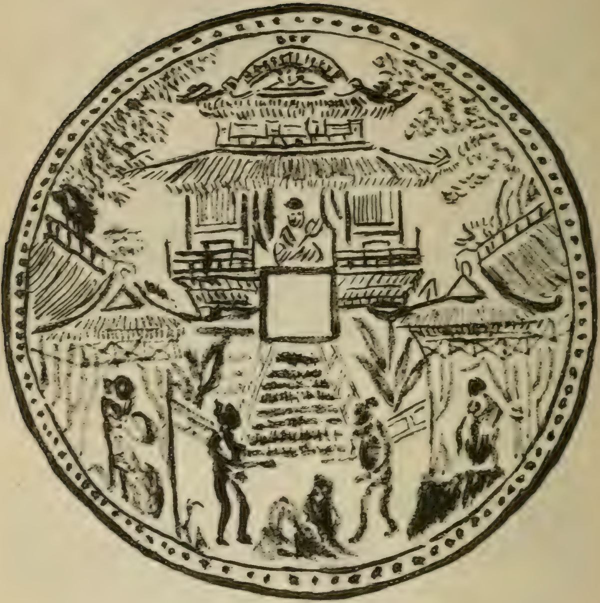
466



465



467



468

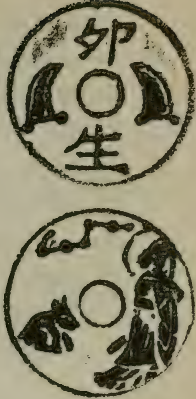
六五



474



472



470



477



473



471











475



476



478



477





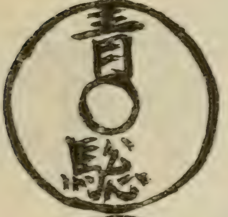
480



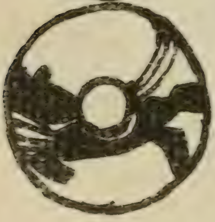
483



481







484

482





489



487

485

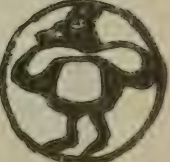












490

48[illegible]

486



495 493



491







496

492

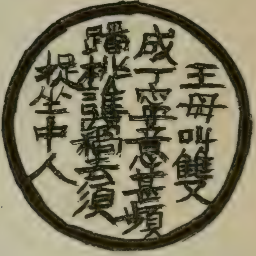


494



499





497

500

昭和二年十二月二十日印刷
昭和二年十二月廿五日發行

〔非賣品〕

日本古典全集第二回
錢幣攷遺圖錄

編纂者　與謝野寛
同　正宗敦夫
同　與謝野晶子
裝幀圖案者　廣川松五郎

東京府北豐島郡長崎町一六二
發行者　長島豐太郎

東京府北豐島郡長崎町一六二
印刷所　不二製版印刷所
印刷者　柳井隆雄

發行所
東京府北豐島郡長崎町一六二
日本古典全集刊行會
振替口座東京七三一三二
電話番號大塚二〇九六番